
仮初めの皇帝、偽りの騎士。

津森太壱。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮初めの皇帝、偽りの騎士。

【Nコード】

N6057L

【作者名】

津森太吉。

【あらすじ】

地味で目立つところも特出したところもない伯爵家の娘、ツエイル。美しく愛情深い兄と姉、可愛らしく賢い弟と妹に挟まれ囲まれて育ち、賑やかで幸せな日々を過ごしていた。しかし、その幸せは両親の死と共に永遠に失われる。「ツエイル姫を差し出さない」、それは歳若い宰相閣下からの命令だった。ツエイルは大好きな家族を護るため、その身のすべてを帝国に捧げる。

*本編＋番外編完結。リクエストストーリー、再び展開中。

00 : 涙を流すとき。(前書き)

はじめまして、こんにちは。

ようこそおいでくださりました。

この物語は、ふいつくしゅん(古っ)です。

造語だらけですので、くれぐれも単語は信用しないようにしてください。

〇〇：涙を流すとき。

ツェイル・オル・メルエイラは、メルエイラ伯爵家では目立ちもしない娘である。美しい兄と姉がひとりずつに、可愛らしい弟と妹がひとりずつ、上手く挟まっているせいか地味に育った娘である。特出しているところは一つもなく、容姿はまあ見られなくもないふつうで、背丈もまあふつうだろうという、つまるところ目立つ要素が一つもない地味な娘だ。

ただ、体つきは貧相なので、よく男の子に間違われる。姉や妹には、ドレスを着たときに本気で胸に詰めものをするかと悩まれる。冗談ではなく本気なので、ツェイルは全力で拒否するが。

「要らない!」

と、叫べば。

「あんまりにも可哀想なんですもの!」

と、姉と妹に気圧される。

つまるところそれくらい、体つきは貧相である。言葉を濁すなら、肉づきが薄いと言えよう。

しかし、ツェイルはそんなこと、一切気にしない。貧相でけつこう、薄くて上等、肉などあるだけ邪魔なのである。ドレスだって着たくないし、兄や弟のような服装が一番だ。

なので、姉や妹のように嘆いたりしない。

そういう、ツェイルの男の子のような性格は悪目立ちしていたが、それも所詮はメルエイラ家の中だけのことだった。

「まあまあ、テューリ。これがツェイルなんだから、いいじゃないか」

「ツァイン兄上。ですが、これではあんまりですわ」

「そうかなあ……僕はいつものツェイルが好きだけれど」

「嫁ぎ先がなくては困ります！」

「ええー……ツェイルは僕のお嫁さんになるんだから、いいじゃないの」

「既婚者になろうお方がなにを言うのです、ツァイン兄上！」

きーっ、と叫ぶ姉を、ツェイルはいつも他人ごとのように見ている。今日もかあ、と見ていれば、僕のお嫁さんになるんだから発言をした兄がツェイルの背後に回り、ゆったりと抱きしめてきた。

「ツェイルは僕のお嫁さんになるんだよね？」

「妹で我慢してください」

「テューリは嫁ぎ先がないって言うてるから、いいでしょ」

言うておくが、兄とはきちんと血が繋がっている。そして兄は、結婚を目前に控えている。

「お妾さんはいやです」

「もう……ツェイルは意地悪さんだね」

このっ、と抱き締められて、その息苦しさに身を擦る。それを見た姉が「おやめなさい！」と怒鳴り、兄が再びおかしいな感覚で言葉

を返すものだから、妹と弟が止めに入るまでしばらく言い争いが続いた。

ふと、ツェイルは胸のぬくもりに頬を緩めた。

ツェイルは兄姉、妹弟に囲まれて挟まれて育ったが、囲まれて挟まれてよかったと思う。このきょうだいたちが大好きだ。煩くて賑やかで、いつも楽しい。兄はそろそろ結婚し、姉も再来月には嫁いでしまうので寂しくはなるが、まだ幼い弟と妹がいる。きつと、ずっと、このままの楽しさが続くに違いない。

幸せだ、と思う。

きょうだいたちとのこの幸せが、一番、好きだ。

けれども。

「ツェイルさま！」

「ん……どうしたの？」

「旦那さまと奥方さまが……っ」

「……え？」

幸せの中に堕ちた、一筋の闇。

「ご旅行先で、盗賊に襲われ……お、お亡くなり」

笑い声に満ちていたのに、その瞬間一気に、闇に包まれた。

*

*

優しい父と母だった。男の子みたいに育ってしまった地味な娘を、それがどうしたと言わんばかりに包み込む、大らかな両親だった。五人もの子どもを育てるのはやはり大変だったのか、末の子に手がからなくなり、上ふたりの子が結婚するとなると、じゃあのんびり夫婦だけで旅行でもするかと、そう言って出かけたのは二日前のことだ。

夫婦そろって帰ってきた日、ふたりは呼吸を止めていた。心臓を止めていた。

凍えるほど、冷たくなっていた。

暖かく優しい両親だっただけに、その悲しさといったら、なかった。

きょうだいの誰も、言葉を失った。初めに泣きだしたのは末の妹で、次につられるようにして弟が、そして姉が静かに涙を流した。兄は涙を見せなかった。これからメルエイラ家を背負う伯爵という立場が、兄から涙を奪っていた。そして、ツェイルも泣けなかった。

「ツェイル、泣いていいんだよ」

兄はそう言って、泣かせようとしてくれたけれども。

兄の、今にも泣きだしてしまいそうな薄い紫色の瞳が、ツェイルから涙を奪っていた。

「兄さまも、泣いていいよ」

言つと、兄は驚いた顔をして、そうして寂しそうに苦笑した。

「ツェイル……ツェイル、すまない。おまえがこうなってしまったのは、僕のせいだ。ごめんよ、僕の可愛いツェイル」

兄に、強く、抱き締められた。肩に感じた熱は、見なかったことにした。

「ツアインさま……いえ、伯爵さま。そろそろ、お時間です」

「……ああ、そうだね」

棺桶に入った両親を、茶毘に伏す。その時間が迫ると、兄はツェイルから離れた。けれども、兄はツェイルと繋いだ手を、その時間が終わっても離すことはなかった。

両親を地に還すすべてのことが終わると、参列していた者たちはぼつぼつと帰り始めた。きょうだいたちはしばらく動かなかったが、幼い弟と妹は乳母に連れられて邸に帰り、両親が急死したことで婚期が早まった姉も、迎えに現われた婚約者と共に一足早く邸に帰った。

残ったのは、兄とツェイルだけだ。

「……ツェイル、帰ろうか」

「うん……」

晴れやかな日だったが、兄の心にもツェイルの心にも、悲しい雨が降り続けていた。それでも、いつまでもこうしてはられない。

「兄さま……これから、どうなるの」

「どうもしない。予定が早まるだけだ。僕が伯爵家を継いで、テュ

ーリが子爵家に嫁いで……トウーラとシュネイは、僕が育てることになるかな。ツェイルは、どうしようか」

「……どうもしない」

「そう。じゃあ、ツェイルは僕のお嫁さんになるうね」

こんなときまで冗談を言う兄に、少し呆れた。けれども、それが本気に聞こえてしまった気がして、ツェイルはなにも言えなかった。

そのときだった。

「ツアイン」

誰かが兄を呼んで。

「……閣下？」

兄が、その人を見て驚いていた。慌てて膝をつこうとしたところを見ると、その人はだいぶ、いやかなり偉い人なのだろう。

兄が膝を折ることを止めさせたその人は、濃い金髪に碧色の双眸の、随分と堅苦しい印象のある人だった。

「遅くなって申し訳ない」

「いえ、おいでいただけただけで充分です」

「このたびは気の毒なことではあるが、かつての伯爵のようにあなたには頑張ってもらわなければならぬ」

「はい、ありがとうございます」

深々と頭を下げた兄に、ツェイルも做った。兄を見知り、また兄も見知るその人は、きつと兄の仕事先での上司なのだろう。だから做ったのだが、その人の空気はなぜか、そのとき鋭くなった。

「本当に、いろいろと、頑張ってもらいますよ」

「はい……？」

「ツアイン・オル・メルエイラ」

「はい」

「本日より、帝国近衛騎士団の近衛隊長とす。また、メルエイラ家の爵位は伯爵オルから侯爵ウエルへと昇華す。これは勅令である」

その瞬間、兄は硬直して目を見開いていた。ツェイルは喜ばしいことなのかそうでないことなのか、兄のその姿で戸惑ってしまった。

「兄さま……？」

繫いだ手を引っ張ると、ぎゅっと力が増した。

「ありがたく、拜命致します。ですが、なぜ爵位を……わがメルエイラ家は、先帝の時代に爵位を落としました。それに、もともとは貴族でもなんでもありません。爵位を戻していただく必要など……」

「必要はありません」

その人が強く、兄の言葉を否定したとき、ツェイルはなにかに気づいた兄に腕を引っ張られ、その背に庇われた。

「閣下、まさかとは思いますが……」

「ええ、そのまさかです」

とたん、ツェイルは完全に兄の背に庇われた。

「ツェイルを連れて行くと言つのなら、いくら命令であれ、僕は近衛隊の隊長を辞退させていただきます」

「困ります。あなたの腕を、騎士団の一兵卒で終わらせるわけにはまいません。それに、あなたにはわが帝国の礎となるお方のそばにいてもらわねばならないのです。勅令を拝命したのなら、速やかにツェイル姫を、差し出しなさい」

「いやです！」

なんだか、いつのまにか剣呑な雰囲気になっていて、しかもその話題が自分であることに、ツェイルは目を瞬いた。

「ツェイルは僕の妻になるんです。どこにも嫁ぎません」

「近親結婚は珍しくもありませんが、諦めなさい」

兄のいつもの冗談を、その人は真面目に返してきた。珍しい人もいたものだとツェイルは思ったが、どうやら兄とその人は真剣そのものだ。

しかしながら、ツェイルにはふたりの会話がさっぱりわからない。

「この命令は覆されることも、効力を失うこともありません。ツェイル、よく考えて、覚悟を決めなさい。あなたは殿下に……サリエさまに忠誠を誓った者でしょう。今さらそれをなかつたことになど、できませんよ」

その人はそう言うと、身を翻してそこを立ち去った。兄は悔しそうに、その人の姿が消えるまで、その背を睨んでいた。

「兄さま……」

呼ぶと、急性に、強く兄に抱き寄せられた。

「ツェイル…っ…ツェイル、僕の可愛いツェイル」

そのとき、ツェイルはよくわかっていなかった。

兄のそれも、自分に起きたことも、なにもわかっていなかった。

そもそも両親の葬儀が終わったばかりであったから、心も身体も
疲弊していた。理解などできるはずもない。

兄の涙を見たのは、その日が初めてだった。

それだけは、わかった。

00 : 涙を流すとき。(後書き)

誤字脱字、感想、その他もろもろ、気になるところがございましたら優しくご指摘くださいますようお願い申し上げます。

ツアイン・オル・メルエイラは、ヴァリアス帝国騎士団の第一部隊の隊長だ。しかし今は、ツアイン・ウエル・メルエイラ、帝国近衛騎士団の近衛隊長、そして侯爵である。

ツアインのその昇華は、国政に携わる者たちに広く、さまざまな憶測を飛ばさせた。

メルエイラ家はもともと貴族でもなく、流れ者の一族だった。流れ者といっても、そういう商いをしていたわけではない。雇われて人を殺す、暗殺の一族である。傭兵と紙一重でありながら、その技術を高く評価した帝国の国主に気に入られ、そして騎士位を与えられ、さらには侯爵位を授けられ、安住の地を探し求めている一族はここに定住を決めたのだ。

ゆえに、メルエイラ家は、生粋の貴族ではない。

しかも先帝の時代には、メルエイラ家は潰されかけている。暗殺の一族であつたがゆえ、定住し帝国に忠誠を誓つてもなお、先帝だけは叛旗の疑いを晴らさなかつたためだ。一時は爵位を剥奪されそうになつたが、メルエイラ家の技術の必要性を唱えた一部の貴族によつて、爵位を落とすだけで済まされた。

先帝が崩御し、現皇帝の時代となつて五年、ツアインの昇華は、つまりは、その血が背負うものをすべて、帝国のために差し出せということだ。

疑いの眼差しが強かった先帝も、先帝にはつきりとした意思を伝えられなかったメルエイラ元伯爵も、すでにこの世にはいない。新しい時代を求めた者たちと、真にメルエイラ家の必要性を唱える貴族たちが、メルエイラ家にそれを強要したのである。

そして、没落しかけていたその時代でもやらなかったことを、メルエイラ家は強要された。

「よ……りにもよ……つて、ツイエルを、ですの？」

姉、テューリが蒼褪めながら、両手を震わせていた。蒼褪めていてもなお美しいテューリに、ツイエルは「美人がなにをしても許されるのは当たり前じゃないのか」などと、関係のないことを思った。

「ええ。わがあるじの妃に、迎えたいと思います」

「お待ちくださいまし、宰相閣下。わが妹はこのとおり、身も心も熟さぬ童です。それを……」

「これは決定事項であり、あなたの言葉に効力はございません」

その人は、昨日ツアインを呼びとめ、おかしな会話をした人だった。

「ツアイン兄上…… ツアイン兄上はどうしましたの！」

「わがあるじが召喚しております」

「！ ツアイン兄上がおられないこのときを狙って……あまりにも不躰ではありませんか！」

テューリは怒鳴ったが、その人は怯みもしなければ、あらゆる感情を見せなかった。ただ静かに、そして冷やかに、テューリを見つめてツイエルを見るだけだ。

「失礼します、ツエイル姫」

呼ばれたとき、腕をその人に掴まれて、引っ張られていた。

「ツエイル！」

悲鳴のようにツエイルを呼んだテューリが痛くて、見ていられなくて、ツエイルはその人に抗ってテューリに腕を伸ばしたが、無駄だった。

「ツエイル、ツエイル！ わが妹をお返してください、宰相閣下！

わが妹を……わたくしのツエイルを返して！」

「失礼いたします、テューリ姫」

「いやよ、ツエイルを返して！ ツエイル！」

ほとんど抱えられるようにして、ツエイルはテューリから引き離された。

「姉さま……っ」

どうしてこんなことになっているのか、わからないまま、ツエイルは四駆の車に乗せられた。

鉄製の車は、鉱石を機動力にした、貴族でもそう所有できない高価な乗り物である。いつか乗ってみたいとは思っていたが、こんなふうに乗ることになるなんて、考えられなかった。

車の扉が閉められると、とたんに車は発進する。

邸や姉の姿は、あっというまに見えなくなってしまうた。

「姉さま……」

まず、自分の身になにが起こったのか、ツェイルにはわからない。姉があんなふうに取り乱す意味もよくわからない。

けれども、はっきりしていることがあった。

「わたしは、誰かに、嫁ぐのですか」

「はい。わがあるじに」

答えたのは、一緒に乗り込んだその人だ。

「わが名はルカイア。宰相の末席を汚しております、ルカイア・ラッセと申します」

宰相。

姉も、その人を宰相閣下と呼んでいた。

それならば、宰相閣下がわがあるじと呼ぶ人は、ひとりだけである。

「あなたは、今玉座におられるお方に嫁ぐのです」

まさか、と鼻で笑えたらよかった。

けれども、できなかつた。

ルカイアが、至極真面目であつたから。

「あなたには後宮に入ってもらいます」

帰りたい。

そう思った。

「どうして、わたし、なのですか」

こんな貧相な娘、今だって男の子のような喪服を着て、髪だって結い上げられるほどの長さがなくてそのままであるのに、どう見ても異色としか思えない者を、なぜ後宮に連れて行くこととしているのだろう。

ルカイアの瞳が細くなった。

「メルエイラ家の力が、あのお方には必要だからです。そして、あなたはメルエイラ家の最大の秘密……あのお方のそばにあるのが望ましい」

メルエイラ家は生粋の貴族ではない。しかし、その血が背負う力は、今もなお引き継がれている。

それが必要だと、ルカイアは言った。

その秘密をツェイルが持っていることすら、知っていて。

「わたしの、力を……知っているのですか」

「ええ。あなたが、メルエイラ家の暗殺術を引き継ぎ、その天恵てんけいを所持していることは、すでに承知しています」

ツェイルが天恵者てんけいしゃであることを、ルカイアは知っている。家族しか知る者がいないはずなのに、それは驚愕以外のなにものでもなかった。

「ツアインもまた、天恵者であることを、承知しています。ツアインとあなた、ふたりでひとりの天恵者となる、そのことも」
「……なぜ、それを」

兄、ツアインも天恵者であることを、知られている。

「あのお方のそばには、古の騎士デイヴァインがいます。そして、古聖王からの王が、再びこの世にその姿をお見せくださいました。メルエイラ家の秘密は、もはや秘密ではありませんよ」

誰がなんと言おうと、それらは秘密だった。存在を知られてはいけないことだった。

ツェイルは頂垂れた。

自分が天恵者であり、また兄もその天恵者であることは、隠し続けなければならなかったのだ。

「ですが……」

ルカイアがふと、顔に影を落とした。

「そのように、落ち込むことはありません。攫うようにあなたを連れてきましたが、悪いようにはしませんよ。もちろん、そういう扱いをするつもりもありません」

「え……？」

「わたしはただ、わたしができる限りのことを、あのお方に差し上げたいだけです。それがたとえ自分勝手なことであっても、ね」

わたしはきつと、あのお方を一番に考えることは、できないだろうから。

そう言ったルカイアは、少し悲しげだった。

その言葉の意味は、矛盾してはいまいか、とは思ったが、それ以上の意味はわからなかったし、ルカイアがなにを思っただけでそう言ったのかもわからなかったから、ツェイルはただ聞いていたしかなかった。

た。

「わたしは、兄を帝国の騎士に在り続けさせるための、人質ですか」
「いいえ。メルエイラ家をあのお方に残すために、人身御供となつていただくのです」

つまるところ、必要なのはメルエイラ家であり、けしてツェイル自身ではないということだ。

完全に自分を無視されたことは悲しいし腹立だしいことではあるが、ここでツェイルが逆らえば、メルエイラ家は爵位の剥奪のみならず、一族皆殺しとなるだろう。逃げ切る力はあるしその自信もあるが、一生を追われ続ける生活になるだろうことは考えなくともわかる。

これから嫁ぐ姉、まだ幼い妹と弟、仕えてくれている者たちのことを想えば、ツェイルはおとなしく、黙ってルカイアに連れられて行くしかなかった。

「ごめんなさい、兄さま……」

秘密が暴かれてしまった以上、そして家族を人質に取られたも同様なこの状態で、ツェイルができることなど高が知れている。

だから、兄に謝って、ツェイルは俯いた。

涙はやはり出なかった。

枯れてしまったのではない。泣いてはいけけないのではない。

ツェイルはただ、泣けないのだ。

そうしているうちに、ツェイルの想いなど無視して、車は皇城に到着した。

「後宮には、わたし以外の宰相ふたりが呼び寄せた妃候補の姫たち

が、未だ滞在されており。ですが、お気になさらず。彼女たちにはすでに滞在理由を失っておりますので」

「それは、妃候補ではなくなつたと、そういうことですか」

「はい。未練がましく、残っているだけです」

ひどい言い方をしたルカイアだったが、後宮入りしたツェイルがすれ違った姫たちの態度を見ると、ルカイアがひどく言いたい気持ちが出た。

なんとというか、ひたすら態度が悪い。いや、悪いわけではない。高飛車で高慢ちきそうな視線が、ツェイルをじろじろと見ては、こそこそと言いつのた。表立ってツェイルに言えないのは、ツェイルがルカイアという、歳若い優秀な宰相に連れられていたからだ。

「彼女たちへの謁見は、許されません。すでに彼女たちは滞在理由を失い、早々に帰らねばならぬ身ですから」

「逢いたいとは、思いません」

「でしょうね。もし彼女たちからの謁見があつたとしても、そのすべてわたしのところで決済しますので、ご安心を」

「それはお願いします」

いじめられそうだし、いじめられに行きたくもないので、そこはルカイアに頼むしかない。ただでさえ攫われるように連れて来られたのだ。ここにいい思いはしないし、これ以上つらくなりたくない。

「それから……ツェイルに逢うこと、ごきょうだいに逢うことは、これも許可できません」

「え……なぜですか」

それくらいはいいだろう、とツェイルは慌てた。

「今は許可できないということ、永遠にそうというわけではありません。今はまだ、特にツアインはひどく取り乱しておりますので、許可できないのです」

兄のそれは予想通りではあるが、一度くらいは逢って、そうしてその覚悟を話しておきたかった。

兄に逢いたい。

姉に逢いたい。

妹と弟に逢いたい。

またきょうだい皆で、賑やかに笑い合いたい。

寂しい。

「……逢いたい」

そうこぼせば、なぜかルカイアに、ぼんぼんと頭を撫でられた。

その仕草に少し驚いて顔を上げると、ルカイアは申し訳なさそうに苦笑していた。

おそらく、いやきつと、この人は本当は優しいのだ。ただ、自分勝手なことをしても、できることをしたくて、それを貫いているのだろう。

「宰相閣下」

「わたしのことは、ルカ、とお呼びください」

「……ルカ、さま」

「なんでしよう、ツエイルさま」

「わたし、ルカさまのこと、誤解していたようです」

「誤解、ですか？」

「わたし、ここに来たこと、本意ではありません。これ以上のつら

「いい思いは、いやです。ルカさまは、わたしのそれを、わかっているじゃない」

「……わたしの身勝手に、あなたをここへお連れしたことは、自負しております。ですが、謝罪は致しません。わたしは、わたしができることをあのお方にしたいのです」

ルカエアの濃い碧色の瞳は、強く「あのお方」を想っていた。それはツェイルが、きょうだいを想う気持ちに、酷似している。

だからツェイルは、嘆かないと決めた。

「わたしは、わたしのできることを、したいと思います」

それは、ここに来たときに、決めたこと。

「兄さまと姉さまの幸せ、弟と妹の幸せを、わたしは祈ります」

それは、ルカエアの強い意思を感じて、決めたこと。

「わたしは、ここにいます」

たとえば、ルカエアが望むようにならなかつたとしても、そのときはきつと自分の役目も終えているだろうから、いることだけならできる。ただでさえ叛旗の疑いをかけられた一族なのだ。

ツェイルがここにいて、それらが晴れて、きょうだいが末永く幸せに暮らせるのなら、それでいい。

自分の身ときょうだいを天秤にかけるなど、きょうだい大好きなツェイルには、とうてい無理なことだ。

メルエイラ家を欲し、その人身御供にツェイルを選んだルカエアの眼は、間違っていない。

「あなたの強さに敬意を表します。ご理解、ありがとうございます」
深く頭を下げたルカイアに、ツェイルもまた、深く礼をした。

02 : その瞳が語るもの。2

ルカイアはできる限りのことをツェイルにもすると言ってくれた。そのおかげで、ツェイルはひたすら静かな日々を、後宮で過ごすことができています。

幾度か妃候補だという姫たちから謁見の申し入れはあったが、ルカイアがことごとくそれらを拒否し、またツェイルが部屋に籠ることとで、無駄な争いは避けられていた。

「わたしに、謁見、ですか」

その日も、未練がましく残っていた姫のひとりから、謁見の申し入れがあった。いつものようにその申し入れはルカイアのところへ届けられたそうだが、なんとその姫はもうすぐ部屋の前にいるそうと、ツェイル就きとなった侍女のリリも困惑していた。

「どうしましょう。姫さまが来られたことも、宰相閣下にはお伝えしたのですが……」

「ルカさまが来られるまで、時間を稼ぐしかありませんね」

「来てくださるでしょうか」

「来てもらわなければ、困ります」

ここにきて数日、未だルカイアの言う「あのお方」には逢っていない。忙しい時期ではないらしいのだが、少し前から隣国との間に揉めごとが起きていて、そちらの対処に追われているとのことだ。

ゆえに、この数日でツェイルは、ルカイアとリリ以外の人には逢っていない。

「ちよつと、まだですか？ わたくし、挨拶がしたいだけですのよ？ それだけのことに、なぜこつも時間がかかるのですか？」

扉の向こうから、そんな甲高い声が聞こえた。ルカイアの到着を待つまでもなく、突入されてしまいそうである。

「リリ、隠れるところは、ありませんか？」

逃げてしまえ、とツェイルは簡単に考え、ノリのいいリリが一瞬だけぼかんとしたのち、にんまりと笑った。

「露台の真下は、誰も見ませんの」

「では、リリも一緒に隠れましょう」

「はい！」

リリはいい子だ。いや、ツェイルより歳上であるから、いい子、では失礼だ。とても面白い、いい人である。

ツェイルがドレスの着用をいやがれば、リリはどれなら着てくれるのかと模索し、あれこれ見繕ってくれる。よつて、今のツェイルの服装は、神官が着用するような長衣に、下衣だ。まったくもつて妃候補の娘らしくない、男の子である。姉のようにリリは少し残念がっていたが、生地や色を選んでツェイルに着せたら、なにも言わなくなった。むしろリリは、その男の子のような服装を、好んでツェイルに着せて楽しんでるよつでさえあつた。

よつて、ツェイルはそれでいいことにしている。

ルカイアに求められたのは、メルエイラ家の力。けして、ツェイ

ルの女らしさは求めていない。

だから、よいのである。

そういうことにしている。

「ツェイルさま、こちらです」

リリと仲良く手をつないで、ツェイルは露台に出て、欄干を乗り越えた先、露台の真下に移動する。

直後、部屋の扉を豪快に開ける音と、それを引き止め損なった侍従の声が聞こえた。

「いないじゃないの！ わたくしがわざわざ挨拶に来たというのに、どこへ行ったというの。失礼だわ！」

あなたの都合になど合わせていられますか、とツェイルは心の裡で悪態をつき、ため息をつく。今日は面倒な日だなあと思いながら嵐が過ぎ去るのを待った。

ツェイルが居室として与えられた後宮の一室は、随分と端にある。むしろ端だ。露台から見る庭は広く、木々や草花が無法地帯のようになっている、森に近い。たまに小鳥が窓辺で歌っていて、どこからか迷い込んだ小動物を見かけることもある。皇城にこんな一角があったのかと、そう驚かせられる居室だ。

ツェイルは緑の強い場所が大好きであったから、自然に溢れた居室を与えられたことには、感謝の限りである。きょうだいたちに逢えない寂しさや悲しさはあれど、この緑の強さと、能天気で明るい侍女リリのおかげで、多少は慰められていた。

この日はばかばかと暖かい日だったので、リリと一緒に露台の下に隠れて丸くなっているうちに、面倒な姫のことなど忘れかけて、

なんだか眠くなつてうとうととしていたときだ。

「ああ、ここにいたか」

そんな声が、頭上からした。なんだろうと思つて目を擦りながら顔を上げると、いつのまにか目の前に人が立っていた。面倒な姫に見つかったのかときぎよつとしたが、服装と体格から、その人が男だとわかりホツとする。

「安心しろ。あの姫には強制退去を命じた。もう来ない」

強制退去。それは部屋からなのか、それともこの城からなのか。どちらにせよもう二度と現われないでくれるなら、幸いである。

「ありがとうございます」

陽光を背にしたその人の顔はよく見えなかったが、声と口調からルカイアではないことが知れる。同じようにリリもその人が見えていなかったようだが、目を凝らしたあと、慌てて平伏していた。

「リリ……?」

どうしたのかと思つたら、その人が屈んだことで漸く見えたその顔に、ツェイルは瞠目した。

淡い金の髪、同じくらい淡くて透けてしまいそうな碧色の双眸、その肌の色さえも透けてしまいそうで、着用している衣裳が見せる幻影か、まるで人間ではないような儚さと、人間であるがゆえの危うさを具現化したような容姿をした男の人だ。

息を呑んでその人を見つめれば、その人はにっこりと微笑んだ。

「小さいな、おまえ」

「……は」

「露台の下に隠れるなんて、よくできたな。狭くないか？」

言っていることと、表情が一致しない。そう感じるのはツェイルだけだろうか。

「あ、の……」

「いくつになる？」

誰なのだろうと、それを問おうとしたら、遮られた。

「え……と、十五に」

「うわ……」

華麗に微笑んでいたその人は、とたんに顔をしかめた。いやそうなのではない、なにか拙いことでも知ったような顔だ。

「おれ、二十三だぞ……やばくないか、この歳の差」

なんのことかわからない。

「よい具合の差だと思いますが」

と、ルカイアの声が降ってきた。どうやら来てくれたようがある。

「おまえが連れてきたというから、珍しいとは思ったが……まさかメルエイラ家の娘を連れてくるとは思わなかったぞ」

その人が、うんざり、とでも言いたそうな顔でルカイアを見上げ、そう言った。

「なんてことしてくれたんだ、おまえは」

「連れてきただけですよ、妃候補として」

「余計なお世話だ」

「それより、ツェイルさまにご挨拶を。初対面でしょう」

「ん……ああ、それもそうか。おれは知っているが」

その人の視線が、ルカイアから再びツェイルに戻った。

ドキッと胸が高鳴ったのは、ときめいたからではないと自分に言い聞かせる。その人が、人としてあまりにも危うげで、壊れてしまいうそだと感じたからだ。

「サリヴァンだ」

その人は、それだけ名乗った。

「このヴァリアス帝国の、国主を任されている」

それは、つまり。

「……陛下？」

このヴァリアス帝国の、国主といったら。
皇帝陛下。

ルカイアが「あのお方」と呼ぶ、その人だろうか。

「ああ。今は、そういう立場にある」

サリヴァンと、そう名乗った皇帝陛下は、笑いともつかない顔で肩を竦めると、すっとツェイルに手のひらを差し出した。

「ツェイル、でいいんだな？」

「は……はい」

「手を取れ。いつまでもそこにおいては、身体が冷える」

国主に手を取ってもらうなど、恐れ多くてできることではない。たとえこのお人に嫁ぐののだとしても、それだけは拭い去れない感情だ。

けれども、ツェイルは。

国主だという、皇帝陛下だという、サリヴァンという人の危うさと儂さに、その手を取っても、ぬくもりを確かめてみたかった。

「……少し、冷たい」

「ん？」

不敬ながらも、ツェイルはサリヴァンの手に掴まり、露台の下から出ると立ち上がる。

手のひらを通して伝わってくるサリヴァンのぬくもりは、少し、冷たかった。

「……ああ、手か。悪いな。おれは体温が低いんだ」

「いえ、不躰を申しました。申し訳ございません」

ツェイルは手を離そうとしたが、サリヴァンは握ったまま放そうとしない。どうやら部屋の中へ送り届けるまで、離すつもりはないら

しい。

サリヴァンと手を繋いだまま部屋に戻り、寝椅子に腰かけるまでその手は離れなかった。

「逢いに来るのが遅くなつて、悪かった。もう少し早く来ていれば、おまえを帰してやれたんだが……」

「帰す？」

「ルカに攫われてきたようなものだろう」

知っていたのか、と思う。

「帰してやりたいところだが、しばらくは我慢してくれ。今は己れの身の振りより、国政が大事だ。隣国との問題の話は聞いたか？」

「はい。なにやら揉めている、と」

「おまえにはつらい思いをさせるが、その問題が片づくまでは、ここへは遊びに来たと思って過ごしてもらいたい。終わったら、ちゃんと帰すから」

「え……？」

どういう意味だろうと、ツェイルはサリヴァンではなくルカイアを見上げた。洗面を浮かべたルカイアは、控えていたところから一歩前に進むと、軽く頭を下げる。

「陛下、ツェイルさまは妃候補にございます」

ルカイアのそれに、サリヴァンはいやそうな顔をした。

「だから、余計なお世話だと言っている」

「いいえ。陛下には妃を、或いは側室でもかまいません、娶ってい

「いただきます」

「ルカ、おれは要らないと言っている」

サリヴァンの声は本気で、嘘は見られなかった。それから察するに、サリヴァンにとってこの状況は望ましくないことで、また考えたくもないことなのだとわかる。

ツェイルは、ルカイアの渋面を見つめ、そうしてサリヴァンに視線を転化させた。

「陛下」

「……ん、ああ、おれか」

この人は、なぜこうも、人としての危うさと儻さを、体現しているのだろう。

どうしても、サリヴァンの所作一つ一つに、それを感じてしまう。

「わたしは、ここにいます」

言つと、サリヴァンが目を細め、眉間に皺を寄せた。

けれども、ツェイルは決めたのだ。

日蔭者だったメルエイラ家は、この帝国で安寧を得た。その技術は後世に伝えられ、帝国に差し出し続けていても、メルエイラ家はその安らぎを求めた。郷里を求めた。国主に裏切りの疑いをかけられても、それらを求める業が強かった。

それは今も変わらない。

再び日蔭者となり、殺したくもない人を殺しながら、帝国に追われ続けたくなどない。

ツェイルがここにいて家族の未来が護られるのなら、護っ

てみせる。

欲しくもなかったその天恵は、使いたくなくても使わざるを得なくて、そうして実は家族を護っていたことをツェイルはわかっていった。だから、出し惜しみしたところで、それは家族を失うだけなのだ。

たとえ利用されるだけだとわかっていても、むしろ利用させてやるという意気込みで、この天恵を曝してしまったほうがいい。

「わたしを、そばに置いてください」

ツェイルはルカイアの一存でここに来た。だから、サリヴァンの言質を取って皇城をあとにしたならば、ルカイアはその刺客をメルエイラ家に送るだろう。用済みとされ、取り潰しとなって、再び流れ者になるしかなくなるだろう。

曾祖父の代に漸く得た安住の地、すでに流れ者として世界を渡るすべも消えつつあるのに、失うわけにはいかない。このヴァリアス帝国は、メルエイラ家にとってすでに郷里である。ここで生まれ、ここで育ち、これからも生きていく場所だ。

失えない。

「道具として、お使いください」

欲しくもなかった天恵で、家族を護れるなら。

「人としての存在意義は、必要ありません」

この天恵を持ち得たことに、感謝しよう。

ツェイルは座っていた寝椅子を離れ、柔らかな絨毯が引かれた場所を避けて移動すると、冷たい床に膝をついて平伏した。

「わたしは、ツェイル・メルエイラ、破壊の天恵者。万物を闇に葬る、闇の一族を身に宿した者。その罪を、背負いし者。この力、帝国のために在るべきと考えます」

サリヴァンが、息を呑んでいた。ツェイルがメルエイラ家の娘であることは知っていたようであるから、メルエイラ家が持つ天恵のこともわかっていただろうに、それをツェイルが隠しもせず口にしたことに驚きを隠せなかったらしい。

それもそのはずだ。

メルエイラ家は、自らの天恵を口にしたことがない。仄めかしはしても、はっきりと告げたことは、今まで誰にもないことだ。

その秘密を暴きツェイルに突きつけたルカイアでさえ、ツェイルの発言には軽く瞠目していた。

「……げいか 猥下の判断を仰ぐ」

そう言ったサリヴァンに、ツェイルは顔を上げた。サリヴァンはツェイルを見ていなかった。

「陛下、これはご自分で決められることです」

ルカイアがなにか窺めたが、サリヴァンはその姿勢を崩さなかった。

「ルカ、言っておくが、おれは要らないと言ったんだ」

「必要です。あなたは今、国主であられる。お世継ぎを、という声は絶えません。それらを聞きたくないのであれば、メルエイラ家の

娘を娶るべきです」

「おれの歪んだ道に、ラク以外の人間を引き摺り込めと言っか！」

サリヴァンの怒鳴り声に、それはあまりにも不似合いゆえ、ツェイルは瞠目した。

ああ、この人が、人として危うげで儂げで、壊れてしまいそうだと思うたのはこれだ。

「あなたは本当に皇帝陛下ですか」

威厳はある。

器量は溢れんばかりだ。

ルカイアが自分勝手をしてまでも、できることをしたいと思わせただけある、賢帝そのものだ。

けれども、この人は人として危うく、儂く、壊れてしまいそうだ。

「あなたは誰ですか」

この人には、己れという、確固たるものがない。

まるで、誰かのために、皇帝陛下を演じ続けているようだ。

「…………おまえ」

一瞬だけ目を瞠ったサリヴァンは、しかし次にはその美しい顔を歪ませた。

その歪みさえも美しいと思うのは、きっとツェイルがサリヴァンに対して感じたことへ対しての、心の在り方だろう。

「そうか……おまえには、わかるのか」

なにが、とは、問えなかった。

「おれは、サリヴァンだよ」

まるで、おれを皇帝陛下として見ないでくれと、そう言っているかのような瞳をしていた。

侍女リリは、歳若い宰相ルカイアの遠縁にある貴族で、しかし両親を幼いころに亡くして爵位を失い、ルカイアのところ引き取られたのだという。ルカイアの侍女としてつき従っていたが、ルカイアに連れられてきたツェイルの侍女となり、今に至る。

ルカイア・ラッセ。正式にはルカイア・ウエル・ラッセ。公爵家レイルの次男で、皇帝陛下とは幼馴染。宰相への抜擢は、皇帝の一存であつたらしい。ゆえに戸籍は独立しており、侯爵ウエルの地位にあるという。

「ルカイアさまが宰相となられたのは、五年前の、先帝さまが崩御なさったときのことです。あの頃から、ルカイアさまは変わられませんでした」

「政変はそれほどひどくなかったと、聞きましたが」

「ええ。ですが、それは表向きです。本当はとても大変だったのですよ」

ルカイアの侍女で、それも誰よりも長くそばにいたことで、リリはルカイアの身边を誰よりも把握し、理解している者だった。

「わたしは、先日の一件で、ルカイアさまがツェイルさまをお連れになった理由が、なんとなくわかりました」

「はあ……」

「ツェイルさまなら、陛下のおそばにいても、いいと思うのです。いえ、ツェイルさまでなければなりません」

「……それは、懐柔ですか？」
「いえ、とんでもない！ わたしの素直な気持ちを、失礼ながら申し上げた次第です！」

リリは素直でいい人である。ルカイアがそばに置いて、面倒を看て、そうしてツェイルに就けた理由も頷ける。

リリは、先日のツェイルの、サリヴァンに対する「あなたは誰ですか」という失礼な発言を聞いていながらも、なぜかそれに動揺を見せない。つまりはサリヴァンやルカイアのように、なにかを知ることを許された者のひとりなのだろう。

先日、あの発言ののち、サリヴァンもルカイアも、ツェイルを叱責することなく部屋を出て行った。それから今日に至るまでなんのお咎めもなく、こうしてリリがふつうに仕えてくれているところを鑑みると、ツェイルはなにか核心めいた部分を突いてしまったが、それでいいと判断された結果かと思われる。

ツェイルはただ、サリヴァンに感じたそれを口にしただけであるから、周りの真意など知る由もない。咎めがないのはなぜだろうと、首を傾げるだけだ。

「ツェイルさま？」

「……あ、すみません。お茶でしたね」

「謝らないでください。どうぞ、セイ茶です」

ぼかぼかと暖かい日が続いているので、今日は露台に丸机と椅子を出して、そこでお茶をしている。日光浴しながらの緑の強い香りに、わけもわからないホツとした安堵感を得た。

「では、わたしは洗濯してまいりますので、しばらくここを離れま
すね。なにかあってはなりませんから、お部屋から出ませんように」

「本を、読んでいます。ついでに見繕ってきてもらえると、嬉しいです」

「わかりました」

ツエイルにつく侍女はリリだけなので、すべてリリがひとりです。なんだか申し訳ない気もするが、手伝った日には調度品すべてを破壊しかねないツエイルの不器用さは、リリの率直な「邪魔です」という気持ちを汲むしかない。手伝わないことが侍女にとっては当たり前だが、リリにとっては邪魔でしかないのである。生粋の貴族ではないから自分のことは自分でできるが、リリの邪魔をした日には部屋の片隅で丸くなるしかなかった。

先日の一件からサリヴァンもルカイアも姿を見せないの、リリとふたりきりの毎日が続いている。

身体を動かしたいが、未だ滞在している姫たちのこともあるからせいぜい露台に出るくらいで、ツエイルとしては非常に不満である。きょうだいたちへの面会も許されていないから、寂しさや哀しさは募るばかりだ。

「兄さま……姉さま……トウーラ、シュネイ……逢いたいよ」

本を片手に、心地よい風を頬に受けながら、きょうだいたちを思う。とくに兄と姉が心配でならない。

今こうしている間も、きょうだいたちは平和に暮らしているのだろうか。

ぼんやりと、露台に置いた椅子に座って、本を読むわけでもなく外を眺めていたときだった。

「ツエイルさま！」

と、先ほど出て行ったばかりのリリが、部屋に飛び込んできた。息せき切ってやってきたので、どうしたのかとツェイルは慌てて露台から部屋に戻る。

「リリ？」

「ツェイルさま、大変です」

「はい？」

「陛下がいらっしやいました！」

ああ、そうですか。

「わかりました」

「えっ、それだけですか！」

なにが大変だというのか。皇帝陛下なのだから、妃候補のところへ来るのは自然である。

尤も、サリヴァンはツェイルを妃候補とすら見ていないようであるが、それでもほかの妃候補の姫たちとは違う待遇を受けているとツェイルは思っている。

ルカイアが姫たちを敬遠しているように、サリヴァンにもその節が見られた。それなのに、ツェイルのところには乗り込んだ姫を撃退し、失礼な発言をしたツェイルのところにはわざわざ足を運ぶ。おそらくはルカイアが連れてきた者だから、という理由で、サリヴァンはだいたい骨を折ってくれていると思うのだ。

「まだいたのか」

と、部屋に入るなりサリヴァンに言われたところで、痛くも痒くもない。

「わたしはここにいますと、そう申し上げました」

「おれの言質を取って、ルカを言い含めればよかっただろう」

「……それができれば苦労はしません」

「まあ、そうだろうな。おれもルカには勝てない」

サリヴァンはずかずかと部屋に入ってくると、中央に置いている寝椅子に腰を下ろし、リリにお茶を頼んだ。

「本当に、おれの言質を取って、逃げてもよかったんだぞ」

疲れているのか、サリヴァンはリリに淹れてもらった茶をゆっくりと口に含みながら言った。

「陛下」

「……ん」

「怒っておられないのですか」

「……、なんのことだ？」

きよとん、としたサリヴァンに、違うのかとツェイルは首を傾げた。

あの失礼だったのだろう発言の咎めが、今来たのだと思ったのだが、違うのだろうか。

「先日、わたしは失礼なことを、申し上げました。咎めを受けるのは必須と思っておりましたが」

「……ああ、あのことが」

「お忘れですか？」

「いや……咎めるなんて、思いつきもしなかった」

え、と驚いたのは、言うまでもない。
心が寛大なお人なのだろうか。

「リリ、下がってくれ。姫とふたりで話したい」

そう言って、サリヴァンはリリを下がらせると、ツェイルを自分の隣に促した。

「……なぜ床に座る」

「わたしはただの妃候補です。陛下と同じ場所には座れません」

「おまえは誰に嫁ぐのだと言われてここに来た？」

「あなたさまです」

「なら、座れ」

椅子に、と強く勧められたが、ツェイルも断固として床から動かなかった。

ルカイアがツェイルに求めたのは、メルエイラ家の力である。決して、人間としての、女としてのツェイルではない。サリヴァンにとってツェイルの存在は本意ではないだろうが、ここにいると決めた以上、ツェイルはそれを貫くだけだ。

「強情だな……」

「お褒めいただきありがとうございます」

「褒めてない。が、まあいいか……おまえになにを言っても、たぶん、おれの言葉は通り抜けるだけだろうからね」

ふう、と息をついたサリヴァンは、お茶を一気に仰ぐとカップを卓に戻し、寝椅子に埋もれた。

ツェイルはじつと、サリヴァンを見つめた。
やはり、今でもサリヴァンには、人としての危うさと儻さと、壊れそうなものを感じる。

「ルカになにを言われたか知らないが、あいつが言ったことは忘れる。おれはおまえになにも求めないし、求めるつもりもない。三、四日の内には帰してやる」

「え……？」

少し、予想外な言葉だった。帰れるなら嬉しいし、それに越したことはないのだが、サリヴァンのそれはルカイアが立てた計画をすべて把握したうえで判断とは思えなかった。

「それがおれの答えだ。城を抜け出すという危険な行動を取らずにいてくれて、実のところ助かっている」

「い、いえ……」

逃げるつもりなどない。この身は帝国のために在るのだと、そう心に決めた。だから、逃げてしまおうとは考えなかった。

「おれはこの先も、妃を娶るつもりなどない。だから、おまえは家に帰れ。ツアインには、近い内におまえを帰すと伝えてある。ツアインが迎えに来るだろう」

「兄さまが……」

「ああ、ツアインのことは、そのままだから安心しろ。メルエイラ家も、侯爵位を与える。もともとは先帝の勝手な判断だし、メルエイラ家に叛旗の意思がないことなど、わかりきっていたことだからな」

あの決意はなんだったのだろうか、今日までの寂しさや悲しさは

なんだったのだろうと、そう思うサリヴァンの言葉だった。

「し、しかし……わたしの、天恵のことは、すでに知られて」

「そのことだが、ルカは誰にも言っていない。おれも、な。メルエ
イラ家の秘密だったんだろう？ 暴いて悪かったな」

「謝られることでは……」

まるですべてが嘘だったかのような、夢であったかのような展開
に、ツェイルは頭が追いつかなかった。

「ルカの想いは、わからなくもないが……おれは、どうしたって、
おれでしか、ないからな……」

「……陛下？」

「ん……すまない。政務から……逃げてきた、から……」

ツェイルが困惑しているのを余所に、サリヴァンは唐突に、寝椅
子に転がった。どうしたのかと驚いてそばに寄ったら、寝息が聞こ
えてきた。

「……陛下？」

呼びかけても、反応しない。

どうやら眠ってしまったようである。

疲れているようには見えなかったが、安心できるところでもないだろう
にこんなところで眠気に負けてしまうくらい、極端に疲弊していた
のだろう。隣国との揉めごとが解決したとは聞かないので、それに
振り回されながらも、ツェイルのことまで考えてくれていたのかもしれない。

サリヴァンの寝顔は、とても苦しそうだった。

なんてことだ、と思った。

ルカイアは、サリヴァンのこれを取り除いてやりたかったのではないだろうか。

「陛下……」

優しい人だ。

ルカイアにも感じたが、この人たちはどうして、こんなにも人に優しくあれるのだろう。ツェイルなどは自分のことばかりで、家族以外のことなど考えられないのに、優しい人だ。

ツェイルは失礼して寝椅子に座ると、柔らかくはないがせめて静かに眠れるようにと、サリヴァンの頭を膝に乗せる。扉の向こうに控えているだろりりを呼ぶと、静かに上掛けを持ってきてくれるよう頼み、サリヴァンのさらさらとした淡い金糸の頭を撫でた。

こうしていると、きょうだいたちのことを、思い出す。いつも賑やかで、笑いが絶えなくて、穏やかな毎日だった。兄や弟、妹に強請られて膝を貸したこともある。

サリヴァンはこういう穏やかさを知らないのではないかと、思った。

だから人として危うげで儂げで、今にも壊れてしまいそうなのに、無理を続けているのではないだろうか。

「ツェイルさま、ツェイルさま」

唐突に、耳元でリリの声がした。どうやらサリヴァンにつられてうとうととしてしまっていたようだ。

目を開けると、そこにはまだサリヴァンの頭があった。眠り始めたときより穏やかな寝顔に、ホッとする。

「なんですか？」

サリヴァンを起こさないよう、ツェイルは小さな声でリリに返事を
をする。

「あの、ルカイアさまが来られているのですが……陛下はここにお
られますか、と」

「ああ……」

そういえば、眠りに入る間際、政務から逃げてきたと言っていた。
サリヴァンがここに来たのは午後も中頃だったが、今はもうすっか
り暗くなっている。まさかサリヴァンがここに逃げ込んだとは思わ
なかったのだ。サリヴァンは、この時刻になつてツェイルのところ
に見当をつけたらしい。もしかしたらサリヴァンはそれを狙ってい
たのかもしれない。

「自然に起きるまで、眠らせてあげたいのですが……」

膝が痺れているから、随分と長くこうしていたのだと思う。それ
でも身じろぎ一つせずサリヴァンは眠り続けているから、かなり疲
れていると診ていいだろう。

迷っているうちに、部屋の扉が静かに開かれて、ルカイアに突入
されてしまった。

「……眠られているのですか」

ルカイアは驚いていた。

「はい。あの、できれば静かに。自然に起きるまで、眠らせて差し上げたいのです」

「声に反応しないところを見ると、深く眠っておられるかと。そうになると、このお方は自然に目が覚めるまで、なにがあっても起きません」

「……そうなのですか？」

「ええ。滅多にそうなることはないのですが……珍しいですね」

まったく動かないサリヴァンは、それこそ人が動く気配にも、声にも反応しない。まるで死んでいるかのように深く眠っている。

「猯下がおられないところで、こんなに深く眠るなど……五年ぶりではないでしょうか」

「五年ぶり？」

その数字と言葉の意味はなんだろう。そもそも「猯下」とは誰のことだろう。この前もサリヴァンは「猯下」と口にしてはいたが、誰のことを言っているのかわからない。

ツェイルは首を傾げたが、ルカイアはため息をついて首を左右に振ると、扉を振り向いて誰かを呼んだ。

「ラクウィル、入りなさい」

ルカイアが呼ぶと、その人はひよっこりと扉から顔を出して、なぜかにんまりとその精悍な顔を笑わせた。

「めつずらしいもん、見ましたねえ。サリヴァンがマジ寝しちゃってますよ」

サリヴァンと同じくらい色素が薄いその人は、ととと、と部屋に入ってくると、ツェイルとサリヴァンの前に屈んだ。

「やっと眠ってくれましたねえ、サリヴァン」

誰もがサリヴァンを陛下と呼ぶのに、その人は呼び捨てだった。

「あの……?」

「あ、失礼。おれは侍従長のラクウイルです。こんな体勢から失礼しますね、ツェイル姫」

「それはかまいませんが……侍従長?」

「そうですよ」

騎士つぼく見えるのだが、むしろ騎士だろうと疑いたいのだが、ラクウイルと名乗ったその人は、侍従長らしい。

「ラクウイル、それは本当にツェイルさまに失礼ですよ」

「いいじゃないですか。ツェイル姫はかまわないとおっしゃってくださっているわけですから」

「なりません」

「意地悪ですねえ」

不貞腐れた言い方をしても、ラクウイルの表情は変わらない。なぜか楽しそうに笑っている。

変な人だ。

ツェイルのラクウイルに対する印象は、それに収まった。

「しっかし、サリヴァンがこんなところで眠るとはねえ……どうしましよう」

「あの」

「はい、なんででしょう」

「よろしければ、わたしの寢室へ。この体勢のままでは、おつらいでしょうから」

なにをしても起きないというのは、ラクウイルが声を潜めずにいってもやはり身じろがないサリヴァンを見てわかった。それなら、このまま運んでも問題はないだろう。

「いいんですか？」

「はい。わたしはこちらで眠ってもかまいませんから」

「それじゃあ風邪を召されます。どうせだから、サリヴァンと一緒に眠っちゃってくださいよ」

「……さすがに、それは」

寢室を貸すのはいいが、さすがに共寝はどうかと思う。しかし、ルカイアはなにも言わず、ラクウイルは能天気には笑った。

「だいじょうぶですって。サリヴァン、本気で眠ると、絶対に起きませんから。こーんなことしても、ね」

と、ラクウイルはサリヴァンの頬を引っ張ってみせた。さすがにこれは起きるのではないかとツェイルは慌てたが、予想に反してサリヴァンは眠り続けている。

「……すごいですね」

「でしょ？　こんなの久しぶりですから、もしかしたら朝になっても起きないかもしれませんねえ」

「だいぶ、お疲れなのは」

「まあそれもあるでしょうが、この城はサリヴァンにとって、敵以外のなにものでもありませんからね。そう易々と眠れないんですよ」

「敵……?」

国主で、皇帝陛下であるはずなのに、城の中が敵だとはどういう意味だろう。

ツェイルがどういふことが問う前に、ラクウィルはツェイルの膝からひよいと、サリヴァンを抱き上げた。

「やっぱり痩せましたねえ……ツェイル姫、それでは寢室をお借りしますよ。私室までお連れするには、人目もあり過ぎますからね」
「え、ええ……どうぞ」

膝が痺れていたのでツェイルは立ち上がれず、寢室へはリリに案内してもらった。

「ツェイルさま」

「はい」

ルカイアに呼ばれて、ハッと顔をそちらに向ける。ルカイアは苦笑していた。

「申し訳ありませんが、しばし陛下をお頼みします。ゆっくり眠らせてあげてください」

「……はい、承りました」

ルカイアの優しい眼差しに、これは本当に珍しいことで、できることなら好きなだけ眠らせてあげたいという、心が見えた。

だからツェイルは引き受けた。疲れたときくらい、ゆっくりとさせてあげたいと思うのは、当然のことだ。

それはツェイルの本心で、ここに来た理由など、関係ないことだった。

04 : 隠れた心をすくうは。2 (前書き)

流血描写があります。

みみっちいですが、ご注意ください。

04 : 隠れた心をすくうは。2

予想を大きく覆して、サリヴァンは翌日になっても目を覚まさないかった。

昼頃まではそれも容認されたが、さすがに夕刻ともなればツェイルは不安になり、気になって幾度も寝室を窺った。

それでも、目を覚まさない。

ひたすら眠り続けている。

規則正しい寢息に、それでも不安になるのは仕方ないだろう。

こんなに眠り続ける人など、ツェイルは見たこともないし聞いたこともない。

「だいじょぶ、そのうち起きますから」

と、侍従長ラクウィルは能天気な笑い、

「さすがに呆れてなにも言えませぬね」

と、ルカイアは深々とため息をついた。

そんなこんなで二日め、夜は頼みますと意味不明なことをラクウィルに言われ、やむなく寝室でサリヴァンと寝台を共にしたツェイルだったが、いつのまにか眠ってしまつて朝にリリに起こされると、相変わらず隣の皇帝は目覚めておらず、不安を煽られた。

どうやったたらこんなに眠れるのだろう。

「やはり、お医者さまを」

「だいじょぶですから、放っておいていいですよ」

「ですが……」

リリのように明るく能天気なラクウイルは接し易く、また調子も軽いので緊張が緩む。

サリヴァンと寝台を共にしても、ラクウイルの明るさとリリの明るさが、さすがに拙いのではないかと思っていたツエイルの心を軽くした。

「飲まず食わずで、二日間も……やはり無理にでも起こすべきです」

「やってみていいですよー」

「……わかりました」

無理やり起こしてもいいと言われたので、ツエイルはさっそくサリヴァンを起こすために行動に出た。

しかし、きょうだいたちを起こすときのように、さすがに国主に対してできるわけもなく。

「……すみませんでした」

あえなく撃沈し、ラクウイルとリリに大笑いされた。

失礼ながら頬を抓ったり叩いたり、枕を叩いて周りを煩くしてみたり、窓を全開にして風を送り込んでみたり、大きな声で「陛下」と叫んでみたりしたのだが、サリヴァンは起きなかった。

寝返りさえしないのだから、死んでいるのではと冷や冷やしたのに、寝息はきちんと聞こえる。

ここまできたら恐怖である。誰だって恐怖を感じるはずだ。笑っているラクウイルの神経が知れない。

「リリ……どうしましょう」

「そんなに気にすることは無いと思いますが……わたしは話に聞いていただけ、本当になにをしても起きないんですね」

「ご病気でなければよいのですが……」

「それはないかと……」

あまりにも心配するツェイルに、ラクウイルが折れてくれたのは二日めの夕刻だった。

医師を連れてきてくれたラクウイルは、ツェイル立ち会いのもと、サリヴァンの診察をしてくれた。

「少し脈が遅く、体温も低い……まあ、いつもの陛下ですなあ」

のんびりとした医師は、そう言って笑って帰って行った。

「だから言いましたでしょう？ 放っておいていいんですよ」

医師の言うことは信じられる。というか、信じるしかない。しかしラクウイルは信じてはいけなない気がするの、きつとラクウイルのいき過ぎた能天気のせいだろう。

「陛下……」

心配で、心配で、ツェイルなどに心配されても迷惑でしかないだろうが、とにかく目覚めてくれないことは心配で仕方ない。

夕食ののち、ツェイルは気も漫ろに本を読んで時間まで過ごし、沐浴して寝室に入って身綺麗にされたサリヴァンの隣に潜り込んだが、心配のあまり眠気が来なかった。

寝返りをしないのでたまに身体の向きを変えてやるその時間も起きていたら、ラクウイルに苦笑された。

「眠れないなら、姫がやりますか？」

体勢を変えてやることくらいなら、ツェイルにもできる。途中で眠気がくるかもしれないので、様子見は頼んで、ラクウイルのその提案を引き受けた。

三度めの、体勢変えのときだった。

やっと眠気がきてうとうととしていたツェイルは、三度めのそれはできそうもないと思いつつながら、人の気配を感じていた。

ラクウイルが来たのだらうと思って動かなかつたのだが、突如として隣のサリヴァンが動いたことで、意識が浮上したうえ覚醒した。

「陛下……？」

やっと起きてくれたのかと、そう言おうとした瞬間だ。

「動くな、ツェイル！」

三日ぶりに聞くサリヴァンの声が、初めて名を呼んでくれたのに、ツェイルの動きを制止するもので。

なにが起きたのかと思う前に、金属がぶつかり合う音が聞こえた。幾度か交える金属を聞いたあと、鉄錆の匂いが、室内に充満する。

「サリヴァン！」

寢室の扉が乱暴に開けられ、ラクウィルが明りを持って入ってきたとき、ツェイルは寢台から身体を起こして、そうして目の前の光景に目を見開いた。

「へいか……」

血塗れの死体が二つあった。

死体を見降ろし、返り血を浴びたサリヴァンが立っていた。

ツェイルはその状況に驚いた。

ハツとわれに返って、気づいたら急いで寢台を降り、サリヴァンに駆け寄っていた。

「陛下、ご無事ですか」

問えば、ゆっくりと振り向いたサリヴァンが、状況を見無視して微笑んだ。

「怪我は？」

「ありません。陛下こそ」

「平気だ。それより……ラク、片づけてくれ。あとこの部屋だが、もう使わない。新しい居室を用意してくれ」

ツェイルより頭一つ分は背の高いサリヴァンは、その笑顔のままラクウィルに命じる。いや、命じるというよりも、頼んだ。

しかし。

「ああ、駄目だ……また、くる」

「え……?」

「すま、な……」

言い終える前に、サリヴァンが倒れた。

「陛下!」

床に崩れる前に、ツェイルは慌ててサリヴァンを抱え、しかし支えきれぬわけもなく一緒に倒れ込んでしまう。

「ええ、サリヴァン?」

寝室の惨状の片づけをすべく動き出していたラクウィルが、再び倒れたサリヴァンと、支え損なったツェイルを見て驚き、そうして連れてきた近衛騎士にあとを任せると駆け寄ってきた。

「だいじょうぶですか、姫」

「はい。すみません、支えきれませんでした」

「それはいいですよ。姫はちっちゃいんだから、当然です」

失礼なことを言われた気もしなくはないが、羨ましいとは絶対に思わないことにしていることなので、無視する。ラクウィルに手伝ってもらってサリヴァンの下から脱出すると、聞こえてきたのはサリヴァンの寝息だった。

「起きたのでは……」

「まあ、一時的に起きたでしょうが」

「……また?」

「眠られましたね」

なんて人だ。

なにをしても起きないくせに、ひっそりと忍び込んだ刺客には反応して目覚め、片がつくとまた眠るとは。

「よつぽど姫のそばは心地いいんでしょうねえ」

「は……？」

「さて、移動しましょうか。ここより奥があるって、知ってました？」

「い、いえ」

「あるんですよ。そっちに移動しましょう。リリ、姫を頼みますよ」

なにか聞き捨てならない言葉を聞いた気もしなくはないが、いつまでも血の匂いが充満したところにいたくはないので、ツェイルラクウィルに呼ばれて慌てそばに来たりりの手を握ると、酔ってしまったような匂いが充満した寝室を早々に辞した。

案内されて入った部屋は、なにが起こったのかということと、命を狙われたらしいということに神経が逆立ち、夜更けということもあって、ろくに周りを見られなかった。

こんな状態で眠れるわけもない。

神経が無駄に活発化している。

心臓が早鐘を打って、煩いくらいだ。

しかし、寝室に通されて、再び身綺麗にされたサリヴァンが隣で眠っているのを見ていたら、いつのまにかツェイルも眠ってしまった。

朝目覚めて、吃驚である。

「……へいか」

ぼんやりとした眼差しのサリヴァンが、ツェイルを見ていた。それだけでなく、ツェイルはサリヴァンの腕の中にいて、抱きしめられた状態だった。

「……サリヴァンだ」

「は……あの、陛下、お目覚めに……」

「サリヴァンだと、いつている」

寝ぼけているのか、今にも眠ってしまいそうなサリヴァンの双眸に見つめられ、その幻想的な美しさにうっかり赤くなる。

動けずに硬直していると、サリヴァンのほうから離れてくれたので、ホッとした。

しかしながら、身体を起こしたサリヴァンはぼんやりしたままである。

「陛下……お目覚め、ですか？」

「……サリヴァンだ」

まだ眠っているのだろうか。

「サリヴァンさま」

仕方なくその名を呼べば、にっこりとサリヴァンが微笑んだ。再び頬に熱が集中したのを感じ、ツェイルは慌てて俯く。

「姫がここにいるのは、まあいいとして……」

よくないと思うのだが。

「なんで、おれはここにいる？」

え、とツェイルは目を丸くし、顔を上げる。

サリヴァンは明後日の方向を見るともなしに眺めながら、首を傾げていた。

「……覚えておられないのですか？」

「政務から逃げて、姫のところに行ったところまでは憶えている。いつのまに移動した？」

ツェイルは言葉を失った。

「というか、おれはいつのまに眠ったんだ？」

どこまで憶えているのか、不明である。

「あの……昨夜のことも、覚えておられませんか？」

「昨夜？ ……なにか特別なことでもあったかな」

しきりに首を傾げているサリヴァンに、それ以上かけられる言葉が見つかからない。

刺客に襲われたというのに、それすら憶えていないなど、そんなことがあるのだろうか。いや、あれが寝ぼけていたということだけで済まされることなのだろうか。

ツェイルは、起こしに来たりりとラクウィルに声をかけられるまで、呆然としていた。

この人の神経はどうなっているのだろう。
駆け巡るのは、その疑問だけだった。

05 : 隠れた心をすくうは。3

ラクウィルに、

「三日くらいですかね、眠り続けていたのは」

と説明されたサリヴァンは、

「そうか」

と、呆気なく、まるでなにもなかったかの如く平然としていた。

「どつりで身体が動かないわけだ……あちこちギシギシする」

寝台で身体の痛みを訴えたサリヴァンは、ツェイルが共寝をしていたことに触れるどころか、まったく気にした様子も見せず、淡々と己れの身体を検分する。

「身体が痛いのは、まあ……夜更けの襲撃のせいじゃないですかねえ。久しぶりに急激に動いたわけですし」

「その襲撃、なんのことか、おれにはさっぱりわからないんだが」

「寝ぼけた状態であそこまでできるなんて、さすがサリヴァンですよ」

「はあ？」

サリヴァンは昨夜のことを、本当にまったく憶えていないようだった。寝ぼけるのにも程度があるというものだ。

「気分すつきりでよかったですねえ、サリヴァン」

「身体は不自由になったがな」

「三日も眠ってりゃあ、そうでしょうよ」

「起こせよ」

「起きないじゃないですか」

サリヴァンとラクウイルの会話は、ぼんぼんと弾む。ふたりは乳兄弟とかで、幼い頃からの親しい仲であるらしいと、リリから聞いた。だからこんなにぼんぼんと会話が弾むのだろう。

見ているだけでなんだか楽しくなるふたりの会話を、ツェイルはまるできょうだいたちと一緒にいるようだと思いつつ眺めていた。

だがふと、昨夜の襲撃のことで、思い出す。

「けつきよくあれは、なんだったのですか？」

「姫を狙ったものではないはずですから、だいじょうぶですよ」

問えばラクウイルに流されてしまった昨夜の襲撃は、人の気配に警戒心を緩めてしまったツェイルの失態とも言える事態である。

今さらだが、ツェイルはその焦燥感に駆られた。

「……なにもできず、申し訳ありません」

「なにを謝る」

サリヴァンに低頭すると、三日ぶりの起床に思うように動けず寝台にいるサリヴァンは首を傾げた。

「メルエイラ家の者でありながら、その気配に油断し、陛下の御身を危険に曝しました。申し訳ありません。如何ようにも処分してくださいませ」

言つと、室内は沈黙に包まれた。気まずいながらもツェイルはサリヴァンの返答を待つが、いくら待つてもそれが来ない。

恐る恐る顔を上げたら、サリヴァンの、なんとも言いようのない呆れ眼があつた。

「おまえ、おれの話、聞いていたのか？」

「……はい？」

「おれはおまえになにも求めないと、そう言つただらう」

深々とため息をつきながら言われてしまったが、ツェイルは首を左右に振つた。

「そのお言葉は、確かに聞きました」

けれども、それはサリヴァンの意向であつて、ツェイルの意向ではない。たとえサリヴァンのその意向を汲んだとしても、ツェイルはメルエイラ家の者として、その天恵を所持する者として、サリヴァンの身を護る立場にある。

「わたしは、メルエイラ家の天恵者。陛下をお護りすることは、臣下の務めにございます」

当然であることができなかった不始末である。今度こそ、咎めを受けるのは必須だ。

だが、サリヴァンは洪面を浮かべるだけだった。

「……気になっていたことを一つ、訊いていいか」
「はい、なんでございましょう」

急な話の転換だったが、ツェイルは再び低頭してサリヴァンの声を聞く。

「おまえがその天恵を所持したことで支払った代償は、犠牲はなんだ」

瞬間的に、ツェイルは息を呑む。

「答える、ツェイル・メルエイラ」

サリヴァンの命令に、頭が真っ白になる。

今までにないほど、頭が混乱していた。
動揺を隠せなかった。

戸惑いを誤魔化せなかった。

「……答えられないのか」

サリヴァンの低い声は、ツェイルから言葉を失わせる。

答えられない。

今まで誰も気づかなかった。

今まで誰もそれを気にしたことがなかった。

今まで誰も、そんなこと訊かなかった。

だから、答えられなかった。

「おまえの天恵は、ふつうではないはずだ」

やはりそれを知っているから、気づいてしまったのか。

天恵を授かった者の多くは、精霊と契約することにより、その属性の力を使うことができる。

水の天恵を授かれれば、水精霊と契約することでその属性の力が使え、風の天恵を授かれれば、風精霊と契約することでその属性の力を使えるようになる。天恵を授かった者の多くは、いやほとんどは、精霊と契約し、天恵術師と呼ばれていた。

そして、授かる天恵は一つだけであるから、精霊と契約し力を揮うことができても、一つの属性しか扱えない。

だが、それらの法則から外れた天恵者が、いないわけではない。稀に、二つの属性天恵を授かり、精霊がふたり、扱える力も二つという天恵術師がいる。普通の天恵者の一割にも満たない人数ではあるが、存在していた。

さらには、そこからもつと外れた天恵者も、いないわけではない。ツェイルである。

確認されている天恵の中でも、ツェイルのその天恵は帝国に一つだけだろう。

「強い天恵は、その者に代償を求める。代償を求められるほどの天恵者はそう多くない。そうだろう」

そのとおりだ。

法則から外れた天恵者は、授かった天恵が強いものゆえに、法則から外れている。よって、その代償を求められるのだ。

「おまえの代償はなんだ」

ツェイルは再びの問いに、唇を噛んだ。

どう答えたらいいのか、答えていいのか、わからなかった。

「……おれは、おまえがその天恵のために代償を支払っているのに、求めることなどできない」

その言葉にハッと顔を上げた。

「隠し続けなければならなかった天恵なら、なおさらだ。そんな小さな身体で、代償を求められて……おれまで求めてどうしろというのだ。おまえに負荷がかかるばかりではないか」

このお人は、なにを言っているのだろう。
本気で、ツェイルは困惑した。

「メルエイラ家の、天恵は、帝国のために」

「違う。おまえたちが生きていくためのものだ」

「ですが、メルエイラ家の、天恵は……」

「破壊の天恵は人の命を脅かすものではない」

サリヴァンの透明な碧色の双眸が、真摯に、ツェイルを見つめる。
信じられない言葉だった。

「おまえの天恵は、創りあげる天恵だ。創造の天恵だ。なにを勘違いしている」

呆然とした。

今まで誰も、ツェイルの力を、創造だと言った者はいなかった。
破壊だと言った。メルエイラ家の者たちですら、その天恵は破壊だと言っていたくらいだ。

「わ……わたしの、天恵は……人を、壊す」

「壊さない」

「人、を……死に」

「死なせない」

見たことがないからそう言えるのだと、ツエイルは思った。けれども、サリヴァンの瞳はあまりにも真摯で、綺麗で、嘘がなかった。

この人はいつたいたいなんなのだろう。

ツエイルの、それまでの天恵への理解が、引っ繰り返されそうになっっている。

「意味を違えるな。この世界、ラーレに広がり散らばりし天恵に、忌避すべきものなどない」

ふと、力を恐れるな、と今は亡き父の言葉を思い出した。
力を恐れるな。

それはきょうだいを護り、家族を護り、メルエイラ家を護る力だ。誰にも、なににも屈せず、誇りと思え。天恵は神から与えられし恩寵、幸福なことだ。この力で誰かを護ることができる、その喜びを与えられたのだと知れ。

父にそれを言われたとき、ツエイルは理解できなかった。

この天恵のせいで、メルエイラ家は日蔭者だったのだ。安住した先でも、叛旗の疑いをかけられたのだ。

到底、喜ぶことなどできようもない。

しかし、今はどうだろう。

思えば、ここに来たとき、この天恵があったことで家族を護れると知った。この天恵があったことに、感謝すらした。

父が言ったとおりになっている。
じわじわと込み上げてきたものに、ツェイルは息が詰まりそうになった。

「ツェイル」

サリヴァンに、これで二度めになる、名を呼ばれた。

「おまえの代償は、これが」

サリヴァンの指先が、とん、とツェイルの鎖骨の中心を突く。その指が示したものは、ツェイルの貧相な身体つきだった。

「肉体かいたの成長を、代償に奪われたのか」

姉と妹が、いつも嘆く貧相な身体。

十五になるというのに、胸の膨らみも腰のくびれもなく、まるで骨と皮。

かろつじて身長はどつにかふつつではあるものの、それでも年齢的に考えれば足りない。

少女とも、少年とも捉えることができる、どっちつかずなツェイル。

本当は、心から渴望している声を、わかっていた。

それを願わずにはおれない自分をわかっていた。

無理だと自分に言い聞かせて、開き直ったのはもう随分昔のことだ。

「気づいているか、ツェイル」

三度めに名を呼ばれたとき、ツェイルは目許が熱かった。

「おまえ、ずっと、表情がないんだ。笑わないし、泣かないし、怒らない。感情のどれも、顔に出ない。気づいていたか？」

その問いかけが、あまりにも優しくて。

心の奥底に埋もれていた渴望の聲が、掬い上げられた気がして。大きな声で、その願いを口にしていいのだと、許された気がして。

「……わ、わた、し」

込み上げたものに、咽喉が引き攣った。

「感情を殺すな、ツェイル」

四度めに名を呼ばれた瞬間、その言葉に、ツェイルは溢れたものを抑えることができなかった。

「あ……っ」

ぼろりと、なにかが頬を伝う。

初めはそれがなにかわからなかった。

「うあ……あ、あ……ああああ」

しゃくり上がった嗚咽で、自分が泣いているのだと気づいた。

これが泣くということかと思った。

泣いたことなどなかったから、泣き方がわからなくて、どうしたって不格好になってしまう。けれども仕方がない。

泣いたことなど、ないのだ。

「豪快でけっこう。おいで、ツェイル」

サリヴァンのその腕に引き寄せられて、その胸に顔を埋めて、大きな声を上げてツェイルは泣いた。サリヴァンが、国主であるとか皇帝陛下であるとか、そんなことは関係なかった。

ただ、今は泣きたかった。

泣けたことが、たまらなく、嬉しかった。

06 : 隠れた心をすくうは。4 (前書き)

サリヴァン視点の、サリヴァンのお話です。

しばらく泣きやまず、涙が止まっても嗚咽が続き、顔がひどいことになったツエイルを、リリが朝の沐浴に誘った。気分をすっきりさせましよう、と言ったりりに、ツエイルは声もなくこくと頷き、ふたり仲良く手を繋いで寝室から出ていく。

サリヴァンは微笑みながらふたりを見送った。

「……ラク」

「なんですかあ」

サリヴァンの微笑みは、苦笑に変わる。

「ツアインを呼んでくれ」

「近衛隊長を？ なんでまた」

「犯人がツアインだからだ」

なんの、とは、ラクウイルは訊かなかった。

「やっぱ憶えてんですかい」

「いや。あの妹ばかりがしそうなことだろ、闇討ち」

「……まあ、確かに」

「姫はメルエイラ家の天恵者だ。夜襲に後れを取るとは考え難い。となれば、ツアインの仕業だとしか考えられないだろ」

「妹ばかもそこまで来たら気狂いですよね」

「そう言うな。ツアインの忠誠心は、そういうものだからな」

まいったね、と肩を竦めれば、ラクウィルも同じように肩を竦め、呆れた。

「ねえ、サリヴァン」

「ん」

「なんでルカイアが、メルエイラの姫を連れてきたか、わかってますか」

いつも喰えない笑みを浮かべているラクウィルが、このときは微妙な顔をしていた。笑っているわけでも、真剣なのでもなく、ただ真っ直ぐな瞳をサリヴァンに向けている。

サリヴァンはふっと息をつくとき、そんなラクウィルから視線を外し、窓から外を見るともなく眺めた。

春が近いから、外は緑に活気がある。

「やっぱりおれは、頼りないか」

「そういうことじゃないですけど」

「そういう、ことだろ……ツアインが差し向けただろう刺客を、ルカは、気づいていながら止めなかったんだから」

今朝は一度だけ現われて、サリヴァンに朝の挨拶をしたあと、夜襲についての謝罪をツェイルにしたルカイアは、それきりこの時間になっても再び来ることはなく、また政務についての文句を言いにくることもない。

「ルカイアの目的は、あなたを弑すことじゃないですよ。今回は姫

がいたから、あなたは己れの身も護った。姫を護らなければならぬ
いからです。けど、もし姫がいなかったら？ あなたはきつと、刺
客の好きにさせたでしょう。それがいやだから、ルカイアは近衛隊
長の好きにさせたんですよ」

「妹ばかりを手許において、その妹のそばにいれば、常に危険だから
か？ おれに危機感を持たせるために？」

はっ、とサリヴァンは空笑いする。

「無駄だよ。おれはどうでもいい」

「サリヴァン」

「国主となったときから、もう、どうでもいいんだ……おれは国の
ために在ればいい」

「サリヴァン！ だからルカイアは、姫を連れてきたんですよ」

「背後にメルエイラ家があるから？ それこそ、要らぬ世話だ。姫
を帰してやれ」

サリヴァンは寝台に転がりながら、しかし視線は窓の向こうに残
して、言葉を続ける。

「あんな、小さな身体で、笑うことや泣くことを抑えられて、その
天恵に振り回されて……このうえ、おれにまで振り回されたら、残
酷だろ」

「けれど、サリヴァン。あなたは、姫を泣かせましたよ」

「勘違いに腹が立ったただけだ」

そう、あれは本当に、腹が立っただけ。

天恵は神の恩寵。

けして、人を不幸にするものではないはずなのだ。

「でも、サリヴァン……あなた、姫のそばで三日も眠り続けたんですよ」

「そうらしいな。憶えてないが」

「憶えがないくらいに眠ったの、どれくらいぶりかわかっています?」

「さあな」

「五年です」

その数字に、サリヴァンはぴくりと眉を動かす。

「この五年、まともに眠らないあなたを見てきました」

「眠っていたさ。おまえがいるんだから」

「あそこまで起きないあなたを見たのは、五年ぶりでしたよ」

「……おまえ、なにやっただ」

それが気になって顔をしかめながらラクウイルを振り向いたら、ラクウイルは眉間に皺を寄せていた。

「おれが、というより、姫がやりました。もしおれがやったら、たぶんあなたは起きたでしょうからね」

ラクウイルではなくツェイルのすることならば、それほどひどいことはされていないだろう。身体が痛いのは眠り続けたせいであるし、それ以外で異常はない。

「なに、やった」

「さあ? 騒いでいる声は聞こえましたけど」

なにかされたか不安になるような言い方は、されたくないものだ。

「おれは、あなたを沐浴させたくらいで」

「やめる、あほ。放っておけ」

「おれとサリヴァンの仲じゃないですか」

「疑わしい関係があるような言い方をするな」

「汚いまんまで姫のそばにいたかったですか？」

「そ………」

言葉もない。いや、どう言葉を切り返せばいいのかわからない。

「ねえ、サリヴァン」

返事をしたくない。

したくなくて、そっぽを向いた。

「護るものがあるって、嬉しくないですか？」

答えたくない。

「護れる力があって、よかったと思いませんか？」

答えたくない。

「あのねえ、サリヴァン。おれは、はっきり言って、ルカイアの目論見なんてどうでもいいんですよ」

「………は？」

その意味はわからなくてうつかり視線をラクウィルに戻すと、ラクウィルはにんまりと不気味に笑っていた。

「今回はしてやられましたけどね」

どうやら悔しい思いをしたらしい。

「メルエイラ家の秘密には、おれも目をつけてたんですよ。というか、おれが調べたんですけどね。ルカイアに持ってかれて、腹あ立つてます」

「……おまえの目論見でもあるんじゃないか」
「まあ、ね」

ふん、と鼻で笑ったラクウィルは、相当ルカイアにしてやられたことに腹を立てているようである。

「実際は、まあ確かにルカイアじゃなきゃ、姫を連れて来れなかったでしょうよ。おれはただの侍従長ですからね」

「……騎士にしてやるうか？」
「いやですよ、面倒な」

「って、おまえが言うから、おまえは侍従長だと思っただが？」

「称号を使いたくないんですよ」

「……おれとしては、べつにどっちでも変わらないと思うが」

「変わります。おれの称号は皇帝に在るものじゃない。サリヴァンに在るものです」

勘違いしないでください、と唇を歪めたラクウィルに、苦笑がこぼれる。

「おまえ個人で、姫を連れてきたかったというわけか」

「そうですよ。ルカイアは侯爵の地位と、宰相閣下っていう立場で、姫を連れてきましたけどね」

「なににせよ余計なお世話だ」

妃は要らない。

娶るつもりはこれからもない。

「あのねえ、サリヴァン」

サリヴァンの意思に、ラクウィルはたびたび呆れたようなため息をついた。

「おれは、べつにルカイアの策に乗るわけじゃないですけど、今回のことについては、同意見なんですよ」

「なにがだ」

「後継者が欲しいわけじゃないんです」

その瞳が語るものに、サリヴァンは顔をしかめた。

「ルカは、世継ぎのことを言われなくなければ、姫を娶れと言ってきた」

「天恵者ですからね。そばに置く理由としては、それが妥当でしょう」

「世継ぎを産ませる必要はないと？」

「ま、言ってしまうば」

「姫に失礼だろう」

「建前ですよ、そんなの」

「なにが建前だ」

「すべてが」

「……は？」

どついう意味だと首を傾げれば、ラクウィルはいつもの喰えない笑みを浮かべた。

「国主として、姫を娶る必要はないんです」

「……なら、なんで連れてきた」

「サリヴァンの奥方にどうかと思って」

「は？」

さっぱり意味がわからない。

「天恵者っていうのは、あとづけです。だから、背後がメルエイラ家っていうのも、必然的にあとづけになんですよ。サリヴァンが姫に惚れるか惚れないか、実はそれだけの話だったりします」

「……おまえ、ふざけているのか？」

「いいえ、真面目ですよ」

ラクウィルは平気な顔で、大真面目な顔で、嘘を言うことがある。簡単に嘘を言えるから、常ににこにここと笑っている。

幼い頃からの仲だから、ラクウィルのそれがわかるだけに、サリヴァンはラクウィルの今の笑顔の真意を量りかねた。

「まあ、おれはあとづけに考えるだけで、ルカイアはそうじゃないですけどね。ばっちり背後まで考えて、ルカイアは動いてます」

「おまえ、それ言つてよかったのか？」

「いいんじゃないですか？ だって、おれに言わせるために、ルカイアは今ここにいないんでしょうし」

乳兄弟と幼馴染の考えていることが、いまいち掴めない。

「おれはおまえたちに遊ばれていると考えていいわけか」

「いやいや、遊んでるわけじゃないですよ。けっこう真面目です」

「真面目ならふざけた言い方はやめろ」

「真面目です。サリヴァンに幸せになつてもらいたいだけですもん」

その、突拍子もない言葉に、サリヴァンは顔を引き攣らせた。

「姫を攫うように連れてきて、軟禁紛いなことまでして、それどころが真面目だ。なにがおれの幸せだ」

「……サリヴァン」

ふと、ラクウィルは苦笑した。

「姫は言ったそうですね」

「ああ？」

「あなたは本当に皇帝陛下ですか、と。あなたは誰ですか、と」

それは、初めて言葉を交わしたときの、ツェイルの発言だ。

「あなたは、サリヴァンだ、と答えた。姫にそう答えたのなら、そう答えさせた姫に、おれは感謝しますよ」

なにも言えなかった。

ラクウィルは座っていた椅子立ち上がり、視線を逸らして沈黙したサリヴァンの頭をぼんぼんと撫でると、人の気配が集まり出した隣室の居間に消えた。

少しして、ラクウィルとリリの声に、ツェイルの声が交る。沐浴を終えたにしては早い朝ということもあって、手短に済ませたきたのだろう。

少女とも少年もと取れるツェイルの、その姿を脳裏に思い描いて、サリヴァンは嘆息する。

「おまえの目には、おれが、わかるのか……」

どんなに隠しても、隠しきれないもの。
きつと、ツエイルには、見えたに違いない。

「……うく」

もう痛むはずもない、傷が疼いた。
痛みに顔をしかめ、その部分を抑えて、身体を丸める。

「こんなもの……っ」

要らなかったのに。
言葉は、声にならなかった。

泣くというのは、とても疲れるのだと知った。体力をひどく消耗するのだと知った。

心を、思い切り曝し出すのだと、知った。

ひどい倦怠感と爽快な気分、どちらも味わった泣くという経験は、ツェイルのなにかを変えた。

夜襲され大泣きした日から二日。

後宮の端にあった居室から移動した先は、それまでの居室から見えた光景と変わりなく、露台の向こうには森のような強い緑が見える。違うのは、構造と広さ、そして住人である。

「リリ、茶」

午後も中頃、体調が万全になったらしいサリヴァンが、当然のごとくりりにお茶を頼む。そして当然のように、ツェイルの向かいの長椅子に腰かける。

「……、どうした？」

「いえ……」

この二日、ツェイルのそばにはサリヴァンがいた。政務で部屋を開ける以外、ほとんどその身をツェイルのそばに置いている。

ただし、なにかするわけではない。

ツェイルは立場上、一緒にいるという形にはなっているが、なぜサリヴァンがいるのだろうと思うくらいで、いつものように本から視線を外すことはないし、掃除をするリリに邪魔にされて部屋の隅でリリを眺めていたりする。サリヴァンは、そんなツェイルを見るときもなく眺めていたり、目を閉じて転寝してみたり、手許に書類を持ってきて仕事をしていたりする。

つまるところ、ツェイルとサリヴァンには特に会話がなかった。

それが気まずければ問題があるのだろうけれども、その気まずさも感じないくらいにふつうに互いを認識しているから、困ったものだ。

「おまえ、教師をつけられてないのか」

「……、はい？」

今日ものんびり本を手に読んでいたら、運ばれてきた茶を飲みながら、サリヴァンに話しかけられた。

「教師だ。ルカにつけられなかったのか」

「ここに来た初日にいろいろと質問されて、答えましたら、教師はいりませんね、と」

「生粋の貴族ではなくとも、作法は学んだか」

「得意ではありませんが、一通り。父がそこだけは厳しかったもので」

貴族特有の礼儀作法は、生粋の貴族ではないからこそ、厳しく躰けられた。しかしながら、付け焼刃であることには変わりないので、厳しかったとはいっても、猫被りする厳しさを教えられただけである。よく見れば至るところに襷褌がある。

特にツェイルは、完全なる猫被りだ。本来は部屋に引き籠もるのではなく、外で元気に走り回るか兄や弟と剣術に勤しむか、とにかく一日中身体を動かしているほうが好きなので、ここでの生活は正直きつい。リリの好意で服装が自由なところだけが、救いだった。

「……おれの前で、貴族の礼を取る必要はないぞ」

なにを思ったのか苦笑したサリヴァンにそう言われ、猫被りがばれた気がした。

「貴族の令嬢は、侍女に怒られて部屋の隅に逃げない。本を読むとき、椅子に両足を置かない」

「あ……」

「服装はもちろん礼装ドレスが基本であるし、いくら貧乏な貴族でも子女は下衣を穿かないものだ」

ツェイルは、自分が規格外の娘であることをわかっている。貧相な身体つきが天恵の代償ゆえのことであっても、それに似合った性格をしていると自負しているので、困ったことになったことがない。

しかし、今は困った。

サリヴァンがふつうにそばにいるものだから、うっかりふつうに過ごしていたのである。それにリリもふつうだったせいで、掃除を始めたときには手伝おうとしていつものように怒られ、いつものように部屋の隅に逃げた。あまりにもいつも通りに過ごしていた。

「今さら両足を椅子から下ろしても無駄だぞ」

ぎく、と身体が強張る。こっそり椅子から両足を下ろそうと思っただのに、先に言われた。

「おれに緊張するということがないらしいな、姫は」

「多少は、緊張して、いるのですが」

「そのわりには、自由だな？」

「……どれが不敬にあたるのか、実はよくわからないもので」

「おれが怒ったときに不敬だと思えばいい」

「それでは遅いかと」

「なら、おまえの心がけ次第だな。自分でこれは不敬だと思わない限り、それは不敬にならない」

いいことを言う。

なんて自分勝手な納得方法だ。

「……不敬ではないと、おっしゃるのなら」

「ん？」

「わたしを、妃候補から外してください」

この二日、考えていたことがある。

ヴァリアス帝国は、男尊女卑ではない。すべてがそうではないが、実力主義的などころがある。男女問わず、力にものを言わせることができる場合すらある。おそらくは天恵が、男女関係なく同率で出ることが関係しているのだろう。帝国騎士団、帝国術師団、どちらにも男女が同比率で在籍している。ただ、それぞれ心持ちが違うので、女性にそれらしさを求め、男性にそれらしさを求めるのは、個人の自由だ。

ツェイルが、自分が規格外の娘だとわかっていても平然としていられるのは、この国の風習のおかげだった。

だから、思うのである。

「騎士に、なろうと思つのです。陛下の騎士に」

「……おまえの場合、術師のほうだと思つが」

「どちらでもかまいません。わたしを妃候補から外し、騎士にしてください」

ルカイアに求められたメルエイラ家の力。

ツェイルが妃候補とされたのは、ツェイルが女だからという理由だろう。兄が近衛騎士団にいても、ツェイルもその天恵を持つているわけだから、そばに置く措置として妃は妥当だ。サリヴァンは未だ婚姻どころか、側室すらいないため、そういう形になってしまったのかもしれない。

「……おれは、求めるつもりはないと、言ったはずだが？」

「自ら差し出すのなら、それは求められたことになりません」

「必要ない」

ばつさりと切られた。

しかし、めげてなどいられない。

サリヴァンがなにを言おうが、なにを思つおうが、ツェイルは家族を護りたい。サリヴァンの言葉や命令は絶対であるうけれども、同じくらいルカイアの言葉も絶対であるうとツェイルは思つのだ。

皇帝であるサリヴァンよりも、ルカイアのほうが恐ろしい。

そう思つのは、きっと、ルカイアのあの強い瞳を見たせいだろう。ツェイルが家族を強く想うのと同じくらい、ルカイアはサリヴァンを強く想っている。己れがそうであるから、ルカイアの気持ちが変わらなくないのだ。

「わたしを、騎士にしてください。陛下を、この国を、護らせてください」

「おまえ……」

サリヴァンはうんざりとしたように、その綺麗な顔を少し歪めた。

「ルカに攫われるようにして連れて来られたくせに、なんで自分を売り込み始めるかな」

「護りたいからです」

家族を。

郷里となつたこの国を。

「わたしには、護りたいものを、護れる力がある」

それを教えてくれた、サリヴァンを、護りたいと思う。

「天恵を使わずにいられるなら、それに越したことはありません。けれど、使えるものなら、使わなければ」

「おまえの代償は重い。国の犠牲になるな」

「陛下も、国の犠牲になつておられる」

サリヴァンの目が、細められた。睨んでいるとも取れたが、ツエイルは怯まなかった。

「わたしの天恵は、代償を支払わなければならないものです。けれど、だからといって、代償を支払っているのに使わないなんて、損をします。使わせてもらわなければ」

「……そういう考え方もあるだろうな」

「陛下は、おっしゃいました。ラーレに広がり散らばりし天恵に、忌避すべきものなどないと。わたしは自分の天恵が嫌いです。要らないと思っていました。けれど、この天恵がメルエイラ家を護つて

きたのも確か、わたしが家族を護れるのも、確かなのです」

久しぶりに長く喋った。身体を動かすのは好きでも、声を出し続ける、或いは会話するというのがあまり得意ではないツェイルにしては、頑張ったほうだ。

だから、もう少し頑張る。

「護りたいものを、護れる力がある。陛下はそれを、気づかせてくださりました。だから、使えるところに行きたいと思います。わたしを陛下の騎士にしてください」

珍しく咽喉を酷使したせいか、咽喉が渴く。それともこの咽喉の渴きは、サリヴァンの返事にどぎまぎしているからなのか。

ふと、サリヴァンはツェイルから視線を外した。深々とため息をつけて、椅子に深く埋もれる。

「……夜襲のことだな」

「はい？」

「この前の、夜襲だ」

眠り続けたサリヴァンが、突如として起きて寝ぼけたまま刺客を退けた、あのときの話をするつもりらしい。

いきなりなんだろうと、ツェイルは首を傾げた。

「どうか、しましたか？」

「ツァインの仕業だ」

「……え？」

聞き間違いだろうか。今、サリヴァンは兄の名を口にした。

「ツアインが、おまえを連れ戻すために、一族の者をあそこに忍び込ませたんだ」

聞き間違いなどではなかった。

ツェイルは瞬間的に蒼褪め、瞠目した。

「兄が……まさか」

「おれは、ツアインならやりかねないと思っている。だから特に不思議には思わないし、ツアインが裏切りを働いたとも思っていない」

「しかし……っ」

「ルカがやらせたようなものだ」

「……ルカさま、が？」

なぜそこでルカイアが出ているのか、ツェイルは震えそうになる身体を、拳を強く握ることで耐えた。

「ルカの目的は、はっきり言って、おれにはよくわからない。だが、ルカが裏切らないことだけは、わかっている。もともと、おれとルカは互いに利害が一致しているだけの、そういう関係だからな」

その、サリヴァンの言い方は、ルカイアの想いを一切無視しているようで、しかしよくわからない表現だった。

「今回の夜襲、罪を問われるのはルカであって、ツアインではない。よって、ツアインはとりあえず、自宅謹慎にしている。投獄させた刺客はメルエイラ家の者ゆえ、治療したうえで送り返してやった」

ホッとすればいいのか、焦燥すればいいのか、迷ったせいか余計

な言葉が耳に入った。

「治療……送り返し？」

夜襲の犯人は血だらけで、サリヴァンは返り血を浴びていたはずであるが。

「おれは剣が使えないんだ」

「は……」

「戦場において、おれほど役に立たない剣士はいないくらいに、使えない。いくら斬れ味のいい剣でも、おれが持てばなまくらになるぞ」

言葉もなかった。

あっさりしたサリヴァンの言い方のせいもあるが、それを語る瞳にも、ツェイルから言葉を失わせるだけのものがあつた。

サリヴァンの瞳は、自分の命を投げ出していた。

「まあ、おれが剣を使えないことは、どうでもいい。とにかく、そういうことだ」

肩を竦めたサリヴァンを、ツェイルは見つめた。

護らなければならない。

この人は、護らなければならない。

「へいか……」

「ん？」

護らなければ、消えてしまう。
護らなければ。

強いその想いに駆られ、ツェイルは唇を震わせる。
兄がしたことを謝罪し、処分を受けなければと思うのに、そちらの想いのほうが強くて、上手い言葉が出てこない。

「わたしを、騎士に、してください」
「……まだ言うか」

サリヴァンが呆れたため息をつく。

「なんのために夜襲の件を報告したか、意味がないな。ツァインは、おそらくはルカの黙認をわかっている。だが、だからとて、それを利用してわけではないだろう。つまりは、それくらいおまえを想って、連れ戻したかったんだ。兄の気持ちを汲め、妹」

「冗談なのか本気なのかわからない兄は、ことあるごとにツェイルを妻にしたがる。僕のお嫁さんになるんだよね、と、幼い頃から言われ続けてきた。だから、兄の極度な愛情はわかっている。夜襲を仕掛ける理由になる可能性だって、大いにあり得る。」

しかし、たとえ兄がメルエイラ家の者を迎えにやっただけだとしても、それは夜襲で、刺客で、サリヴァンの命を脅かしたものだ。

「下手をすれば陛下は命を奪われていたのかもしれないのに、なぜそんなことが言えるのですか」

「死んだらそのときだ。臣民の総意であるとしか思わない」

なんて人だ。

「陛下とて、ひとりの人間でしょう！」

国主は国の護り人、皇帝陛下は国の象徴。国のために在り続けることは、なんら不思議ではない。

けれどもサリヴァンは、あまりにも己れのことを軽んじ過ぎている。

「おれは死ぬ。だが、皇帝は死なない。生き続ける」

「今の皇帝は陛下です。今の話をしているのです」

まるで自分をも道具みたいに言うサリヴァンに、腹が立った。ツエイル自身も道具として見るとサリヴァンに言っておきながら、矛盾しているかもしれないけれども、サリヴァンにそれを言われるのはなぜか、とても腹が立つことだった。

睨むように見つめると、サリヴァンは深々とため息をついた。

「……おまえには、おれが見えるだろう」

「なんのことですか」

「おまえが言ったんだ。おれが、本当に皇帝陛下かと」

ハッと、ツエイルは初対面のときの、自分が吐いた失礼な言葉を思い出す。

「あのときは……失礼いたしました。無礼なことであつたと、自覚しております」

「違う」

「……はい？」

「そのうち、おまえもわかる」

サリヴァンは目を伏せると、冷めたであろうお茶を一飲みし、それ以上の言葉を紡ぐことなく立ち上がると、椅子を離れた。

ツェイルはサリヴァンの言葉を噛み砕いて解釈することに手いっぱい、サリヴァンが部屋を立ち去ろうとしているのに気づけなかった。ハツとして顔をあげたとき、目の前からサリヴァンの姿が消えていて、驚いて視線を彷徨わせ、その姿を扉の前に見つけて呼びとめる。

「陛下！」

「……時間に猶予をやる。よく考える。それでもまだ騎士になりたいと言っなら、ルカに言え。言っておくが、今この時点でおまえが帰らねば、おまえは後悔することになるぞ」

振り向かずに言ったサリヴァンに、ツェイルはそれだけは変わらない心を伝える。

「騎士になると決めたことに、後悔はありません」

「……どうかな」

はっ、とサリヴァンは嗤う。

「騎士になれたとき、それは皇帝の妃という名の騎士だぞ」

「いいえ。わたしは、あなたの騎士になるのです」

「……まあ、おまえがその気なら、この婚姻は成立するだろうな」
「婚姻？」

ちらりと、サリヴァンはその透明な瞳だけ、ツェイルに振り向かせた。

サリヴァンは笑ってなどいなかった。

冷たく、ひどく寒々しい眼差しをしていた。

「議会がおまえを承認した。おれの力は、これで効力を失う」

「……、はい？」

「帰れ。おれの力は、今日までの効力だ」

ツェイルが理解し終える前に、サリヴァンはさっさと部屋から出て行った。

ツェイルは呆然とし、けれども一つだけ、理解した。

「帰れと、言われても……どうやって帰れと」

ツアインが迎えに来られる状況でもなしに、ツェイルを連れてきた本人であるルカイアにも、それはできまい。

帰れと言われても、帰れない。

それに、自分から出ていくことは、したくもない。

ツェイルは、サリヴァンを護りたいと思った。護らねば、人として危うく儂げなその人は、本当の意味で壊れてしまっだろう。

護らねばと、強く思ったその心。

ツェイルは自ら、サリヴァンにその身を捧げようと、メルエイラ家の天恵を差し出そうと、思った。

きつと、サリヴァンだから、そう思った。

サリヴァンが去ってから数刻、小難しい顔をしたルカイアが部屋に訪れた。そろそろ眠る時間であったので、ツェイルは寝間着に着替えようと思っていたときだった。

「陛下は今日も、いらっしやっただようですね」

「はい」

「なにかお聞きしたのでは？ たたとえば、帰れ、とか」

やはりそのことで来たのかと、ツェイルは落ち着いてルカイアと対峙した。

サリヴァンが部屋を去ってから、サリヴァンが残した言葉を一つずつ考えてみたのだが、理解できたのは少しだけだった。

まず、兄が夜襲の犯人であり、けしかけたのがルカイアであること。兄はルカイアが黙認するとわかっていて、またルカイアも兄が行動にできることを黙認して、行動に出たこと。兄の気持ちを汲み、ルカイアがなにを言おうと、帰るべきであること。

サリヴァンが、己れを軽んじ、命を投げ出していること。

どうやら今帰らねば、後悔するようなことが起きるらしいこと。

わかったのはそれくらいで、サリヴァンの細かな動作、表情の一つ一つは、理解できないものが多かった。

「帰れと、言われました」

「……その時点で、わたしを呼ばなかった理由はなんでしょう」

ツェイルはじっと、真っ直ぐ、ルカイアを見つめた。

「あなたが、そう易々と、帰してくれるとは思えません」

言えば、ルカイアはゆったりと笑った。

「よく、おわかりで」

その笑みに、ツェイルは不気味さと似た、けれどもひどく強い想いを感じた。

「陛下……いえ、サリヴァンさまには、メルエイラ家の者を娶ってもらわねばなりません。そこにどんな感情があるのが、関係なく。ですから、あなたを帰すことは承伏しかねます。それに、あなたにはサリヴァンさまのことに手を尽くしてもらわねばなりませんから、心配であるうメルエイラ家の方々を、わたしが護らせていただくです」

ああ、やはり。

ツェイルは、ルカイアに家族を盾に取られた。言葉を綺麗にしても、それはツェイルにとって脅迫だ。拷問に近い。

「どうして……メルエイラ家なのです」

「それは、天恵者という理由以外で、ということですか？ それなら簡単です。サリヴァンさまに必要なのは、メルエイラ家だからです」

「だから、なぜメルエイラ家なのかと」

「それしか言いようがありません。サリヴァンさまには、必要なの

です」

理由になっていない。それなのに、ルカイアはそれ以外の理由はないと言う。

「陛下は、望まれていないのに」

「関係ありません。言いましたでしょう、自分勝手だ、と」

「……そうですね。ルカさまの、身勝手です」

けれど、そこにある想いは、たぶんきつと、ツェイルと同じなのだ。

「わたしはあなたをメルエイラ家に帰すつもりはありません。もし帰るおつもりでわたしを呼んだのなら、忘れたふりをしているところでした。ですが、あなたはこの時間まで、わたしが自ら足を運ぶまで、帰ろうとも逃げようともなさらない。わたしはその理由を訊きたいのです」

「……それが狙いだったのでしょうか、とお訊きしてよろしいですか」「よくわかりで」

ルカイアは笑みを深めた。

「あなたなら、サリヴァンさまのそれが、おわかりになると思いましてね」

「わからなかったら、どうするつもりだったのです」

「そのときは、そのとき。叛旗の疑いありと、メルエイラ家を取り潰すだけです」

思わず、その言葉にゾツとした。

やはりルカイアには逆らえない。下手をして家族を危険に曝して

しまつては、ツェイルがここにいる理由もない。なんのためにここにいるのか、その理由を失ってしまう。

ツェイルにとつての生きる意味が、潰えてしまう。

それに、ルカイアのこの笑みに隠されたものは、たくさんあり過ぎる。

「……そこまで、メルエイラ家の力が、必要なのですか」

「もちろん。これでも、メルエイラ家の事情は考えていますよ。テューリさまは婚姻が決まつておられますし、シュネイさまはまだ幼い。婚約者がおらず、また婚姻の話も持ち込まれないあなたを、わたしは選びました。天恵者であつたことは、偶然ですかね」

胡散臭い言い方だつた。白々しいと思つた。けれども、思つただけで、言葉遊びをしているのだろつるルカイアに、なにも言えなかつた。

「わたしは、騎士になりたいと、陛下に言いました。けれども、受け入れてもくれませんか」

「あなたに女性の魅力で誘惑しろとは言いませんよ」

「ではどうしろと？ わたしにあるのは、天恵だけです。差し出せるものも、天恵とこの身のみ。受け入れてもくれない陛下に、どうやってわたしが嫁ぐのです」

「議会が承認しました。明日からあなたは妃候補ではなく、婚約者です」

「……婚約者？」

いつのまに、と思う。確かにサリヴァンも、議会がどうこうと言つてはいたが。

「サリヴァンさまはかなりご健闘なさりましたが、議会の承認を覆

すには、猊下の一声がなければならぬ。しかし、猊下はなにもおっしやらない。猊下も承認なされたことを、サリヴァンさまがおひとりで覆すことは不可能です。尤も、サリヴァンさまは猊下に逆らうことなどできませんから、猊下がなにもおっしやらなかった時点で、議会の承認は取れたも同然でしたが」

「……猊下とは、どなたのことですか？ 祭神殿の神官長さまのことですか？」

サリヴァンもルカイアも、ことあるごとに「猊下」と誰かのことを出す。誰のことを言っているのか、ツェイルにはさっぱりわからない。

「この国では、猊下とお呼びするお方は、おひとりしかおられません」

「神官長さまではないと？」

「神官長よりも偉大です。古の王、聖王と呼ばれているお方のことを、われわれは猊下とお呼びするのです」

聖王。せいおう

それはお伽噺に出てくる、神々の長、天の王のことだ。子どもでもそのお伽噺を、伝説を知っている。幼い頃にその話を必ず聞いて育つので、ツェイルも知っていた。

しかし、お伽噺で伝説の聖王が、実在するとは誰も聞かない。

「おられる、のですか」

「この世にそのお姿を見せられた、と言ったはずですが？」

「ですが……お伽噺だと」

「長らくお姿がありませんでしたからね。もともと、人前に出てこられるお方でもありませんし、神ですから」

神がいる。

天恵は神の恩寵であるから、この国では神の实在が信じられているが、ツエイルは信じていなかった。天恵など要らなかつたと思つたことがあるくらいなので、一時期は恨んだことすらあるからだ。

「サリヴァンさまのおそばにいれば、あなたもそのうちお逢いする機会がありますよ」

「わたし、などが……」

逢えようもない。ツエイルは神を信じていないのだ。恨んでしまふのは疲れるから、信じないことにしているのだ。

「あなたは明日からサリヴァンさまの婚約者、一度は猊下にお逢いせねばなりませんよ。あとの話は追々いたしましょう。或いはサリヴァンさまからお聞きください。今はとにかく、婚約なされたことをお喜び申し上げます」

につこりと、白々しく祝辞を述べるルカイアに、ツエイルは呆然とした。

なんだか、ここに来て驚かせられることばかりで、どれから片づけていけばいいのかわからないほどに、情報を詰め込まれている気がする。まるでルカイアが、ツエイルを深みにはめて戻れなくさせているかのようで、その罠にツエイルは美事はめられたようなものだ。

今さら、引き返すことなど、できないのではなからうか。
帰ることなど、できないのではなからうか。

それに、ルカイアはなにか、まだツェイルに伝えていないものがある気がしてならない。隠しているかのようなそれを、ツェイルは知らなければならぬものだと感じる。

帰ればよかったと、思ってももう遅い。

ツェイルはルカイアの策に乗せられてしまった。

帰りたい。

兄や姉、弟や妹に逢いたい。

あの頃の日常に、戻りたい。

その言葉は、声にならなかつた。

婚約者となつたわりには平凡だな、とツェイルは露台に出した椅子に座つて森を眺めながら、ぽつりと思つた。

あの日、翌日からサリヴァンは来ない。ラクウィルが満面の笑顔で「おめでとうございます」とだけ言いに来たが、ルカイアも来ない。ちなみにリリの態度は相変わらずである。

変わったところがない。

騎士になると申し出たのだが、その件がどうなったのかもあやふやである。

「……………こついつ、もやもやしたときは、剣を振るか、走りたいのだがなあ」

「えっ？」

「……………ん？」

ひとり言を呟いたら、後ろにいたらしいリリが、なぜか驚いた声を上げた。明るい茶色の瞳が落ちてしまいそうである。

「ツェイルさま……………あの、今の、ツェイルさまですか？」

なんのことだ、とツェイルは訝しげに首を傾げる。

「ひとり言だが、なにか？」

「ツェイルさまっ？」

「リリ？」

なにをそんなに驚いているのだと、疑問に思っただと、自分で答えを見つけた。

「あ」

すっかり、ふだんの口調に戻っていた。

「すまん。これがいつもの口調だ」

「は……」

「兄がちやらんぼらんで、弟がすっかり者ゆえ、口調がおかしく……気づいたらこうなっていた」

「そっ……そこは姉上さまと妹さまを真似るところでしょう！」

「む……ふだん、兄と弟とばかり、遊んでいたゆえ」

姉と絡むと女性らしくないと怒鳴られ、妹には嘆かれるため、あまりそばにいないようにしていたせいで、ツェイルの口調は必然的に女性らしさから遠のいている。

後宮に来た緊張感から口調だけは丁寧さに拘っていたのだが、その拘りも滞在日数が忘れさせてしまったらしい。

「はあ……これではテューリさまが嘆かれるもの、わかるというものです」

「姉をご存知か」

「ええ、まあ。今ツェイルさまがお召しの衣装は、テューリさまからのものです」

「……姉さまの？」

それは驚きというよりも、意外だった。

「正確には、テューリさまから助言をいただきました。少しでもツエイルさまのお心が軽くなるようにと、ルカイアさまにお手紙をしたためられたようでございます」

それでこの格好が認められている、というか黙認ではあるが、とにかく衣装に関しては自由を許されているらしい。

「……姉さまは、お元気だろうか」

「ご病気であるとは聞きません。ツエイルさまを心配なさっておりますが、健やかに過ごしているようでございます」

「そう……か」

それなら、よいのだけでも。

「兄さまは……」

兄のほうは、自宅謹慎になったと聞いているが、どうなっているのだろう。

「ツアインなら昨日から職場復帰している」

ハッと、その声に顔を上げる。リリがきょとんと露台の後ろ、つまりツエイルのさらに向こうを見つめ、そうして慌てて礼を取った。

「……陛下？」

数日ぶりサリヴァンが、なぜか森のほうから姿を見せた。側面に

はラクウィル、ルカイア、そして見知らぬ大柄な騎士がいる。

「まだいるのか、おまえ」

いつか聞いた言葉だ。

「わたしはここにいると申し上げました」

同じように返すと、サリヴァンは面白くなさそうに顔を歪めた。

「おれがこっちから現われたのに、なんで驚かない」

「不思議なところからお出でだとは、思いますが」

それに、サリヴァンの登場はいつも唐突だ。驚く暇もなければ、どう驚いたらいいのかもわからない。

それだけだ。

「ツェイル」

「……、はい」

名を呼ばれて、ちょっとドキツとしてしまう。それに首を傾げながら、ツェイルはサリヴァンに呼ばれて椅子から立ち上がった。

「こっちに来い」

「はい？」

「降りて来いと言っている」

なんだろう。疑問に思いながら、ツェイルは言われたとおり露台を、ちゃんと階段を使って降りると、サリヴァンのところまで二歩行き、立ち止まって礼をする。

「なんででしょう?」

「剣の相手をしる」

「……剣?」

なにをと思う前に、サリヴァンに剣を渡される。騎士の訓練用のもので、ツェイルの手にも馴染んだ懐かしい重みである。

「へ、陛下! ツェイルさまは女の子ですよ!」

「リンレイ・ラッセ」

「はい!」

「おまえはこれの?」

「侍女です!」

「この毎日は、どういうものだった?」

「そつ……それは」

「なら、黙れ」

「……申し訳ありませんでした」

リリがサリヴァンに窘められるのを、ツェイルは「リリの名前はリンレイ・ラッセというのか」などと、暢気に受け止める。サリヴァンが本気でリリを怒っているわけではないとわかってはいるが、またリリもサリヴァンが本気で怒っているわけではないとわかってはいるような、そんな会話だったからだ。

「……あの、剣の相手は、どなたですか?」

「おれだ」

「陛下が?」

使えない、と自ら言っていたが。そもそも皇帝陛下自らが相手とは、恐れ多い。

ツェイルが戸惑っていると、その間にサリヴァンは肩にかけていた外套を外し、上着を脱ぎ、身軽になっていく。ルカイアから、ツェイルに渡した剣と同じものを受け取ると、ツェイルから距離を取った。

「かかって来い」

「……いきなりですね」

まあ、身体を動かすのも剣を揮うのも、嫌いではない。むしろ身体を動かせるなら喜んで動かすので、それが剣の鍛錬なら大歓迎だ。

「わたしを、騎士にしてくれるのでしょうか」

問いながら、ツェイルもサリヴァンとの距離を量る。

「今やおまえはおれの婚約者だ」

剣は、どちらにも構えない。ツェイルはちょうどいい距離を取るまでうろつろと動き、この距離かなと、足をピタリと止める。

「それと、騎士になることと、関係はありません」

騎士の剣には型がある。ツェイルはその型と、メルエイラ家特有の型、どちらも使うので、サリヴァンの型に合わせようと身体をしっかりと対峙させて様子を見た。

「ラクと似たような考えだな、おまえ」

言った瞬間、サリヴァンは騎士の形を取り、鞘を抜き、突進してくる。

とても素早い動きだ。

ぎいん、と剣の交り合う鈍い音が響く。

腕にかかる負担を、その力を利用して横に往^いなし、今度はツエイルから斬り込む。

二合めはツエイルからだだったが、サリヴァンは軽々と受け止め、同じように横に往なされた。そのいなされた反動を使ってツエイルは身体を回転させ、横一線に三合めの斬り込みにかかるが、これもまた受け止められ、往なされる。四合め、五合めもツエイルから、左右から斬り込んだが、サリヴァンはそれを上手く横に往なして、剣を避けた。

六合めも簡単に往なされたところで、ツエイルは距離を取る。斬りかかってくると予測して油断を誘ったのが、サリヴァンは動かなかった。

「ルウ、交代してくれ」

え、とツエイルは瞠目する。剣を交わして、数分も経っていない。

「ツエイル、悪いが相手を変える」

「それはかまいませんが……」

「帝国騎士団総隊長の、ルーディ・ウルフェイだ」

サリヴァンは、大柄な騎士を「ルウ」と再び呼び、ツエイルに紹介する。ルーディは騎士の礼をツエイルに取ると、サリヴァンに駆け寄った。ラクウイルも駆け寄って行く。

「悪い、手が外れない。解いてくれ」

「姫の剣は重かったですか」

「重かった」

サリヴァンは、なぜか剣を握った手を、ラクウィルに解かれていた。指を一本一本解き、地面に落ちかけた剣をルーデイが拾う。

「わたしが相手をせんでも、これを見れば充分だが」

「そう言わず、ツエイルの相手をしてくれ。おれでは無理だ」

「あまり気は進まんのだがなあ」

「今のでその腕がわかったなら、相手をしてやれ」

「ふむ……承知」

ツエイルに背を向けていた大柄な騎士は、よろしくお願いするとツエイルに頭を下げた。慌ててツエイルも礼を取る。

今度は、騎士団総隊長が相手であるらしい。

「どうぞ姫から」

「は、はあ……でも、よろしいのです？」

「かまいません。さ、どうぞ」

よくわからないが、身体を動かせるならいいかと、ツエイルは遠慮なくルーデイに突進する。そのときにはサリヴァンとラクウィルがそこから離れていたの、巻き込む心配もなかった。

ルーデイに止められるまで、剣は交わされた。

サリヴァンのときとは違う剣の交わり合いに、ツエイルは肩で息をしている。ルーデイは大柄なのに俊敏で、しかも体力もあって、小柄なツエイルには有利なところもあつたけれども不利なところもあり、久しぶりともなれば振り回されても仕方ない。ルーデイがよい頃合いで止めてくれなければ、具合を悪くさせていただろう。それくらい、ルーデイとの鍛錬はツエイルを没頭させるものだった。

「ここまで、ですな」

その声にハツとし、とたんに足が崩れたので、はらはらと見守っていたらしいリリが駆け寄ってきた。

「お水です、ツェイルさま」

「あ、あり……がと」

「だいじょうぶですか？」

「うん、だい、じょぶ……久しぶり、だった、から」

リリが持つてきてくれた水を一気飲みし、その冷たさにホツと息をつく。本当なら疲れてもいきなり座り込みはしないのだが、疲れ過ぎてその余裕もなかった。

「ツェイル」

呼ばれて、顔を上げる。サリヴァンが近くまで来ていた。

「ルウとは、どうだった？」

ツェイルの前に屈んだサリヴァンに、ツェイルはこくと頷く。

「楽しかった、です」

「そうか……」

ふんわりと笑ったサリヴァンに、それは初めて見るサリヴァンの優しい笑みで、ツェイルはドキツとする。

この高鳴りはなんだと、慌てて俯いてふと、屈んだサリヴァンの、その手が震えていることに気づいた。剣を握っていたほうの手だ。

「どう、なされたの、ですか」

「ん？」

「手が……」

「……ああ、これか。気にするな」

小刻みに震えている手は、ツエイルの眉間に皺を寄せる。そつとサリヴァンのその手を取ると、ひどく冷たくなっていた。

「ツエイル？」

「……冷たい」

「おれは体温が低いからな……どうした？」

違う。

これは、体温が低いという理由だけではない。

「リリ、お湯を。飲みものも、暖かいものを」

「……おい、ツエイル」

「陛下、このようなところで、申し訳ありません。立てないもので」

「……運んでやるが」

「陛下のお手を煩わせるなど……それに、この手にもう、負担をかけたくありません」

ツエイルはその冷たい手を、きつと痛むであろう腕を、ゆっくりと擦って撫ぜた。

ラクウィルヤルカイア、ルーディは黙って、それを見守っていた。

「……よく、気づいたな」

「怪我を？」

「昔な。こう、肩から肘にかけて、ばっさり」

肩から肘まで、とサリヴァンが反対側の手でそれを辿る。ツェイルは蒼褪めた。

「斬られたと？」

にこ、とサリヴァンは笑った。

笑っていられることではないだろうに、なぜこの人は笑ってしまったのだろうと、ツェイルは唇を歪める。

この人の過去に、いつたいなにがあったというのか。

凡々と皇帝陛下となったわけではないだろうことが、この小刻みに震える手から伝わってくる。

「……だから、剣は使えないと」

「まず握れない」

サリヴァンは笑って肩を竦める。

「握れても、この通りだ。ツェイルほどの腕前だと、瞬間的な一撃しか望めない。それで仕留められなかったら、終わりだ」

確かに、サリヴァンの一撃は素早くて、さすがのツェイルもその動きについて行くには難しかった。交わしても上手く往なされて、重要な一手にはなかなか持ち込めなかった。

「わたしに、勝つおつもりでしたか」

「いや」

「では？」

「おまえと剣を交わしてみたかった」

「……わたしと？」

「ああ。おれも、楽しかった」

あれだけで、と思う。

あれだけで、本当にサリヴァンは楽しかったと、言えるのだろうか。

けれども、その笑顔に嘘はなく、いつのまにかツェイルと向かい合って座りながら、ツェイルが擦って撫ぜる腕を見つめていた。

「おまえの手は、暖かいな」

「……子どもだと、おっしゃりたいのですか」

「ん？ ああ、そうか。子どもは体温が高いものな」

はは、と笑ったサリヴァンは、本当に楽しそうだった。なにが随分とご機嫌だが、なにかいいことでもあったのだろうか、ツェイルは首を傾げる。

「ツェイルさま、お湯をお持ちしました。そちらにお運びすればよろしいですか？」

ちょうどリリがお湯を運んできてくれたので、ツェイルはそれを自分のところに移動させてもらった。

「立てないもので」

「おれが運ぶぞ」

「そのようなこと、陛下にさせられません」

「ラクヤルカがいる」

「遠慮します。この体勢でお許しください」

断固としてその場を譲らないツェイルは、サリヴァンのほかにラクウイルやルーディを苦笑させつつも、自分でもたまにしていたよ

うに、サリヴァンの小刻みに震えた腕をお湯で洗いながら、凝りを解した。

濡れた腕を綺麗に拭き取って、少し熱を冷まして、冷却作用がある薬を万遍なく塗り、包帯を巻く。

「きちんと、お医者さまに、お見せください。わたしの処置は、しよせん応急処置ですから」

「いや、これでいいさ。楽になった。礼を言う」

ありがとう、と言われながら、なぜか頭をぐりぐりと撫ぜられる。まるで子供扱いのそれに、少しの照れと、少しの喜びがあったことは、理由がわからなかったのでひたすら隠した。

「部屋を出て歩いて、いいぞ」

「はい？」

「今まで息苦しい思いをさせた。部屋を出て、その庭を散策したり、剣の稽古をしたり、城から出すことはできないが、それくらいならいい」

そういえば、軟禁状態にあったのだった、とこのとき思い出した。

「……ですが、わたしは」

「今や婚約者だ。好きにしる。ただ、家族にはまだ逢わせてやれない。おれが忙しいからな」

少しの自由だ、とサリヴァンは苦笑しながら言った。

そのときのルカイアの瞳を、ツェイルは見逃さない。

『逃げられませんよ』

ルカイアの瞳は、ツェイルにそう語っていた。

『逃げません』

声にならない言葉で、ツェイルは返す。

「ツェイル？」

「いえ……ありがとうございます、陛下」

「剣の稽古をするなら、ルウに誰か見繕ってもらえ。まあ、リリでも相手にはなるだろうが」

「リリが？」

「どうだ、リリ」

サリヴァンとの剣をリリは快く思っていなかった様子だったが、サリヴァンにそう問いかけられ、ツェイルの視線を受けると、深々と頭を下げた。

「わたくしでよろしければ。稽古の相手にはならなくとも、ただのお相手ならできるかと」

なんと、リリは剣を扱えるらしい。どこまで万能な侍女なのか。

「と、いうことだ。リリで相手ができなくなったら、ルウに頼め」

「……よろしいのですか？」

「なにが」

「その……わたしが、剣を揮うことに」

「おまえの身を護るものだ。貴族の子女でも、護身術くらいは習う。おまえの場合、それが抜きん出て得意だというだけのことだろう」

そういう捉え方もあるのか、と思った。だからツェイルが男の子みたいでも、この人は特になにか言うわけでもないのかと、思った。

規格外な貴族の娘を、規格外な瞳で見守る人。

優しくて、面白くて、そして不思議な人だなと、ツェイルはこのとき改めてサリヴァンのことを見つめ直した。

「それに、おまえは騎士になりたいんだらう？　なら、剣の稽古は必要だ」

「騎士にしていただけのですか」

「それはまた別の話だがな。その心意気は認めてやると言っている」「ありがとうございます」

ちょっと嬉しくなって、ツェイルはドキドキと胸を高鳴らせながら、サリヴァンに頭を下げた。

これでやっと、この人を護れるようになる。そう思った。

10 : 護りたいもの。2 (前書き)

サリヴァン視点です。

ツエイルの部屋を辞して、執務室に向かう廊下でふらついたサリヴァンを支えたのは、すぐ後ろを歩いていたルカイアだった。

「無茶をなさいましたね、陛下」

支えられたサリヴァンは、ルカイアのその、なんとも表現し難い表情に、顔を歪める。支えられ続けるのが不愉快になるその表情に、ルカイアを突き飛ばした。

「おれに、触れるな」

よろめくサリヴァンを、今度はラクウィルが支える。ラクウィルはなにも言わなかった。

「……わたしに敵意を向けられるとは、初めてですな」

「今回ほど、おまえを憎らしく思ったことはない」

「そうですか」

サリヴァンはルカイアを睨んでいたが、ルカイアはそれを意にも介さず、平然としている。それは癩に障るというよりも、サリヴァンに悲しさを募らせるものだった。

「そんなに、おれをこの国に、縛りたいのか」

「ええ」

ルカイアは即答した。

「あなたがこの国を離れられないように、郷里を求める者を盾に取る。それくらいのこと、なんでもありません。そう思っくらしいには、あなたをこの国に縛りたいと思っています」

サリヴァンは、いつそこのお人好しな自分を切り捨てたいと、思った。けれどもそれすらできない立場にある自分が、悔しくて悲しくて、ならなかった。

「おれはこの国のために在る。それでも、その言葉に満足しないか」「しません」

「おれは国主だ！」

叫んで、寝不足と痛みでふらつく身体をどうにか動かし、ラクウイルの支えから離れて歩き出す。

ずきずきと痛む肩と二の腕。

けれども温かくぬくもりが残る、包帯を巻いた腕。

痛みとぬくもりがせめぎ合って、寝不足であるらしい自分を自覚して、舌打ちする。

「痛みますか」

「うるさい」

「薬を用意しましょう。薬師に連絡を……」

「要らない！」

「……では、彼のお方さまのところへ参られますね」

返事をしなかった。自然と足がそちらに向いていたから、言う必要はないと思った。

ときおりふらつきながら、支えてくれようとするラクウィルの手を払いのけて、サリヴァンは廊下を進む。

執務室がある棟の、その行き止まりとなった場所まで来ると、一面ただの壁でしかないところに手をつき、押した。

ある術式が施された壁はサリヴァンが触れると大きな扉に変わり、押された方向に開かれる。扉の向こうにはまた廊下が広がっているが、向かって右手は森のような庭で、中央に噴水がある。

サリヴァンは扉を抜けた。ルカイアとルーディはその場で足を止め、礼を取る。ラクウィルだけを連れて歩き出した。

そうして真っ直ぐ歩いて、見えてきた角の部屋で立ち止まると、いきなり扉を開ける。

「……どうした」

中にいた住人は、サリヴァンの唐突な来訪に驚くことなく、また膝に置いた書物から顔を上げることなかった。

書物だらけの部屋で、窓の隙間から零れる陽光に当たって煌めく銀系の髪が、サリヴァンの寝不足の眼を刺激する。

「養父上……」

サリヴァンは、中の住人を「養父上」と呼び、ふらふらと入室する。行きついた寝椅子に辿り着くと、どさりと倒れ込んだ。

「……わたしをそう呼ぶとは、久しいな」

いつもならそう呼ばない。けれども、今は、養父と呼びたかった。黙っていると、養父は書物から顔を上げた。

「サリヴァン？」

琥珀色の、光りの加減では金色に見える双眸が、サリヴァンを見つめる。

サリヴァンは目を閉じた。

「どうして、議会を、承認させたのですか」

「……議会？」

「メルエイラ家の娘ですよ」

「……ああ、あれか」

とぼけているわけではない。このひとは、時間の感覚が狂っている。いきなり話し始めても、思い出すのに時間がかかってしまうのだ。

「必要だと判断した。それだけだ」

「なぜ必要だと」

「わたしが必要だと判断した、それが理由だ」

「そんなの……」

理由になっていない。けれども、このひとの言葉は絶対で、覆されない。

「足掻いたようだな」

「……ええ」

「隣国との問題は片づいてしまい」

「それを片づけてからと思ったのに、養父上が承認してしまったか

ら……面倒なことになっているんじゃないですか」

「メルエイラのほうは片づいたであるう」

「先に片づけるは隣国との問題。そちらではない」

「そうか」

「養父上っ」

サリヴァンは身じろぎ、視線を書物に戻してしまつた養父を睨む。しかし、養父はそれ以上の言葉を与えてくれることはなかった。しばらく見つめていたものの、サリヴァンは諦めて寝椅子に埋もれる。

「眠らせてください」

「……好きにしる」

素気ない言葉を耳にしつつ、サリヴァンは再び目を閉じる。

少しして、うとうととし始めたところで、ふんわりとなにかが頭を撫でた。薄目を開けて見ると、それは養父の手のひらだった。

「養父上……」

どっと、安心感が押し寄せる。涙が込み上げるほどの安心感だ。この安堵感には、憶えがある。

「……ツェイルとの、剣……楽しかった」

「……そうか」

声は素気ない。けれども、手のひらは優しくかった。

「前向きな、覚悟で……おれには、眩しい……けど、楽しかった。剣は、使えないと、わかつていたのに……」

「その腕、メルエイラの娘か」

「こんな、おれを……心配して、くれる……自分だって、家族のところに、帰りたいたるうに、帰れなくて……帰してやれなくて、申し訳ない」

「……そうか」

「養父上……ツイエルを、帰してやって、くれ……ツイエルを、巻き込みたくない……あの子は、いい子だ。おれなんかの事情に、巻き込んで、可哀想だ」

「わたしの決定は覆らぬ」

「……養父上はひどい」

「いつものことだ」

「はは……それも、そう……で、す……ね」

緩やかな優しさに、安堵感に、サリヴァンの瞼は完全に落ちる。

それはツイエルのそばで眠っていたときと同じで、完全なる深い眠りだった。

自分をここまで安心させてくれるのは、このひとだけだと思っていた。

なにがあっても自分を肯定してしてくれるのは、このひとだけだと思っていた。

だから、ツイエルにもそれを感じて、サリヴァンは信じられなかった。

今度、この腕を治療してくれた礼をしなければ。

そう思った自分にも驚きで。

なにか贈りものでもして、気を紛らわせてあげたい。

そう思った自分が、不思議だった。

「ツェイル……」

不思議な娘だ。

その瞳には、サリヴァンの真実が見えているだろうに、サリヴァンの騎士になるのだと言ってきた。手合わせしたら、騎士になれるのかと、諦めた様子もなく言ってきた。

ツェイルが手当てしてくれた腕に、まだツェイルの手のひらの感触が残っている。暖かく、優しく、剣を握るのに柔らかかなぬくもりが、脳裏から消えない。

不思議な娘だ。

眩しいくらいに真っ直ぐな瞳が、薄い紫色の瞳が、なかなか忘れられそうにない。

ああ、目覚めたら剣を贈ろう。ツェイルの瞳と同じ宝石を入れた、銀色の剣。その小柄な体格に合わせて、両刃ではなく片刃の、動き易さと安全性を重視した美しい剣だ。きっとツェイルに似合うだろう。

ツェイルは暖かだった。とても安らぐぬくもりを持っていた。その手に剣を握らせるのは忍びないが、剣を持ったツェイルは美しかった。

そこまで考えて、漸く、サリヴァンは思考を手放した。

剣の鍛錬に、リリが相手をしてくれるようになって、たまにルーデイが姿を見せて相手をしてもらえるようになった。そのおかげで、鈍っていただろ腕は戻り、その感覚も戻った。体力も、疲れ過ぎて動けない、ということがなくなり、ツェイルは身体的な不満をもたなくなりつつあった。

「ツェイル」

その日は、鍛錬のあと沐浴をしてさっぱりしたところに、サリヴァンが来訪した。

「お久しぶりです、陛下」

ここでの生活は、わりと平和が続いている。危惧していた後宮でのいじめもなく、貴族からの嫌がらせもない。そういうものを受けない場所にいるのか、ルカイアがそういう手配をしてきているのか、それは定かではないが、軟禁状態であるということ以外は、ツェイルの周りは平穩そのものである。

サリヴァンの訪ないも、その表情は日毎で違うものの、ツェイルを蔑ろにするものではなく、逆に憐憫の情が強いくらいで、優しい態度ばかりだ。

今日のサリヴァンは、その目許は疲れているように見えたが、穏

やかに微笑んでいた。それが作られたものではなく、心からのものであることに、ツェイルはホッと安堵する。

「ここ数日は、また忙しかったようですね」

「……そう見えるか？」

「はい。少し顔色が……」

「まあ気にするな」

「そういうわけには」

「気にするな」

にこ、と微笑まれたら、頬に熱が集中する。もともと顔の造形が綺麗な人だから、そこに人としての危うさと儂さが見えると、神々しさが目立つのだ。

「ツェイル」

「はい」

サリヴァンが、姫と呼ばず、ツェイルと名を呼んでくれるようになってから、ツェイルは呼ばれることになぜかドキツとする。よくわからない高鳴りには首を傾げるばかりだが、気にしないようにしていた。

「これを、おまえに」

一緒に来ていたラクウィルからなにか長いものを預かったサリヴァンは、それをツェイルに差し出してきた。

「……なんですか？」

差し出されたので、首を傾げながら受け取る。

と、その重みはツエイルの腕に馴染んでいるものだった。

「剣だ」

「……剣？」

「開けてみる」

滑らかな濃い紫色の袋に入ったそれを、ツエイルは紐を解いて取り出す。

「わ、ああ……」

思わず感嘆の声が上がる。

目にも鮮やかな、銀色の剣だ。

銀色の鞘には細かな彫刻が施されていて、中央に薄い紫色の宝石が詰め込まれている。柄の部分にもその宝石はあって、しかし細やかに散らばっている。刀身はツエイルの腕のほど、片手でも振れる身軽な剣だった。

鞘を抜いて、さらに驚く。

「片刃、ですか」

「ああ。おまえには、片刃がいいだろうと思って」

「……よく、おわかりに」

「ん？ なにが」

「メルエイラ家の技は、片刃の剣を基本にしているのです」

きよとん、とサリヴァンはツエイルを見る。どうやらメルエイラ家とは関係なく、サリヴァンがわざわざ用意してくれた品のようだ。

嬉しくなつて、ツェイルは剣を鞘に戻すと腕に抱き込んだ。

「こ……これを、わたしに？」

「……ああ」

「本当に？」

「おれが持つていても錆びるだけだぞ」

錆びらせてたまるか、とツェイルはもっと深く剣を抱き込む。

「だ、だめ、です」

「……ふうん？」

にんまり、とサリヴァンは笑った。なんだか楽しそうだ。

「気に入ったか」

「はい」

思いつきり首を上下させると、サリヴァンは破顔した。

「よかつたな」

「ありがとうございます、陛下」

「……サリヴァンだ」

「え？」

「サリヴァンと、呼んでくれ」

そういえば寝ぼけていたときも名で呼ばせようとしていたな、と
思い出して、ツェイルは口許を緩めながらそれを声に出した。

「サリヴァンさま」

瞬間、サリヴァンがなぜか瞠目する。

「……………サリヴァンさま？」

どうしたのだろう、とツェイルは首を傾げる。なにか変なものでも見ているような顔だ。

しかし、サリヴァンの手がふと、ツェイルに伸びてくる。

なんだ、と思う前に、ツェイルはあのとときのサリヴァンがそうしていたときのように、抱き込まれていた。

「うへ……………」

吃驚して、思わず変な声が出る。

こうして立ったままサリヴァンに抱きしめられると、その身長差にも吃驚させられる。ラクウィルとルカイアに挟まれて立つサリヴァンはその中では華奢に見え、あまり背が高いとは思えなかったのだが、ツェイルとの身長差は明らかだ。身の細さは見た目通り、とても華奢なのだが、身長はある。頭一つ分高いとは思っていたが、それ以上だった。

サリヴァンの腕に抱きしめられながら、余計なことを考えていたツェイルは、顔をその肩に埋めて、固まった。

「あ……………ああああの、へい、陛下？」

「サリヴァンだ」

「……………陛下？」

「サリヴァンだ……………おれは、サリヴァンだ」

どうしても名で呼んでもらいたいらしい。
なんだか子どもみたいだなと思いつながら、ツェイルは再びサリヴァンの名を紡ぐ。

「サリヴァンさま……どうなされたのです」

「……おまえが」

「わたし？」

「おまえが……笑うから」

「え……？」

なんのことが、さっぱりだ。

「おれが、帰れと言った、ときに……帰ればよかったのに」

切羽詰まったようなその声は、紡がれると同時に、ツェイルとサリヴァンの身体に隙間を作った。

急性なそれは、ツェイルにサリヴァンの表情を窺わせるだけの暇もなく、また声をかける時間さえも奪う。

けれども。

「さ……サリヴァンさまっ」

部屋を出て行こうとしたサリヴァンを呼んだとき、その頬が赤く染まっているのだけは、目に止まった。

「また来る」

さっと、サリヴァンはツェイルの部屋から姿を消した。

「……、なんだったのだ？」

あの態度は、あの赤らみは、なんだったのだろう。
戸惑いつつ、だが自分の頬も赤らんでいることに、ツェイルは気づかない。

ギュッと抱きしめた剣の重みが、ツェイルの視線をそこに落とさせる。

「銀の、剣……わたしの剣」

綺麗だ。

サリヴァンの態度はともあれ、これは贈りものなのだろう。
なんだか嬉しくて、楽しくて、心が躍った。

「リリ！」

「あ、は、はい！」

「見て、わたしの剣！」

「……わたしも喜ぶべきなのでしょうが」

「うん！」

「姫君に剣の贈りもの……うう……あまり喜んで欲しくないのですが」

リリはなぜか不服そうだ。

しかしツェイルは嬉しいので、リリの態度など気にしない。

銀の剣を両手に持って、窓の陽光に翳した。

きらきらと、銀の剣は輝く。

初めて自分の剣を手にした。今までは兄のものか、弟のものか、或いは父のものだった剣だ。自分の剣というのは、初めて持つ。初めての剣は重く、けれども小振りで扱い易そうだ。

これで、サリヴァンを護ることができる。

サリヴァンのために、剣を揮うことができる。

けれども。

これは人の命を脅かす。

それでも。

「これで、護れる……」

誰かを護るとき、誰かを犠牲にしなければならない。

ツェイルが家族を護るために、この身を帝国に捧げたように。

サリヴァンのために、銀の剣は、誰かの命を吸うだろう。

それでも。

「護れる」

サリヴァンは護らなければならない。

国の犠牲になっているサリヴァンを、人として危うく儂く、壊れてしまいそうな人を、それらから護れる。

サリヴァンの騎士になろうと決めた。

だから、そのために払う犠牲は覚悟している。

自己満足であろうがなんてあるうが、ツェイルは家族を護り、サリヴァンを護る。

護りたいものがあるから、その力があって、護りたいものを護れる。

これほど嬉しいことはない。

喜びを得たことはない。

ツェイルは陽光に翳した剣を鞘から抜き、メルエイラ家特有の剣の構えを取る。鈍く光った片刃の剣は、その強さをツェイルに見せつける。

美しい強さだった。

サリヴァンから贈られた剣を、メルエイラ家で学んだ型で、揮う。ツェイルの身体に合った剣は、片手でも揮える小振りなものだ。扱った慣れたエモノにするには、数日も要らない。

かつてないほどに手に馴染み始めた銀の剣を、ツェイルはそれに合った型で振り続けた。

頬に当たる風が心地よい。

そう感じたときだった。

「野蛮な」

そんな声が、ツェイルの剣を止めた。

肩で軽く息をしながら、ツェイルはその声がした方向を見つめる。茶色の髪を高く結び上げ、綺麗な宝石を至るところに散りばめ、豪華な赤いドレスを身にまとい、扇子で口許を隠しながらもその目には侮蔑を込めた、美しい女性が立っていた。

「……貴族の令嬢が、それも陛下の婚約者となった娘が、剣を揮うなど……野蛮なことこのうえない」

女性は森の向こう、うつすらとその背景が見える場所にいる。この角度からでしか見ることができないらしい場所だ。だから今のままで、森の中にその空間があることに気づかなかつたのだろう。

ツェイルは揮っていた剣を下ろすと、じつと森の中の女性を見つめた。

「婚約者という自覚があたりか」

女性の問いに、ツェイルは淡々とした表情を向ける。

「ツェイル・メルエイラ」

「……なに？」

「ツェイル・メルエイラ。メルエイラ侯爵家の娘だ。人に名を訊ねる場合、自ら先に名乗るものと聞く。だから問う。あなたはどなただ」

女性の目が、カツと見開かれる。なにか小さく悲鳴を上げたようにも聞こえなくはなかったが、意味のわからない悲鳴だったので、怪我をしたわけではないだろうと判断する。

「……アルミラ・ウエル・ナルゼツタ。ナルゼツタ侯爵家の者よ」

ナルゼツタ侯爵。

どこかで聞いたことがある名だ。

「……ウエル・ナルゼツタ。わたしになにか文句があたりのようなが」

「ふん……大ありよ。レイルに名を連ねる者でも、生粋の貴族でもないおまえが、陛下の婚約者とはね」

ああ、とツェイルは思い当たる。

これは所謂いじめ、あるいは嫌がらせか、と。

「議会が承認したこと。わたしにもその決定を覆すことはできない」
「わたくしは認めません。それに、その言葉遣い……令嬢ともある
う者が、なんですか。騎士でもないのに……どうやってラッセ宰相
閣下に取り入ったのか」

「どうやら詰られ文句を言われている、と理解しながらも、ツェイ
ルはとくに腹を立てるわけでもなく、アルミラの言葉を聞いていた。

「そんなみすばらしい姿で、よくそこにいられてね。恥とは思
いませんの？」

とりあえず、黙っておく。

みすばらしいとは、おそらくこの貧相な身体のことなのだろうが、
これは天恵の代償であるし、とくに困りもしていないので、言われ
たところで痛くも痒くもない。

「はっ、声ありませんの？ まあ、そうでしょうね。あなたほど
魅力に欠いた小娘はおりませんもの。声もないでしょう」

好きに言っている、と小さくため息が零れる。

女としての魅力がないことくらい、わかっている。ルカイアにも
言われたことだ。誰の目にもそう映ることくらいは、随分と昔に諦
めてからは、気にしないようにもしている。

「あなたでは、陛下も満足しませんでしょう。お可哀想に……まだ
若くていらっしやる陛下には、閨の相手にお困りでしょうね」

「ならあなたが相手をすればいい、と言いかけて、やめた。

初対面の人間に厭味や皮肉を言う人間など、信じられたものでは

ない。そんな人間をサリヴァンのそばに置きたくもない。

「今夜の夜会が楽しみですね。まあ、あなたは出席もできないでしょうけれど。そのみすばらしい身体に合うドレスなんて、ありませんものね」

「……夜会？」

あ、うっかり声を出して、いや返事をしてしまった。
アルミラは嬉々としてツイールの反応に、反応し返してくる。

「ええ、そうですよ。今夜の夜会は特別なよ。隣国との和解を進めるための、公子を招いての夜会……隣国との和解が成立すれば、陛下の御心も安らかになるでしょう」

隣国との和解を進めるための、夜会。

ああ、そうか。

やっとその忙しさからサリヴァンは解放されるのだ。これでゆっくりと、サリヴァンは身体を休めることができる。

そうホッと安堵すると、アルミラはなにを勘違いしたのか、高々と笑い声を上げた。

「残念ね。あなたは出席できないようです」

するつもりがないので無視だ。

サリヴァンの肩の荷が少しでも減ったのなら、それを喜ぶだけである。ただでさえツイールのことにも振り回され、その優しい心を痛めつけられているのだ。

ツェイルは剣を鞘にしまつと、礼儀としての一礼をアルミラに忘れず、背を向けた。

「お可哀想に」

そう背後に聞こえたが、なにが可哀想なのかわからないので、聞かなかったことにした。

ゆっくりと居室があるほうへ進み、サリヴァンの健康を祈る。よかつたと、胸を占めるのはそればかりだ。

「ツェイルさま！」

その声に、俯き加減だった顔が上がる。露台からリリが身を乗り出していた。

「今、どなたかとお話を？」

「ん……ああ、女の人と」

「どなたです？」

「……、あれ？」

もう名前を忘れた。聞き覚えのある家名ではあつたけれども、名のほうは忘れてしまった。

「ウエル……なるなんとか」

「なるなんとか？」

「忘れた」

宝石が綺麗だったな、という簡単な印象しか受けなかったし、厭味や皮肉しか言われなかったので、名を記憶する気がなかった。

「宝石が綺麗だったから、それは憶えているが……」

視線が銀の剣に落ちる。

あの女性の宝石も綺麗だったが、この薄紫の宝石のほづが、ずっと綺麗で美しい。これには劣る宝石だ。

「宝石が好きなのか、おまえ」

その声に、視線が上がる。リリの横から、サリヴァンが身を乗り出していた。

「陛下」

「サリヴァンだ」

「……サリヴァンさま」

剣を頂戴してから、久しぶりのサリヴァンだ。あときは切羽詰まった声を出していたが、今日はそんなところもない。いつもの、唐突に現われるサリヴァンだ。

「で、おまえは宝石が好きなのか？」

「綺麗なものは全般好きです。宝石と決まったわけではなく」

「ふうん？」

「陛下……サリヴァンさまからいただいた銀の剣も、綺麗なので好きです。あと、その花瓶とか」

花瓶、とサリヴァンの視線が窓辺の花に移る。

「透明なただの硝子花瓶だが？」

「綺麗です。水が、こう、ゆらゆらして、陽光に当たると」

「……おまえの感覚、よくわからないな」

「よく言われます」

「花ではなく、なぜ花瓶なのだ」

「花を美しくさせるのは、その土台です。花が美しいのは、それを支える花瓶が美しいから……花を美しくさせるために、それらは存在しているのです。わたしには、そちらのほうが綺麗だと」

サリヴァンの視線が、ツェイルに戻る。また意外なものを見ているような、眩しいものでも見ているような顔をしていたので、なにが変なことでも言っただろうかと、ツェイルは首を傾げた。

「なにか、変なことを、わたしは言いましたか？」

「いや……それもそうだな、と思った」

「そうですか」

「ああ」

サリヴァンの視線が外れない。徐々に穏やかな笑みに変わると、ちよつとツェイルも気恥しくなってきた、視線を逸らす。

「あとは、なにが好きだ？」

「なに……ええと……リリとか」

「リリ？」

話がリリに飛び、驚いたリリが「わたしですか？」と声を裏返して後ろに飛び退いた。

「リリは綺麗です。髪も、瞳も、もちろん見えるところすべて綺麗ですが、その誠実さが一番綺麗です。淹れてくれるお茶も美味しいし、わたしを想ってくれていることが伝わってくる……だから、リリも好きです」

臆面もなく言つと、リリが真っ赤になった。

「わっ……わた、しも……ツェイルさまが、好きです」

リリも返事をしてくれた。

「そうですか。嬉しいな」

「う……いけない道に進みそう」

「はい？」

「なっ、なんでもありません。嬉しくて、涙がでそうだけです。ありがとうございます、ツェイルさま」

真っ赤なまま俯いて礼を取るリリに、ツェイルはそんなことするなど慌てて露台上がり、リリの手を取る。

「いつも、本当に、助かっている。リリがいてくれたから、わたしは、ここで不自由なく、暮らしている。わたしこそ、ありがとうございます」

頃合いを見極められなくて言えずにいたことを伝えると、リリがますます赤くなった。その目に、本当に涙を浮かべている。

「ツェイルさまに、そこまで言ってもらえるなんて……わたし、幸せです」

「こんなことで、幸せになるのか？ それは勿体ない。もっと、もっと、たくさんの幸せはある。リリの幸せは、ほかにもたくさんあるはずだ」

わたしはそれを祈る、と手を強く握れば、ついにリリは泣いてしまった。泣かせるつもりはなかったので、ツェイルは慌てる。懐か

ら手巾を取り出して、涙に濡れたリリの目許を拭ってやった。

「うわぁー……なんで百合に見えないのか、不思議い」

と、ラクウイルが笑いながら言う。

「そう見ると、そう見えちゃうってどうです。ねえ、サリヴァン」
「……おれに振るな」

「姫は中性的ですからねえ……リリに負けちゃってますよ、サリヴァン」

「だから、おれに振るな」

「まあ、姫を花開かせるのは、サリヴァンの役目ですもんねえ」

「ラァクゥウイール？」

「あはっ」

そんな、ラクウイルのおどけた声と、サリヴァンの不機嫌そうな声を無視して、ツェイルは涙するリリを懸命に慰める。言葉が悪かったわけではなく、純粹に感動してくれただけのようで、リリは泣きながらもその笑顔を見せてくれ、ツェイルはホツとした。

「ところで……」

リリが落ち着き、お茶を用意し始めてくれたから、ツェイルは長椅子に腰かけたサリヴァンに振り向く。なにか不機嫌そうなのは、意味不明なので無視しておいた。

「今日は、どうなさいました？」

「……なにか理由がなければ、ここに来てはいけないのか」

「いえ、そういうわけでは」

「おまえはおれの婚約者で、おれはおまえの婚約者だぞ」

「……そうですね」

なんだかそれっぽくないので、忘れがちではあるが。

「まあ……今日は、その……用事もある」

「なんででしょう?」

「それを言うためだけに来たわけではないからな」

「はい」

淡々と返すと、サリヴァンはなぜか気まずそうな顔をした。後ろでラクウィルが笑いをこらえている。

「……今夜、夜会がある」

ああ、そのことが。

「そのようですね。隣国との問題が、片づきそうなのでしょう? よかったです」

「……、なぜそれを?」

これでサリヴァンの肩の荷もいくらか減るということで、しかしそれよりもサリヴァンの怪訝そうな眼差しに、しまった、ともしっかりももう遅い。

「誰から聞いた」

「……ええと」

「誰に聞いた!」

「その……」

「リリ!」

「リリは関係ありません!」

リリに飛び火するとは思っていなかったので、慌てた。

「森の向こうに人が……その人が、そのようなことを、言っていたので」

「誰だ」

「それが……」

「名乗らせなかったのか」

「いえ、名乗らせはしたのですが……その、宝石の印象しか、なく……すぐ忘れしました」

「……それで宝石が綺麗だと言っていたのか」

べつに隠す必要はないのかもしれないが、あのままではリリがサリヴァンに咎めを受けそうだったので、隠そうと思っていなかったのに罪悪感が募った。

「森にいた、と言ったな？」

「はい。今まで気づきませんでした。あちらの……少し窪んだところから、森の中の光景が少し見えて……そこから」

あちら、と指差した方向をちらりと見たサリヴァンが、忌々しそうに低く舌打ちした。それはあまりにもサリヴァンらしくない仕事だった。

「皇帝の私有地に足を踏み入れた者……宝石を身に着けていたのなら、女か」

「え……なぜおわかりに」

「あの森も、ここも、皇帝の私有地だ。許可なく入ることはできない。それを揚々と破るのは、大抵が上位貴族の高慢な人間だ」

「……私有地、なのですか？」

「ああ」

そこにツェイルはいるのだが、よいのだろうか。

「ほかに特徴は？」

「特徴……その、すみません。初対面で厭味や皮肉を言うお方の」とは、いちいち憶えておれませんが……それ以外は」

「厭味？ 皮肉？」

「どうも、わたしがメルエイラ家の娘だと、わかっていらしたようで……剣の鍛錬をしていましたら、野蛮だと」

がん、と急に空気が冷えた気がして、ツェイルはハッとサリヴァンを見る。

ものすごく変な顔をしていた。

「……あ、の……サリヴァンさま？」

「その調子だと……」

「はい」

「ろくなことを言われてないな」

「はあ……まあ、言われ慣れておりますので、いちいち気にしておれませんが」

「それでも、言われたわけだ」

「……そう、ですね」

よくわからないが、ものすごく冷えた空気をまとったサリヴァンが、なによりも恐ろしく思えた。

「ラク」

地の底から出たような声で、サリヴァンはラクウィルを呼ぶ。

「はいな」

反してラクウィルは能天気で明るい返事をした。

「用意したものを、持って来い。この際、おまえの揶揄などどうでもいい」

「……あらら」

「ナルゼツタ家には、心底呆れる。真実を知ることとも許されぬのは、その下品さゆえのことだと未だ気づかぬなど、ヴァリアス聖国の汚点だ。隣国の問題がどのようなものからの派生だったか……わからぬものなど要らぬ」

やはりサリヴァンらしくない言い方、というか、逆を言えば皇帝らしいのだが、その不気味さはサリヴァンとは思えない。

ツェイルは不安になって、サリヴァンの手にそつと己の手を重ねた。

「サリヴァンさま」

「……心配するな。これは、聖国の汚点だ。おまえに非はない。許せ」

「いえ、そういうことではなく」

「なんだ」

「だいじょうぶですか？」

問うと、サリヴァンは意味がわからないと首を傾げる。

「今夜の夜会、和解を進めるものだとか。わたしは、陛下のその肩の重荷が少しでも減るのなら、安心です。ですが、陛下の……サリ

ヴァンさまの顔を曇らせるものなら、心配です」

サリヴァンが、ハツとしたように瞠目した。ツェイルはそれにも留めず、重ねた手のひらを取って、先日の剣の交わり合いでは震えていたその手を、もう痛んでいるようではないけれども、それが和らぐようにゆっくりと撫ぜた。

「サリヴァンさまは、国の犠牲になっておられる……わたしは少しでも、その負担を減らしたい。騎士としても、ひとりの人間としても」

力んでいた手は、緩やかに、ツェイルの癒しを受けて解けていく。

「あまり、無理はして欲しくありません」

「……無理などしていない」

「あれだけ長く眠り、それでいてまた疲れておられるようなのに」

「……おれは国主だ。国のために在る」

「それでも、サリヴァンさまとてひとりの人間です。無理を続ければどうなるか、おわかりでしょう」

「おまえだって、ひとりの人間だ」

いきなり手が反転し、撫ぜていた手をサリヴァンに取られた。

「今やおまえはおれの婚約者。それを侮辱すること、即ちおれを侮辱することだ。意味はわかるな」

「はい。わたしが軽率にも、森へ近づいたせいで……申し訳ありません」

「違う。ここは帝の私有地、許可なく足を踏み入れれば、刑罰がくだる。それを今まで適当にしていたおれが悪い。ここにおれの家族と呼べる者がいなかったからな」

「……家族？」

「ラクは乳兄弟で、ずっとそばにいるが、ここに住まいがあるわけではない。だから、家族はここにいなかった」

過去形の言い方に、ツェイルは不覚にも、大きく胸を高鳴らせた。そして、サリヴァンの強く真剣な眼差しにも、くらりとした。

「今はここに、おまえがいる」

「……わたし」

「おれは剣でおまえを護ることはできない。だが、ひとりの人間として、おまえを護ることが出来る立場にある」

「……へ、陛下、それは」

「サリヴァンだ」

「え……」

「おれはサリヴァンだ。もう、おれを陛下と呼ばないでくれ」

それはサリヴァンの懇願で、握られた手は、サリヴァンの額に、まるで祈るかのように捧げられた。

「おまえがおれを護ると言ってくれたように、おれにも、おまえを護らせてくれ」

今までにないくらい、心臓が忙しなく鼓動する。くらくらとするのは、サリヴァンのそれが、とても嬉しいものだと感じたからだといえ、気づいた。

「さ……サリヴァンさま、わたしは」

「夜会に出る」

「は……」

思わぬ言葉に、ツェイルは硬直する。

「それを言うために、来た。礼装^{ドレス}など着なくていい。おれが用意したものを着て、夜会に出る」
「で、ですが」

みすばらしい、と言われたことを思い出す。サリヴァンが可哀想だ、という言葉も聞いた。

否定しなかったのは、否定できないからだ。
貧相な身体は、サリヴァンの隣に並ぶことなどできないもので、騎士としても、頼りない。女らしさの欠片もないこの身体は、サリヴァンに恥をかかせるだけだとわかっている。
それに、求められているのはメルエイラ家の力で、ツェイル自身ではない。

「わたしは、出られません」

騎士としてなら、そばに立とう。けれども、婚約者として、隣に並ぶ必要はない。

「さっきまでは、それでもいいかと思っていた」

「なら……」

「さっきまで、はな」

「え……?」

「もともと、煩い議会を黙らせるための、メルエイラ家の力を、力は所望しただろう」

そうだ。それ以外に、ツェイルの価値はない。

「それはルカの考えであって、おれは違う」

「……要らない、と」

「ああ。要らない。メルエイラ家の力は、おれには不要だ」

やはり、騎士にはしてもらえないのだろうか。護りたいのに、護れる力を、天恵を持っているのに、護らせてくれないのだろうか。

「おれは、おまえなら欲しいと思う」

「……、はい？」

今、サリヴァンはなんと言ったか。

「ツェイル・メルエイラ」

「は、はい」

「おまえの人生を歪ませる。許せ」

なんのことが、わからない。

「おまえを巻き込む。許せ」

「……なんのことですか？」

「その代わり、おれはおまえの生涯を護ると誓う」

「サリヴァンさま？」

まるで告白されているみたいで、けれどもなにか重要なことを告げられているようで、ツェイルは別の意味でも心臓を高鳴らせた。

「待って、サリヴァンさま。なんのことが」

「おまえを」

強く、手を握られて。

「おまえを、護りたい」

その手が、震えていたから。

「……サリヴァンさま」

「なにからも、すべてから……おれが護るから」

奇特な人だ。

けれども、ツェイルの顔は、今までになく赤く染まっていた。

12 : 護りたいもの。4 (後書き)

楽しんでいただけていますでしょうか。
読んでくださり、ありがとうございます。

13 : 護りたいもの。5 (前書き)

サリヴァン視点です。

早足に、廊下を進みながら。

「くふふう」

負けず後ろを追いかけてくる侍従長の、不気味な笑い声を聞いた。

「……ラク」

人気もないところで漸く足を止めると、サリヴァンは低い声でラクウイルを呼んだ。

「なあんですう？」

いやに楽しげで、いやに気持ち悪い声に、げんなりとする。しかし、その頬は赤かった。

「気色悪いから、その笑いは、やめろ」

「いやだつてねえ？」

「やめんか」

「うはあ、サリヴァン可愛いーい」

乳兄弟の、かつてない不気味な笑顔は、サリヴァンの顔を引き攣らせる。それでも頬はまだ赤い。

「もつめるめるですね？」

その瞬間、サリヴァンは振り向きざまに平手を喰らわせた。
が、甘い。

侍従長ラクウィルは、ただの侍従長ではない。ゆえに、しっかりと手首を掴まれた。

「……いちいちうるさいぞ、おまえ」

「そんな顔で言われてもねえ」

自分がどんな顔をしているのか、サリヴァンに自覚はない。ただ、やけに心臓が煩いことと、なにやら恥ずかしい気だけはしている。

「おれは策に乗せられてやっている」

「ふうん？」

「おまえに、遊ばれてやってもいる」

「姫は可愛いですねえ？」

瞬間、掴まれていないほうの手を飛ばした。
が、やはり甘い。

両手首を封じられてしまう。

「ちっ」

なんて厄介な侍従長だ。やはり騎士にしておけばよかった。

「……あは」

ラクウィルの笑みが深まった。

ふつと、顔が近づき、いきなりなんだと驚いたサリヴァンは身を引いたが、両手を掴まれていては距離も稼げない。

「誤魔化さなくていいですよ、サリヴァン」

「……なんのことだ」

「策に乗せられて、遊ばれてやってもいい。だから、おれの前では誤魔化さなくていいです」

「だから、なんのことだと……」

「惚れたでしょ」

目許が引き攣った。

「は？」

「姫に、惚れたでしょ」

「……なに言ってるんだ、おまえ」

「自覚なし？ そんなに真っ赤で？」

「はあ？」

「姫が可愛かったでしょ」

「もともと可愛らしくはあるだろうが」

「……そこは自覚してんですね」

ちよつと残念、としょんぼりしたラクウィルだったが、サリヴァンの両手を離す気はまだないらしい。

「ねえ、サリヴァン」

「なんだ。というか、さっさと離せ」

「いやです。ねえサリヴァン、姫が、可愛いですよね」

「それがどうした」

「ふむ……そこまで自覚しておいて、おれに平手まで飛ばそうとしておいて、なんでわかんないかなあ？」

「おまえの行動のほうの意味不明だ」
「おれのは条件反射ですよ、ただの」

なんでもないかのようにサリヴァンの、平手をなるべくして飛んだ腕を掴んだくせに、ただの条件反射で済まされた。

というか、阿吽の呼吸が恨めしい。乳兄弟だから、殴り合いの喧嘩もしたことがあるので、慣れているせいか、そういう呼吸はなぜかばっちり合うのだ。

「ねえ、サリヴァン。前に姫を抱きしめたのは、なんで？」

「可愛かったから」

「そこは素直なんですか……変なの」

「おまえに言われたくない」

あるときツエイルは、初めて笑みを見せてくれた。それはサリヴァンの心を高鳴らせ、そして喜ばせた。

可愛かった。

だから腕にしまい込んだ。

可愛かったから、抱きしめてみたかった。

ツエイルは暖かく、柔らかく、そしてとても小さく華奢だった。

「まあしかし……よかったですよ」

ふわっと、ラクウイルは笑う。いつもの喰えない笑みでも、先刻までの不気味な笑みでもない。幼い頃、穏やかにサリヴァンを見つめていたときと同じ、兄のような瞳を向けられている。

「……おれは、策に乗せられている」

「うん」

「おまえに、からかわれてやってもいる」

「そうですね」

「だが……おれの心だ」

「……ん？　なんだ、自覚してんですか」

なにを今さら、とサリヴァンは唇を歪める。

パツと掴まれていた両手を離されたが、その勢いのまま頭をぐりと撫でられて、感じた以上に優しいそれを払い除けられなかった。

「かなり否定的だったのに、どういつ心境の変化ですか」

「……議会の決定は覆らない。なら、護るしかないだろう」

やっと手を払い除けられて、サリヴァンはため息をつきながらそっぽを向いた。

「姫を護りたいと思うくらいには、自覚がありますか」

「なかつたらあんなこと、言わない」

「じゃあなんで否定的だったんです？」

それは、とサリヴァンは唇を歪め、眉間に皺を寄せる。

「……おれは国主だ」

「ええ、そうですね」

「嫁ぎ先は国主になる」

「ん？　……もしかして」

さすがに皆まで言わずとも、ラクウィルは気づいたようだ。

「ははあ……そういうことですか」

したり顔をしているだろう。サリヴァンの表情を、見なくても声で把握できた。

「なんだよ」

「いやあ？　それで、夜会に出すことにしたんですね」

サリヴァンは黙し、見るともなく小窓から空を眺め、夜会について考えていることを思う。

夜会の話が持ち上がったとき、ツェイルを出すつもりはなかった。ルカリアを始めとする宰相たちは出席すべきであると進言してきたが、サリヴァンはその気がなかった。

けれども。

皇帝の私有地であるあの広大な庭に、野心を持った上位貴族が侵入し、あまつさえそこにいたツェイルを侮辱した。

赦されることではない。

赦してはならないことだ。

たとえツェイルが気にせず、意にも介していなかったとしても、サリヴァンは赦せない。

ツェイルが、どれだけの想いであそこにいるのか、知らないくせに。

どれだけの覚悟を持って、あそこにいると思っているのか。

ただ外側を見ただけで、中身まで決定づけるなど。

「なにも知らぬ愚かなものが……」

ぎり、とサリヴァンは奥歯を噛み締める。

ツェイルを侮辱した者には、見当がついていた。皇帝の私有地を、わがもの顔で歩いている者は、限られている。

「……未だ、その権力があると、驕るか」

勢力、というものがある。或いは派閥のようなもの。しかしそれは一方的な勢力で、擬似的なものであり、歴然としたものではない。

本物の勢力はその裏に、列記とした派閥として存在している。しかし表立てないゆえに、擬似的なその勢力を隠れ蓑にしていた。

「前皇妹殿下……の、ことですか？」

ラクウィルのそれに、サリヴァンは思い切り顔を歪め、ふんと鼻を鳴らす。

「侯爵家に降嫁した。その呼び名は相応しくない」

「そういえばそうでしたね。相変わらずあそこら辺をうるちよろしてるもんで、ついに離縁されちゃったかなあなんて」

「できないだろうよ。その権力が、欲しいのだからな」
「諦め悪いですよねえ」

参っちゃう、とラクウィルは肩を竦めながら苦笑した。

「その人たちがいるところに、姫を連れていくんですか」

擬似的な勢力、それは前皇妹殿下、ナルゼツタ侯爵家に降嫁した侯爵夫人の勢力だ。

今宵の夜会に、ナルゼツタ侯爵は出席する。そして夫人も。

本当なら、ツェイルが出たくないと言え、それでいいと思っていた。

けれども。

「おれが……そばにいて欲しいと、思うんだ」
「……でしょうね」

誤魔化さず、素直にその心を述べれば、ラクウィルはわかっていたかのように微笑むだけだった。

「姫を護れますか」
「護る」

ツェイルは護ろうとしてくれている。ならば、自分も護ろう。護りたいと思う。

ツェイルの人生を歪ませることになるだろう。
サリヴァンの事情に、巻き込んで後悔させることになるだろう。
それでも、もうそれらは、ツェイルがサリヴァンの婚約者となつたときから始まっていることだ。

議会の承認は覆されない。覆せない。

ならもう、己れの心に従っていいはずだ。いや、従う。

護りたいものができたと、そう言えるツェイルの存在が、サリヴァンを己れの心に従わせた。

二大卿にたいきょうしゅうりくじょう四公六候と呼ばれる、ヴァリアス帝国上位十二貴族が召喚された夜会は、四公のひとりヴァルハラ家の当主と、六候のひとりメルエイラ家の当主ツアインを除いた十貴族が出席することとなった。

「小規模なのですね」

「なんといいますかあ……うん、あれです。目的は隣国、つまり四公のひとりであるクロフト家が納めるシェリアン公国との和解を進めるものですから、ふだん開いている夜会じゃあないんですよ。まあ帝国全土の会議みたいなものなので、まず豪奢である必要がないわけです」

「そう……なのですか」

「親睦を深めるって意味では、まあ少しは賑やかになるでしょうが、それでも雰囲気はどちらかというと重苦しいかと」

「重苦しい……」

ラクウイルに夜会の説明をしてもらって、ツェイルは聞いてよかったのか聞かないほうがよかったのか、わからなくなった。

「幸いなのは、サリヴァンの婚約、つまり姫の婚約でもあるわけですが、実はまだ公になっていないので、今日集まる予定の十二貴族以外に知る者がいないことです。多少は噂が流れているでしょうが、なので、たぶん、まだ姫たちは衆目を浴びないと思います。姫たち

のこのの前に、まずシェリアン公国との問題を片づけなければなりませんからね」

「……そうですね。まずは隣国との問題を片づけねば」

「ご理解が早くて助かります。そういうことですから、あまり緊張せず、サリヴァンのそばにいればいいですよ」

どちらにせよ緊張せずにはいられないことなので、ツェイルは肩をすくめて首を左右に振った。

「緊張はします。今でも、出なくていいものなら、出たくはありませんから……それに」

「それに？」

「わたしなどが、サリヴァンさまの隣にいていいものか……」

騎士としてなら、女ということとは関係なく、サリヴァンの隣にいられるだろう。けれどもツェイルには、婚約者という肩書きが先達ている。森の中で逢った女性に言われたことが、あのときはそう痛手でもなかったのに、今はとても痛い。

「だいじょうぶですよ、姫」

ラクウィルの明るい声に慰められるも、俯いた顔を上げることはできない。きつと今、自分はとても顔色が悪いだろう。もうすでに緊張している状態だ。

「だいじょうぶ。サリヴァンは、姫を護りますよ」

「わたしは護りたいのではありません。わたしが……」

ぎゅっと、拳を握る。

護りたいと、サリヴァンは言うてくれた。そのとき震えていた手

を、ツェイルは忘れない。

あのとき、なぜサリヴァンが手を震わせていたのか、それはわからない。まだ腕が痛んでいたのかもしれないし、なにか別のことに緊張していたのかもしれないし、ツェイルにかけた言葉が勇気のいるものだったのかもしれないし、それらをツェイルが推し量れるものではない。

もしかしたらサリヴァンは、ツェイルを夜会に出すその行動に伴うことを、危惧していたのかもしれない。

けれども。

「わたしが、サリヴァンさまを、護りたいのです」

人として危うく、儂く、壊れてしまいそうな人だ。その背に負っているものは、ツェイルなどには想像だにできない。ラクウイルやルカイアがいくらかの負担はしてくれているだろうが、その中に、ツェイルも加わりたいと思うのだ。

「……なら、あれを着て、サリヴァンの隣にいてください」

ラクウイルが苦笑をこぼし、あれ、と寢室のほうを指差す。

寢室には、サリヴァンから届けられた夜会用の衣装が運ばれていた。ツェイルはそれを、まだ見ていない。見られなくて、どうしようかと迷って、ぐずぐずしていたら、見かねたりりが説得のためにラクウイルを呼んで、今に至るのだ。

「……わたしに礼装ドレスは似合いません」

「はは。ちゃんと見てないですね、姫。まずはものを見てから迷いましょうよ」

「見なくてもわかります」

姉と妹に、本気で胸に詰めものをするかと悩まれたほどの、貧相な身体だ。どんなものが見なくても、この貧相さを隠せるだけの衣装ではないことくらい、手に取るようにわかる。着られるわけがない。見られるわけがない。

「姫、サリヴァンは言ったはずですよ。礼装ドレスなんか着なくてもいい、おれが用意したものを着ろって」

「……貴族の令嬢は、下衣を穿きません」

「サリヴァンの言質を取っていいんですよ、そこは」

そう言って、ラクウィルはリリを呼び、寝室から衣装を運ばせようとす。ツェイルは慌てて立ち上がり、それを見ないようにするために逃げようと思ったが、突如として開いた扉がツェイルを硬直させた。

「……まだ着替えてないのか」

やはり唐突に現われるサリヴァンだ。しかも、その衣装は今までになく華美で、ツェイルは思わず放心してしまう。

宝石などの装飾は、一切身につけていない。胸に、ルーフという名の真っ白な花が添えられているだけで、サリヴァンの美しさと清廉さ、荘厳さが引き出されている。まるで花に合わせたかのように、真っ白な衣装がサリヴァンを包んでいるようだ。ところどころ光っているのは、サリヴァンの淡い金色の髪と、衣装に織り込まれた細かな金糸と銀糸の刺繍だろう。

相も変わらず、ツェイルの婚約者だという皇帝陛下は、綺麗だ。

「そろそろ時間だぞ。リリ、早く着替えさせろ」

「はいっ、申し訳ございません！」

「いやがるなら……おれが着替えさせようか？」

にやり、と笑ってそれを言ったから、ツェイルはハッとわれに返り、慌ててリリと寝室に駆け込んだ。

扉を閉めた向こうで、サリヴァンとラクウイルの笑い声が聞こえた。

「さあツェイルさま、着替えますよ！」

「……ひとりで着られる」

「え？ 陛下に手伝ってもらいますか？」

この侍女は、なんとというか、学習能力が高過ぎる。

ため息をつくくと、仕方なく着替えることにし、箱に入っているらしい衣装の前に立つ。気は重いが、このままでは本当にサリヴァンが手伝いに来そうなので、我慢するしかない。

蓋を、ゆっくりと、その覚悟を決めて手に取った。

「……え？」

目に入った、白い色。

そして、その形。

「さあ着替えましょう、ツェイルさま」

なんでもないかのように笑うリリを、思わず凝視した。

「……これ、に？」

「ええ」

箱の中には、礼装ドレスではなく、神官服が入っていた。いや、正確には神官服に似せた衣装だ。手に取って広げると、それが本当にドレスではないことがわかる。

踝まで長い前合わせの上着に、緩い下衣である。上着の袖口は広く、少し長めで、襟が高い。至るところが光って見えるのは、金糸と銀糸の刺繍が細かに入れられているからだろう。

明らかに、女性用の礼装ではない。
が、ツェイルにしか着られない女性用の礼装ではある。

「これを、着るのか？」

「はい。陛下からですよ」

「サリヴァンさま、から？」

礼装ドレスは着なくていいと言っていたが、本当に着なくていいのだろうか。

「本当に、これか？」

疑うが、リリの笑顔は崩れない。

「時間がありませんから、早く着替えますよ」

そう促されて、疑問が晴れないまま、ツェイルはリリの手でさつさと服を脱がされ、神官服を着つけられる。ふだん着ているものよりも少し重く、しかし柔らかかなそれは、ツェイルの身体にぴったりだった。

「帯剣できるよう、帯もあります。これは上着の中に着用してください」

さい」

「……帯剣していいのか？」

「こっそり、です。ツェイルさまの剣は小柄ですから、上着の中に隠れますでしょう」

剣を帯びるためのものまで用意されていて、それを腰に巻き、銀の剣を掲げる。上着に隠れるとリリは言ったが、完全に隠れたわけではなく、柄の先が少し見える程度に隠れていた。

「いいのか？」

「お似合いですよ」

いや、そうではなく。

「夜会、なのに」

「ツェイルさまになにかあってはなりません。お護りだと言えば周囲は納得しますし、実際にお護りにして小剣を持ち歩いている令嬢は多くいらっしゃいます。だいじょうぶですよ」

まあ、姉も小剣は常に所持していた。だが、それはメルエイラ家の者だからだと、ツェイルは思っていた。どうやら一般的なことからしい。

本当によいのだろうかと少し疑いつつも、最後に長くない髪をリリに梳ってもらい、軽く化粧された。

そうして。

「……ふむ」

短時間で準備を終えたツェイルを居間で迎えたのは、満面笑顔の

ラクウィルと、満足そうに微笑むサリヴァンだった。

「あの……よろしいのですか？」

「ん？」

「礼装^{ドレス}、ではないので……」

「気に入らないか」

「いいえ、わたしの性分にはとても合っています。こういうのは動きやすく、好きです。ですが、今日これで夜会にというのは……」

周囲の目が気にならない、わけではないのだ。

ツェイルはいい。なにを言われても、言われ慣れていいるから気にならない。けれども、今日の夜会は、サリヴァンの隣にいることになる。ともすればサリヴァンが侮辱されかねない。

「気にするな」

にこ、とサリヴァンは笑う。

「ですが」

「おれはおまえの？」

「……婚約者です」

「婚約者のおれが、おまえに贈ったものが、それだ。文句あるか？」
「ありません」

見ただけでもわかる上等な品だ。本当ならこんなによくしてもらう必要などないのに、サリヴァンのその心遣いと態度が、ツェイルを喜ばせている。

「今日は、確かに名目上は夜会だ。だが、雅なものではない。通過儀礼的な部分が多いだろう。ゆえに、賑やかでも種の違う賑やかさ

が、場を包むはずだ」

「それは……隣国の、公主のことです？」

「なにが起こるか分からない」

だから帯剣する必要がある、とサリヴァンはツェイルの上着に隠れた剣を指差して言う。

「……わたしを、騎士にしてくださいませんか？」

「今夜は、な」

「今夜だけ、ですか」

それは少し残念が、婚約者としてだけでなく、騎士としてもそばにいていいというのなら、それはツェイルにとって嬉しいことだ。

「ツェイル」

名を呼ばれて、顔を上げれば。

サリヴァンは笑みを消し、神妙な眼差しをしていた。

「ツェイル」

「……はい」

返事をする、と、サリヴァンの両手が、ツェイルの両手を掬った。

「今宵は本当に、なにが起こるか分からない」

「はい」

「そんな場に、おまえを連れていくのは、どうかとも思う。だが、連れていく」

「……はい」

サリヴァンが、なにを思ってツェイルを夜会に出そうと思ったのか、それは計り知れない。けれども、なんらかの意図と、なにかしらの意味を含ませて臨まんとしている。ツェイルが知る必要があるところではないというだけのことだろう。

だからツェイルは、サリヴァンを護るために、そばにいようと思う。

剣を揮えないサリヴァンの、その腕になろうと思う。

「ツェイル」

握られた両手に、力が込められる。引き寄せられた両手に、その指先に、サリヴァンの唇が触れた。

「さ……サリヴァンさま」

皇帝陛下のすることではない。忠誠を誓う騎士が、あるじに敬愛を示す態度だ。

ツェイルは慌てて手を引こうとしたが、思った以上にサリヴァンの力は強く、解けなかった。

「願わくは、天地の王よりの庇護と加護を」

「サリヴァンさま……」

「おれはおまえに護られる。おれもおまえを護る。だから……今宵はわがそばに」

恥ずかしいことをよくもすらすらと言えるものだ。この前もそうだったが、愛の告白をされているようで齒痒い。いや、愛の告白だと感じさせるようなものを言っから、ドキドキしてしまうのが困ったものだ。

ああ、もしかしたら。

ツェイルは心臓の高鳴りに、今まで感じたこともないそれに、ふと思う。

わたしはこの人に惹かれているのかもしれない。

そう考えたら、なぜか心にしっくりときた。

「ツェイル」

幾度めと知れなく名を呼ばれると、握った手を引かれ、いつかのときのようにすっぽりと抱きしめられた。

「おれのそばから離れるな。なにがあっても、おれのそばにいる」

サリヴァンのその声に、胸が震える。

心が震える。

護りたいと、思うから。

護らせてくれと、言ってくれたから。

「……今宵、わたしはあなたの騎士に。願わくは天地の王よりの庇護と加護を」

あなたを護りたいと思ったのは、婚約者となったからではない。メルエイラ家の力を欲され、攫われるように連れて来られたにしても、この心はサリヴァンを護りたいと思った。

だから、護ろう。

「……すまない、ツエイル」

抱きしめられる強さに、安堵感が込み上げる。この人のそばにいたいと、いなければと、強く思う。

頭に擦り寄ってきたサリヴァンの頬が優しく、暖かで、なんだか、いとしかつた。

「今生の別れでもあるまいに……」

ハッと、ラクウイルのその声にわれに返った。状況を思い出して、身体が強張った。

「そんなんじゃないいいものも悪くなるといいますが……」

「だ、ダンガード侍従長っ」

「気張ったらあっちの思惑通りでしょーよう」

「侍従長っ、いいところなのにつ」

「だってそーでしょーリリい？」

「わたしは邪魔したくないのに！」

ラクウイルとリリのやり取りに、顔が引き攣った。見られた、恥ずかしい、という思いが一気に身体を突き抜け、しかしその衝撃に動けずにいると、頭上からサリヴァンの舌打ちが聞こえた。

「ラク」

「なんですう」

「今日ほどおまえの思考を疑わしく思ったことはない」

「え、いつでも前向きですよ？」

「……前向き過ぎて、腹が立つこともあるのだな」

「ああ、邪魔しちゃいました？ ごめんなさい」
「無意識か！」

ラクウィルのなにに落胆したのか知らないが、肩を落としたサリヴァンがそつと抱擁を解いてくれたので、ツェイルは恥ずかしさから逃れた安堵にホッと息をついた。

「状況はともかく、言葉だけ聞いてたらねえ……ねえサリヴァン、あなたは国主なんですよ？」

「反省の色もないか……おれが国主であることが、なんだ」

「国主である前に？」

「は？」

「国主である前に、あなたは何に者です」

まだ肩に置かれているサリヴァンの手のひらが、びくりと痙攣した。どうしたのだろうか顔を見ると、そこには無表情のサリヴァンがいた。

「ねえ、姫」

ラクウィルの、先刻とは違う低い声が、唐突にツェイルを呼ぶ。

振り向けば、こちらも無表情のラクウィルが、ツェイルを見つめていた。

「サリヴァンの名前、わかります？」

「……サリヴァンさま、と」

急になんだらう。

眉をひそめると、ラクウィルはとたんに笑みを浮かべた。

「それを忘れないでください」

「……はい、それはもちろん」

「じゃ、そろそろ行きましようか。今夜はおれもそばにいます。ちよつと上着だけ変えてくるので、一服してお待ちください」

そう言つと、ラクウィルは一礼し、すたすたと部屋を出て行った。

中途半端に残った気まずい空気に、リリが脱落もせずお茶の用意をしてくれたので、ツェイルは首を傾げつつもサリヴァンに椅子を勧めることができた。

「……ツェイル」

「は、はい」

未だ無表情のままだったサリヴァンに呼ばれて、なんだか気まずい思いをしていたツェイルは、肩を震わせながら返事をしてしまう。

「言い忘れていたが」

「……なんでしょう」

じつとサリヴァンに見つめられ、かと思つたら、にっこりとサリヴァンが笑った。

「よく、似合っている」

それが衣装のことだと気づくまで、時間を要した。

なんだかよくわからないが、とにかくツェイルの格好に満足はしているらしいサリヴァンに、贈ってくれたことの礼を言い、リリが淹れてくれたお茶をゆっくりと飲んでみると、上着を変えたラクウイルが戻ってきた。

いつもの灰色の侍従服ではなく、白い騎士服だ。腰には帯剣までしている。

「……ラクウイルさま？」

「はい？」

騎士つばいとは思っていたが、これでは本当に侍従ではなく、騎士そのものだ。

「ああ、これですか？ おれも、今夜はこういう格好でいなきゃならないもので……あとでご説明しますよ」

「そう、ですか」

「あと、おれのごときはラクでいいですよ。さま、とつけられるほど偉くないもので」

「ですが」

「おれ、平民の出ですから」

「え？」

乳兄弟なら、貴族であるはずだと認識していたが、違うらしい。

「いろいろありましてね。おれは、サリヴァンに拾われたんです。子どもの時分にね」

「……そうだったのですか」

「なので、敬語も不要なのですが……まあ、そこは姫にお任せします」

リリに対してもしばらく時間がかかった口調だ。ラクウィルにもそうしていいと言われても、やはりもう少し時間がかかりそうである。

それに、ツェイルは貴族だから平民だからと、その人を区別しない。メルエイラ家が生粋の貴族ではないからという概念もあるが、そういった偏見がさまざまな場面で邪魔をすることもあって知っているから、そこまで寛大になる必要はないだろうと思っているからだ。

「わたしに対しても、敬語は不要です。リリにもそう言っているのですが」

「おれのこれは地ですよ。リリは……たまに崩れてますから、いいんじゃないですか」

「……そういうことに、しておきます」

ラクウィルの調子の軽さは、その腹が見えない分恐ろしく感じることもあるが、基本的に能天気であるらしいことはサリヴァンとの会話で窺えるので、むしろ逆に気に入っている。ラクウィルのような性格になれたら、と思わなくもない。

「さて、じゃあ行きましょう。夜会は滞りなく始まりました。あとはサリヴァンが入場するだけです」

ラクウィルはくるりと身体の向きを変え、サリヴァンに声をかける。ああ、と頷いたサリヴァンは椅子を離れた。

「公子は？」

「ルカイアが案内して、そばにいます」

「そうか……」

スツと、サリヴァンの手がツェイルに差し出される。

「行くぞ、ツェイル」

なにかに怯えているようにも見て取れるサリヴァンの双眸をじっと見つめ、ツェイルはその手を取ると頷いた。

サリヴァンの手のひらは、やはり少し、冷たかった。

「歩きながらで悪いが、説明しておく。隣国、シエリアン公国との問題のことだ」

サリヴァンと手を繋いだ状態で、ツェイルは初めて部屋の外を、廊下が続く側の外を歩く。先導にラクウィルが歩き、ぼつぼつと近衛騎士がついて歩いてきた。

「揉めている、とのことでしたが」

「言ってしまうば戦争と紙一重だ」

「戦争？」

そんな事態になろうとしていたのか、とツェイルは瞠目する。

ここ十数年、ヴァリアス帝国は平和を維持していた。もともと戦

争の経験もそれほどあるわけではなく、だがしかし機械技術がほとんどの国民に浸透しているほど特化した先進国だ。三大国と呼ばれる一つに座していることで、どこの国もヴァリアス帝国には刃を向けず、いかに仲良くやっていくかを常に練るほどの力を、ヴァリアス帝国は所持している。

ゆえに戦争など、ツェイルはメルエイラ家の者ゆえに知識を持っているが、経験した者はそう多くない。

「シエリアン公国は、多民族の集合体。情報の国だ。ゆえに、流れるものが多い。流されるものも然り。その中に、武具の大量流出と、密輸、密造があった」

「武具……エンバルのもの、ですか？」

「ああ」

ヴァリアス帝国北部に位置する工業都市エンバルは、大型の武具開発、製造を主体とした工業が最も発達した街で、ツェイルも幾度か行ったことがある。個人が所有する武具を開発、製造する職人もいるので、メルエイラ家が御用達にしている職人がそこにいるのだ。

「なにかのためにと目録を作らせておいたことと、商人が襲われる事件が続いたことで、その詳細がわかった。どうも賊は、丁寧でな。武具だけ奪えばいいと考えたらしい。魔の仕業にもできただろうに、それをしなかつた愚かさか、流出先を割り出させてくれた」

「まさかシエリアン公国に？」

「そう。だから問題になった。エンバルの武具は、即ちヴァリアスの武具だ。それらを持った奴が公民を傷つけてみる。責任はヴァリアスに来る」

ヴァリアス帝国の武具は、少々特殊だ。他国には真似できない技術で製造されているため、一目でわかる。ゆえに、輸出は制限され、

国家間でのものに限られていた。武器に限らずヴァリアス帝国には経済を安定させられるものを輸出できる力があるからこそ、できることだった。

「……なにがしたかったのです」

「ヴァリアスを、シエリアンの後宮争いに、後継者争いに、介入させたかったらしい」

瞬間的にツェイルは、わが身のことを考えた。

サリヴァンの身を考えて。

ツェイルはルカイアに攫われるようにして、後宮に来た。

サリヴァンは婚姻を渋り、後宮に多くの妃候補を、宰相を始めとする上位貴族の思惑によって集められた。

まるで明日にも自分に降りかかりそうな争いだ。

「……ツェイル」

俯いたツェイルを、サリヴァンが案じてきてくれた。

「いえ……まるで、今のわたしのような、状態だと」

「おれもそう思う。だが、後宮に滞在していた者たちには、ツェイルとの婚約が決まったその日に、全員に退去命令を出した」

「え？」

「刺客に襲われたことを、申し訳ないが利用させてもらった。そうでもしないと、側室にどうかとまた押しつけられるからな」

うんざりだ、と言わんばかりにサリヴァンがため息をついたので、兄の愚行も少しは役に立つたらしいとツェイルはホッとす。

「そのたびは本当に申し訳ないことを致しましたが、利用できる価値があったことには感謝します」

「……ツアインの目論見どおりだ」

「は？」

「いや。とにかく、ヴァリアスが同じ轍を踏む事態は避けた。そもそもツェイルが婚約者となって、文句を言える奴などいない」

「……言われましたが」

「だから今、おまえはここにいる」

ツェイルが夜会に出なければならなかったのは、そのことが要因でもあるらしい。

「上位十二貴族なら、メルエイラ家の力を知っているからな。そういう者がおれのそばにいるなら、と諦めるのがふつうだ」

「けれども、諦めないお方がいる、と」

「そういうことだ。まあ、そうやって野心が無駄に強い貴族を炙り出すのを、ルカは目的の一つにしているが」

「ルカさまの目的……」

争いを避けたいと考えるなら、そう考えるサリヴァンの意向を汲むべきである。ルカイアはそれを汲んでいると考えていいだろうが、サリヴァンの様子からなんだか不服そうに見える。

「ルカの考えていることは、手に取るようにわかる。わかるから、なにをされるかわからない。ツアインが刺客を放ったこと、ルカが背後にいたのだと、くれぐれも忘れてくれるな」

「それは……ですが、なぜルカさまがそのようなことをしたのか」

わからない、と首を傾げれば、サリヴァンはたびたびため息をつ

いた。

「おれを国に縛りたいからだよ」

「……サリヴァンさまは国主でございましょう」

国主は国に縛られ、犠牲となるものだ。皇帝陛下は国の象徴となり、国のためにその身を削るものだ。それを自覚しているようであるサリヴァンを、さらに縛りたいと考えるルカイアの考えは、ツェイルにはいまいち理解できない。

「ルカは、おれの言葉を信用しない」

「なぜ？」

「さあな……もともと利害が一致しているだけの関係だ。そこまでは許容範囲にないというだけのことだろう」

利害が一致しているだけの関係。

前にも聞いた言葉だ。

貴族の中には、将来を考えて、親が勝手な行動を取ることが多々ある。学友であったり幼馴染という関係を強要したりするのも、その一つだ。無理にその関係を作らせられるわけだが、当人たちにしてみれば親のその意向など関係ない。気が合えば一生ものの関係はできるし、気が合わなければそれは消える。

サリヴァンとルカイアには、そういった親の強要関係が見えなかった。

「幼馴染、なのでは？」

「ラクほど一緒にいたわけではない。それに、おれが一方的にそう考えるだけで、ルカはそう考えてもいないだろう」

それは、なんだか寂しくなる言葉で。
やはりサリヴァンの瞳も、悲しげだった。

「今宵はルカを危険視する必要はないが……まあ、なにも起きないことを祈るしかないな」

「……なにも、起きません。今宵は、なにも」

「そう、だな」

繋いだ手のひらを、互いにぎゅっと、強く握った。

「……着きましたよ、おふたりさん」

ラクウィルの声に、揃って足が止まる。

対峙した扉の向こうから、艶やかな音楽と人の声がした。

入場とともに浴びる、多くの視線。

そこに含まれている思考には、息が詰まりそうになる。

それでも。

「顔を上げる、ツェイル」

サリヴァンにそう言われて。

「おまえが臆することはない」

だいじょうぶだと囁かれて。

「そばにいる」

繋いだ手が離れることなく引つ張られると、ひどく安心した。

だからツェイルは、大きく深呼吸すると、今までにない緊張を押し隠し、前を見た。

玉座にサリヴァンが向かう。

右隣をラクウィルが歩き、左隣はツェイルが、手を繋いだまま歩んだ。

「今宵はよくぞ集まってくれた」

「サリヴァンの口上が、玉座に着いた途端に始まる。」

小規模の夜会には、男女それぞれ二十人程度が集まり、一様に緊張したような面差しをしていた。煌びやかな衣装をまとっているが、誰もが緊張し、強張っている。ツェイルはメルエイラ家の者として、それらを敏感に感じ取った。

ああ、皆が隣国との問題に、警戒を露わにしている。
その行方を案じている。

夜会に出たくないと思っていたことに、その筋違いさに、ツェイルは恥ずかしくなった。

「姫、どうしました？」

「いえ。しっかりと、気を持たねばと」

そうだ、今は、隣国との問題だ。

ツェイルはしっかりと息をつき、真っ直ぐと前を見据える。皆が緊張しているのだ。その緊張に、ツェイルは吞まれてはいけない。サリヴァンを護るためにここにいるのだから、いつだって目を光らせていなければならない。

周りをそれぞれ見渡して、見たことのある顔をいくつか見つける。その中に、赤いドレスをまとった妙齡の女性が、森で逢った女性の姿があった。ばつちりと目が合い、ギッと強く睨まれる。

「ツェイル？」

呼ばれて、ハツと視線をサリヴァンに戻す。挨拶は終えたらしい。目の前にいつのまにか、自分と同じくらいの少年が、正装服を着こなして立っていた。少年の斜め後ろには、ルカイアがいる。

「……隣国、シエリアン公国の、キサネ・クロフト公子だ。公子、こちらはわが婚約者、ウエル・メルエイラ嬢、ツェイルという」
「ツェイル・メルエイラと申します」

失礼がないようにと思っても、一国の公子を相手に、やはり緊張はする。だがどうやら相手も緊張しているようで、ぎくしゃくとしていた。

「キサネ・クロフト・シエリアンと申します。今宵はお招きくださり、誠に感謝しております」

声が震えている。けれども、深く一礼してから上げた顔には、強い意志が感じられた。

「今宵の夜会、気兼ねなく楽しまれるといい。わたしはそのつもりでいる。なにか不都合なことがあればラッセ宰相に、或いはわたしでもいい」

「恐れ多いことはありませんが、ありがとうございます」

「わたしはきみの決断を評価している。どうか、その心に揺らぎを起こさぬよう。きみとは、これからもよい関係でありたい」

「はい。わたしを受け入れてくださった陛下には、感謝の限りです。陛下を裏切るような真似は、絶対に致しません」

強い意志を見せる公子に、サリヴァンもツェイルと同じことを感じ取ったらしい。ふっと微笑んだ。

「きみのような公子が、もっと早くに公主となっておれば、このようなことにはならなかったかもしれないな」

「……先にも申しました。わが国、シエリアンは、もうどうしようもないのです。陛下のお手を煩わせてしまい、申し訳ありません」

「……本当に、よいのか？」

「はい。わが国は、光りの天恵者によって、予言が下されました。わたしはそれを受け入れます」

「……、そうか」

サリヴァンは、少しだけ、その微笑みに悲しさのようなものを滲ませた。揺るぎを見せない強い意志を放つ公子の肩を、優しくポンポンと撫でる。公子は一瞬だけ驚き、そうしてその赤茶色の瞳を僅かに潤わせた。

「きみの身柄は、帝国預かりとする。明日からは、使者でも客人でもない。よいな」

「はい、陛下」

「……ではここに、シエリアン公国の領地没収と、クロフト家の公^{イル}爵位剥奪を宣言しよう」

その瞬間、場内が一気に静寂化した。

ツェイルはもちろんサリヴァンと公子の会話を理解できるわけもないが、ただ、尋常ではない決断が為されたのだらうということはわかった。

「公子、今宵はきみとって、公子最後の日であり、最後の夜会だ。存分に楽しまれよ」

そう言うと、サリヴァンはルカイアを促し、公子を連れて行かせ

た。

静かだった場内は、サリヴァンの宣言ののち、徐々に賑やかさを取り戻していく。サリヴァンの指示で音楽も奏でられると、おそらくは公子のためであるうと思われる、同年齢ほどの少年少女が、公子の周りに集められていた。

それらを見て、ツェイルはふと思う。

「今宵は、宣言のための、夜会だったのですね」

「……ああ。或いは、試したとも言える」

「試す？」

「公子の決意だ。まあ、無駄ではあったが」

よかった、とサリヴァンは胸を撫で下ろしていた。

「……経緯を、お訊ねしても？」

「キサネ公子は、公位継承第一位だ。しかし母君、公妃は随分と前に亡くなられている。そのせいで、後宮では肩身の狭い思いをしていた。公主が側室を娶らねばよかったのだが、継承権を持つ者がひとりでは、なにかと不安にもなる。後宮に入った者たちは、公妃の座を虎視眈々と狙い、ついには公子を弑さんと動いた。それだけでなく、公主の座を狙う者も、出てきてな」

内側からすでに、シェリアン公国は壊されかけていたらしい。

「正確には、公主を操りたかった連中だ。キサネ公子はあのとおり、至極真面目な性格ゆえ、操るには不都合がある。側室の子らであれば、操るには容易だ。それらを狙ったシェリアン公国内の貴族が、今回の争いを仕掛けてきたといわけだ」

側室に入った者が、国の実権を握らんとする貴族から排出されていたからこそ、そういった争いが起きたのだろう。

「後宮の争いに、帝国を巻き込まんとした、のですか」

「エンバルの武具を使って、な。まるでヴァリアスから先制攻撃を仕掛けたかのように謀略を張り、シェリアンの実権を握らんとした。あわよくばヴァリアスを、とも考えていたかもしれないな」

「無謀な……」

「エンバルの武具を持てば、過信してもおかしくはない」

そうかもしれない。

けれども、恐れ多いことだと、なぜ思わなかったのだろう。

「公子は、どうやってここへ？」

「天恵者だ」

「天恵……お持ちなのですか」

「ああ。ただ、どんな天恵かは、まだわからないそうだ」

「わからないのに、天恵者と？」

そんなことがあるのか、とツイェイルは怪訝に思う。

天恵とは生まれながらに所持するもので、使い方は人それぞれであるが、大抵は幼い頃に属性や使い方を知り、学び、必要となったら精霊と契約して、天恵術師になる。

ツイェイルはその法則から外れた天恵者ではあるが、法則から外れた者は稀少だ。なのに、それからさらに外れた天恵者がいるなど、聞いたことがない。

「ウォリアム、という存在を、知っているか？」

「ウォリアム……はい、《天地狼》のことですね。天地の王より遣わされし獣と、祭神殿で教わりました」

「それが、キサネ公子を選んだ」

「……え？」

まさか、とツェイルは瞠目する。

ウォリアムは、空想上の生きものであると、祭神殿の神官でさえ苦笑しながら言っていた。つまりは、神に仕える人々ですら、その存在を確信していない獣だ。

「魔と、勘違いされておいででは？」

獣の大抵は、魔と紙一重だ。姿形が似ており、毛の色も似ていることがある。違うのは、人語を解し話せる知力があるか、ないか。或いは、知力がなくとも黒毛の獣はすべて、魔であることだ。ほとんどは毛の色で魔かどうか判断される。

そして魔は、ヴァリアス帝国において、忌避されている。

「おまえは、魔を忌避するか」

「……いいえ。わが力のことを考えれば、魔は、わが同胞……そう考えております」

魔は、ヴァリアス帝国の人々が思うほどの存在ではない。ツェイルはそれを知っている。魔は基本的に温厚でおとなしい。知力があれば、話し相手にもなるし相談相手にもなる。ときには人助けもすること、ツェイルは知っている。

けれども魔は、その存在が闇を思わせるため、ヴァリアス帝国の人々は恐れる。ゆえに見かければ狩り、駆逐せんとする。そのせい

かヴァリアス帝国内の魔の数は少なく、今では山の奥深くに足を踏み入れても、野生の獣に命を奪われるか、賊に奪われるか、という状態だ。どこを探しても、魔に出逢える確立は低い。

「おれは魔を一匹、知っている。この歳になって初めて目にした魔だが、やはりその魔とウオリアムは違う。ウオリアムは、あれは本当に、神の遣いだ」

「まさか……」

「疑いたいか。まあ、そうだろうな。だがおれは、神の遣いなら、見分けられる」

「え？」

「猊下の鳥……聖鳥フェンリス。その背に、幾度か乗せてもらった」

嘘だろう、と言いたい。だが、嘘についても意味がないことだ。

そもそも、このヴァリアス帝国には、聖王と呼ばれる神々の長がいる。ツェイルも一度は逢わねばならないそうだが、未だツェイルは信じられずにいた。

だが、今度こそ、信じねばならないのかもしれない。

「神の遣いたる、聖鳥に……お乗りに？」

「大きいからな。猊下を乗せられないと嘆くから、おれが乗った。今でもたまに、頼めば乗せてくれる。いつかツェイルも乗せてもらえ。空からの帝国は、また見方が変わるぞ」

そんな簡単に言ってくれるな、と思う。神の存在を未だ疑っているのに、簡単に返事はできない。

「そういうことだから、キサネ公子を選んだ獣は、神の遣いだ。神の遣いが選んだ者……それが天恵と言える。一般的な天恵術師が精

霊と契約するように、キサネ公子はウォリアムと契約したというだけの、その違いだ」

随分と大きな違いだと思うのは、ツエイルだけだろうか。

「ですが、なぜどんな天恵かわからないと？」

「生まれたてのウォリアムらしい」

「……生まれたて？」

「自分の存在を、まだ理解していない。ウォリアムだということしか、わからないらしい」

「なんて曖昧な……」

「生まれたてなのだから仕方あるまい」

「まあ、そうですが……」

そんなこともこの世界、ラーレでは起きるらしい。

今さらながら、己れが産まれたこの世界は、不思議だらけだ。いや、ツエイルが無知であるだけだが、それにしても、皇帝陛下が自らこうして真剣に話していることを、世間では教えない。

なぜ、国主であり皇帝陛下が当たり前のように理解していることを、城下では、いや世間では、当たり前のように理解させないのだろう。神の存在を信じ祀っているくせに、神の遣いは信じない。

それはとてもおかしいことだ。

「ウォリアムの導きで、キサネ公子はここに、おれのところに現われた。暗殺されたと噂に聞いていたが、それは公主によって避けられたとのことだ。そのすぐあとにウォリアムに選ばれ、公主の願いを持って、逃げ延びた、と」

「ウォリアムのおかげで……和解が？」

「和解……というか、聞いていたと思うが、結果的にはキサネ公子

の爵位を剥奪した。領地も」

「そうしなければ、公子を弑さんとした者たちを一掃できないから、ですか？」

「それもあるが、クロフト家にはもう、公国を治める力がない。貴族の言いなりでは、特に」

公子は、もうどうしようもない、と確かに言っていた。それなら、サリヴァンのその判断は、正しいのかもしれない。

「……明日からは、使者でも客人でもないそうですが」

「帝国預かりだ」

「それは、つまり？」

まさか罪人ではあるまい。

「おれの力が及ぶ限りで、天恵術師として迎える。その身柄はルカに預けた」

「……ルカさまが後見、ですか」

「悪いようにはしないだろう。キサネ公子のあれを見れば、な」

公子を囲む人ばかり。中央の公子を護るように、ルカイアは立っている。確かに、ルカイアのある態度なら、公子は安全だろう。ツエイルを攫うようにして連れてきたときは、反対の態度のようにも見えなくはない。

「公主はどうなるのですか？」

「今宵の宣言は、明日公表される。クロフト公爵を拘束という名目で保護したのち、謀略を張った貴族は捕縛される」

ちらっと、サリヴァンが講堂の窓に視線を投げる。

まん丸の月が大小二つ、美しく輝いている。

「その、予定だったんだがな……」

ぼそりと、そう呟かれたときだった。

「きゃーっ！」

講堂中に大きな悲鳴が、響いた。

16 : 心を閉じて小さな声で。 3 (後書き)

楽しんでいただければ幸いです。

17 : 心を閉じて小さな声で。4 (前書き)

わずかですが流血描写があります。
苦手な方はご注意ください。

響いた悲鳴に、ツェイルは瞬間的に警戒し、背に隠れている銀の剣の柄を握る。視線を巡らせ、発生源を探すも、探すまでもなく公子がいる場所からだとわかった。

「ラク、公子を」

まるで予期していたかのように、サリヴァンは冷静だった。ラクウィルにその指示を出すと、ラクウィルはサリヴァンの命令に従い、人だかりの中に単身で突っ込んでいく。その手には剣が握られていた。

剣が交り合う鈍い音が響くと、さすがに皆が気づき、逃げ出して散らばっていく。

ツェイルはサリヴァンに肩を掴まれ、身体を引っ張られた。気づけばその腕の中である。

「とんだ夜会だな」

「そのようです……サリヴァンさま、どうかお放しを。わたしはあなたの剣です」

「それは最終手段だ。そのためのおまえをそばに置いていくわけではない」

「ですが……っ」

剣が交り合う鈍い音に、悲鳴、それらが講堂を響かせている。人

だかりが減り、ラクウィルのその姿と、ルカイアに護られた公子が見えた。

「やはり、紛れ込んでいたようだな」

ラクウィルが剣を交えているのは、ふたり。どちらも貴族らしい豪華な衣装をまとっている。ラクウィルに押されているように見えるが、二対一では分が悪い。

「助勢を……っ」

「必要ない」

「なぜ！」

騎士は控えている。こういつときのための護衛であるはずの騎士は、しかし動かずに緊張した面持ちで武器を構えているだけで、動こうとしない。

「巻き込まれるだけだ。ラクは、それほど手加減できる人間ではないからな」

「手加減……？」

「見ていればわかる」

サリヴァンはあくまで冷静だ。それは努めているのではなく、核心している。

ツェイルはじっと、ラクウィルの戦闘を見つめた。

そこに、見慣れないものを、見つける。

「……、あれは」

ラクウィルの隣に、いつのまにか少女が立っている。それも、朱あかい少女。髪も衣装も、肌以外のすべてが燃えるような朱で包まれている。

さらに、瞬いたあとには、しとやかな女性が、こちらは肌以外の全身を茶色のものに包んだ女性だ。

朱の少女が、ラクウィルの剣に、炎を宿らせた。

茶の女性が、ラクウィルの左手に手を添え、重なった手のひらが床につくと、ふたりの襲撃者の足許を崩した。

動きを封じられた襲撃者ふたりに、炎を宿らせたラクウィルの剣が斬りかかる。あつというまに炎に包まれた襲撃者ふたりは、悲鳴を上げた。そうして、倒れる間際、炎が鎮火する。

不思議なことに、漂うはずの焼ける匂いが、しなかった。

「サァリヴァーン、無事ですかあ？」

ラクウィルの、いつもの能天気が講堂に響いた頃、漸く皆の緊張に一息が入った。

「公子は？」

「無事ですよー」

「なら、いい」

本当に、サリヴァンは冷静だ。過ぎるのではいかかというほどに、焦ってもいない。淡々と、無表情をそちらに向けている。

「わかって、おられたのですか」

「予測はしていた。だが、まさか本当に仕掛けるとは、思っていない

かった」

とりあえず驚いてはいるらしいが、ツェイルほどではないようだ。

「公子の命を狙ったのですか？」

「そうとしか考えられまい。だからラクを、連れてきたのだしな」

「……そういえば、先ほどの」

公子に無事の確認をしているルカイアと、やはり少女と女性をそばに置くラクウィル。

幻覚ではない。

「精霊だ。火精霊マチカと、土精霊ルーフェ」

「やはり、精霊……でしたか」

「ああ」

「では、ラクウィルさまは……天恵者？」

「そうだ」

騎士つぼく見えて当然のようだ。

天恵術師であるなら、その地位は騎士と並ぶ。

しかしながら、ラクウィルもツェイルと同様、法則から外れた天恵者のようだ。

「二つの属性天恵を、お持ちなのですね」

それは、代償を支払っていると、いうことだ。

ラクウィルがそうだから、サリヴァンはツェイルのことも、わかったのだろう。

「……ラクが背負っているのは、それだけではないがな」
「え？」

「どういう意味だ、と問おうとして、サリヴァンが移動を始めてしまっ

腕の中に捕らわれたままであることを、ツェイルはこのとき漸く
思い出した。

「サリヴァンさま、お放しを」

サリヴァンが歩くから、ツェイルも一緒に歩くことになる。けれども身体がサリヴァンに密着し、どうにも歩き難い。

「離れるな」

「ですが……」

「まだ終わってない」

「……まだ？」

そんなわけがない、と思う間もなく、講堂の窓硝子が派手な音を立てて壊れ、黒い衣装に身を包んだ侵入者を迎え入れてしまった。先ほどまでサリヴァンとツェイルが立っていた場所だ。

脅威はまだ去ってはいない。

第二波の刺客か、とツェイルはサリヴァンの腕の中で身じろいで、銀の剣の柄を握る。

状況から考えて刺客が狙うのは公子かと思われ、サリヴァンもそのように考えていたようではあったが、なんと刺客は、迷うことなくサリヴァンとツェイルに突っ込んできた。

「下がれ、サリヴァンっ」

咄嗟に、不敬を承知でサリヴァンを押し退け、剣を鞘から抜くと構えた。近衛騎士が駆け寄ってくる姿が視界に入ったが、おそらくは間に合わない。

迎え撃つ。

ツエイルは床を蹴った。

「やめろ、ツエイル！」

サリヴァンの制止が聞こえた。けれどもそれは、ツエイルにとって今さらなことだ。

ツエイルの剣と、刺客の剣が、どちらからともなく鈍い音を出しながら混じり合った。

ああ、殺し合いの剣だ。
久しぶりの実戦だ。

ツエイルは、己れが持つその天恵ゆえに、こういう殺し合いの剣は、実のところ初めてではなかった。むしろその天恵ゆえに、そういった場に身を置いていなければならなかった。

幾度、この人生を呪ったことだろう。

幾度、この天恵を持ち得たことを、恨んだことだろう。

幾度、天恵を与えたもうた神を、罵ったことだろう。

幾度、その虚しさに嘆き、泣いたことだろう。

いつからか、ツエイル天恵に振り回されて生きること、諦めを

持った。この力で家族を護れるのだ、これは誇りだと、そう自分に言い聞かせて、天恵を使うことに躊躇いを持たなくなった。

今も、躊躇いはない。

たとえ、そのせいで喜怒哀楽の反応が薄くなっているとしても、この天恵で護りたいと思うものを、護ることができる。

だから躊躇わない。

ツェイルは銀の剣の柄を握った手に、力を込めた。

詠唱など要らない。

思うだけで、天恵は発動する。

幾度か刺客と剣を交わし、頃合いを見計らって重い一打をなぎ払ったとき、その勢いのまま、天恵が発動した。

パンッ、となにかが破裂する音。

「…っ…ぎゃあああああ！」

耳を劈く刺客の断末魔が講堂中に響いたとき、ツェイルは肩で息をしながら、白い衣装を赤く染めていた。

ツェイルの周りは赤く染まっている。鉄錆の匂いが充満している。刺客が、全身を針のようなもので細かく刺され絶命した状態で、ツェイルの目の前に倒れている。

誰かを殺した、という感覚はなかった。

誰かが死んだ、という感覚もなかった。

ただ、なにかが壊れたという、感覚があった。

けれども。

「ツェイル……」

誰かがわたしを呼んでいる。わたしを、わたしたらんものとする人に、呼ばれている。

振り向くと、サリヴァンが泣きそうな顔をして、立っていた。

瞬間、ツェイルはわれに戻る。

足許の赤いものを見て、握った剣を見て、血溜まりの中にある己の凄惨な姿を見て、絶句した。

「……あ」

わたしは人を殺した。
人を、死なせた。

護りたいものを護るために、誰かの死を犠牲にして、生き延びた。

「ツェイル」

サリヴァンに呼ばれて、びっくりと、身体が震えた。

なにを言われるか恐怖した。
立ち去れと言われるのかと、やはりおまえなど要らないと言われ
るのかと、恐怖した。

「ツェイル……おいで」

その言葉に、ツェイルはハッと瞠目する。

「おいで、ツェイル」

優しい声だった。

今にも泣いてしまいそうな顔をしているのに、広げた両腕はツェイルを待っていた。

「おいで」

声に、涙が込み上げた。

その優しさに、たまらなく、安堵した。

「サリヴァン、さま……っ」

ツェイルは俯き、涙をこらえ、拳を握る。

「ごめ……な、さ……っ」

あなたはこんな力を、望んでいない。

それでも、わたしはあなたを護りたかった。

こんな力で、ごめんなさい。

「ごめんな、さい……い」

いくら涙をこらえようとしても、どういったわけか、涙は次から次へとこぼれ落ちる。ぼたぼたと、足許の血溜まりに落ちるそのさまは、己れの傲慢さを表わしているようだった。

「ツェイル」

動かないツェイルに痺れを切らしたサリヴァンが、目の前に来た。

「ごめんなさい、と紡ごうとして、言う前に、ぬくもりがツェイルを包む。ぎゅっと強い抱擁は、こらえようとしていた涙を、増長させた。

「無茶をしてくれるな」

頭に頬を擦り寄らせてきたサリヴァンの、ホッと安堵した吐息を感じたとたん、もう涙はこらえられなかった。

「サリ、ヴァ……さまあ」

握っていた銀の剣の柄を放し、サリヴァンを汚してしまうのに、ツェイルは両腕をサリヴァンの背中にまわしてしがみついた。

「ああ、ツェイル……もうだいじょうぶだ」

サリヴァンの腕の中は、ひどく、安堵した。

18 : 心を閉じて小さな声で。5 (前書き)

サリヴァン視点、サリヴァンほぼ一人称です。

ツエイルの天恵を、見た。

その姿は、神にも見紛うほどの美しさに、溢れていた。
いや、神ではない。

人としての美しさが、そこには溢れているように感じた。

そう感じてしまった己れに、サリヴァンは苦笑せざるを得ない。

あれが生きるということだ。

あれが死を見てきた者の姿だ。

あれが、護りたいものがある者の姿だ。

あれが、ツエイルという少女の、決意だ。

「ツエイル……」

少女の決意を、甘く見ていた。

護ろうとしたこの腕をすり抜け、立ち向かっていったその覚悟を、
甘く見ていた。

躊躇いもなく天恵を発動させたその瞬間の、なんと虚ろな眼差し。

なんてことだ。

「ツエイル」

おまえに、そんな顔をさせたいのではない。

白い衣装をとどころど赤く染めたツェイルは、怯えた瞳でサリヴァンを見る。

なにを怯えるのだ。

「ツェイル……おいで」

おまえのそんな顔は見たくない。

いつか見せてくれた笑みを、また見せて欲しい。

「おいで、ツェイル」

おまえは美しい。

誰よりも強く、誰よりも優しいおまえだから、その天恵が与えられたのだ。

「……サリ、ヴァン……さま」

「おいで」

怯えるなら、おれにではなく、恵みを与えた天に怯えろ。

泣くなら、この腕で、泣け。

泣いて、その悲しみをおれに寄せ。

その寂しさをおれにぶつける。

「おいで、ツェイル」

おまえは美しい。誰よりも、なによりも、美しい。

血染めが似合うということではない。

生きるその姿が、サリヴァンには眩しいほど美しい。

「サリヴァン、さま……っ」

俯くな、前を見る。

「ごめ……な、さ……っ」

謝るな。

おまえは間違っただけだ。

「ごめんな、さい……っ」

謝るな。

おまえは悪くない。

「ツェイル」

間違っていたのは、悪いのは、サリヴァンだ。

初めから、生きることには意欲を持てなかった。いつ死んでもいいと思ってた。いつ殺されてもおかしくない場所にいたから、生きるということがよくわかっていなかった。怯えて暮らすよりも、いつそ晴れやかに殺されたほうが楽だと考えていた。

けれども、ツェイルの姿を見ていたら。

「無茶をしてくれるな」

今までどうでもよかった己れの命が、惜しいと思えた。

「サリ、ヴァ……さまあ」

「ああ、ツェイル……もうだいじょうぶだ」

おまえがここに、おれのそばにいてくれるなら、おれはおまえとの未来を考えられる。

おれは剣でおまえを護ることはできない。

けれども、おれという存在は、おまえを護れる。

もうだいじょうぶだ。

おまえの傍らにありたいと、あり続けたいと思う。

おまえに傍らにあつて欲しいと、あり続けて欲しいと思う。

だから、おれはおまえを、もうなににも囚われずに、欲することができる。

美しいおまえを、見続けていたいから。

その強さに、焦がれずにはいられないから。

偽りの心を閉じて、サリヴァンは小さな声で呟く。

「……これが、いとしいということか」

これが本当の、護りたいものができた、ということなのだ。

ずっと埋もれていた本当の心が満たされていく、そんな感覚が、腕に抱きしめたツェイルをより強く、深く抱きしめさせた。

18 : 心を閉じて小さな声で。 5 (後書き)

読み難いと思われた方、すみません。

19 : 宰相回想録。(前書き)

ルカイア視点です。

『陛下は、少し変わっておられる』

宰相たちの常套句であるそれを聞いたとき、帝国ヴァリアスの国主はほんわかと笑っていた。だが、笑っただけでなにか言い返すことはない。

『のんびりと構えられるのはかまいませんが、少しは焦っていただきたいものです』

『后妃候補の姫君はすでに後宮へいらしておられるのですよ』

『お世継ぎを、とは申しません。その心配は無用です。ですが、だからといってそう構えられるのは、姫君への無礼となりましょう』

宰相は三名いる。うち二名に捲し立てられても、国主はただ微笑み続けていた。なにも言い返さないことをいいことに、宰相ふたりは口々に後宮問題を並べ立てているが、けっきょくは国主を案じての発言だ。

最終的に、宰相ふたりは息切れを起こすほど、喋り続けた。それでも微笑みを絶やさない国主に、がっくりと肩を落としている。

『これだけ言っても、頷きませんか……』

気苦労させているが、これはいつものことなので、宰相ふたりは

今日のところは諦める方針を立て、一番歳若い宰相を残して退室する。

『今日は短かったな』

つきつきとして言う国主に、歳若い宰相ルカイア・ラッセはため息をついた。

『陛下……本当に、真剣に考えておられませんね』

『おれは彼らに遊ばれている』

『陛下が彼らで遊んでおられるからでしょう』

『そう。だから、遊ばれてやっている』

ニツと国主は笑う。こういう場では茶目っ気の多い国主は、いつもその柔らかな微笑みですべてを流し、そしてそのすべてを許容範囲に収めてしまう。懐が深いというよりも、狡猾で計算高いかもしれない。

『どうするおつもりで?』

『いつもどおり。駄目なら、おれは病床に就こう』

軽やかに逃避を宣言され、ルカイアは再びため息をつく。

『陛下……戯れもいい加減にしませんと』

『ルカ。おれは、サリヴァンだよ』

『……陛下』

『サリヴァンだ』

重ねて己れの名を言われ、ルカイアはグツと拳を握る。

それまで国主の顔をしていたサリヴァンは、ふっと苦笑して、少

し生意気な子どもっぽい青年になった。

『今のおれは、サリヴァンだ』

サリヴァンの碧い瞳が、悲しげに暗く光った。それはルカイアに馴染み深い色で、あまり見たくないものだった。

『申し訳ありません、サリヴァンさま』

『いや。こつちこそ悪いな、ルカ』

『謝らないでください。わたしが悪いのです』

皇帝の顔を持つサリヴァンの、その悲しみを抱えた心が痛い。

『ルカが理解ある宰相で、よかつたよ』

サリヴァンは笑う。サリヴァンがルカイアの前に初めて現われたときと同じように、すべてを許容してしまう大らかな微笑みだ。

『さあ、ルカ。今日はもう終わりだ。部屋に戻ってお休み』

『……はい、サリヴァンさま』

『明日は朝から病床に就くつもりだから、どうしても必要なものだけ、運んでくれ。部屋にはいないかもしれないが』

いつもの、茶目つ気のない国主の言葉を使ったサリヴァンは、ルカイアに一瞬でも見せた悲しみを既に消し去っていた。

『できれば政務だけでも、きちんとして欲しいのですが』

『遊ばれてやっているわけだから、そこは許してくれ』

『……わかりました』

頭を悩ませる国主に戻ってしまったサリヴァンに、ルカイアはため息をつくのではなく、苦笑をこぼして見逃すことにした。

「ルカ」

ハッと、ルカイアはわれに返る。

一瞬、目の前のサリヴァンと、回想のサリヴァンが重なり、どちらが現実かわからなくなった。

その腕に、泣き疲れたのであろう眠ったツェイルを抱えていなければ、こちらが現実だとわからず、挙動不審で怪しまれていたかもしれない。

「とんだ夜会だ」

「……申し訳ございません。刺客の存在を予測し、警備を強化したつもりではいましたが、抜け道があったようでございます」

「だろうな……ツェイルを戦わせたんだから」

「申し訳ございません」

公子はとうに、夜会から退場してもらっている。ラクウィルが片づけてすぐ、近衛騎士に命じて居室へ戻ってもらった。その対処をしていたがゆえに、サリヴァンを襲った第二波の襲撃者への対応が遅れ、ツェイルに動いてもらった次第だ。

そして、ツェイルの戦闘ぶりと、天恵を見た。凄まじい天恵だと思った。襲撃者が血塗れで倒れ、絶命し、ふたりの無事が確認でき

ても、ルカイアはその場を動けなかった。

しかし、ツエイルが大泣きし始め、サリヴァンがそれ宥め、こうして話しかけられるまで動けなかったのは、サリヴァンの今までにない穏やかな表情を見たからだった。

少し前までは常に国主の姿勢を崩さず、己れを蔑ろにし、ひたすら国主で在り続けていた、そんなサリヴァンしか、ルカイアは見たことがない。

思わず回想までしたほど、今のサリヴァンには違いがある。

「お怪我は？」

「ない。あつたら、おまえを殺しているところだ」

不愉快そうな顔をして物騒なことを言ってくれるが、声はいやに単調で、瞳は穏やかだ。

「ツエイルさまにも、お怪我はないようですね」

「それこそ、ツエイルに怪我でもさせたら、今のおまえは首と胴が離れ離れだ」

「ご無事でなによりです」

「ふん」

本気で言っているわけではないようだが、不愉快ではあるようだ。

「公子はどうした」

「居室のほうへお戻りいただきました」

そういえばラクウイルの姿がない。精霊を久しぶりに表に出していたが、その精霊たちの姿もない。

「ラクはおまえがぼやぼやしているうちに、刺客たちを牢に運んだぞ」

「……そうでしたか」

回想に耽り過ぎたようだ。動けなかったことは、サリヴァンにはわかったようである。

「生きていますよね」

「ラクが相手をしたふたりは、な。ツェイルが相手をした刺客は絶命した」

ふっと、サリヴァンの視線が、血溜まりの一点に投げられる。

珍しくも宰相としての仕事を放棄してしまったルカイアに代わり命令したサリヴァンによって、騎士や侍従たちがその場を清めている最中だ。

「……予想以上です」

「なにが」

「メルエイラ家の天恵ですよ」

よもや、あそこまでとは。

ルカイアはメルエイラ家が所有する天恵の詳細を知ってはいるが、実際に見たことはない。見たものしか信じないルカイアであるから、初めて見たメルエイラ家の天恵は衝撃的だった。まったく動けず、ついサリヴァンの様子を見て回想までしてしまうくらいには、驚いている。

「そんなにすごいか」

「ええ。あれほどの天恵がわが帝国にあるとは……」

無数の細い針が、襲撃者を潰した。ルカイアにはそう見えた。あんな力、ヴァリアス帝国中を探しても、いや世界中を探しても、メルエイラ家のみものだ。

「陛下も見ましたでしょう」

「……いや」

「見ておられないのですか？」

目の前にいたのに、それはないだろう。

しかし、サリヴァンはとぼけた様子もなく、また不愉快そうな表情を変えることもなかった。

「けっこう、どうでもよかったからな」

「……、はい？」

どうでもよかったとは、どういうことだ。

「見てはいたが、ツェイルのことしか考えていなかった。どうかと訊かれても……どうも言えないな」

惚気られているのだろうか、と思って、ハッとする。
もしかしたら。

「陛下、申し訳ございませんが、話を変えさせていただきます」
「なんだ」

「ツェイルさまとの婚約、どちらです」

「……話がだいぶ変わったな」
「どちらです」

「……どういう意味だ」

「正妃か、側妃か、という意味でございます」

呆れた眼差しを寄せたサリヴァンだったが、さらに怪訝そうにもした。

「正妃だろうか」

当たり前のように言った。

「ツェイルさまを娶られるのですね？」

「……言っておくが、おれの正妃だぞ」

「はい、そうです」

「これから先、ツェイル以外の者を娶るつもりはない」

「……わかりました」

「なにを言わせたかったんだ、おまえは」

いいえ、とルカイアは首を左右に振る。

「確認したかっただけにございます」

「なんのために」

それは、とにっこり微笑めば、サリヴァンはいやそうに顔を引き攣らせた。

「結婚式を、いつにしましょうかと」

「おまえな……メルエイラの者たちを盾に取るのは、もうよせ。おれがツェイルを手放さないと言っているんだ」

「ええ。ですから、結婚式をいつにしようかと思うわけです」

いやそうにしていたサリヴァンだったが、ふと表情を消すと、深々とため息をついて視線を逸らした。

「ツェイルが望まない限り、式は挙げない」

「あなたは国主ですよ」

「だとしても、ツェイルが望まない限り、式は挙げない」

それは残念だ。

しかし、それならそれでかまわない。ルカイアの目的は一つ、達成されている。今はそれで満足しておくしかない。

サリヴァンが妻を娶る。

ルカイアにとってそれは鍵だ。鍵ができたのだから、あとは扉を開き、進むだけである。

「……なにか、企んでいそうだな」

「おや、そう見えますか」

「なにを考えている」

「わたしの考えていることなど、いついかなるときでも、わが帝国のことですよ」

考えていることなど、いつでもそればかりだ。

だからルカイアにとって、サリヴァンがツェイルを娶ることは重要なのである。

「……おまえは、そうだったな」

はあ、と息をついたサリヴァンが、ルカイアに背を向ける。どうやら部屋へと戻るらしい。

ルカイアは近くの近衛騎士を呼び、追従するよう命令した。

「陛下、今宵の夜会、やり直しますか？」

「公子は今夜を以って貴族の列から廃す。それは変わらない。夜会

は終いだ」

「では、のちほど食事にもお誘い致しましょう」

「そうしてくれ」

ではな、と言って講堂を去るサリヴァンの背中を、ルカイアは深い礼をもって見送った。

気配を感じなくなってから顔を上げ、ふっと息をつく。

「そう、わたしの考えていることは、いつも同じ……わたしはなにを犠牲にしても、あなたをわが帝国に縛るのです」

ルカイアのひとり言は、誰も聞くことがなく、ぼつりと落ちる。

「それが、あなたを護ることになるのですから……」

ルカイアの咳きは、ただそつと静かに、消えていった。

ツエイルの記憶は、初めて二本足で歩いたときから始まる。

子どもが三人めともなると両親は慣れたもので、ツエイルが歩けるようになってもとくに感激はなかった。感激したのは、八つ歳上の兄ツアインと、四つ歳上の姉テューリだ。

ふたりの目がきらきらしていたのを、今でも憶えている。

『ツエーイルっ！ ああ、なんて可愛い妹、なんていとしい妹、

将来は僕のお嫁さん決定だね！』

『ツエイルは妹でしょ、あにうえ！』

『テューリ、妹だから僕のお嫁さんになるんだよ。ねえツエイル、

僕のお嫁さんになろうね』

『わたくしも妹よ、あにうえ！ んもっっ！』

思えば兄はもうこのときからツエイルに「僕のお嫁さん」発言を
していて、発言を本気にした姉が怒鳴るという構図ができあがって
いた。両親もそれは見えていて、大笑いしていた気がする。

だからツエイルは、両親に育てられたというよりも、そのほとん
どの時間を兄と過ごすことになり、両親にあまりかまわれなかった。
むしろ、多少の距離があったかもしれない。

ツエイルが天恵を初めて発動させた、四歳のとき。

『……まさか、おまえにも、出るとは』

父はツエイルの天恵を見て、悲しんだらいいのか喜んだらいいのか、複雑そうな顔をしていた。母は泣いていた。

ツエイルはそれが、よくわからなかった。

『やっぱりツエイルは、僕のお嫁さんになるために生れてきてくれたんだね』

兄が笑っていたから、この力がどんなものか、そのときはわからなかったのだ。

『ツアインよ。本当に、そうするか？』

このときばかりは父も兄の冗談を本気にしようかと思っただけ。

『ツエイルを僕のお嫁さんに？ なにを言うのですか、父上。これはもう決まったことですよ？』

兄が呆気羅漢として言うものだから、父は兄のそれがどうやら常に本気であるらしいと思いついたようだった。

『いや、あのな？ おまえ、それ本気だったのか？』

『本気もなにも、僕はいつだって真面目に言っていたではありませんか』

『あれが真面目……冗談だとばかり』

『ツエイルは僕のお嫁さんですよ。ねえ、ツエイル』

『や、や、や、待て長男、父が悪かった。謝るから、さっきの発言はなかったことに……っ』

『ツエイルう、今日も可愛いねえ』

『あつ、こら、妹になにして……っ、ああもう父が悪かったから冗談にしといてくれ!』

天恵が初めて発動した日の、兄と父のこの会話は今も憶えている。この日から両親がやたらとかまってくるようになったので、ツエイルは嬉しかったのだ。

今考えると、兄の愛情深さを危惧してのことだったのかもしれない。

『……いったいどうしたというのだ、ツアインよ』

『なんのことです。まさか、僕が気狂いだと? はは、そんなわけないでしょう』

『おまえ…… ツエイルはおまえの実の妹だぞ』

『それが? ツエイルは僕の妻になる娘ですよ』

『ツアイン……』

父が、困惑した顔で兄を見つめていたその光景を、ツエイルは憶えている。父は兄の冗談を、冗談として捉えられなくなっていた。

それから、ツエイルは。

兄と同じ天恵を持ったことで、その力を制御するためにも剣術を習うようになり、身体を鍛え始めることになった。きっかけは天恵を持ったことでも、父の思惑はおそらく、兄の行動にあつたのではないかとツエイルは思っている。

兄が婚姻を避け、そういった話も断り続けることになり始めると、父は強制的な婚姻話を持ってきて、強引に婚約までさせた。

『ツエイル、ツアインはいつも冗談ばかり言う。たまに本気のようにだが、それでも大半は冗談だ。だから、ツアインの言うことばかり

聞く必要はないのだぞ。あれは、ちゃんぽらんだ』

父の口癖だ。

兄の言動を本気だと捉えるようになっていた父は、それを確信した日からツエイルに言い聞かせるようになり、熱心に剣術を教えるようになった。そして、ツエイルに実剣を握らせて、街を襲った盗賊の討伐に繰り出したこともある。

そう、ツエイルが初めて人を斬ったのは、十歳くらいのときだ。その天恵で、人を殺めたのも、そのときだ。

『ツエイル、覚えておけ。これがおまえの天恵だ。おまえの天恵は、人を殺める。人を死なせる。人を破壊する。忘れるな。おまえは天恵を、無闇に扱ってはならんだ』

剣を握る怖さと、天恵を使う恐ろしさを、ツエイルは身をもって教わった。強くあらねばならないことも教えられた。

それからの日々で、ツエイルから表情を奪うほどには、酷な教え方をされただろう。

メルエイラ家の者で、女に天恵がもたらされるのは珍しいというゆえに、女に天恵がもたらされた場合、一生をメルエイラ家で過ごす決まりがあった。婚姻を結ぶことも子孫を残すこともなく、ただ一生をメルエイラ家の者として過ごすのだ。

特殊な天恵ゆえ、その存在を隠すための、それは掟だ。

『だいじょうぶ。僕が、ツエイルの旦那さまだから』

兄は父に強引な婚約をさせられても、それまでの言動を改めるこ

となどなかったし、淀すら無視していた。

『ツェイルは僕のお嫁さんだよ。僕との子ども、たくさん作ろうね』

兄の冗談に、幾度、救われたことか。

天恵の代償として奪われた肉体の成長を、どれほど疎ましく思ったことか。

女としての生き方、女としての未来、それらを切望しなかったわけではない。当たり前なそれらを、初めから切に願わなければならなかったのだ。それも、願っても叶うことのないものを。

だから、兄の存在は、ツェイルにとって安堵にも等しい。

兄が自分を欲し、必要としてくれなかったら、きっと今は家族を恨み、憎み、それでも家族を想いながら、深い闇の底にいたことだろう。

兄の冗談は、たとえ本気でも、ツェイルにはどちらでもよかった。そういう兄だから、家族をいとしく想うことができる。なによりも家族を大切想えるようにしてくれたことに、ツェイルは感謝していた。

「……まだ、泣くのか」

サリヴァンの優しい声がした。

「できれば笑って欲しいが……まあ、いいか。おまえになにかしらの表情があると、とても安心する」

髪を掬う感触に、ツェイルはどうやら夢を見ていたらしいと自覚し、けれども強い眠気には耐えられず、うとうととしながらサリヴァンの少し冷たい手のひらに身を任せた。

「泣きたいときは泣くといい……おれの、袂で」

額にぬくもりを感じた。全身を包む暖かさに、強い安堵感が込み上げた。

兄に抱きしめられたときとは違う、家族との抱擁とも違う、とても強い安堵感。心地よくて、それがなんだかいとしくてたまらなくて、ツェイルは無意識にぬくもりに擦り寄った。

こんなにひどく安堵できるものは、初めてだった。

目覚めて、ツェイルは声もなく驚いた。正確には、声を出せないほどの驚きではなく、声を出すことすら躊躇われるほどの驚きだ。

サリヴァンが、ツェイルを腕に抱いて、眠っている。

いつかのときのような状態に、ツェイルは声を出せなかった。

しばらく無言でサリヴァンの綺麗な寝顔を、これを眼福というかと思いつながらここぞとばかりに眺める。

「……傷跡？」

ふと、サリヴァンの目許に、目を凝らさなければ見えないほど薄っすらと残った、切り傷を見つけた。

こんなところに傷があるなんてと、うっかり声を出してしまったゆえに、サリヴァンの瞼が震えて碧い双眸を覗かせる。

「……ツェイル？」

「はい。起こして、しまいましたね。おはようございます」

ん、と身体を伸ばしたサリヴァンが、そのまま抱きしめていたツェイルを開放してくれる。眼福もこれまでだ、とツェイルはホッとしながら身体を起こし、寝台で猫のように身体を伸ばしているサリヴァンを真似して、グツと背中を伸ばした。

窓から小鳥たちの鳴き声がする。

いつもの鳴き声のようなので、おそらくここはツェイルに与えられた居室の寝室だ。

「よく眠れたか」

「はい。なにか夢を見ていた気もしますが……」

「夢……夢、ねえ」

「なにか？」

「いや」

「……ところで、なぜサリヴァンさまがこちらに？」

今さらだが、ツェイルはいつ眠ったのか記憶がなく、ましていつ寝巻に着替えたのかもわからない。サリヴァンが隣で眠っていた理由も、思いたそうとしても思い出せない。

ここはわたしの居室だよな、と改めてぐるりと部屋中を見渡してみる。

「……あれ」

どことなく、調度品の配置が、違うような気がする。

「おれの部屋だぞ」

「……、は」

「おれの部屋で、おれの寝室だ」

耳を疑うよりも早く、ツェイルは寝台から降りようとして、未だ寝台に寝転がっていたサリヴァンに捕まった。

「なぜ逃げる」

なぜと訊かれても。

「……お身体、つらくありませんか」

「おまえが逃げなければこんな格好をしなくて済む」

少し難しい体勢でツェイルの胴体に腕を回したサリヴァンは、どう見ても幾分かつらそうな体勢に見える。

「ちょっと、戻れ。さすがに腕がきつい」

「す……すみません」

怪我をさせたいわけではないので、ツェイルは慌てて寝台に戻った。

なにか間違えた気がしなくもない。

「……あの、なぜわたしは、サリヴァンさまのお部屋に、お邪魔しているのでしょうか」

再び寝台に寝転がったサリヴァンだが、その片腕はツェイルの胴体をしっかりと掴んでいる。逃げられそうにないので諦めた。

「おれが、眠れそうになかったから、おまえを部屋に連れ込んだ」

「……はあ」

こんな骨と皮のような貧相な身体を、抱き枕にしたところで寝心地は悪くなるだけだと思うのだが、サリヴァンのその考えをツェイルはいまいち理解できない。

そういえば、昨夜はなにがあったか。

サリヴァンが眠れそうにないことが、起きただろうか。

「昨夜は……」

声に出して、それが記憶の覚醒に繋がったのか。

ツェイルはあつというまに昨夜の、夜会を思い出した。

そこで起きた襲撃事件も、瞬くまに思い出して、息を詰まらせる。

とたんに込み上げてきたものに胸が苦しくなって、俯くと両手で口許を覆った。

「……ツェイル？」

サリヴァンの怪訝そうな声が、ツェイルの耳に入る。その響きの優しいことに、やはり安堵した。

「わ……わた、し……」

サリヴァンに、あの天恵を見せてしまった。人を殺し、死なせ、壊す天恵を、見せてしまった。なのに、サリヴァンはツェイルを受け入れて、抱きしめてくれた。それが嬉しくて泣いたことを、ツェイルは忘れていない。

忘れられるわけもない。

ツェイルは、家族以外には感じ得なかったその安堵を、サリヴァンに与えられた。ずっと欲しかったものが、与えられたようなものだ。

「……………なあ、ツェイル」

胴体に回されていたサリヴァンの腕が、ぎゅっと強くツェイルを引き寄せてきた。僅かに身じろぎ、その背にサリヴァンのぬくもりを感じる。

「おまえ、おれのものにならないか」

言われたことの意味がわからず、ツェイルは小さく首を傾げ、視線をさらに落として腹部にあるサリヴァンの片腕を見る。

「……………わたしは、サリヴァンさまの剣です」

この右腕の代わり。

剣を握れないサリヴァンの剣になると、護りたいと思ったときからそう思っている。

「そういうことではないが……………まあ、今はいいか。言ってしまうば同じ意味だからな」

なんのことだか、ツェイルにはさっぱりわからない。だがサリヴァンはなにやら満足気だ。

「久しぶりによく寝た。やはりおまえを傍らに置くと、よく眠れる」
「……………そう、ですか？」

「別の意味で寝づらくはあるが」

「……貧相ですから」

「……、そう捉えるか」

「ごっん、と背中にサリヴァンの額が衝突した。痛くはなかったが、サリヴァンは痛かったのではないかと振り返ると、サリヴァンは苦笑していた。

「なにか間違えたことを言った、気はしない。」

「もう少し、ゆっくりしている。夜会の翌日は一般的に休日だ。おれたちも例外ではない。襲撃があつたとしても、な」

「目が覚めました」

よく眠れたのですっきり目覚めている。その要因はサリヴァンの存在であるが、ゆっくりしろと言われても身体が起きてしまっていたは、いくら安堵できるサリヴァンのそばでも二度寝は無理そうだ。

「なら、おまえの膝の上で、おれを眠らせてくれ」

「……貧相ですが」

「それはもういいから」

どうせなら豊満な女性を傍らに侍ればいいのに、と思わなくはない。けれども、サリヴァンにそばへと望まれるのは、嬉しいと思つた。

ツェイルは大きなふかふかの枕を背にして寝台に座り直すと、ほぼ抱きつかれるようにしてサリヴァンを膝に抱いた。さらさらの金髪を撫でていると、すぐに寝息が聞こえてくる。

よく眠る人だ。

サリヴァンの寝顔は、二度と目覚めないのではないかと思うこともあるが、それほど安堵しているのだらうと思えば、心が温かくな

る。

ほんわかとした心に、ツェイルは口許を緩めた。

なんて、いとしいのだろう。

たまらなく、そう、思った。

20 : この手のひらに。 1 (後書き)

ツアインがどれだけシスコンなんだっていう話が、というお言葉をいただきましたので、本編に過去のシスコンぶりを導入してみました。

朝食を、と食事を運んできてくれたリリが、ルカイアも連れてきた。

「……………また、ですか」

ツェイルに抱きついて眠っているサリヴァンを見て、ルカイアは半眼で笑っていた。起こしに来てくれたラクウィルやリリなどは満面笑顔だったのだが、ルカイアの心情はどうやら昨夜の夜会のこと埋められているらしく、或いは日々の政務のことで埋められているらしく、眠っているサリヴァンを見て面白くないとしか感じられないらしい。

「起こしてください」

速攻でそう言われたので、相当面白くないのかもしれない。

「……………起きません」

困ったことに、サリヴァンは三日ほど眠り続けたときのようになり、今もなにをしても起きない。頭上でツェイルがリリやラクウィルと会話していても、洗顔をしていても、起きなかった。

「ツェイルさまでは起きませんか……………今回は、自然に起きるまで待

つなどと悠長なことは言っておねえさんので、強制的に起こしますよ」

「強制的……」

三日ほど眠り続けたときですら、なにをしても起きなかったのに、どうやって起こすというのか。

失礼、と言ってそばに寄ってきたルカイアが、腰を屈める。

「シエスタさまがおいでですよ」

と、サリヴァンの耳許に囁いた。

とたん。

「帰らせるー！」

飛び起きた。

なぜその一言で起きるのだ、とツェイルは吃驚である。

しかも。

「なぜ、シエスタが来る。おれは、呼んでない。帰らせる、おれに近寄らせるな、むしろ消せ、おれの視界に入れるな」

寝台の端まで逃げ、おまけにツェイルその腕の中に巻き込んで、ものすごい勢いで拒絶した。

「さ、サリヴァンさま」

「ああ、ツェイ、やばい、やばいぞ。シエスタが来た。どこかに隠

れ……いや、旅行だ。旅行しよう、ツエイ」

「は……？」

「婚前旅行だ。北の大地に猊下の知り合いがいる。これから暑くなる時期であるし、少し早い避暑に行こう。うん、それがいい。ラク、用意しろ、早急に」

混乱しているのが一目でわかる。とんでもない逃避行だ。そのくせツェイルのことはしっかりと認識し、いつのまにやら「ツエイ」と名を略しているくらいには、僅かながら冷静さを持っている。

「ツエイ、行くぞ」

「い、いえ、あの、え？」

「ああ、そうだ。猊下にフェンリスを借りよう。フェンリスなら移動が速いからな。シエスタは追いつけない、絶対追いつけない、うん」

「サリヴァンさま？」

「着替えならフェンリスの上でもできる。このまま行くぞ、いや行かなければならない」

なにか使命感まで燃やし始めたサリヴァンの行動は早かった。軽々とツェイルを抱き上げると、なぜか露台に向かって走っていく。

「嘘ですよ、陛下」

ルカイアがそう言わなければ、ツェイルは危うくサリヴァンとふたり、寝巻のまま露台から庭へ飛び降りるところだった。

「ちゃんとツェイルさまを連れて行くことなされるそのお姿は立派ですが、毎回そのように逃げられては……それに、この時期にシエスタさまが唐突にいらっしやるわけがございませんでしょう」

「……、嘘なのか？」

「正確には、シエスタさま本人ではなく、使者が来ております」

「……来るんじゃないか」

行く、と再びサリヴァンは欄干に足をかけた。

「国主としていらっしゃる旨を伝えに、使者は来ております」

ルカイアがそう言うと、逃げようとしていた動きが完全に止まる。どうやら露台から飛び降りることはならなそうだ。

しかし、ちらりと見たサリヴァンの顔は、とても厭そうだった。

「……どなたかが、いらっしゃるのですか？」

それもサリヴァンが厭がる人間が、来るらしい。それは国主のようであるが、サリヴァンにとって敵でないような気がする。

「ヴェルニカ帝国の、シエスタ・ウィウエル・ヴェルニカ皇帝です」

世界三大国の一つ、ヴェルニカ帝国。

大海を挟んだ向こうの大陸にあるその帝国の国主を、サリヴァンは厭がっているようだ。

「ヴェルニカ皇帝が国主としていらっしゃるのですから、わが帝国の国主もそれなりの態度でお迎えせねばなりませんね、陛下？」

にいつこりと、ルカイアは微笑む。

サリヴァンは顔を引き攣らせていた。

「」安心ください。いらっしやるのは半月後か、それより先のことです。今日はとりあえず使者に目通りしてください」

にこのこと笑うルカイアをサリヴァンはしばらく疑いの眼差しで見つめていたが、国主としての責務を果たさねばならないとは感じたらしく、深々とため息をつく寝台に戻り、ツェイルを腕から下ろした。

「ツェイ」

「……はい」

「今日は、ここから動かないでくれ」

サリヴァンはそう言つと、ツェイルの返事も聞かず、ルカイアと寝室を出て行った。

「……寝台から？」

消えた背に問いかけるも、もちろん答えはない。

「食事を摂ってから着替えましょうか、ツェイルさま」

リリよ、そのなにごともなかったかのような振る舞い、いい加減理由を教えてはくれまいか。
と、思った。

「……そうですね」

言っても無駄であることはわかっているのに、ツェイルはとりあえず、朝食をいただくことにした。

ツェイルの毎日は、いつでも単調だ。

午前中はひとりで勉強し、午後は天気がよければ身体を鍛えに外へ出る。最近はサリヴァンがルーディを剣術の指南役に寄こしてくれているので、騎士団の型を完全に習得しつつあった。午後の中頃を過ぎるとリリがお茶の準備を始めるので、ルーディや彼が連れてきた騎士と休憩したり、そこにラクウイルが混じったりしながら一時間ほど過ごす。その後は読書の時間で、夕食を終えても眠る時間まで本を読み続けることが多い。

「このままですと、城の蔵書を読み尽してしまわれそうですね」

とリリは言うが、さすがに城の蔵書は多く、読むのが遅いツェイルでは読破に一生かかりそうだ。それに、古代語で書かれた本は辞書がなければ読めないし、辞書があっても理解できない文章があると、意外に博識なラクウイルに手伝わしてもらう必要がある。それでも一冊を読むのに六日はかかるので、手間がかかるとわかってからは、古代語の書物を避けるようになった。

今日は、サリヴァンが政務に行ったあと、ここを動かないでくれと言われてしまったので、ツェイルは律義に寝室に留まって、読むのに手間がかかる古代語の書物を手にしていた。

「その建国史、ついにお読みになりますか」

「今日は、ここから動けないから」

「時間潰しには最適、と？」

「こついつ時間でない、読む気が起きない……」
「確かに」

手にした初代の建国史は、数百年前に作成されたものの贗物だ。^{「贗」}
初代の建国史は古代語で書かれているので、考古学者を目指す者の教科書に適用されることが多い。もちろん現代語で書かれた初代の建国史もあるので、解読はそれほど難しくなかった。

ツェイルには無縁かと思われる初代の建国史、古代語の勉強には最適であるが、ツェイルはそれを目的にしているわけではない。

「やっぱり、どうしてもそこが読みたいのですか？」
「うん……これには、初代皇帝の手記の写しがあるから」

考古学者なら誰でも持っている建国史だが、今ツェイルが手にしている建国史は、どこを探してもこの城に一冊しかないだろう。それは編纂もされずにそのまま写された、言わば写本だ。初代建国史の写本には、初代皇帝ヴァリアスの手記が残されている。

「どうしても、読みたくて……読まなければ、ならない気が、して」
リリがこれを持ってきたとき、リリは間違えたと言っていた。建国史は貴族の礼儀として読むことが義務とされていたので、ここに来てまで読むものではないと思っただけらしい。

だが、なぜか避けたそれが、持ってきた本に紛れてしまっていた。リリは不思議そうにしていたが、ツェイルは漠然と、ああ読まなければならぬものなのかと、そう直感した。

古代語は勉強にもなるので、午前の勉強時間に少しずつ建国について話を読み続けていくうちに、どうやら終わりには初代皇帝の

手記が付随していると知り、最終的にツェイルが読まなければと思
った部分がそこであることも気づいた。

「ダンガード侍従長を呼びますか？」

「いや、ここはひとりで読む。どうしても読めなかったら、そのと
きは頼むよ。リリも少しは読めるだろう？」

「本当に少し、ですけれど。わたしは古語の勉強、大嫌いでしたか
ら」

「わかるよ、その気持ち」

異界語に見える古代語だ。ツェイルとて得意ではない。

「では、なにかあったら呼んでくださいね。わたしはツェイルさま
がおとなしいうちに、部屋をぴつかぴかに磨いてきますから」

「……いつも邪魔してすまない」

「意図を感じていたら、本気で怒りません」

不器用、ではないはずなのだが、こうして考えると実は不器用だ
つたのだろうか、リリを見ているとたまに思う。

「お茶の用意はしておきますよ」

「頼む」

「はい。では」

リリが寝室を出て行ってから、ツェイルは辞書を片手に、さっそ
く初代建国史の写本を読み始める。

『わたしは一貴族の、平凡な若者だった。少し変わっていたのは、
聖国の、ひいては世界の創造主であられるお方が、わざわざわたし
のところへいらっしゃってくれることか……』

という冒頭から始まった写本の手記は、不思議なことに辞書がなくともすらすらと読めた。

リリがお茶を持ってきてくれたことにも気づかないほどに、ツエイルはそれに夢中になる。

「わたしの父のときも、父の父のときも、そのまた父の代からもちらっしやる天上猊下は、己れが人間ではない存在であると自覚なされておいでだった。だが、天上猊下は人間がお嫌いだった。同じ生きものではないことを、心底喜ばれるほどに、お嫌いだった。しかし、わたしにはそれを語る天上猊下の瞳が、とても悲しそうに見えた。このお方は人間で在り続けたかったのではなかるうかと、そう思えるほどに……」

世界がラーレと呼ばれるようになった所以たる、ヴァリアス帝国の天上猊下、聖王について、初代皇帝の想いが滾々と語られている。それだけでなく、ヴェルニカ帝国の初代皇帝のことも書かれてり、ふたりが歳の離れた親友同士であることも、写本には記されていた。

一つの壮大な物語を読んでいるようだ。

いや、確かにこれは物語だ。

世界が、国が、現実には作られていく物語。建国史が神話と同一視されるのも、この壮大ゆえのことなのかもしれない。

「……天上猊下、か」

このヴァリアス帝国におわす天上猊下、神々の長、聖王。人間が嫌いで、けれども人間を捨て切れず、己れは人間ではいられなくなり、神となった聖王。

写本を読んでいると、やはり実在するのかと、思えてくる。けれ

ども写本には、その聖王が死んだことも記されていた。

「この世界は……ラーレは、不思議だなあ」

神がおわす。

それは世界に浸透し、当然とされている。それでも聖王の存在は、お伽噺になっている。

考え始めると混乱して要領をまとめられない。

「……うん、やめよう」

もともと神を信じていなかったツェイルだ。放棄しても問題はない。

ただ気になるのは、聖王が死に際に起こした最後の奇跡、それが人々に天恵を与えたことだという部分だ。この時代から、天恵は世界に広まったらしい。

続きが気になる。

先を知りたくなって、頁をめくろうとしたときだ。

「ツェイルさま」

扉がコンコンと叩かれ、呼ばれた。区切りがよいところであったのでそれが聞こえたツェイルは、はい、と返事をする。

「失礼します、ツェイルさま」

扉を開けたのは、リリではなく、ラクウイルでもなかった。格好から近衛騎士のようであるが、その顔に見覚えはない。

「……なにか？」

「あの……メルエイラ家の使いだと、おっしゃる方がいらして」

「え？」

「至急、邸にお戻りをと……どうやら当主さまがお倒れになったようです」

なんだって、とツェイルは勢いよく立ちあがる。膝に置いていた写本が床に落ちたが、気にしてなどいられなかった。

「兄さまが……」

心情はともあれ、肉体的には風邪を引いたこともないほどの強靭さがあるあの兄が、倒れるとはあり得ない。いや、心労が重なれば、いくら兄とて倒れてもおかしくはない。

ツェイルはここに来て、一度もきょうだいたちには逢っていない。逢うことを許されないのも、もちろん手紙すら許されていない。

リリから姉のことはちらりと聞いたが、それでもそれはルカイアに無理やり届けられた姉からの手紙で、直接的なものではない。

「使いは帰ったのか」

「は、はい。だいぶ焦っておられたようです」

メルエイラ家の者を焦らせるなど、それはよほどのことだ。

「あっ、でも、車は用意しているそうです。お戻りの際はそれを、と」

どうしようか、迷った。

線が細くて見た目は頼りない兄だが、その天恵を所有するがゆえの代償など支払っていないかのように思えるほど、身体だけは丈夫な人だ。

その人が倒れ、使いを焦らせるほどのことが起きたのなら、それはおそらくは天恵がなにか起因しているとしたか思えない。本当は代償を隠し続けて、無理をしていたのかもしれないと思うと、いてもたってもいられない。

ツェイルは拳を握ると、部屋を見渡した。

寝台の横にツェイルの銀の剣が立てかけられているのを見つけると、それを手にする。

「行きます。メルエイラ家に」

「よ、よろしいので？」

「あの兄が倒れるなど、あり得ない……だが、天恵の代償であるなら、その可能性は十分にある。行かなければ」

同じ天恵を所有する者としても、もちろんきょうだいとしても、ツェイルは兄のところへ駆けつけるべきだ。いや、行く。

「車はどこに？」

「あつ、自分が案内します！」

「頼む」

ツェイルは着の身着のまま、帯剣できるよう帯だけは持ち出して腰に巻き、銀の剣を提げて、近衛騎士に先導させて寢室を、部屋を飛び出した。

サリヴァンに、ここを動くな、と言われていたことを、ツェイル

はこのとき頭になかった。

21 : この手のひらに。2 (後書き)

誤字、怪文書がありましたので、直せる限りで修正しました。
ほかにもありましたらご連絡ください。

「サリが嫌いな人間の車、外にある」

サリヴァンは、ラクウィルにひっついていて火精霊のマチカの声で、机から顔を上げた。

ヴェルニカ帝国からの使者に目通ったあと、サリヴァンはそのまゝマルカイアに引つ張られて執務室に閉じ込められていたが、少ししてラクウィルが火精霊を身体にひっつけて現われたので、昨夜の襲撃事件の報告を聞いた。

やはり襲撃者が公子を狙った刺客であることは、当然だが判明した。

サリヴァンとツェイルを狙った刺客は未だその正体を掴めていないが、大方の予想はついている。先にまだ生きているふたりの刺客の対処を考えねばならないので、死亡した刺客のことは後回しにされた。

そんなとき、火精霊が窓から外を見て告げた。

「商人の車に見えますがねえ……マチカちゃんは、サリヴァンが嫌う人間の車に見えるわけですか」

「気配は隠せない。それに、マチカも嫌いだもの」

「ふむ……マチカちゃんも嫌いとなれば、ナルゼッタ侯爵ですかね」

どうです、とラクウィルに訊かれ、サリヴァンは机を離れて窓辺に寄り、そこから眼下を見た。確かに、ラクウィルが言った通り、皇城に出入りしている商人の車に見える。

しかし、それならこの位置から見えるはずもない。

サリヴァンの執務室は、城の中央にある棟の最上階だ。窓から見える眼下は、皇帝は除外の上位十二貴族のみ、許可がなければ通れない門である。皇城に出入りしているとはいえ、そう易々と商人が入れる場所ではない。もし入れるとしたら、それは上位十二貴族の誰かが、許可を得たうえでサリヴァンに献上する品を持ってくるべきだけだ。

「……ルカ、許可したのか」

「いえ、憶えはありません」

「ちっ……またナルゼツタの勝手か」

皇帝の私有地をわがもの顔で歩くあの貴族は、やはりここでもその態度を変えない。他の貴族たちが真似をしないのが救いと言えるが、それでも示しがつかないことだ。

いい加減、己れの愚かさを知ってくれないものだろうか。

ツェイルを侮辱したこともあるし、そろそろ肅清に取りかかったほうが賢明かもしれない。

「ほかの宰相たちに、わが許可なくば入れぬところへの入場を禁ず、と」

「御意」

「あと、シエリアンに送る兵は、定刻通りに出立させていい。部隊の指揮も騎士団白軍大将に任せる」

「わかりました」

「おれは一度、ツェイルの様子を見てくる。ツェイルに部屋から出ぬよう、念押しする必要がありそうだ」

ついでにツェイルと昼食を摂ろう、と考えて、サリヴァンはルカ
イアが部屋を出て行ってからもう一度眼下を見て、車が走り出した
のを見届けるとそこを離れた。

執務室を出ると、自然、足早になる。

昨夜の夜会には、ナルゼツタ侯爵の娘、アルミラが来ていた。夫
人の名代、ということではあったが、侯爵の態度を見ればそうでは
ないことくらいわかる。アルミラは後宮に滞在している姫のひとり
なのだ。つまり、妃候補である。昨夜の夜会に妃候補は出席できな
いのだが、母が前皇妹殿下であるため、その権力を振りかざしたと
いうところだろう。

侯爵夫人はアルミラを名代にして、来ていなかった。

ツェイルを侮辱したのは、アルミラであるとサリヴァンは確信し
ている。宝石がどうこうという話を聞いていたので、あの夜会で宝
石を身にまもっている愚か者を探しておいたのだ。皇族が、いくら
夜会でも宝石を身にまもつことをあまり好まないと知っている上位
十二貴族たちは、ああいう場では着飾ってもせいぜい衣装の刺繍が
派手になるくらいで、宝石をまもつ者は少ない。その中で一際目立
っていたのが、宝石を散りばめた赤いドレスを着たアルミラだった。
一目で、アルミラがツェイルを侮辱した貴族だとわかった。

「ラク、侯爵夫人はどうしている」

「今のところは、邸でおとなしくしているみたいですよ。というか、
あの人もともと意志薄弱で、だから来るたび私有地の森をうるちよ
るして、あなたに助けを求めていたと思いましたが？」

「今さらおれにどうして欲しいのだから」

「同じく」

「自分で侯爵に惚れて降嫁したくせに、それを忘れたとしか思えないな」

「知らぬうちに水面下で勢力が作られた、とか思ってるんじゃないですか？」

「はっ。《真実の眼》を持っていながら、呆れた言い訳だよ」「そうですねえ」

なぜこうも父の代は腐れた者が多いのだろう。愚か過ぎて言葉もない。養父に育てられてよかったと、心底思う。

「ん……サリ、なにか変だよ」

ふと、ラクウイルにひつついたままだった火精霊が、サリヴァンの私室がある棟に入ったと勝手にそう言った。

「なんのことだ、マチカ」

火精霊はぐるりと朱い瞳で周りを見渡し、小さく首を傾げる。

「姫の精霊が感じられない」

「……は？」

「姫はマチカたちの仲間みたいなものだから、姫の気配がちょっとわかるの」

ラクウイルを真似してツェイルを姫と呼ぶ火精霊だが、言っている意味は理解しかねるものだった。

「ツェイルが、おまえの仲間みたいなもの？」

「マチカみたいな精霊が、いつでも好きなきときに呼び出してもらえるように姫に同化しちゃってるみたいだから、仲間みたいなもの」

サリヴァンは歩みを止め、瞠目した。

「闇の一族、ではないのか」

「あー……姫の精霊は、人間にとっては闇の一族かも」

「なんだと？」

「精霊は、穏やかな性格をしてる者が多い。でも、稀に攻撃性が強い者もいるの。マチカも、ルーフェもそうだけど、攻撃性が強くなると、ふつうの精霊ではいられない。姫の精霊は、マチカと同じ、攻撃性の強い精霊。だから、人間は闇の一族と呼ぶこともあるみたい」

そういう意味での、闇の一族を身に宿している、ということだったのかと、サリヴァンは漸く理解する。

「攻撃性の強い精霊は、人間を嫌う。マチカも最初はラクウィーが嫌いだった。今は好きだけど。サリも好きになった」

「なぜ、嫌う？」

「さあ。ただ嫌いな。だから、魔をけしかけて街を襲うこともある。人間たちは、そういうマチカたちを、闇の一族と呼ぶみたい」

基本は穏やかな精霊でも、稀に攻撃性の強い、人間を激しく嫌悪する精霊がいて、そういうた精霊を闇の一族と総称するようだ。

「それで、ツエイルの場合は攻撃性の強い精霊と同化していると、そういうことか」

「珍しいけど、稀にあるの。人間を嫌悪してた分、気に入るとその反動が大きくなる。マチカもルーフェも、ラクウィーに同化したいと思うけど……同化すると子孫にも残るの。マチカとルーフェは、ラクウィーが好きなだけだから、ずっとラクウィーだけでいいから、

同化はしないの」

「精霊が同化したツェイルは、永劫的でもいいと思われるくらいには、血族を気に入られたわけか」

まるで永遠の恋人みたいだな、と思って、苛めく。ツェイルはわが妻となる娘なのに、精霊に邪魔をされている気がしなくもない。

「で、ツェイルの精霊が感じられないとは、どういう意味だ」

「そのまま。いないの」

「いない？」

ツェイルには、ここから動くな、と言っておいた。ツェイルのことだから、律義にそこを動かず、サリヴァンの寝室にいるはずだ。様子を見るまでもないとはいわかっていたが、今朝は放り投げた状態でそう言ったので、気になったのだ。

それに、いとしい者だ。いつだってそばにいたいし、そばにいて欲しいと思う。

「……部屋から出たか」

「違う」

「なに？」

「いないの。この棟のどこにも」

まさか、とサリヴァンは息を詰める。

「中央にも、いないのか」

「待って。ほかの精霊に訊くから」

ふわっとラクウィルから離れた火精霊は、どこを見てもなく周りを眺め、窓の向こうで視線を止めた。

「このお城にいないみたい。慌てて外に出て行っただって、言ってる車に乗ったみたい」

「……っ、早くそれを教ええないか！」

怒鳴ると、火精霊は怪訝そうな顔をした。

「マチカは、ラクウィーが大切。だから、ラクウィーに望まれたことになら、手を貸す。マチカはラクウィーに、姫に気をつけておくように頼まれたから、気をつけてた。それでも限界があることは、伝えた。属性が同じ精霊ではないもの」

難しいこと言わないで、と言われたら、なにも言い返せない。

サリヴァンは低く舌打ちすると、急いで私室に向かった。

「ツエイ！」

私室の扉を勢いよく開け放ち、そこに姿が見えないと寝室へと飛び込む。

「ツエイ、どこだ！」

やはり寝室にも、ツエイルの姿はない。

名を呼びながら至るところを捜すも、どこにもその姿が見えない。

「サリヴァン、マチカちゃんがいなくて言ったら、いませんよ。早くあの車を追いかけてみましょう！」

「ツエイ！ なぜだ……なぜツエイを攫う！」

「サリヴァン！」

いとしい者の姿がない。

それは、自覚したばかりの想いだからこそ、全身から血の気を引かせる事態だ。

「ツエイ、ツエイ……っ」

「サリヴァン、落ち着いてください。だいじょうぶ、姫は天恵者です。己れの身は護れる。それに、犯人はナルゼツタ侯爵ですよ。あの車は、あなたが嫌う人間のものだって、マチカちゃんが言ったでしょう」

恐慌状態に陥ったサリヴァンの肩を、ラクウィルががちりと掴んで言った。

「ナルゼツタ……なぜナルゼツタが、ツエイを攫う」

「あなたの婚約者になったから、でしょうね」

「ツエイにとって不本意であることは、周知のことだっただろう！」

「関係ありませんよ。なにせあなたは、姫と共寝しちゃったんですから」

「おれがツエイに惚れたから？ だからといって、なぜツエイを攫う必要があるんだ」

「まあ、言わば女の嫉み、でしょうかね。お忘れですか、サリヴァン。ナルゼツタ侯爵の娘は、あなたにぞっこんです。もちろん、王妃という座が欲しいがゆえに、ね」

瞬間的に、頭にカツと血が昇った。

「後宮にいる者を退去させる！ あんなもの潰してしまえ！」

「そうですね。姫を取り戻したら、後宮を潰しましょう。ええ、そのとおりですね、サリヴァン」

肩で息をしながら激怒したサリヴァンを、ラクウィルはぎゅっと抱きしめ、体温を感じる間もなくすぐに離れた。

火精霊マチカに頼んで呼びに行ってもらっていたルカイアが、リリと一緒に部屋へ駆け込んでくるところだった。

「なにごとです、ラクウィル」

「リリから聞いていませんか。姫が攫われたと」

「部屋から消えたとは聞きました。攫われたとは？」

「ナルゼツタ侯爵家ですよ」

「……では、あの車に？」

「そのようです。ちよっとの間、サリヴァンを頼みますね。おれは、マチカちゃんとルーフェさんと、車を追いかけますから」

「身体はだいじょうぶなのですか？ 風術師を動かしたほうが」

「おれの称号は、サリヴァンに在ります」

ルカイアの言葉を切ると、ラクウィルは風のような速さで部屋を出て行った。

少しの沈黙ののち、リリが、床に平伏した。

「申し訳ございません。わたしが、おりながら……ツェイルさまを」

リリの謝罪を、サリヴァンは無感情に聞く。今は余裕がなかった。リリに罰則を与えることすら、考えつかなかった。

「リリの失態は、わたしの失態です。ですが陛下、今はその罪を問われている場合ではございません。シエリアン公国へ兵は出立致しました。昨夜の宣言も、公表されたところでございます。多くの臣

民が動揺するでしょう。陛下にはその対処をしてもらわねばなりません」

そんなことはわかっている。言われなくても、そのつもりでいた。だが、それはツエイルの姿が消える前までのことだ。

「ツエイが先だ」

「陛下」

「ツエイを取り戻してからでも遅くはない」

「あなたは国主であられる。政を敵かにすることは、当然の義務です」

「ツエイはおれの妻になる娘だぞ！」

「ゆえにツエイルさまであつたと、おわかりいただきたい」

瞬間的に、サリヴァンは思考が停止する。

「……なんだと？」

「国主が妻のことで惑わされてはなりません。地位に溺れることなく、たとえ命を危ぶまれることがあつてもそれらを乗り切り打破する者であることが、国主の妻となりえます。ツエイルさまはその条件に一致する、唯一の女性でした」

「……おまえ、それでメルエイラ家の力を」

「もちろん、それだけの理由ではありませんよ。ですが、あなたの妻となりえる者が、ツエイルさま以外におられないということだけは、はつきりとしています」

ルカイアが言っている意味は、わかる。だが、それは完全にツエイルを無視したことで、サリヴァンの想いを無視していることでもあつた。

「ツェイルさまならご自分の身を護れます。あとはラクウイルに任せてもよいでしょう。あなたが今すべきことは、臣民への対応。そしてナルゼツタ侯爵家の対処です。さあ、行きましよう」

今日ほど、己れが今いる立場を、疎ましく思ったことはない。完全にルカイアの術中にはめられていることが、疎ましくてならない。

「おまえはおれに、ツェイを見捨てると、言うのか」

「そう聞こえましたか。わたしは、あなたが動揺するほど心配する必要はないと、申し上げたつもりですが」

なんて宰相だと、罵りたい。

国主であることと、いとしい者を天秤にかけさせるなど、なんて苦しい選択をさせるつもりなのだ。

「……おれは、ツェイがいとしい」

「存じておりますよ」

「なら、わかれ。おれはツェイを取り戻しに行く」

「なりません。ツェイルさまのことはラクウイルに任せるべきです」

「いとしい者ひとり護れず、国主が務まるのか！」

「務まらずとも、あなたは国主であられる。その刻印が、右腕に根づいておられる」

言われた瞬間、ずぐん、と右腕が疼いた。

震えた右腕を、咄嗟に押さえつけて拳を握る。

それまで無表情であったルカイアは、サリヴァンのその様子を見て、にっこりと微笑んだ。

「さあ行きましよう、陛下」

その悔しさに、サリヴァンは、拳を強く握ることしかできなかった。

この手のひらには、護りたいものを、いとしい者を、護れるだけの力がないのだろうか。

ひどい頭痛で、ツェイルは起きた。起きた、ということに疑問を感じて、閉じていた瞼を開く。

「……「JJ」は」

どこだろう。

ツェイルは冷たい土の上に寝転がり、両腕を後ろで縛られていた。真っ暗なことから、ここがどこかの小屋であるらしいことはわかるが、なぜここに自分が縛られた状態で放置されているのか、わからなかった。

ひどい頭痛を我慢して記憶を探り、そういえば兄が倒れたと聞いて車に飛び乗ったことを思い出した。その瞬間になにか薬品を嗅がされた憶えもある。この頭痛はその薬品の副作用といったところか。

つまり、

「畏……か」

ということだ。

兄が倒れたという情報は、嘘なのだろう。そしてそれを伝えた「使い」とやらも、おそらくはあの近衛騎士さえも、ツェイルを騙した者だ。

いったい誰がこんな真似をしたのか。

深々と息をついて、ツェイルはゆっくりと身体を起こした。頭痛は相変わらずであるし、腕も縛られていて痛む。

動いた拍子に、腰にあるはずの重みを感じられず、ハッと視線を落とした。

「剣が……」

サリヴァンからもらった銀の剣が、帯についていなかった。周りを見渡しても、どこにも見当たらない。

どうやらツェイルを拉致した者に、奪われてしまったらしい。

「わたしの、剣……サリヴァンさまから、もらったものなのに」

メルエイラ家の者として簡単に拉致されたことも情けないが、サリヴァンが自分のためにと逃えてくれた銀の剣を奪われたことのほうが、ツェイルには痛手だった。

あまりの失態と痛手に、ツェイルは立てた膝に顔を埋めた。

「サリヴァンさま……」

ごめんなさい。

こんなことになって、銀の剣まで奪われてしまって、護ると言いながら迷惑をかけているだけだ。

ああ、なんてことだろう。

と、前方から光りが漏れ出した。

「目が覚めたようね」

その声には、憶えがあった。

顔を上げると、やはり森の中で逢ったあの美しい女性が、今度はあの豪華な赤いドレスではなく同色系の落ち着いたドレス姿で、光りの中に立っていた。

「……なぜ、わたしを？」

「あら、呑み込みが早いのね。てつきり脳みそまで筋肉なのかと思っただわ」

救出に来てくれたわけではないと、その唇が語っている。ツェイルの姿を見て満足そうにも笑っているのだ。あの近衛騎士を使ってツェイルを拉致したのも、おそらくはこの女性だろう。

「あなたに使った薬ね、面倒な副作用があるの。即効性の睡眠薬なのだけれど、相性が悪いとひどい頭痛が続いて、しばらくまともに身体も動かせないらしいわ。しかも量を間違えれば、毒にもなるぞうよ」

ふふ、と笑った女性に、ツェイルは己れの状態がまさしくその状態なのだろうと教えられた気分だった。

頭痛がひどくて、こうして身体を起こしているのもつらい。だからといって横になっても、おそらくそれは変わらないだろう。

しばらくこの状態が続くのだろうと思いながら、ツェイルは具合の悪さに任せてはったりと倒れた。

女性の高笑いが聞こえ、再び暗闇がツェイルを包んだ。

「なんだ……様子を見に、来ただけか……」

どんな目的でツェイルを拉致したのか。

サリヴァンのことを気にしていたようだったから、おそらくサリヴァンについてのなにかだろう。

しかし、サリヴァンのそばにはルカイアやラクウィルがいる。なにがあるうともサリヴァンを護ろうとする者が、最強の存在がいる。ルカイアらがなにかしら策を立て、サリヴァンを護ってくれることは確かだ。

ツェイルは身体を丸め、じっと、頭痛が治まるのを待った。

メルエイラ家の者を舐めてもらっては困る。幼い頃から天恵の恐ろしさを教わったのだ。メルエイラ家で一生を過ごす掟の中で、この歳になるまで生きていたのだ。薬が毒になることくらいの知識はある。

そのための耐性は、

「くそ……」

残念ながらない。

耐性を作ることは、天恵の代償のせいで、体質的に合わなかったのだ。悔しいがこれだけは諦めるしかなかった。

とりあえずおとなしく、毒が活動的にならないようにすることしか、ツェイルにはできないことがない。姉か妹がいれば解毒を頼めるのだが、逢うことすら許されていない今では、その助けを求めることもできない。

剣の腕だけを磨いたしつぺ返しだろうかと、ツェイルはため息をついた。

「とにかく、逃げるか」

おとなしく、縄抜けでもして、脱出してみようと思う。毒に対する抵抗力はないが、捕縛されたときの対処法ならいくらでも思いつくものだ。

そろそろ逃げるか、と身体を起こすと、未だ頭痛には悩まされたが、縄からは抜けさせた。

「……っ、まだふらつくか」

立ち上がると、視界がぼやけ、足許が崩れる。それでも、銀の剣を取り戻すためには、ここから出なければならぬ。

よろよろと歩いて、あの女性が開けていた扉に手をかける。もちろん、引いても押しても動くわけがない。

ツェイルは天恵を使った。

音を消してものを壊すことくらい、造作ない。

パキン、と小さな音を立て、扉を抑えていた鍵らしきものが壊れた音がする。

扉を引いてみると、今度はなんの抵抗もなく開いた。

「……見張りもないとは、不用心な」

小さな音でも、見張りに立つ者があれば気づいただろう。そう身構えたのだが、気配がない。

ツェイルは深呼吸して、扉を思い切り開ける。

飛び込んできた日差しに、ぼやけていた目が焼かれた。くらくらと眩暈を起こしながらも、倒れそうになった身体を壁に押しつけ、どうにか留まる。

「まずいな……目が、役に立たない」

色はつきりとしない。見えるはずのものもつきりとしない。これも薬の副作用かと思うと、耐性もなく解毒もできない自分に腹が立った。しかも頼りは天恵のみだ。腹立だしいつたらない。

とにかく銀の剣を見つけよう、と歩き出して、耳だけは無事であることに気がつく。

役に立たない目を閉じて耳を澄ませば、さまざまな音を聞き取ることができる。

「……知らない場所だ」

街の喧騒は聞こえない。

ツェイルに馴染んだ動物たちの声も聞こえない。

聞こえるのは、人が動く音。足音も然り、話し声も然り、僅かな空気の擦れる音も然り。

ツェイルは耳を頼りに、ゆっくりと歩を進める。

どうやら屋外のものであるので、銀の剣があると思われる建物の室内へと入る必要があった。

そうになると、役に立たない目はそのままでも困らないが、頭痛だけは治ってもらわなければならぬ。身体がふらついてはいざとなったら戦えないのだ。

頼りの耳と天恵ではあるが、この天恵がそれだけのものではないと、サリヴァンに教えられた。それなら、違う使い方もあるはずなのだ。

探そう。

銀の剣を、この天恵が破壊ばかりのものではないという力を、探そう。

メルエイラ家で叩き込まれたその技術を遺憾なく発揮するため、ツェイルは天恵を頼りにし、ふらつく身体のままよろよろと室内への入り口を探った。

空に、鳥の鳴き声が響く。

そのとき。

「おまえっ！」

男の声がした。

前方に複数の人の気配がした。

さっそく見つけた己れの愚鈍さに厭気がさす。

「……わたしの邪魔をするな」

銀の剣を、天恵の使い方を探しているだけなのに。

厭気が、苛立ちと重なって、怒りが込み上げる。その勢いそのままツェイルは前方を、目は閉じていたが気持ちで睨んだ。

「なにをしているの！ 薬を使いなさい！」

痛む頭に、あの女性の金切り声が響いて、痛みに拍車をかけられた。

怒りがさらに込み上げる。

「わたしの邪魔をするなど、言っている」

サリヴァンになにかするために拉致したのなら、それは間違いだ。ツェイルには自衛本能があるし、まして破壊の天恵がある。

ふと、もしかするとこういうことを想定したルカイアが、ツェイルなら打破できると思っただけで後宮に連れて行き、サリヴァンの婚約者にまでさせたのだろうか、思い至った。
なるほど、そうかもしれない。

目の前の女性は、初対面で厭味や皮肉を言う人間だ。そんな人間をサリヴァンのそばに置きたくないと、ツェイルは思う。こういう者を排除するためにも、ツェイルのような人間に囿り役は最適だ。

「早く捕まえなさい！ あの者がここにいると知られるわけにはいかないのよ！」

女性が、取り囲む者たちに命令する。とたんにその者たちはツェイルに向かってきた。

「邪魔をするな……わたしの剣を返せば、なにもしない」

命知らずな者たちは、ツェイルの忠告を、聞くわけもなかった。

「おとなしく捕まりやがれええ！」

「うおりゃあああ！」

「おれたちの金ええ！」

三つめの言葉に、どうやら雇い者を使っているらしいと知り、それなら多少は腕が立つのかもしれないと、ツェイルは身構えることができた。

走る音に、風を斬る音が混じっている。

雇い者は剣でも握っているのだろう。

それなら、こちらは体術と天恵で、応戦するだけだ。未だ頭痛はするし、目は役に立たないし、身体もふらつくが、一瞬で決めることさえできればこの場から姿を眩ませることはできる。

ツェイルは、自ら懐に飛び込んだ。

ぎゅっと握った拳を腹部に叩き入れ、呻いた声を聞いてからすぐに蹴りを送り、反動を使って逆回転からの蹴りを入れてひとりを張り倒した。残るふたりも、同様に拳と蹴りで、小柄なツェイルだからこそ立ち回れる俊敏な動きで惑わせ、倒した。

「なっ……なんて、乱暴者なの……っ」

女性の引き攣った声に、それがどうした、と思う。

雇い者を体術で倒したツェイルは、さすがに頭痛のせいで吐き気が込み上げてきており、肩で息をしていた。

「わたしは、メルエイラ家の者だ……《白紫はくしの双剣そつげん》と、聞いたことがないのか」

「《白紫の双剣》ですって？」

ツェイルはなにも、天恵だけで己れを作り上げたわけではない。剣術の腕は、兄にも並ぶ。父を負かしたこともある。腕が立つようになってからは、賊退治に行くのは専らツェイルと兄だった。そこでつけられた渾名が、『白紫の双剣』である。双剣であるのは、ツェイルと兄とが並んで剣を握っていたからで、白紫とは、ふたりとも天恵を使うと薄紫の瞳が白く濁ることから、天恵者だと知らない者たちがつけたものだ。

「まさか、あなたが……ひとりにはツアインさま、ひとりには小さな少年と」

「わたしはいつも、こんな格好だからね……さあ、わたしの剣を、返していただこう」

銀の剣さえ返してくれば、今はそれでいい。今帰れば、きっとツェイルが城から消えたことも、大きな騒ぎにはならない。サリヴァンに迷惑もかけないはずだ。

「わたしの銀の剣を、返せ」

あれはサリヴァンからもらったもの。

サリヴァンが、ツェイルのために誂えてくれたもの。

あれはサリヴァンを護るもの。

あれがあることが、サリヴァンを護る者の証だ。

「ふ……ふんっ、あの剣は、わたくしが持っていてこそ、光り輝くものよ。本来はわたくしに贈られるべきものよ。わたくしのものよ」
「……飾りものだと？」

この女性は、なにを勘違いしているのだろう。

剣とは、人の命を脅かすものであり、また護るものだ。飾るため

にあるのではない。

まして銀の剣は片刃で、ツェイルにしか扱えない仕様になっている。飾り立てるような装飾も、薄紫色の宝石と細かな彫刻だけで、刃はするどい斬れ味を誇っている。

「あのように美しい剣は、わたくしが持つていてこそ、価値が出るのよ。あなたのような野蛮な者が持つ代ものではないわ」

「……扱えぬ者が、あの剣を持つに相応しいと？」

「扱う必要などないわ」

羨ましい、と思った。

護られることに慣れ、護られることが当たり前と思っているその姿が、いっそ晴々しいほどに羨ましい。

貴族の令嬢でも小剣はお守りの代わりにして落ち歩く、とリリが教えてくれたが、本当に持ち歩いているだけのようだ。その恐ろしさも知らずに、ただ安穩としているのだろう。

剣を握れないサリヴァンでさえ、護られるのではなく、護るのだという姿勢を持っているのに、臣民がこれではサリヴァンが可哀想だ。

「……サリヴァンさまが、悲しむな」

「なんですって？」

「国を、護ろうと、必死であられる……国の犠牲になっておられるのに、護ろうとしている者たちが、同じ志ではないなど……悲しいことだ」

なんと言葉に表現したらいいいのか、わからない。ただひたすら、悲しいことだと思う。寂しいことだと思う。

国を想うサリヴァンの心を、この女性は無視しているとしか思えない。

「知ったような口を……っ」

「では、あなたは知っているのか？ サリヴァンさまが、どれほどの荷を背負っていらっしやるか……サリヴァンさまが、どれだけの想いで、この国を護らんとしているのか」

「皇帝が国のために在るのは、当然のことよ。それがなんだというの」

「その意味を、あなたは本当に、理解しているのか」

サリヴァンとて、ひとりの人間だ。

たったひとりの人間に、国は護られている。

その意味が、この女性には理解できるといえるだろうか。

多くの人の支えや協力があつてこそ、国を護れるたったひとりになれる。その重さを、理解できるというのだろうか。

ツェイルは無理だ。自分のことだけで手いっぱいだ。

だからせめて、人として危うく儂く、壊れてしまいそうなサリヴァンを護りたいと、護れるだけの力を差し出したいと思うのだ。

サリヴァンをいとしく想えば、それはなおさらだ。

「わたしは、サリヴァンさまの剣……あなたは、そうなれるのか」

なれるなら、銀の剣を奪われたままでもいい。ツェイルにはまだ天恵がある。サリヴァンを護るためなら、天恵を発動させることに躊躇いはない。

それでも、ツェイルの膝で眠るサリヴァンを見れば、力だけがすべてでないことがわかる。

ツェイルの存在がサリヴァンを護ることになるなら、ツェイルは

この身のすべてを帝国のために、サリヴァンのために捧げる。

「……っ、もう黙りなさい！」

女性が叫び、そのあとでなにかを投げて寄りこした。

なにかが飛んでくる気配だけを感じたツェイルは咄嗟に腕で顔を庇い、硝子のようなものが割れる音を聞く。

ばしゃっと、全身になにか液体を浴びた。

「なにを……、え」

ぐらりと、身体が傾いた。身体に力が入らず、頭痛が増して耳鳴りがした。吐きたい衝動に駆られ、地面に倒れると咽喉を抑えた。

「あなた、その薬と相性が悪いようね。先のもも抜けていない状態で、さらにその薬を浴びたら、どうなると思いませんか？ 致死量は、とつくに超えたわよ？」

狂喜に満ちた女性の声が出た。

身体の状態から、ツェイルは拉致されたときに使われた薬らしいとわかったが、わかっただけで、やはりなにもできなかった。あまりの気持ち悪さに、ぐらぐらと脳みそが揺れている。もともと目は閉じていたが、開けたらひどくなる気がして、きつく閉じているしかなかった。

「そうやって、悶え苦しむといいわ。メルエイラ家の《白紫の双剣》？ 笑わせるわね。そんなもの、わがナルゼッタ家の足許にも及ばないのよ。わたくしの母は前皇妹殿下、メルエイラ家などすぐに取り潰せるわ。残念ね？」

引き攣った狂喜の笑い声。

ああ、なんて失態を犯したのだ。
なんて愚行だ。

そう思ったところで、もう遅い。
家族を護るために、きょうだいを護るために、
今まであそこにいるのに、逆のことにしてしまった。
サリヴァンを護りたいと思うことは、
ツェイルには傲慢なことだ
ったのだろうか。

「……サリ……ヴァン、さま」

悔しい。

「ごめんなさい。
謝っても謝り切れないことを、犯してしまった。
どうやったらこの罪を償えるのだろうか。」

「はじめ、な……さ……」

あなたを、護りたいのに。
それだけなのに。

23 : それは赤い花びら。 1 (後書き)

24 : それは赤い花びら。 2 (前書き)

流血描写、暴力描写があります。
充分にお気をつけください。

ずきん、と脳に響いた痛みで、ツェイルは意識を取り戻した。

また捕まったのか、と思いながら、薄っすらと瞼を開ける。最初に閉じ込められた小屋ではなく、どうやら邸の中であるようで、今度は土の感触はなく柔らかい布の感触が、ツェイルの頬をくすぐった。

「ん……っ」

身体を起こそうとして、腕が動かないことに気づく。縛られているのかと思ったが、単に動かないだけだった。

薬の副作用とやらは、どうやら頭痛だけではなく、肢体を麻痺させる追加効果まであるようだ。おそらくは、最後に全身に浴びたあの薬のせいであろうけれども。

ぼんやりと、薄暗い室内を見渡してみる。視力もまだ回復していないようなので、気を失ってからここに運ばれて、まだそう時間も経っていないのだろう。

メルエイラ家でなにを教わってきたのだ、と思うと、情けなさに逃げる気力も起きない。

「……あたま……いたい」

ずきずきと痛む頭も、ツェイルからその気力を奪っていた。

いったいいつまで、こんな状態が続くのだろう。
もしかしたら一生このままなのだろうか。

そう思うと、脳裏にサリヴァンの優しい微笑みが過ぎる。兄や姉、
弟や妹の笑顔も、思い浮かんでは消えていった。

帰りたい。

なにも知らなかった頃に、まだなにも不安がなかった頃に、戻り
たい。

家族を護っていた頃に戻りたい。

けれども。

「サリ……ヴァン、さま……」

サリヴァンの笑みが忘れられない。

ぬくもりが忘れられない。

暖かい腕の中が、広い胸が、優しい声が、忘れられない。

それらを知らなかった頃には、もう戻れそうにないと思った。

謝っても謝り切れない失態を犯したツェイルを、サリヴァンはど
うするだろう。剣になることはもうできない。それでも、ツェイル
はすがりたかった。

「サリヴァン……さま」

あなたのところに帰りたいと思うわたしは、もうなにも知らなか

った頃には戻れない。

あなたを知ってしまったから。

あなたのそばにいたいと思うようになってしまったから。

あなたをいとしいと、想うようになってしまったから。

あなたのところへ、帰りたい。

サリヴァンを想うだけで、涙が込み上げる。泣くことを捨てたツエイルに、それを思い出させてくれたサリヴァンだから、サリヴァンのことを想うと涙に直結してしまう。

「お。目え覚ましたか、坊主」

サリヴァンではない声が、ツエイルを現実に戻した。

「いや、坊主じゃねえか。嬢ちゃんだったてな、おまえ」

「こんな貧相な女、見たことねえけどな」

目を覚ますと、この前はサリヴァンの寝顔があった。

今朝が、そうであったように。

それなのに、ツエイルを現実に戻したのは、先ほど殺しはしないまでも痛めつけたはずの雇い主たちだった。

「強えな、おまえ。メルエイラつつ貴族の娘らしいが、あの噂は本当ってわけだ」

「……うわ、さ……？」

「殺しの一族だろ、メルエイラっていったらよ。ちよつと前まで皇帝の剣とか呼ばれてたが、皇帝の不興を買ってからは没落し始めて、皇都の治安維持はもちろん、おれたちみたいな雇われ者の傭兵がす

るような仕事ばっかしてただる」

その噂か、と思う。

ツエイルが生まれたときにはもうその状態であったし、もともと生粋の貴族ではないとわかっていたから、痛手にもならない中傷だ。

「おれたちも聞いたことあるぜ、《白紫の双剣》って渾名をよ。逢ってみてえとは思ったが、まさかこんなガキだったとはなあ」

うつ伏せに寝転がっていた身体が、雇い者の腕でごろりと転がされる。頤を掴まれ、その感触に嫌悪感が込み上げて、鳥肌が立った。

「さわ、るな……っ」

「おうおう、粹がっちゃって、可愛いねえ……だがよ」

頤を掴んでいた手が離れたかと思うと、ばしんと頬を打たれた。身構えていなかっただけに、口腔に血の味が広がる。頭痛も相まって、ぐわんぐわんと頭が揺さぶられた。

「あ……ぐ、う……っ」

気持ち悪い。

身体も、どこも、気持ち悪い。

「おれたちはよ、おまえを鬨り者にして、そこらの道に捨てるために雇われたんだ。こんなガキに興味はねえが、こっちも仕事だ。恨むなら、おれたちを雇ったあの貴族を恨むんだな」

込み上げた吐き気の衝動をどうしたものかとしていたら、ビリッと布地が割かれる音を聞いた。次いで自分の首筋や胸元に寒気を感じ

じ、なにが起こったのかと役に立たない目を凝らして、睜目する。

「ほんとにこいつ女か？」

「男の間違いだろ、こりゃあよ」

「下も脱がしやわかんだろ。やれよ」

服が、肌着ごと、ぼろぼろに引き裂かれていた。露わになった己れの胸に、羞恥よりも恐怖が襲いかかる。

「や、め……っ」

「あ？ 聞こえねえよ」

ひたり、と腹部に触れた手に、激しい嫌悪を感じた。サリヴァンの手のひらであれば少し冷たいのに、その手は生温くて、気持ち悪いどころではない。

いやだ。

これは、サリヴァンの手のひらではない。

いやだ。

いやだイヤダいやだ。

「さすがに若え肌だ。触り心地はいいな」

「おい、早く下も脱がしまえよ。おれ、男はやだぜ？」

「男でもこの容姿ならいいだろ」

「もの好きだな」

「うるせえ、黙ってる」

サリヴァンのものではない手が、さらに下へと滑り落ちていく。穿いていた下衣にその手がかかったとき、ツイールの嫌悪は限界にきていた。

「……さわるな」

「あん？」

「わたしに、さわるな……っ」

全身から、その嫌悪感に対する負の感情が溢れた。
なにかが、ぷつりと、切れた音がする。

「お、おいっ、こいつの目……っ」

「まさか……天恵者か！」

「白紫ってそういう意味……っ、ぎゃああああ！」

ぼたぼたと、頬に落ちてきた水滴。

ごろりと、なにかが転がり落ちる音。

「やめっ、やめてくれっ……っひっ、ぎゃああああ！」

「がああああああ！」

降り注ぐ、赤っぽい雨。

鼻を突く、鉄錆の匂い。

ああ、天恵を発動できた。

封じられていたわけではないのに、使えることを忘れていた。さ
っさとこの天恵で、こうしていればよかった。

なんだか身体が軽くなった気がして、動いてみたら、すんなりと
起き上がることができた。周りを見渡し、ツェイルはなおもぼんや
りした視界で、それらを捉える。

まだ蠢いているように見えたので、力を付加してみた。

動かなくなつた。

視線をさらに移動させると、また違うところで蠢くものを見つけ、まだあるのかと思つて力を付加すれば、それはまた動かなくなつた。

思えば、天恵に自由が効くのは久しぶりだ。思ったように動く。あれも壊せるかな、と思えば壊れているし、ただ思いつくままに見えるものがすべて壊れていく。

ろくすっぽ見えていない視界を動かすたび、なにもかも壊れてくれる。

見えないことには腹が立つが、天恵思うように使えるので気分がいい。

ふと、ここはどこだっただろうかと考えて、わからないことに気づいた。

なにをしていたのか、しようとしていたのかさえも、わからないことに気づいた。

「……わたし、は」

どうしたのだったか。

わからない。

わからないことに苛立った。

身体は軽いのに、上体を起こすことはできるのに、足は動かないらしいとわかるとさらに苛立ちが募つた。

こんなに苛々するのは初めてだ。

どうやったらこの気持ちを鎮められるのかわからない。

わからないことだらけの自分に、苛々した。

「きゃあああっ!」

「甲高い悲鳴が耳を劈く。

とても不愉快で、気づけば力を付加させていて、それは聞こえなくなつた。

25 : それは赤い花びら。 3 (前書き)

サリヴァン視点です。

25 : それは赤い花びら。 3

攫われたツエイルの居場所を、ラクウィルが掴んだ。
やはり犯人はナルゼツタ侯爵家の令嬢だった。

侯爵にそれとなく探りを入れてから問い詰めてみたが、知らぬ存
ぜぬの一点張り、予想通りの展開である。

「夜まで、待った。もういいだろう、ルカ」

ラクウィルが情報を掴んで帰還したのち。

ルカイアに突きつけられた必要な政務は、ツエイルのことだけで
いっばいだった頭で、どうにかすべて片づけた。残ったものはルカ
イアを始めとした宰相たちだけでもどうにかなるもので、サリヴァ
ンがいなくとも決済が進むものだけとなっている。

もういいだろう。

おれを、行かせろ。

そうルカイアに詰めよれば、なにか合点のいかない様子のルカイ
アも頷く。

「なんだ」

不機嫌に問えば、ルカイアはその眉間に皺を寄せる。

「今さらですが、ナルゼツタ侯爵は……いえ、その令嬢ですね。令嬢はなにがしたかったのか、と思ひまして」

「おれが知るか」

「彼女はツエイルさまが天患者であると、ご存知なのでしょうか」

「メルエイラ家が天患者を持つ一族であると知っているのは、皇帝と二大卿のみ。それでもどんな天患者であるかは、メルエイラ家は明かさなかつた。知るわけがないだろう。おれだって、夜会のために初めて見た」

本当に今さらだ。こんな話をして、引き留めた理由のほうを知りたい。

「ですが、侯爵夫人はご存知でしょう。仮にも、元皇族ですし」

「あの意志薄弱な叔母に、それを知る権利があつたと思うか」

「そうですね……では陛下、お気をつけください。おそらくナルゼツタ侯爵は、とんだ災厄の中におられると思ひますよ」

「……なんだと？」

なにかを企んでいる様子のルカイアに、サリヴァンは目を細めた。

「ツエイルさまは、ツアインとふたりで、ひとりの天患者となります。その意味を、ご存知ありませんか」

「ツアインとふたりで、ひとりの天患者？」

聞いたことがない話だ。

「ツエイルさまが天患を発動させたのは、四歳のときが初めてです。今から十年ほど前のことになりますね。そのとき、なにがあつたと思ひます？」

「十年前……」

「西の大地で、大火災がありました。そのせいで食糧難に陥った西の大地には、これ幸いと賊が多く住みつき、帝国騎士団の手を煩わせるほどの勢力となったのです。その地に、当時十三歳ほどであったツアインが、先帝の命令で鎮圧に向かいました。先帝の目的はメルエイラ家を都合よく取り潰すことですから、ツアインを戦地に赴かせることで先代にも死んでもらう算段だったのでしよう。しかし予測に反し、ツアインは賊を殲滅しました」

「……まさか、ひとりですか
「いいえ」

ルカイアは、無表情のまま、首を左右に振った。

「ツエイルさままだそうです」

「……は？」

「なぜかその日ばかりは家族の言うことを聞かず、僅か四歳という年齢で、ツアインについて行ったそうです。そこでツエイルさまが、天恵を発動させ、賊を殲滅したのだそうです」

まさか、と顔が引き攣る。

「なぜ……そんなことに」

「ツアインとふたりであったから、ですよ」

あの溺愛ぶり、あなたさまならわかりますでしょう。とルカイアに目で問われる。

「ツエイルさまはその後、十歳のときに再び、その天恵を発動させたのだそうです。やはりそのときも、ツアインがそばにいたとのことです。つまり、ふたりでひとりの天恵者……ふたりが揃えば、メル

エイラの天恵が成り立つということですよ」
「……おまえ、なにが言いたい」

目の前でツエイルの天恵を見たのは、昨夜のことだ。ツエイルのことばかりで天恵はあまり見ていなかった、というか考えていなかったのだが、周りからの考察を聞けば、二つとない天恵なうえに威力は計り知れないものらしい。

「ツエイルさまはツアインがいなければ、その天恵が不安定になるのではないか、とわたしは考えております」

「不安定に？ さらに強大な力となるのではなく？」

「その均衡を保つことが必要とされる天恵であれば」

「均衡……」

「精神です」

つまり、心。

「ツアインの様子から察するに……」

と、ルカイアがさらなる考えを述べようとしたときだった。

ばんつ、と執務室の扉が乱暴に開かれ、天使にも見紛う美しい微笑みを携えた青年がひとり、そこに仁王立ちしていた。

「……ツアイン」

噂をしていたら、ツアイン本人だ。

「お久しゅうございます、陛下。メルエイラ侯爵家当主ツアイン、本日このときより近衛隊長として復帰させていただきます」

張りついた笑顔で佇むツアインは、背中にラクウィルをひっつけていた。

ラクウィルが顔を引き攣らせているところを見ると、部屋の前では引き留めきれず、そのまま一緒に引き摺られる羽目になったのだろう。

「両親の逝去に対し喪に服している最中、わが妹が登城しておりましてので迎えに行こうとしましたところ、なぜかまもなく意味不明な謹慎処分となり、そのおりにと思っております。ご挨拶が今日までできぬままとなっております。そのこと、この場にて深くお詫びいたします」

「あ、ああ……」

嘘くさい詫びに、サリヴァンもラクウィルのように顔が引き攣った。

「それからですね、申し上げたいことがあるのですよ……」

にっこりと美しく微笑んだツアインは、それはもう貴族の令嬢を虜にするほどのものであるが、嘘くさい詫びをしただけのことはあり、徐々にその笑顔に険悪なものが含まれていく。

「僕のツイエルを、きみはどうしてくれちゃったのかな？」

「ツアイン、口の訊き方には気をつけなさい」

「閣下は黙ってくださいます？ 僕はあるじ兼友人に訊いているので」

いつもならルカイアに対し低姿勢を崩さないツアインだが、それを凌駕するほどに怒っているらしい。

「きみは、僕のツェイルに、なにをしたのかな？」
「……嫁に」

答えようとしたら、その背にくっつけていたラクウィルが飛んできた。

「うおっ！」

「んぎゃ」

思わず避けてしまった。ラクウィルが飛んだ先には長椅子があり、それごとひっくり返るといふ災難には見舞われたが、派手な物音が室内に響いた程度だった。

「あなた……避けないで受け止めてくださいよ、サリヴァン」

と、ラクウィルは文句を言ったが、軽口を言えるくらいなので怪我もない。

相変わらず怪力だなと思いつつながら、サリヴァンは笑みを絶やさないうツェイルに視線を戻す。再びなにか投げようとしている気がしなくもない。

「きみのことだから、閣下が連れてきたツェイルを、ほかの候補たちのように無視すると、僕は考えていたのだけれど……予測違いだった？」

「……予想外だった」

気のせいではなく、なにか投げようと視線が泳いでいる。
少し身に危険を感じた。

「僕はね、まさか閣下が、本当にきみのところに連れていくとは思

わなかつたんだよ。だから、ほかの候補たちと同じように無視する
だろうなあと考えていたわけ。それが、予想外だった？ つまりツ
エイルに、なにしちやっただのかなあ？」

帯剣したそれを鞘から抜こうとしている。なにか答えたらその剣
が飛んできそうだ。

それでも。

「惚れた」

答えて、剣が飛んでくるかと身構えたら、鞘のほうで飛んできた。
咄嗟に避けると、顔面に向かってきていたそれは、サリヴァンの後
方の窓硝子を突き破った。

「おかしいなあ……僕、言わなかった？ ツエイルは僕のお嫁さん
になる娘だよって」

「……聞いたことはある、ような気がする」
「じゃあどうして、惚れちゃったのかなあ」

訊かれても、困る。

ただ、ツエイルのその懸命な姿を見ていたら、美しく誇り高い姿
を見ていたら、その強さを見ていたら、気づけばいとしいと想うよ
うになっていた。

サリヴァンは視線を落とし、この想いをどう説明すればいいのか
考える。

「おれの、騎士になると……おれを護りたいと、ツエイルが言って

……その姿を見ていたら……いとしいと、想うように、なっていた」
言葉を紡いでから、今度は剣が飛んでくるかもしれない思っていたが、いくら待ってもツアインが動かないことを怪訝に思っ顔を上げると、ツアインはその笑みを消していた。

「……ツェイルが、そう言ったの？」

「ああ」

「きみを護りたいって、騎士になるって？」

「ああ」

「……そう」

ツアインの真顔は初めて見る。いつでもどんなときでも、登城したときですらにここにこと笑みを絶やさない男だっただけに、不気味なほどその無表情にはツアインの真剣味があった。

「僕の天恵の代償はね、ここが、空っぽになることなんだよ」

唐突に、ツアインはそれを明かした。

「この中が、空っぽになること……それが代償」

ここ、とツアインが指差したのは、胸。

「……心、か？」

「そう。なにをするにしても、なにを見ても、ここが空っぽで、なにも感じられない。僕が、僕の心を取り戻すのは、ツェイルのそばにいるときだけなんだよ」

心を奪われたツアインは。

ツエイルが表情を奪われているように。
天恵に振り回されている。

「だからツエイルは僕のお嫁さん……僕だけの、いとしい娘……ツエイルがいるから、僕は生きていられる。ツエイルを愛しているから、ツエイルしか愛せないから、僕はツエイルをお嫁さんにすると決めた」

それをきみは、とツアインは目を細めた。

「奪うんだね」

「……ツアイン」

「いいよ、奪っても」

にこ、とツアインは笑った。

「僕は一生ツエイルのそばにいるつもりだから」

挑発だ、と思った。

なるほど、と思った。

「おまえつきで、ツエイルはおれの嫁になるわけだ」

「だって、相手がきみなら仕方ない。ぼくはきみに忠誠を誓っている。随分と昔のことだけれど、その約束は今でも有効だからね」

だから、とツアインは不気味に笑った。

「もう一度訊くけれど、きみは僕のツエイルに、なにしてくれちゃったのかな？」

「……なにして」

「僕のツェイルはどこにいるの？」

問われて、言葉に詰まる。

ここで攫われたと口にしたのなら、確実にその剣が飛んできそう
だ。

「ふうん、そう……じゃあ、僕があゝの貴族を殺しても、なにも言えないのかな」

ハッと、サリヴァンは瞠目する。

「この僕がわからないとでも？ ツェイルが消えて、どれくらいの時間が経った？ 一時間？ 二時間？」

ツァインの口ぶりから、それをどこで知ったのかはともかく、情報を手にいるのだとわかった。

それなら、黙っていてもツェイル奪還から遠のくだけだ。

「……半日以上経つ」

ぴくり、とツァインの眉が引き攣った。

「そんなに放置したの……そう、よくそれで、お嫁さん発言ができたね？」

「っ仕方ないだろう！ おれは、国主だ」

「そんなの言い訳だよ」

ぱつさりと、切られた。

まるで国主であることとツェイルを天秤にかけ、国主であることを優先したと、その通りだが突きつけられたようで、胸が痛んだ。

「閣下、よく調べもしないで、ツェイルが己れの身を護れると安易に判断しないでもらえませんか」

「……はい？」

ツアインの、その怒りの矛先が、なぜかルカイアに向かった。

「天恵者が万能ではないことくらい、わかるでしょう。ツェイルには、弱点があるんですよ」

わかるでしょう、とサリヴァンに視線を戻したツアインに、サリヴァンは思い当たることを脳裏に浮かべる。

「代償、か？」

肉体の成長を奪われたあれだろうか。

「そう、ツェイルの身体は、言ってしまうえば幼くして成長が止まった状態。つまりは成体ではないということ。だから、身体に対する耐性が弱い。たとえば、薬……とかね」

「薬……？」

「攫われたくらいじゃツェイルはすぐに帰ってくるよ。でもね、最初の一時間で帰って来ないなら、その弱点のせいだと思ったほうがいい」

意味、わかるよね。

と、ツアインは空恐ろしいほど不気味に笑む。

「あの子がまだ子どもだって、どうしてわかってくれないのかな」

言葉もなかった。

初めにツェイルを子どもだと、八つも歳下だと言ったのはサリヴァンなのに、ツェイルの年齢以上の落ち着き方がそれを失念させていた。

考えてみれば、ツェイルはまだ十五歳になるうという年齢である。

「子どもが、理不尽なことをされたら、どうすると思うっ？」

「どう……？」

「怒り狂うに決まってる」

サリヴァンはハッと、息を呑む。

「わかる？ 子どもはね、ただ怒ることしかできない。なぜかって、理解できないから、納得できないから……子どもの理不尽っていうのは、おとなであればその場で怒り狂っても理性を働かせることができるけれど、そうじゃないだろう？」

ふと、ルカイアの「災厄の中にいるでしょうね」と言ったことが、脳裏を掠める。

そうして、はたと気づく。

その瞬間、サリヴァンは駆け出していた。

「ああ、サリヴァンったら、いきなり動き出さないでくださいよー」

後ろからラクウィルのぼやきが聞こえたが、返事をしていない余裕がない。

サリヴァンは、ツエイルが天恵を暴走させているかもしれない、その可能性に気づいた。いや、可能性ではない、確実に暴走させているだろうことを、ツアインの言葉で確信した。

とんでもないことが起きようとしている。
いや、もう起きている。

サリヴァンは心臓をどかどかと逸らせながら、廊下ですれ違う人々たちを驚かせつつ、城内を走った。

26 : それは赤い花びら。4 (前書き)

流血描写、残酷描写あります。
充分にお気をつけください。

アルミラ視点です。

夜会でそれを見たとき。

アルミラ・ウエル・ナルゼツタは、全身から血の気が引く思いをした。

「……なによ、あれ」

本当ならアルミラが皇帝陛下の隣にいて、その愛を、その権力を手に入れているはずであったから、ぼっと出の、それも生粋の貴族でもないメルエイラ家の小娘が陛下の隣にいるのは、ただもうひたすら腹が立つことだった。

あまりにもあり得ないことに、頭が沸騰した。

アルミラに魅力がないせいだと、父であるナルゼツタ侯爵に愚痴られたことも、アルミラには十分な憎悪を抱かせることだった。

アルミラが、このままでいいはずがないと思うのは当然のことだ。なにもしなければ自分がおかしくなるのではという、そんな錯覚まで起こしても当然だ。

そんな中で、ツェイルを城から連れ出したのは、思いつきだったと言える。

夜会にメルエイラ侯爵家当主ツァインが参加していなかった。それが、アルミラに好機を思わせた。

ツアインが倒れたことにすれば、もしかしたらツイイルが誘いに乗るかもしれない。夜会はシェリアン公国の公子を狙った刺客によってめちやくちやにされたこともあるし、この騒動に乗ずれば城から出るなど容易い。中央の門を自分はその権力で通ることもできる。

自分の行動を後押ししているかのように思えてならなかった。

だから、その通りに動いた。

動いて、罠にツイイルがかかったときには、ひとりほくそ笑んだ。

それから単純に、自分の侍女に命令して、傭兵を雇った。

どうせ貧相なその身体では陛下の閨の相手などできないのだから、傭兵に純潔を奪わせて道端に放り投げてやればいい。

最高の憂さ晴らしだ。

アルミラは笑った。

既に転がったツイイルを見たときは、たまらなく心地よかった。

どうやったのか逃げ出されても、けつきよくは捕まえることができたし、メルエイラの《白紫の双剣》だと知っても、劇薬になるそれを浴びせてやったら動けなくなっていた。どうやら目が見えていない様子ではあったが、アルミラにはツイイルの体調など関係ない。

最高に気分のいい憂さ晴らしができた。

これ以上ないというほどに、上機嫌になった。

だのに。

「アルミラっ……おまえ、なんてことをしたのだ!」

「あら、お父さま……なんのことです?」

「陛下の婚約者だ。メルエイラの娘だ。なにをした！」

優雅にお茶を飲んでいたらところへ、父ナルゼツタ公爵が血相を変えて飛び込んできた。

「なにとは……お連れただけですけど？」

「ゴロツキ共とおまえの侍女がひとり、死んでいるのだぞ！」

「……、え？」

アルミラには理解できなかった。

「あれを見なかったのか！」

「……お父さま、なにをおっしゃっているのです？」

「メルエイラ家は天恵を持つ一族だ。昨夜の夜会で、その天恵を見なかったのか！」

「天恵……？」

「ああ……なんてことだ。議会がメルエイラの娘を承認したのは、あの力だ……あの力があつたから、メルエイラの者が陛下のそばに置かれたのだ……っ」

慌てふためく侯爵を、アルミラは首を傾げて見つめる。なにをそんなに慌てているのか、わからなかった。

「とにかく、とにかくだ！早くメルエイラの娘を、いや妃殿下をお返ししなければ……わたしたちが殺される」

殺される、という単語に、漸くアルミラは瞠目した。

「なぜわたくしたちが殺されなければならないのです！」

「おまえ、妃殿下になにをした」

声を低くした侯爵の剣幕に、アルミラは息を呑む。

「妃殿下をここへお連れして、なにをしようとしたのだ」

「……、なにも」

「なにも？ では、あのゴロツキ共はなんだ。奴らが死んでいるのはなぜだ。侍女が死んでいるのはなぜだ。妃殿下に、天恵を使わせるほどのことを、したのではないのか！」

侯爵の剣幕は、アルミラにその疑問を理解させるほどのものだった。

「メルエイラの娘が……天恵で傭兵たちを殺めたと？」

「怒りでわれを失っている」

「……まさか」

ツェイルが天恵者。

まさか、そんなわけがない。

ただの貧相な小娘だ。生粋の貴族でもないのに、宰相の推挙を幸運にも受けられただけの、野蛮な人間だ。

アルミラは慌てて自室を飛び出した。

一目散に、ツェイルを閉じ込めた奥の客室に向かう。後ろを侯爵が追ってきた。

「アルミラっ、よせっ、これ以上、妃殿下に刺激を与えるな！」

なんの刺激だ、と思った。

侯爵はなにを案じているのだ、と思った。

アルミラに天恵はないが、その地位は、権力は、皇族にも匹敵するものなのだ。そんな自分を傷つけられる者など、いない。

だが。

足を進める方向から、嗅ぎ慣れない匂いが漂ってきて。使用人たちが凍りついている姿が見えてきて。

「なりません、お嬢さま！」

侍女のひとりに引き留められて、足を止めたとき。

アルミラはとんでもないものを目にした。

「なによ……これ」

壁一面に、赤い塗料が広がっている。

床にもその塗料が滴り落ちている。

「動いてはなりません、お嬢さま。動くものに反応しております！」

血だ、と気づいたとき、侍女が着用する衣装の切れ端を見つけた。

「なにが……あつたというの」

「わ、わかりません。悲鳴が聞こえて、駆けつけたときにはもう……」

「これは……なに？」

「か、カリナです……っ」

それは、見張りにつけていた己れの侍女の名だった。

この、ただ真っ赤でしかないものが、カリナのものだとその侍女は言う。

そんなわけがないと、そう思ったが、赤く塗れたそこに千切れた指を見つけて、アルミラは腰を抜かした。

「お嬢さま！」

「なに……なによ、これ……なんなのよ！」

叫びながら、アルミラは壁の向かいにある、客間を見た。壊れた扉は、扉を支えている部分までも破壊し、向こう側を見ることができ。

美しい獣がいた。

白く濁った薄紫の双眸が、こちらを見ていた。

「……メルエイラの娘」

憎悪を膨らませていたはずのツイイルを、美しいと思ってしまうた。

皇族特有であるはずの白金の髪や、帝国でも珍しい薄紫の双眸が、これほどまで美しくあるものだと知らなかった。

その身が、襪褌となった衣装で包まれていても。

鮮血に、塗れていても。

寝台の上でおとなしく、表情もなく、静観しているだけでも。

美しい獣がいる。

そうとしか、思えなかった。

あれが天恵者。

天の恵みを与えられた者。

ゆえに人間ではいられなくなった、神の遣い。

幼少期に聞かされたお伽噺の一節を思い出して、それが現実にあるのだということを、アルミラはこのとき知った。

27 : それは赤い花びら。 5 (前書き)

暴力描写、流血描写あります。

苦手な方は十分に注意してください。

サリヴァン視点です。

ルーフ、という白い花がある。

皇族が好むルーフの花は、初代ヴァリアス皇帝の名がつけられており、一年のうちで雨期がもつとも見頃な、手のひら大の花だ。

しかしルーフは、ヴァリアス帝国でしか群生せず、品種改良しても、なぜか白くしか咲かない不思議な花である。

それゆえか、人々はルーフを、天恵の象徴だ、と云うことがあった。

白いルーフが、色づくときに。

「サリヴァン……ルーフが」

なりふりかまわず向かった先、ナルゼツタ侯爵家の別邸に辿り着いたサリヴァンは、ラクウイルに促され侯爵家の敷地に群生したルーフを見て、瞠目した。

「……赤いルーフ」

白くしか咲かないルーフが、赤く色づいている。

白く咲いていたはずなのに、すべて赤く染まっている。

認識したとたん、右腕の古傷が疼いた。

「ぐ……っ」

赤いルーフを目にしたせいで、ふと過去の記憶が呼び起こされる。古傷の疼きを耐えたがためによるめくと、誰かに背を支えられた。

「久しぶりにみたなあ……赤いルーフ」

サリヴァンを支えたまま、どこか懐かしそうにツアインが呟いた。

「僕らが天恵を使うと、ルーフが赤く染まるんだよね。だから僕は初めて見たわけではないけれど……」

赤く染まっているルーフをしばらく眺めたあとに、ツアインはサリヴァンに視線を向けた。

「きみも、初めて見たわけではなさそうだね」

ルーフは赤く染まることがある。サリヴァンはそれを知っているし、見たこともある。これが初めてというわけではない。

むしろ。

「……いつも見ていた」

「ん？」

「五年前まで、おれはルーフが白く咲いたところを、見たことがなかった」

ルーフが白い花であると、知識ではわかっていた。けれどもサリ

ヴァンは、五年前まで赤いルーフしか見たことがなかった。

白いルーフを見たのは、五年前の、先帝であった父が崩御した日の、翌日からのことだった。

ルーフが白くしか咲かないという根拠は、植物学者たちが今もなお探求し続けているが、稀に赤く染まるルーフを見た人々が「天恵の象徴だ」と言う見解に間違いはないと、サリヴァンは思っている。

「そう……きみも、ルーフに心配されているんだね」

困ったように、ツアインは苦笑していた。ツアインも、サリヴァンと同じ解釈で、ルーフを見ているようだ。

「だから僕は、きみに忠誠を誓えるのだからうけれど」

ポンポンと、疼いていた右腕をツアインに撫ぜられる。強張っていた右腕は、ツアインのその気遣いと、隣に並んだラクウイルの苦笑を見ているうちに、ゆっくりと解けていった。

「……行くぞ」

「そうだね。国主自らお出ましになるなんて、ここの貴族には思ってもみない事態だからうけれど」

くつきりと唇の両端を上げて笑ったツアインだが、その薄紫の双眸は恐ろしく冷え切っている。自分も同じくらいの目をしているのだからうけれども、とサリヴァンも唇を歪めて笑った。

「そんな大層なことにはならないさ」

言っと、ラクウイルが「そうでもないですけどねえ」とぼやいた。

軽口ではないそれに、サリヴァンは肩を竦める。

「おれもひとりの人間だ」

ツェイルが言っていた。

あなたはひとりの人間だ、と。

わたしもひとりの人間だ、と。

肩書きの前にはそれがあるのだということを、サリヴァンは漸く理解することができた。

サリヴァンはここに、国主として赴いたわけではない。

ひとりの人間として、ひとりの男として、わが妻を取り戻しに來ただけである。

「さっさと行くぞ」

しっかりと己れの足で立つと、大きさだけは一流のナルゼッタ侯爵の邸へと、サリヴァンは歩を進めた。

「……ああ、ツェイルがいる」

斜め後ろをついてくるツァインが、邸の中へと続く大きな扉を前にしてツェイルの存在を確認する。

とたんに、大きな木製の扉は轟音を立てて破壊された。

頬にそよ風を感じながらちらりと横を確認すれば、ツァインの薄紫の瞳が、白く濁っていた。天恵発動の特徴だ。

「……あまり壊すなよ」

「どうして？ 邪魔なものは破壊しないと」

言葉と表情だけ見れば享樂者のようだが、その声は怒りに支配された冷たいものだった。

「僕は破壊にしか、天恵を使えない。ツェイルは、違っけれど」

言ったたび、ツアインは邸の壁や調度品を壊す。いや、一歩進むごとにになにかしら破壊している。

瞳と声は冷めているが、顔には笑みを張りつけてあった。

「へっ、陛下！」

と、前方から数人がこちらに駆けてくる姿を、サリヴァンは視界に入れた。

ツアインが周りを壊して歩いたことで、その轟音が邸内の者たちを呼び寄せたらしい。

「……殺していいかな」

ぼそりと、ツアインは言った。

「無駄な殺生はしないようにねえ、ツアイン」

聞き洩らさなかったラクウィルが、あくまで制する。ツアインが実際にそう動いたとしても、さしたる問題はないかのようだ。

「無視しろ、ツアイン」

「……邪魔なんだけれど」

「ラクが言うように、無駄な殺生は避けたい」

「無駄じゃないよ。この貴族は、僕に殺されたいからツェイルを連れて行ったわけだし」

まるでナルゼツタ侯爵家すべての者がそう望んでいると言わんばかりに、いや、そうだと確信しているかのように、ツアインは平然と天恵を行使しようとする。

「それに、きみの敵になりたいと立候補している貴族だろう」

「……ツアイン」

「死にたいと願っている者を死なせてやって、なにが悪いの」
「ツアイン」

サリヴァン以上に怒りでわれを忘れかけているツアインに、サリヴァンは深々とため息をついた。

できることならサリヴァンも、怒りでわれを忘れたい。いや、この冷静さを考えれば、充分サリヴァンも怒りに支配されている。

「誰も殺すな……あれらには、相応の罪を、贖わせる」

死ぬよりももっと、過酷なことを。

死ぬこととすらもなまぬるい、生きる絶望を。

己れの裡に渦巻く黒いものを、サリヴァンは自覚している。

「退けっ！」

駆け寄って来ようとする者たちを一喝し、睨みつけ、道を開かせる。

進むごとにツアインは壁などを破壊していたが、サリヴァンの声になにかしら感じるものがあつたのか、「殺すな」という命令には従う理性が残っているようだった。

周りの者たちなどは一切無視して、サリヴァンは足早に邸内を突き進む。

そうして。

ドキドキと逸ったままの心臓を持て余しながら。
気持ち逸るせいで落ち着かない己れを宥めながら。
ともすれば震える身体を叱咤しながら。

進む廊下の先に、凍りついたように動かない人々の群れを見つけると、急くあまりに躓きながらもそこへ向かって走った。

「ツエイ……っ」

もうなにも考えなくていい。
ツェイルのことだけを考えていい。
いとしいツェイルのことだけを。

「へっ、陛下っ！」

手前にいた中年の男が、サリヴァンに気づいた。

「お、お待ちください陛下！　ここは危険にございます！」

行く先を阻まんとする男を無視するも、そのまま違和感が残っている右腕の肩を掴まれ、足止めされる。
触れられたそのことに不快さが込み上げ、払い除けようとするが、その前にツァインが天恵を使って男を弾き飛ばした。

「ぐあっ！」

「……ん？ ああ、なんだ、僕のツェイルを厄介者扱いした貴族じゃないの」

ツアインの天恵で壁に激突した中年の男は、ナルゼツタ侯爵家当主ケネスリードだった。

サリヴァンはケネスリードを一瞥し、その双眸に浮かんだ困惑や絶望などの感情を垣間見る。

「……ツェイルなる者はここにはいない、だったか」

「はっ……？」

「娘が城を辞し、帰宅しただけのことである……とか」

「……っ、そ、それは……っ」

ケネスリードがラクウイルの探りに対し、答えた言葉だ。

サリヴァンは視線を前方に戻して、突然現れた国主の姿を見てさらに硬直した者たちを横目に見、その向こうから漂ってくる匂いに目を細めた。

「これはいったいどういうことか？」

赤いものが見える。

視力に問題はないサリヴァンにそう見えるのだから、あれは間違いなく赤い血だ。

そして破壊された扉や壁も、ツアインの天恵を見たあとだからこそ、同じ天恵によってそうなったのだと思わせる倒壊の仕方をしていた。

「こっ、これはっ」

「ヴィーダヒーデ」

「はっ？」

「出たおいで、ヴィーダヒーデ」

サリヴァンの言葉ではない。

ツアインだ。

振り返って見ればその肩に、妖艶の美女がしなを作って絡みついていた。

「ガルデアの様子は？」

「駄目ね……あたしがここにいるのに、ガルデアったら、気づいてくれないもの」

「じゃあ、ガルデアはきみに任せよう。ツェイルから引き剥がして」

「一時的になるわよ？ ガルデアはツェイルが好きだから」

「それでいいよ。とりあえずガルデアさえ落ち着かせてくれたら」

「そうね。あたしの可愛いツェイルに無茶させるガルデアには、お仕置が必要なもの」

白以外の色を持たない妖艶な美女は、すりとツアインの肩を離れると、サリヴァンのそばに寄ってきた。

「久しぶりね、サリ」

サリヴァンは美女と、顔見知りだ。

真っ白な彼女は、ツアインの精霊である。

「……おまえが出てくるほどのことか」

「あら、サリはガルデアを知らないでしょう？ あたしがいなきゃ、あそこに飛び込んで殺されるだけよ」

「ガルデア、とは？」

「ヴィーダヒーデ、ヴィーダガルデア。それがあたしたち。ガルデ

アはあたし、あたしはガルデアよ」

にっこりと笑んだ妖艶な精霊、ヴィーダヒーデは、サリヴァンの手を取ると前へと促した。

「ガルデアがあたしの可愛いツェイルに無茶をさせているわ。だから、お仕置きしなきゃいけないの。サリ、手伝ってくれるかしら」

「ツェイルがこの手に戻ってくるのならば」

「あら、ツェイルはあたしのよ。サリ、欲しいの？」

「欲しい」

「……考えといてあげるわ」

ふふ、と笑ったヴィーダヒーデに促されるまま、サリヴァンはゆつくりと、しかし確実に前へと進み、血溜まりとなっている場所まで足を運ぶ。

血溜まりの中には、人間の手足や臓物がある。

かつてひとりの人間であっただろうそれらを見やり、サリヴァンは一瞬だが眉をひそめ、通り過ぎる。匂いがもつとも充滿している場所まで来ると、足を止めた。

昨夜の夜会で見かけたアルミラがいたような気もするが、声をかけられても、サリヴァンの意識はそれらをすべて無視していた。

ヴィーダヒーデがするりとサリヴァンのそばを離れ、まるで吸い込まれるようにして倒壊した部屋へと姿を消す。

その姿を追って、サリヴァンは急速に身を包む安堵感に、目を細めた。

ああ、やっと見つけた。

「ツエイル……」

寝台の上で、薄紫の双眸を白く濁らせ、ぼんやりとこちらを見て
いるツエイルを、サリヴァンは見つけた。

そして、息を呑む。

それは赤い花びら。

いとしき者を心配する、赤い花びら。

本来は白く在りしもの、しかし天恵の象徴でもあるそれは、
ときに赤く染まって同じものを心配する。その危険を知らせる。

白いルーフが赤く色づくとき、天は恵みを与えた者を、
護らんとする。

「ツエイル……っ」

ああ、なんてことだ。

詰め襟の質素な白い衣装が、その身を護る肌の色まで曝すほど、
ぼろぼろになっていた。襦袢となったその衣装は血の色に染まり、
その色を吸い過ぎて変色までし始めている。

なにがあつたのかなど、それを見れば一目で状況を知ることが
できた。

なんてことだ。

込み上げるどす黒い怒りと、それを凌駕するいとしき者への想
いが、サリヴァンの足を動かした。

「ツエイル」

一歩踏み出せば、突風にも似た衝撃が身体を襲う。
それでも、歩みは止められない。

「ツエイ…っ…ツエイ」

両腕を伸ばし、まるで継るかのように駆け寄れば、ぼんやりとしていたツェイルにも反応があった。

視線が彷徨っている。

「ツエイ、おれだ、ツエイ」

伸ばした両腕で、その中にツェイルを捕まえる。一瞬びくついて強張った身体は、しかし強く抱きしめると、徐々にその警戒を解いていった。

「……サリ……さ、ま」

ことりと、肩にかかった軽い重みに、サリヴァンはさらに強くツェイルを抱きしめた。

「ツエイ……っ」

なんてことだ。

なんてことだナンテコトダなんてことだ。

この手にツェイルは戻ってきた。けれども、ツェイルがまとったこれは、いったいなんなのだ。

胸に、腹に、どろどろとした黒いものが溜まる。

こんなにもツェイルが、己れの中で一番大きな存在になっていたなど、知らなかった。

こんなにも、こんなにもツェイルが、いとしくてならないなんて。ルーフを赤く染め上げた者が憎くてならない。

「ツェイ、おまえはもう、おれから逃れられないぞ」

意識を手放したツェイルに、まるで泣いているかのような声音で告げる。そのまま抱え直して立ち上がると、サリヴァンはゆっくりと振り返った。

ラクウイルが無表情に、ツアインは恐ろしい笑みを浮かべ、そこに控えていた。

「帰るぞ」

低い声でそう告げれば、ふたりは揃って黙ったまま右手を胸に添え、頭を下げた。

誰かの声がした。
真つ暗な闇の中で、自分を呼ぶ声だ。

「…………だれ？」

どこかで聞いたことのある声だ。ツェイル、と確かに自分を呼んでいる。

けれども。

どこから聞こえてくるのか、ツェイルにはわからなかった。

「サリよ」

ふと、真後ろからそう言われて、振り向いた。

「…………、ヒーデ？」

兄の精霊、ヴィーダヒーデだった。

「久しぶりね、あたしの可愛いツェイル」

相変わらずの美女ぶりで、その豊満な胸に、ツェイルは抱き込まれた。

「……どうしてヒーデが、ここに？」

「ここって……ツェイル、ここがどこかわかっている？」

ツェイルはヴィーダヒーデに抱き込まれたまま、真つ暗な闇の中を見渡してみる。

「どこだ？」

「ガルデアがいるところよ」

「……ガルデア？」

「ツェイルに無茶させたから、お仕置き中なの。だから暗いけれど、いつもは明るいわ。ツェイルに合わせる顔がないから、今は暗くなっているだけというのもあるけれど」

だから、お互いが確認できるだけで、周りは闇に包まれているらしい。

「わたしは、ガルデアに逢ったことはないのだが」

「そうねえ……ガルデア、いつもツェイルには姿を見せないものね」

「ああ……だから、ガルデアのことはよくわからない。本当にわたしの中にいるのかも、わからない」

ここはガルデアがいるところだ、と言われても、己れの精霊を見たことがないツェイルは、ただ頷くことしかできない。

「ガルデアはツェイルが好きよ。好き過ぎて、どうしようもないの。けれどそのせいでツェイルは代償を支払わなきゃいけないでしょう？ガルデアはそれが申し訳なくて、いつもツェイルに合わせる顔がないのよ」

「この身体のことか？」

「そうね。こればかりは、あたしたちでもどうしようもないわ。けれど、一つだけ確かなことはあるのよ」

ふふ、とヴィーダヒーデは笑った。

「あたしたちは、メルエイラが好きなの。本当に、それだけなのよ」

そう言っただけで笑うヴィーダヒーデは、けれどもその白い双眸に深い悲しみをたたえていた。

「ツェイルたちを苦しめるために、その中に棲家を作ったんじゃないの。あたしもガルデアも、ただメルエイラの人たちとずっと一緒にいたいだけ。幸せにしたいだけ。好きだから、愛しているから、一緒に幸せを感じたいの」

「ヒーデ……」

「……わかってくれて？」

なにを、とは聞かない。

ヴィーダヒーデの想いは、兄の精霊であることを知っているからこそ、わかるものがある。

「ヒーデたちは、メルエイラを護ってくれている……わたしは天を恨みはしたけれど、ヒーデやガルデアを恨んではない。感謝している。むしろ今は、この力があるおかげで、サリヴァンさまのおそばにいられるから……本当に、感謝している」

だから悲しそうに笑わないで、とヴィーダヒーデの頬を撫でると、ヴィーダヒーデはうっとり微笑んだ。

「好きよ、ツェイル。愛しているわ。ガルデアも許してあげて」

「もちろん。いつか、ガルデアに逢いたい」

「ええ、そうね。ありがとう、ツェイル。あたしたちの勝手を許してくれて、本当にありがとう」

そんなことはない、と首を左右に振ると、再び耳に、ヴィーダヒーデのものではない声が聞こえた。

「……サリが呼んでいるわね」

「さり？」

「サリヴァン、と呼ばれていることもあるわね」

ハッと、ツェイルは周りを見渡した。相変わらず暗闇ではあるが、この声がサリヴァンであるなら、早く逢いたいと思う。

「ツェイル、サリが好き？」

「……え？」

「サリを好きだと、思う？」

ヴィーダヒーデの唐突な問いに、ツェイルは首を傾げた。

「嫌いだとは思ったことがない。だから、好きなのだとは思う。い
としいとも、思うことがあるけれど」

「……そう、少しは自覚があるのね」

「自覚？」

「いいの、こつちの話。さあ、戻ってツェイル。今度逢うときは、
ガルデアも一緒よ」

「ヴィーダヒーデ？」

「また逢いましょう、あたしの可愛いツェイル」

なにを言わんとしているのか、それを教えないまま、ヴィーダヒ

ーデの姿が遠くなっていく。いや、ツェイルがヴィーダヒーデから離れて行っていた。

そうして闇に包まれたそこに、眩しい光りが差し込んでくる。手のひらで目を庇い、顔を背けつつそちらを見直したとき、ツェイルは自分の身体が浮上していく感覚に捕らわれた。

ああ、これが目覚めるということだろうか。

そう思いながら目を閉じて、浮遊感に身を任せた。

「ツェイル……」

はつきりとした声が、ツェイルを覚醒へと導く。同時に、身を包むぬくもりも感じた。

「……サリヴァン、さま？」

「！ ツェイルっ？」

ぼやりけた視界に、サリヴァンの淡い金髪が映る。碧い瞳が映る。

「サリ……ヴァン、さま？」

なぜぼやけて見えるのだろう。

なぜはつきりと見えないのだろう。

目を擦ろうとしたら、その手をサリヴァンに掴まれた。

「使われた薬の影響だ。治るのに少し時間がかかる」

ああ、そういえばあの女性に拉致されたのだった。

それを思い出して、とたんにあのおぞましい感触が蘇ってくるよ
うで、ツェイルは叫びそうになった。

「もうだいじょうぶだ、ツェイ」

ぎゅっと、強く抱きしめられて。

「だいじょうぶだ。おれがおまえを護るから」

優しい声を、耳許に感じて。

「サリ……っ、さま」

「ああ、おれだ」

自分を抱きしめるこの腕も、優しい声もサリヴァンものだとわか
れば、ツェイルは叫ばずに済んだ。

ホッと、安堵した。

その深い安心感に、ツェイルはサリヴァンの背中に腕を回してし
がみついた。

「サリヴァ、さま……っ……サリヴァンさまあ」

どうしてこんなにも、サリヴァンの腕の中は心地いいのだろう。
雇い者たちに触られたときはただただ不快でしかなかったのに、サ
リヴァンとはもっと触れられていたいと思うほどに安堵する。

やはり自分はサリヴァンに惹かれている。
いとしいと想う。

「すまない、つらい思いをさせた」

そんなことはないと、ツェイルは首を左右に振る。

確かにつらかったけれども、こうして今はサリヴァンが抱きしめてくれている。どうしてこの状況になっているのかは憶えていないが、こうしてサリヴァンがいてくれるのなら、もうつらくはない。

「ツェイ……許してくれ」

許すもなにも、サリヴァンは助けてくれた。

もう二度とサリヴァンの剣にはなれないかもしれないと、そう絶望したツェイルを、力強い腕で抱きしめてくれている。

それに、護るとまで、言ってくれた。

嬉しくて、幸せで、ただひたすら「サリヴァンさま」と呼ぶことしかできなかった。

涙が溢れて、さらに声も出せなくなったツェイルが、サリヴァンにただしがみついていたときだった。

「あのー、お取り込み中申し訳ないですけどー……起きたなら、ふたりとも医者に診られてくれませんか？」

「だ、ダンガード侍従長っ！」

「だってそーでしょーリリい？」

「わたしは邪魔したくないのにい！ あ、でもツェイルさまはお医者さまに診ていただかないと！」

ラクウィルとリリの声に、懐かしさを感じた。

サリヴァンから少し離れて声のしたほうを見れば、やはりぼやけた視界ではつきりと姿を捉えることはできなくても、ラクウィルらしい白いものと、リリらしい茶と白が見えた。

「……………リリ？」

「！はい、ツェイルさま！」

だだだだっ、とりりが、どうやら寝台にいたらしいツェイルのところに駆け寄ってきて、床に膝をつくとその顔を見せてくれた。

「申し訳ありません、ツェイルさま。わたしがいながら、おひとりにしてしまったせいで……………」

「……………リリ」

リリの両目は、真っ赤になっているようだった。

自分がいなくなったことで泣いてくれたらしいリリに、不謹慎なことではあるが嬉しさが込み上げた。

「ごめんなさい……………ごめんなさい、ツェイルさま」

ツェイルはサリヴァンにしがみついていた手を離すと、そつとリリの頬に触れた。

「ありがとう、リリ」

「ツェイルさま……………」

「ありがとう」

撫でると、手のひらが濡れた。どうやらリリはまた泣いてしまっ

たようだ。

「ああもう大惨事……まあ、いいですけど」

姫、とラクウィルもそばに寄ってきた。

「おかえりなさい」

どうしてかしっくりきたその言葉に、ツェイルは「はい」と答えた。

「ということで、医者、呼びますよ。姫はその目、治すために薬飲まないといけないですし、身体もまだ自由に動かせないでしょう。

サリヴァンに至っては、脇腹の怪我を診てもらう必要がありますからね」

「……怪我？」

「そうですよ。姫が目覚めるまで触るな、と言われて今の今まで待ちましたので、強制的に医者に診ていただきます」

そう言ったラクウィルは、部屋の扉に向かって「入ってくださいー」と声をかけた。

ツェイルは慌ててサリヴァンに振り向く。

「怪我を？」

訊ねると、サリヴァンはそっぽを向いた。

「サリヴァンさま」

「……おまえほどではない」

隠すつもりだったらしいサリヴァンに、ツェイルはさらに慌てた。確かラクウィルは「脇腹の怪我」と言っていたから、自分がしがみついているはその怪我を悪化させるだけだ。

「なぜ離れる。いいから、くっついている」

まだ掴んでいた片手を離して距離を開けようとしたら、不服そうにしたサリヴァンに深く抱き込まれる羽目になった。

「サリヴァンさま……っ」

「いい。おれの怪我は、大したことはない」

だとしても、痛むはずである。

押し退けてでも離れようともがくが、いかんせん、どこに力を入れても怪我の悪化を促進させるだけのよう気がして、ろくにもがくこともできない。それに、ツェイル自身もまだ、身体を自由に動かせなかった。

そうこうしているうちに、抵抗にもならないツェイルをサリヴァンは抱き直し、身体を起こすと足の間 ツェイルを座らせた。

「軽いな」

などと笑って言う始末で、まだ自由に身体を動かせないツェイルは頂垂れるしかなかった。

そんなサリヴァンとツェイルの攻防を見ていたのはラクウィルやリリだけでなく、呼ばれてやってきた医師までも呆れて見ていた。

「陛下、ツェイルさまには安静が必要なのです。寝かせて差し上げ

てください」

そう医師に言われて、しびしびサリヴァンはツェイルを寝台に寝かせたが、そばを離れることはなかった。

「ふむ……やはり治るまで二、三日はかかりますね。頭痛や吐き気はありますか？」

「……少し」

「目は、目薬で少しずつ様子を見ていきましょう。身体のほつは、これは中和薬を飲んでいただくことになります。だいじょうぶ、治りますよ」

目が見えるようになる。身体も動くようになる。

それを言われるとホツとした。

用意された目薬をリリにさしてもらって、粉薬を飲み終わると、医師はサリヴァンに視線を向けた。

「さて、次は陛下ですね」

「おれはいい」

案の定、サリヴァンは診察を断った。

だが、それをツェイルが許すはずもなく、ラクウイルや医師たちも同意見だった。

「姫、サリヴァンをじっと見つめてください。それで落ちますから」

ラクウイルにそう耳打ちされたので、言われたとおりにツェイルはサリヴァンをじっと見つめた。

はつきりと見えているわけではないが、目薬のおかげでいくらか

視界は回復しており、顔の輪郭はなんとなくわかる。

「碧い双眸を、ひたすら無言で見つめた。

「……ツエイ、わかった、わかったから、そんな顔でおれを見るな」

と、目許をサリヴァンの手のひらで覆われた。

「よしっ」とラクウィルの小さい声が聞こえた気がする。どうやら作戦は成功したようだ。

ため息をついたサリヴァンが上着を脱ぎ始めて、まさかここでそのまま診察を受けるつもりかと驚いたツエイルだったが、上半身を露わにしたサリヴァンのその肩や腕を、役に立たなくなっている目で見て、瞠目した。

「……傷跡」

きちんと思えているわけではないが、右側の、肩から肘にかけて、白い肌が茶色に染まっているほど引き攣れたものがあり、それが傷跡のように見えた。しかもその傷跡は、今の目で見てもはっきりとわかる花の刻印らしきものを、真っ二つに両断していた。

「ん？ ああ、これか……昔の傷だ」

サリヴァンは、ツエイルの視線がどこに向けられているのかわかったようので、自分もそこに視線を落として手のひらで撫せてみせた。

「この刻印があると知られて……父に斬られた」

「え……？」

「おれにあってはならぬもの、だったらしい」

花の刻印は、ツェイルの目には、とても美しいものに見えた。おそらくルーフの花を表現した刻印だ。

それを、あってはならないものと、父親に斬られたという。

なぜそんなことに、とツェイルは眉をひそめた。

こんなに美しいものを、なぜ斬ることができたのだろう。

しかし、サリヴァンは口を開かなかった。

脇腹の、剣で掠ったような傷の治療を無言で受け、痛み止めと熱冷ましの薬を飲み終えるまで、ツェイルに顔を向けることすらなかった。

29 : 慈雨のなかで。2 (前書き)

サリヴァン視点です。

「近衛隊長なのに、どうして僕は締め出されているのかな？」

「害にしかならないからだ」

「ぶっ飛ばすよ？」

「できるものならやってみろ」

笑顔なのに剣呑な空気を出せるツアインはすごい、とサリヴァンは本気で思う。

いや、おそらく自分もそういうことはできるのだろうが、終始それを維持しているツアインほどではないだろう。

「僕の忠誠心を試すとはいい度胸だよ……ちっ、あんな約束しなきゃよかった」

「聞こえているぞ」

「聞こえるように言ったんだよ」

ツアインの表情は柔らかいし微笑んでもいるが、言っていることと瞳は素直である。

「で、僕はいつになったらツェイルに逢えるわけ？」

「さあな」

「逢わせない気？」

「落ち着いたら逢わせるさ」

「もう落ち着いただろ」

なにか投げるものを探すように視線を彷徨わせているツアインに、周りになにも置いていなくてよかった、とサリヴァンは思った。帯剣していればそれが飛んできただろうが、居室に案内した折りに取り上げておいたので、その心配はない。

「ツェイルは天恵を暴走させたことを覚えていない。だが、いつ思いついてもおかしくはないらしい。だからそれが落ち着くまで、おまえはしばらくルカの近辺にいる」

「僕はきみの近衛騎士だよ」

「ゆえにおれの命令は絶対だな」

「……やっぱり辞退しようかなあ」

「そうすると、今後ツェイルのそばにいることはできなくなるな。」

それは好都合だ。辞退していいぞ」

「喜んで継続させていただきますよ！　って、いつからそんなに意地悪な性格になったの」

「ツェイルがおれの嫁だと確定してから」

につこりと笑えば、さすがのツアインも顔を引き攣らせ、深々とため息をついた。

「まったく……きみはひどいね。あの扉の向こうにツェイルはいるんだろう？　それなのに、逢わせてくれないなんて」

「おまえにしか任せられない仕事がある」

言っと、ツアインは笑みを消し、サリヴァンから視線を逸らした。

「……閣下から聞いたよ。あまり気乗りしないのだけれどね」

「それでも、おまえにしか任せられないし、頼めない」

「……僕はツェイルの側にいるからね」

その言葉にハツとすると、ツアインが自嘲気味に笑っていた。

「閣下は素晴らしいよ。僕がこうしてここにいる、その理由を作ったんだからね。まさかきみがそれに乗じるとは思わなかったけれど」

「……乗じたわけではない」

「どうでもいいよ」

投げやりに吐き捨てられた言葉は、ツアインからまたも表情を奪っていた。

「僕はツエイルをそばに感じられたら、それでいいから。それに、僕みたいな異形は、誰かに飼い慣らされていたほうがいい」

「誰もおまえを異形だとは」

「じゃあ、なに？」

問われて、しかしサリヴァンは答えられなかった。

それでも、ツアインが異形ではないということだけは、はっきりとしている。

「……つくづくきみはお人好しだね。閣下なんか、僕のことを道具にしか思っていないのに」

「違う。おまえは道具なんかじゃない」

「……ほんと、きみはお人好しだよ」

そう言うと、ツアインは座っていた長椅子から離れた。

「けれど、安心しないことだね。またツエイルになにかあったら、今回みたいな優しいことはしないから」

「ツアイン……」

「僕みたいな狂犬、きみなら上手に飼い慣らせるよね」

ちらりと振り向いたツアインは極上の笑みを浮かべ、そうして颯爽と歩き出す。去り際にツェイルが眠る寢室を見て寂しそうにしていたが、なにも言わずに部屋を出て行った。

閉められた扉をじっと見ていたサリヴァンだったが、おもむろに視線を外すと長椅子を離れ、寢室へ続く扉を開けると中に入る。

「うん？ ああ、サリヴァン。ツアインは行きましたか」

「……ああ」

寢室には、待機させていたラクウイルが、寢台の隣に置いた椅子に座って本を読みながら、ツェイルの看病をしてくれている。

「ツェイルの様子は？」

「少しうなされてます。まあ仕方ないですよ。あんなことがあって、なんでもなかったかのようにできるわけもないですしね」

「そうか……」

ツェイルが眠る寢台に腰かけて、サリヴァンはその苦しそうな寝顔に目を細めながら、汗で額に張りついた前髪を払ってやった。

「サリヴァンも横になってください。疲れたでしょう」

「……ラク」

「ん、はい？」

「いつまでおれは、ここにいればいい」

唐突な問いは、ずっと心に持っていたものだった。今になってそれを口にしたのは、ツアインが言った「異形」や「道具」という言

葉を聞いたからだった。

「……………飽きましたか？」

ラクウィルはそう問い返してきた。

だからサリヴァンは、ただゆっくり首を左右に振った。

「おまえが言ったように、ここは面白いよ。けど……………前より疲れるな」

「いろんなことに感情が振り回されますからね。それでも……………楽しいでしょう、外は」

「ああ……………ツェイルにも出逢えたからな」

「じゃあ、いいじゃないですか。もう少しここにいても」

顔を上げれば、ラクウィルはただほんわかと笑んでいるだけだった。

「……………なあ、ツェイルを連れていってもいいか？」

「もちろん、かまいませんよ。そのために出逢ってもらったわけですからね」

「ツェイルもいるし？」

「いい付属品でしょう。けっこう役に立つと思いますよ」

「……………そうだな」

ふっと笑えば、ラクウィルは安心したよう唇を綻ばせた。

「ツェイルを連れていく」

「まだいけませんよ」

「わかつてる」

言いながらサリヴァンは寝台に上がると、かけ布団を捲って中に潜り、ツェイルを引き寄せて腕に中にしまい込む。苦しそうにしていたツェイルだったが、サリヴァンがぎゅっと抱きしめれば、その表情も徐々に和らいでいった。

「ツェイルがずっとおれのそばにいるなら……どこにいても同じだ」
「それはよかった。じゃあもう少し、ここにいてください」
「ああ……」

ツェイルのぬくもりを感じながら瞼を閉じると、しとたと雨の降る音が耳に入った。

「……雨ですね」

今降り始めたらしい雨に、ラクウィルも気がついた。

「ねえ、サリヴァン」

「……ん」

「すみません」

その唐突な謝罪に、サリヴァンは怪訝に思っただ瞼を上げる。ラクウィルは、笑いともつかない困ったような、そんな情けない顔をしていた。

「……なにが？」

「怪我、させてしまいました」

脇腹のあれか、とサリヴァンは忘れかけていた怪我のことを思い出した。

脇腹の怪我は、ツェイルが天恵を暴走させていたときにできたも

のだ。強風にも似た衝撃を受けたことで、飛んできた硝子の欠片が掠めていったのだ。防ぎようがなかったあれは、言ってしまったえばサリヴァンの不用意さによるものであるから、誰に非があるものでもない。

「おれが勝手に飛び込んだんだ」

「……………それでも、おれはもう、あなたの血は見たくないですよ」

こんな僅かな怪我で、と思う。

けれども、ある種そこまでラクウィルを追い詰めたのは自分のせいだと、サリヴァンはわかっていた。

「ツアインがいたし、姫もあなたに気を許すようになっていたから、あなたが怪我をするようなことはない、高を括ってたんですけどね……………まさかああいう展開になるなんて、思ってもみなくて」

「……………それでおまえ、あのとき無表情だったのか」

「さすがに余裕がありませんでした。危うく、騎士団総隊長さんに侯爵を引き渡す前に、殺すところでした」

「おまえ……………」

「だって、姫はあなたの大切な人になりました。あなたの大切な姫に、侯爵はなにをしました？ あなたがその身になにを感じたか、わからないおれじゃないですよ」

またこいつは、とサリヴァンはため息をつく。

ラクウィルはふだん能天気な男だが、実はそれは極端過ぎる性格からきている。だからルカイアよりもさらに、なにをしでかすかわからない男なのだ。

そんな性格をしているから、おそらくサリヴァンはラクウィルを追い詰めさせることになったのだ。

「殺してやりたかった……ツアインにはああ言いましたけど、おれも怒りでわれを忘れそうでしたよ」

「この怪我は誰のせいでもない。おまえのせいでも、ましてツエイルのせいでもない」

「あなたに不愉快な思いをさせました。十分な罪です。だから、令嬢の対処はおれに任せてくれますね？」

駄目だ、と言ったところで、おそらくラクウィルは聞かないだろう。

「おまえ、侍従長だろうが」

「ええ。ですが、《デイベイン天地の騎士》という称号は、あなたのために在るおれの称号です」

クツと、サリヴァンは笑う。

「デイベイン古の騎士が登場するほどのことか？」

「おれを怒らせるようなことをした、つまりはその覚悟があったのことでしょうからね」

にっこりと、ラクウィルは不気味に笑った。

「……ほどほどにしておけよ。おれだってやりたいことはある」

「ええ、もちろん」

じゃあ早速、とラクウィルは椅子を離れた。

「ラク」

「ほ？」

寢室を出て行くつもりでいたラクウィルを呼び止めたのは、とくになにかあったからではなかった。

ただ、この一途に忠誠をくれる乳兄弟を見ていると、もう本当にどうしようもないところまで巻き込んでしまっていることが、申し訳なくてならなかった。

「おれの歪んだ人生につき合わせて、すまない」

思わず謝れば、ラクウィルはいつものように、優しく微笑むだけだった。

サリヴァンの横顔を見ていて、ふと思ったことがある。

メルエイラの家は大切だ。

家族も、仕えてくれている人たちも、みんな大切だ。けれども、ツェイルは見つけてしまった。

本当なら許されることではないけれど。

望んではいけないことだけれど。

願ってはいけないことだけれど。

ああ、グイーダヒーデが言っていたのは、こういうことか。そう思った。

己れの気持ちに漸く理解と納得を得ると、ツェイルはそのぬくもりを子守唄に、眠っていた。

目覚めてから、そこにサリヴァンの姿がないことにはがっかりしたけれども、気分はすっきりとしている。

「ああ、お目覚めのようですね。気分はどうですか？」

そこにいたのは、医師だった。その傍らには、見覚えのある薬湯が置いてある。

「ん？ ああ、テューリ嬢には、助言をいただきました。メルエイラ家の医術はすごいですね。わたしもまだまだ勉強しなくては……」

あ、そういえば名乗っていませんでしたね。わたし、エーヴィエルハルト・カリストテルと申します。ハルト、とお呼びください。無駄に名前が長いので」

よく喋る人だなあと、ツェイルはうつかり関係ないことを考える。

「……ハルト、さま？」

「はい。以前、祖父とは逢っているとは思いますが、本来はわたしがサリヴァンさまの主治医ですので、お見知りおきください」

そういえば、サリヴァンが眠り続けていたときに、医師を呼んでもらった。エーヴィエルハルト、ハルトという青年の祖父だったらしい。

しかし気になるのは、ハルトの家名のほうである。

「カリストテル、とは……公爵家の」

「レイル・カリストテルは、わたしの父です」

やはり、上位十二貴族、四公の一つであるカリストテル公爵家だ。

「とはいえ、公爵は父であってわたしではありませんから、畏まったりしないてくださいね。三男坊の末っ子なので、けっこう自由に育てられましたから」

礼儀がよくわからないのです、とハルトは笑った。

「あの……わたしも」

「それ以上は言わないように。あなたは今、サリヴァンさまの婚約者です。わたしは礼儀知らずなので、それをお許しただきたいだけですから」

生粋の貴族でもない自分に敬語は不要だ、と言おうと思ったのだが、そのの礼儀だけは通させてもらいますと、笑顔で断られた。どうやらラクウイルのようにはいかないらしい。

「気分はどうです？」

「すっきり、しています」

「目は、見えます？」

「はい。少し、まだぼやけていますが」

「そうですか。さすがテューリ嬢……お逢いしたときは、殺されるかと思いましたが」

「姉に逢ったのですか……すみません」

容易に想像できる光景に、ツェイルは申し訳なくなつた。

兄もそうだが、姉の愛情表現もかなり偏っているらしいという認識は持っているのです、この状態のツェイルを姉が許すはずもないのだ。

「よい家族ですね」

「え……」

「稀に見る、暖かい家族でした。羨ましいですよ」

そう言ったハルトの表情に嘘はなく、本当にそう思っているのだと、語っていた。

褒められて嬉しくないわけもなく、ツェイルはホッとす。

「元気、でしたか」

「ええ。みんな、ツェイルさまを心配しておられたので、リリがいると説明しましてね。サリヴァンさまからの書状も一緒に届けましたので、とりあえずは安心してくれたみたいです。だいじょう

ぶですよ
「

リリも一緒に出向いてくれたのなら、ツエイルの生活ぶりをきちんと話してくれたことだろう。サリヴァンがどんな手紙を書いたのかはわからないが、それでも安心させてくれるようなものを書いてくれているだろうから、家族に心配はないはずだ。

「サリヴァンさま、は……？」

「事後処理に。今朝までは、ツエイルさまのそばにいたんですけどね」

視線を外に転化させると、雨の粒が窓硝子に当たっていた。眠ってしまいう前も雨が降っていたはずであるから、それほど時間も経っていない気がする。

「わたしは、どれくらい眠っていましたか？」

「ええと……熱が出る前からですと、四日ほど。熱が出てからは三日です」

「……熱？」

「はい。焦りましたよ。どうやら中和薬が合っていなかったようで、状況を説明したらテューリ嬢に殺されかけましたから」

「……すみません」

たびたび姉の過剰な愛情に申し訳なさが込み上げた。

「ずっと雨が降りっぱなしなので、三日も経っているように感じないでしょうけど、今日お目覚めになったのならもうだいじょうぶですね。テューリ嬢にもそう言われました」

時間の経過を感じさせない雨は、どうやらずっと降り続いていた

らしい。

「もう少し、休んでいてください。ちょうどリリが食事の用意をしていますから、それを食べたら、また、ね」

「もうだいじょうぶです」

「油断は禁物です。ツェイルさまに使われた薬ですが、毒薬にもなるものなんです。よく手に入れられたな、と思うくらいに珍しい薬でもあるんですよ。だから、ここは、ね」

医師の言うことを聞いてください、とお願いされては、頷くしかない。

ラクウィルの適当な診察を信じられなくても、医師であるハルトの言葉には従うツェイルだ。

「久しぶり、だな……」

ハルトが、リリに知らせてきます、と言って寢室を出て行っから、ツェイルはひとり心地にそう呟く。

寝込むのは、久しぶりだ。

兄と同じように頑丈な身体だと思っているツェイルは、憶えている限りでは毒に耐性を作ろうと訓練したときのほかに、こうして寝台から動かないのは片手で数えられる程度のこと、寝込む、ということがなかった。

おとなしくしているのは苦ではないが、身体を動かしたいという気持ちは抑えられるものではない。

そろそろと、寝台から起きて床に両足をつけると、ツェイルは立ち上がってふらつきながらもゆっくりと窓辺に歩いた。

「ぎしぎし、する……」

三日眠り続けたサリヴァンが「身体がぎしぎしする」と言っていたが、本当にそうなるらしいと知った。

窓に両手をついて深呼吸すると、薄暗い空を眺めた。

「雨……誰かが、泣いている、みたいだ」

降り続けている、という雨に、なぜかそう思った。

誰かが泣いている。それはサリヴァンでなければいいけれど、と思う。

少しひんやりしている窓を押し、あつさりと開いたその向こうへ身体を滑り込ませると、ツェイルは湿り気のある外へ出た。

潤いを帯びて生气に溢れた植物たちが、青々とその魅力をつェイルに見せつける。

森が元気なのはいいことだ。そこに住まう生きる者たちを、ときには脅かすこともあるが、今ツェイルが感じているように励ましてくれることもある。

ふと、その森のなかに人影を見た。

「……サリヴァンさま？」

ちらりと見えた淡い色の金髪、そして実は華奢な身体の線は、間違えようのないサリヴァンのものだ。

ツェイルは周りを見渡し、まだしとんと降る雨を考え、これくらいなら露台から向こうへ出てもそれほど濡れはしまいと判断して、ゆっくりとした足取りでそこを離れる。

靴を履いていない足に、心地いい冷気が伝わってくる。
幼い頃の泥遊びみたいで、少し楽しみながら森へ向かった。

「ツエイ！」

と、大きな声に、びっくりと肩が竦む。

「どこに行く、ツエイ！」

ツェイルを「ツエイ」と呼ぶのは、サリヴァンただひとりだけである。

後ろからの呼び声に振り向けば、露台から身を乗り出したサリヴァンが、欄干をひらりと飛び越えていた。

「……………サリヴァンさま？」

森の向こうに見えたはずの姿が、なぜこちらにあるのだろう。
疑問に思いながら、しかし必死な形相で駆けてくるサリヴァンを、ツェイルは見つめた。

「病み上がりが、なにをしている！」

言うなり、サリヴァンはツェイルをその腕の中に入れた。

「雨の中外に出るなど、なにを考えているんだ！」

「え……………いえ」

「熱が引いたばかりなんだぞ！」

怒鳴るサリヴァンに、思わず身が竦む。

思い返してみれば、ツェイルはサリヴァンのごういった姿を見たことがなかった。

「ばかが……っ」

ぎゅっと抱きしめられれば、そのぬくもりを感じて、心がホツとする。怒鳴られてもそれは変わらないのだなと、ツェイルは思った。

「ごめんなさい……」

「部屋に戻るぞ」

はい、と頷くと、とたんに視界がグンと高くなった。

「は……、え」

両足が地面から離れているのだと気づいたときには、ツェイルはサリヴァンの腕に抱き上げられていた。

「さ……サリヴァンさまっ」

こんな貧相な身体でも、それなりの重さというものがある。

ツェイルは慌てたが、しかしサリヴァンは気にした様子もなく、しっかりとツェイルを支えた。

「……消えるかと、思った」

ふと、そんな声がいつもより下の位置から聞こえた。

「おれを置いて、どこかに消えるのかと思った」

絞り出すようなその声音は、少し震えていて。そういえば怒鳴っていた声も、震えていた気がする。

「頼むから、急にいなくならないでくれ」

「……、サリヴァンさま」

「おまえが部屋から消える、その恐ろしさが、これほどのものとは思わなかった……頼むから、おれが見える場所にいてくれ」

ツェイルを抱き支える腕に、力が込められた。それでも震えている声や、サリヴァンの窺いしれない顔に、ツェイルはふっと身体力を抜く。

「ごめんなさい」

三日も寝込んでいたのに、急に寝台からいなくなったら、それは誰でも驚くだろう。

サリヴァンを動揺させるほどに驚かせてしまったことを申し訳なく思いながら、けれどもそれほどまでに心配してくれたことが嬉しくて、ツェイルはサリヴァンの頭を両腕で抱き込んだ。

ああ、この人に好かれたら、どんなにか嬉しいことだろう。

この人に愛されたら、どんなにか幸せなことだろう。

それは高望みではあるけれど。

せめてこの、しとしとと降り続く雨だけは、この心を自由に受け止めてくれはしないだろうか。

「ごめんなさい……サリヴァンさま」

慈雨のなかで、ツェイルはサリヴァンに愛されたいと思った。

31 : 侍従長散録。(前書き)

ラクウィル視点です。

おそらくそこは、誰の目も届かないような場所だった。

「……なにをしているんだ？」

「死ぬの待ってるの」

「……ここ、墓場なのか？」

「たぶん違う。ただの森だと思う」

「アウニの森だ」

「ふうん？ 地名なんて知らないからなあ」

「……で、ここで死ぬつもりなのか？」

「そう。だって帰るところないし、生きるのも大変だからね」

歩き疲れたから、適当な木の幹に寄りかかって休んでいただけだったけれども、このまま死んでもいいかと思つて瞼を閉じていた。だから話しかけられても、視界は暗いままだった。

「帰るところがないなら、おれのところに来るか？」

「いい。言つたでしょ。生きるのも大変なんだつて」

「なんで？」

「おれ、天恵者だからさ。どこに行つても、この天恵のせいで煙たがられてね。ついには親にまで死なれちゃつたから、子どものおれがひとりで生きるには難しくなつちやつたわけ」

「この世界、ラーレに広がり散らばりし天恵に、忌避すべきものな
どないぞ」

『法則から外れた天恵者でも?』

『法則に従わない天恵者もいる。そもそも、法則などというものは人間が勝手に定めたものだ。精霊と契約するのは、その力が増すという特典があるというだけのこと。必要ないなら、契約などしなくてもいいものだ』

『へえ……』

そんなことを言う人は初めてだった。だから、閉じていた瞼を上げ、興味本位にその人物を見てみた。

自分と同じくらいか、それより少し歳下くらいの少年だった。

『……子どもだ』

思わずそう言えば、少年は怪訝そうに首を傾げた。

『おまえも子どもたる』

そのとおりだ。

『おれ、たぶん十歳くらいなんだけど、そっちは?』

『おれもそれくらいだ』

『なんであやふや?』

『数えたことがない』

『……そう。おれも気にしたことなくて』

随分と綺麗な身なりをしているから貴族かと思ったのだけれども、貴族ならきつちりと誕生日くらい祝うはずであるから、数えたことがないわけがない。

どうやら少年は貴族の常識から外れているようだ。

『なあ、おまえのその髪と眼、元からか？』

いきなり少年にそう問われて、一瞬なんのことかわからなかった。

『うん、たぶんそうだけど』

『……ちよつと、来いよ』

『なんで』

『帰るところがなくて、死ぬの待ってるだけなら、ちよつとくらいつき合ってもいいだろ』

『……まあ、確かに』

死を待つにしても、動けないほど空腹というわけでもなく、おそらく時間がかかるだろうから、動けなくなるまでならつき合える。それに、そうなるまですることもない。

『養父上の召喚獣で来たから、すぐに着く。来いよ』

少年に手を差しのべられて、まあいいか、と安易にその手を取って立ち上がり、自分より小さかった少年に引つ張られるようにして向かった先で、早くも失敗したと後悔した。

『……なに、このでかい鳥』

『養父上の召喚獣だ。フェンリス、こいつを連れて行く。いいか？』

少年は、大木よりも少し小さいくらいのもので、それでもおとなが軽く数人は乗れるだろう白い大鳥を前に、怯むことなく歩み寄る。引つ張られているほうとしては迷惑な行為だ。

『ついに人間を拾ったか……われはよいが、責任は持たぬぞ』

『養父上にはおれが言う。乗せていいか？』

『転ばぬようにな』

巨大な鳥は、人語まで解していたから、おそらくこういふ動物が魔とか呼ばれる生きものなのだろうと解釈した。

『乗っていいぞ』

『簡単に言ってくれるなあ』

『怖いのか？』

『見たことない生きものだ』

『フェンリスは聖獣だ。動物にも天恵があるのは知ってるだろう』

『え、そうなの？』

知らなかった。

『魔も、けつきよくは天恵を持つ動物だ。大抵が黒いから魔と呼ばれるが、白ければ聖だ。天か地か、どちらかの意味で魔と聖は分かれる。それだけの違いだ』

『へえ……もの知りだな』

『そういつわけでもない。知らないことは多くある』

それでも自分よりは賢い少年だと思った。

『行くぞ』

『いいけど。どこに行くんだ？』

『おれが住んでいるところ』

『え、なんで』

『おれも、死ぬの待ってるから』

それは意外な言葉で、けれども少年の瞳は自分と同じくらい虚ろだということに、そのとき気がついた。

『べつにひとりで待たなくてもいいだろ。ふたりでも同じだ。それに、ふたりでいればなにか楽しいことがあるかもしれない』

『そうかなあ』

『たぶんな』

そのときは、ただの時間潰しが目的で、少年について行った。フエンリスという名の大鳥の乗り心地はよく、落ちる不安も感じさせないほど安定していて、空から街を眺めるといふ余裕すらあった。

そうして、フエンリスに乗せられて降り立った、少年が住んでいるところというところは、どこかの森の中にある塔のような城だった。

やはり少年は貴族であるらしい。しかし、そのわりには塔の周りに人がなかった。

『やけに静かだな……誰もいないのか？』

『おれと養父上と、アルトファルがいるだけだからな』

『母さんは？』

『知らない。逢ったことないから』

『え』

『……なんだよ、その顔』

『だって貴族だろ、おまえ』

貴族の子どもは、親に可愛がられるだけ可愛がられるものだと思っていた。だが、父親はいるようだけれども、母親がいないというのは、とても不思議なことだった。

少年は気だるげにため息をつく。

『……とりあえず皇族だ』

思わず吃驚して、目を見開いた。

『おっ……皇族だってっ?』

皇子なのか、皇子だから身なりがいいのか。

だが、少年は相変わらず虚ろな眼差しをしている。

『とりあえず、な。それより、おまえ沐浴しろよ』

『なんだよ、その言い方! ……って、もくよく?』

『あー……湯浴み? 水浴びの暖かいやっ』

『水浴び……なんで?』

『汚いから』

行くぞ、とまた少年に手を引つ張られて、少年が皇族であることやその行動に驚きつつも、気づけば湯を浴びせられ洗われて、遊ぶように少年と沐浴とやらを楽しんでしまっていた。

『ふうん……やっぱりおまえ、おれと同じ色だな』

『同じ色?』

『髪だよ。瞳も』

沐浴し終わって、身体も拭いて綺麗な服を着せてもらってから、少年はそう言った。

『おまえ、おれと同じ色だ』

『……そうか?』

自分の髪や瞳の色など、気にしたことがなかった。確かに周りと

はちょっと違うような気はしていたけれども、持っている天恵が法則から外れているものだという自覚があったので、そのせいだと思っていた。いや、このときもそう思っていた。

淡い金色の髪と、透明感の強い碧い瞳。

自分もこの色と同じなのかと思うと、まるで少年と同じ存在になったかのように感じる。同じ色、というだけのことでは大袈裟なことなのかもしれないが、差異を見つけるよりもそれは簡単なことだ。

だから、気づいたときには少年に声をかけていた。

『……おまえ、なんていうの？』

『なにが』

『名前だよ。おれはラクウイル。ラクでいい』

『ラク？』

『そう。おまえは？』

『……サリヴァン。養父上には、そう呼ばれる』

『サリヴァンか。よろしくな、サリヴァン』

『……よろしくって、死ぬまでか？』

『そう。死ぬまでよろしく』

ん、と挨拶の基本である手を差し出せば、サリヴァンという名の少年は虚ろな眼差しでそれを眺め、そうしてふっと笑った。

『……そうか、死ぬまでか。それもいいな。よろしく、ラク』

初めて見たサリヴァンの笑みは、おとなびた柔らかかなものだった。だからラクウイルは、同じように笑った。

この少年となら、一緒に死んでもいいと、そう思ったのもこの笑

顔を見た瞬間のことだった。

それから十年と少しが経った今でも、その気持ちは変わることがないくらいには、ラクウィルは生きることを楽しむようになっていた。

いとしくていとしくてならない存在を腕に抱いて、まるで離れまいとするようにしっかりと腕を絡めて一緒に眠っている姿を見れば、生きてそういう存在に出逢えたことに感極まって泣きたくなくなる。

「よかったですねえ……サリヴァン」

ラクウィルはにこにここと、ツェイルを腕に抱いて眠るサリヴァンを眺めた。

虚ろな眼差しをしていた少年は、あの塔を出てからも虚ろなままだった。けれども、今はどうだろう。命を投げ出していたあの頃とはまるで違う雰囲気の中に、ラクウィルが死を預けた少年はいる。

「ほんと、よかったですよねえ」

ラクウィルと一緒にふたりを見ていたリリが、ほんわかと笑っていた。

「リリもそう思います?」

「はい。わたしはそれほど陛下を存知上げているわけではありませんせんけど、いつも表では笑ってばかりで、ふとした瞬間に寂しげにしているしゃる姿を見ましたから、ツェイルさまとご一緒にこうしていらっしゃる姿を見るのは、とても嬉しいです」

「おれもねえ……サリヴァンのこういう、子どもみたいな姿を見るのは、すごく嬉しいんですよ。ずーっと、おとなびた姿しか見て

ないですからねえ」

「陛下つて、ツェイルさまの前だと子どもっぽいですよね」

「まあ、姫がまだ子どもだから、それにつられて子どもっぽくなるだけなんでしょうけどね」

それでも、とリリは言う。

「帝位をお預かりしたときに比べたら、今のほうが断然、子どもみたいですよ」

「ああ、あの頃はねえ……まだ外に出たばかりでしたから」

「外？」

「ん、こつちの話です。さて、ふたりは眠っちゃいましたし、おれたちもご飯にしますかね」

「あ、そうでした。侍従長はこちらでお食べになりますか？」

サリヴァンとツェイルがふたりして眠る寝台から離れたリリが、慌てて隣へ続く扉に向かう。ラクウィルは「急がなくていいですよ」と声をかけ、座っていた椅子を離れた。

寝室を出る前に、もう一度、寝台を振り返る。

『おれの歪んだ人生につき合わせて、すまない』

そう謝られたときの記憶が蘇った。

あのときは答えなかったけれど、べつに答えられなかったわけではない。

「ふたりなら、なにか楽しいことがあるかもしれないでしょう？」

幼い頃のサリヴァンはそう言った。

「楽しいこと、たくさんありましたよ。今も……ね」

扉を開けて、そこで機敏に働くりりの姿を見て、ラクウイルはただただにっこりと笑むと、寝室をあとにした。

目覚めるとやはりサリヴァンは隣におらず、なんというか、もの寂しさを感じたツェイルは、起きがけに深々とため息をついてしまった。

よく眠る人だと思ったのはいつのことか。

「どうしました、ツェイルさま？」

起こしに来てくれたリリに心配げに問われて、ツェイルはなんでもないと首を左右に振る。

「ただ……サリヴァンさまがおられないな、と」

あの雨の日から、ツェイルはサリヴァンとは一緒に眠っている。なにかを恐れるようにツェイルを離さないで眠るサリヴァンだが、朝になるとその姿はなく、また日中も姿を見せない。政務が忙しいのだというのはわかるし、その中で夜はきちんとツェイルと一緒に休むのでいいのだが、ツェイルの心情は複雑である。

「公子の、いえ元公子のキサネさまのことがありますし、シエリアン公国にはサグザイル公爵が大公としてお立ちになると決まりましたからね……今少し忙しいかと思われます」

わかっている。

今がとても忙しいのだと、それはわかっている。

隣国シェリアンの問題のほかに、通常の政務もあるのだから、その忙しさが倍増しているのだということは、容易に想像できることだ。

それでも、ツェイルは思ってしまうのだ。

朝も隣にいてくれたら、と。

「今日は天気がいいので外に出ましようか、ツェイルさま！」

たびたび深いため息をついたツェイルを励ますように、リリがその提案をくれた。

「出てもいいのか？」

「ええ。その森までなら。そろそろ調子も戻られたでしょうし、ツェイルさまさえよければ外に出てもいいと、お医者さまにも言われました」

それなら、とツェイルはパッと、寝台の横に立てかけてあるはずの銀の剣を振り返って、ハツとなる。

銀の剣は、奪われたままだ。

「ツェイルさま？」

「……剣が」

「けん？」

「わたしの、銀の剣が……」

あるはずの場所に、それが無い。

胸にぽっかりと穴が空いたような喪失感に、ツェイルは動けなくなった。せつかくリリが外へ出ようと提案してくれたのに、それがいやになるほどの失望感がツェイルを襲う。

不意に、涙が込み上げてきた。

「……………」

ここに来てから、泣くことを覚えたせいで、泣いてばかりいるような気がする。もちろんこらえることも覚えたので、頬からぼろぼろと涙がこぼれ落ちるだけで、ツェイルは声を抑えた。

「ツェイルさま……………」

「うつ、く……………わたしの、剣……………ない」

剣がない。

それを口にして、ますます悲しさが込み上げてしまい、寝台に突っ伏した。

サリヴァンがわざわざ誂えてくれたもの。

サリヴァンが贈ってくれたとても大切なもの。

ツェイルを騎士にするその証。

奪われたまま、取り返すことができなかったことが、悔しくて悲しくてならなかった。

ツェイルは寝台に突っ伏したまま、どれくらいそうしていたのか。涙が止んでも、すぐにまた涙が溢れ、止め処なくそれを繰り返した。

「ツェイ……………」

その声が聞こえたとき、ツェイルはびっくりと身体を震わせた。

「いつまで泣いている……リリが困っているぞ」

ぎし、と寝台が軋む音がし、続いて背中に手のひらを感じて、ツェイルは慌てて掛布を握ったまま寝台の端に逃げた。

どうやら、泣き続けるツェイルに困り果てたりりが、その原因となったものの贈り主を呼んだらしい。

「……、ツェイ」

手のひらが自分を追いかけてきた。ツェイルはさらに逃げようとして、寝台から落ちる。身体に感じた衝撃を思うことなく、体勢を整えると部屋の隅まで逃げた。

「ツェイ、こら」

逃げても追いかけてくるので、どうしようかとさらに慌てたツェイルだが、掛布を握ったまま逃げていたので、それに躓いてしまった。

ぼふ、という音が聞こえたとき、ツェイルはけっきょくその腕に捕まったうえに、一緒に転んでいた。いや、転んだから捕まった。

「逃げ足の遅い姫だ」

くつくつと笑う声がした。もちろんツェイルは顔など上げられるわけもない。

「可愛いな、ツエイ」

どきつ、とした。

可愛いだなんて、兄と姉以外に言われたことがない。

「なんだ、もう逃げないのか？」

そうだった、と思い出したところで、意味はなかった。その腕はしっかりとツェイルを捕え、離すまいとしている。

「逃げてても無駄だ、ツエイ。おれはおまえを手放さないと決めている」

言うなり、グツとその体温が近づく。

え、と思ったときには、頬にその感触とぬくもりがあった。

それは触れたただけの口づけ。

「ツエイ……」

ぱっちりと開いた目に映るは、見慣れたサリヴァンの顔。

優しく笑み、神々しいほどまでの美しさをたたえながら、見つめずにはおれないほどの魅力に溢れている。

「目が真っ赤だ……可愛いな、ツエイ」

それは誤魔化しているのではなく。

困ったように、けれども嬉しそうに、サリヴァンはさらに言い募る。

「可愛い」

どうやらそれらは幻聴ではないらしいと悟ると、ツェイルは瞳がこぼれ落ちんばかりに瞠目し、次いで耳まで真っ赤になった。

「さ……っ……サリヴァン、さま」

思わず声が裏返ってしまふほど、ツェイルは心臓を高鳴らせた。

「ん？」

小さく首を傾げる、そんな優しいサリヴァンの仕草が、たまらなくツェイルの胸をきゅっと締めつける。

だから、止まりかけていた涙が再びポロリとこぼれ落ちたのは、サリヴァンへの募る想いに感極まったからだだった。

「ツェイ……まだ泣くのか」

「う……っ」

この涙は、悲しいからではない。

ツェイルは泣き顔を見られまいと、その想いをこぼすまいと、自らサリヴァンに抱きついて顔を胸に押しつけた。

「……ツェイ？」

心配げな声を出すサリヴァンに、ツェイルはぎゅっつと強くしがみつく。微かに聞こえるサリヴァンの心音は、とても安心できる音だった。

ぐずぐずと泣いていたツェイルはそれからしばらくぐずついていたが、まるで子守唄でも聞かせるかのようにサリヴァンに優しく背を撫ぜられ続けると、次第にその興奮も治まってきた。

「落ち着いたか？」

問われて、まだ顔は胸に押しつけていたけれども、ツェイルは小さく頷く。

ふと気づけば、ツェイルが抱きついているというよりも、サリヴァンに抱き込まれるように、ふたりして床に座り込んでいた。それも、部屋の隅のほうで、だ。

「なにが……悲しくて、泣いていた？」

いつもより近く聞こえる声は、ツェイルを労わるように静かだった。

「……けん、を」

「ん？」

「けんを……なくし、ました」

思い出すとまた涙が溢れそうになったけれども、サリヴァンの「そうか」という声はひたすら静かで、穏やかで、たまらなくツェイルを安堵させるものだった。

「失くしたことが、悲しかったのか」

「……はい」

「それなら、もう泣くな。ここにあるから」

「え……？」

まさか、と驚いて顔を上げれば、目の前にあるのはサリヴァンの微笑みで。

促されて向けた視線の先には、ツェイルの銀の剣があった。

「ちゃあんと、見つけましたよ」

ラクウィルが差し出してくれたそれは、確かにツェイルの銀の剣だった。

幻覚ではないよなと、そろそろと腕を伸ばして触れてみれば、ひんやりと手に馴染んだ感触がする。

「わたしの……けん」

ああ、確かにこれは、わたしの剣だ。

よかった、この手に戻ってきた。

喜びが込み上げてきて、ツェイルは銀の剣を受け取ると抱きしめた。

「ん……よかったな」

「はい……っ」

小振りな剣は、以前と変わることなく鈍色に輝き、ツェイルの腕に収まる。

護りたいものを、大切なものを、いとしいものを護れる力が、その証が戻ってきたことは、ツェイルを想像以上に安堵させた。

と、そのときだ。

コンコン、と寝室の扉が叩かれ、控えていたりりが出迎える。そ

うして、ルカイアが慌ただしく姿を見せた。

「ご歓談中のところ、大変申し訳ありません。陛下、至急お戻りください」

ルカイアの入室にサリヴァンは顔をしかめたが、ルカイアがそれを気にかけるはずもない。

「今日の分は、さっきので終わりだと思ったが？」

不機嫌にそう言っても、ルカイアは引かなかった。

「ツアインが戻りました」

瞬間、なぜかサリヴァンの表情が凍りつく。ツェイルは兄の名が出てきたことに驚いたが、それよりもサリヴァンの様子のほうが気になって、思わずその腕を掴んだ。

「サリヴァンさま……？」

「あ……いや、なんでもない」

サリヴァンはすぐに表情を取り繕って微笑んでみせたが、どこか違和感があった。

「兄が、なにか？」

「頼みごとをしていた。だが、こんなに早く片づけてくるとは思っていないかったものだから、驚いただけだ。心配ない」

「本当に？」

「ああ。だいじょうぶだ。すまないがツェイ、もう少しだけひとりにさせてしまおう。リリと一緒に、待っていてくれ」

その言葉に嘘はないようだけれども、表情には嘘があると思った。しかし、サリヴァンはツェイルにさらなる問いを受ける前に立ち上がってしまい、ツェイルも立たせて寝台に促すと、慌ただしくラクウィルと一緒に寢室を出ていつてしまった。

「夜までには戻る」

去り際にそう言うと、無情にも扉は閉められ、ツェイルは取り残されてしまった。

夜になっても、サリヴァンは戻らなかった。

仕方なくツェイルは眠りについたが、もちろん翌日の朝目覚めても、サリヴァンが訪れた形跡は見られなかった。

サリヴァンの姿を見ない日々が四日続いたその日、ツェイルは外に出てリリと一緒に剣の稽古を始めていた。サリヴァンの様子や兄のことが気になってなかなか集中できずにいたが、それでも身体を動かせばいい気分転換になる。この頃にはもう身体の調子も戻り、剣を握る感覚も戻ってきていた。

「リリ、あの女性はどうなった？」

「女性？ どなたのことですか？」

「わたしを拉致した女性だ」

「ああ……ナルゼツタ侯爵令嬢のことですか」

「そう、その人」

身体の調子が戻ってきたと同時に、ツェイルは臃げだった拉致されたときのことを一部思い出していた。

「わたしは詳しく存じませんが……爵位の降格があったとは聞き及んでいます。ほかにいろいろと罰はくだされたようですが」

「ほかにも？」

「はい。ナルゼツタ家は罪を犯しました。罰せられるのは当然です。

まして隠蔽工作まで練ったうえでの犯行ですから、言い逃れはできません」

「なんだか大ごとになってしまっているようで、ツェイルは少しだけ申し訳なくなる。」

「ツェイルがここにいることで罪を犯す人が出てしまうということは、逆を言えばツェイルがいなければその罪を犯すこともなかったということなのだ。」

「なんだか……悪いことをした」

「ツェイルさまは悪くありませんよ」

「だが、わたしがいることで、罪を……」

「言いかけたことを、リリが「いいえ」とはっきりした声で否定してきた。」

「たとえツェイルさまがここにおられなかったとしても、ツェイルさまを攫ったというその事実がある限り、そういう性根があったことは否定できません。いずれにせよナルゼツタ家は、罰せられていたでしょう」

「……そうなのか？」

「ええ。ですから、ツェイルさまが気にかける必要はないのです。どうかお心を安らかに」

「深々と頭を下げるリリに、それ以上はなにも言えなかった。わかったと、とりあえず頷いてはみるものの、胸中は複雑である。」

「ところで……話は変わりますが、ツェイルさま」

「ん、なに？」

「稽古のことで、思ったことを申し上げてもよろしいですか？」

ああ、とツェイルは今の状況を思い出した。

リリにはいつも、剣の稽古をするときに相手をしてもらっている。万能な侍女であるリリは、稽古はつけられないと言いつつも、ツェイルが自分では気づけない悪い癖など、直す必要があるだろう部分をたまに指摘してくれた。小柄なツェイルはどうしてもその身を活かした方法で相手を翻弄しようとしてしまっただが、リリが相手であるとそれほど体格に差があるわけではないので、同じくらいの体格だからこそ見えてくるものがあるのだ。

「懐に潜り過ぎる、というのは、気をつけているつもりだが……まだ深いかな？」

「いいえ、それではなく……少し違和感があるのです」「違和感？」

なんだろう、とツェイルは握っている銀の剣を見つめる。

稽古であるので、銀の剣の刃には嵌め込み型の覆いがしており、誤って相手に傷をつけないようにしている。いつもなら訓練用の刃が潰れた剣を使うが、今日は銀の剣でメルエイラ家の型式をリリに見てもらっていた。

「剣を振り払う位置が、いつもより低かったり高かったりと、ブレが生じているように見えるのです」

「……ブレ？」

「はい。お気づきでしたか？」

ブレ、とは、つまり迷っていたり混乱していたりすると生じるものであるが、こうして稽古の合間にある小休憩以外で、ツェイルは剣に迷いを付加させないよういつも「護る」という想いだけを念頭に剣を揮っている。いくら剣の刃に覆いをしていても、人を傷つけ

ないとは限らないのだ。剣を扱うときはいつも慎重になる。

「どういうブレか、わかるか？」

「……素直に申し上げても？」

「かまわない」

リリの意見は参考になる。悪い癖がいくつか直ったくらいだ。剣の師と思ってもいいくらいには、ツェイルはリリの観察眼を信用している。

ただ気になるのは、今日に限ってリリが意見を述べることを躊躇っている素ぶりだ。

「ブレは、僅かです。見慣れたわたしがそう感じるだけであると、それは承知しております。ツェイルさまは身体で剣を覚えていらっしやいますから」

「うん」

「ですが今日は……いえ、実は稽古を再開されてから感じてはいるのですが……ツェイルさまの視線が、わたしにはないのです」

「……リリに、わたしの視線が？」

「はい。おそらくブレは、そのせいかと」

稽古をしているとき、相手が必ずしもいるとは限らない。それでも、ツェイルの視線は相手に向けられる。相手の動きを見るのは、それは単に全身で感じるものの補足であるだけのだが、リリが相手を務めるとき、リリはツェイルになんか感情も向けないので、気配を掴むには目でその動きを捉えなくてはならない。リリその姿勢は、それも訓練の一つであるから、とくに気にしたことがなかった。

「わたしの視線は、どこにあった？」

「どこ、と訊かれましても困るのですが……いえ、逆を言わせていただきます」

「うん？」

「ツェイルさま、わたしが見えていますか？」

その問いに、ツェイルはうつかりぎくりと、身体を震わせた。知らず背筋に、いやに冷たい汗が流れた。

「なにを言っている、リリ……」

否定しようとした言葉が掠れ、ツェイルは内心で焦った。自分の顔に表情というものが皆無であることを、これほど嬉しく思ったことはない。

完璧だと思っていた。

剣を持ち、身体を鍛えているから、だいじょうぶだと思っていた。気づかれるわけがないと、思っていた。

神経はほかより機敏であるし、それに付随して身体は機能するよう訓練しているから、常に緊張していればそのうち意識なくなると思っていた。

けれども人間、やはり利用できるものは利用したくなる。

役に立たないとわかっていても、使えるものなら使いたくなるし、頼りたくなる。

「……やはり、そうなのですね？」

リリのその沈んだ声音に、ツェイルは失敗したと思った。

リリとはいつも気配のない稽古をしている。リリが、ツェイルに

殺意にも似たようなものは向けられないと、木のようにただ静かに見守ることしかできないと、そう言ったからだ。ツェイルに怪我をして欲しくないから、できればそういう場所にも行つて欲しくないから、だからリリは稽古のとき、ツェイルに感情を向けない。ツェイルの身を案じ、ひたすら観察しているだけだ。

まさか、リリの観察眼がここまでのものとは、ツェイルも予想できなかった。

「なぜ隠そうとなさるのです」

ツェイルに寄ってきたリリは、咎めるように、けれどもつらそうに言った。

リリの手のひらが肩に置かれたとき、ツェイルは思わずびくりと身体を震わせる。そっと、視線が少し上にあるリリを見た。

「この距離で、わたしが見えますか？」

いつも稽古のとき、一番に見せる心配そうな顔をしたリリがいた。

ああ、隠しても無駄なのだ。

「……どうして、わかった」

ツェイルは諦めて俯くと、リリの肩口に額を置いた。

「瑣末なことです。ツェイルさまは戦うということがどういうものであるか、わかっていらつしやいますからね。目で人の動きを捉えようとはなさいません」

やはり、リリとの稽古の仕方が、リリにそれを気づかせてしまったらしい。

「本当のところはどれくらい、見えておられますか？」

「……わからない」

「え？」

「わからないんだ……」

説明に困った。

ツェイルは、目に違和感を覚えている。見えているものではなく、目そのものだ。

視力には問題ない。以前より見えていないような気はするが、それは気になるほどのものではなく、また剣を揮うことにも支障はない。

けれども、目に違和感がある。

「視界が狭まっている、ような気がして……目が、思うように動いてくれない」

寝込んでいたときは気づかなかった。起きてからも気づかなかった。あれ、と思ったときには、もうそうになっていた。

「すぐにお医者さまを……」

「呼ばないで」

「……、ツェイルさま」

「呼ばないで……お願い、リリ」

サリヴァンに迷惑がかかる。もうそれだけはしたくない。

あの雨の日、寝台を抜け出したツェイルを、サリヴァンは必死な形相で追いかけてきた。ふだんから冷静そうなサリヴァンを動揺させただけでなく、怒鳴らせることまでした。あのときツェイルは不謹慎にも嬉しく思ってしまったが、本当なら、一国のあるじをツェイルごときのこと振り返してはならないのだ。

「そのお願いは聞けません」

「……っ、リリ！」

なぜ、とツェイルは顔を上げて詰めよる。しかし、そこに見たりりの表情は硬かった。

「もっと我儘をおっしゃって、わたしを困らせてくれてかまいません。ですが、その我儘はわたしを困らせるものではないのです」

「なんで、リリ……」

裏切られたような気がした。ここに来て、一番身近であったのはリリであったから、それはひどい裏切りのように感じた。

けれども。

「その我儘は、わたしを悲しませるものです」

リリの顔が、くしゃっと歪む。明るく朗らかな彼女の、その今にも泣き出しそうな顔は、ツェイルが拉致されたのちに救出されたときのものとは別の、心が痛む泣き顔だった。

「……リリ？」

「もっと、頼ってください。目を治せと、命令してください。このままではいやだと、泣き叫んで嘆いてください」

みるみるうちにリリの茶色い瞳が潤んでいく。

「なぜ、我慢するのです……っ」

「リリ……」

「ご無体なことばかり強いられているのに……どうして、我慢ばかりするのですか」

ポロリとこぼれ落ちたその涙を見たとき、ツェイルは、己れの過ちに気づいた。

心配されるのは嬉しい。

けれども、強い心配はただただ悲しみを与えることと同義だ。そしてその心配は、相手の心を傷つける凶器にもなりうる。

「……ごめんなさい、リリ」

「謝ってほしいのではありません。そのお気持ちがあるのですから、お願いですから、お医者さまを呼ばせてください」

サリヴァンに迷惑をかけてしまう。けれども、こうして心配をかせかせ続けるのも、よいことではない。

ツェイルは小さく頷くと、リリの柔らかな頬を両手で挟み、その涙を拭った。

「リリ、心配してくれて、ありがとう」

「いいえ……いいえ、ツェイルさま。このリリには、もっと我儘になっていいのです。いいえ、わたしだけでなく、もっと周りを巻き込んだ我儘をおっしゃっていいのです」

「うん……ありがとう、リリ」

リリを泣かせたくない。リリを泣かせるようなことは、してはいけない。それはリリが大切だから。

いつのまにかツェイルにとって、リリは家族のようなものになっていた。

「お医者さまを呼びます……いいですね？」

「うん。リリに任せる。けれど……」

「なんです？」

「サリヴァンさまには、もう少しだけ、黙っていて」

「ツェイルさま！」

違う、とツェイルは首を左右に振る。困らせようと思っているわけではない。

「自分で言う。目が少しおかしいんですって、自分で言うから」

「ですが……」

「わたしのことで、サリヴァンさまのお手を煩わせたくない……その我儘は、聞いてくれないか」

涙を引つ込めたりりは、ツェイルのその想いに涙面を浮かべたが、とりあえず医師を呼ぶことが先決だと思ってくれたらしい。

「だいじょうぶ。ちゃんと、自分で言うから」

「では約束を。陛下が今度戻られたときには必ず言う、と」

「うん、わかった」

「もし言わずにいましたら、わたしは独断で陛下にお伝えしますから」

「はい」

口許を緩めれば、リリは安堵したようにホッと息をつき、頬に触れていたツェイルの両手を取った。

「お医者さまを呼びますので、部屋でお待ちいただけますか？」

「ん、わかった」

繋いだままのリリの手は少し震えていたけれど、ツェイルはおとなしく部屋に戻った。

34 : 閉ざされた世界は嘲笑う。 3 (前書き)

サリヴァン視点です。

サリヴァンはその報告を、牢獄へ続く暗い廊下で聞いた。

「ハルトが、ツェイルのところ？」

報告を持ってきたのはルカイアだ。だが、ルカイアも部下からその報告を聞いただけで、自分の目で確かめたわけではないという。

「お茶の時間でしたので、おそらくはそのお相手かと」

「まあ、ハルトには世話になったからな」

エーヴィエルハルト・レイル・カリストルには、公私に渡り世話になっている医師である。ツェイルに逢わせる人間を厳選しているこちらとしても、ハルトなら「まあ問題はない」と断言できるほどには信用のおける医師である。

「……それで、その話をする必要がある報告はなんだ？」

ツェイルなら心配ない、という意味を含めさせたその報告は、自分の心を休ませるための布石であると、サリヴァンは気づいていた。このところの忙しさは、ツェイルが連れて来られたとき以上のもので、サリヴァンだけでなくルカイアもほぼ立ち回っている日々が続いている。そんな中でサリヴァンがツェイルに逢えないことを嘆かないわけがなく、むしろ苛立ちを感じ始めていた。

寝不足と、片づけても片づけても減らない政務と、いとしいツェイルに逢えない日々は、サリヴァンの不機嫌を絶好調にさせている。ルカイアがツェイルの様子について報告したのは、ある意味では正解であった。

「ツアインの意識が戻りました」

ツェイルのことで多少は安心したサリヴァンだったが、それを聞いた瞬間にガクンとその気分も降下する。

「だいじょうぶそうか」

案じてそう訊ねたのだが、ルカイアはため息をついていた。

「開口一番に、ツェイルさまに逢わせると喚くくらいには」

「まだ先になる、と言ったところで、聞く耳を持たないか」

「意識が戻ったのなら、任務にも戻ってもらいます」

「……外道だな、おまえ」

ツアインの回復ぶりには目を見張るものがあるが、それ以上にルカイアのツアインに対する態度はえげつない。本気で道具のように扱うので、ツェイルのことでは敵になっても、こついつときは憐れみの情も湧くというものだ。

数日前、ツアインにはある任務に就いてもらった。それはツアインでなければ遂行することができず、なおかつ頼めるものでもなかった。

「ツアインがしくじるとは、想定外でしたので」

「ツアインの腕だけは信じているようだな、おまえ」

「気狂いしているような男でも、それはツェイルさまの前でだけのこと。ツアインの戦闘力は、ラクウィルのそれと並びます。ラクウィルのように使い勝手が難しくない分、扱いは楽ですね」

ツェイルを盾に取れば、ツアインは命令通りに動く。卑怯な手ではあるが、今回ばかりはそれを使うしかなかった。それほどに、ツアインが持つ技術が必要だった。

「……ツアインからなにか聞いたか？」

「達者なのは口だけではありませんからね。明日にも任務に戻します」

「おまえな……」

少しは休ませてやってもいいと思うのだが、ルカイアは聞く耳を持たない。

「元皇妹殿下の居場所は掴みました。どうやら捕まっていたようです」

「は……わざわざそんな演技までするか」

「まあ、そうですね。ですが、問題はそこではありません」

「んん？」

「場所が、問題なのです」

「……と、言つと？」

先を促すと、ルカイアは心底不快だと言わんばかりに、深々とため息をついた。

「西の森にあります館におりまして」

「……アウニの森？」
「ええ」

ルカイアが忌々しげにため息をついた理由がわかった。

この男は、逃げ出した元皇妹殿下、サリヴァンの叔母にあたるナルゼツタ元侯爵夫人がどこに逃げようとかまわなかったのだが、逃げた先がアウニの森にひっそりと聳える館であることが、腹の底から気に喰わないのだ。

むろん、サリヴァンもその逃げ場所には、呆れを通り越した情けなさがあり、ため息をつかずにはおれなかった。

「それでツアインはしくじった、と……領ける話だな」
「領けますか」

「忘れているようだが、あそこには猊下の強力な結界が張られている」

「それは憶えています」

「なら、必ずしも天恵者の味方ではない、ということとは？」

「……、そうでしたか？」

クツと、サリヴァンは咽喉で笑った。完璧なようで、実はそうでもないルカイアの、それらしい姿を久しぶりに見た気がする。

「アウニの森で最強になれるのは、おれくらいだぞ。盲点だったな、ルカ」

怪訝そうにするルカイアにニツと笑いかけたあと、サリヴァンはその視線を正面にある牢に向けた。

「上手く逃がしたと、そう思っているようだな？」

話しかけたのは、牢の中にいるナルゼツタ元侯爵ケネスリードだ。上位一二貴族の一つにその身を置いてあるゆえに、それほどひどい扱いはされていないが、ツェイルを攫ったその罪が消えることはない。

ゆえに投獄されているが、犯した罪はそればかりではなかった。

ケネスリードには、狂信的な理想があった。

そのための謀略は、サリヴァンが国主となったそのときから張り廻らされており、ことあるごとにサリヴァンはその身を危険に曝した。今まで捕まえられなかったのは、その手が姑息過ぎたからである。

とはいえ、サリヴァンはケネスリードの謀略など、初めから知っていた。捕まえられなかったというよりも、捕まえる気がなかっただけである。相手にするのが面倒であったし、その行動があまりにも愚かで憐れで、好きにさせてやるうという気持ちがあった。

だが、ケネスリードは、失敗を犯した。

娘の暴走に、目を瞑ってはならなかったのだ。

サリヴァンはあの光景を忘れない。今でも、思い出すだけで目の前が真っ赤に染まる。怒りでわれを忘れそうになる。ギリツと強く握るせいで手のひらをいくら切ったか知れない。

ツェイルを傷つけたこと、その身をもって償うには、ケネスリードの価値があまりにも安過ぎる。

そう思うくらいには、感情すべてが怒りに支配される。

「アウニの森になにがあるか知っているようだが……それはおれへの脅威にはならないぞ、ナルゼツタ」

口を噤むケネスリードは、しかし蒼褪めた顔をサリヴァンに向けた。

「ツアインはしくじったわけではない。あの森に張られた結界にあてられただけだ。あれは賢いから、次は確実に、夫人をここへ連れてくるだろう。そのときおまえが地道に作った勢力は消え失せる」

「く……っ」

「知っているか、ナルゼツタ。あの森はな、猊下がおれのために張ってくれた結界があるから、森なんだ。その奥にある館……おまえたちはそこに住まう人を頼ったようだが、それが間違いだ」

「間違いなどではない……っ」

「ほう？」

「この国は、あなたの国ではないのだ！」

叫びにも似たケネスリードのそれに、サリヴァンは目を細める。

「罪深き者よ！」

そう、叫んだときも、サリヴァンはケネスリードをひたすら冷めた目で見ていた。

しかし、許さなかった者がいた。

ルカイアである。

「黙りなさい、真実も知らぬ愚か者が」

「ひっ……！」

荒事を避け、その手の技術も乏しいルカイアだが、手のひら大の小剣を投げる技術は誰よりも優れている。その小剣が、ケネスリードの頬を掠めていた。

「ルカ、よせ」

「ご寛大なお心も、ここまでくればただのお人好しでは済みませんよ。この者が口にしたことは、あなたさまを侮辱するものです」

「そんなものは痛くも痒くもない。おれが許せないのは……ナルゼツタを好きにさせ、その結果ツェイルを傷つけたことだ」

侮辱は甘んじて受けよう。

罵りも、言いたいのなら言わせておけばいい。

サリヴァンが許せないのは、ツェイルが傷つけられたことである。

「責任は取る。ゆえに……ナルゼツタ、おまえは捕えられた。そして叔母上も、じきに捕まることだろう。おまえたちの罪は、真実を知らぬがゆえの愚かな行為であると知れ」

静かにそう言い放つと、ルカイアの小剣に怯えるケネスリードを一瞥し、踵を返して出口に向かう。すぐルカイアが後ろに続き、振り返ることなく牢獄を出た。

出てすぐのところには、ふたりの精霊左右に置き、珍しくも騎士服をまとったラクウィルが待っていた。

「おまえが騎士服とは……珍しいな」

「夜会以外で初めて着ましたよ」

「そういえば……そうだな」

ラクウィルは大抵、というか常に、侍従らしい服を着ている。もちろん侍従長であるから、本当なら騎士服など着ることはない。

しかし、ラクウィルは騎士服を着ることができる地位にあった。

それがラクウイルの持つ称号、《ディハイン天地の騎士》である。

「そんな恰好で、なにする気だ？」

「ちよつと、ツアインの代わりに、アウニの森に行こうかと」

「おまえが？ 令嬢はどうした」

「おれの称号を聞くなり卒倒して、それ以降は寝込んで使いものにならないので、とりあえず放置です」

確かに、ラクウイルの称号は、本人やサリヴァンはあまり気にしないが、実は国家権力に相当する。

そもそもサリヴァンが気にしないのは、サリヴァン自身がラクウイルに与えた称号であるからで、ラクウイルに至っては騎士では自分の使い勝手が悪いと、常に侍従でいるからだ。

騎士に憧れる者が多い中、その者たちをラクウイルは敵に回しているようなものである。

「ルーフェさんとマチカちゃんを置いてくんで、いいですよね」

その許可は、サリヴァンではなくルカイアに向けられていた。

「行くならツアインも連れて行きなさい」

「ええー」

「あなたが追跡に出るといふのなら、これほど楽なことはありませんがね。なんの考えもなく、ツアインに元皇妹殿下の追跡を命じたわけではありません」

「まあ、能力的にはツアインのほうが上ですからねえ」

「そういう意味ではありませんよ。肩書きを持たない者のほうが、都合がよい場合もあります」

いざというときはツアインを切って捨てる考えを匂わせたルカイアに、ラクウィルだけでなくサリヴァンも眉間に皺を寄せた。

「ルカ、言い過ぎだ」

「それは失礼を」

気にした様子もなく口先だけ謝るルカイアに、サリヴァンは肩を落とす。

とにかく、だ。

「ラク、とりあえずツアインは連れて行け。おまえだけでは心配だ」

「ええー……サリヴァンもルカイアと同意見ですかあ」

「違う。おまえ、部下はみんな侍従だろうが」

「あ……そうだった」

「ツアインの部下は使いものにならないが、ツアイン自身は回復して動ける。おまえにもツアインにも、無事に帰ってきてもらわなければ困るんだよ」

「互いに牽制し合ってこい、と……無理言いますねえ、サリヴァン」

本当に面倒そうな顔をするラクウィルだが、ラクウィルやツアインでなければ、この頼みごととはできない。真実を知っているふたりだから、頼めることなのだ。

「おまえたちだから……おれは頼むんだ」

「命令していいんですよ？」

「……しない」

サリヴァンは首を左右に振った。

「おれに力がないから、頼むんだ」

「権力がざしていいのにねえ……ねえ、ルカイア？」

そうですねよ、とルカイアも言う。

「あなたは国主なのですから」

その文言に、サリヴァンは自嘲めいた笑いを浮かべた。

「国主だから、その力はないんだよ」

「……まあ、いいですけどね」

ラクウィルは肩を竦めて苦笑した。

「おれは、ツアインとふたり、共通の友人を助けるために、動くだけですから」

「……すまない、ラク」

「いいえー。ただ、おれが行くんで、余計なこととしてきちやう可能性がありません。それは許してくださいね？」

「それでも、助けてくれるんだろ？」

「助けますよー。だっておれの《デイバイン天地の騎士》っていう称号は、サリヴァンのために在るものですから」

「ここに、と笑ったラクウィルに、サリヴァンもつられて笑みを浮かべた。

「頼む、ラク」

「はい、頼まれます。じゃあ、ルーフェさん、マチカちゃん、サリヴァンをお願いしますね。あ、姫のことも、今度はちゃあんと護ってくださいね」

ラクウィルは自身の精霊に言い聞かせると、くるりとサリヴァンたちに背を向ける。

裾が閃いた上着の、その背に描かれたものが、サリヴァンの右腕にある刻印と同じものだった。

「ラク」

「ほよ？」

歩き出そうとしていたラクウィルを呼び止めると、サリヴァンはその横顔に目を細める。

「その格好で城内を歩くのは、いやなんじゃなかったか」

「ん？ ああ、これ？」

騎士服を着たまま城内を歩くのも珍しいが、背中にその刻印まで背負って歩くのは本当に珍しいことだ。

「ちょっと気張ってみただけですよ」

「……いいのか？」

「おれはサリヴァンの騎士ですからー」

サリヴァンの僅かな迷いは、しかしラクウィルの朗らかな返事が、さらりと掻っ攫っていく。

その姿が見えなくなってから、サリヴァンはホッと息をついた。

「……ラクウィルに」

ふと、ルカイアがそうこぼした。

「ラクウィルに初めて逢ったとき、なんて能天気な男なのだと思いますが……あの頃から変わりませんね」

「緊張感がない、か？」

「ええ。おかげで救われることもありますが……もう少し緊張感を持って欲しいものです」

「気にしないほうがいい。あれを怒らせたら……地獄を見るぞ」

「でしょうね。ですからツアインを行かせたのですが、無駄だったようです」

失敗した、と思っているらしい。ラクウィルの珍しい格好を見たが、こちらは珍しくも反省しているようだ。

「どちらも狂犬なんて、陛下も大変ですね」

「ひとりはおまえが押しつけてきたんだろうが」

「ラクウィルがあそこまでとは思いませんでしたので」

「なんでラクが侍従長なのか、わかったか？」

わかりましたよ、と投げ捨てるように言ったルカイアは、次の瞬間にはその表情も消し去り、すつと真顔になった。

「ルーフェ、マチカ、陛下を頼みますよ」

ラクウィルとの別れを惜んでいた精霊たちが、ルカイアにそう言われると仕方なさそうに肩を竦め、しかし嬉しげにサリヴァンの左右を囲む。祝福を与えるようにくるくるとサリヴァンの周りを浮遊したあと、空気のように消えた。

「……やはり、あなたは精霊に好かれるようですね」

「さあな」

「大抵の精霊が、あなたを見ると嬉しそうに寄って行く……属性に拘らず、多くの精霊が……言うことはあまり聞きませんけれども」

それは、今はどうでもいいことだ。

「息子みたいなものだからな」

そう言うと、サリヴァンは政務のために、執務室へと足を向けた。

幾日ぶりだろう。

そう思ったツェイルの目の前に、ゆったりと笑ったサリヴァンがいる。ただ、その表情に上手く隠された疲労を、ツェイルは見逃さなかった。

「サリヴァンさま……」

ツェイルは迷わずサリヴァンに駆け寄り、その頬に手のひらを添えた。

「久しぶりだな、ツェイ」

微笑み続けるサリヴァンは、ツェイルの手のひらに安堵したように擦り寄ってきて、己れの手を重ねる。その仕草は優しく、暖かくて、だから余計にツェイルは不安に煽られたが、心底嬉しそうに微笑むサリヴァンにそれは言えなかった。

しばらくそうしていたサリヴァンは、やはりツェイルが案じていたとおり、長椅子に案内しようとした瞬間には前のめりに倒れた。

「サリヴァンさまっ」

当然だが支えきれず一緒に倒れたが、倒れた先にはふかふかの絨

毯があつたのでその衝撃も少ない。ツェイルは慌ててサリヴァンの呼吸を確認し、その寝息が聞こえてから、ホッと息をついた。

自分のところに、休みにきてくれた。

そう思うと嬉しくて、ちょっとだけ体勢は変えたが、そこから動く気にはなれなかった。

「ツェイルさま、ハルトさまがいらっしやいました……、陛下っ?」

扉を叩いてすぐ姿を見せたリリが、サリヴァンがいることに驚いて声を上げた。咄嗟に「静かに」とは言ったが、こうして倒れたときサリヴァンが何をしても起きないことは知っている。

「サリヴァンさまがいるのですか? それならちょうどいい……つて、おや?」

リリに続いてひょっこりと顔を見せたのは、このところ毎日のように診察に訪れてくれるハルトだ。

「ツェイルさまの前では爆睡するって……本当だったんですね」

ハルトはそう言いながらそばに寄ってきて、サリヴァンの脈や体温を診る。

「相変わらず低温……熱出されたら怖いですねえ」

ぶつぶつ言いながら、サリヴァンが目覚めない今のうちにと、ハルトは触診して体調を把握していく。

「痩せましたね……きちんと食事も摂っていたただかないと……ああ、

腕が強張っていらつしやる……揉んで差し上げないと」

あまり診ることができないのか、ここぞとばかりに診察したハルトは、ツエイルを促してサリヴァンを長椅子へと運んだ。とはいえ、ツエイルでは体格的に無理なところがあつたので、近くにいる近衛騎士を呼んだハルトに任せての移動だつた。

サリヴァンが眠りながらもツエイルを離さなかつたので、体勢が崩れないようにしながらツエイルも一緒に移動した。

「この深い眠りはツエイルさま限定ですね……」

「そうですね？」

「眠っていてもツエイルさまを離さないなんて……さすがとしか言いようがありませんよ」

「はあ……」

よくわからなかつたが、とりあえずツエイルはサリヴァンを膝に抱えて長椅子に座り、今度は自分がハルトの診察を受ける。

「調子はいかがです？」

「視界の狭まりは、消えました。けれど、まだ違和感は……」

「うーん……となると、あの薬が目に入った可能性は否定できませんね」

「そうは、感じなかつたのですが……」

「毒にもなるものだと言いましたでしょう？ あの薬は睡眠を促すだけだと思われがちですが、実は神経を麻痺させるものです。神経を麻痺させられるから眠くなるのであって、その感覚すら本当のところは違つのです」

「そ……そうなのですか」

「エカリプトという草の根が、そういう効果をもたらすのですが、そこにナガタリという草を混ぜると、効果を促進させてしまうので

す。ナガタリ単品はそれほど強くない睡眠誘発ですが、エカリプトと混ぜると相乗効果が起こるようで、そこにさらにスールを混ぜると……」

ちんぷんかんぷんな説明なので、ツエイルはそれらを聞き流すことにする。毒薬に関してはそれなりの知識があるものの、その分野は姉テューリが得意とするもので、ツエイルはあまり覚えていないのだ。

「と、いうことなので、油断は禁物だと申し上げたのです」

漸く終わった、と思った頃には、半時が過ぎていた。ハルトの説明にはリリも飽きていたようで、ツエイルにお茶を用意して自分も飲んで寛いでいたくらいである。

ハルトが勉強熱心であることは、十分に理解できた。

「今の目薬は継続しましょう。視界の狭まりが消えたのなら、効果はあるということですよ。身体に合わない、ということはないようなので、徐々に回復するでしょう」

はい、と目薬がリリに渡される。日に四回、目に直接液体を垂らす治療は、ツエイルが自分ではできないので、リリに任されていた。

「はい、ツエイルさま、力を抜いてくださいねえ」

「うっ……異物が」

「なんでもないですよ。わたしを見ていてください」

「そ、そうしている、つもりだが……っ」

どうも、垂れてくる液体を中途半端に見てしまうので、ツエイルは目薬が苦手だ。液体が目垂らされると、僅かに滲みるのもいた

だけない。

「うひゃ……っ」

痛い。

それなのに治るのだから、医学は素晴らしい。

「うっー……」

「ツェイルさま」

生理的にこぼれた涙をこしこしと拭いたら、肌が痛むからとリリに柔らかな布を手渡される。それを受け取り、涙を拭いっつ滲みる痛みと戦った。

ふと、目許を押さえていた手に、誰かの手のひらが重なった。

「ツェイ……？」

サリヴァンだ。

起こしてしまったのかと、ツェイルは慌てて目許から布を離れた。そうして、息を呑む。

「泣くな……ツェイ」

サリヴァンが、今にも泣き出してしまいそうな笑顔で、ツェイルをじっと見つめながらそう言った。

「おれがいる。な、ツェイ……だいじょうぶだ。おれがいるから」

「……サリヴァンさま」

「おれが、ずっと、そばにいるから……泣かないでくれ」

サリヴァンの、透明感の強い碧い瞳は潤んでいて、泣いてしまっているのに微笑んでおり、それはツェイルをひどく驚かせた。

「もうだいじょうぶだから……おいで、ツェイ」

伸ばされた手のひらが、ツェイルの頬を撫でる。持っていた布をぼとりと落としてしまったあとは、グツと強く引かれ、両腕で頭を抱え込まれた。

サリヴァンが寝ぼけているのだと気づいたのは、このときだ。

「ツェイ……ツェイ、おれの、可愛いツェイル」

ぼつと、顔が熱くなる。心臓が高く跳ね上がる。

「さっ……サリヴァン、さま」

寝ぼけてなにを言うのかと慌てるが、その羞恥を上回る嬉しい言葉が、ツェイルの胸をしめつける。

これはさっさと寝つかせてしまわなければ、心臓がもたない。

「ね……眠って、ください。わたしは、だいじょうぶ、ですから」

「……ツェイ？」

「だいじょうぶ、です。だから、眠って、ください」

「……頭がな、ふわふわするんだ。なあ、ツェイ……おれは、眠いのか？」

首に巻きつかせて、ツェイルの頭を抱えていたサリヴァンの腕が、ゆっくりと解かれる。予想以上に近くにあるサリヴァンの顔に、ツ

エイルはますます顔を火照らせた。

「ね、眠いのです。だから、眠って」

「いやだ」

「さっ、サリヴァンさま」

「いやだ」

ふと、その眼が虚ろになった。

「……サリヴァンさま？」

急にどうしたのだろうか、ツェイルは頬に熱を感じながらもサリヴァンをじっと見つめる。

ツェイルを見ていたはずの眼が、虚ろなまま彷徨い始めた。

「……くるな」

「え？」

「くるな……っ……やめる」

震えた小さな悲鳴が、サリヴァンから紡がれる。

虚ろな眼は、もうツェイルを見ていなかった。

いや、どこも見ていなかった。

「いやだ、なんで……っ」

さすがのツェイルも、サリヴァンの様子がおかしくなったことには気づく。

「サリヴァンさま？」

虚ろな眼は、現実を見ていない。夢現のまま、別のものを見ている。それは目の前のツェイルが見えないほど強力なもので、そして恐れるているものだ。

「なんでだ……っ……もう、やめろよ」

「サリヴァンさま」

「あ……あ、あ……っ」

息を詰め、小さな悲鳴を上げて、サリヴァンは宙に腕を伸ばす。見ていられないほどそれは痛ましくて、思わずツェイルはサリヴァンを両腕に抱き込んだ。

この人はなにを見ているのだ。

なにが見えているのだ。

いったいどんな恐怖の中に、いるのだ。

「サリヴァンさまっ」

「いやだ……あ」

もがいたサリヴァンは宙を掻き、呼吸を忘れてしまったかのように短く息を切らせなら、断続的に小さな悲鳴を上げて、ツェイルの腕の中で暴れる。

それでも、ツェイルは辛抱強く、サリヴァンを抱え続けた。次第にその暴れ方がひどくなり、ひとりでは抑えきれなくなっても、ツェイルはサリヴァンから離れなかった。

サリヴァンがなにかに怯えている。

怯えて、恐怖に支配されている。

それがわかったから、離れられなかった。

恐怖からサリヴァンを、護りたかった。

「はっ、あ……え？ ツエイ？」

サリヴァンが、漸く己れを取り戻したとき。

両腕をハルトが、騒ぎを聞きつけて駆けつけてきたルカイアが両足を、そして全体的にツエイルが抑え込むようにして、サリヴァンを拘束していた。

「な、にを……している？」

その声はいつものサリヴァンで。

「ハルト、と……ルカ、まで……なんだ、これは」

ひどく暴れて強張っていた身体が、徐々に弛緩していくのを感じたツエイルは、そっとサリヴァンから離れてその顔を窺った。

「もう、だいじょうぶ、ですね」

そう声をかけると、不思議そうな顔をしたサリヴァンがいた。

だからホツとした。

「なんの、ことだ？」

わけがわからない、という顔をするサリヴァンに、ツェイルは知らず口許を緩める。そのとたんに吃驚されたが、それよりもなによりも、サリヴァンが正気に戻ってくれたことに安堵した。

「やっと正気に戻られましたね、陛下」

ふう、とため息をつきながら、ルカイアがサリヴァンの拘束を解き、またハルトも手を離すと気が抜けたように床に尻もちをついた。

「……なんでルカが、ここにいる」

「エーヴィエルハルトもいますよ」

「は……なんで、こんなことに？　そもそも、なんでおれは、こんなに疲れている？」

ぎくしゃくと身体を動かすサリヴァンは、自分が今まで寝ぼけて暴れていたことを、憶えていない様子だった。

「なにを夢に見られたのか、それはわたしにはわかりませんが、悲鳴を上げて暴れられたのですよ」

「は？」

「おかげでこのとおり、わたしもエーヴィエルハルトもぼろぼろ…

…ツェイルさまに至っては……」

「……、ツェイツ？」

ルカイアに促されてツェイルを改めて見たサリヴァンが、びくつと身体を震わせて跳ね起きた。

「なっ、どうした!」

「あなたの仕業ですよ」

「おれなのかつ？」

そうですよー、とハルトが、疲れた声でルカイアに賛同した。

「おっ……おれは、なにをした？」

とたんにおろおろし始めたサリヴァンに、ツェイルは安堵したせいか身体の力が抜けた。

「ツェイ！」

ふらりとサリヴァンに倒れかかり、ぐったりとその身を預けてしまっ

「よかった、サリヴァンさま」

「なにがあった、ツェイ。なんでこんな……おれはなにをしたんだ？」

ああ、いつものサリヴァンだ。

それを感じるとますます力が抜けてしまい、目を開けているのも億劫になった。

首筋がちりちりと痛む。暴れたサリヴァンの手のひらが首を掠めたとき、その爪が凶器となってしまうていたのだろう。

今頃それに気づいて、つまりそれくらい必死だったのだと、ツェイルは思った。

ああ、怖かった。

サリヴァンが恐怖に囚われて暴れたことは、ツェイルにも恐怖だ

った。

いつも絶えず笑っているかのようなものであるサリヴァンは、国主という座に就いているせいか冷静沈着で、感情的になることが少ない。雨の中にツェイルがいたときは動揺していたが、それ以外でサリヴァンが冷静さを欠いた姿を、ツェイルは見たことがなかった。だから、己れを忘れたかのように夢現で悲鳴を上げたサリヴァンを見たとき、ツェイルは一緒になって恐怖を感じた。護らなければと思う一方で、怖くてならなかった。

眠るように促してああなったのならば、サリヴァンがあまり深く眠らないという理由も頷ける。

サリヴァンは、眠るのが怖いのだ。

意識を手放すことが、恐ろしくてならないのだ。

そんな中で、サリヴァンはツェイルのそばでは深く眠ってくれる。安堵して、意識を手放す。

これほど嬉しく、泣きたくなるほどの喜びを感じるツェイルは、高慢だろうか。

「すまない、ツェイ……怪我まで、させた」

ツェイルがひとり思考に耽っている間に、どうやらサリヴァンはルカイアやハルト、リリから状況を説明されたようで、その体温に安堵したまま瞼を閉じて寄りかかっていたツェイルを抱き直した。

「……覚えておられるのですか？」

「いや……だが、おれがやったんだろう、この傷」

サリヴァンの指先が、蚯蚓腫れになっているのだから首筋の怪我

をなぞる。ピリツとした痒い感覚がするだけなので、大したことはない。

「これくらい、平気です」

「だが……おれが、おまえに怪我をさせるなんて……」

気弱なサリヴァンに、それは珍しい姿だったので、ツェイルはふつと口許を緩める。責任を取れ、とでも言えば、取る、と即答しそうだ。嫁ぐことは決定事項なので、言わないけれども。

「とても、怖がられて、おいででした……もう、だいじょうぶですね?」

「ああ。なにに対してそうなったのかは、わからないのだが……」

サリヴァンは国主だ。たったひとりで国を護る人だ。

その肩に、その背に、なにを背負っているのかはツェイルには計り知れない。

だからツェイルは、そんなサリヴァンを支えたいと思うのだ。護りたいと思うのだ。サリヴァンとてひとりの人間で、そこには感情がある。ツェイルのそばで安心して眠ってくれるのなら、ツェイルはそれらを支え護り、そばに寄り添うだけである。

「ラクウイルさまを、呼んでおられました」

「ラクを? ……ああ、そうか」

「お心当たりが?」

「……斬られたことがあるんだ。ラクを」

「え……?」

ツェイルは寄りかかっていたサリヴァンの肩口から顔を上げ、そ

れを語ってくれたサリヴァンを見た。

サリヴァンは悲しげに、微笑んでいた。

「それほどひどい傷ではなかったが、あのおれには、ラクを護れる力がなかったから……殺してしまうかと思っただ」

それで悲鳴が、「やめろ」「や」「いやだ」だったのかと、その恐怖だったのかと、ツェイルは思った。

「あのおとき、とは……？」

「そうだな……あの頃は塔にいたから、時間感覚が狂っていて、よくわからないんだが」

そう言ったサリヴァンは、なにかを求めるようにルカイアに視線を投げた。

僅かばかり眉をひそめたルカイアは、しかし長々と息を吐き出すと口を開いた。

「十八年です」

その数に、ツェイルは首を傾げる。

「そうか……それくらいだったな」

サリヴァンのほうは、なにかを納得したように頷き、唇を歪める。

「それからどれくらい経った？」

「五年です」

「ふうん……この歳月が、五年か。ツェイが来てからは？」

「半年ほどになります」

「ふむ……やっぱりよくわからないな」

よくわからないのツェイルのほうだ。サリヴァンとルカイアの会話が、さっぱりわからない。なんの話をしているのか、要領が掴めないのだ。

「外に出て五年……ツェイと出逢って半年……同じくらいの長さに感じる」

「ツェイルさまとの時間は濃密であると、そういうことでしょうか」「ラクが斬られたのはいつになる？ おれの感覚では、外に出る少し前なんだが」

「八年ほど前のことかと。その場にはわたしもおりましたので」

「……おまえ、いたか？」

「いましたよ。そのときが、わたしが初めてあなたにお逢いした日ですから」

「最悪な出逢いだな」

くつくつと、サリヴァンは笑う。

ルカイアは忌々しげに、ため息をつく。

ふたりのそれと、数が示すものがわからなくて、ツェイルは混乱するばかりだ。

「そういえばあのときも、ルーフは赤かったな……綺麗だった」

「わたしはあのとき初めて、ルーフが赤く染まったところを見ました」

「おれは白いルーフを、外に出てから初めて見たんだぞ」

「脅威が消えた……からでしょうかね」

「だからおまえを信用した。ルーフはおれを心配する花だからな。おまえが敵ではないと、教えてくれた」

「今さらながら、ルーフには感謝していますよ」

ふと、ルカイアの視線が窓辺に流れる。透明なガラス花瓶に活けられた白いルーフが、美しく咲き誇っていた。

「こんな会話をしているのに、ルーフは白いままです。少し面白くありませんね」

「ルーフは素直だ。今もおまえが敵ではないと知らせてくれる」

「……腹が立ちます。わたしの心を、ただか花一輪に示されるなど」

白いルーフは、ツエイルが拉致されたときから、常に部屋のどこかに置かれるようになった。ツエイルやサリヴァンの身の危険を、いち早く察してくれるだろうという目的からだ。

「おれの周りに咲くルーフは、いつも赤かった……いつもおれは、ルーフに心配されていた。だから、ラクが斬られたときも、わからなかったんだ。血だらけでおれのところにラクが来て、それで漸く、ああそのときが来たのかと思ったんだが……」

サリヴァンが、遠いものを眺めるような瞳で、白いルーフを見つめる。

「ラクを死なせるわけには、いかなかったからな。死のうとしていたラクが、天恵術師として帝国に認められ始めていたから……」

「ラクウィルが斬られたのは、あなたのせいではありませんよ。あれはラクウィルが、あなたの名前を出したからです」

「おれの騎士だって？ はっ、ばかだよな……おれのことなんか、捨て置けばよかったのに……自分のことだけ、考えていればよかったのに」

笑うサリヴァンが、とても虚ろに思えた。それは夢現で暴れていたときと同じような虚ろさで、ツェイルは恐怖した。

「サリヴァンさま……っ」

そんな顔をしないで、としがみつけば、サリヴァンはふっと優しい笑みをツェイルに向けた。

「だいじょうぶだ、ツェイ。おれはもう諦めた」

「……諦めた？」

「ラクをおれの歪んだ人生に引きずり込むこと……おまえのこともな」

「歪んだ……？」

なにが歪んでいるというのか。

「ルカが言うには、十八年だそうだ」

「……その数は、なんですか」

問う声が震えた。それはサリヴァンが、ただひたすら優しく笑むからだ。

「淡の塔、という離宮に、幽閉されていた時間だ」

「幽閉……？」

誰が、と言う前に、気づいた。

「おれだよ」

サリヴァンが自ら、さらりと言う。

「よくわからないが、十八年、おれは淡の塔に幽閉されていたらしい。外に出たのは、五年前のことだ」

「サリヴァンさまが……なんで」

「まあ、おれにはそんな自覚なんてないから、かなり自由だった。なにせ、フェンリスがいたからな。思いっきり自由ではあったが、人目についてはならないことはわかっていた。だから、近場の街とアウニの森以外には、行ったことがない。外、というのは、塔を囲む城にいた者たちのことだ」

ただ微笑むサリヴァンから、その事実を聞くのは違和感があった。笑って言うことではないと、ツェイルは思うのだ。おそらくこの場でツェイルと同じ気持ちなのは、サリヴァン以外の者たち、つまりルカイアやリリ、ハルトだろう。

なぜ、笑っていられるのだ。

父に斬られた、と右腕の傷のことを明かしたときもそうだったが、どうしてこの人は、そういうことを笑って言えるのだろう。

「……どうして、サリヴァンさまが」

この人は皇帝で、国主だ。そうなる前は、皇太子であったはずだ。大事にされることが当たり前であるのに、なぜ十八年もの間、幽閉されていたなければならなかったのだ。なぜ父親に、剣で斬られねばならなかったのだ。

「ツェイ、そんな顔をするな……おまえに表情があるのは嬉しいが、そんな顔は見たくない」

自分がどんな顔をしているかなど、ツェイルにはわからない。けれども、それを言うなら、無理もなく笑んでいるサリヴァン自身のほうをどうにかしてもらいたかった。

笑ってなど、いられないことのはずなのに。

「なにも悲しい話などしていかないだろうが」

そういうサリヴァンの瞳は、とても澄んでいる。

ああそうか、この人にとってそれは当たり前前の日常だったのか。そう気づいた。

慣れ、というものを感じる前に、ツェイルもそうであるように、誰も日常には疑問を感じないものであるから、それらは疑いようがない。

サリヴァンは、生まれたときから幽閉されており、それが日常であつたから、疑問にもならなかつたのだ。慣れを感じるまでもなく、当たり前のことだつたのだ。むしろ今が異常であるとさえ、サリヴァンは感じているのかもしれない。

けれども。

「寂しく、なかつたのですか」

「ん？」

「悲しく……なかつたのですか」

ツェイルはきょうだいが多い。両親もいた。仕えてくれている人たちも、一緒に仕事を手伝ってくれる人もいた。いわば大家族の中

で、ツエイルは育った。

孤独を感じたことはない。

天恵があっても、それは兄と同じものであるから、孤独というものは感じなかった。

しかし、サリヴァンはどうだろう。

「悲しくはなかったな……たぶん、寂しくもなかったと思う。猯下やアルトファル、フェンリスがいたし、途中からラクも一緒だったからな……むしろ今のほうが悲しくて寂しいことが多い」

「今……？」

ふっと、サリヴァンは苦笑した。

「おまえがそばにいないと、悲しいし寂しいんだ」

「え……」

「ずっとそばにいたいのに、国主だからって、政務に引っ張り回される……これなら、塔にいた頃のほうが自由だった。まあ、今も塔にいたら、おまえには出逢えなかったわけだが」

おまえに逢えない日々が続くのは苦しい、とサリヴァンは言って、そうして顔を近づけてくる。

息がかかるほど近づいたかと思ったら、気づけば唇を塞がれていた。

「んっ……？」

なにが起こったのかと、頭がそれを理解しようとする前に、サリヴァンの顔は離れていく。呆然としていたら、サリヴァンはくつく

つと笑い出した。

「可愛いな、ツエイ」

口づけされたのだ、と気づいたときには、また塞がれていて。

「んむ……っ」

さっきは触れるだけだったのに、ペロりと上唇を舐められたことに驚いて口を開けば、熱いものに侵入されてしまった。それどころか蹂躪され、呼吸もままならないほど、貪られているかのように吸われた。

「ふっ……っ」

サリヴァンが漸く離れていったとき、ツェイルはぐったりとしていた。

口づけされたことに羞恥を感じるも、それを凌駕するほどの胸の高鳴りに、自分でもどうしたらいいかわからなくなった。

37 : 閉ざされた世界は嘲笑う。 6 (前書き)

サリヴァン視点です。

ツエイ、と幾度か呼んだが、腕の中で真っ赤になって固まったツエイルから反応はなく、サリヴァンは苦笑をこぼした。

「早過ぎたか」

ツエイルはまだ子どもだ。いや、子どもの領域にいなければならない年頃だ。そろそろおとなな考えを持って当然の年齢ではあるが、そういう考えを見せてもくれるが、ツエイルは思いもよらなかったのだろう。

「見せつけてくれますねえ」

そう言ったのは呆れたハルトだった。

「いいものを見させていただきましたっ」

そう言ったのは今にも泣きそうなほど喜んでるリリだ。

ルカイアは。

「これで早過ぎなのですか？」

と、驚いていた。なぜここで驚くのか、サリヴァンは怪訝に思う。

「ツェイは成人してないんだぞ」

「まだあと二年ありますが、関係ないでしょう。娶られるのですから」

「おまえな……」

たまに一緒に眠っているから、とうにサリヴァンがツェイルに手を出しているものだ、ルカイアは思っていたらしい。

サリヴァンもそのあたりはそれなりに考えてはいるものの、ツェイルの心を完全に手に入れるまでは、その言葉を聞くまでは、手を出さないよう心がけている。寝台を共にしているのだから、サリヴァンにその衝動がないわけではないのだ。

サリヴァンとてひとりの人間、愛する者を隅々まで愛したいと思うのは当然である。

「まあ……少しは手を出すが」

「少し……?」

眠っていて意識がないところをちょっと触るくらい、可愛いものだろう。

「苦労されておいでのようで」

ハルトの苦笑に、そう思うだろう、と短く息をつく。

「これが無防備過ぎるんだ。おれだって、健全な男なんだぞ」

「ツェイルさまを花開かせるのは、サリヴァンさまですからね」

「……揶揄に聞こえるのは気のせいか、ハルト」

「えっ、なにがです?」

ラクウィルと同じことを、ハルトは含みもなく素で言うのだ。

しかしながら、たとえそれが本当に揶揄であったとしても、サリヴァンは聞き流せない。

「まだ、早い」

ツェイルが成人するまであと二年ある。

待てるだろうかと考えて、すぐに無理だろうと自答する。ツェイルの口からその想いを聞き出してしまえば、自分を抑えられないだろう断言できる。

ツェイルは己れを貧相だと、魅力がないと思っているようだが、サリヴァンにその感覚はない。すべてが小ぶりなだけだ、と知っているし、両腕にすっぽりと収まるところがもうたまらない。小さくて、ふわふわしていて、ちょこまかと動いたあとにちんまりと椅子に座られると、たまらなく可愛い。一日中眺めていても飽きないくらいには、ツェイルが可愛くてならない。

いつになったら気づくだろう。

サリヴァンを魅了してやまないのだという、その事実には。

「まあ、いいか」

この魅力を知るものはサリヴァンただひとり。ほかは知らなくもいい。

花開かせるはサリヴァン。

「……ルカ」

「はい」

「感謝する」

「……はい？」

サリヴァンにはつこりと笑い、未だ硬直したまま戻らないツェイルを深く抱き直した。

「外に出してくれたことだ」

「……連れ出したのはラクウィルですよ」

「それでも、おまえがきつかけを作らなければ、おれは外に出なかつただろう。あの閉ざされた世界で、ただ死を待つだけだった」

サリヴァンが育った、閉ざされた世界。

今を生きるこの、閉ざされた世界。

天は嘲笑う。

閉ざされた世界は嘲笑う。

見よ、死を待つだけだったものが、息を吹き返した。

生きることを望み、その姿に魅入られ、大地立つ者となった。

閉ざされた世界は嘲笑う。

見よ、息を吹き返し、根づいたではないか。

大地立つ者、ここに確かな存在を示したではないか。

「ルカ……おれは、国主だ」

「……はい」

「今までも、これからも、おれは国主だ」

「はい、サリヴァンさま」

サリヴァンは右腕を露台のほうへと伸ばすと、手のひらでふっと空気を撫せた。

「認めよう」

とたん、空気が震える。

柔らかな風が舞う。

緑の絨毯であった露台の向こうが、白いルーフの花畑へと姿を変えていた。

「……、サリヴァンさま」

白い絨毯が、風にそよぐ。

赤い絨毯しか見たことがなかったサリヴァンは、外に出てから、漸く白い絨毯を手に入れた。

それでも、欲しいとは一度も思わなかったもの。
できると、持っているのと、認めたくなかったもの。

認めることを、許せなかったもの。

「これが、国主という、天恵」

ルカイアがハツとして、ルーフの花畑を凝視していた目を、サリヴァンに戻した。

「父は咲かせることができなかった……憐れな人だ」

先帝は、真の皇帝でも、国主でもなかった。

ルーフを咲かせることができる者、それが国主だと知っていたからこそ、その者を殺め帝位を奪い、その座に就いた。

だからサリヴァンを斬った。

己れの子に、それが出たから。

だが。

「運命とは、宿命とは、宿世とは、皮肉なものだな」

父がサリヴァンを斬りつけたのは、それだけの理由ではない。

サリヴァンは咽喉の奥で笑うと、ツェイルに目線を落とした。

「ツェイ、ツェイ、見ろ。ルーフが綺麗だぞ」

幾度か頬を突いてやると、ハッとツェイルの薄紫の瞳が見開かれる。

「は……あ、え？ ええ？」

やっと戻ってきたツェイルは、真っ白になった庭を見るなり驚き、その目をまん丸にした。なにが起こったのだと、そう全身で訴えているが、サリヴァンはただ微笑む。

「ツェイ」

見ている、とサリヴァンは手のひらをツェイルの目の前にかざし、

握る。ふっと開いて、その中に一輪の白いルーフを出して見せた。

「わぁ……っ」

感嘆の声を上げたツェイルは、瞳をきらきらとさせた。

「さ、サリヴァンさま、花をつ」

「ルーフだけな」

すごい、と言ったツェイルに、ルーフを手渡す。どうやって出したのか仕掛けを探しているようだったので、もう一輪、ぽんと出して見せた。

「いくらでも出せるぞ。天恵だからな」

「天恵？ ルーフを、咲かせることが？」

「むしろそれしか能のない天恵だ。役に立つのか立たないのか、微妙だろう」

「そんなことはありません」

ぶんぶんと首を左右に振ったツェイルは、ぽんぽんとルーフを咲かせるサリヴァンを止めさせてから、ふんわりと笑った。

「サリヴァンさまが綺麗だから、ルーフはいつも綺麗に咲くのですね」

そう言ったツェイルに。

ルーフに囲まれて微笑むツェイルに。

「おまえは……」

いとしいという衝動が、激しく込み上げる。

「サリヴァンさま？」

ぎゅっと腕の中に抱き込んで、逃がすまいと閉じ込めた。

「この想いはもう止められない。
そう思った。」

閉ざされた世界は嘲笑う。

息を吹き返し大地立つ者となったそれは、いとしい者を手に入れて安寧を得た。もう誰にも、それらを否定することはできない。

見よ、ここには確かなものがある。

閉ざされた世界は高らかに、ひそやかに、開かれた世界を嘲笑う。

37 : 閉ざされた世界は嘲笑う。 6 (後書き)

楽しんでいただければ幸いです。

サリヴァンの手のひらから、次々と白いルーフが生まれ出てくる。それは不思議な光景で、見ている分にはとても面白いものだ。それが、天恵だという。

「サリヴァンさまは、天恵者なのですか？」

背中に張りついて離れないサリヴァンは、たまにツェイルにルーフの花を降り注がせながら、眠そうにうとうととしていた。

「天恵者というか……これは恩寵だな」

「恩寵？」

「初代ヴァリアス皇帝は、天上猊下にその人柄を気に入られて、帝国を譲られた。そのとき、さまざまな恩寵をいただいたらしい。おれのはその名残だな。まあ、天恵の先駆けともいえるから、天恵ではある」

ルーフの花を咲かせることができる、天恵。
不思議な天恵もあるものだ。

「なぜ今まで、見せてくれなかったのですか？」

「あまり好きではなかったからな……むしろ邪魔だった」

「え……？」

「これは国主の天恵だ。今はこうしておまえのそばにいられるが、

邪魔になるときもある」

政務とか、と言われれば、顔が熱くなる。国主であるとツェイルと一緒にいられる時間を奪われる、と言われたようなものだ。

「あ……っ」

そういえば、ものすごい口づけをされたのだったと、ツェイルは思い出した。一気に羞恥やらなんやらが頭を駆け巡り、身体が硬直してしまう。

そんなツェイルの目の前に、サリヴァンがまた、気だるげに腕を持ち上げたかと思うと、ぼんと一輪のルーフを咲かせた。そんなにいっぱい出されても、活ける花瓶や場所に困るのだが、それでも目を奪われるほどサリヴァンが出すルーフは美しい。

「おまえがこれを見て喜ぶなら、まあいい……」

そう言いながら、後ろ首にサリヴァンが頭を摺り寄せてくる。

「眠い……」

「……そうですか」

子どもみたいなのその仕草に、笑みがこぼれる。それでも、眠ってください、とは言えなかった。言ったらまた、恐怖に支配されてしまうかもしれないと、不安になる。

「国主は、こんなに、忙しくない……のんびりできると、聞いていたのに」

「のんびり？」

「忙しいなんて、聞いてない……ルカのやつ、騙しやがって」

ぐずぐずとし始め、これはふつうに眠いのだとわかったが、やはり「眠ってください」と言うには憚れた。

「まあ、それもあと少し……終わったら、のんびり、できる」

「そうですね」

「……ツエイ」

「はい？」

「眠い……」

「はい」

わたしのそばで眠れるのなら、いくらでも。

そう思いながら、ツェイルは胴に回されているサリヴァンの腕を、ゆっくりと撫でた。

「ツエイ」

「はい」

「……ツエイ」

「はい」

ツエイ、と数度呼ばれ、そのたび返事をしているうちに、ことんとサリヴァンは眠った。最後の最後にルーフをぽんと一輪咲かせてから眠ったので、なんだか可笑しかった。

「まっ、また、ツェイルさまが花だらけに……っ」

その小さな嘆き声に、ツェイルはふと顔を上げる。
リリだ。

「……、リリ」

「もう活けられる花瓶がなくて、ご近所配りまでしたのに……っ」

サリヴァンが次から次へとルーフを咲かせるものだから、部屋がルーフで溢れてしまい、リリが駆けずり回って花瓶に活けてくれていたのだが、少し出ている間にまたツェイルがルーフにまみれている姿を見ると、悔しそうに地団駄を踏んだ。

「す……すまない、リリ。止められ、なくて……」

ぼんぼんルーフを咲かせられると、見ているこちらは面白いので、制止の言葉をかけそびれてしまう。ツェイルも、リリのそれを聞いて改めて身の回りを見渡すと、自分とサリヴァンがルーフまみれになっていることにそのとき漸く気づいた。

「ツェイルさまのせいではありません……もうこうなったら、騎士宿舎にもお裾分けです。あそこはいつでもむさ苦しいですから、飾って差し上げましょう」

「そ、そうだな」

「近くのルーフを集めてください」

「う、わ、わかった」

掃除をしているときみたいに怖くなっているリリには逆らえなくて、ツェイルは背中にサリヴァンを張りつかせたまま、手が届く範囲にあるルーフをかき集める。

一輪一輪が散らばっているとそれほど量があるようには見えないのだが、こうして集めてみると大きな花束になる。可愛い紐で茎を結んで飾れば、充分豪華な贈りものになりそうだ。いや、もうなっているだろうか。

「遊ぶように出されるのはかまわないのですが……本当に遊んでお

られるようにしか見えないところが問題です」

「は、ははは……」

遊んではいなかった、とは言えなかった。

少なくともサリヴァンは遊んでいたと思われる。ツェイルが、それを見て喜んでいたので、次々とルーフを咲かせていた。

「……ごめんなさい」

「え？ なぜツェイルさまが謝られるのです？」

わたしも遊んでいました、とツェイルはリリから視線を逸らした。

「……ツェイルさま」

「はい」

「陛下で遊ばないでください」

う、と言葉に詰まる。

「陛下、本気で遊ばれますから」

返す言葉もない。

「政務を放り投げて、丸一日遊ばれていたこともあるんです」

「……、え？」

「騎士宿舎で」

なんと。

「あのときはどうしようかと思いましたが……消えた陛下を見つけられなくて、とても探し回りましたのに、騎士宿舎で騎士たちと遊

んでおられるんですもの」

「……………遊ぶって?」

「盤上^{キョウブ}遊戯です。それも、賭け有りの」

「か……………賭け?」

「騎士たちを丸裸にしておられました」

うわ、とツエイルは顔を引き攣らせる。

「不正をしていたのではと思ったのですが、そうではなかったようです……………見つけたときにダンガード侍従長がお相手をしたのですが、あっさりと負けられて……………あれは惨劇でした」

今思い出してもげんなりするのか、リリの表情は暗かった。よほど悲惨な光景を見たのだろう。

それでも人間、そういう話を聞くと最後まで知りたくなる。いや、ツエイルの場合、サリヴァンのそういう話をたくさん知りたかった。

「ど、どうなったの?」

「侍従長も丸裸に」

「うわ……………」

やはりそうなるのか。

「そのあと、ルカイアさまの怒号が響いたんですけどね」

お、と思う。

「言い包めてルカイアさまをお相手に遊ばれまして……………」

「うんうん」

「丸裸にされておりました」
「ええ？」

そこまできたら最後まで勝ち続けるものだろう。と、思ったのだが、ラクウイルに勝ってもルカイアには勝てない、その理由はなんとなくわかる。

「ああ、もちろん陛下の場合は上着を二枚ほど脱いで、騎士たちに仕返しとばかりに帯を外され、下衣を剥ぎ取られかけた、という程度のもんです。ルカイアさまにそのまま執務室に引っ張られて、七日ほど閉じ込められておりましたけれど」

「……やっぱり？」
「ルカイアさまには誰も勝てません」

同意見である。ツエイルもルカイアには勝てる気がしない。

それにしても。

「^{キューブ}盤上遊戯……か」

「ツエイルさまも、それで遊ばれたことがありますか？」

「いや、わたしは専ら、剣ばかりで……姉が妹と遊んでいるのは、見たことがあるけれど」

興味がないわけではない。ツエイルは天恵があつたので、剣ばかり学ばせられ、実戦に駆り出されていたから、そういうものに触れる機会がなかっただけである。遊ぶ、というものが、外で動き回る、剣を揮う、というものだった。

「用意しましょうか。わたしも、少しならできるので」
「いいのか？」

「もちろんですとも。ツェイルさまは、もっとご自分のやりたいことなど、おっしゃっていいのですよ」

「やりたい、こと……?」

「ええ。いつも剣の稽古ばかりでは、退屈でしょう?」

身体を動かすのは好きなので、稽古ばかりしていても、とくに不満は感じていない。けれども、盤上遊戯には興味があった。

あともう一つ、できることならやりたいことがある。

「……リリ」

「はい?」

「あの……厨房に、行けないか」

「厨房、ですか?」

うん、とツェイルは頷く。

「ツェイルさま、料理がおできに?」

「いや……」

食事を用意することはできない。けれども、ツェイルは厨房で唯一、作れるものがある。それを作るのは、ツェイルの遊びの一つで、趣味といえるものだ。

どうだろう、とリリを窺うと、リリは少しの間逡巡したのち、訊いてみます、と言ってくれた。

「まあ、陛下がよいとおっしゃれば、それで済むことですからねど…
…厨房の方々にもお伝えしなければなりませんからね」

「リリはいい?」

「もちろんです」

貴族の令嬢がそんなこと、と言われなかったことに安堵した。

「ありがとう、リリ」

それからのリリは行動が早く、許可はサリヴァンが起きたときに取ることにして、厨房に努める人たちにツェイルの意思を伝えてきてくれた。とても小さな剣、或いは小ぶりの包丁も用意して欲しいと頼めば、首を傾げつつも用意してくれた。

その日はけつきよくサリヴァンが起きなかつたので厨房へ赴く機会はなかつたが、サリヴァンが眠り続けることもなかつた。

それは夜更けのことだ。

「……サリヴァンさま？」

厨房を使えるかもしれないと、気分が高揚していたツェイルは、なかなか寝つけずにいた。だからなにかが動く気配にすぐに気づいて寝台を起きると、隣にいたはずのサリヴァンが露台にいるのを見つけた。

サリヴァンさま、と声をかけようとして、その息を呑む。

露台にいたのはサリヴァンだけではなかつた。

「……大きな、鳥」

露台に立つサリヴァンに、とても大きな白い鳥が顔を近づけて頬ずりしていた。

「ん？ ああ、ツェイ、起こしたか」

ツェイルに気づいたサリヴァンが、月明かりを側面に受けながら振り返る。

サリヴァンに頼ずりしていた鳥が、その赤い瞳にツェイルを映した。

「メルエイラの娘か」

喋った。

「ああ。おれの嫁だ」

「うむ、よい嫁だな。よい気を持っておる」

赤い瞳が細められる。

笑っているのだ。

それを感じると、その大きさに驚いていた心も落ち着き、自然とツェイルを露台に誘った。

「サリヴァンさま、このお方は……」

「聖鳥フェンリスだ。前に話したことがあつただろう？」

ああ、この大きな鳥が、以前話してくれたあの鳥か。

そしてサリヴァンを、幽閉されていたそこからよく連れ出してくれたという、心優しい獣。

「フェンリスさま……このお方が」

「フェンリスでよい、メルエイラの娘」

「ツェイルと申します。どうか、ツェイルと」

「ふむ、ツェイルか。よい名だ」

そつと手のひらをフェンリスに伸ばすと、フェンリスは身を寄せ
て撫でさせてくれた。

フェンリスの白い羽毛は、とても綺麗で柔らかく、暖かった。

「そつだ。フェンリス、ツエイを乗せて飛んでくれないか」

「え……？」

サリヴァンの急な提案に、驚いたのはツェイルだけだ。

「われはかまわぬが……ツェイルよ、高いところは平気か？」

「え……あの、よろしいのですか？」

聖鳥に対し、それは恐れ多いことだ。しかし、フェンリスの赤い
瞳は細いままで、笑っていた。

「なに、われは聖鳥などと言われておるが、ただの大きな鳥よ。少
しばかり天恵で人語を解せるだけだ」

それでも聖鳥なのだから、とツェイルは思うのだが、フェンリス
はくるりとツェイルたちに背を向けると、露台から乗り易いように
と体勢を整えてくれた。

「え……え？ フェンリスさま？」

「フェンリスでよい。さあ、乗れ」

乗れと言われても、とツェイルが戸惑っていると、サリヴァンが
ひらりと欄干を乗り越えフェンリスの背に降り立った。そうしてス
ツと、その手をツェイルに差し出す。

「おいで、ツェイル」

ツエイルの迷いなど吹き飛ばす、優しくて柔らかな微笑みが、ツエイルの心を攫った。

「サリヴァンさま……」

この世界で、この人に心を奪われない人など、いるのだろうか。そう思いながら掴んだ手のひらは、やはりいつものようにひんやりとしていた。

とん、と裸足の両足がフェンリスの背に乗り、衝撃に備えてサリヴァンと並んで座る。最初に感じたのはふわっと舞い上がるような浮遊感、その次にはグンと重力を感じた。

少し冷たい風が頬を掠めていく。
震えたら、サリヴァンに引き寄せられた。

「見る、ツエイ。これが世界だ」

そう言ったサリヴァンが示したのは、高く上へ昇ってもまだ遠い空だった。

大小二つ、仲のいい双月が夜空を照らすように輝いている。
月がまだあんなに遠い。高く高く昇っているはずなのに、手が届きそうもない。

ああ、この世界は広く、大きい。

「……まだ起きている街もあるのですね」

視線を下に落とすと、ぼつぼつと明りが見える。夜更けなのに、まだ稼働している街もあるらしい。

「真つ暗だと、寂しいからな」

「そうですか？」

「暗闇に明りを求めるのは、人間の性みみたいなものだ」

「……それもそうですね」

まるで、サリヴァンもそれを求めているような、言い方だった。

「サリヴァンさまは、闇がお嫌いですか？」

「いや、わりと好きだ。むしろ暗いほうが安心するかな」

「安心、ですか」

「なにも見なくていい」

「え？」

「まあ、目が闇に慣れたら、見えてしまいがな」

なにかを見ることを、サリヴァンは拒絶している。それは夢現で暴れていたときのそれと、同じものかもしれない。

「この国は闇を嫌う傾向にある。闇は魔だと」

「……はい」

「本当の闇は、自分たちの心にあるものだ。だから闇を司る者は、人間たちのその心を護ってくれる。おれは、闇はわりと好きだ」

それを聞いて、己れの身に宿っている闇の一族のことを考えた。

ツェイルは、その天恵のせいで代償を支払い、こんな身体を持つことになった。それでも、天恵を与えたもうた天を恨みはしても、闇の一族を恨んだことなどない。嫌ったこともない。

サリヴァンが闇が好きだと言ってくれて、ホツとした。

「なあ、ツェイル」

「はい」

「このままどこか遠くへ行けたら、おまえはついてきてくれるか？」

「……遠くへ？」

「ああ。おれは十八年、幽閉されていた。それでも自由だった。こうしてフェンリスがその背に乗せてくれたから、よく、このままどこか遠くへと行ける気がしていた」

その言葉を聞いて顔を上げると、サリヴァンの透明感の強い碧い双眸が、じつとどこか遠くを眺めていた。その視線の先は、どこを見ているのかわからなかった。

「塔にいたことが、すべてではないとはわかっていたんだ。ずっとそこにいられるわけでもない。いつか、殺されるだろうと思っていた。そのまま殺されるのを待っていた」

「……サリヴァンさま」

「殺される前に、どこか遠くへ行きたいと、願わなかったわけではないんだ。願えなかったわけでもない。だが……おれは国主だった。逃げるように遠くへ行くことは叶わなかった」

「……天恵が、サリヴァンさまを、国に縛っていたのですか」

そうだな、とサリヴァンは苦笑した。

「誰かに、必要とされたかった……だけかもしれない」

それを聞いたとき、やはりサリヴァンは孤独だったのだと思った。寂しくも悲しくもなかったと言っていたが、どうしても感じる孤独は拭い去ることができなかったのだろう。そしてその孤独が及ぼすものがなにか、そのときはわからなかったただけかもしれない。

「わたしは、サリヴァンさまのおそばにいます」

「……いいのか？」

「巻き込むと、諦められたのでしょうか？　なら、ただ受け入れてくださればいいのです」

ツェイルはサリヴァンに惹かれている。好きだと、いとしいと想う。

だから、ずっとそばにいる。

「そうか……」

ホッと、サリヴァンが息をつき、身体に巻きついた腕に力が込められた。

「じゃあ、結婚するか」

「……婚約者ですよ、とりあえず」

もう婚姻は前提にある、たとえば、サリヴァンは「そうじゃない」と笑った。

「おれと、結婚してくれ」

おれ自身と、というその声が、国主としてのサリヴァンではなく、ただのサリヴァンと結婚して欲しいと、言っていた。

ツェイルは少しの間、サリヴァンを見つめる。

そうして、ふっと笑った。

「はい」

あなたのそばにいられるのなら、あなたを護れるのなら、たとえ

仕組まれた婚姻でも、喜んで受け入れる。

わたしはあなたに惹かれている。

わたしはあなたをいとしいと思う。

その心は、作られたものではない。サリヴァンと触れ合って作り上げていった心だ。

「ありがとう、ツェイ」

ぎゅっと、抱き込まれた。

幾度もこうして抱きしめられたことを思いながら、ツェイルもサリヴァンに体重を預けて抱きつく。

もっと、女らしい身体であつたら、よかつたのに。

そう思ったけれども、今はこの至福を、味わっていたかった。

「失礼します、陛下、ツェイルさま」

その声は、ルカイアだった。

フェンリスに皇都の上空を軽く一周してもらって部屋に戻り、フェンリスがまた空へと舞い上がる姿を見送ったすぐのことだ。

「また、騒がしくなるか」

サリヴァンはため息をつき、ルカイアの唐突な来訪を迎える。

「夫人が自害しました」

告げられたそれは、ツェイルにはわからないものだったが、不穏であることは感じられた。ただ、サリヴァンは目を細めただけだった。

「そってきたか……」

ぼつりとそうこぼすと、侍従を呼んで着替え始めた。

そのまま政務へと戻るのかと思われたが、着替えただけでサリヴァンは動かなかった。寝室の隣、居間に移動して、長椅子に腰かけ。ツェイルは寝巻のままだったが、リリが来てくれたのでとりあえず上着を羽織らせてもらった。

「ラクたちは？」

「移動中です。捕縛し、護送中のことだったそうです」

「……自害ではないな」

「では？」

「議会の仕業だろう。あれを夫人に知られるわけにはいかない、
そう判断した者たちの」

「……真実は知らぬほうがよい、ということですか」

「おれを罪深き者と言う人間だぞ。奴が真実を知ればどういうこと
になるか……面倒ごとはもう御免だということだろうな」

「……これ以上のなにを求めようというのでしょうか」

「ラクとツアインがいたのに、よく誤魔化せたものだ……大老には
面倒をかけたな」

「大老からは、むしろ申し訳なかったと」

「謝ることはないのに……な」

ふっと、サリヴァンは苦笑う。ツェイルは黙ってそれを見、ふ
たりの会話を聞いていたが、どうやらラクウイルの姿が見えないの
は外に出ていたからだと知った。

「ツェイル」

急に呼ばれて、ツェイルは少し驚きつつも返事をしてサリヴァン
の向かいに座った。

「聞いていた通りだ」

「……説明を求めても？」

「おまえを攫ったナルゼツタ家の夫人のことだ」

ハッと、ツェイルは瞠目する。

「夫人が……自害を？」

「いや、殺された。おそらくは議会の誰かに」

「……なぜ？」

「真実を知ること、許されなかったからだろうな」

「……真実とはなんです？」

それはツェイルが知る必要のないものだろうか。

「ナルゼツタは、おれが十八年幽閉されていたことを知らない」

「え……？」

「そもそも、おれがそういう扱いをされていたことすら、奴は知らない」

それは、とツェイルは解釈に戸惑う。

「まあ、おれが幽閉されていたと知っているのは、上位十二貴族の中でも、二大卿四公と、ルカイアのところ、ツアインくらいなものだが」

「……兄も、知っている？」

なぜツアインが、と思う。ルカイアはともかく、いくら上位十二貴族の列に並ぶようになったメルエイラ家でも、それは最近のことで、以前はその列にも及ばない没落貴族だったのだ。

「そういうわけだから、五年前におれが帝位を預かったとき、反対した者たちがいる。議会の少数がそうだ。おれを認めていない」

「ですが……サリヴァンさまには、国主の天恵があります」

「見せたことがない」

「え……そうなのですか？」

「見せると言われなかったからな」

頭から認められていないのだから、国主の証を見せるとも、言われなかった。そういうことかとツェイルは理解し、ふと息をつく。

「それに……たとえ見せたとしても、ただルーフを咲かせることしかできないこの天恵が、国主の天恵などではないと言われてしまえば、それまでだ。この天恵に意味はない」

「……それでは、この国の帝が誰であっても同じ、という理論が成立してしまいます」

「成立させたい奴らは多くいる。だが、誰も国の責任は取りたくない。だから人形を欲する」

「サリヴァンさまのご意思を奪いたい、と？」

そうだな、とサリヴァンは頷き、リリを呼ぶとツェイルを着替えさせるよう命じた。

「サリヴァンさま？」

「一緒に来てもらおう、ツェイ。おまえに知っていて欲しいことがある」

「わたしに……知って欲しい、こと？」

「ああ。着替えたら、おれの執務室において」

にこ、と笑ったサリヴァンから、その真意を探ることはできない。

ルカイアを連れて部屋を出ていったサリヴァンを見送ったあと、ツェイルはリリに手伝ってもらって身を整え、サリヴァン就きの近衛騎士に案内してもらって執務室へと向かった。

「ツェーイルうー！」

「え？」

サリヴァンの執務室を前に、聞き覚えのある声がツェイルの足を止めた。

振り向くと、満面笑顔の眩しい兄ツアインが、自分に向かって駆けてくる場所だった。

「兄さま……？」

「僕の、可愛い、ツェイルう！」

瞬きをした次には、もうツアインは目の前にいて、気づけば抱きしめられていた。

「ツェイル、ツェイル、ツェイルう」

「に、兄さま……っ」

相変わらず足が早い人だ。まあこの瞬間移動のような素早さはツアインの得意とするものではあるが。

「ああツェイル、無事でなによりだよ。僕にその顔をよく見せて」

元気だ。

ツアインは、あの頃と変わらず元気だ。

「ま、待って、兄さま」

「僕のツェイルに無体を働いた奴は、僕がぶっ飛ばして……んん？」

ぎゅうぎゅうとツアインはツェイルを揉みくちやにしていたが、首にある傷を見つけたとたん、その顔に笑みを張りつけた。

「これはなにかなあ？」

「え……あ、これは」

「攫われたときにはなかったけれどなあ？」

あれ、と思う。ツアインは、ツェイルが拉致された事件のことを知っているらしい。

「んー……あれからなにもなかったはずだし？　これ、彼の仕業かなあ」

「あの、これは……その」

首の傷はサリヴァンが気にするから、医師であるハルトがよく効く傷薬を塗ってくれて、もうほとんど赤いだけになっている。だから痛みもない。

「……そう、やっぱり彼なんだね」

にいつこりと笑ったツアインに、ツェイルは顔を引き攣らせた。

「兄さま、待つ……」

止める暇もなく、ツアインは執務室の扉を蹴って開けた。

「ん……ああ戻ったのか、ツアイン」

そこはサリヴァンの執務室であるから、ツェイルを待っていたサリヴァンがいるわけで。

「覚悟しろっ」

「はっ？」

瞬間的なことだった。

ものすごい音が聞こえたと思ったときには、ツェイルを案内するためにそこにいた近衛騎士が、なぜか執務室の中に投げ込まれていた。それも、執務室にあった長椅子ごとひっくり返っており、サリヴァンは部屋の隅に退避していた。

「おまえな！　そうほいほい人を投げるな！」

「僕のツェイルになにかあったら、容赦しないよって遠回しに言っただよねえ」

「おまえの場合はわざわざ遠回しにしないで、その行動が示してやるだろうが！　というか、なにもないだろうが！」

「僕のツェイルを傷ものにしたの、きみでしょお？」

「はあっ？」

「覚悟しろっ」

ツアインは、同僚が投げ飛ばされたのを見て引け腰になっている、もうひとりの近衛騎士を無情にもむんずと掴むと、また軽く投げ飛ばした。それも、サリヴァンに向けて。

「投げるなと言っているだろうが！」

「きみが避けなきゃ彼も救われるっ」

「だから投げ……うわっ」

サリヴァンは悲鳴を上げつつ、投げ飛ばされた可哀想な近衛騎士を、無情にも避けた。壁に激突した騎士は呻きながら気絶する。

「ちっ」

「投げるものを探すな！」

ツェイルは呆然と、兄の暴挙を眺めていた。いや、眺めていることしかできなかった。

なにが起こっているのかわからなかった。

「とつとと僕の餌食になりなよねえ」

「なるか!」

「我儘言わないっ」

「言っていない、投げるな!」

ハツとしたのは、ツアインが帯剣したその鞘をサリヴァンに投げたあとのこと、剣がサリヴァンに投げられようとしていたときだ。

「サリヴァンさまっ!」

肩で息をしているサリヴァンに駆け寄り、その間にツェイルは入った。その背をサリヴァンに押しつけて、なぜか狂気に駆られているツアインを見据える。

「こおら、ツェイルう? そこ、退きなさい」

「い……いや、だ」

「だめだよ、ツェイル。そこの彼を庇ったりしたら」

ぺったりと笑みを張りつかせたままのツアインは、幾度も見たことがある。

戦いの場で、その笑みが崩れたことはない。終始笑っているから、ツェイルはこういうツアインがなにをするかよくわかっている。

サリヴァンを殺そうとするかもしれない。

だから、キツと強く、ツアインを睨んだ。

「わたしは、サリヴァンさまの剣。すべての脅威から、サリヴァンさまをお護りする……たとえ兄さまであるつと、サリヴァンさまを傷つけるなら、わたしは許さない」

ツアインは表情を変えなかった。笑みを張りつかせたままじつとツエイルを見つめ、ツエイルも目を細めてツアインを睨み続ける。

たとえツアインが最愛の兄であろうとも、サリヴァンを傷つけるのなら、許さない。そう思えるほどに、ツエイルはサリヴァンがいたいと思う。

もうこの心は誰にも変えられない。

「……ツエイル、離れなさい」

「いやだと、言った」

にこにここと笑っていたツアインは、ツエイルの二度に渡る拒絶の言葉を聞くと、スツとその笑みを消した。

「それが答え？」

その低い声は、冷たいのではなく、しかし暖かくもない、ただ抑揚のない無機質な音だった。

「ツエイル、きみは僕の妻だ。ずっとそう言い聞かせてきたよね。僕のそばにいれば、きみは幸せになれるからだよ。それなのに、彼を選ぶの？ きみを危険なことばかりに巻き込んで、きみを傷つけていく男なの？」

「わたしが、選んだこと。わたしが、望んだこと。だから、いい」

後悔などしない。これはツェイルが選んだことで、もうどうしようもなくサリヴァンに惹かれた心が、サリヴァン以外を選ぼうとしないのだ。

「ツェイル、考え直さない。彼のそばでは、きみは不幸になる。僕のそばなら、絶対に幸せになれる」

ツェイルは首を左右に振った。

サリヴァンのそばにいと、決めた。そう望んだ。好きだと、いとしいと想ったから、そばにいたいと願っているのだ。

それに、結婚してくれと、サリヴァンは言ってくれた。こんな貧相な娘、それも厄介な天恵持ちの男みたいなのツェイルを、サリヴァンは欲しいと思ってくれた。

それがどれほど嬉しいことか、ツァインにはわからないのだろうか。

一生をメルエイラの中だけで過ごし、人を殺め続けて生き延びなければならなかった。自分の家族を作る夢を持てなかった。きょうだいたち以外との触れ合いなど、望めなかった。

ツェイルが、夢を見なかったわけがない。

それを、願わずにはおれなかったわけがない。

「わたしは……っ」

ぼろっと、涙がこぼれ落ちた。

「兄さまが、好き……姉さまも、トウーラも、シュネイも……でも
っ」

想っだけで、涙が溢れる。

「サリヴァンさまがいいっ」

この心は、ツアインによってずっと護られ続けていた。ツアイン
がいなければ、ツェイルは愛情を理解できなかっただろう。天恵を
恨み、家族を恨み、闇に囚われ続けていたことだろう。

それでも、そうやって護られた心は、サリヴァンとの出会いがさ
らに護ってくれた。

サリヴァンが涙を思い出させてくれた。

感情という忘れかけていたツェイルの一部を、思い出させてくれ
た。

ツェイルに、人のぬくもりを感じさせてくれた。
その暖かな眼差しを、ツェイルに向けてくれた。

「わたしから、サリヴァンさまを取らないでっ」

奪わないで。

この、気持ち。

この、喜び。

この、幸せ。

「……彼の真実を知っても、それが言えるの？」

ツアインの静かな問いに、ツェイルは涙も拭わず睨み続けた。

サリヴァンの真実など知らない。そんなのは、関係ない。ツェイ

ルが好きだと、いとしいと想うのは、ここにいるサリヴァンという人間なのだ。

「そう……なら、腹を据えるしかないね」

ふつと息をついたツアインは、鞘を失った剣を帯に戻すと、再び笑みを取り戻した。

「ツエイルを悲しませたらぶっ飛ばすから、その覚悟でね、サリヴァンさま」

そう言ったツアインに、ツエイルはそれまでツアインに感じていたものが消えたことを察した。

「僕はツエイルが大切だから、なにをするかわからないよ？ 上手く飼い慣らさないと、痛い目を見るからね」

それじゃあ、とツアインはあっさりとこちらに背を向ける。

「部下を道端に忘れてきたから、拾ってくるよ」

まるでなにこともなかったかのように、ツアインはその名残だけを場に残して、さっさと立ち去った。

「……兄さま」

先刻までのあれはなんだったのだろう。

そう思ったが、呆気ない立ち去り方ではあったものの、サリヴァンが傷つけられる事態は避けられた。そのことに安堵すると、背後のサリヴァンから深いため息が聞こえてきた。

はああ、と憑きものが落ちたように長く息を吐き出したサリヴァンは、ツェイルに両腕を回すとぎゅっと抱きしめ、まいった、と小さくこぼした。

「これが、溺れたその行方、ですね」

どこからかルカイアの声がした。

「おれを置いてどこに隠れていやがった、ルカ」

「部屋の隅にひっそりと。まさかツァインが本気で切れるとは思いませんでしたので、うっかりそのまま眺めておりました」

存在感を消して、ちゃっかり己れの身を護って退避していたらしいルカイアを、サリヴァンはツェイルの肩口から顔を上げて睨んだ。しかしルカイアはどこ吹く風である。

「クラウド、シュベルツ、さっさと起きなさい。今日の任務はほかの騎士と交代して、下がっていいですよ」

投げ飛ばされたふたりの近衛騎士にそう言ったおまけに、

「ご無事でなによりです、陛下」

にっこり笑ってすべてを片づけた。

己れの油断はなかったことにするつもりらしい。

見え透いたその行動にツェイルは顔を引き攣らせたが、サリヴァンは諦めたように目を据わらせるだけだった。

「溺れたその行方か……約束しておいてよかったな」

そうサリヴァンから眩きがこぼれたが、ツェイルにはよくわからなかった。

39 : 溺れたその行方。 2 (後書き)

楽しんでいただければ幸いです。

「また修繕費は自腹か……」

「それがあるじたる者の取るべき責任かと」

「この窓、ついこの間直したばかりだというのに……」

「仕方ありません。壊れてしまったのですから」

「ツアインの暴挙のせいになっ」

綺麗に片づけられ整えられた執務室で、サリヴァンはがっくりとうなだれていた。どうやらつい最近にも、修繕費を取られる事態が発生していたようだ。

「ツエイ、あの怪力はどこで養われたんだ」

「は……兄の、ですか？」

さて、とツエイルは考えてみる。

「……母の遺伝でしょうか」

「母？」

「よく、父を投げ飛ばしておられましたし……わたしたちきょうだいも、よく投げ飛ばされましたから」

「投げ飛ば……っ？」

久しぶりに父と母を思い出してみると、もういないのか、と少し切なくなる。

よく喧嘩をしていた両親だが、それでも傍から見れば恥ずかしいくらい仲睦まじい夫婦であったので、死ぬときも一緒だったのは、悲しいけれどもよかったとも思う。

「ツアインのものを投げる癖は、母君から譲られたものようですね」

「……そのようだな」

ルカイアが納得したように言い、サリヴァンはげんなりとしながら頷いた。

「ツエイをここに呼んだ目的を果たす気力が失せてきた……」

「え……あ、兄の無礼はわたしがお詫びします。申し訳ありません、サリヴァンさま。ですから……」

そうだ、ここにはサリヴァンに呼ばれて来たのだ。ツェイルがこれまで一度も踏み込むことがなかった、サリヴァンの国主としての領域だ。知って欲しいことがあると言われたのに、それは踏み込むことを許されたということなのに、ここで終わりだなんていやだった。

「……またいつかでいいか？」

「サリヴァンさまっ」

「冗談だ」

にこ、とサリヴァンは笑う。人が悪い。

「これ以上先延ばしにしたところで、いいことはないからな。ツェイとの結婚も遠のく」

それはいただけない、と言ったサリヴァンはツェイルの肩を抱くと、笑顔のままルカイアに振り向く。

「おまえも行くか？」

「わたしまで出たら、いざというときにいかなさるおつもりです。老宰相たちに、その采配がおできになるとでも？」

今もこの場におられないのに、とルカイアは不機嫌に言う。

「あのふたりはおまえと違って、優柔不断だからな」

「ええ。ですから、ナサニエルあたりを連れてお行きください」

「要らないぞ？」

「あの場所でああなたが最強であることは承知しておりますが、形だけでも」

「……仕方ないな」

ふむ、と唸ったサリヴァンは、ふたりの会話に追いつけず首を傾げていたツェイルをさらに引き寄せると、パチン、と指を鳴らした。

「ラク、呼べ」

ここにラクウイルはいないが、と思った瞬間のことだった。

「んー？ ナナがいないですねえ……お、いたいた」

どこからともなくラクウイルの声がし、続いて「んぎゃ」という短い悲鳴と「がしゃん」という金属が擦れる音がした。

「ひ、ひど……まだ、着替えの途中だったのに」

「うわぁ、ナナかつこわるっ」

「ナサニエルだっ！ 妙な渾名をつけるな、変人が！」

「ラクウイルですよ。ナナこそ、おれのことそんなふうには呼びな
いでくれますう？」

「きもっ……て、ここどこだよ！」

ツェイルは、ラクウイルと言い合っている騎士と同じく、視界に
入るその光景に驚いていた。

「……、え？」

なにが起こったのか。

「え？」

周りを見渡すと、そこは執務室ではなくて。

「うわっ、ツェイルさまっ？ な、なな、なんでここにっ？」

「……あ」

その騎士は、よくツェイルの剣の稽古につき合ってくれる近衛騎
士だ。名をナサニエル・ナドニクス、ナナと呼ばれていた大柄な騎
士だ。

「アウニの森ですよー」

ラクウイルが絶妙な頃合いで、ツェイルやナサニエルが驚いてい
るこの場所について答えた。

次いでサリヴァンも、

「さすがにふたりも運ぶと、疲れるな……」

そう言いながら、なぜか疲れていた。

「あ、あの、サリヴァンさま………いつたい、なにが、どうなって」

「はい、おれの天恵です」

「ラクウィルさま？」

「はい。召喚はサリヴァン限定で、座標を設定したのち空間移動することができるとですよー」

にこにこ笑ったラクウィルが、その説明をしてくれる。

「ただし、ふつうはおれがサリヴァンのところに転送されるので、
負荷はおれにくるんですけど、今回はサリヴァンを転送させたので、
サリヴァンに負荷がかかったんですよ」

「……これも、天恵なのですか？」

「三つめの無属性天恵です。言い方を変えると、古の恩寵、サリヴァンの恩寵と同系種のもですねえ」

「恩寵……」

「だからおれに《デイバイン天地の騎士》なんて称号があるわけですが」

「でい………デイバインっ？」

「はいー」

あはははは、と笑うラクウィルには、その緊張感のなさからか、まったく威厳が感じられない。

《天地の騎士》というものがどんなものであるか、ラクウィルはわかっているのだろうかとツェイルは顔を引き攣らせる。まさかラクウィルがその称号を継承しているとは思わなかったが、そういえばツェイルはラクウィルの名を最後まで聞いたことがなかった。

「あ、あの、ラクウィルさま、お名前は……」

「ほ？ ああ、そういえばラクウィルってしか名乗ってませんでしたね」

「はい」

「ラクウィル・デイバイン・ダンガードって言います」

どうしてこの人は侍従長なのだろう。

なぜもっと早くに、気づかなかったのだろう。

《デイバイン天地の騎士》の称号を継承した者は、血に拘らずデイバインという銘を引き継ぐ。この世界にある三大国にその力を認められ、世界共通にして三大国に一人ずつ存在する、最強の騎士だ。そして、《天地の騎士》は必ず皇帝のそばにいる。皇帝ひとりにつき、ひとりの《天地の騎士》がいるものだ。

貴族ならば知っている常識に、ツェイルはひどく落ち込んだ。

「あれ？ なんで凹んでるんですか、姫」

「申し訳ありません……今の今まで、気づきませんでした……」

ラクウィルの能天気な性格が邪魔をしていた、と言ってしまうえばそれまでだが、どうりで騎士っぱいはずだ、とも思う。

「おれ、名乗りませんでしたからねえ。説明が面倒だったので」

「説明もなにも……貴族の端くれならば、知っていなければならぬことです」

「それでもないですよ？」

ねえサリヴァン、とラクウィルは疲れているサリヴァンに賛同を求める。いくらか回復したらしいサリヴァンは「まあな」と答えた。

「ラクは、特殊だから」

「……特殊、ですか」

どの辺が、とラクウィルに視線を戻すと、にこりと微笑まれる。
この辺だろうか。

「まあおれのこととはどうでもいいですから、先を急ぎましょうよ。
なんのためにここで足を止めていたのか、意味がなくなっちゃいま
すからね」

そういえばここは、アウニの森だという。

足を踏み入れたことがない土地なので、ここがアウニの森のどの
辺りなのかはわからないが、見渡す限り木々が生い茂り、まったく
地理の予測が立たない。

「ナナ、着替えられましたか？」

「ナサニエルだっ。というか、ちょっと待て。鎧をまだつけてない」

「仕方ないですねえ。手伝ってあげますよ」

「変人の手など要らん！」

「ラクウィルですつてえ。ナナちゃん、不器用なんだから手伝いは
素直に受けなさいよ」

「きいもおいいーっ！ 近寄るな、変人が！」

なぜかナサニエルに激しく嫌われているラクウィルだが、本人は
至って気にした様子もない。

「仕方ないですねえ……ルーフェさん、手伝ってあげてくれますか？」

拒絶が激しいので、精霊を出してナサニエルの着替えを手伝って
やっていた。

そもそも、なぜナサニエルは着替え途中なのか。
疑問である。

「それはですねえ、ナナが女のところに」

「違うっ！ 夜番の交代時間だったんだ！」

ツェイルの心情を上手く読み取って説明をしようとしたラクウィルを遮り、着替え終えてからナサニエルは全力で否定すると「ツェイルさまっ」と駆け寄ってきて、ツェイルの前に膝をついて頭を下げた。

「変人の言葉など、ぜえったいに、聞かないように。奴の言動は信ずるに値しません」

「え……いえ、あの」

それは知っている、ような気がする。

「それから、サリヴァンさま」

「ん？」

「ご無理をなさいませんように。変人の天恵は、サリヴァンさまに大きな負荷をかけると聞き及んでいます。わたしを連れて来てくださったことには感謝いたしますが、今後はこのような無茶はなさらないでください。どんな急ぎであれ、ご自身が飛ぶなどということには控え、われわれ騎士を呼んでくださいますよう、お願い申し上げます」

「痛い言葉だな……」

「……賭けの約束、忘れていませんから」

「げ……」

忠実な騎士は、まるでサリヴァンの弱みでも握っているかのよう

にその行動を牽制した。

「ルカがナナを連れて行けって、言ったんだがな……」

「ナサニエルです」

「仕方ない……約束は約束だ。ラクは前を、ナナは後ろを任せる」

「ナサニエルです」

「ツエイ、ナナのことは空気と思え。むしろ空気だ」

「ナサニエルですっ」

「うるさい、ナナ」

「なっ……ナサニエルですってばあ……」

大柄な身体が、小さく萎れた。

ちよつと面白かった。

「元気だしなよ、ナナちゃん」

「うるさい、変人！」

「ほら行くよー、ナナちゃん」

「ナサニエルだ！」

どうしても「ナナ」と呼ばれたくないらしいナサニエルに、ふつと笑いが込み上げるのも仕方ない。

こらえていたら、素直に笑えとサリヴァンに言われた。

アウニの森、と呼ばれる中を、奥に進んでいるのか手前に進んでいるのか。小道をただ進んでいるだけではその感覚を掴めない。樹海のようにだ。

「ここはおれの遊び場だった」
「遊び場？」

「ああ。ラクを拾ったのもアウニの森だ。十歳くらいだったな」

九歳でしたよー、とラクウィルの補足が入る。

「ん？ あれ、おまえ、いくつだ？」

「おれですか？ サリヴァンの一つ歳上ですよー」

「……いつのまにおれより歳上になった」

「そこはまあ、書類の関係上？」

「はあ？」

「ナナはまだ二十一歳ですもんねー？」

なぜそこでわたしがっ、と後ろでナサニエルが怒鳴る。怒鳴られてもやはりラクウィルは気にしない。

「術師団に入るには、歳が足らなかつたんですよ」

「そうだったか？」

「最低でも十二歳、でしたから」

「……ああ、それだと無理だな」
「そうです。なので、歳上になりました」

ふたりのやり取りは意味がわからず、首を傾げると、サリヴァンが補足してくれる。

「時間の感覚がわからないんだよ、おれは」
「え？」

「歳も、数えたことがない。今はルカが数えているからわかるが」
「……ラクウィルさまも？」

はい、とラクウィルは前を歩きながら振り向く。

「おれ、平民出っつて、言いましたでしょ？ しかも流浪の民だったので、生まれた月日なんて知らなかったんですよ。たぶんサリヴァンと同じくらいかなあ、ということ、そういう年齢になったんです」

それなら誕生日はどうなるのだろう。

「サリヴァンさま、誕生日は……」
「ん？ んー……ルカの話だと、年明けの冬終わり頃、だったな」

もしかして、祝ってもらったことがないのだろうか。そんな寂しいことが、あるのだろうか。

「ら……ラクウィルさまは？」
「おれですか？ ルカイアが、あなたは夏生まれでしょうねって言うてましたから、たぶんそのあたりが書類に書かれているかと」

こちら知らないのかと、ツェイルは驚いた。

「ツェイは？」

「先月の始めでした」

「なんだ、終わっているのか……なら、来年は盛大に祝おう」

「さ……サリヴァンさまも！ ラクウィルさまも！」

「祝ってくれるのか？」

もちろん、とツェイルは大きく頷く。

「よかったなあ、ラク。ツェイが祝ってくれるそうだ」

「そりゃ楽しみですねえ」

誕生日を祝う、ということがどういうものか、よくわかっていないようなふたりだったが、ツェイルはサリヴァンやラクウィルが生まれてきてくれたその日を感じようとして、硬く心に決めた。

「ところで……どこに向かわれているのですか？」

ふと、今が夜更けであることを思い出して、ツェイルは周りを見渡した。先ほどから景色が変わっていないように思うのは、錯覚だろうか。

「アウニの森にある館だから、アウニの館、と呼んでいる。そこに向かっているところだ」

「アウニの館？」

「そろそろ見えてくるはずだが……ああ、そうだ。ツェイ、ここでは精霊を出せない。おそらく天恵も使えない」

己れの精霊は見たことがないので、出ることはない。だが、天恵

を使えないというのは、どういうことだろう。

「おれとラクは、この領域に踏み入れることを許されているから別だが、ツエイはまだ許されていない。だから天恵は使えないと思う。ナナを連れてきたのはそういうことを含めたうえのことだ」

後ろから「ナサニエルです」とまた聞こえたが、それは無視しておいた。

「天恵者ではないから、と？」

そう、とサリヴァンは微笑む。

「ここで最強になれるのは、おれだけだ」

「サリヴァンさま、だけ？」

「アウニの森は、猊下がおれのために張ってくれた結界に囲まれている。だからここはおれの遊び場なんだ」

淡の塔に幽閉されていても、フェンリスがよくアウニの森に連れて来てくれたからな、と教えてくれた。

「結界はおれを護るように作動するから、ラク以外の天恵者を受け入れない。天恵者がここで力を使おうものなら、結界にあてられる仕掛けだ」

「そう、なのですか」

けっこう危険な森、ではないだろうか。

「代わりに、物理的なものには弱くてな。ややこしい結界なんだ」

「わたしにはよくわかりませんが……サリヴァンさまを護るものな

「のですね？」

「遊ぶための場所だったからな。外に出てからは来ることも少なくなっていたが……」

不意に、サリヴァンの言葉が途中切れ、足が止まる。

前方を見ると、大きな館が迫ってきていた。

「あれが……」

「アウニの館……五年前、建立されたものだ」

「五年前？」

「おれが住むはずだったんだ」

過去形の言葉に、ツェイルは首を傾げる。

「どういう、意味ですか？」

「幽閉先だ」

「え……」

「ここに移動させられるはずだった」

サリヴァンを見上げると、自嘲気味に笑っていた。

「だが、運命や宿命、宿世は皮肉でな……」

サリヴァンの視線が、塔の入り口であろう大きな門の、ある一点に絞られる。ツェイルもそちらを凝視して、それを見つけた。

明りの中に、一台の車がある。

「……あれは」

車の周りには、数人の人影がある。よくよく見ると車には紋章が

あつて、ナルゼツタ侯爵家の家紋だとすぐにわかった。

「わざわざこちらで回収せずとも、城に送ってくださればよいものを……」

サリヴァンが、ため息をつきながらそう言った。

行くぞ、とツェイルの手を引いて歩を再開させ、門前の人だかりへと足を進める。少しずつ近づくとつれ、人だかりが騎士団の人たちであることに気づいた。

「夫人は、元皇妹殿下だ」

「皇妹……では、サリヴァンさまの」

「叔母上、だ」

身内だったらしい。では、ツェイルを拉致したあの女性は、サリヴァンにとって従妹になるのではないだろうか。

「悪いが、おれは夫人を真に叔母と思ったことはない。私有地の森や夜会で幾度か見かけただけで、言葉を交わしたことは一度もないからな。そもそも、おれを嫌っていた」

「嫌って……？」

この人に惹かれない人などいるのだろうか、と思っていたツェイルとしては、叔母だという元侯爵夫人の気持ちが理解できない。

「当然だ。自分の知っている甥が、五年前にいきなりおれになって、帝位を預かったんだから」

「……どういう、ことですか？」

「夫人はおれが幽閉されていたとは知らない。だからもちろん、お

れが甥であることも知らない。夫人にとっておれは、いきなり現われた帝位篡奪者というわけだ」

「篡奪……サリヴァンさまがそんな」

なんて恐ろしいことを、とツェイルは眉をひそめたが、サリヴァンの自嘲気味な笑みは消えない。

「似たようなものだ」

あつさりと肯定までして、皮肉げな顔で車を一瞥する。

「おれを見知らぬ者からすれば、おれは皇帝国主……だが、皇族を知りながらも真実を知らぬ者からすれば、おれは帝位篡奪者」

しかしな、とサリヴァンはその双眸を細め、ツェイルと繋いだ手に力を込める。少し震えているその手は、古傷を負っているほうの右腕が強張っているせいだと、ツェイルは気づく。

「しよせんおれは、仮初めの皇帝でしかない」

「……かりそめ？」

なにが、と思った。

「ツェイ……おれは、仮初めの皇帝だ」

だからどういうことだ、とツェイルは首を傾げる。

「前に、おまえが言ったことがあっただろう。あなたは本当に皇帝陛下ですか、と」

それは、出逢った頃にツェイルが口にした無礼極まりない言葉であるが、今ではサリヴァンに国主の天恵があることを知っている。その天恵を発動できる根源たる、右腕の刻印を見ている。

「サリヴァンさまは国主であられます」

誰も、サリヴァンのことは否定できない。否、ツェイルがそうさせない。サリヴァンはこのヴァリアス帝国を護れるただひとりの人だ。

「なら、ツェイ……おれが帝位を返上しても、おれのそばにいてくれるか？」

帝位を返上できるのか疑問ではあるが、ツェイルはサリヴァンを好いて、結婚の申し入れを受け入れている。サリヴァンがツェイルにそう想わせたことだ。サリヴァン以外の人であったなら、きっとツェイルは頷かなかっただろう。

だから、再び頷く。

「わたしは、サリヴァンさまのおそばにいます」

サリヴァンが国主だから、決めたのではない。

人間として危うく、儂く、壊れてしまいそうなサリヴァンが、ひとりの人間であり、優しいぬくもりを持つ人だと知ることができたから、ツェイルはサリヴァンを選んだのだ。

サリヴァンが皇帝であろうがなかろうが、篡奪者であろうがなかろうが、それは変わらない。

サリヴァンがサリヴァンであれば、ツェイルはそれでいい。

「……いいのか、ツェイ」

念を押すかのように訊いてくるその様子に、サリヴァンが不安に駆られているのだと、気づく。

「わたしはサリヴァンさまの剣。すべてから、サリヴァンさまをお護りします」

この心は、今やサリヴァンのものだ。

「そうか……ありがとう、ツェイ」

サリヴァンの両腕が、すがりつくようにツェイルの身を覆う。体格はサリヴァンのほうが上であるのに、まるで子どもを抱いているようだ。

ああ、怖かったのか。

ふとそう感じた。

なにが、とは言えない恐怖が、サリヴァンにはあるのだ。深く眠ることができないそれと同じものが、いや常にあるからこそ眠ることができないそれが、ずっとサリヴァンを苛んでいるのかもしれない。

それならば、ツェイルは、ずっとそばにいて支え続けるだけだ。

「サリエー！」

誰かを呼ぶ大きな声が、聞こえたときだった。

「あちゃー……やっぱり見つかったちゃいましたねえ」

その声に、気が抜けるような声を出してラクウィルが反応した。

「見つかりたくは、なかったがな」

サリヴァンがそう言った。

顔を上げてサリヴァンを見ると、なにかを恐れるように幾分か顔を強張らせたサリヴァンが、声のしたほうを見つめていた。ツェイルを抱く腕にも、力が増した。

「下がれ狂犬！ 貴様に用はない。そもそも、いつまでサリエのそばにいろつもりだ！」

「そう言いますけど、おれ、サリヴァンの騎士でしてねえ」

「貴様のような狂犬が、未だサリエを護る騎士だと言うか。笑わせる！」

とても大きな声で、ラクウイルを詰りながらも近づいてきたその人影に、ハッと気づいて膝をついたのはナサニエルだ。それにラクウイルも、「ああうるさい」と言いながら、近づいてきた気配に膝をついた。

動かないのはサリヴァンと、その腕の中にいるツェイルだけだ。

誰だろうと振り返って、最初に目に入ったのは、群れを成していた騎士団の人たちが全員、膝について騎士の礼を取っている姿だ。

そして。

「え………？」

その姿の輪郭線はサリヴァンだ。いや、サリヴァンに酷似した輪郭線だ。

「サリエ！　なんだ、その小娘は！」

びくっ、とツェイルは震える。

「相変わらずの女好き……よく姫が女だって気づきましたねえ」

ラクウィルがそうぼやいたので、自分のことを言っているのだとわかった。

「おれの妻ですよ、兄上」

え、とツェイルは目を丸くする。あからさまな妻という単語も赤面ものだが、それよりも、兄上という単語に驚きを隠せない。

「とうか、兄上……寝間着のままいらっしやなくても」

「……………、うわ！」

「ああ、気づいておられなかったのですね」

「き、着替えてくる！　そこを動くなよ、サリエ！」

「いえ、状況はもうだいたい把握しましたので、大老にお逢いしたら帰ります。もともと大老に逢うために参りましたので」

「爺にはつき合つのにわたしにはつき合えんと言つか！」

「夜更けですし」

「ナサニエル！　サリエを捕まえて、館の客間に放り込め！」

後ろからナサニエルの「え、はっ、御意っ」という焦った声が聞こえたあと、サリヴァン似のその人は踵を返して走り去った。

いったいなんの嵐だ、と思ったのは、当然だがツェイルだけだ。

「サリヴァンさま……あのお方は」
「兄だ」

やはり兄上という単語は聞き違いではないようだ。

「とりあえず……ナナ」
「うっ」

サリヴァンが顔だけ振り向かせて、与えられた命令に従うべく近づいてきていたナサニエルに微笑みかける。

「ツェイに触るなよ？」

サリヴァンの笑みになにを感じたのか、ナサニエルはそろそろと身を引くと、ビシツと姿勢を正した。

「塔へご案内いたします、サリエ・ヴァラディンさま！」
「サリヴァンだ。その長つたらしい名で呼ぶな」
「はっ、サリヴァンさま！」

嵐は、まだ続けているのだろうか。

そう思いながら、とにかくサリヴァンの説明を待とうと、ツェイは決めた。

42 : 痛みを知らないから。3

サリヴァン、というのが愛称であろうことは、ツェイルもわかっていたつもりだ。

この国、ヴァリアス帝国皇帝の名が、サライ・ヴァデーダ・ヴァリアスであると、貴族であるならば知っていることをツェイルも知識として持っているからだ。

だが、サリヴァンの御名は、皇帝の御名と一致しない。

曰く、

「おれは仮初めの皇帝だ」

曰く、

「兄上に頼まれて、玉座を預かっている」

サリヴァンは、流行り病に倒れた兄サライの身代わりとなって、皇帝の玉座にいるらしい。

そんなことができたのは、サリヴァンとサライが双子のように似ており、かつサリヴァンの存在を知っているのが二大卿四公の上位貴族とルカイア、そしてツアインだけという状況があったことだという。

では、国主という天恵はなんなのか。

曰く、

「皇帝と国主は、別だ。今のヴァリアス帝国はな」

曰く、

「兄上の左腕には、皇帝の刻印がある」

サリヴァンの右腕にある真つ二つにされた花の刻印、それが国主の刻印であり、サライの左腕にあるという刻印もサリヴァンのそれと似たものらしい。

先帝ヴェナートには皇帝の刻印がなく、また国主の刻印もなかった。

本来、皇帝国主というものはひとりであるのだが、先帝ヴェナートがその嫉妬と羨望から刻印を持っていた実弟を殺め即位していたため、先帝ヴェナートの子であるサリヴァンとサライの両名には、刻印が分かれて出てしまったという。

それらの説明を、ツェイルは案内された館の客間、贅からはほど遠い質素な、けれどもだいたい広い部屋の長椅子に座って聞いていた。「帝国に皇はふたりも要らない。だから父は、おれを殺せと命じた。それに反対し、どうにか幽閉という形に治めたのが、先代メルエイラ侯モルティエ……ツェイ、おまえの父だ」

ツェイルの隣に腰かけたサリヴァンから、そんな衝撃的な事実を教えられる。

「父、が……？」

「メルエイラ家が没落することになったのは、モルティエがおれを庇ったせいだ。二大卿四公がモルティエの意見に賛同してくれたも

の、メルエイラ家はモルティエのその行動によって父の反感を買い、爵位を落とされた。それだけでなく、どうやら父は取り潰そうとまでしたらしい」

メルエイラ家の没落が、サリヴァンを護るための父モルティエの行動だったとは、予想外だ。もともと生粋の貴族ではなく、その力で成り上がった貴族であるから、きつと適当な理由で爵位が落とされたのだろうと、そう考えていたのだ。

「ツアインがおれのことを知っているのも、モルティエがおれと繋がっていたからだ。アウニの森に来たとき、いつもモルティエに逢っていたからな」

「そう……だったの、ですか」

「だから、ルカがおまえを連れて来たとき、正直焦った。ツアインだけでなく、娘のツェイルまでおれと関わらせる気が、とな。おれのこと、またモルティエに迷惑をかけるのかと」

そんなことはない、とツェイルは首を左右に振った。

「……父は、サリヴァンさまのことを、迷惑などと思わなかったでしょう。メルエイラ家は皇の剣と謳われていた時代もあります、しょせんは人殺しの一族……誰かの命を奪い、生き永らえた一族です。でも、だからといって、好きで命を奪っているわけではありません。護りたいものがあるから、命をかけて護っているだけです。だから父は、サリヴァンさまを護りたいと思ったのでしょうか。そこにある新しい命を、帝国の礎とされるだろうお方を」

ツェイルは迷いなく言った。ツェイルが護りたいと思った人を、父もまた護りたいと思ってくれたのだと、そう思うと嬉しくなる。

「もし……もしメルティエの死が、おれを快く思わない連中の仕業だとしたら、おまえはどうする」

「どうもしません。わたしは、父の選択が間違いではないと、思っています」

両親の死が事故ではなかったとしても、父は護りたいものを護った。そうしてツェイルやツアインに、託してくれた。

これほど誇らしいことはない。

「サリエを護ってくれたメルエイラ候メルティエには、わたしからも礼を言いたい」

ふと、そんな声がツェイルとサリヴァンの間に割って入った。

「メルエイラ家の娘、ツェイルだな。わたしはサライ・ヴァディーダ・ヴァリアス。そこにいる弟、サリエ・ヴァラディン・ヴァリアスの兄だ」

先ほどは寝間着であったが、きつちりと着替えてきたその人は、立ち姿だけだとやはりサリヴァンに似ていた。髪の色も、瞳の色も、その顔だちも輪郭線も、どこを見てもサリヴァンとは血縁にあると証明している。

ああ、本当にサリヴァンとこの人は、兄弟なのだ。

違うところといえば、ツェイルがサリヴァンに初めて逢ったときから感じている危うさや儚さが、その人からはまったく感じられないところだろうか。

「兄上、おれはヴァリアスを名乗っていませんよ。レイル・ヴァルハラです」

「ダヴィド大老におまえをくれてやった覚えはない」

「ヴァリアスを名乗ったことは一度もありませんが」

「おまえは、わたしの、弟だ」

「重ねて言わなくても……」

「弟だ」

ふん、と胸を反らせてサライは言う。流行り病に臥せっていたということだったが、今では完治しており、病の気配を全く感じさせないほどに威風堂々としている。

「……だ、そうだから、おれはあの人の弟なんだよ」

はあ、とため息をつきながらサリヴァンは言った。

なんとというか、サライのノリは、ツアインに似ているかもしれない。求婚されていないだけ、まだサライのほうがまともではあるだろうけれども。

「もう一度言っておくが、おれはサリエ・ヴァラディン・レイル・ヴァルハラで、ヴァルハラ公爵だ。後見はダヴィレイド卿エインズレイ。ダヴィド大老と呼ばれている二大卿のひとりだ。夜会にいたが、まあ気づかなかっただろう。気配を断つのが上手い老人だからな。そういうことで、ヴァリアスは名乗ってない」

「だから、おまえはおれの弟だと」

「ええ、ですから」

ツェイルへの説明途中でサライが口を挟んできたので、サリヴァンはそれを牽制しながら口を開く。

「あなたがおれを弟だと、そうおっしゃるのでおれはあなたを兄上と呼ばせていただいています。ですが、よく五年前にぼつと現れた

おれを弟と呼び、認め、あまつさえ帝位を預からせるなどという考えに至ったのか、とも思いません」

サライは不愉快そうに、ムツとした表情で黙り込んだ。

「おれは外に出られたので、まあいいか、という程度で帝位を預かっています、兄上はそう思ってはおられないでしょう。お身体の具合がよくなったのなら、そろそろ帝位に戻られたらいかがですか」
「……わたしが帝位に戻ったら、おまえは帝国を去るだろう」
「さあ、どうでしょうね」

にこ、と笑って、サリヴァンはサライの言葉を流した。

「わたしは、おまえの存在をきちんと公にしたい。閉じ込められていた時間の分を、取り戻したい。皆に堂々と、サリエはわが弟で国主であると公言したい」

「必要ありませんよ」

「このままでよいわけがない！」

サライは声を張り上げ、大きく一歩踏み出した。

「おまえは、わたしの弟なのだ！」

「ですから、それを公言する必要ありません」

「なぜだ！」

「必要ないから、ですよ」

「わたしがそうしたいのだ！」

ですから、とサリヴァンは再び言うと、右手を胸の高さまで持ち上げ、拳を握った。その仕草に、ツェイルは「あ」と声を出す。

「この天恵は否定できません」

そう言いながら、サリヴァンはぼんと一輪のルーフを咲かせた。それを見たサライが、大きく目を見開いて驚く。

「さ……サリエ、それは……」

「国主の天恵ですよ。これを認めてしまった以上、おれはもう帝国から離れられません」

はあ、とため息をつき、サリヴァンは咲かせたルーフをツエイルの髪に差して飾った。

「本当は、ツエイと結婚したらさっさと帝位を返上して、世界を渡り歩こうかと思っただがな……旅行はできても、この天恵があつてはそれも難しい」

失敗した、と言いながら笑うその顔は、ツエイルがこれを見て喜ぶならそれもいいと言ったときのように、穏やかなものだった。

「サリヴァンさま……」

「どこか遠くへ行くことは叶わなくなったが、皇都の外れに大きな家を建てて、そこでゆっくりのんびり暮らそう。な、ツエイ」

それはとても魅力的なもので、ツエイルは迷わず頷いた。

「サリエ……」

危うく存在を忘れそうになったところで、サライがサリヴァンを呼ぶ。

と、

「サリエー！」
「うわっ」

どん、とサライがサリヴァンに突進し、ぎゅうぎゅうにしがみついていた。

「男に抱きつかれる趣味はありません、離れてください！」
「サリエ、おまえ…… やつと、やつと認めてくれたのかっ」

「認めるもなにも、おれの右腕にある刻印は見ているでしょう。い
いから、離れてくださいっ」

いやだ、とサリヴァンは全身の力でサライを拒絶するが、感極ま
っているのかサライは離れず、むしろサリヴァンを潰す勢いでしが
みついているうえ、その目に涙まで滲ませていた。

「おれはいやですよー？」

ふと、そばで控えていたラクウィルが、サリヴァンからサライを
引き剥がしながら言った。

「た、助かった、ラク」
「いいええ。だあっておれ、サライ嫌いだもん」

さらりと、ラクウィルは言ったのけた。しかも、微笑みながらだ。

「変人、陛下に失礼だぞ！」
「ナナちゃんは黙ってようねえ」

スツと指で宙を斬ったラクウィルは、サライを護らんとしたナサ

二エルの目の前に、火精霊マチカと土精霊ルーフェを出し、牽制した。

「貴様とは相性が悪いと、わたしも思っていたところだ」

サリヴァンから引き剥がされたサライが、忌々しげに言う。

「貴様がサリエの《天地の騎士》だなど、わたしは認めん」

「いいですよ、べつに認めてくれなくて。おれの称号はサリヴァンに在るもので、あなたのために在るものじゃないですからね」

「返上しろ。サリエにはもっと相応しい騎士がいる」

「あなたに言われたくないですよ。サリヴァンのことを十八年も無視してくれた人になんか」

どん、と空気が冷えたように感じた。ぴりぴりと、静電気が起きているように感じた。

それらがラクウイルから発せられているものと、どうして気づけただろう。

「……サリエが、幽閉されていると、知らなかったのはわたしの無知だが……しかし、サリエはわたしの弟だ！」

「見た目はね」

「同じ刻印をわたしも持っている！」

「それがなんです？」

ラクウイルは、それまでツェイルに見せたことのない冷やかな目を、サライに向けていた。

「おれは、サリヴァンを外に出せるなら、それでよかったです。だから、あなたが流行り病に倒れて、ルカイアがその話を持ち込ん

できたときは、好機だと思いましたよ。これでサリヴァンを自由に
してやれるってね」

それがどうだ、とラクウィルはサライを睨んだ。

「ナルゼツタの好きにさせたのには、なんの意味があつたんです？
わざと泳がせてましたよね？ サリヴァンを想っているなら、な
んでナルゼツタを早々に粛清しなかつたんですか。今さら粛清して、
それになんの意味があるんです。こうなる前に、あなたは動かなき
やならなかつたでしょう」

ラクウィルの怒りが、その言葉に瞠目しているサライに突き刺さ
る。

ふだん笑っていることが多いラクウィルのその言動には、ツエイ
ルも思わずゾツとした。

「待て、ラク。おまえの言い方だと、夫人を殺したのは兄上だとい
うように聞こえる」

「サライですよ、サリヴァン」

「……なに？」

「サライが、護衛に自分の騎士を紛れ込ませて、夫人を殺させたん
ですよ」

それはおそらく確定ではあるうが、あくまでも推測だと、さすが
のツェイルも聞き取ることができる。

「おれに《天地の騎士》を返上しろと言うなら、喜んでそうさせて
いただきますよ。本来ならあなたの騎士が継承すべき称号ですから
ね」

くい、と視線を上げたラクウィルは、部屋の扉の前で待機しているひとりの騎士を見据えていた。ラクウィルの言葉とその視線で、その騎士がサライの直属騎士であることが窺える。

「ラク、おまえはおれの《天地の騎士》だ。兄上ではない」

「ええ、わかってますよ。でも、サライが返せって言うんですもん」

「兄上。ラクの称号は、おれが与えたものです。ラクにも、兄上の騎士が持つ恩寵と同じものがあるのですから」

サラヴァンは静かに騎士を見つめ、そうしてサライへと視線を向ける。

「……サリエ、考え直せ。そやつは狂っている」

「でしょうね。狂わせたのは、おれですから」

「サリエっ」

「笑って人を殺め、楽しみに人を斬る……それがラクです。おれを護るために、ラクが身につけた処世術です」

「化けものになり下がってはもう人間ではないっ」

「それが？ ラクが人間ではないなら、おれはそれ以下ですよ。生きているのか死んでいるのか、それすら理解していなかったのですから」

そこだけ空気が重くなったように感じられ、ツェイルは思わずサラヴァンに寄り添った。

「……、ツェイ？」

どうした、とサラヴァンはツェイルを気遣ってくれる。その優しさに、ツェイルはしがみついた。

サリヴァンは怒っている。

ラクウィルという親友を侮辱され、否定されたことに、わが身を忘れるほどに怒っている。

強張っている身体がなによりの証拠で、そしてずっと小刻みに震えている右腕が、サリヴァンが感じているのだから恐怖を伝えてくれた。

たぶんきつと、間違いでなければ、サリヴァンはサライを恐れている。

兄と呼び、親しげに話し、笑顔や感情を露わにしても、それは嘘で塗り固められたものであると、ツェイルは感じた。

なぜサライを恐れるのか、それはまだわからないけれども。

「……ねえ、サライ」

ラクウィルが、少しの沈黙を破って、口を開く。

「父親に剣を向けられると、どんな気持ちになると思えますか」

「……剣？」

「サリヴァンは父親であるはずの先帝に、剣を向けられています。あまつさえ、斬りかかられてもいます。あなたなら、どんな気持ちになりますか」

空気が震えた。

ハツと息を呑む微かな音が、ツェイルの耳にも届く。

「はなから信じちゃいない父親でも、血は否定できないでしょう。それでも、子どもの心は傷つくものでね……外に出たときのサリヴァン、なんて言ったと思います？」

「……五年前の、ことか」

「そう。一步踏み出した、その瞬間ですよ」

サライは沈黙した。それはおそらく、サライには予想もつかないことなのだろう。

ツエイルは、ふと思った。

「死んでもいいのか……」

思わず口にしたことに、驚いたのはサライだ。ラクウィルは視線を僅かに落とし、ツエイルをじつと見たあと、にっこりと微笑んだ。

「さすが姫、よくおわかりになりましたね」

やはり、と思う。

サリヴァンは淡の塔という離宮で、ただ死を待つだけだったと言っていた。それを聞いていたから、気づいたことだった。

ラクウィルは視線をサライに戻した。

「おれは、自由になれますよ、と誘っただけです。そのときの言葉ですよ。死んでもいいのかって」

サライは瞠目したまま、身じろぎ一つせず、衝撃を受けていた。

「あなたに、この痛みがわかりますか」

ラクウィルは重ねて言う。

「おれはサリヴァンに、厄介に思っていた天恵の使い方を教わって、術師団にまで入れてもらって、生きるということを教わりました。

それなのに、サリヴァン自身は、外に出るそのときも、生きてなかったんですよ……あなたに、この痛みがわかりますかっ」

ラクウィルの声が震えた。

ツェイルは、ラクウィルの言葉がとても痛くて、悲しくて、唇を噛んで涙に耐える。

「サリヴァンにとっての自由が、死ぬことだなんて、どういうことですかっ」

ラクウィルの叫びを、このとき初めて聞いた。いつも笑っているから、その腹になにを抱えているかはわからなかったが、さまざまなもののでうめつくされていたようだ。

「ラク……もういい」

矢継ぎ早に怒鳴りそうだったラクウィルを、サリヴァンが苦笑しながら制止する。その顔は困ったように笑っていて、表情に嘘はなかった。

「ね、兄上……ラクを狂わせたのは、おれです。だから責任を取らなければなりません。国主の天恵も認めてしまったことですし、とりあえずシエリアン公国のことをすつきりと片づけたら、帝位は兄上にお返ししますよ」

「さ……サリエっ」

「頃合いを計りあぐねていたので、今までとくには言いませんでしたが……おれが帝位を預かっていられるのも、そろそろ限界でしょうしね」

それに、とサリヴァンは続ける。

「護りたいものができました」

朗らかに、サリヴァンは笑んだ。

「国と、民と、おれのために狂ってくれた友と……ツエイ」

ふわりとツェイル肩に、サリヴァンの腕が回った。きゅっと引き寄せられると、頬がサリヴァンの胸に当たる。

「おれもひとりの人間で、男でしたよ、兄上」

「……サリエ」

「まあ、兄上のような振る舞いはできませんがね」

言い終わると、サリヴァンはツェイルを促して立ち上がった。ずっと立ちっぱなしだったサライは、当然だがツェイルより視線が高い。そしてサリヴァンよりも背が高く、並ぶとサリヴァンの細さが際立った。剣を握れる者と、握れない者、そういう差のように、ツェイルには感じられてしまう。

「さっきのこと、大老にお話しするつもりだったのですが、兄上にお話ししたことですし、兄上のほうから大老にお伝えください。おれは城に戻って、ルカに話します。まあルカのことですから、おれがそろそろ限界だということを理解しているとは、思いますけどね」

行こうか、とサリヴァンに促される。来た道を、同じように手を繋いで、戻るために歩き出した。

サライは、動かない。

「……サリヴァンさま」

「ん？」

「先ほどの、帝位返上は……」

「いつでもよかった。どうせ国主であることに変わりはない。どこで生活をするか、ということだけ気にしていればよかったからな。城で帝位を預かっていたのは、猊下がいたからだ。城からなら猊下のところに近いから」

それだけだ、とサリヴァンは笑う。嘘のない笑みに、ツェイルは漸くホツと息をついた。

「サリエっ！」

館を出て、来たときと同じ道へ戻ろうとしたとき、追いかけてきたサライがサリヴァン呼びとめた。

「国を……わたしをつ、恨んでいるかつ」

足を止めたサリヴァンは、僅かばかり振り向いた。

「なぜ、国や兄上を、恨む必要があるのですか？」

「国はおまえを縛る……そしてわたしは、おまえが幽閉されているとも知らず、のうのうと生きていた……っ」

「兄上は知らなかったことです。誰がそれを責められますか」「無知は罪だっ」

その言葉に、サリヴァンはただふっと、優しく笑んだ。

「……それをご存知なら、兄上はだいじょうぶですよ」

「サリエ……」

「勘違いはいけないので言っておきますが、おれは兄上が嫌いではありませんよ。ただ、ずっとひとり身内なんてラク以外にないなかつたもので、家族というものがよくわかりません。せつかく出逢えたのに、あなたは病気でアウニの館に引き籠もるし、政務は忙しいし……これからだとは、思いますよ」

そついうことだから、とさつさと踵を返す。

「サリエ！」

呼ばれたが、今度は振り向かず歩き続けた。

「おまえはわたしの弟だ！」

聞こえた言葉に、サリヴァンは答えず、クスツと笑っただけだった。

42 : 痛みを知らないから。3 (後書き)

アウニの森にあります塔を、「アウニの塔」から「アウニの館」に修正いたしました。

本文に表記間違いがあるかもしれませんが、アウニにある建物は「アウニの館」のみです。

楽しんでいただけたら幸いです。

43 : 痛みを知らないから。4 (前書き)

サリヴァン視点です。

43 : 痛みを知らないから。4

ラクウィルが珍しくわれを忘れて切れた。
サリヴァンにとってそれは久しく見ていないものだった。

「だいじょうぶか、ラク」

館からの帰り道、サリヴァンはずっと黙っているラクに声をかけた。反応しないところを見ると、やはりそうか、と思えてしまう。

「おまえのせいではないぞ、ラク」

言つと、ラクウィルの足がぴたりと止まった。それに合わせて、サリヴァンも立ち止まる。

「……サリヴァン」

「ん？」

呼ばれたので返事をすれば、ラクウィルはくるりと振り返ってサリヴァンを見つめる。無表情だったが、しばらく互いに様子を見ていると、くしゃつとその顔が柔らかく崩れた。

「おれ、やっぱりサライ嫌い。痛みを知らないから」

笑いながら言うことが、と思ったが、自分でサライに言ったこと

を思い出して、口を噤む。

ラクウィルを狂わせたのはほかならぬサリヴァンだ。

「……好きにすればいい。おれはべつに兄上が嫌いなわけでも、好きにないけないからな」

「じゃあ、嫌ってください。おれが嫌いなので」

「はつきりそう言ったら、ルカに睨まれるだろうが」

「おれ、ルカイアもあんまり好きじゃないんで、べつにいいですよ？」

そういう問題ではないのだが、ラクウィルの捻くれ方は一般的な考えでは理解できないものなので、好きに言わせておく。

「ねえ姫、ルカイアのこと、好きですか？」

「え、わ、わたし？」

「ルカイアって、ころころ表情変えて、相手を惑わすでしょ？ほんとに腹黒くて陰険なくせに、そんなことないですよー的な空気出すの上手くて」

「……よく見ていらっしやるんですね」

「あんまり好きじゃないから、なんでかなあと思って、観察してみた結果です」

「……素晴らしい観察眼です」

「ありがとうございます。って、そうじゃなくてですね」

ラクウィルは、ツェイルを巻き込んで矢継ぎ早に質問し、返され、答える。

出逢った当初の頃は喋ることが得意ではなかった様子のツェイルも、ラクウィルやりりとの交流があつてか、このところはよく喋る

ようになった。常から表情があまり変わらなかったが、最近ではふとした瞬間に笑顔を見せるようになって、まだぎこちなくはあるものの、感情が表に出るようになってきている。

ツェイルには嬉しい変化が見られるが、さてラクウィルはどうかと考えてみると、昔からなに一つ変わっていないように感じられた。

「ねえサリヴァン、最初に言ったのサリヴァンでしたよね？」

「ん……なんだ？」

いきなり話しかけられて、サリヴァンはもの想いに耽っていた思考回路を慌てて現実に戻す。

「ナナちゃんことですよ」

「は？」

「いったいいつそんな話になったのだ、と思う。」

「ナサニエルさんを、ナナと呼び始めたのがサリヴァンさまだと」

ツェイルまでラクウィルの話にしっかりとついてきていた。ちょっと驚きだ。

「……おれが、ナナを？」

「なんだって、と訊き返す。」

「ナナと、呼び始めたのが、サリヴァンさまだと」

「ああ……そうかもしれないな」

いつのまにナサニエルの話になったのかは置いておくとして、サ

リヴァンがナサニエルを「ナナ」と呼び始めた張本人であることは、否定しない。

「サリエ殿下、今さらですがお訊ねしたいです」

「……ナナ」

「ナサニエルです」

「おれはサリヴァンだ、ナナ」

「ナサニエルです、サリヴァンさま」

なんでこんな話を、と思うが、理由を知りたがっていきそうなツエイルの眼差しに負けて、サリヴァンは己れの汚点ともいっべきそれを口にする。

「発音できないんだよ、ナナとしか」

「ナサニエルで……、はい？」

サリヴァンは、ナサニエル、と発音することができない。できなかったから、ナナと呼んでいる。

「どういう意味ですか、サリヴァンさま」

「そのままの意味だ。……ラク、笑うな」

理由を知っているラクウィルが笑いをこらえていたので睨みつけておいて、サリヴァンはふんと息をつく。

「……サリヴァンさま」

「ん？」

「ナサニエル、と」

「んん？」

「言ってみてください」

ひく、と顔が引き攣る。

いくらツェイルの頼みでも、それはちょっといやだな、と思う。

「サリヴァンさま」

「う……」

そんな可愛らしい目で見つめられたら、ちょっとくらいいいか、
と思ってしまう。

「……なさにゃある」

言ってみた。

後悔した。

「はい？」

「だからっ、発音できないと言っただらうがっ」

言ってみるんじゃないかと、つくづく思ったがすでに遅い。ツ
ェイルはきょとんとしているし、ナサニエルは愕然としているし、
ラクウイルに至っては「も、もうだめ……っ」と言いながら腹を抱
えて笑っている。

できないことをするものではない。

サリヴァンは止めていた足を、再び前へと動かした。必然的に、
手を繋いでいたツェイルを引っ張ることになる。

「さ、サリヴァンさま、え、待って」

「待たない。ラク、いつまで笑っているつもりだっ」

あっちへよろよろ、こっちへよろよろ、とふらつきながら笑い続けるラクウィルを恨めしく思いながら、愕然としたまま動けないでいるナサニエルにも「行くぞっ」と怒鳴り、サリヴァンは憤慨しながらアウニの森を突っ切った。

「ね、姫、おかしいでしょ？　なんでカナナちゃんのこと、呼べないんですよ」

「……不思議です」

心の底から不思議です、なんて顔をツェイルにされては、込み上げていた羞恥もどこかへ飛んでしまっ。

「でもね、サリヴァンって、自分の真名も発音できなかったんですよ」

「ラクっ」

余計なことを、と思うが、遅かった。ツェイルはしっかりと聞いていた。

「サリヴァンさま」

いやな予感がした。

「サリエ・ヴァラディン、と」

こんな状況でも、ちゃんと名を呼んでくれるのは嬉しいことだが。

なぜか遊ばれている気がするの、気のせいだろうか。

「……ツエイ」

「言ってみてください」

いつのまにおれで遊ぶようになった、とツエイに訊きたい。

「サリヴァンさま」

ああだから、そんな目でおれを見るな。

そんな目で見つめられると、つい応えなくなるからやめてほしい。

「サリエ・ヴァラディン、だろ」

言ってみて後悔するのに、ツエイの眼差しに負ける自分は今もう駄目だな、とサリヴァンは思う。

「言えるではありませんか」

「昔の話だ。今は発音できる」

さすがに自分の真名は発音できるようになった。

「サリエ・ヴァラディン・レイル・ヴァルハラだと、さっき名乗っただろうが」

「……それもそうでした」

ツエイの目が泳いだ。

やっぱり遊んでいたか、と脱力する。

「……サリヴァンさま」

今度はなにをいう気だ、と小さく息をついたところで、ふと、ツエイルのそれは年相応なことなのではないかと感じた。

「ツエイ、と」

「ん？」

「ツエイ、と………言ってみてください」

なんの遊びの延長戦だ、と思ったが、サリヴァンは素直に「ツエイ」と、そのいとしい音を口にする。

言ったとたん、綻ぶような微笑みを見せられて、サリヴァンは息を呑んだ。

笑うようになったとはいえ、ツエイルの表情はまだぎこちない。そんな中で、その微笑みはいつにも増して柔らかかで、そして自然な優しい笑みだった。

だから、サリヴァンはふっと微笑む。

「おまえの名は、きちんと発音できるぞ」

「はい。ありがとうございます」

きゅっと、繋いだ手のひらに力を込めれば、同じ分だけの強さが返ってくる。

ほんわかと、胸が温かくなった。

じんわりと、胸に響いた。

「……ああ、そうか」

ふと、感じる。

「サリヴァンさま？」

「ん……今まで知らなかったことが多いなと、思って」

たとえば、この手のひらのぬくもり。

たとえば、この暖かでやわらかな気持ち。

たとえば、醜くも艶やかで必死な、心。

そのすべてはツェイルとの出会いを経て、得たものだ。

「ああ……痛いな」

「え？」

きつく手を握ってしまったか、と焦ったツェイルに、サリヴァンは「違う」と首を左右に振る。

「今まで知らなかったことが、痛いなと思って」

「なぜですか？」

「かつこ悪いだろ」

人間というものをいやというほど知っているはずなのに、基本的なこの優しさを、知らなかったただなんて。

けれども。

「まあ、ツェイに出逢えたこの人生が、おれには最高のものだからな……かつこ悪くても、いいか」

ツェイルに出逢えたこの人生、楽しまずしてどうする。

そう思えるから、まあいいか、と納得することができる。

「サリヴァンさま、かっこいいのに……」

ぼそつと、ツェイルが小さな声で呟いた。

「……え？」

聞き違いか、と思ったが。

「……、あ」

ぼつとツェイルは顔を真っ赤にした。

どうやらうっかり声に出してしまったらしい。

「……ツェイ」

「わ……わたし、今、なにを」

「おれは、かっこいいか？」

ぎくん、と明らかにびくついて動揺ツェイルのそれが、まさにその気持ちを表わしていた。

それがサリヴァンの姿を形容したものなのか、それとも生き方を形容したものなのか、どちらかはわからないものの、ツェイルに「かっこいい」と思われているらしいというのは、気恥しくも嬉しいことである。

「そうか……」

少なからず慕われていることは自覚しているサリヴァンなので、頬を赤らめたまま俯いたツェイルの頭をぐりぐりと撫でると、満面に笑みを浮かべた。

43 : 痛みを知らないから。4 (後書き)

サリヴァンとツェイルの絵を、『みてみん』さまにのせていただいております。

よろしければご覧ください。

眠くありませんか、と訊かれてから、はたとツェイルは眠気を思い出し、見慣れた寢室の寢台を視界に入れたとたんにはったりと倒れ込んだ。サリヴァンやリリの声が聞こえた気もしたが、内容が聞き取れないほどに睡魔が襲ってきていて、いつのまにか意識を手放していた。

ふつと、目が覚めたとき、辺りは暗かった。

だからまだ眠っていてもいいのだと思ってまた瞼を閉じたら、パツと室内が明るくなったので驚く。

「まだ眠っていたのか」

そう言ったのはサリヴァンで。

「え、まさか一食も摂らないで眠り続けているんですか？」

続けて、体調の心配をするラクウィルの声も聞こえた。

ツェイルはもそもそと寢台から起き、ぼんやりとしながらサリヴァンの姿を探し、淡い金色を見つける。

「……おはようございます？」

夜だと思ったのだが、もしかしたら早朝なのかもしれない。そう思って挨拶をしたら、「はは」とサリヴァンが笑った。

「ツエイは、おはよう、だな。今は夜だが」

ああなんだ、やっぱりまだ夜なのか。

「おやすみなさい」

まだ少し眠いので、ぺこりと頭を下げるとツェイルはころんと寝台に転がった。

「ああいや待て寝るな、ツエイ？ ツエイ？」

せつかく寝転がったのに、駆け寄ってきたサリヴァンに抱き起こされた。

「ねむらせてください」

「起きる。どれくらい眠れば気が済むんだ」

「ねむいのです」

「いや、それはわかるがな？ 丸一日も眠れば気も済むだろう」

「……まるいちにち？」

「ああ。だから、今度はおれを眠らせてくれ」

あれから眠ってないんだ、と言ったサリヴァンの顔を、ツェイルはじっと見つめる。

長いことそうしていて、漸く思考が回復した。

「！ ね……っ……眠り過ぎました」

「放っておいたおれも悪いがな」
「いえ、すみません」

ツェイルは慌てて自分の力で起き上がる。

とたん、サリヴァンがツェイルの膝に倒れ込んできた。

「さ……サリヴァンさまっ」

「一時だ。一時だけ、眠らせてくれ」

「ですが……」

ラクウィルに確認を取ろうと思ったその時には、すでにサリヴァンから寝息が聞こえてきた。

不思議とサリヴァンは、ツェイルのそばで眠るとき、いつも寝つきがいい。

ツェイルの腹に顔の側面を押しつけるようにして、両腕を胴に回してしがみついていたサリヴァンをちよっと抱き直しながら、ツェイルはそう思った。

「どうぞ、姫。今ちよっとリリは席を外しているので、おれでごめんなさいね」

ラクウィルに洗顔用の濡れた布を渡されて、ツェイルは礼を言うてから受け取る。

食事の用意をしますね、と言われたが、それほど空腹を感じていなかったのだ、とりあえず軽いものを頼んだ。

「沐浴の用意はしてありますから、サリヴァンが起きてからどうぞ。」

その頃にはリリも戻るでしょうし」

思うが、サリヴァンはツェイルが眠りこけているのを予測し、さらにはリリの不在を知っていて、ツェイルの世話をさせるためにラクウィルを連れてきたのではないだろうか。

「ラクウィルさまは、眠られましたか？」

運ばれてきた軽食をつまみながら、ツェイルはラクウィルに問うた。

「おれはサリヴァンが起きている間の半分くらい眠ってますから、充分に」

「サリヴァンさまが、起きている間？」

「おれはサリヴァンみたいな無理、というか無理ではなく無意識ですが、そういうことができないので」

どつという意味だろう。

首を傾げると、天恵の代償ですよ、と教えてくれた。

「代償？」

「気づくと長椅子や寝台の上にあります。たまに私有地の森にもいますけど」

「……………え？」

「ああ、廊下のだ真ん中において、人だかりを作ったこともありますね。サリヴァンとルカイアが吃驚した顔してました」

「え……………あの？」

「城の屋根にいたときはさすがに自分でも吃驚しましたけど……………ああ、階段の真ん中にいたときも吃驚しましたねえ。身体のうちこちが痛くて、大変でした」

それはつまり、とツェイルは顔を引き攣らせる。

「いきなり眠られてしまう……のですか」

「はい」

にっこりと笑って、ラクウィルは肯定した。

「なので、眠いと思ったことがないんですよ。気づいたときには眠ったあとですから」

「それが、天恵の代償、ですか」

「みたいですなえ」

「……みたい？」

「天恵が三つもあると、どこに負荷がかかっているのか、よくわからないんですよ」

「んー、と顔をしかめながら首を傾げるラクウィルに、つられるように一緒になって首を傾げてみる。

「気づくと眠ったあとなのは、昔からですからねえ。まあ、ちょっと疲れ易い体質なので、それかなあとも思っんですが……おれはともかく、ルカイアはそうだと確信していますね」

ルカイアではないが、それが代償ではなかるうかと、ツェイルも思う。

一般的な法則から外れた天恵者には、それぞれの代償がある。ツェイルのような代償もあれば、本人もよくわからないというラクウィルのようなことも、ないとは限らない。

「そういうわけで、おれは充分に休んでますから、気にしなくていいですよ。それより腹ごなしです。まさか丸一日眠っていらっしやっただなんてね」

そうだった、とツェイルは食事を再開し、食べている合間にラクウィルとちよつとした会話をする。ラクウィルは話し上手だが、また聞き上手でもあった。

外出から戻ってきたリリが混ざり、そのままサリヴァンがきつかり一時間後に目を覚ますまで、ツェイルは会話を楽しんでいた。

「今日を乗り越えればなんとかなる……か」

そう言いながら、まだ眠そうな眼を擦りつつサリヴァンは身体を起こした。

「そんなに忙しいのですか？」

「やることは探すまでもなく、常に山積みになされているからな」

国主だから、とサリヴァンはため息をつく。名残惜しげもなく寝台を離れると、ツェイルに背を向けて服を着直した。

「ツェイ、一度メルエイラ家に戻れ」

その唐突な申し出に、ツェイルは声もなく目を見開いた。

「忙しくはないが、いろいろと面倒が起きそうになっているんだ。

ここは安全だと、そう言えたらいいんだが、メルエイラ家ほどの戦力には乏しくてな。ここにおまえとリリだけ置いておくには忍びない」

サリヴァンにそう言われたことに、ツェイルは思いのほか動揺して、言葉を紡げなかった。

「ツェイルが迎えに来るから、とりあえず夜のうちにメルエイラ家に戻れ。いいな？」

サリヴァンはツェイルのほうを一度も振り返らず、背を向けたまま言つとそのまま寢室を出て行くとする。

ツェイルは慌てた。

「ま……待つて、サリヴァンさまっ」

寢台から降りようとして、足が痺れていることに気づいた。膝を貸していたから、気づかないうちに負荷がかかってしまっていたのだ。

「サリヴァンさまっ」

歩けなくても、動けなくても、それでもツェイルは声を上げてサリヴァンを呼び止めようとしたが、サリヴァンは振り返らなかった。

どういうことが教えてほしい。

なぜいきなり帰れなどと言われなければならないのか、その理由が知りたい。

なのに、サリヴァンは寢室から出て行ってしまった。

「……、ラクウィルさまっ」

サリヴァンに続いて出て行くこととしているラクウィルを呼び止めるが、また彼も「ごめんね」という素ぶりだけを見せると、足早に立ち去ってしまう。

ツェイルは茫然とした。

「……………リリ」

部屋に残ってくれていたリリに、ツェイルは説明を求める。しかし、リリもまた声もなく、首を左右に振るだけだった。

「なにが……………どうなっているんだ」

「わたしからはなにも申し上げることができません。すみません、ツェイルさま」

深々と頭を下げたリリは、ツェイルの前に着替えを置き、無情にも「沐浴しましょう」と、今のツェイルに必要な身支度を促した。

ツアインが本当に迎えに現われたとき、ツェイルは絶句した。

サリヴァンの言葉が嘘であると思いたかったから、そこにツアインが現われても認めることができなかった。

ツアインはそんなツェイルを見てなにを思ったのか、いつものような過激な挨拶はなく、ただにこりと微笑んでツェイルを促すだけだった。

「戻るよ、ツェイル」

そう言ったツアインに差し出された手のひらを、ツェイルは拒絶した。

行かない、戻らない、帰らない、と首を左右に振って拒否したが、苦笑したツアインに手を取られると、半ば強引に部屋を連れ出されてしまう。

「いやだ……兄さま、いやだ」

「言うようになったね、ツェイル」

「帰らない……わたしは、ここに……サリヴァンさまのそばに」

「戻れと言われたらどう。だから僕はここに……さあ、戻るよ」

「いやだ、兄さま……っ」

「ツェイル」

「いやだっ」

「……手荒な真似をされたいの？」

ツェイルの手首をぎっちり掴んだまま立ち止まったツァインは、本当にただ微笑んでいるだけで、その真意を掴ませない。

つまりはそれだけ真剣に言っているということだ。

「ヴィーダヒーデ、しばらくツェイルの中に。ガルデアを抑えてくれるかな」

「な……兄さまっ」

天恵を封じるという手段まで用いようとしたツァインに、ツェイルは息を呑む。

そうして動揺しているうちに、ヴィーダヒーデがツァインから出てきた。

「ごめんね、あたしの可愛いツェイル。許してね」

ヴィーダヒーデは本当に申し訳なさそうに謝ると、天恵を封じられるものと身じろいだツェイルに、するりと入ってくる。

「いやだ、ヒーデっ」

ヴィーダヒーデに裡へ入られると、ツェイルは天恵を使えなくなる。

それだけでなく、もともとツェイルの裡にはヴィーダガルデアという精霊も宿っているからか、ふたりの精霊を宿すことになった身体には想像以上の負荷がかかって、意識を保っていらなくなる。

呆気なくヴィーダヒーデに裡へと入られてしまったツェイルは、とたんに遠のく意識を繋ぎ止めようと必死になるが、全身から力を

吸い取られていくような感覚には勝てなかった。

「ひどい……兄さま……っ」

「仕方ないよ。可愛いツエイルのことだから、僕は殿下のこの命令には逆らえない……それにね、約束なんだよ」

「やく、そく……?」

「僕のツエイルを、殿下が好きになって、僕のツエイルも殿下を好きになってしまったそのときは……僕は一生を殿下に捧げる、とね。そういう約束をしてしまったから、僕はもう二度と、殿下には逆らえない。ごめんね、ツエイル。僕の可愛いツエイル」

本当は信じたくなかったよ、と聞こえた。

ツエイルが殿下を好きになるなんて、あり得ないと思っていたよと、そう聞こえたのを最後に、ツエイルは意識を手放した。

だから。

気づいたときには、馴染み深い部屋の寝台の上に、ツエイルはいた。

あれは夢などではなく、ツアインが迎えに現われたのも本当のことと、抵抗したから手荒な真似をされたのだと、目覚めてすぐに理解できた。

「……ひどい」

茫然と、朝日に溢れた室内を見渡した。

皇城へ連れて行かれたときとやら変わっていないメルエイラ家の自室が、とても懐かしいのと同じにとてもよそよそしく感じる。

ここはもうわたしの部屋じゃない。

そう思ったら、とたんに目がしらが熱くなった。

「……ひどい、サリヴァンさま」

なぜわたしはここにいるのだろう。

どうしてここに、わたしは戻ってきたのだろう。

「サリヴァンさま……っ」

手放さないと、言ってくれたのはサリヴァンだった。

おれと結婚してくれ、と言ってくれたのはサリヴァンだった。

ツェイルに、その夢を与えてくれたのは、サリヴァンだった。

「どうして……っ……どうして」

今になって、急に、サリヴァンがツェイルをメルエイラ家に戻したのか、そう思ったのか、わからない。

サリヴァンに愛されたいと想った。そう自覚したときには、ツェイルはサリヴァンが好きで、いとしくてならなくて。

結婚してくれと言われたとき、どれほどの喜びを感じたことだろう。

今まで逆らったことなどないツアインを相手に、この胸からそれを奪われたくない一心で抵抗してまで護った想い。

それらすべてが、やはりツェイルには傲慢なことだったというのだろうか。

「サリヴァン、さま……っ」

どうして。

どうして。

どうして。

「ひとり、に……しないで」

どこか遠くへ行けたら、ついて来てくれるか、とサリヴァンは訊いてきた。ツェイルはずっとサリヴァンのそばにいるつもりであったから、訊かれたときはとくに返事もしなかった。

だからまさか。

こんなふうに。

「置いて、いかないで」

ひとりぼっちにさせられる、なんて、思わなかった。

ここは、メルエイラ家はもう、ツェイルの居場所ではなくなってしまったのに。

「サリヴァンさま」

どうして、ひとりにするの。

どうして、置いていくの。

どうして、与えるだけ与えておいて、目の前から消えるの。

ツェイルはもうサリヴァンという人を知ってしまった。

サリヴァンというぬくもりを知ってしまった。

サリヴァンという人を、好きになってしまった。

たとえ傲慢なことだったとしても、これは、これだけは、失いたくない想いだ。

なにも知らなかったあの頃には戻れない。

だから、メルエイラ家では生きていけない。

「サリヴァンさまぁ……っ」

あなたのいない世界は、わたしの世界ではなくなった。

ここは、あなたのいない世界。

そんな世界には、いられない。

そんな世界では、生きられない。

ツェイルはわんわんと、朝日に満ち溢れた中で、泣き続けた。

46 : 悲しいといふなら。 3

ツェイルの日常は、単調だ。

起きたら眠るまでの間に、食事を摂り、勉強し、身体を動かす、読書をする。

いつもそつだ。変わることはない。

けれども。

「いつまで、そうしているつもりなの？」

起きてから眠るまで、ほとんど食事も摂らず動かず、なにをするわけでもなく寝台から動かないでぼんやりしているツェイルに、痺れを切らせたのは姉、テューリだった。

「なにが悲しいのか、言ってごらんなさい！」

怒られても、ツェイルはぼんやりとしたまま、テューリを見ることもなく窓の向こうに視線を向けたままだった。

「戻ってくるなり、それはなんだというの！ 理由をおっしゃいなさい！」

うるさい。

相変わらずテューリはよく怒鳴る。美人で気品があって、腕利き

の薬師という顔を持つくせに、すぐ怒るからそれらが台無しになる。婚約者も大変だろうなと、余計なことを思った。

「いつまで黙り込みをするつもり、ツェイル！」

ああどうして、テューリはこんなに怒鳴れるのだろう。どうしてこんなに、耳を劈くように喋られるのだろう。

今まで一度だって思ったことはないが、ツェイルはこのとき、とても不愉快な気分だった。

どうして放っておいてくれないのか、それがわからない。

放っておいて、とツェイルはテューリを無視し続ける。

そんなにかんがん怒鳴られても、喋る気力がないのだ。動く気力も、なにかをする気力もないのだ。

むしろ、どうしたらいいのかわからないのは、ツェイルのほうだ。

「なにか反応を見せなさいと言っているのよ、ツェイル！」

うるさい。

うるさい。

うるさい。

そう思うことすら、面倒に思う。

すると、聞こえていたテューリの怒鳴り声が、とたんに聞こえなくなかった。

ああ、静かになった。

ホッと息をつくくと、ツェイルは寝台に転がった。

青い空が眩しい。陽を浴びた緑は美しい。あの中にずっといられ

たら、どれだけ幸せなことだろう。あの中に自分が溶け込むことができたなら、どれだけまでの至福が得られることだろう。

いや、違う。

あの中が、幸せなのではない。

あの中と同じぬくもりに、幸せを感じていたのだ。

いったい、なんだっただろう。

ふと考えてみたが、それすらも面倒になって、ツェイルは瞼を閉じる。

なにも見えない、なにも聞こえない。

ああ、とても静かだ。

「ツェイル、やめろ」

いきなりそんな声が、真っ暗な中から聞こえた。

「それ以上は、おまえが壊れる。わたしでは、支えきれない」

どこから聞こえてくる声なのか。視線を彷徨わせっていると、突然真っ白なものが浮かび上がってきた。髪も瞳も、着ている服も、肌の色以外は真っ白な青年だ。

「多過ぎる代償は、おまえを壊す。おまえが壊れるほどの代償は、支払う必要はない」

心配そうな顔をした青年には、見覚えがなかった。

いや、どこか見知った面影がある。

「戻れ、ツェイル。ここはおまえが来る場所ではない。来てはならない場所だ。この領域はわたしの……精霊の領域だ。戻るのだ、ツ

「エイル」

なにを言っているのだろう。そもそも、どうして自分を知っているのだろう。

「ツェイル……頼む、戻れ。来るな。ここに降りてきたら、わたしだけではどうにもできなくなる。ヒーデを呼んでも、おまえを戻せるかわからない。頼む、今のうちに戻ってくれ、ツェイル」

「ヴィーダヒーデの名で、もしかして彼はヴィーダガルデアだろうかと、ツェイルは思った。」

「ああそうだ、わたしだ。わたしがわかるだろう、ツェイル。なら、ここがおまえの来るべき場所ではないことも、わかるはずだ。来るな、ツェイル」

やはりヴィーダガルデアのようだ。見知った面影があると感じたのは、ヴィータヒーデに似ているからか。

そうか、ヴィーダヒーデは妖艶な美女だが、ヴィーダガルデアのほうは青年だったらしい。こんな綺麗な精霊が自分に宿っていたのかと、驚いた。

「暢気なことを考えてないで、戻れ。こちらに来るな」

戻れ、来るな、と言われても、ツェイルは自室から動いていないし、今だって寝転がっているだけだ。

「違う。わたしに引きずられて、魂が閉じられようとしている。そんな代償を支払ったら、おまえは二度と戻れない。わたしにすべてを渡したら、おまえが消えてしまう。やめろ、ツェイル」

どこに戻れというのか。
いつそのまま深い闇の中に落ちてしまっても、かまわないとい
うのに。

「やめてくれ、ツェイル。わたしはおまえが可愛い。わたしからお
まえを奪わないでくれ。可愛いツェイル、わたしを悲しませないで
くれ」

悲しませないで、と言われても、なにが悲しいのかわからない。
どこにそんなものがあるのかわからない。

「ああ、だめだ……だめだ、ツェイル。やめてくれ……わたしから
おまえを奪うな、やめてくれ……っ」

悲鳴のような、けれど弱々しい懇願に、ツェイルは首を傾げる。

「ヒーデ……ヒーデ、助けてくれ……ツェイルを殺してしまう、死
なせてしまう……ヒーデ、ヒーデ、助けてくれっ」

それを求めたヴィーダガルデアの叫びは、やはりツェイルには理
解できないものだった。

だから。

忽然とヴィーダガルデアが消え去り、また真っ暗となっても、と
くに困りも驚きもしなかった。

けれども。

「だめよ、ツェイル」

いきなり耳許で聞こえた声には、吃驚した。

「そんな悲しいことはしないでちょうだい。お願いよ、あたしの可愛いツイエル」

ふわりと身体を包むぬくもりは、ヴィーダヒーデのものだった。消えたと思ったヴィーダガルデアも一緒になってツイエルを抱きしめていて、いったいなにがどうなったのかと、ツイエルはさらに首を傾げた。

「……そう。そんなに、いやになってしまったのね」

なにが、と思う。

「いいわ、可愛いツイエル。そんなにいやなら、それでいいもいいけれど、あたしたちと一緒にいてくれるかしら。あたしもガルデアも、あなたのそばにいたい。だから、一緒にいてくれるかしら？」

なにがなんだかさっぱりわからないが、ヴィーダヒーデの申し出は悪くないものだ。ひとりで暗闇にいるよりも、こうしてヴィーダヒーデとヴィーダガルデアに抱きしめられているほうが、安心できる。

「ありがとう、ツイエル。好きよ。愛しているわ」

ちゅ、と額にヴィーダヒーデの唇を感じたと思ったら、頭天边にもそのぬくもりを感じる。ヴィーダガルデアだ。

「あたしとガルデアがそばにいるわ。あなたを護るから、安心して眠って。もうだいじょうぶよ」

なぜだろう。

だいじょうぶ、と言われても、なにがだいじょうぶなのかわからないのに、ひどく安心した。ひどく安堵した。

長々と息をついて抱きしめてくれるふたりの精霊に身を委ねると、そのとたんに全身の力が抜ける。

ああなんて、心地よいのだろう。

ああなんて、こんなにも、空虚なのだろう。

もう自分でもよくわからないことを感じながらも、ツェイルはそれらすべてを遮断した。

46 : 悲しいといふなり。 3 (後書き)

一部修正しました。

47 : 悲しいといふなり。4 (前書き)

サリヴァン視点です。

「あーのーさー……」

というツアインの、ふてぶてしいにもほどがある態度と言葉に、サリヴァンは顔を引き攣らせながらも政務に勤しんでいた。

「僕ねえ、家に可愛いお嫁さんがいるのねえ？ だから帰りたいんですけれどねえ？」

「……おまえの嫁じゃないし」

「僕ですよ」

「いい加減諦めろ」

「だって、僕のツェイルですもの」

イラッとする。

ツアインと一緒にいると、こんな会話にしかならない。

「かーえーりーたーいー」

「静かにしろ」

「ツェイルが僕の帰りを待っているのにいー」

「待ってない。黙ってここにいろ」

「男となんてごめんですよ」

それはこっちの台詞だ、とさすがのサリヴァンも我慢の限界がきて、卓を拳で殴った。

「うるさい」

少しは黙っている、と幾度めと知れない言葉を投げつけるも、ツアインもまた不機嫌な顔を崩さない。

ここにルカイアがいたら、ただでさえ最悪なこの空気が、さらに悪くなっていたことだろう。いないことに感謝したいところだが、むしろ今の状態よりマシなのかもしれないとすら思ってしまう。

「僕は、ツェイルを家に戻してから、一度も帰ってないんですけど、どう？」

「それがどうした」

「僕って、近衛隊長ですよ？ 偉いんですよ？ どうして休みの申請をしても許可されないんです？ それってもしかなくてもきみの仕業ですよ？ 僕はきみの騎士ですものね？」

うるさい。

とにかくうるさい。

ふだんは必要なことですら口にしないくせに、ツェイルの事になると、とたんに饒舌になる。そのくせ幼い頃の約束には忠実なため、その分饒舌さに拍車がかかりただの騒音でしかない。

「失礼しますよ、サリヴァン……って、その恰好はなんですか、ツアイン」

執務室に姿を見せたのは、休憩用のお茶や菓子を運んで来てくれたラクウィルだ。

サリヴァンの卓の前にある長椅子に寝転がるという、近衛隊長にはあるまじき態度のツアインを見ると、呆れた顔をしていた。

「帰りたい病で死にそうなのですよ、侍従長」

「べつに死んでもいいですけどね」

「ツェイルを置いて死ねないので」

「なら生きてたら？ そのうち帰れるでしょ」

「そのうちではいやなのです」

「我儘ですなえ」

ああうるさい、とラクウイルの顔には書いてある。その気持ちは痛いほど理解できた。

「あれをどうにかしてくれないか、ラク」

「無理ですね」

「そ……即答か」

だよなあと思う。

「とりあえず放置していいと思いますよ。あれも、おれと同じ狂犬ですから」

「狂犬でもなんでもいい……うるさくてかなわん」

とにかく、ツアインをどうにかしなくては、片づけなければならぬものも片づかない。

「じゃあ、そうですねえ……って、あれ？ ツアイン？」

「……、どうした」

なにかに気づいたラクウイルが、長椅子からずりりと落ちたツアインを呼ぶ。サリヴァンもその一部始終は見ていたが、ゆっくりと落ちたツアインは、そのあとにサリヴァンが呼んでも反応しなかった。

「ちょっと、ツアイン？」

ラクウィルが、持ってきていたものを卓に置いて、長椅子から落ちて動かなくなっただけでなく口も閉ざしたツアインに駆け寄る。どうしたんだ、とサリヴァンも椅子を立ち、そちらに足を向けた。急に静かになられるのも、不気味なものだ。あれだけ騒がれたあともあるので、その戸惑いも大きい。

「おい、ツアイン？」

呼びかけるも、意識はあるらしいツアインはその薄紫の瞳を大きく見開いたまま瞬きすらせず、固まっていた。

そこに変化を見つける。

次第にツアインの薄紫の双眸が、白く濁り始めた。

「ツアイン……なにをしている」

なぜ天恵を発動しようとしているのか、突然のできごとにサリヴァンは眉をひそめる。

「ヴィータヒーデー！」

と、いきなりツアインが身を起こしたのは、サリヴァンがツアインに手を伸ばしかけたときだった。

精霊の名を叫ぶと同時に、ヴィータヒーデーが現れた。

「……………どうした？」

現われたヴィーダヒーデはツアインではなく、サリヴァンをじつと見つめていた。だからどうしたのだと首を傾げたら、悲しそうな顔をしたヴィーダヒーデが首を左右に振る。

「ばかね、サリ……ちゃんと説明してあげないから、ガルデアまで混乱してしまったわ」

「……、なんのことだ？」

半身であるというヴィータガルデアの話などしているのか。

サリヴァンはますますわけがわからなくなったが、それを見たヴィーダヒーデは、深くため息をつく。

「考え直そうかしら……」

「は？」

なんのことだ、と思う。

しかし、ヴィーダヒーデはサリヴァンの疑問に答える気などないようで、くるりと背を向けると、空気に溶けるかのように姿を消してしまった。

その瞬間だ。

「殿下っ！」

ヴィーダヒーデに気を取られていたせいで、ツアインの存在を忘れていた。いきなり襟元を掴まれて、乱暴に揺すられる。

「まさかとはっ、まさかとは思っけれどっ」

「な、なんだっ、やめ、揺するな！」

「まさかとは思っけれどっ！」

「ラク、助けるっ」

ツアインの怪力には勝てないので、呆れ眼のラクウィルに助けを求めて、漸く引き剥がした。するとツアインは、今度はラクウィルに掴みかかって、なぜか扉のほうに投げ捨てる。

「あー……こうして一生、おれは投げられ続けるんですかね」

軽口を叩いているので、ラクウィルに怪我はないようだ。上手い力加減だといつも思う。

ラクウィルを投げたツアインは、ゆらりと不気味に立ち、サリヴァンを無表情にみつめた。

「まさかとは思っけれど」

「だから、なんだ」

「ツェイルになんの説明もなく、家に帰したわけ？」

ぎく、と身体が強張った。それを見逃すツアインではないから、けっきょくサリヴァンは再び掴みあげられた。

「説明しなかったんだね」

乱暴に揺すられることはなかったが、ぎらりと光った双眸には寒気がした。

「なっ、なん、なんのことだ」

「きみの矜持なんてどうでもいいんだよ、殿下」

その言い方には腹が立った。けれども、それ以上にツアインの、

今までにない真剣な眼差しに、サリヴァンは言い返さずに唇を噛んだ。

ツアインは本気で、サリヴァンの矜持などどうでもいいと、そう思っているから口にしたのだ。

「なにを思っただんなんなことをしたのか、考えなくてもわかることだけれどね…… ツェイルを悲しませるなって、僕言ったよね？」

「……悲しませる？」

「ヴィーダヒーデが僕の裡から消えた。ツェイルのところに行ったからだよ。その意味がわからないなんて、言わないでくれるかな」

底冷えするようなツアインの眼差しを受けても、サリヴァンは本気で意味がわからなかったのだが、しばらく考え込んでそれに思い至った。

まさか、まさか、まさか、とサリヴァンは全身の血を引かせる。

「おれは帰れなどとは一言も言っていないぞ！」

言い返したとたん、ツアインから怒気が放たれた。

「それで充分だと思っただろうか！ まだわからないのか、きみは！」

ツアインの怒気に気圧されるも、サリヴァンとて黙ってははいない。

「なにがだ！」

怒鳴り返せば、襟元を掴む手に力が込められて、首を絞められる。

「ツェイルはまだ子どもだと、いくら言えば理解する！」

離せ、と振りほどこうとしていた手が、ツアインのその言葉に行き場を失う。

「あの子は、ずっと自分を抑えて、メルエイラで生きていたんだ。ここに来て、あの子は自分を抑え続けていた。自分が子どもだとわかっていいるから、抑えていたんだ。そうしなきゃ、生きられなかったから！」

「……生きられない、だと？」

「僕ら一族を、きみはなんだと思っている！」

それは胸に深く、突き刺さる言葉だった。

ツアインは、天恵の代償で感情が欠落している。それでも、ツイエイルを想う気持ちは本物だ。だからこそ、ツイエイルを想って作り上げられたのだろうその心から、彼らの負った傷がひしひしと伝わってきた。

昔、それはもう随分と、昔の話だ。

サリヴァンはツアインやツイエイルの父モルティエに、メルエイラの生い立ちをちらりと聞いたことがある。

本当は、暗殺の一族などではないという事実。

メルエイラとは家名ではなく、迫害を受けて滅ぼされた、少数戦闘部族の名称であるという事実。

メルエイラは依頼されて暗殺を請け負っていたのではなく、なまじ腕が立つために警戒され、その迫害から逃れるために流浪する生活が続けるうちに、周りからそうだと決めつけられ、そうして部族の人数をどんどん減らしていったのだという。

ヴァリアス帝国に流れ着いたとき、少数戦闘部族は、暗殺のメルエイラー族と呼ばれるようになっていたらしい。

『まあ、わたしらは、戦うのが上手かったからな。森や山の奥で狩りを得意とした狩猟の部族だ、人間相手も造作ない。傭兵になる者もいたくらいだ。だから……嫌われてしまったのだな』

戦えたから。

闘えたから。

だから嫌われて、迫害されて、彷徨い続けた。
その結果がこれだと、モルティエは苦笑した。

『疲れてしまったのだよ……部族が、わたしらだけになってしまったから』

今もこの世界に、数人は生存しているだろう。けれども、一つの邸に全員が住まうことができるくらいには、数を減らしてしまった。そんな、もう逃げるのにも疲弊したとき、ヴァリアス帝国という大国に、メルエイラは拾われた。

『完全に滅ぶときがきた。だから最期に花を咲かせよう。父はそう考えて、皇の剣になった。産まれたわたしには、精霊と契約できるほどのものがなかったから、安心したのだろう。その頃には部族の血も薄れていたしな。だが……わたしの子どもに、その天恵が出てしまった』

だから、サリヴァンを先帝から護ったのは、すべてが善意ではないとモルティエは言った。

『最後にたどり着いた国で、静かに終わりを待つはずだったわれら一族に変化が訪れたのは、なにか意味があるのかもしれない。そう思った矢先に、殿下が現われた。ああ、われらは殿下をお護りする

ために、生き残らねばならぬ……そうしてやっと、咲かせた花は散ってゆくだろう』

半ば使命だな、と呵々と笑うモルティエは、サリヴァンが感じていた罪悪を吹き飛ばさんばかりだった。

『殿下をお護りするのは、われらメルエイラの利己心だよ』

滅ぶための、それは最後の祭り。

『だから殿下、われらは殿下をお護りする。勝手に、な。とりあえずツアインにはあらゆる武術を叩き込んでおくから、好きに使うといい。殿下の思う通りに、やりたいように、自由に生きて、われらを散らせておくれ』

その話をしたあたりから、パタリと逢えなくなり、アウニの森に行ってもひとりであることが多くなった。外部の情報はモルティエからもたらされていたため、来なくなったモルティエの近状など知る由もなく、そのまま数年が経過した。

そしてルカイアと出逢い、まもなくしてルカイアに連れられてきたツアインと、久しぶりに再会した。その時点でメルエイラ家のこととはラクウイルが拾ってくる噂で聞いていたが、ツアインに再会するまで彼らが歩んだ数年の真実を知ることはなかった。

『妹がね……僕と同じなんですよ。そのせいなのか、どうも僕が力を使うと反応してしまいましたね。だから今、鍛えています。掟があるから』

掟がどんなものかは知らない。だが、もともとは戦闘部族であるから、ツアインのようにあらゆる武術を叩き込まれることになった

と、妹のことを教えてくれた。

『ねえ、殿下。僕と、賭けをしませんか。殿下が妹を好きになって、妹が殿下を好きになるか……そんな賭けです』

出逢える確約もない、なんて一方的な賭けだとそのときは思っただけだった。

『相思相愛にならなかつたら、僕は妹を娶ります。もともと滅ぶべき一族だから、いいでしょう?』

そんな賭け、なんの意味があるのだ。なんの意味も、まして利益もないものだ。

そう言ったが、ツアインは笑っただけだった。

『僕の妹への愛を、誰でもいいから認めて欲しいんですよ。妹を……ツエイルを、お嫁さんにしたいんです』

それを語るツアインは、救いを求めているように見えた。だからサリヴァンは、その賭けに乗ることにした。誰かを愛し、愛され、幸せになりたいなどと思っていなかったし、護られたいとも思わなかった。死ぬのを待つだけだったから、こんな自分でもいいならと、その賭けに乗ったのだ。

『殿下とツエイルが相思相愛になったら……そうですね、僕の一生を殿下に捧げますよ。絶対の忠誠を、殿下に。永遠の愛を、ツエイルに』

賭けに勝っても負けても得などないように思えたが、そのときはそれでよかった。

この話をラクウイルが聞いていたとは、知らなかっただけで。ラクウイルから聞いた話を鵜呑みし、なにかしらの策を含ませたルカイアがツェイルを連れてくるまで、忘れていた賭け。まさか自分が、惚れて負けるとは思わなかった賭け。

だからこそ、ツェイルが子どもだと言ったツァインの言葉が、刃のように感じられる。

「ツェイルは僕と同じなんだよ……でもね、ツェイルが奪われたのは、身体の成長っていうものだけじゃないんだよ。その代償のせいで、どれだけのものを奪われたと思う？ どれだけの願いを、望みを、絶たれたと思う？」

ツァインのそれに、サリヴァンは言葉もなかった。

「僕はツェイルのことでなら感情が動く。でもね、それ以外はいつでもいいの。だから、僕だけではどうしようもないことも、あるんだよ」

襟元を掴みあげるツァインの腕が、力を増した。

「きみだろうがっ」

「……っ」

「きみがあの子に、奪われたものを取り戻させたんだろうが！ 絶望の中にいたあの子を、きみが……きみが救い出してくれたんだろうが！」

叫びに近いツァインの言葉に、サリヴァンは目を見開く。

「あの子は、漸く、ただの女の子になれたのに……誰かを想う気持

ちを覚えて、人間らしさを取り戻せたのに……僕にできなかったことをきみはできるのに、どうして手放すんだ！」

「手放してない！」

「じゃあなんでヒーデがあの子のところに行った！ ガルデアが、ヒーデに助けを求めるほどの状態になっているんだ！」

「それは……っ」

「ヒーデは言っただろう。きみがあの子を欲しいと言ったときに、考えておくと……きみはヒーデに認められていたのに、さっきヒーデはなんて言った？ 考え直すって言わなかった？ なんてことをしてくれたんだ！」

ああやはり、とサリヴァンは臍を噛む。

必要な説明を省いただけでなく、かける言葉が足りなかったせいで、サリヴァンはツイイルを悲しませた。しかも、深く悲しませて、傷ついてしまったツイイルを、精霊の支えなくば生きられないような状態にまでさせてしまったのだ。

悲しいというなら、そうならずに済む方法をとればいい。

そんな最悪の状態にさせるほどの傷を、サリヴァンは与えてしまった。

失敗した、と思ってももう遅い。

まさか、そこまで悲しむような事態になるなど、思っていなかった。

「そんなに怒らないでやってくれませんかねえ、ツアイン」

サリヴァンを掴みあげるツアインの手を、ラクウィルがやんわりと抑えた。そうして、多少強引ではあったが、サリヴァンからツアインを引き剥がす。

「サリヴァンも言いましたよね？ 帰れなんて一言も言っていない、と」

「説明だけでなく、言葉も足りなかったってことだ」

「どう説明すればよかったです？ すべてを片づけてから迎えに行くから？ 仮初めの皇帝ではなく、国主でもなく、サリエ・ヴァラディン・ヴァルハラとして迎えに行く、そのときまで待つてくれ？ はっ、言えるわけないでしょうが」

ラクウィルはサリヴァンの想いを、上手く代弁してくれる。

「今サリヴァンがやっていることは、サリヴァンのこれからを左右するものです。それに姫を巻き込んで、きみの言う危険に曝したくない、サリヴァンのその気持ちも考えなさいよ」

「結果的に言えばあの子は壊れかかっている。僕が言う危険は、こういうことだよ。あの子はもう、殿下なしでは生きられなくなったんだから」

ツアインの返しに、言葉を詰まらせたのはラクウィルと、そしてサリヴァンだ。

「……、そういう危険？」

思わず、といった感じに、ラクウィルは聞き返す。ツアインはギツと目を細めた。

「だからっ、あの子はまだ子どもだって言ったただろっつ」

なんでわかってくれないんだ、と癩癩を起したように怒るツアインに、サリヴァンは蒼褪める。

「子ども……そういう意味の、子どもか」
「そうだよ！」

反射的に、まずい、と思う。

まずいことを、した。はっきりとそう感じる。失敗どころの話ではない。やってはならないことを、サリヴァンはやってしまった。

「……、やばいな」

説明しなかったのも、言葉が足らなかったのも、ツアインの言った通りサリヴァンのくだらない矜持によるものだ。その結果がこの現状である。

どうするべきか。

考えたところで答えなど決まっている。

「どこ行くんですか、サリヴァン」
「逃げる気か」

ラクウィルとツアインの声を後ろ背に聞きながら、サリヴァンはすたすたと執務室を横切ると扉に手をかける。

「兄上とルカのところに行くってくる」

そう言うと、扉を開けた。

47 : 悲しいといふなら。4 (後書き)

一部修正致しました。

目を覚ますとそこは真っ白で。

「ん？ ああ、起きたね、イル」

聞こえた声は、弟トゥーラのものだった。

「イル姉さま、起きた？」

トゥーラに続いて妹シュネイの声も聞こえて、ツェイルは寝台から身体を起こすと、弟妹の姿を探した。

「食事する？ それともまた眠る？ どれでもいいよ、好きにして」

随分と冷たい言い方をするトゥーラだが、本当は優しいと知っているので、ツェイルはとくに気にもせず首を左右に振った。

「ふうん？ じゃあ、起きるの？」

こくん、と頷くと、トゥーラは読んでいたらしい本を閉じ、すたすたと部屋を出ていった。

「イル姉さまっ」

ひよこ、と顔を見せたシュネイに、その距離の近さに少し驚きつつ、ツェイルは首を傾げる。

「目を覚ましてくれて、嬉しいわ。あたしね、ウーラ兄さまと一緒に、イル姉さまの精霊にお願いしたのよ？ イル姉さまを起こして
つて」

にこにこ微笑んで言うシュネイは可愛らしくて、ツェイルは「そうか」と頷きながらぼんぽんとシュネイの頭を撫でる。くすぐったそうに肩を竦めたシュネイは、衣装に皺がつくのも気にせず寝台に上がってくると、ツェイルの前にちょこんと座った。

「綺麗になったわ、イル姉さま」

なにをいきなり、と思うが、シュネイはとても嬉しそうに笑ってばかりだ。

「素敵な人と、巡り逢えたのね。羨ましい。あたしにもそういう人、早く現われてくれないかしら」

うふふ、となにがそんなに楽しいのかと思うほどに、シュネイは可愛らしい笑みをこぼす。

「ねえ、イル姉さま。あたし、本当に嬉しいの。お胸がちっちゃいままなのは残念だけど、イル姉さまが綺麗になって、すごく、嬉しいの」

だからね、とシュネイは続ける。

「あたし、幸せよ」

その言葉に、ツェイルは目を見開いた。頭が真っ白になるくらい、驚いた。

「ウーラ兄さまもね、無愛想で口も悪いけれど、すごく幸せだって言ってたわ」

あのトウーラも、とさらに驚く。

「イル姉さまを一番に心配してたのは、ウーラ兄さまよ。アイン兄さまやユーリ姉さまもそうだけれど、ウーラ兄さまが一番だわ。イル姉さまはひとりでも抱え込むから心配だって、いつも顔に書いてあるもの」

だから無愛想なのよ、とトウーラの一面を、シュネイは教えてくれる。

もしかしたら自分たちきょうだいの中で、もっとも幼いはずの少女が、いちばん聡いのもかもしれない。

「余計なこと言つな、ネイ」

「あら、本当のことを言っただけよ、ウーラ兄さま」

部屋を出ていったはずのトウーラが、いつのまにか戻って来ていた。その手には随分と厚い本と、細かく切り分けられた果物を入れた皿を持っている。

「ほら、イル。これなら食べられるだろう」

果物はツェイルのために用意してくれたものらしく、トウーラは皿をツェイルとシュネイの間に置くと、自分はシュネイの隣に腰か

けた。

「それ食べたら、また眠ればいい。アインとユーリが来ないように、おれとネイで見張ってるから。ヒーデとガルデアも協力してくれる」

そう言うなり、トゥーラは親指と人差し指で切り分けられた果物を摘み、ツェイルの口に押しつける。

「食べるよ。数時間置きに、ネイが用意してたんだ。無駄にするな」

食べものを粗末に扱うな、と言われてしまったら、家訓にも等しいそれを反故にすることもできない。ツェイルはしぶしぶ押しつけられた果物をゆっくりと租借し、その潤いにホッとしながら嚙下した。

「全部食べるとは言わない。けど、せめておれとネイが安心するくらいは、食べる」

二つだけとはいえ弟とは思えない口ぶりに、とても懐かしい気持ちが届き上げてくる。

二口めの果物は、シュネイに口まで運んでもらった。

「美味しいでしょう？ ハクトウっていうのよ」

美味しい。頷けば、シュネイもトゥーラも、安心したように微笑んだ。

「あたしとウーラ兄さまにもちようだい？」

「ネイ」

「いいじゃない。ね、イル姉さま」

あーん、と口を開けて待っているシュネイに、ツェイルは微笑ましく思いながらハクトウという果物の欠片を食べさせた。もう一つ手に取ると、トゥーラにも差し出した。

「……仕方ないな」

満更でもなさそうなトゥーラも、口を開けてくれたので入れてやる。

ふたりしてハクトウを租借すると、美味しい、と言ってまた微笑む。

そんな光景を見ていると、なんだかとたんにどつと安堵感が込み上げてきた。

「ん……イル？」

「イル姉さまっ」

ふたりが同時に驚いたので、どうしたのかと思って首を傾げたら、ぼたりと手の甲になにかが落ちた。視線を落とせば、ぼたぼたと手の甲に水たまりができていく。

ああ、もう枯れたと思った涙だ。

そう気づいたときには、こぼれた涙を止めることなどできなくなっていた。

「……あたし、イル姉さまの涙、初めて見るわ」

「……おれも」

「綺麗ね、イル姉さま」

そつと、シュネイの手のひらが、ツェイルの頬に添えられる。反対側の頬には、トゥーラの手のひらが添えられた。

「悲しいのね……でも、だいじょうぶよ。あたしとウーラ兄さまと、ヒーデとガルデアが、イル姉さまを護るから」

こつん、とシュネイの額が、ツェイルの肩に寄りかかる。

「心配するな……おれたちが、そばにいるから」

そう言ったトゥーラもまた、ツェイルの肩に身を寄り添わせる。

二つのぬくもりに、ツェイルはぼろぼろと涙を落した。

なんで声が出てこないのか不思議なほど、とても胸が絞めつけられて、涙を止められなかった。

だから、二つのぬくもりに、甘えた。

このぬくもりは誰かに似ている。

誰かに与えてもらったものに、とてもよく似ている。

その人を思い出すと、息もできないほどに、苦しくなった。それでも、苦しいばかりではないと、ツェイルは知っている。知っているから、ますます涙はこぼれ落ちた。

「泣き虫だったんだな、イル」

「ほんとね……もっと早くに、それを知りたかったわ」

止まらない涙を拭ってもらいながら、ハクトウを口に運んだ。食べながら泣くという、とても不細工な顔を曝しながら。

再び寝台に横になったとき、ツェイルの目は真っ赤になって腫れていた。それを冷やしてくれながら、シュネイが笑顔で話しかけてくる。トウーラは持つてきていた厚みのある本を読みながら、ときおりシュネイに突っ込み、ツェイルに無愛想な顔を向ける。

どれくらいそうしてふたりと一緒にだったのか。

いつのまにか眠っていて、ふと目を覚ましたとき、そこにはまだシュネイとトウーラがいた。そばにいるから、という言葉に違わず、一緒にいてくれたらしい。

ただ。

「なにか来たな……ネイ、起きろ」

なにかの気配を警戒したトウーラが、転寝していたシュネイを起こして、緊張を走らせる。パタン、と本を閉じると、寝台を離れて窓の向こうを確認し、警戒しながら戻ってきた。

「気配を掴めない。人間じゃないみたいだ。けど、悪い感じがしない……イル、わかるか？」

それはツェイルには感じられないものだったので、寝台から身を起こして首を左右に振った。

「イルにわからないなんて……なんだろう」

「ウーラ兄さま、精霊かなにかが迷い込んだのではないの？ 悪いものではないんでしょう？」

「ああ。でも……気になるな。ネイ、イルから離れるなよ。ちょっと見てくる」

トウーラがなにを警戒しているのか、ツェイルには本当にわからない。けれども、それだけトウーラが気にしているのなら、ツェイルもそれに倣ったほうがいい。

なにか武器になるものを、と視線を彷徨わせて、ツェイルはそれを見つける。

「イル、無理するな。おれがどうにかするから」
「そうよ、イル姉さま。ウーラ兄さまに任せて」

トウーラとシュネイにはそう言われたけれども、ツェイルは迷わずそれを手にした。

銀色に輝く、美しい剣。
柄の上部にある薄紫色の宝石は、角度によっては銀色のそれを吸い込み、白っぽく光った。

「仕方ないな……イル、無茶はするなよ」
その忠告に頷き、部屋の扉に向かうトウーラの背を目で追いかける。

トウーラの手が、扉に伸ばされた、そのときだ。

「猊下の魔術は便利だな」

そんな声が、どこからともなく聞こえた。

「っ誰だ！」

トウーラが驚いてその声を張り上げたとき、ツェイルはシュネイと一緒に、すでにそれを目撃していた。

「ツェイ」

部屋の中央で、淡く光った先から聞こえた、自分の呼び名。光りが収束し、現われたなにかの陣の上に立つ、その、姿。

どうして、と思うよりも先に、喜びが胸に込み上げる。

苦しいと思っていたのに、それをも凌駕する歡喜に息が詰まる。

やはりこの想いはもう消せないのだ。

もっどうしようもないのだ。

「迎えに来たぞ、ツェイ」

にこりと向けられた、サリヴァンの微笑み。

ツェイルは大きく見開いた目から、涙をこぼした。

48 : 不確かなもので。 1 (後書き)

一部修正致しました。

49 : 不確かなもので。2 (前書き)

サリヴァン視点です。

「迎えに来たぞ、ツエイ」

漸くだ。

漸く、ここまで来られた。

そう思って伸ばした手は、しかしなにかに邪魔される。

「不法侵入者。ここがどこか、わかっているのか」

ツェイルに伸ばしたサリヴァンの手を邪魔したのは、ツェイルによく似た少年と少女だった。

「……きみは？」

訊ねると、出逢った頃のツェイルみたいな少年は、不愉快そうな顔をした。

「見ればわかるだろ。それよりこっちが訊きたいよ、不法侵入者」

ツェイルにそっくりということとは、この少年はツェイルの弟なのだろう。そしてツェイルに寄り添う少女は、妹だ。

「……サリヴァンだ。サリエ・ヴァラディン・レイル・ヴァルハラ
といつ」

「レイル……公爵？」

「ああ。きみは……ツェイの弟か」

「トウーラだ。ツェイって、イルのこと？ 公爵がイルになんか用があるわけ？」

「ツェイはおれの妻だ。迎えに来た」

「……つま？」

なんのことだ、と怪訝そうにした少年、トウーラは、サリヴァンの余裕とツェイルの泣き顔を交互に見たあと、さらに首を傾げた。

「イルが輿入れしたのは、皇族だぞ？」

あえて皇帝と言わないところがいい。そんなことを思いつつ、サリヴァンはその口に笑みを浮かべた。

「ああ。だから、おれのところだ」

「……公爵だつて言わなかったか、あんた」

「公爵で、皇弟だ」

「皇弟……ん？ まさか、あんたがアインのあるじ？」

「アイン……ああ、ツアインのことか。そうだ」

トウーラは警戒を解かず、まじまじとサリヴァンを上から下まで見ると、短く息をついて胡散臭そうな顔をした。

そういえばサリヴァンは必要な過程を飛ばしてここに来ている。警戒されて当然であるし、不法侵入したという自覚もあるので、トウーラの態度はある意味で正しいかもしれない。

「どうやって入ったのか知らないけど、ちゃんと玄関から入って来いよな……本当にイルの旦那になるなら」

その通りである。

ちよつと苦笑しながら、サリヴァンは服の袂を探る。

「ツェイはおれの妻だ、と言つたはずだ」

懐から取り出した、筒状の書類。

押さえの紐を解くと、書面が見えるように差し出した。

それを見たたん、トゥーラは呆れ顔になった。

「……言つていいか？」

「ん？」

「玄関から入り直して来い」

あつちから、とトゥーラに扉を指差される。

「そうね……いくらイル姉さまの夫でも、ここは嫁の実家だもの。
ある程度の手順は踏むべきよね」

と、それまで黙っていた妹のほうにまで言われてしまう。

サリヴァンは肩を竦めた。

「追い出されるのを前提に、手順を踏めと？ そんなまどろっこしいことをしていたら、ヴィーダヒーデとヴィーダガルデアが、本格的におれからツェイを隠すだろうが」

今だって、不機嫌そうな精霊の気配をひしひし感じている。いつ飛び出してくるかもわからない。ここで引いたら、二度とツェイル

に逢えなくなりそうだ。

そんなのはごめんである。

だからあえて、必要な過程を飛ばしてここに来たのだ。

サリヴァンは手に持っていた書状を元の形に戻すと、袂にそれを入れ直した。ツアインにことごとく邪魔されながらも死守した大事なものであるから、きちんとツイエルに見せて然るべき場所に収めるまでは、手放すわけにはいかない。

「ええと……サリエ・ヴァルハラ……さん？」

「サリヴァンでいい」

「そう。じゃあサリヴァン、それでもとりあえず玄関から入って来い」

「いやだね」

「ふうん……じゃあ、仕方ないな」

なにが仕方ないのか、と思ったときには、トゥーラの手にはいつものまにか剣が握られていた。

「ここはメルエイラ家、あんたは不法侵入者……片づけるしかないだろ」

やはりそうくるか、と思う。

ツイエルだけでなくツアインの実家でもあるここに、必要な過程を飛ばして来れば、こうなるだろうと予測できていた。

「ウーラ兄さま、相手は丸腰よ？」

「関係ない」

「……さすがメルエイラの剣士」

「うるさいぞ、ネイ」

妹と軽く口喧嘩しながら、トゥーラはサリヴァンに突進してくる。

なんの準備もしていなかった、というわけではないので、サリヴァンも表情を引き締めて体勢を整え、身構えた。

しかし。

ギイン、と金属同士が交わる鈍い音は、丸腰のサリヴァンに出せる音ではない。

「どうしておれの剣を、イルが受けるわけ？」

サリヴァンは瞠目する。

トゥーラの剣を受け止めたのは、その速さを上回る速度で回り込んだツェイルだった。

「ツェイ……」

サリヴァンは、その華奢な後ろ姿を凝視する。まさかここでツェイルが動くとは思わなかったのだ。

ツェイルは受け止めたトゥーラの剣を往なしたが、その勢いに負けて後ろによるめく。サリヴァンは咄嗟に両腕で抱きとめた。

「サリヴァンさま……傷つける、のは……許さない」

震えた小さな声は、確かにツェイルのもので。

いつものように両腕にすっぽりと収まるぬくもりは、ツェイルの存在を確かなものとしている。

「ふうん……イル、それでいいの？」

不機嫌な態度のトゥーラに問われたツェイルは、こくんと頷く。

「そのせいで、イルの裡にはヒーデとガルデアがいるのに？」

再びの問いに、ツェイルもまた頷く。

トゥーラが、にんまりと笑った。

「ガルデアの力なしで、おれに勝てたことなんてないくせに……それでもいいんだな」

その瞬間、不穏な空気を感じ取ったサリヴァンは、再び剣を構えようとしたツェイルを深く抱き込むと、床に描かれたままの光る陣を踵で蹴った。

「ラク、呼べっ」

それを合図に、陣が光りを散發させる。

「イル！」

「イル姉さま！」

驚いているツェイルの弟妹たちに、サリヴァンは陣の光りの中で微笑みを向けた。

「もらっていくぞ」

ではな、と言うと、散發していた光りが収束を始め、サリヴァン

とツェイルを包む。一瞬だけ全身が重く感じたあと、パツと目の前の光景が変わった。

ふわりと風が吹き抜ける。

「おかえりなさい、サリヴァン」

よっ、と手を振ったのは、そこで待機していたラクウイルだ。ツェイルのところへ行くときは狛下の力を借りたが、帰ってくるときはその力にラクウイルの天恵を付加させて、馴染んだ自分の居室に移動したのである。

「姫も、おかえりなさい」

ラクウイルがツェイルの目の前で指をパチンと鳴らし、どうやら飛んでいたらしい意識を呼ぶ。サリヴァンの腕の中でびくっと震えたツェイルだったが、周りをきよるきよるを見渡すだけで、声もなかった。

「……ツェイ？」

名を呼べば、彷徨っていた視線がサリヴァンに絞られる。じっと見つめられたので、サリヴァンも思わず見つめ返す。

いつになったらその愛らしい声で自分を呼んでくれるだろう。そう思いながら、しばらく互いに見つめ合った。

「……サリヴァンさま」

漸く声が名を紡ぎ、ホツとする。声を奪われているのかと、心配

だったのだ。

「ああ、ツエイ……おかえり」

安堵しながら微笑めば、とたんにぶわりとツエイの目に涙が溢れ、ぼろぼろと頬を伝って落ちていく。

泣かせてしまったか、と思うと同時に、この涙は自分にだけ向けられているのかと思うと、たまらなく嬉しくなった。

「ツエイ」

離すまいと抱き込めば、ぎゅっとしがみついてくる。涙で濡れた顔が、胸に押しつけられる。

もうこのまま寝台に直行してもいいだろうか、そんなことまで思いつつも、サリヴァンはとにかくツエイのぬくもりをひたすら自分の中に閉じ込めた。

「サリ……ヴァン、さま……っ」

「ん」

「サリヴァン、さま……サリヴァ、さま……っ」

泣きながら、ツエイはサリヴァンを呼び続ける。それに返事をしながら、サリヴァンは抱きしめる腕に力を込め、頬を摺り寄せた。

ああ、もうだめだ。

もう、手放したくても手放せない。
手放してやれない。

これはおれのものだ。

おれだけが、これを幸せにしてやれる。

「おれのものだ……ツエイ」

なにも要らないと思っていた。

生きる目的も、死ぬ目的も、なにも要らないと思っていた。

すべてが自分の自由ではなかったから、なにかを欲しいと思う前に諦めていた。

けれども。

それは不確かなもので、けれども絶対で、永遠のもの。

「愛している、ツエイ」

永遠のものではなく、絶対とは言えない、不確かなものかもしれない。

それでも。

「愛しているんだ……ツエイ」

初めて欲したそれを、サリヴァンは失いたくないと強く思った。

ツェイル・レイル・ヴァルハラは、ヴァルハラ公爵家では目立ちもしない娘である。特出しているところは一つもなく、容姿はまあ見られなくもないふつうで、背丈もまあふつうだろうという、つまるところ目立つ要素が一つもない地味な娘だ。

ただ、社交界には姿を見せないという変わり者のヴァルハラ公爵に嫁いだ娘であるから、その一点でさまざまな噂が飛び交おうとしていた。

「頼みたいことがあるのだよ、ツェイル嬢」

アウニの森の中にある館の一室で、ツェイルは偉大なふたりを前にぼんやりとしていた。

「このたび、めでたくツェイル嬢はわが弟サリエと婚姻した。これを機に、サリエを皇佐として招きたいと思う。あれはいやがっているが、ツェイル嬢からの声があれば頷くだろう」

サリヴァンの兄であり、ヴァリアス帝国皇帝であるサライ・ヴァーデーダ・ヴァリアスはそう言った。

「あれが国主である事実は動かんしろう。それに、サライだけで国は護れん。サリエの力も必要じゃ」

サリヴァンの後見、つまりヴァルハラ公爵家とも縁が深く、さらには皇族の親戚にあたるという大卿、エインズレイ・アイル・ダヴィレイド、ダヴィド大老もツェイルにそう言ってきた。

しかしながら、ツェイルはふたりの話を、ほとんど聞くことができない状態である。

「そういうわけでツェイル嬢、このことをサリエに……と、ツェイル嬢？」

「おや娘よ、どうした？」

自分たちの意見ばかり述べることに夢中だったふたりは、気づけなかったのだろう。

ツェイルは今、最高潮に具合が悪かった。いや、正確には体調不良なのではなく、ものすごい負荷が身を蝕んでいるせいで、ふつうに身動きもとれない状態だった。

「ジーク、ツェイル嬢の様子がおかしいのだが……なにかあったのか？」

ツェイルは、ぼんやりとした視界で、自分をここへ連れてきたその人影を見つめる。

ジークフリート・レイル・カリストル。

医師ハルトの兄であるらしいジークフリートは、ラクウイルが持っている《天地の騎士》という称号を同じく所持する、サライの騎士だという。前に一度アウニの館に来たとき、扉の前で控えていた騎士だ。あのときは特に気をつけて見なかったが、こうして間近に

接すると、ハルトに似た雰囲気を感じる。

しかし。

「ふつつつに居室にいたから、連れてきたただけだけど」

口は悪いがツェイル以上にぼんやりとした眼差しのジークフリートは、ツェイルを自身の天恵で強引に連れてきたときも、口調とは裏腹にやる気がなさそうだった。

目の前の光景が変わる直前、ジークフリートに連れ去られるツェイルをリリが目撃してくれていたので、今頃はツェイルがアウニの館にいたことはサリヴァンに伝わっているだろうが、追いかけてきてくれるまでにはもう少し時間がかかりそうである。

サリヴァンが迎えに来てくれるまで意識を保てるだろうか、と思いつつ、少しでも気を抜くと倒れそうになる身体を、ツェイルはひたすら抑えつけた。

「……、あ」

「なんだ、ジーク」

「姫さんの裡に、精霊がいるなあ……気づかなかった」

「精霊？」

「攻撃性の強い精霊だなあ……それも二対……ふむ、こりややべえかも」

「……ジーク？」

「サライ、逃げねえとやべえぞ、たぶん」

「なんのことだ？」

「というか、そろそろ退避しねえとサリエに……いや、ラクウイルだな。奴におれが殺される。おれ、まだ死にたくねえから、逃げね

えと」

漸くツエイルの裡にいる精霊たちに気づいたジークフリートが、ぼんやりとした眼差しをひそめ、周りを警戒しはじめたが、動けないツエイルはなにもできない。

ツエイルは精霊、ヴィーダガルデアを単体で宿している状態であれば彼の力に己れの天恵を付加させて使うことができるが、ツアインの精霊であるヴィーダヒーデまで宿らせているときは、まったく天恵が使えない。むしろ、宿らせておくことが精いっぱい、まともにも歩くことすらできない。

この天恵封じはツアインにも適應するが、ツエイルと違ってツアインはふつうに成長した身体、いわば成体であるゆえか、僅かな時間でその状態から回復し、ふたりの精霊を宿らせておくことに慣れてしまう。

ツアインと身体の成長度が違うツエイルでは、この状態は天恵が封じされているだけでなく、身体をも拘束されているようなものなので、ツエイルが及ぼせる危険はなにより一つとしてない。

ゆえに、サライヤジークフリートが危惧すべき事態は、サリヴァンとラクウィルがここに駆けつけてきたときのみである。

ところが。

「こんにちはあ、ジークフリート」

ツエイルが気づいたときには、鈍色に光った剣が、ジークフリートの首にびつたりと添えられていた。

「げえ……最悪う」

「おれにはあんたと同じ天恵があるんですよ、ジークフリートお？」

あつちこつち飛べちゃう便利な天恵がねえ」

「ああああ……だあからいやだったんだよー……こいつ、おれのこ
とずーっと斬りたそうにしてるしさあ」

非常に残念そうなジークフリートが、剣の持ち主であるラクウイ
ルに恨めしそうな顔を向ける。

「どこから侵入した、狂犬！」

「おれはここに踏み入れることを許された天恵者ですよ、サライ。
どの天恵も、ジークフリートみたく、使えちゃうんですよねえ」

にこお、と意地悪く笑ったラクウイルだが、その目は笑ってなど
いない。サライは不気味そうにしていた。

ラクウイルが来てくれたということはサリヴァンも、とツェイル
はその姿を探すが、どこにも見当たらない。どうして、とラクウイ
ルを見つめると、ごめんね、とでも言うかのように苦笑された。

「連続で呼ぶことになっちゃうから、サリヴァンの負担がきついん
ですよ」

そういえば、本来はラクウイルが持つ限定の天恵であるから、そ
の天恵がないサリヴァンが飛ぶのは負担が大きいと言っていた。ア
ウニの森に初めて来たときも、ふたりを運んだサリヴァンはナサニ
エルに注意されていた。

サリヴァンが来られなかったことは残念だが、そういうことであ
れば仕方がない。

寂しいけれども、我慢である。

「おれは姫を取り戻しに来ただけなので、今日のところはこれで失

礼しますね。ダヴィド大老、お戯れもいい加減にしませんと、サリヴァンに嫌われますよ」

「わしは大好きじゃから、問題ないのう」

「うわ傍迷惑。じゃ、そういうことで。……ジークフリート、次に姫を攫つたら、容赦しないので覚悟していてくださいね」

剣の柄で、ガツツとジークフリートの腹を殴ったラクウイルは、呻いて倒れた彼を放置して、ぼんやりと見守っていたツェイルに歩み寄ってくる。

「帰りましょうね、姫」

そう言つて、恭しく手を握られる。

帰る、と頷いたときには、アウニの館に連れて来られたときのように、一瞬で光景が変わっていた。

「ツェイ！」

とたんに聞こえた声に、ホツとする。姿を探して視線を彷徨わせれば、どうやらサリヴァンの私室の居間であるらしいそこで、ツァインに羽交い締めされたサリヴァンを見つけた。

「離せ、ツァイン！」

「ええー……楽しいのにい」

「楽しくない、離せ！」

じたばたと足掻いたサリヴァンを、ツァインはやや不満そうにだが、解放する。

「ツエイっ」

身体が自由になったとたんにツェイルに駆け寄り抱きしめてきたので、ツェイルはホツとした。

サリヴァンの腕の中は、とても安心できる。

「ヴィーダヒーデ、そろそろツェイルから出てきてくれる？ 暴走していないときにきみが裡に入ると、ツェイルはしんどいからね」

サリヴァンにぎゅっぎゅっうに抱きしめられていると、ツアインがそう言ってくれた。

「まだガルデアが不安がっているのよ」

するりと姿を見せたヴィーダヒーデに、ぼんぼんと頭を撫でられる。視線を上げれば、空中に漂うヴィーダヒーデと目が合った。

「……ガルデアをツアインに移動させたほうが賢明かしら」

「男なんてごめんだ！」

「精霊に雌雄はないわよ。外見はこうだけれど」

「見た目が男だ！ いやだね！」

と、ツアインがヴィーダガルデアの受け入れを拒否するので、ヴィーダガルデアは常にツェイルの裡にいる、らしい。

「仕方ないわね……ツェイル、ガルデアを少し眠らせるわ。その間、力を貸してあげられないけれど、許してくれるかしら？」

特に問題はないので、こくん、と頷いた。

本来は精霊がいなくても、天恵は使えるものだ。それにたとえ使

えなくても、ツェイルには剣がある。ヴィーダヒーデとヴィーダガ
ルデアのふたりを宿らせておくよりも、ずっと楽なことだ。

ふわっとツェイルの頭を撫でたヴィーダヒーデは、そのままツァ
インのほうへと飛んでいく。

「おかえり、ヴィーダヒーデ！」

「……あたし、あなたのそういうところ、大好きよ」

「僕はツェイルの次くらいに、きみが好きだからね」

「そういう代償のだけれど……その素直なところが、よ」

言いながら、ヴィーダヒーデがツァインの裡に帰っていく。

その姿が消えると同時に、ツェイルは身体が楽になったことに気
づいた。

「また一段と小さくなったか……無茶をさせたな」

そう言ったのはサリヴァンだ。

「ツェイルがそうだったのは殿下のせいですから、僕は謝りませ
んよ。というか、僕が謝るところなんて一つもないですし？ むしろ
僕が殿下を責めたいですね」

「……ラク、追い出せ」

「あ、ひどっ！ って、なにするんですか、侍従長！」

なぜか嬉々としたラクウイルがツァインを追い出しにかかった。
それはほかの近衛騎士たちが響いた物音に驚いて駆けつけてくるま
での騒動に発展したが、ふたりの取っ組み合いを見て、なぜかナサ
ニエルを筆頭にみんなが笑いながら呆れていた。

「おふたりとも、天恵は発動させないでくださいよー。もの壊した
らラッセ宰相閣下が鬼になりますからー」

「今度また窓割ったら、そのときは隊長と侍従長の自腹らしいです
からねー」

などと、近衛騎士たちは楽しんでさえいた。

少しだけ檻褸になりながらも、ナサニエルほか近衛騎士たちも手
を貸して漸くツアインを拘束したラクウイルが勝利を収めたとき、
リリの「静かになさってください！」の一言が部屋中に響いた。

「ツェイルさまは安静にしていなければならぬのに、騒ぎ立てる
とはなんですか！ 遊ぶなら外で遊びなさい！」

それはもうルカイア以上の鬼であつたらしいリリに、ラクウイル
やツアインを始めとした近衛騎士たちは慌てて逃げていった。

「ご無事でなによりです、ツェイルさま。またわたしのいない隙を
突かれて……申し訳ありません」

リリは、一度ツェイルが攫われたときから、張りつくようにして
ツェイルのそばにいるようになっていた。それでも一瞬の隙を狙わ
れてしまったことが悔やまれるようで、表情はいつも以上に硬かつ
た。

しかし、今回はサリヴァンの兄サライとその騎士、そしてダヴィ
ド大老によるものであつたし、そうでなくともリリひとりでツェイ
ルの世話をしているのだから、仕方のないことだ。ツェイルは首を
左右に振り、サリヴァンもわかつていようで、責めるような雰囲気
気はなかった。

「……リンリイ・ラッセ」

「はい、陛下」

「おまえはこれの？」

「侍女です」

「おまえのほかには？」

「おりません」

「おまえひとりで、ツエイのすべてを世話できるわけではない。おれの事情を知り、かつ安心してツエイの世話を任せられる者はおまえひとりだ。それなりの責任は取ってもらうが、おまえひとりを責めるつもりもない」

「……ありがたきお言葉、感謝いたします」

「下がっていい。あとでルカから、話があるだろう」

「御意」

リリを下がらせると、部屋はとたんに静寂に包まれた。

ツェイルは、リリの責任とやらが気になり、サリヴァンの服を引っ張って視線で説明を促した。

「ああ……侍女がひとりでは、やはりなにかと不便だ。ルカもそれは感じていたみたいで、厳選した者をひとり見つけてきた。その教育をさせるだけだ」

本当に、と念を押すと、サリヴァンはふつと微笑んで「ああ」と答え、いつか見せてくれたように、ポンと白いルーフの花を一輪咲かせた。

咲かせたルーフをツェイルの髪に飾ると、足許を確認しながら露台へと促される。窓を開けた向こうには緑と、そして一面の白いルーフが咲き乱れていた。

「これも見おさめだな」

え、と思つて顔を上げると、ただ緩やかに微笑んだサリヴァンが、縁を見渡していた。

「兄上とダヴィド大老の暴挙……ジークフリートにツエイを連れ出させたのは、おれがこの城を去ると決めたからだ」

城を、去る。

その意味がわからないツェイルではない。ぼんやりではあるが、皇佐にする、力が必要だ、とサライとダヴィド大老の言葉を聞いたばかりだ。城から出ていかなないようにして欲しいというようなことも、言われた気がする。

「もともと、限界がきていた……おれと兄上が似ているとはいえ、けつきよくは別人だからな。この五年、おれが兄上の身代わりであることを知られないようにするために、誰かに逢うのは極力避けていたが……ヴェルニカ帝国の国主には簡単に見破られた。あちらもおれと同じ国主で、確かな皇帝だから当然だ。弱みにはされなかつただけマシ……と言えるな」

戦争を吹っかけられないだけいいと、サリヴァンは苦笑する。

同盟が結ばれていることと、古来敵対しているのではなく協力し合い、共に成長してきた国同士であるから、むしろ心配されたという。

「ヴェルニカはいい国だ……シエスタは嫌いだが」

ヴェルニカ帝国がよい国であることと、皇帝シエスタが苦手であることは、また別の話になるらしい。

「ヴァリアスもいい国だ。おれの国だ。護りたいし、護らなければならぬ国だ。だが……おそらくおれは、じきに天恵を制御できなくなる」

右腕を前へと緩やかに伸ばしたサリヴァンは、ギュツと拳を握った。

そういえばツェイルは、サリヴァンが天恵者であることは知っているが、国主の天恵であるルーフの花を咲かせること以外、なにも知らない。

「猥下に言われたことがある……国主の証である刻印に傷がついたせいで、作用すべき力の半分が失われている、と。兄上と分割されているせいもあるだろうが、それでもおれの場合、国の加護がなければ力に呑み込まれる」

どういう意味だろう。

サリヴァンの場合、ツェイルのように精霊を宿したり、或いはラクウィルのように精霊と契約したりするような天恵ではないようなので、サリヴァンに働く天恵がどんなものか、ツェイルにはよくわからない。

制御できなくなる、呑み込まれる、というその意味がわからない。

「まあ、おれのほうに国主の天恵が出て、幸いだな。兄上では無理だ。この天恵は支えきれない」

ふつと苦笑したサリヴァンは、ツェイルの目には悲しく映り。

仕方ない、と肩を竦める姿が、寂しかった。

だからツェイルは、ぎゅっとサリヴァンの服を握って、ひとりで

はないことを主張する。

「ん……なんだ、ツエイ。このところはほとんど喋らなくなって…
…まあ、もともとおまえは喋るのは不得手だったか」

会話が苦手だった頃に戻ってしまっている。その自覚があるので、
こくん、と頷いた。

べつに声が出せないわけでも、言葉が思いつかないわけでもない。
ヴィータヒーデとヴィータガルデアが裡にいたせいもあるが、そう
でなくともその気力がなかったこともあり、そのままになっている
だけだ。

「まあいいか……おいで、ツエイ」

喋らないツエイルを気にした様子もなく、こっちに、とサリヴァ
ンに手を引かれて、露台を降りる。

手を繋いで、ただゆっくりと、ルーフの中を歩いた。

51 : 侍女思慕録。(前書き)

リリ視点です。

リンリイ、という名の本来の持ち主が、ある精霊だと知った日から、その名が嫌いになった。嫌いになったその理由はよく憶えていない。けれども、その精霊の名だから嫌い、ということだけははっきりとしている。

だから。

『……なにをしているのですか、リリ』

両親に早くに死なれて居場所を失った少女は、しかし誰の引き取り手もなく、両親と関係があつたらしい人たちのところを転々としていた。どうやら家の爵位が問題であつたらしいと知つたのは、ひとりで生きていこうと決めて居候先から飛び出したあと、その人に逢つてからのことだつた。

『……わたしのことですか？』

『おや……違いましたかね。わたしはあなたをリリだと、認識しています』

リンリイだ、と言えなかつた。言いたくもなかつた。リリという愛称は、リンリイという名を嫌つてしまった娘のために、両親が呼んでいた名であつたから、その名で呼ばれるのは久しぶりのことだつた。

どうしてこの人は、その名を知っているのだろう。
そう思ったくらいにして、リリは名を訂正しなかった。

『どなたですか？』

『ルカイア・ラッセです』

『……ラッセさま、わたしになんの用ですか？』

『未来の夫に、ラッセさま、はないと思いますよ』

『……は？』

『迎えに来てみれば姿が見えず、まさか家出でもしたのかと探せば
当たりとは……行動力があることはよいことですが、その軽装備で
家出はやめておいたほうがいいですよ』

なにか変なことを聞いた気がしたが、ルカイア・ラッセと名乗っ
たその人の、呆れ果てたような声と表情がとても気に食わなくて、
無視を決め込むことにして背を向けた。

けれども。

『……リリ？』

誰もその名で呼んでくれなかった。だから、呼ばれたことがとて
も懐かしく、思いのほか嬉しいものであり、そのため無視しようと
思った矢先に、決意は挫かれてしまった。

『……放っておいてください……わたしはひとりでも生きてゆけま
す』

『……そうですか』

『では、失礼します』

持っていた僅かな荷物を持ち直して、リリは歩き出す。
誰でもいい、その名を呼んでくれる人がひとりでもいてくれるのなら、自分は大丈夫だと思った。

ルカイアが後ろをついて来なければ。

『……あの、ラッセさま？』

『ルカでいいですよ。その家名、わたしは嫌いなのでね』

『はあ……では、ルカさま。なぜわたしについてくるのですか』

『未来の妻に逃げられそうなので、捕まえておこうかと思ひまして……つま？』

そういえば先ほどは自分を未来の夫だとか言っていたような、と思いつつ、足をとめてしまったのが悪かった。

『帰りましょうか、リリ』

にこ、と笑ったルカイアに、リリの幼い身体は容易く抱き上げられてしまう。

『きゃあー！』

『帰りますよ』

『やつ……やだ、帰らない！』

『家出をするなら、わたしのところからにしないで』

半ば強制的に、リリはルカイアに担がれて家出の延期を余儀なくされた。

降ろして欲しくて暴れても、リリのそれはルカイアに簡単に往なされてしまい、車に放り込まれたあとはぎゅちりと手首を掴まれたせいで、逃げられなかったのだ。

『JJJ……は』

『わたしの住まいですよ。これからはあなたの住まいにもなります』

連行された先は、こじんまりとした邸だった。いや、邸というにはあまりにも質素で、リリが両親と暮らしていた家よりも遥かに小さかった。

それだけでなく、どうやら貴族らしいルカイアのその邸には、なぜか使用人が夫婦一組しかいなかった。

『出て行きたければ出て行きなさい。ただ、あなたのような小娘がひとりで生きていけるほど、この世界は甘くありません。ひとりで生きていくと、そう豪語するのであれば、その程度に見合う力を身につけなさい』

邸に連れて来られた日、ルカイアにそう言われた。

自分の考えが甘かったとは思わない。けれども、ルカイアの言うことも正しいということにはわかった。

だからリリはひとりで生きていくための力を、身につけることにした。

ただ、その力を試す日が来る前に、ルカイアからの頼みを引き受けることになっただけで。

『メルエイラをご存知ですか』

それは、ルカイアの下で、ひとり生きていくための勉強を始めて数年が経ち、侍女としても騎士としても生計が立てられるだろうというくらいになったときのことだ。そのときにはルカイアが公爵家

の次男であることも、皇宮に出入りできるくらいの地位にあることも、すべて理解していた。

『メルエイラ……皇の剣であったメルエイラ家のことですか？』

『皇の剣をご存知なら、だいじょうぶですね』

『なんですか？』

『頼みたいことがあるのですよ』

『……ルカさまが、わたしに？』

ルカイアは、なにを考えているのかよくわからなかったが、リリを連れてきたときの言葉を違えず、リリがやりたいように、その力と知識を望むだけ与えてくれた。

頼みたいこと、という言葉は、そんなリリの日常の中で、とても不思議な言葉だった。

『あなた、侍女としてかなり優秀でしょう』

褒められているのだろうか、と疑問になる言葉だったが、比べる相手もいなかったりリリは特に返事もしなかった。

『わりと剣の腕も立つようになってしまいましたし、適任だと思いましてね』

『適任、ですか……』

とりあえず侍女をしているリリだが、剣の腕もそれなりだ。ひとり生きていくと決めてその勉強を始めてから、あらゆるものに出していたのである。皇宮務めだろうが傭兵だろうが、なんでもこなせる自信はある。

『陛下の妃に、メルエイラの娘を推挙しようと思います』

『……お妃さま?』

『ええ。あなたには、そのメルエイラの娘の侍女として、後宮に入ってもらいたいです』

『わたしが、お妃さまの、侍女?』

そんな、と思ったが、そのときのルカイアの表情はとても冷たくて、そして同時になにかの炎を瞳の奥に隠していた。

『おそらく陛下はメルエイラの娘に見向きもしないでしょう。ですが、陛下にはメルエイラの力が必要です。なんとしてでも、メルエイラの娘には陛下のそばにいてもらわねばなりません』

『それは……わかる気もしますが』

ルカイアが誰を「陛下」と呼んでいるのか、リリは知っている。知っているからこそ、ルカイアのその目的もなんとなくわかってしまった。

『メルエイラの娘はわたしに従うでしょう。ですが、どうなるかはわかりません。そのときのために……あなたには侍女として、メルエイラの娘のそばにいてもらいたいですよ』

『監視しろ、ということですか』

『それもありませんが……いざというときは、娘を連れて国を出なさい』

『えっ?』

『メルエイラの力が手に入らなかったそのときは、この国も終わりですからね』

どういふことか、理解できなかった。

『……なんて顔をしているのですか』

『だ……だつて、ルカさま』

ふっと、ルカイアは目を細めて微笑む。

『だいじょうぶですよ。わたしはずっと、あなたの夫ですから』

カッと、頬が熱くなる。

『そういうことではありません！』

夫とか妻とか、そういう言葉は出逢った頃に聞いたきりで、だから本気で言ったとも思えなくて、驚いた。

『そういうことですよ。わたしはこの国のために在りますが、あなたはわたしのために在ればいいのですから』

『ルカさまっ』

『今回ばかりは言うことを聞きなさい、リリ』

『説明してくださらないと、意味が理解できません！』

『そのままの意味ですよ』

そつと頬を、撫でられた。

『メルエイラの力が手に入らなかったとき、この国は神の加護を失い、滅びるでしょう。いえ、正確には皇族の方々から、天恵が失われることでしょう。先帝の愚かな行いのせいで、この国から真実の皇帝が失われるのです。わたしはそれを防がねばなりません。あの方々には……サライさまとサリエさまには、なんの罪もないのですから』

『……ルカさま』

『メルエイラにはサリエさまを護ってもらいます。娘はあなたが護

りなさい、リリ。あなたはわたしの妻なのですから、夫の責任はあなたのものでもあるのです』

勝手な、と思った。まさかこのときのためにリリを養育していたのだろうか、そうまで思った。

けれども。

なんの感情もなく、ルカイアのところに行ったわけでは、ない。

『もしもの話をしてもしよしいですか』

『なんです？』

『もしこの国が滅びるときがきたら……ルカさまはどうするのです』
『わたしの責任は、先帝の愚行を止められなかったことです。この命は国のために、そしてサライさまとサリエさまのために、使わねばなりません』

『では、もしその逆の事態になったら？』

じつと、リリはルカイアを見つめた。

外では心を読ませない笑顔を振りまくが、家に帰ってくるとその笑顔が消えることを、リリは知っている。ここで暮らし始めてから、まともにルカイアの笑顔を見たことがないのだ。

だから、今このときのルカイアの微笑みが、嘘ではないこともわかる。

『あなたは二度と、家出などできなくなりますよ』

『……は？』

予想外な答えに、目が丸くなる。

確かに家出の常習犯ではあるが、なぜかその日のうちにルカイア

に居場所を知られて、上手く言い包められ邸に連れ戻されてしまう。それでも家出を繰り返すのは、ひとりで生きていくと決めているからだ。

『きつとわたしは、誰よりも業が深いことでしょう。それでも、求めずにはいられない……可哀想に、リリ』

『……なぜ、わたしが可哀想なのですか』

『わたしに見つけられてしまったからですよ』

なんのことだろう。家出のことだろうか。

そう思ったが、その疑問を口にすることはなかった。いや、口にすることができなかった。

有無を言わず口を塞がれたから。

暴れても泣き喚いても、離しませんよと、耳許で囁かれてしまったから。

わたしはこの人を拒絶できないのだ、と気づいたのは、己れの感情がやはりそうであったと、改めて思い知ったときだった。

「そういつわけなので、あなたにその娘の教育をしてもらおうかと思ひましてね。近いうちに……おや、具合が悪そうですね」

「そう見えるのでしたら、座らせてください」

「どござっ？」

「ありがとうございます」

はあ、と息をつきながら、リリは宰相の執務室にある長椅子に、不敬なことではあるが座らせてもらう。

「今頃ですか」

「なんのことですか」

「一度、エーヴィエルハルトの診察を受けなさい」

「なぜですか」

「おや……自覚がないのですか」

「はい？」

「わたしは、二度と家出などできなくなりますよと、言ったはずですがね」

それは半年前に聞いた言葉であったが、未だ理解できていないものでもある。

「まあいいでしょう。エーヴィエルハルトにはわたしから言っておきます」

「公爵さまに侍女の面倒など」

「彼は婚姻を機に子爵になります。地位的には、わたしよりも下ですよ」

「そついうことではなく」

家柄の問題もあるが、ハルトはサリヴァンの主治医だ。ただの侍女であるリリが面倒をかけられる人ではない。

「諦めなさい。あなたはわたしの妻でしょう」

「いつから妻に？」

「はて……いつでしたかね」
「え？」

婚姻の書類に名前など書いた覚えはないのだが、とりりとはぼけているルカイアを凝視する。

「確か、あなたが成人したその日のうちに、婚姻は成立していたと思います」

「……うそ」
「本当ですよ」

しれつと言われて、頭が真っ白になる。

だが、考えてみると、いい歳のルカイアにその手の話が舞い込んでこないことに、合点がいった。

「だからあの日、あなたを抱いたわけですし」

「なっ……なんてこと言うんですか！」

「そもそも、サリヴァンさまにリンリィ・ラッセと呼ばれたそのときに、気づくものでしょう」

「だ……だって、それは、養子に入ったからと……っ」

「婚姻したからですよ」

「……うそ」
「本当ですよ」

やはりしれつとルカイアは言う。

なんだか言い包められてばかりのような気がするの、きっと気のせいではない。

「エーヴィエルハルトの診察は受けなさい。わかりましたね？」

頷きたくはないが、頷いておいたほうがいいのかもしいない。本
当にルカイアと婚姻したのなら、リリは侯爵家の妻だ。

「……わたしは、ツエイルさまの侍女を、やめたくありません」

「ええ、かまいませんよ」

「いいのですか？」

「家出されるよりましです」

やはり言い包められている、気がする。

「……あの」

「なんです？」

「わたし、ツエイルさまを二度も、攫わせてしまいました」

「そうですね」

「それでも、ツエイルさまをお護りしたいと、本気で思います」

「あなたがそう思っていることは、サリヴァンさまも承知ですよ。

だからあなたはツエイルさまの侍女なのです」

「なぜわたしだったのですか？」

「言いましたでしょう。あなたが、わたしの妻だからですよ」

本当にそれだけ、なのだろうか。

眉間に皺を寄せて俯くと、その眉間をルカイアが指で突いてきた。

「ひとりで生きていくのは、難しいでしょう。ですがあなたの場合、
決意が固過ぎる」

その言葉を、リリは黙って聞いていた。

「縛りたくなるのも当然と、思っていたかったです」

「しばる……？」

「わたしは優しい人間ではありませんからね。利用できるものはずべて利用します。わたしに見つけられてしまったあなたには可哀想なことをしますが、まあ諦めておしまいなさい」

眉間を突いていた指が離れると、今度は手のひらがリリの頤を包み、緩い力で顔を上げさせられる。

「あなたがいるからわたしは目的を遂行できる。すでに共犯者であると、自覚なさいね」

「……閣下」

「ルカですよ、リリ」

「……ルカさま」

「なんです？」

「ルカさまの目的とは、なんですか」

問うと、につこりと笑ったルカイアは、その手を離して窓辺のほうへと歩いて行く。

「この国を護ること、ですよ」

「本当に？」

「おや、嘘に聞こえますか」

嘘ではないだろう。どうしてそこまで、と思うくらい、ルカイアは国のためにばかり動いている。その姿を、もう幾年も見ている。

ルカイアは窓から外を、そして下のほうのなにかを見つめながら、目を細める。

「……ラクウイルが言うのですよ」

「……、侍従長？」

「あなたはそれでも人間ですか、とね」

「……なぜ？」

「さあ……目的のためならなにを犠牲にしようが厭わない、そんな性格のことを言っているのでしょうかね」

だから、とルカイアは微笑む。

「わたしはすべてを護るだけですよ」

それができるのはきつと、自分だけだろうから。

リリにはそう聞こえた。

「ああ……今度はいかにしてサリヴァンさまを国に留めるか、考えねば」

「……サライさまがツェイルさまを攫ったのは、それが目的だったのでしょうか？」

「サライさまは不器用ですからね」

くすくすと笑うルカイアが、見ているもの。それが気になって長椅子を立ったりリリは、窓辺に歩み寄ってルカイアの隣に並ぶと、眼下を見つめた。

「幸せそうに笑っていらっしやる……」

サリヴァンとツェイルが、手を繋いでルーフの中を歩いていた。

ルカイアはサリヴァンの微笑みを、リリはツェイルの穏やかな表情を、それぞれしばらく眺めた。

「……リリ」

「はい」

「護りたいと、思うでしょう」
「……はい」

あの微笑みを、あの穏やかさを、護りたいと思う。そこに嘘はない。

「わたしたちは、あの方々を護らねばなりません……なにも知らずにいた罪は、永劫なのですから」

ルカイアがその身にひとりで背負っているもの。それをリリに分けようとしている。

いやではないと思うから、この感情は厄介だ。

「承知しております」

目を伏せて礼を取ると、ルカイアの手がリリの肩に回る。

「可哀想に、リリ」

それはなにに対するものなのか。

謝罪もなにもなく、ただリリを憐れむルカイアに、それでもリリは厄介な感情を取り払うことはできない。

身を寄り添わせながら、リリはルカイアと一緒に、幸せそうなたりを微笑みながら見つめた。

サリヴァンとの婚姻が、本当の意味で成立した。

ツェイルがそれを理解したのは、具合が悪いままサライとダヴィド大老になにやら言われた日の翌日のことだ。実はもう十日ほど経つらしいが、起きていることだけで精いっぱいだったツェイルには、それを理解するだけの思考力がなかった。

だから、理解した瞬間に驚いたのと同時に、喜びで胸を詰まらせた。

皇帝の婚姻は公式的に発表されることはなく、またサリヴァンがヴァルハラ公爵であることは伏せられていたが、ヴァルハラ公爵の婚姻は公式に発表されるといふ。

それはつまり、ツェイルの婚姻はサリヴァン自身とのものということの意味していた。

「ここまで騙しおおせたのが奇跡だ。いくらおれと兄上が似ているとはいえ、別人だからな」

シェリアン公国の問題を綺麗に片づけたら、サリヴァンは皇帝の座をサライに返し、ヴァルハラ公爵に戻ると言った。その後はツェイルを連れて、ヴァルハラ公爵家が治める領地の片隅に居を移すといふ。

サリヴァンがそれを決めたとき、その身には変化が起きていた。

「ああ……誤魔化せなくなってきたか」

それを見たツェイルに、サリヴァンは笑った。

「国主だと認めてしまったからな……その副作用とでも言えばいいか」

サリヴァンの淡い金色の髪が、いつのまにか金ではなく銀に輝くようになりつつあった。

「兄上やルカはおれが国を離れると心配しているようだが……無用な心配だ。こうなってはもう、おれは国から出られない」

「出られない……？」

「皇帝とは国の象徴……国主とは、国の礎だ」

「礎……」

「国の礎だから、ルーフを咲かせることができる」

ぼん、とサリヴァンはルーフを一輪咲かせ、いつかのようにツェイルの髪に飾る。

「おれはこの国の礎になった」

「……、え？」

「だからもう、国を出られない。兄上の身代わりも限界だ」

サリヴァンは微笑んでいた。しかしその笑みがなにを意味しているのか、ツェイルにはわからない。

「天恵を制御できている今のうちに、旅行でもしておいたほうがいいかもしれない」

どこに行こうか、と訊かれた。
もう夏だから、北のほうにでも行ってみようか、と言われた。

「……サリヴァンさま」

「ん？」

「どういう、意味ですか」

「なにが？」

とぼけているのか、そうでないのか。

ツェイルはじつとサリヴァンを見つめ、そうしてサリヴァンが話してくれるのを待った。

ふと、サリヴァンはツェイルから視線を外す。

「言っただろう。国主の刻印に傷がつけられたせいで、作用すべき

力の半分が失われたと」

「はい」

「おれが国主だと認めさえしなければ、おそらくそれは起きなかった」

「……それ？」

サリヴァンの視線がツェイルに戻る。困ったように、サリヴァンは笑った。

「代償の支払いだ」

「……え？」

「おれはじきに天恵を制御できなくなる……この髪が完全に白くなったとき、本来なら必要のない代償の支払いが始まるからな」

なぜ、という疑問が真っ先に浮かぶ。

「国主の天恵が正常であれば、代償など支払わなくてよかつたんだ」
「正常……?」
「傷をつけられた、からな」

サリヴァンは、右腕を使えない。それは手のひらのほうにまで支障をきたしていて、筆や剣を一時的に握ることはできても、動かし続けることができない。だから大抵は左腕ですべてをこなす。左手で筆を扱い文字を書き、剣もツェイルが使っているような小ぶりなものであれば扱うことができた。

痛めつけられたサリヴァンの右腕は、そこにある刻印の作用まで狂わせ、拳句に代償まで求めようとしている。

「だからおれは、国を出られない。それが代償で、正常ではない天恵にしてしまったゆえのことだから」

髪の色素が抜けていくのは、その前兆だという。皇族特有の白金の髪を失い、国の礎たらんことのみを求められるようになるらしい。

つまるところ、サリヴァンの命は、国が左右するということだ。

「……どうして、サリヴァンさまばかり」

「先帝の愚行は、現帝が償わねばならない……それだけのことだ」

嘆く必要はないし、その理由もない。

サリヴァンはそう言う。

けれども。

どうしてサリヴァンばかり、とツェイルは思ってしまう。

どうしてサリヴァンばかりに、こんなにも重責がいくのだろう。

「そんな顔をするな、ツエイ」

「でも……っ」

「いいんだ、ツエイ。おれはこれで」

「サリヴァンさまは悪くない……っ」

「いいんだ」

いいんだよ、とサリヴァンは繰り返す。

「おれが国の礎になったことで、おまえの故郷を護ることができ。おまえの家族を護ることができ。おれのこの命が、この国を通して、おまえのために使われるんだ」

それはとても幸せなことだと、サリヴァンはただひたすら優しく微笑む。

「いつまでおまえとられるのか、それはわからないが……死ぬまで、そばにいてくれるだろうっ？」

当たり前だ、とツエイは強く頷く。

死ぬまでではなく、死んだあとだって、ずっとそばにいる。生まれ変わることがあるなら、そのときだってずっとそばにいる。

「ありがとう、ツエイ」

ふわりと、頬をサリヴァンの手のひらが包む。

「おれと出逢ってくれて、おれのそばにいてくれて」

「サリヴァンさま……」

間近に迫ったサリヴァンの顔にどきどきしながら、それでもツェイルはその声と言葉を聞き洩らさないよう、必死になって耳を澄ませる。

「ツェイル」

ちゅ、と額にサリヴァンの口づけが降る。その柔らかさは、とてもくすぐったかった。

「愛している」

ああなんて、優しい響きだろう。
なんて、嬉しい音だろう。

「わ……わたしも、サリヴァンさまが、好き、です」

告白すると、一瞬だけ目をまん丸にしたサリヴァンは、しかし次には今まで見たこともないような幸せそうな笑みを浮かべた。

「知ってる」

そう言つと、ツェイルを深く腕に抱き込んで、首筋に顔を埋めた。

「もう二度と離れないから」

おれにおまえのすべてをくれないか。
そう囁かれた。

53 : 泣いて、笑って。(前書き)

最後に絵を載せました。

皆さまのイメージとは異なると思いますが、見てもいいよ、という
お方は一番下までおいでくださいませ。

53 : 泣いて、笑って。

シエリアン公国に四公のひとりであるサグザイル公爵が赴き、跋扈していた悪政が一気に肅清されると、サリヴァンの役目も静かに終わりを告げた。

「サグザイル公が、落ち着くまで滞在すればいいと言ってくれたから、別邸を借りた」

ニツと、嬉しそうな顔をしたサリヴァンが、夜更けに露台のほうから入ってくるなりそう言った。

「城を出るぞ、ツエイ」

「……今から？」

「ああ。おれの役目は終わったからな」

ここに居続ける理由もない、とサリヴァンはツエイルを促す。もとより否はないツエイルなので、手早く着替えると忘れずに銀の剣も持ち、サリヴァンの手を取って露台から外へと飛び出した。

「ラクウィルさまは？」

「先に行かせた。車を用意して待っていてくれるはずだ」

サグザイル公爵の別邸は、皇都の外れにあるという。まともに皇都を歩いたことがないサリヴァンでは辿り着けないので、サリヴ

アンの侍従で騎士たるラクウィルはもちろん共に行く。

数日別邸にて過ごしたあと、機会を見てヴァルハラ公爵の領地へ向かうのだと、サリヴァンは説明してくれた。

「世界を旅することはできないが、国中を旅して歩きたいとは思つ。まずは自分の領地だ」

ツェイルの手を取って走るサリヴァンは、それはもう生き生きと歩いて、輝いてさえ見える。

サリヴァンは十八年、幽閉されていた。

その間に見て回れた外の世界は、アウニの森と皇都の一部だ。それから今に至るまでの五年は、仮初め皇帝であったがゆえに城から出ることが少なかった。

サリヴァンの世界は狭い。

だからサリヴァンは広い世界に心を躍らせている。

そこになにがあるかと、きつとサリヴァンは、外の世界を見続けることだろう。

「ちょっと甘いんじゃないか、サリエ」

その声と、姿に、城を走り抜けていた足がぴたりと止まる。

「ジークフリート……」

剣をかまえつつも気だるそうなジークフリートが、もうあと少しで外に出られるというところで、待ちかまえていた。

「ラクウィルならほれ、ルカに捕まってるんぜ」

ジークフリートの後方に見えるラクウィルの姿と、そしてルカイアの姿、さらにはリリの姿までそこにはある。車の用意はしてあるが、どうやら見つかってしまったようだ。

「おーい、サライーい。ラクウィルは囿じゃなかったぜー」

と、さらにジークフリートはあらぬ方向へ呼びかける。するとジークフリートの視線の先に、ふわりとサライが現われた。ラクウィルと同じ天恵を持つジークフリートによって、サライはここに来たようである。

しかし。

「ぐ……………気持ち悪い」

サライは地につけたとたん、べちゃ、と転んだ。

「ああああ……………なっさけねえなあ、サラ」

転んだサライのもとへ、ジークフリートが呆れながら駆け寄る。

「おまえの手なんぞ借り……………うええ」

「痩せ我慢もできねえのかよ、サラ」

「む、無理だ……………どうしたって気持ち悪……………うおええ」

どうやら空間を移動するその天恵は、サライの苦手なものであるようだ。

「……逃げていいですか、兄上」

「待たんか！……おえ」

「苦手ならやめておけばいいのに……」

「うるさい！……うぶ」

逃げるか、とサリヴァンに促されたので、ツェイルは頷く。

しかし、さて、と一歩踏み出したとき。

「逃げたらシエスタに追わせるからな！」

「やめてください！」

ヴェルニカ皇帝シエスタの名に、サリヴァンが反射的に反応してしまふ。そのせいで、「ふふふ……」と不気味に笑いながら立ち上がったサライが、目をきらんと光らせる。

「おまえのことが大っ好きなシエスタなら、おまえがどこに逃げようど地の果てまで追いかけるだろうな！」

「気持ち悪いこと言わないでください！」

乗せられているのに、とツェイルは思ったが、サリヴァンのシエスタに対する動揺ぶりは知っていたので、仕方ないかと諦めた。

「逃げなければ逃げる！シエスタが追いかけていくだけだ！」

「やめてくださいと言っているでしょう！」

この攻防はいつまで続くのかな、と思いつつ、ツェイルはそれをただひたすら見守る。唐突に始まった兄弟喧嘩らしきものは、互いの騎士に宥められるまで続いた。

「ちょっとだめでしょー、姫。サリヴァンが無駄に疲れちゃったじゃないですかぁ」

とラクウィルに叱られたが、ちょっと面白かったので、とは言い返せなかった。

「すみません」

とりあえず謝っておいて、肩で息をしているサリヴァンに身を寄り添わせる。

サライのほうも、肩で息をしていた。

「……許さんからな」

「……はい？」

「許さんからな」

「……なにがです」

「わたしの前からいなくなるなど、許さんからな!」

それはサライの叫びで、懇願のようにも聞こえた。

「おまえはわたしの弟だ。この城から去るなど、そんなことはさせん」

「……あのですね、兄上」

「それでも出ていくと言うのなら、本当にシエスタに助力を求めからな」

「だからやめてください。本気に聞こえるのでやめてください」
「本気だ」

とたん、しんと静まり返る。

「……ラク、天恵の使用を許可する。シエスタを葬れ」

「うええ！ おれを国家犯罪者に仕立て上げるつもりですかあ？」

「已むを得ん」

「がん！ サリヴァンの薄情者ーっ！」

騎士とまで喧嘩を始めてしまうサリヴァンだったので、さすがにツェイルも宥めに入る。よほどシエスタが嫌いなのだと痛感した。

「サリヴァンさまを傷つけるものは、わたしが許しません。わたしが行きます」

そんなにシエスタが嫌いなら、と仄めかせば、サリヴァンの表情も硬くなる。ラクウイルにはやらせても、ツェイルにはやらせたくないらしい。

ツェイルは無表情にサリヴァンをじっと見つめ、サリヴァンも顔を引き攣らせながらじっとツェイルを見つめると、諦めたようにサリヴァンが深々とため息をついた。

「はあ……兄上、勘違いしておいでのようなので、訂正します」

「む、勘違いだと？」

「おれは城を出ますが、国は出ませんよ」

「……、なに！」

「むしろ出たくても出られません。国主の天恵に縛られましたので」

サリヴァンのその訂正は、サライをひどく驚かせていた。

「ほ……本当に、国を出ないのか」

「ですから、出られません。無理です」

「ど、どういことだ」

「刻印ですよ。傷があるのは知っていますでしょう。それが深過ぎ
て、作用すべき力の半分が失われているんです。国を出たら刻印の
力に圧されてしまうので、身体が耐えられませんか。もうすでにその
兆候はあるんですけどね」

この髪、とサリヴァンは無造作に己れの髪を一房摘む。夜目では
見え難いだろうが、月明かりを浴びればはっきりとその色が浮かん
だ。

「銀色……?」

「今のところはこれだけで済んでいます。あとはどうなるかわかり
ません。猊下にも、そのあたりのことはよくわからないそうですか
ら」

瞠目したサライが、ふらりと一歩踏み出す。

「……サリエ、おまえ」

差し伸べたサライの手のひらが、宙で止まる。それはサリヴァン
が微笑んでいたからだった。

「兄上にこの天恵が出なくてよかったです、思いますよ」

「サリエ……」

「天恵とは神々の気紛れによってもたらされる、天の恵み……です
が、刻印という形までも与えられたこの天恵は、国を護るために強
大な力を有しています。それをおれは傷つけてしまいました。兄
上が無事であるから、この程度で済んでいるんです」

「おまえのそれは、父上のせい……っ」

「おれの養父は、猊下です。先帝ではありません」

「だが、サリエ……っ」

「勘違いしないでください、兄上」

にっこりと、サリヴァンの微笑みが深まる。

「おれが選んだことです」

仮初めの皇帝になったことも、歪んでいるこの人生のことも、国主だと認められたことも、すべて自分が選んだものだと言リヴァンはつきりと告げた。

「兄上のよき治世、未永く続くことを、お祈りしますよ」

そう言ったサリヴァンは、ラクウィルの肩をぽんと叩く。なにかの合図であつたらしいそれは、ラクウィルの姿をそこから一瞬にして消した。

そうして。

「呼べ、ラク」

それはきつと、最終手段だったのだろう。

素直に城を出られなかったときのために、わざと使わないでいたものだったのだろう。そうでなくてもサリヴァンに負担がかかるものだ。使わずに済むものなら、使いたくなかったことだろう。

「待て、サリエー！」

「しばらく放っておいてください。シエスタを搜索の人員にしたら、恨みますからね」

「ぐ……」

サリヴァンが引き留めようとしたサライに念押しした直後、ツエイルの光景は一瞬にして変わる。

そこは、こじんまりとした邸の前だった。

「……やっぱり疲れるな」

「それだけで済んでるサリヴァンもすごいですよー？ サライなんかほら、めちゃくちやかっこ悪かったじゃないですか」

ラクウィルの天恵で飛んだ先で、やはりサリヴァンは疲労を見せていたが、サライのような状態にはならなかった。

「だいじょうぶですか、サリヴァンさま」

「平気だ……兄上は苦手のようなだが、おれは疲れるだけだからな」

それはそうだが、ぐったりしているのはサライと同じだ。

「ここで使っちゃったから、しばらく使えませんが……まあ、どちらにせよあんまり意味ないですけど」

「意味がない、だと？」

「ここ、サグザイル公の別邸なんですけどね」

「……小さいな」

「サリヴァン、忘れてませんか？」

「なにをだ？」

「さてここで問題です、姫」

「なぜそこでツエイに話を振る」

「いいからいいから」

問題ですよ、とツエイはラクウィルの笑みを受ける。なんだろうと首を傾げると、隣でサリヴァンも疑問を浮かべる。

「サグザイル公は、誰のお父さんでしょー？」

「……おとうさん？」

「はい」

誰の父、と訊かれても、わかるわけがない。そもそもツェイルは、サグザイル公爵に逢ったことがないのだ。

しかし、わからないツェイルに反し、サリヴァンは気づいたようである。

「あ……」

と顔を引き攣らせて、ついでに一步後退した。

「思い出しましたか、サリヴァン」

「……ルカの父親」

「はい、正解です」

え、とツェイルは目を丸くする。

「サグザイル公アーヴァイン、ルカイアのお父さんです」

「本当に、ルカさまの……？」

「ちなみにルカイアは、ラッセ候ルカイアですが、ラッセという家名は母方のものなんです。ほら、宰相になったときに戸籍が独立しましたから。それと、ルカイアはサグザイル公と後妻さんとの間の息子です」

家名が違うのは、そういう理由からであるらしい。

「ラク、それとこの邸と、どういう関係がある？」

「ここ、別邸だって言いましたよね？」

「ああ」

「実はルカイアの住まいだったりして」

えへ、とラクウィルは可愛らしく笑ってくれたが、サリヴァンの顔は最悪である。

「……これもルカの策か？」

「いえ、たぶんサグザイル公の策かと」

「騙したな！」

ガツとラクウィルの襟首を掴んでサリヴァンは乱暴に揺するが、ラクウィルは「おれじゃないですよ」と笑う。

「国は出ないと、言っただろうが！」

「あんまり深い意味はないと思いますから、気にしないほうがいいですよ？」

「じゃあどんな意味があるんだ！」

「まずは街に慣れて、人間に慣れて、それから外に出たらいいって意味じゃないですかねえ」

ラクウィルがそう言ったとたん、サリヴァンはぴたりと揺すっていた腕を止める。

ラクウィルのそれは、ツェイルにも頷けるものがあつた。

「サリヴァン、外に出ていたとはいえ、それって垣間見た程度じゃないですか。城で生活していたときはアウニの森に行くくらいで、街にもあんまり下りなかつたでしょう。自分がどんな生活をしていたか、わかつてますか？」

「……それは」

「この前はエンバルの末番街に行きましたけど、それだって初めて行った場所だったからけっこう戸惑っていたでしょう。これからはその戸惑いばかりの生活になるんです。姫に教えられることがたくさんあるでしょう。街や人に教えられることも多くあるでしょう。サグザイル公は、本気でサリヴァンを心配していました。なんせルカエアの父親ですからね。ルカエアだって、おれは好きじゃないですけど、サリヴァンを想う気持ちは本物だってわかっています。心配せずにはいられないでしょう?」

ラクウィルの苦笑に、襟首を掴んでいたサリヴァンの腕が下がる。右腕が動かなくなってしまったのもあるのだろうが、ラクウィルのその言葉に思うことがあるのだろう。

ツェイルはそつとサリヴァンの右腕を撫でながら、寄り添った。

「ねえサリヴァン、もうここは外です。おれはやつとあなたに自由をあげられると思っています。時間はいっぱいあるんですから、そんなに焦らなくてください」

ね、とラクウィルはサリヴァンの頭をぼんと撫でる。悔しそうに唇を噛んだサリヴァンは、それをツェイルに見られたくないのか、寄り添っていたツェイルを強引に腕の中にしまい込んだ。

「おれは外の生活を知らない」

「……わたしがいます」

「なにも、できないかもしれない」

「わたしがそばにいます」

だいじょうぶだ、とツェイルは落ち込んだサリヴァンの背を撫で

る。

なにも知らなくてもいい、なにもできなくてもいい、それらはこれから知り、できるようになればいいのだ。

泣いて、笑って、どんなことも受け入れよう。

泣いて、笑って、手を繋いで。

行けるところまで行こう。

サリヴァンが一緒なら、ツェイルはなにも怖くない。

「さて……じゃあまず、リリに来てもらいましょうかね」

まずは街での生活に、そして人々との交流に、慣れていこう。
ラクウィルのその提案に、ツェイルは頷いた。

「……ツェイ」

「はい」

「こんなおれで、本当にいいのか？」

まだそんなことを言うのか、と思ったが、ツェイルは微笑むだけにした。

「あなたがいいのです」

そう言えば、サリヴァンはホツとしたように、微笑み返してくれた。

>
i
9
4
4
8
0
—
1
3
4
9
<

53 : 泣いて、笑って。(後書き)

本編はこれにて完結致します。

おつき合いくださりありがとうございます。

またお気に入り登録してくださった皆さま、本当にありがとうございます。

本編はこれにて完結しますが、いくつか番外編らしきものを書きたいと思います。

もう少しだけおつき合いくださると嬉しいです。

Extra : 花舞い。1 (前書き)

本編完結、数日後の話です。
サリヴァン視点です。

街を歩いてきたらどうですか、とラクウィルに言われて、サリヴ
アンは目立たない衣装に着替えるとツェイルを誘った。

「……似合わないか？」

正装に近いそれは、しかし貴族なら当然の衣装だとラクウィルが
言うので着てみたのだが、ツェイルは声もなく目をまん丸くするだ
けだった。

「夜会に出かけられるのですか？」

やっと出てきた第一声がそれだ。

「いや……ラクが、貴族ならこういふ格好をすると言うから」

まさか騙されたのだろうか、と思ったが、そばで控えていたリリ
が首を上下に振ったので、どうやらツェイルの感覚が違っているよ
うだ。

「ツェイルさまも着替えましょう」

「え？」

「殿下、少々お待ちくださいね」

「え、ちょ、リリ？」

一般の感覚から離れているツェイルを、リリが引きずるようにして隣の部屋へ連れて行く。サリヴァンはそれを見送ってから、長椅子に腰かけた。

「あれ、姫は？」

自分も着替えたラクウイルが、ひよっこりと顔を見せたとき、サリヴァンはルーフを咲かせながらツェイルを待っていた。

「リリが着替えさせに連れていった」

「ああ……ドレスでも着せるつもりですかね」

「ドレス？」

「見たことないでしょう、サリヴァン」

そういえば、ツェイルの礼装姿ドレスは見たことがない。いや、見たいたと思うこともあるのだが、いやがるというのもわかってるので、求めたことがないのだ。

「ドレスか……」

ちょっと見てみたい、と思うのは、ふだんとは違うツェイルを見たいからだろう。

「そろそろ悲鳴が聞こえるんじゃないですかねえ」

と、ラクウイルが予想を立てた瞬間、ツェイルの叫び声が聞こえた。サリヴァンは驚いて椅子を立ったのだが、ラクウイルはのんびりと笑っただけだった。

「だいじょうぶですよ。やっぱりドレスを着せられてるみたいですね」

「あの悲鳴が？」

「ツアインに聞いたんですけど、だいが嫌いみたいですよ、ドレス」

「……そんなに？」

「どうしても胸を気にするみたいで」

「胸？」

なにか関係があるのか、とサリヴァンは首を傾げる。

「ちっちゃいでしょ、姫のは」

「小さい？」

「……ああ、サリヴァンは気にならないんですね」

「なにが？」

ラクウィルがなにを言っているのかわからない。

「姫の胸、ちっちゃいでしょって話ですよ」

そう言われて、しばらく考える。大ききなど気にしたことがなかったたので、考えたこともなかったのだ。

「あんなもんじゃないか？」

「はい？」

「すごく柔らかいし……抱いていると気になるのはむしろ浮いている肋骨だな。もう少し太らせたほうが……いや、難しいのか。身体が小さいから、たまに怖くなるんだよね……壊しそつで」

「そういうこと真顔で言わないでくれますかねえ、サリヴァン」

「……、あ？ なにか言ったか？」

「……なんでもないです」

サリヴァンにとっては、ツェイルの身体的事情は本人が気にしていようが関係ないと思っている。ツェイルがツェイルであればいい。華奢過ぎる傾向があるのは気になるが、あの小ささが可愛いのだ。だいたいにして、サリヴァン自身が周りとは比べるとひととき華奢である。自分が言われたくないのも、ツェイルになにを言いつもりもない。

さてどんな衣装を着せられているだろう。

「ちょっと、楽しみだな……」

外出用の衣装であろうから、皇城の衣装部屋からごっそり持ってきたどれかを着せられているだろう。見たことのないものを目にするというのは、とても楽しみなことだ。

「そりゃ僕のツェイルですから。可愛いのは当然ですよ。着るのが本当にいやだから、ぶるぶる震えて拒否するところなんかがまた最高に可愛いんですけれどね」

「それも見てみたい……って、ツェイル？」

ラクウィルかと思ったらツェイルの声で、ちょっと吃驚した。しかも庭へ続く露台からの登場だ。

「どうも、殿下。よくも城から逃げてくれましたね。それも僕のツェイルを連れて」

「おまえのじゃないし」

「僕のです。殿下のせいで、僕は閣下に散々こき使われましたよ。事後処理だなんだと、どう考えても僕の仕事じゃないものに振り回された拳句、さっさと殿下のところに戻れと城から追い出されたう

え、実家では妹たちに殴り飛ばされて弟には小言をもらって、本当にもう最悪ですよ」

ねえ、とにつこり微笑まれる。端正な顔には一際目立つ目許の痣は、妹に殴られたせいらしい。

「しかも、真っ先にツェイルのところへ行ったら、悲鳴を上げられるし」

「……、さっきの悲鳴はおまえが原因か！」
「相変わらずちっちゃかったなあ……」

がん、となにか衝撃のようなものがサリヴァンの全身を襲う。ここに来てすぐツェイルに逢いに行き、あの頃合いで悲鳴があがったのならば、ツェイルはツェイルの着替えを覗いたということになる。

「み……見たのか、おまえ」

ふらりとツェイルのほうへ一歩踏み出せば、きょとんとしたツェイルは次の瞬間にはにんまりと笑った。

「隅々までしつかりと」

がん、と二度めの衝撃がサリヴァンを襲う。

「……もしかして、姫の生着替えを覗き見たんですか？」
「いつものことですよけれど」

がん、と三度めの衝撃に襲われた。

「あー……ツアイン」

「なんです、侍従長」

「とりあえず、剣かまえて？」

「はい？」

「斬るから」

ひゅつと風の切る音と同時に、金属同士が交わった鈍い音が聞こえる。

剣を抜いたラクウイルがツアインに斬りかかり、ツアインはそれを受けていた。

「あつはー。僕だからできることですもんねえ」

「それ犯罪ですからねえ、ツアイン」

「僕の特権でしょー」

「姫はサリヴァンの奥さんですよー？」

「僕の妹ですもーん」

「それですべて片づけられると思わないでくださいねー？」

「片づきますよー。だって僕お兄ちゃんですもーん」

と、ラクウイルとツアインの会話を適当に耳に入れつつ、サリヴァンはゆらりと踏み出す。

「退け、ラク」

「お？」

「ぶっ殺す！」

ツアインを。

「……、どこでそんな言葉憶えてきたんですかー」
「街っ！」

とにかくそこを退け、とサリヴァンは駆け出すと、帯剣しているその柄を左手に持つと鞘から抜く。

「僕に敵うと思っっているんですか、殿下」

余裕顔のツアインに腹が立たないわけがない。

「一瞬だけ気を逸らせればそれでいいさ！」

ラクウィルがツアインの前からふっと消えてすぐ、サリヴァンは正面からツアインに斬りかかった。

「殿下の剣は軽いですよ」

「だろうな」

もとより剣には頼っていない。

サリヴァンはふと身体を正面からずらし、剣を手放した。

「え………?」

サリヴァンの唐突なその行動はツアインの意表を突くことになり、体勢を崩させた。前倒れしかかったツアインの隙をサリヴァンは見逃さず、懐に入り込むと胸元を掴み、身体を反転させながら背負い投げる。ズダンッ、と床に叩きつけられたツアインは、その頑丈さから痛みに顔を歪めることなく、サリヴァンのその動きにびっくりしていた。

床に仰向けになったツアインの頭許で、サリヴァンは仁王立ちする。

「どこから踏まれたい？」

にんまりと笑って見下ろせば、ツアインは顔を引き攣らせた。

「踏まないという選択はないんですかね？」
「ないな」

と言いながら、サリヴァンはツアインの顔をめがけて足を踏み出す。もちろん避けるだろうというのは予測済みだったので、案の定避けられてもふらつかない。

サリヴァンの踏み避けて身体を起こしたツアインは、あつというまに防御の姿勢に入った。

「二度めはないですよ？」

そんなのは承知だ。

とりあえず一矢報いたということに、サリヴァンは満足しておく。

「二度とツエイの部屋に入るな」

「無理なお願いですね」

「願いじゃない。命令だ」

「……僕がきみに逆らえないと知っていてそれですか」

「ああもちろんだ」

ツアインに対してはすべて命令形にしてやる。そう決めてツアインを見れば、今までにない仏頂面のツアインがいた。せつかくの美形が台無しである。

「……ねえ、殿下」

その表情を見られないようにするためか、ツアインがふと俯いた。

「あの子を幸せにして」

その言葉に、急に気持ちが引き締められる。

「僕じゃできないことを、殿下ならできるんです……だから……あの子を誰よりも幸せにしてください」

それはツアインの、兄としての本音なのだろう。

「……ああ、幸せにする」

そう返事をする、ツアインは深々と息をついて、サリヴァンに背を向けた。

そうして進んだその先は。

「言ったそばからツエイの部屋に行くか！」

「だってお兄ちゃんだもん」

言うなり駆け出し、ツエイがいる部屋に駆け込まれる。ばたんと扉が閉まり、慌てて追い駆けて扉を開けようとしたが、鍵をかけられてしまった。

「ツアインー！」

油断した、と後悔しても遅い。

「ちょっとかつこいー、とか思ったのに……サリヴァンかつこ悪っ」

「しるをいっ」

ダンツ、と地団駄を踏み、サリヴァンは庭へと回るべく身体を反転させた。

Extra : 花舞い。1 (後書き)

一話ずつ読み切りの番外編にしようと思いましたが、なぜかこんなことになりました。

またおつき合ってください。

Extra : 花舞い。2 (前書き)

サリヴァン視点です。

ツェイルが着替えをしている部屋に、窓のほうから侵入すると、そこにはツアインの姿はなかった。

「……ツアインは？」

問うと、ツェイルは扉を指差す。

「どうやらすぐに出て行っただけらしい。逃げた行動の意味がわからない。」

「そうか……」

それにしても、とサリヴァンは着替えたツェイルをじっと見る。

「あ、あの……」

踵まで隠れるほど長くて柔らかそうな上着に、その中は下衣だらうか。

「言ってしまうえばいつもの恰好であるツェイルのその姿は、しかしいつもは下ろしたままにしてある髪を、横に結えつけていた。」

ツェイルの横でリリが深々とため息をついた。

「どうしてもだめでした……」

それはきつと、ツェイルに女性らしい衣装を着せられなかったことに対しての無念だろう。

サリヴァンは苦笑する。

「ツェイにはそれが一番似合う」

華やかな衣装など着せられた日には、きつとツェイルはツェイルでなくなってしまう。それはサリヴァンの望むところではない。

サリヴァンはありのままのツェイルを気に入っている。変わって欲しいなんて思わない。

部屋に入り切ってツェイルに歩み寄ると、結えられた髪の一房に触れた。

「髪、結えられるくらい、伸びたな」

出逢った頃は短かった。結えられるだろうくらいの長さはあったが、リリに手間をかけさせるくらいのもものではなかった。そのときはそれでもかまわなかったのだが、これからは違う。

「外に出るときは、軽くでも結えておく必要があると、リリが……」

そうだ。

髪をきつちりと結えることは、婚約者がいる、或いは既婚者であることを意味する場合がある。最近ではそういう風習も薄れているが、貴族社会ではまだ根強く残っていた。

「いやなら結えなくていい。ただ……街に出るときは、できるだけ結えるようにしてくれ」

髪を伸ばさせようと思っている。それはサリヴァンの狭い心によるものだ。

「少しだけ、ツエイの自由を、縛らせて」

サリヴァンの視線の先に気づいたツェイルが、恥ずかしそうに身を引く。逃がさないように手を繋ぐと、サリヴァンは微笑んだ。

「行くか」

街はいつでも賑やかだ。

それを知ったのは、城を出て生活を始めてから。

見るものすべてが珍しく、活気にあふれた人々の行動を眺めることは、とても新鮮だった。

「いつもながら賑やかだな。城とは違う喧騒がすごい」

「そうですね」

ツェイルとふたり、手を繋いで街をふらふらと歩く。なんの目的もなく歩くことが、ツェイルとふたりでいると楽しいものに思えるから不思議だ。

「なにか欲しいものはないか、ツエイ」

「サリヴァンさまこそ」

「おれは……」

なにかが欲しいと思ったことは、あまりない。必要にかられて欲しくなるときはあるが、それ以外はとくに、サリヴァンは欲しいと思っただけがない。

「あ……」

「どうした？」

「あれを……見てきてもいいですか？」

「……ああ、エンバルの武具か。いいぞ」

剣を扱えないサリヴァンには縁遠いものではあるが、ツェイルには身近なものだ。なにか見たいのかはわからないので、一緒に来ていたりりに追従を任せ、サリヴァンは遠目からツェイルを眺めることにする。

「一緒に見ないんですか？」

ラクウィルがそう訊いてきたが、サリヴァンは首を左右に振った。

「おれよりりりのほうが、話がわかるからな」

多少ならサリヴァンも武具の話はできる。しかし、ツェイルについていけるほどの知識はない。

「まあ、サリヴァンには縁がなかったもの、ではありませんかね」

「情けないがな」

「そうでもないですよ？ 剣が鍬の人もいるんですから」

「……なるほど」

「それだけじゃないですよ。戦い方はいろいろとあるものです。ほら、あの露店のおじさんだって」

ラクウィルに促されて目にしたのは、露店で焼き菓子を売る人だ。あたりに漂っていた甘い香りは、どうやらその焼き菓子だったようである。

「ツエイは甘いもの、好きかな」

「女の子ですからね」

「じゃあ、戻ってきたら食べてみるか」

「サリヴァンは苦手でしょう」

「知りたいものがたくさんある。選り好みしている余裕なんかない」

「……それはよい傾向です」

にっこりと、ラクウィルは嬉しそうに笑う。

サリヴァンは再び視線をツェイルの後ろ背に戻した。

「……小さいな」

「へ？ ああ、姫のことですか」

「壊しそうだ」

「……ほどほどに」

そうだな、と笑ったときだった。

武具屋の店員なのだろう若い青年が、ツェイルに話しかけた。その頬は紅潮していて、商売のためとは思えない笑顔を振りまいている。

それを見ていて、なんだか胸がざわついた。

「サリヴァン？」

「……おれは心が狭い」
「……そうですかねえ」

ツェイルはいつもどおりだ。青年が頬を紅潮させて話しかけていても、愛敬すら振りまかない。

それでも、ざわざわと、胸中が震える。
今すぐにもツェイルに駆け寄って、青年から引き離したい。

そう思った矢先、いかにも傭兵然とした大柄な男が、ツェイルと青年に話しかけた。

瞬間的にラクウィルが剣の柄を握る。

「姫になにかしたら、斬りかかりますよ」

そう言ったが、待て、と制止する。ツェイルの表情が変わったからだ。

「知り合い……か？」

ツェイルは大柄な男に、サリヴァンにも見せる穏やかな微笑みを見せた。また大柄な男のほうも、ツェイルを敬うように軽く頭を下げ、その視線に合わせて身を屈めて話している。リリが慌てて間に入るうとしていたが、それをツェイルは「だいじょうぶだ」とでも言うかのように宥めてもいた。青年のほうは大柄な男の登場に気まぐずになったのか、店の奥へと消えている。

気づけばサリヴァンは足を踏み出していた。

「ツェイ」

呼ぶと、ツエイルの視線がサリヴァンを捉え、パツと笑顔を見せる。

ああ、やはりこの笑みは自分にだけ与えられた特権のようだ。そう思いながら、サリヴァンも微笑む。

「サリヴァンさま」

あとちょっと、というところでツエイルのほうから駆け寄ってきたので、サリヴァンはそれを抱きとめる。

「イルのいい人が、そいつは。なんか軟弱そうだなあ」

そう言った男の声に、せっかくの笑顔も引き攣る。

「サリヴァンさまに失礼なこと言わないで、ジエダ」

「そう見えるもんは仕方ないだろう、イル」

「ジエダ」

ツエイルにジエダと呼ばれ、ツエイルをイルと呼ぶその男は、長身のラクウイルよりも確かに背が高く、そしてサリヴァンよりも遙かに大柄だった。

グツと、悔しさに言い返したい言葉が詰まる。同時に情けなくもなってくるが、ツエイルと並んでちょうどいいのは自分であることが、救いだっただ。

「なあイル、こんな男のどこがいいんだ？ おれのほうがいい男だろっ」

ジエダのその言葉は、サリヴァンの胸を鋭く刺す。ざわめいてい

た心を、大きく揺さぶるものでもあった。

「だから、なに？」

「おれにしておけてこと」

ジェダがそう言ったとたん、サリヴァンはツェイルを両腕に抱き込んで、ジェダを睨みつけた。

「ツェイはおれのものだ」

「さ、サリヴァンさま……っ」

ツェイルは慌て、ジェダはきよとんと目を丸くする。

「おれのものだ」

諦めてばかりで、求める前からそれを断たれてていたから、欲しいと思うものがなかった。

だから、初めて欲しいと思ったものがある。

「誰にもやらない」

子どもみただと、自分でも思う。けれどもそんなことすらかなくり捨てて、欲したものがある。

「ツェイは、おれのものだ」

ぎゅうつとツェイルを抱きしめ、そこに人目があっても関係なく、サリヴァンはジェダを睨み続ける。

ふと、呆けていたジェダが、ふっと笑った。

「おれの名前、教えてやるつか」

「……は？」

「ジエライダ・メルエイラだ」

したり顔をした男は、自分はメルエイラの者だと名乗った。

「メルエイラの……？」

「ああ。とはいえ、おれは傭兵になったから、あの邸には住んでないけど」

僅かだが血も繋がっている、とジエダは言う。

「そうか……あんた、イルのこと大事なんだな」

静かに苦笑したジエダは、サリヴァンに抱きしめられたツェイルの頭をポンと撫でる。

「よかったな、イル」

「ジエダ……」

「メルエイラには変な掟があるだろう。どうなることかと心配だったが……よかったな」

どうやらジエダはサリヴァンを試したようだ、それに気づいたのは、ジエダがメルエイラ家に挨拶してくると言ってそこを立ち去ったあとのことだった。

「本当に、親戚なのか？」

「はい」

年に数度しか逢うことがないけれども、数少ないメルエイラの関係者であることは確からしい。よく剣の相手をしてもらったと、ツエイルは言った。

「天恵を使っても、ジエダに勝ったことが一度もありません。トウーラ以外では、ジエダだけです」

「それは……かなり強い、のか？」

「兄さまと互角かと」

それはラクウイルとも互角であるということだ。さすがはメルエイラの者、と言つべきだろうか。

「手合わせしてみたいですねえ」

ラクウイルがにやりと笑いながらそう言つと、ツエイルもふと微笑んで「ぜひ」と頷く。

「そこで笑つちやだめでしょー、姫。危ないですよ、って言つと」
「るですよ」

「ラクは強いでしょう？」
「う……」

ツエイルの返しが意外だったのか、ラクウイルはちょっとだけ言葉に詰まり、そうして苦笑した。

「姫とは手合わせしませんよ」

「なぜですか？」

「姫と手合わせして、もし怪我でもさせたら……」

ちらり、とラクウイルが視線を寄こしたので、サリヴァンは思い

つきり笑顔を振りまいてやった。

「おれまだ楽しく生きたいです」

「はい？」

「それより姫、なにを見てたんです？」

「あ……」

サリヴァンの笑顔の意味をきちんと理解したラクウィルは、その笑顔から逃げながら、ツェイルの気を逸らすために今まで見ていたと思われる武具屋の品物を見やる。

「あれを……見ていました」

「小剣、ですか？」

「いえ、その隣の……」

ツェイルが見ていたのは、武具屋では滅多に見られないものだった。

「鉱石……か？」

「はい」

返事をしながら、ツェイルはサリヴァンの腕の中からするりと抜けて行く。名残惜しくて追いかけたら、見ていたという鉱石の前で、ツェイルは顔だけ振り向かせた。

「サリヴァンさまに、この鉱石をどうかなって」

「おれに？」

サリヴァンが装飾物を好まないことを知っているのに、なぜ、と思う。

「この鉱石は本物です。ガルデアがそう言っています。だから、サリヴァンさまを護るものになるって」

にこ、とツェイルは微笑む。それは宝ものを見つけた子どもみたいな笑みで、サリヴァンは少しだけ驚いた。

「リリ、わたしが自由に使えるお金はあるか？」

「あ、はい。少々お待ちくださいね」

ほんの僅かな時間だけ動揺していたのだが、その間にツェイルはあっというまにそれを購入してしまっていた。

それだけでなく、ツェイルの買いものは続いた。

「リリ」

と、ひたすらリリを連れ回し、なにかを探して歩く。サリヴァンとラクウィルはその後ろを追いかけた。

Extra : 花舞い。3 (前書き)

サリヴァン視点です。

案の定、と言つべきだろうか。

「体力なさ過ぎ……見失つちゃったじゃないですかあ、サリヴァン」
そんな文句を言われても、どうしようもない。

「うる……さいつ」

肩で息をしながら、サリヴァンは広場にある長椅子に埋もれる。
飄々としているのはラクウィルだけで、そして見るべきはずのツ
エイルの姿はどこにもない。ついでにリリの姿も見えない。
一言で表わすなら、先にラクウィルが述べたとおりである。

ツエイルを見失った。

「あんなに、行動力が……あるとは」

「リリも一緒ですからねえ」

「ああ？」

「リリの特技は家出ですよ。街の地図なんてなくても、どこにでも
行けちゃうれしいですから」

「うわぁ……」

敵うわけがない、と素直に思う。体力の問題以前に、サリヴァン

は街に不慣れだ。

「まあリリが一緒なら、姫も安全ですけど……姫単品でもだいじようぶそうですが」

「ツエイはこの街の出身じゃない」

「腕っ節のことですよ」

「……、否定はしないが」

悪漢に襲われてもツェイルなら返り討ちに、いやむしろそれ以上のことができるであろう。

護りたいと思うのに、なんだか護られてばかりのような気がしてくる。先刻だって、若い青年に言い寄られていたのに、助け舟を出したのはメルエイラ家の者だった。サリヴァンを護るものになるといつて、鉱石を購入していた。

このもやもやとした気持ちはなんだろう、とサリヴァンは呻く。

「そんな呻かなくても、姫の居場所ならわかりますよ。ルーフェさんに頼めばいいことですし」

マチカちゃんもいますしね、とラクウィルは己れの精霊を呼び出す。

その姿を見てふと、そういえば天恵というものがあつたな、と漠然と思った。

「……ラク」

「はい」

「ちよっと待て」

「ん？」

サリヴァンは長椅子を立つと、おもむろにぎゅっと手のひらを握り、そうしてゆっくりと開く。ぼん、と一輪のルーフが咲いた。

「見せものでもする気ですか」

とラクウィルは言うが、そんな気はさらさらない。

くるりと振り返り、怪訝そうな顔をしているラクウィルの胸元にルーフを飾ると、手のひらを握ったり開いたりした。そうしてその手のひらを、地面にぴたりと押しつける。

「サリヴァン？」

「やってみたいことができた」

目を瞑って、肩の力を抜く。

サリヴァンの天恵は、国主の天恵だ。だからヴァリアス帝国にか生息しない、国花であるルーフを、咲かせることができる。サリヴァン自身にはそれくらいしかできないが、この天恵がサリヴァンにあり、且つここにいるからこそ、国は生きている。

サリヴァンの命は、国そのものと言ってもいい。

だからこそ、できることがあるはずだ。

「……ああ」

「うん？」

命を国に左右されているから、感じるものがある。それを限定して感じられるようにすることも、やろつと思えばできるはずなのだ。

例えばそう、ツェイルがこの国のどこにいるか。

「ツエイ」

国はサリヴァンに味方する。力の器であるサリヴァンに、そのすべてを見せてくれる。

だから、ツエイルの居場所を教えてください。

『サリヴァンさま？』

ツエイルが、サリヴァンに気づいた。

そのときには。

「サリヴァンっ？」

ラクウイルの声が聞こえた。けれどもサリヴァンには、いとしき者への想いのほうが強かった。

「ツエイ」

ツエイルに向かって手を伸ばす。

その指先が、花びらへと変化しながら、風に紛れて消えていつているとも気づかず、サリヴァンはツエイルだけを見つめ続ける。

「待ってください、サリヴァン！」

ラクウイルの制止を聞きつつも、サリヴァンはひたすらツエイルを求め続けて、その気配を辿る。

そうして。

「さ……サリヴァンさま」
「ツエイ」

見つけた。

こんなところにいた。

そう思いながら両腕に、ツェイルをかき抱く。両腕に感じるぬくもりは、確かにツェイルのものだ。

「花……びらが、サリヴァンさまに……」

なぜか呆けているツェイルに、サリヴァンは「ん？」と微笑みを向ける。

「本当に、サリヴァンさま……？」

「なにを疑う、ツエイ？」

「だって……花びらが、サリヴァンさまに……」

「花びら？」

なんのことだ、と思う。人気の少ない通りをきよろきよろと見渡して花びらを探してみるが、どこにもそんなものは見当たらない。

しかし。

「……、ん？」

先ほどと景色が違う。

なぜだ、と思うまもなく、ふっとラクウィルが目の前に現われた。

「なにやってんですか、サリヴァン！」

怒鳴られた。

それも、笑みのない本気の怒鳴りに、サリヴァンはツェイルと同じように呆けてしまう。

「無事ですね？ 身体どこにも異常ありませんね？ ちゃんここにいますね？」

なにかを確認するようにポンポンと頭や肩に触れられる。ラクウイルのそんな行動に、なにを思ったのかツェイルまで同じことをする。

「……サリヴァン」

「な……なんだよ」

「さっきやったようなこと、もう二度としないでください」

「なんのことだ」

「その無自覚が厄介なんですよ。いいですか、姫から離れたくないのはわかりますけど、自分だけで探そうとしないでください。なんのためにおれがいると思ってるんです。なんのために、おれに空間移動の天恵があると思ってるんです」

「いや……だから、なんのことだ」

なにをそんなに怒っているのか、サリヴァンにはさっぱりわからない。

「はああ……とにかく、もう二度とやらないでください」

「よくわからないのだが」

「どうせ説明しても理解しないでしょうから、いいです」

「おれはそこまでバカではないぞ」

「そういう意味じゃないですよ。まったく……姫、あとでちょっといいですか」

ラクウィルの怒りの矛先が、ツエイルに向く。同じようにリリもそれには含まれているようで、ふたりしてビクツと震えていた。説教決定のようである。

しかしながらサリヴァンとしては、ラクウィルがなにに対して怒っているのかはともかく、その怒気を浴びて震えたツエイルがぎゅつとしがみついていたので、それでよしとした。

「買ったものは済んだか？」

「は、はい……」

「そうか。なら、もう少しだけふらついて、帰ろうか」

こくん、と頷くツエイルが可愛い。ラクウィルの怒気が思った以上のものだったのだろう。

蕩けそうな笑みを浮かべてツエイルの頭を撫でると、額を擦りつけるようにして甘えてきたので、さらに嬉しくなってサリヴァンはツエイルを深く抱き締めた。

Extra : 花舞い。4 (前書き)

ツエイル視点です。

街を少しふらついて、露店の甘い焼き菓子を食べさせてもらったあと、ツエイルたちは邸に帰った。

ラクウィルはあれからずっと不機嫌だった。

そのせいで帰宅が早まった、のもある。

「サリエ殿下、ラッセ宰相閣下がお待ちです」

「ルカが？ ふむ……わかった」

帰宅してすぐ、邸の侍従がルカイアの来訪を告げたので、サリヴァンは「ちよつと行ってくる」と言っ、ツエイルとラクウィル、そしてリリを居間に残して侍従と出て行った。

そのとたんである。

「姫」

ひつ、とツエイルは身を竦ませ、反射的にリリの背中に隠れる。自分を呼んだラクウィルを見ることもできなくて、必死に顔も隠してみたのだが、そこはやはり最強の騎士でサリヴァンの侍従だ。ツエイルの腕をむんずと掴むと、リリという優しい鉄壁から引き摺り出す。

「姫、おれが言いたいことわかりますか」

びくつと身体が震える。ラクウイルの声は冷えていたし、怒っているというのとはとても伝わってくるし、自分がやったことにも罪悪感があるので、とにかくラクウイルが怖かった。

「油断したおれも悪いんですけどね、姫も自覚が足りません。サリヴァンはもう、姫を中心に生きていますよ」

それはツエイルも同じだ。サリヴァンを中心にして生きている。だから幾度も頷いた。

「ねえ姫、悪いことではありませんよ、姫が自由に行動するのは。でもね、一言サリヴァンになにか言ってからにしてください。いきなりなくなったりしないでください。迷子になるかもしれない場所なら、サリヴァンから絶対に離れないでください」

うんうん、とツエイルは必死に頷く。

「ねえ姫」

くん、と腕を引っ張られて、少しよろめきながら力に促されて長椅子に腰かけると、その前に膝をついたラクウイルに下から見つめられる。

それはもう怒っている顔ではなくて、心配そうな顔だった。

「サリヴァンのあの天恵は、花舞い、と言います」

「……はなまい？」

「見たとおりの現象で、花が舞うんです。ルーフを咲かせることができるということは、その化身でもあるということですから、サリ

ヴァン自身が花になって舞うんですよ」

「……では、あれは、幻では」

「違いますよ」

まさか、と思ったが、ツェイルはサリヴァンの天恵をよく知らないし、サリヴァン自身もよくわかっていないようなところがあった。サリヴァンのそばにずっといたラクウィルなら、だからこそ知っているものがあって当然だ。

「でもね、姫……花舞いは、綺麗なものじゃないんですよ。あれは歪んだ天恵なんです」

「歪んだ……天恵？」

綺麗だった、と思った心を見透かしたようなラクウィルの言葉に、ツェイルは首を傾げる。ラクウィルは悲しそうな顔をしていた。

「詳しくは言いません。言いたくありません。だから、察してください。サリヴァンに花舞いをさせてはならないと、理解してください」

「……ラク」

「おれは唯一無二のあるじを失いたくありません」

その言葉に、ラクウィルがなぜ説明を拒んだのか、納得した。

「サリヴァンさまが消えてしまうの？」

ツェイルの問いに、ラクウィルはさらに顔を歪める。

「ここから……わたしの前から、いなくなってしまうの？」

ラクウィルはふつとツェイルから視線を外して俯いた。それは無言の肯定だと、さすがのツェイルも理解できる。

「そんな……」

国主の天恵がそんなに重いものだなんて、知らなかった。いや、信じられない。いつも遊ぶようにルーフを咲かせているから、そういう綺麗な天恵のだとばかり思っていた。

なのに。

働くべき作用の半分を失っただけで、サリヴァンの身はますます儂くなった。国に縛られるというのはこういうことかと、漸く理解し、ツェイルは唇を噛んだ。

「ごめんなさい……ごめんなさい、ラク」

「姫……」

「ごめんなさい」

ちやんと考えて行動すればよかった。

あのとき、瞬間的に欲しくなったものを、どうしても手に入れたくて勝手に動き回ってしまったことを、今さらながらツェイルは深く後悔する。

「……泣かないで、姫」

一粒こぼれ落ちた涙を、ラクウィルが拭ってくれる。それで止まる涙ではないから、ツェイルは涙をこらえた。

「このことは、いつか話そうと思っていました。花舞いは、おれと

猥下しか知らないことです。サリヴァンに自覚はありません。だからよくわかっていないと思います」

「教えない、のですか？」

「たぶん、理解しないでしよう。代償だと勘違いするかもしれない。花舞いはそんな優しいものじゃないのね」

「こらえようと思った涙が、やはりツェイルの意思を無視してこぼれ落ちる。」

天恵の代償は、生死に関わるようなものにはならないのがほとんどであるが、決して優しいものではない。それを優しいとラクウイールは言ったのだ。つまりは代償よりも、もっと過酷なものを要求されるということだ。

「わ、わたし、サリヴァンさまがいないと、いや」

「姫……」

「サリヴァンさまのそばにいたい。サリヴァンさまがいないと、生きられない」

「……ええ、わかっていますよ」

ふわつと優しい笑みを見せてくれたラクウイルに、ツェイルは込み上げてきたものを抑えきれなくて、涙に顔を歪めた。

「ま、まも、まもりたい……っ」

「おれも、そうですよ」

「まもら、ないと……わたしっ」

「だいじょうぶ。そのために、おれがいるんです。だから姫も協力してくださいね」

ほん、と頭を撫でられる。それはサリヴァンの仕草と似ていて、

ツェイルにその想いを彷彿させるものだった。

「らく、わたし、サリヴァンさまが……っ」

「わかってますよ。だからそんなに泣かないで、姫。ね？」

「だって、サリヴァンさま……っ」

「サリヴァンも姫も、おれがちゃんと護ります。それをわかってくれれば、おれはそれでいいですよ」

よしよし、とその腕に抱き込まれて宥められる。まるでツアインのようなことをしてくれるラクウィルに、ああこの人はずっとサリヴァンのお兄さんだったのだと、ふと思った。

「らく」

「はい？」

「わたし、らくのこと、好きです」

「おれも姫が好きですよ。サリヴァンのことも、ね」

腕を離れて、互いに視線を合わせる。

「ふたりでサリヴァンを護りましょう。ね？」

「……はい」

にこ、と互いに自然な微笑みが浮かんだ。

「さて……次は、リリ」

と、ラクウィルは微笑みをにんまりとした意地悪な笑みに変えて、「えっ？」と驚いているリリに振り向いた。ゆっくりと立ち上がり、小首を傾げる。

「姫を巻き込んで家出しちゃだめでしょー？」

「う……」

「姫への注意とリリへの説教は、別の話ですからね？」

「あ、あは……」

「ルカイアに知れたらどうなるでしょうねえ？ ちよつど帰って来ているみたいですし、報告しちやいましょうかねえ？」

「うはっ！ そ、それだけは勘弁してくださいー！」

リリのその慌てようは、ツェイルには珍しい光景だった。おかげで涙も止まった。

「さあつて、ルカイアに報告してきますかねえ」

「きやあああ！ や、やめ、やめてくださいっばー！」

「姫の地図になったリリが悪いんですよ？」

「もうやりません、もう二度とツェイルさまを巻き込んで家出しませんから！」

「え、本気で家出しようとしたんですか？」

「う……っ」

ラクウィルは人をのせるのが上手い、と思う。

「い、いえべつに、閣下がいないこのときが好機チャンスなどは、思っていますんでしたよ。ええ、もちろん。ツェイルさまを家に送り届けたらお暇をいただこうなどとは一度たりとも」

「思ったわけですね」

「きやあああ！」

悲鳴を上げながらツェイルのところへ逃げてきたリリの後ろには、ルカイアが不機嫌そうな顔で立っていた。その横にはサリヴァンも、

苦笑しながら立っていた。

「まったく……先にわたしのほうから報告ができて幸いですよ」

「え！ 閣下、喋っちゃったんですか！」

「当たり前ですよ。わたしはあなたの夫ですよ」

「わたしからお話しようと思いましたがのいい」

「そのためにツェイルさまと一緒に行方をくらませた、などと言ったら、足枷をつけて寝台に縫いつけますよ」

「本気に聞こえるのでやめてください！」

「本気ですよ。ここまで来て諦めを知らないなど、呆れるばかりです」

「諦めませんよ」

「はああ……やはり、ツェイルさまに頼むしかありませんね」

ん、とツェイルは首を傾げる。ルカイアが話の矛先をツェイルに向けてきたのもあるが、なにかものすごい話を聞いた気がしなくもない。

「ツェイルさま、お頼みしたいことがあります」

「……その前に、一ついいですか？」

「なんででしょう？」

「あの……リリの旦那さまというのは」

「わたしですが、なにか？」

瞬間的にツェイルは目を丸くし、じっとルカイアを凝視してしま
う。

「婚姻……されていたのですか」

「この前までわたしも知りませんでした」

「え、リリ？」

本人の承諾もなしで婚姻ですか、とツェイルはさらに驚く。

「とくにお話するようなことでもありませんでしたら、説明はしませんでしたが……気に障ったのでしたら謝罪致します」

「い、いえ、そんな」

リリが人妻であったことは驚きだが、べつにそれ知らなかったからと責めるつもりはないので、慌てて首を左右に振る。

「ツェイ」

「は、はい」

ルカイアの隣でずっと苦笑していたサリヴァンが、ゆっくりとした歩調でツェイルのところまで来ると、ツェイルの隣に腰かけて小さく息をついた。

「リリをしばらく見張ってくれ」

「……、はい？」

なんのことだ、と思う。

「ツェイルさま、お頼み申し上げます。リリを、見張ってください」

ルカイアにまでそう言われて、ますます意味がわからなくなる。

「どつという意味ですか」

なぜリリを見張らなければならぬのか、と当人を見上げれば、顔を引き攣らせたリリがなぜか逃げ腰になっていた。

もちろん先回りしていたルカイアに捕まったが。

「ご報告申し上げます。このたびわが妻、リンリイが懐妊致しました」

「……かいにん？」

「はい。つきましては、妻の悪癖につき合っていたいただきたく、ツェイルさまにお願い申し上げます」

「……え？」

ちよつと待つて、と思う。

「あの……リリが、かいにん？」

「おおよそ半年ほどかと思われませう。太ったように見えていたでしょうが、単に身籠ったというだけのことです。しかし身籠ったというのに家出をしたがるという悪癖が抜けませんので、ツェイルさまに見張っていたいただきたいのです」

瞬間的にツェイルはじつとリリを見つめてしまふ。顔は引き攣ったままであったが、どうやらそれは照れ隠しだったようで、頬がちよつとだけ赤らんでいた。

「……リリ」

「は、はい」

「赤ちゃんが、できたのか？」

「う……はい」

なんてことだ、とツェイルは勢いよく長椅子から立ち上がる。

「みつ、身重の身体で、わたしの侍女などしてっ」

「いいえ、わたしが望んだことです……」

「でも！」

「だいじょうぶです、ツェイルさま。わたし、ツェイルさまの侍女を辞めたくありません。ただ……」

どの頃合いで話を切り出せばいいのか、わからなかったとリリは俯く。

「それに、わたしはただの侍女ですし、ルカさまの妻だなんて……」

不安なのか、とリリの気持ちに思い至ると、自分とは正反対なその気持ちにツェイルは肩の力を抜いた。

「リリ」

「……はい」

リリの手を取り、にこりと微笑む。

「おめでとつ、リリ」

自分のことだけで手いっぱいになっていたことを、情けなく思う。もっと周りを見て考えればよかったと思う。

けれども、そうした中でリリが身籠ったことには、なにか意味があるのかもしれない。

もっともっと、視野を広げよう。

サリヴァンのように、見るものすべてを受け入れよう。

きつと楽しいことがたくさんある。

嬉しいことがたくさんある。

ツェイルはにっこりと、笑った。

Extra : 花舞い。4 (後書き)

番外編「花舞い。」はこれにて終幕します。

Extra : 祈り。1 (前書き)

『花舞い。』から二日後くらいの話、サリヴァン視点です。

Extra : 祈り。 1

その日は朝から雨が降っていた。

目覚めるなり腕が痛んだため憂鬱になりながら起き上がり、ふとサリヴァンは隣にツエイルがいないことに気づいた。

「ツエイ？」

呼んでみるが、もちろん返事があるわけもない。

「あ、やっと起きましたねえ、サリヴァン」

「ラク、ツエイは？」

「とつくに起きて、遊んでますよ」

「遊ぶ？」

「混ぜてもらいたいなら、さっさと着替えて顔洗って、食事する」とですな

ほらほら、とラクウィルに追い立てられて、サリヴァンは言われたとおりに行動する。

言われたことをすべて終えた頃に、その香りに気づいた。

「……甘い匂いがする」

「姫が遊んでますからねえ、厨房で」

どこでなにをして遊んでいるのかと思いきや、どつやらツエイルは厨房にいるようである。

「菓子でも作っているのか？」

問うと、なぜかラクウィルは微妙な顔をした。

「あれを菓子というのか……芸術というのか……おれには判断できませんね」

「どういう意味だ」

「見ればわかります」

とラクが言うので、サリヴァンは厨房に向かう。

仄かに香る甘い匂いは、それだけではどんな菓子なのか想像がつかない。もともとサリヴァンは甘いものが得意ではないので、その知識も乏しいこともあり、首を傾げながら厨房を覗いた。

「ツエイ？」

声をかけると、厨房を預かる料理人たちがサリヴァンの登場に驚き、慌てて壁際まで退いた。そこまで驚かれるのもなんだか悲しいなと思いつつ、手前にいた若い料理人を捕まえておく。

「ツエイは？」

「あ、あそこにおられます」

と、料理人が指差した場所は、火元から近い作業台だった。サリヴァンに背を向けて、少し身を屈めながらなにか作業している。周りにいる者たちが、興味深そうにそれを見守っていた。

「なにを作っている？」

「あの、それが……」

よくわからないのです、とその料理人は言う。ラクウィルと同じようなその反応に、サリヴァンは怪訝に思いつつもツェイルのほうへと足を向けた。

「ツェイ？」

呼ぶが、もちろん返事はない。かなり集中しているようで、幾度か呼びかけてやっと振り向いてくれた。

「あ……サリヴァンさま」

「なにを作っている？」

振り向いたツェイルの手許を覗いて、沈黙する。

ラクウィルや先ほどの料理人が言っていたことが、理解できた。

「……硝子細工？」

「食べられますが」

「え？」

透明感の強い薄青のそれは、サリヴァンの目には美しい硝子細工に見えた。しかし、食べられるという。

まさか。

「飴か？」

問うと、ツェイルはこくと頷く。

「それは……すごいな」

ツェイルが作っていたのは、ルーフの花を模した飴細工らしい。花びらはもちろん、雌蕊や雄蕊まで精密に彫られてあり、ルーフがそのまま結晶化したような、とても美しい細工になっている。

「本当に食べられるのか？」

疑うわけではないが、そう訊き返したくなる逸品である。ラクウイルが芸術と表現した理由も頷けるというものだ。

「ただの飴ですから」

「これがただの飴か？ 職人並みじゃないか」

いったいどこで、こんな技術を身につけたのか。

食べられると言うが、それすら勿体ないと思わせる飴細工だ。細工に使ったらしい道具に手のひらほどの小剣があるというところがツェイルらしい部分だが、それにしてもこれは美しい芸術である。

「すごいな、ツェイ」

「え……あ、ありがとございます」

「触ってもいいか？」

「もちろんです。よかつたら食べてください」

「それは勿体ない、が……飴だからな」

食べてしまうには勿体ないのだが、永久保存できるものではない。それでも一日や二日くらいなら飾れるだろう。

「もう少し鑑賞してからいただこう」

「……はい」

ツェイルにそれを手渡されて、まるで本物のルーフのように指先で摘んで持つ。

「ルーフそのものだ……綺麗だな」

「ありがとうございます」

「ほかに？」

「今はそれだけ……もういくつか作るうかと」

「ぜんぶおれにくれるか？」

「こんなものでよければ、もちろん」

にこ、とツェイルは微笑む。よく笑うようになったこの頃だが、それでもいつ見てもいとしさが込み上げる微笑みだ。

「ラクに見せてくる」

なんだか嬉しくなって、それを自慢したくなって、サリヴァンは踵を返すと厨房を出た。

繊細な鉛細工を壊さないように注意しながら、ラクウィルの姿を探して邸内を早足で駆ける。

「ラク！」

寝室の掃除でもしていたのか、そこから出てきたラクウィルを見つけた。

「おや、もう戻ってきたんですか、サリヴァン」

「見る！」

「ん？」

ずい、とラクウィルの目の前に鉛細工をかざす。ちょっとだけ目

を睜ったラクウィルは、すぐに目を細めた。

「ああこれ、芸術ですよねえ……飴とは思えません」

すでに正体は把握しているようで、ラクウィルは感心したように言った。

「ツエイは手先が器用だな」

「ほんとですよ。だってこれ、食べれちゃうんでしょ？」

「ああ。おまえにはやらん」

「え、くれてもいいのに」

ひどいなあ、と言うラクウィルにニツと笑いかけたあと、サリヴアンは再び厨房に戻るべく身を翻し、廊下を走った。

厨房に戻ると、最初に来たときのような光景があった。声をかけてもツエイルに反応はなく、飴の塊に向かっていている。

すごい集中力だと思いながら眺めていると、誰かが横に立った。

「まだ続けてたのか」

「……ツアイン」

出かけていたのか、騎士の装いをしたツアインだ。

「ツエイルのあれね、昔の名残り。末の妹が産まれたあたりだったかな……食料が無くて、明日食べるものにも困ったことがあるんだよ」

「え……？」

生粹ではなくとも、貴族であるのに、そんなことがあるのかと驚いた。

「ちょうどその頃は、ツエイルに天恵があるとわかった時期でもあった。僕が初めて戦場というものを知った頃でもあるけれど」

「……それは」

先帝が下した愚かな命令、それは嫡子であるツアインを始めとしたメルエイラ家の者たちを生死の境目に追い込んだ。それはサリヴァンもルカイアから聞いて知っている。

「なんできみがそんな顔するの」

「……先帝の罪だ」

「きみは関係ないよ。滅ぶべき一族だった僕らは、きみを最後のあきらめと決めたんだから」

至極真面目な顔で、ツアインはそう言った。城でよく見ていた感情のない顔つきであっても、その薄紫の瞳に嘘はない。

「ただね、それでも食うに困って、どうしようもなくなった時期があるんだよ。だから傭兵紛いなことはたくさんやったし、人もたくさん殺した。生き延びるために、なんでもやったよ。ここ数年はきみのおかげで平和だけれどね」

ふっと、ツアインの横顔が微笑みを取り戻した。

「もしおれがあの塔から出ることがなかったら……城から出ることがなかったら、どうするつもりだったんだ」

「そんなの決まってる」

カシャン、とツアインの剣が音を立てた。

「メルエイラの者らしく、城の人間すべてを抹殺して、きみを攫っていたらうね」

それはあまりにも過激なことだ。

「国を潰す気だったのか」

「それくらいの覚悟はある。むしろ、閣下はそれを目論んでいたよ
うだけれどね」

「ルカが？」

「腐れた連中を殺せるのは、僕みたいな異形の者だけだよ」

また己れを異形と言うツアインに、サリヴァンは顔をしかめる。

「おまえはただの人間だ」

「言ったでしょ。僕は閣下にとって道具なんだよ。きみも、僕のこととは道具として扱ったほうがいい。人間だなんて思わないことだ」

そう言いながらサリヴァンに笑みを向けるツアインに、胸が痛んだ。

「ツアイン……」

「きみがツェイルのために国を護るなら、僕も国を護るよ。そのためだけにサライ陛下を生かしているからね。もしサライ陛下がきみになにかしたら……僕は躊躇わずに彼を殺すよ」

ツアインの瞳は変わらない。だからこそ本気なのだということが伝わってくる。

「……そんなことは許さない」

「残念ながら、その命令は聞けないよ。きみになにかあったら悲しむのはツェイルだから、僕はその報復のために必ず動く」

「ツァイン」

「それにね、殿下」

ついつと視線をツェイルに戻したツァインは、その目を細めた。

「いくら心が空っぽでも、記憶というものはなかなか消えないものでね。僕はもう二度と、あんな思いをツェイルに与えたくないんだ」

どんな生活をしていたのかは、ツァインの横顔を見ていればわかる。聞いていたメルエイラ家の噂以上のものだったのだろう。

「だから僕は、ツェイルのあの姿がすごくいやだ」

「いや？」

「ツェイルが初めて人を殺したときのことを思い出すから」

「……っ」

「僕ら一族はそうやって生き延びた。あの苦しい日々を、ツェイルの天恵に頼って、生き延びたから」

ツァインのその告白は、サリヴァンの心をひどく、痛めつける。

「おまえも、そうだったんだろ」

吐き出すように問えば、ツァインの横顔は歪む。

「僕は空っぽだからなにも感じない。けれど確実に、ツェイルは傷つき、悲しむことすらできなくなるくらいに、壊れていった。僕と同じ代償を支払っているようなものだよ……それでも、僕らは生き

延びるために、ツェイルに耐えてもらうしかなかった。まだ十歳にも満たない子どもだったのに……ツェイルは僕と一緒にその道を歩いた」

サリヴァンは自分の人生が歪んだものだと思っている。けれども、それ以上に過酷な道をツェイルやツアインは歩いてきたのだ。それを慮ると、今のこの生活が少しだけ不安になる。

「……ツェイは、なぜこれを作る」

ふと視線を、硝子細工のように美しい飴に落とす。

「ルーフの花なら、たぶんきみを想っているだけだよ」

「どんなものでも作るんじゃないのか」

「そうだね。大抵はツェイルのそのときの気分で作る。けれどルーフは初めて見るよ」

「これが、初めて？」

ここまで精密にルーフを彫れるのなら、作ったことがあると思っていた。しかし、どうやら違うらしい。

「ほとんど無意識だけれど……子どもが好きそうなぬいぐるみとか、おもちゃとか、そういう形のを飴で作るんだ」

「子ども……？」

「そうして作っては、僕ら家族や、周りの者たちにかけて、喜んだ顔を見て安心を得る。けれど……作ったうちのいくつかは、弔いのために墓地へ持っていく」

「……なぜ、墓地に」

「僕ら兄妹が、メルエイラが、いったいどれだけの命を奪って生き延びたと思っているの」

無表情にサリヴァンを見たツアインは、瞠目したサリヴァンのその反応に少しだけ目を細め、そうしてふいとそばを離れて行った。サリヴァンは動けなかった。

Extra : 祈り。1 (後書き)

* ツエイルは飴は練ったり捏ねたり、彫ったりしています。
料理しているというよりも、工作している状態に近いです。

Extra : 祈り。2 (前書き)

サリヴァン視点です。

ツェイルの姿を厨房でしばらく眺めたあと、サリヴァンは自室に戻った。ラクウィルに用意してもらった一輪差しの花瓶にツェイルが作った飴のルーフを飾り、それを卓に置いて見るともなく眺める。しとしと降り続ける雨音が煩わしい。腕は痛むし、刻印が疼いている感覚はあるし、なによりこんな雨の中にいたツェイルの姿を思い出すので、なんだかイヤだった。

長椅子にだらしなく埋もれていると、こんこん、と扉が叩かれて、ルカイアが姿を見せた。

「失礼します、サリエ殿下」

「おれをそう呼ぶつてことは、また兄上か」

この邸がルカイアの居住地で在る以上、サライの使いとしてルカイアが現われるのは日常茶飯事となっている。むしろサライの使い以外のことでサリヴァンのところへ訪れることのほうが、今や少ない。

「後宮の取り潰しが承認され、建て替えの着工が決まりましたので」「それで？」

「私有地の森を一部改修し、繋げるそうです」

「だから、なんのために？」

「殿下の居城です。森の離宮、と命名されました」

やはりそれか、と思う。

ルカイアのこのところの訪問は、サリヴァンを城に戻すためにサライが行っていることの報告と、そのための説得である。そんなことをしている暇があるなら政務に勤しめ、と思うのだが、言っても聞いてくれない状態だ。

「諦める。おれは城に戻らない」

「困ります。この国には、城には、殿下が必要です」

「おれは、戻らない」

この会話は、いつも繰り返される。どちらも引くつもりがないために、延々と続くのだ。

しかし、今日は違った。

「では仕方ありません」

諦めたような言い方をしたのはこれが初めてで、サリヴァンは怪訝に思つて長椅子から背を起こした。

「ヴァルハラ家所領地の剥奪をここに」

なに、とサリヴァンは瞠目する。

「ルカ、おまえ……っ」

「これはサライ陛下の勅令です」

そう言つて、ルカイアは卓の上にその書類を置いた。目を通すと、国璽の印とともにその内容が書かれてある。

「おれは国を出ないと、出られないと、言っただろうが」

「殿下の安全のためです」

「おれにはラクとツアインがいる。ツエイがいる。これ以上ない安全圏にいるだろうが」

「それでも、なにが起るかわかりません。どうか陛下のおそばに、そして猊下のお言葉を賜りたく、ここにお願い申し上げます」

そんなのは願ってもなんでもない、ただの脅迫だ。

「おれは、自由を望むことも……許されないのか」

「いいえ、殿下は自由です。ですが、その御身……皇族であること……理解ください」

国の象徴とも呼べる花の、刻印がある。国主の天恵がある。それがここまで自分を国に縛るとは、思ってもいなかった。

「すべてが、縛られるのか……おれは」

ツェイルが現われるまで望みもしなかった自由を、天恵を認めることで得たつもりでいた。いや、得たと言えるだろう。国主の天恵を持ち、その刻印が身体に根づいている限り、サリヴァンはこの国の最高権力者だ。なんでも自由が効く。

けれども。

サリヴァンが欲しいのは、そんな自由ではない。

「諦めるのは、おれのほう……か」

どこか遠くへ行きたいと思った。それが叶わなくても、国中を見

て歩いて、護るべきものをこの目で確かめたいと思った。

そのためには、サリヴァンは城に戻らなければならぬらしい。先帝の愚行によるその罪によって、次を恐れたサライやルカイア、重臣たちの思惑は、どうしてもサリヴァンを城に留めようとする。その姿を城で見なければ、安心できないのだから。

「ご理解ください、殿下。サライ陛下は、不安なのです」

「……国主が消えることか」

「いいえ、ご自身の弟が、心配なだけです」

「十八年、おれの存在を知らなかっただろうに」

「だからこそです。おわかりください、殿下。殿下が国主であられることは議会も承知のことですが、それでも帝位を奪わんとしていると愚かな勘違いを持つ者もいます。サライ陛下は、それを危惧しておいでなのです」

「そのためにツエイをおれに嫁がせ、ツアインの弱みを握ったのはおまえだろうが」

「殿下をお護りするためです」

「おまえの目論見どおりになった。それでも満足しないか」
「足りないくらいです」

ルカイアは、国主を失うわけにはいかないという考えが強い。

昔からそうだ。サリヴァンをサライの身代わりに仕立てあげるときも、国を護ることしか考えてない行動を取った。

国のために存在しているのは、サリヴァンやサライよりもむしろルカイアのほうだと、サリヴァンはいつも思う。

「……今度はなにをする気だ」

「はい？」

「断り続けて、それが通るとは思っていない」

利用できるものはすべて利用する、それはルカイアの持論のようなものだ。

「……そうですね」

ふと、ルカイアは視線を逸らす。少し考えたのち、にっこりとした笑みをサリヴァンに向けた。

「手足を潰しましょう」

それは、瞬間的にサリヴァンから血の気を引かせた。

「なんのことを、言っている」

「さあ。なんでしょうね」

誤魔化したルカイアに、気づくとサリヴァンは掴みかかっていた。

「ツエイになにかしてみろ……おれの狂犬たちは国を潰す」

「ツェイルさまにはなにもしませんよ。それがあなたの弱点だとわかってるのに、なぜそんな真似をしなければならいのですか」

安全は保証しますよ、とルカイアは笑う。つまり、そういう意味ではないということだ。逆を言えば、サリヴァン自身になにかするということでもある。

「わたしの目的はただ一つ……そして願いもまた、ただ一つです」
「国の安寧なら、おれが生きている限り、この天恵が皇族の誰かに引き継がれるまで、続くものだ」

「そうです。皇族のどなたかに、それは顕われます。そのどなたかが、あなたの御子かもしれませぬ。あなたは国主であられ、そして

皇族なのですから」

「兄上の御子かもしれない」

「それはわかりません」

先帝は、皇帝国主の刻印を持った弟を殺め、その座を奪った。そうして自分は、皇帝国主の刻印のある子どもをふたり儲け、ひとり殺そうとした。

サライの子が、サリヴァンの子が、ふたりのようにならないとは限らない。なにせふたりに刻印があるのだ。どちらかが刻印のある子どもを儲けるかもしれないし、あるいはふたりと同じように産まれてくるかもしれない。

さまざまな可能性を、完全に否定することなどできやしないのだ。

「少しくらい、夢を見てもいいだろう……っ」

幸せ、というものが、どんなものなのか、サリヴァンにはよくわからない。けれども、そうなりたいと願ってしまう。

だからツェイルに惹かれた。

ツェイルとなら幸せになれると思ったから、ツェイルだから幸せになれると思ったから、それを願い夢を見た。

愛する者と、笑いながら生きるその夢を。

「……その夢を、そばで確かめたいと思ってはいけませんか」

「え……？」

「わたしもサライ陛下も、国の中枢から離れることができません。だから、あなたにそばにいてもらいたいのだと……そう思っているだけです」

胸元を掴んでいたサリヴァンの手をそつと離すと、ルカイアは困ったように笑って、「それだけです」と繰り返す。

「今日はこれで失礼します。後日お迎えに上がりますので」

サリヴァンの意思を無視した言葉を告げ、ルカイアは背を向ける。そのまま部屋を出て行ったが、サリヴァンはなにも言えなかった。

あれが、ルカイアの本心なのだろうか。そう感じたから、なにも言えなかった。

すとん、と長椅子に腰を落とし、頭を抱えて深く息を吸い、そして吐き出す。

呼吸のようにすべてが上手く流れてくれたらいいのに、と思った。

「失礼しますよ、サリヴァン」

と、ラクウイルが顔を出した。

「姫がいつのまにか出かけちゃいました」
「出かけた？ どこに」

顔を上げてラクウイルを見ると、さあ、と肩を竦められた。

「雨降りですし、視界もあまりよくないですから、そんなに遠くへ行ったわけじゃないと思いますけど……」

「追いかける」

「そのつもりです。見つけたら天恵で飛ばしますか？」

「雨脚がひどかったら、そうしてくれ」

「わかりました。あ、サリヴァンはどうします？」

探しに行きますか、という問いに、少し考える。

「……ツアインと出る」

「ああ、そういえば姫が出かけるまでそばにいたみたいなんですよねえ……まあ、とりあえずおれは先に出ますよ」

「ああ」

返事をしてサリヴァンは再び長椅子に埋められると、煩わしく思う雨音を聞きながら瞼を閉じる。そうすると感じるものが、近くにあった。

ぱち、とサリヴァンは目を開く。

「行くぞ、ツアイン」

それだけ言って、長椅子から立ち上がる。薄手の上着を羽織ると、部屋を出て玄関に向かった。

「僕は行きたくないんだけど」

玄関の扉を開けてすぐ、ツアインがそこに背を預けながら立っていた。

「ツエイの行き先を知っているだろう」

「……まあね」

「おれを連れて行け」

本気でいやそうな顔をしたツアインは、しかし無言でサリヴァンに傘を差し出した。

Extra : 祈り。3 (前書き)

サリヴァン視点です。

すぐそばに街道がある場所に、ツェイルはいた。ラクウイルが苦笑しながらツェイルの傘を持ち、それに謝っている様子が見られる。その手には、飾りつけられた飴細工のルーフを一つ持っていた。

「おまえの言ったとおりだな、ツァイン」

サリヴァンは遠目から見つめながら、同じように立ち止まっているツァインに言った。

「この方向なら、両親が眠ったところに行くつもりなんだろうね」

「……モルテイエの？」

「もつとも、僕ら一族の中で墓参りなんてするのは、ツェイルくらいだけれど」

「え？」

歩き出したツェイルとラクウイルを追いかけるように、ツァインも歩き出した。慌ててサリヴァンも歩みを進める。

「ツェイだけというのは、どういう意味だ」

「そのままだよ」

「そのまま？」

「人殺しの一族が、死んだ人間を悼むなんて、できるわけないだろ」

ぼんやりとした眼をしながら言ったツアインに、サリヴァンは言葉を呑み込む。

「身内が死んでもそれは同じ。だから両親が死んでも、茶毘に付したあとは骨を砕いて、粉々にして、土に帰したから、実際の墓はないよ。雨風に流されて、もうそこに骨の欠片も残ってないだろうし」

だから墓参りはしない。それがメルエイラ家の者にとっては当たり前のことだと、ツアインは言った。

「墓参りしようにも、墓石もないからね」

それは昔からの習わしだという。

「死んでやつと自由になった者たちを、縛りつけてはならない。それがメルエイラ一族の考え方。だから、昔から墓は持たないし、墓参りなんて習慣もない。死んだら燃やして、土に帰すだけ。僕らの祈りは、そこで終わる」

「祈り……」

「メルエイラという鎖から解き放たれたことへの、祝福だよ。よかったね、これで自由だ、世界はようやく受け入れてくれる……そういう祈り」

悲しい祈りだ、と思わなくもない。けれどもメルエイラが辿った道を考えれば、彼らにとって一番の安らぎは死であったのだろう。彼らに墓がないのも、それゆえのことなのかもしれない。

「悲しくはないのか」

「僕はなにも感じないって言ったでしょ」

「それでも」

「……ツェイルが弔いに歩く姿は、いやなものだよ」

一族の考え方に反しているから、というわけではなく、ツァインはそれがいやだという。

「なにも感じないはずなのに、ツェイルの心だけは、響いてくる……悲しくて、悲しくて、潰れそうになっている心が、響いてくる」

いやなものだよ、とツァインは繰り返した。

「ツェイは、悲しむことを忘れないんだな」

「僕は始めからそんなもの、感じないけれどね。だからいやなんだよ。その分だけツェイルは疲れてしまうから」

「だが、それがツェイだ」

「……そうだね」

感情を殺しても、殺しきれなかった部分が、あの行動なのだろうと思う。いつそツァインのように、本当になにも感じられなければ、きっと楽になれただろうにと、サリヴァンは息をついた。

「ところで殿下」

「ん？」

「城に戻るの？」

あの会話を聞いていたのか、と思う。

「……戻れと、ルカと兄上がうるさい」

「黙らせようか？」

どうやって、て訊ねようとして、やめた。サリヴァンになにかあ

れば躊躇いなく殺す、と口にしていたのを思い出したからだ。

「……ヴァルハラ家の領地を没収された」

「それ、脅迫だね」

「それを言ったら、すべてがそうだ。初めからおれには無理だったのだと、そう言われているようで腹も立つ」

「どうするの？」

「……考えている」

「答えが出るの？」

「さあな」

どうしたいかなんて、本当はずっと前から決まっている。けれども、それができない立場にあることも、わかっている。

「いつそ利用しちやいなよ、殿下」

「利用？」

「城に戻って、国庫を使い尽くせばいい」

その権力を使って、とツアインは軽い調子で言う。思いもよらなかつた提案に、サリヴァンは苦笑をこぼした。

「いい考えだな」

「だろ？ それくらい簡単に考えればいいよ」

「簡単に？」

「国から出られないのだとしても、国中は歩ける。けれどそのためには路銀が必要だ。城に戻ってやるから国を歩かせろ、って感じに」

確かに、それもそうだ。

「拘り過ぎたかな……」

「閣下は真面目だから、流されちゃだめなんだよ。それに殿下は、本当の意味での自由を得たわけじゃない。もっと我儘になりなよ」
「おまえにそう言われると、変な感じがする」
「僕は侍従長と違って、気儘な狂犬だからね」
「だから厄介だ」
「使い易くていいでしょ」

それはどうかな、と苦笑しながら肩を竦めたとき、前方のツェイルの足が止まり、その場に屈んだ。

「……あそこか？」

「どうだったかな……あれ以来、僕は足を運んでいないから」

正確な位置は憶えていない、とツァインは困ったような笑みをこぼした。

ツェイルが屈んだ場所は、街道からだいぶ外れた、野草や野花が群生しているところだ。そこに墓石のような目印はなく、死者が眠った場所のように思えない。

それでも、ツェイルはそこに飴細工のルーフを置くと、じっとそれを見つめて動かなかった。祭神殿の神官のように、両手を組んで目を瞑ることもない。ただ一点を、じっと見つめ続けている。

だから、きつと、あれがツェイルにとっての祈りなのだろうと、サリヴァンは思った。ツァインが言っていたように、悲しくて悲しくて、潰れてしまいそうな心を、いつもああやって抑え込んでいるのかもしれない。

「強い、祈りだな」

「やめろって、言えないでしょ」

「ああ……」

あの行動に、口を出してはならない。邪魔をしてもいけない。ツアインが、あの行動をいやがりつつもやめさせない理由が、なんとなく頷けた。

しばらく動かなかったツェイルが漸く立ち上がったとき、いつのまにか雨脚は弱まり、晴れ間が覗くようになっていた。

「サリヴァンさま？」

ついて来ていたサリヴァンに気づき、ツェイルはきょとんとした顔でこちらを見ている。

「おれも、挨拶をしていいか」

「え？」

「モルティエには世話になった。奥方にも、逢ったことはないが、挨拶しておきたい」

「……………どうして、ここが」

言いかけて、サリヴァンの後ろにツアインを見つけた。

「兄さま……………」

「僕はなにもしないよ。父上も母上も、消えていったメルエイラの者たちも、ここにいてはならないからね」

ふい、と視線を逸らしたツアインは、ツェイルに歩み寄るサリヴァンには続かず、そこから動かなかった。

「ツアインから話は聞いた。ここに、モルティエを帰したと」

ツェイルの隣に並んで、置かれた飴細工のルーフを見つめる。

「報告を、しようと思って」

「報告？」

「大切な人に、巡り逢えたから……」

うつすらと頬を赤く染めているその顔を見れば、大切な人、というのが自分であろうことくらい、サリヴァンにもわかる。

「そうか」

少し嬉しく思いながら、サリヴァンは傘を閉じてラクウイルに渡し、膝を折ると礼式を取る。胸に右手を当て、ツェイルがそうしていたようにじっと一点を見つめたまま、心の裡で「ありがとう」と呟く。

ありがとう。

あなたのおかげで、おれは生き延びた。そうしてたくさんの人と出逢い、別れ、いとしき者に巡り逢えた。命が惜しいと思うようになった。いとしき者との幸せを望むようになった。すべてはあなたが、利己心だと言いながらも取ってくれた行動のおかげだ。

ありがとう。心から、感謝している。

サリヴァンは胸に当てていた手のひらをぎゅっと握ると、ゆっくりと開いて一輪のルーフを咲かせた。それを、飴細工のルーフと並べて置く。

立ち上がって、ツェイルの手を取った。

「帰ろうか、ツェイ」

「……はい、サリヴァンさま」

きゅっと握り返されたぬくもりに微笑むと、綺麗に晴れた空の下を、ゆっくりと歩き出した。

Extra : 祈り。3 (後書き)

番外編『祈り。』はこれにて終幕です。

Extra : 願わくはこの大地へ。 1 (前書き)

番外編『祈り。』から数日後、サリヴァン視点です。

手許を明るくした光りに、ふと顔を上げる。明りが必要になるほど辺りが暗くなっていることに気づき、少しだけ驚いた。

「……………どうした」

「サライさまがお逢いしたいとのことですよ」

「わたしに用はない」

「先日保護しました元公子のことで、どうしてもお訊ねしたいことがあるとのことですよ」

「……………なんのことだ？」

元公子など保護した覚えはなく、またいつのことかもわからず、怪訝に思っただけ顔をしかめれば、「サリヴァンさまがお連れした公子ですよ」と教えられる。

「……………ああ、あの天恵者か」

「はい」

「サリヴァンの判断することだ。わたしには関係ない」

「それが……………サリヴァンさまから、言伝があるとか」

「要らぬ」

「そう言っと思いましたが。仕方ないですね……………サライさまにはお帰りいただきますよ」

「領域に入れるな」

「御意」

ことりと卓に明りが置かれ、手許を照らし続ける。
なにごともなかったかのように、再び書物に目を落とした。

*

*

軽くうんざりとしながら、サリヴァンはそれを聞いていた。

「おれに、登城しろと？」

「はい」

こともなげに即答したのはルカイアで、その後ろではジークフリートが、ラクウィルの急襲に備えて空気をピリピリさせている。

「おい、サリエ。ラクウィルは本当にいねえんだな？」

「しつこい。見ればわかるだろ。今はおれとツアインと、ツェイシ
かない」

ラクウィルがリリの買い出しの手伝いで外に出ているのは、幸いな
のかそうでないのか。

「なんか……どっからか冷気が」

ああ、ツアインだろうな。と思う。笑みを張りつかせているツアインも、危険ではあるのだ。

「それで？ おれが登城してどうにかなるのか、ルカ」

話をルカイアに戻して、サリヴァンは唇を歪める。

ルカイア曰く、聖王猊下にお逢いしたい、とのことだ。しかしそれができないので、サリヴァンに登城して欲しいらしい。

「われわれでは猊下に逢うことすら叶いませんので」

「逢えるだろうが。森の中に抜け道があったはずだ」

「通れなくなっています。通じていた扉はすべて、閉ざされてしまいました」

「……なにをやったんだ、兄上は」

ため息が止まらない。

開放的だった、というわけではないが、聖王がおわす場所にはいくつか扉がある。実際の場所は皇城の中心、私有地の森の真ん中に建立した淡の塔であるから、森の中に入れば辿り着けないこともない。むしろ辿り着けないことのほうがおかしいとサリヴァンは思うのだが、通じる扉に仕掛けがあるように、森にもなにか仕掛けがあるらしい。

「アルトファルを怒らせたのか？」

「いいえ、そのようなことは」

「塔はアルトファルの領分だ。猊下の命令で塔を閉ざしたのだとしても、なんの理由もなくそんなことはしないぞ」

「そう言われましても……」

言葉を濁すのは、ルカイアにしては珍しいことだ。つまり、本当に身に覚えがないのだろう。

同時に、サリヴァンの登城要請が、それを口実にしてはいるものの、猥下への面会が叶わないゆえのことであるというのは嘘ではないとわかった。

「サリヴァンさま」

ため息をどうにか止めようとしていたところでツェイルに袖を引っ張られ、サリヴァンはすぐに笑みを取り戻す。

「どうした？」

「庭に出ている、いいですか？ 木苺の収穫をリリに頼まれているのです」

傍らの癒しを失うのは痛手だが、そもそもその空気を割ったのはルカイアとジークフリートの登場であったから、サリヴァンはそれらを撃退すべくツェイルを退避させることにした。それにツェイル自身も、この空気の中は居辛いだろう。

「見えるところにはいてくれ」

「はい」

いざというときにはツェイルに追い払ってもらおうと、庭へはツェイルひとりで行かせた。ツェイルが収穫を頼まれたという木苺は、サリヴァンがいる位置からも見えるところにある。ひとりで外に出しても問題はないだろう。

ツェイルを庭へ送りだしてから、サリヴァンは視線をルカイアに戻した。

「猊下のところに赴くのはかまわないが、扉を閉ざされた理由は見つけておいたほうがいいぞ」

「理由の一つでしたら、思い当たります」

「なんだ？」

「殿下が城におられないことです」

またそれか、と肩が落ちる。

「理由にならん」

「なります。殿下をお育てになつたのは、実質は光りの精霊アルトファルだと伺っております」

「だから扉を閉ざしたと？ そんなわけがあるか。アルトファルのあるじは光りの天恵者エイリ・ノ・フィーノ、そして猊下だ。おれじゃない」

「それでも」

どうしてもサリヴァンを城へ戻したいらしいルカイアは、その可能性を強く信じているようだ。

こうなってくると、ツアインが言っていたように、単純に考えすぎてしまったほうがいいかもしれない。けれども素直に頷きたくもない。城へ戻ったら、以前のような生活が待っているだけかもしれないのだ。

「…………ツアイン、どう思う」

視線をルカイアからツアインへ転化し、サリヴァンは息をつく。

「どう、と訊かれてもねえ…………猊下の真意も、光りの精霊の気持ちも、僕なんかに理解できるものじゃないからねえ」

「おれが城に戻れば済むことか」

「どうだろう。それとは関係ないように思っけれど」

人間はいつだって神々の事情に振り回されるものだからね、とツアインは肩を竦める。

どうしたものかと考えながら、サリヴァンは視線をルカイアに戻した。

「なぜ猊下に逢いたい？」

問えば、元公子についてのことと、と返される。

「キサネ？ キサネのことなら、おまえが後見だろうに」

「天恵の発現は、わたしの手に負えるものではありません。まして彼の天恵は、神々に匹敵するものです。神学者の話では、神の代替わりではないかとも」

「……発現したのか」

「殿下が城を出られてすぐ、われわれには三日ほど前にその旨を」
「であれば、確かに猊下の意見が欲しいな」

そのことについてなら、やむを得ない、とも思う。

「どんな力だ？」

「曰く、破壊である、と」

「破壊？」

まるでツェイルの天恵を嘲笑っているようだな、とサリヴァンは顔をしかめる。

「ちらりと拝見しましたが、ツェイルさまとは種の違う力のようでした。ゆえに、判断が付きません」

「聖か、魔か？」

「はい。シエリアンはわが帝国の属国、ゆえに属性でいうなれば聖、魔ではありません。しかしキサネさまの力は、魔のそれに近いのはと」

「そう言われると、ツェイの属性が聖ではないと言っているように聞こえる」

「ですから判断がつかないのです。猊下のお言葉を賜りたいのは、キサネさまのこれからを考えてのことでもあります。もし属性が魔であるのなら、その身柄はわが帝国ではなく、ヴェルニカ帝国に預けるべきかと」

「ツェイをヴェルニカへ送れと、言っているように聞こえるが？」

おれから奪うつつもりか、と睨めば、滅相もない、とルカイアは顔を歪めた。

「ツェイルさまはわが帝国にいるべきお方です」

「ツアインもいるし？」

「メルエイラがわが帝国を永住地とした、それが答えではありませんか」

「……そうとも言えるな」

好きなように言うことも、決めることもできるものではあると、サリヴァンもわかる。

しかしながら、元公子であるキサネ・クロフトのことをルカイアに一任したのはサリヴァンであるから、そのルカイアが猊下の判断も仰ぎたいと言うのであれば、猊下には表に出てもらわなければならない。閉ざされた扉が開かなければ、それらは始められない。

サリヴァンはツェイルの姿が見える露台を向くと、窓を開けた。

「フェンリス、聞こえるか」

室内に入ってくる風に、その声を乗せる。

「来てくれないか。猯下に逢いたい」

昔、いつもそうして呼んでいたように、或いは呼ばれていたように、聖鳥フェンリスに語りかけた。

耳を澄ませば、反応が早いフェンリスの声が聞こえてくる。

『聖王はそちらにおるぞ』

「……………こちらに？」

『われは邸の真上におるしの』
「邸？」

どづいことだ、と露台に出て、空を仰ぐ。屋根の端に、白いものが見えた。

「フェンリス？」

呼びかけると、ひょっこりとフェンリスが顔を見せた。

「聖王も漸くわれの乗り方を理解してくれたようだな」

「……………ということは」

近くに猯下がいる、ということだ。

「猯下はどこだ」

と探すまでもなく、ツェイルの横にその眩しい姿を見つけた。

Extra : 願わくはこの大地へ。2 (前書き)

ツエイル視点です。

ここにいて、きちんと話を聞いて、自分も考えたほうがいい。

そう思ったものの、ツェイルはサリヴァンのそばを離れた。サリヴァンが話を聞いて欲しくなさそうにしていた、というのは単なる言い訳だ。

ルカイアの話を、国主の顔で聞いているサリヴァンを、見ていたくなかった。

ただそれだけの理由でそこから逃げ出した。

「…………消える、かも…………しれないって」

リリに収穫を頼まれた木苺を摘みながら、ツェイルはそれを思い出す。

サリヴァンが無自覚に使う天恵は、綺麗なものではないとラクウイルが言っていた。支払う代償と比べるには優し過ぎると言っていた。

言ってしまったえば、サリヴァンは帝国の国土そのもの、なのかもしれない。

「わたしは、どうしたらいい…………」

ずっと考えている。そればかりを考え続けている。

サリヴァンを失いたくない。そばにいたい。どうしたら護り続けることができるのだろうか。

考えていたから、気づくと飴細工に手を出し、ルーフに模したものを作っていた。

だから、それを持って両親のところに行った。大切な人を、どうすれば護れるのかを訊くために、この想いを聞いてもらうために。

「サリヴァンさま……」

あなたを失わずに済む方法を、誰か、教えてほしい。

「あれの天恵は消えぬ」

「……、え？」

「今このときより遙か昔、ヴァリアス・デ・ルーフは天上のあるじと誓約を交わした。この地を護り、その血が続く限り実りある豊かさを維持し、繁栄に導くことを」

唐突な声に振り返ると、陽光を背にした真っ白なひとが、ツェイルを見下ろしていた。まったく気配を感じなかっただけに、ツェイルは驚いてしまう。

「ヴァリアス・デ・ルーフの末裔たるあれは、その誓約を破棄できぬ。刻印が、誓約の証であるがゆえに」

「……誓約？」

「誓約を破りし者となりかけたあれは、刻印に生かされる。誓約が破られぬようにするため、刻印の鎖があれの命をこの大地に根づかせた」

ただじつとツェイルを見つめて言葉を発するそのひとを、ツェイルは魅入られたように見つめ返す。

琥珀色の双眸が、光り輝く金の宝石のようだった。

さらりと流れた銀色の髪が、まるでサリヴァンのようだった。

「……だれ？」

「レイシエント・アレイル」

聞いたことのない名だ。帝国内の貴族ではなさそうなのだが、着ているものは上等であるし、サリヴァンが着用しているものそれと似ている。飾り気もまるでなくて、けれども眩しくて、見つめてみるとサリヴァンではないかと錯覚を起こしそうだった。

けれども、サリヴァンではないひとだ。

「どうして、サリヴァンさまを……」

「聖王だからな」

「……せい、おう？」

まさか、とツェイルは瞠目する。

このひとが、神々の長たる聖王、天の王、神々の頂点に君臨し世界の礎である存在。

お伽噺だけの存在だと思っていた、ツェイルが否定し続けた存在。

「あなた、が……聖王、猊下」

ずくん、と胸が疼いた。それは裡にいる己れの精霊、ヴィーダガルデアが畏縮してのことだと、自身がそう感じたから気づいた。

「……わたしが畏ろしいか」

「あ……い、いえ」

怖いと、そうは思う。

けれども、その無表情の中、金にも見える琥珀色の双眸には、優しさが見えていた。

「……おまえ」

思わずじつと魅入っていたら、猊下の手のひらがツェイルの目許を覆い隠した。

「目を患っているのか」

「え……」

それは一瞬のことだった。

ふわりと目許にぬくもりを感じたと思ったときには、覆い隠されていた視界が開かれる。狭くなっていた視界が、戻っていた。

「あ……れ？」

「薬のせいか……毒気が抜けたな」

猊下がその手に、水滴のようなものを浮かせていた。無造作に地へ投げ捨てられると、それは蒸発して消えていく。

「ディアル・アナクラムの薬だ。珍しいものを使われたな」

「え……と、あの」

治してくれた、のだろうか。

「シェリアンの次はディアル……あれも忙しいな」

短く息をついた猊下は、その琥珀色の双眸をふと、邸のほうへ向けた。

つられるようにしてそちらを見ると、露台にはサリヴァンが驚いた顔をして立っていて、その真上の屋根には巨大な鳥、聖鳥フェンリスが羽を休めていた。

「なにをしておられるのですか、猯下」

そう言ったのはサリヴァンで、言われた猯下はなにともなかったかのように小首を傾げた。

「飛んでいた」

「飛んで……フェンリスと？」

「ああ」

「それでなぜ、そこに？」

「落とされた」

「は……？」

「フェンリスに落とされた」

猯下がそう言ったとたん、羽を休めていたフェンリスはいきなり飛び立った。

「……逃げましたよ」

「そのようだな」

あつというまに天高く昇っていったフェンリスを見上げた猯下は、やはりなにともなかったかのようにそれを眺める。

「……猯下」

「なんだ」

「猯下の隣にいるのが、おれの妻です」

「……ああ、メルエイラの娘か。どつりでおまえのことを……」

サリヴァンにあった猊下の視線が、再びツェイルに戻る。じっと見つめたあと、猊下はまたサリヴァンのほうを見た。

「サリヴァン」

「はい」

「なぜおまえがいる」

「え……今さら」

「そもそも、ここはどこだ」

「……フェンリスに遊ばれましたね、猊下」

「なんのことだ」

「いえべつに」

サリヴァンはため息を落とし、猊下は意味がわからないと首を傾げる。

ツェイルも、この状況がさっぱりわからない。

「ここはルカの邸ですよ」

言いながらサリヴァンは露台を降りて、ツェイルのそばに来てくれる。差し出された手を取ると、抱き寄せられた。

「ツェイ、猊下だ。聖王レイシエント・アレイル猊下。古の王、天の王、呼び名は多いが、おれの養父でもある」

「ちち……?」

そういえば、城を出る前にそんな話をちらりと聞いた憶えがあると、ツェイルはそのときのことを思い出す。

「猊下の居城は天王廟といってな、おれがいた淡の塔はその一部な

んだ。だからおれは猊下と、塔の管理をしている光りの精霊アルトファルに育てられたようなものなんだが……言わなかったか？」

聞いた、ことはない気がするも、サリヴァンがどこか人間離れした雰囲気を持つのは、もしや神に育てられたせいだったのかもしれないと、ツェイルは呆けた。

「ツェイ？」

「え、あ……いえ、ちょっと、驚いて」

「驚かせるようなことを言ったつもりはないが……まあ、気づいたら猊下とアルトファルが、おれにとって親になっていたから……説明のしようがない」

そのあたりの経緯は、自分でもよくわからないとサリヴァンは言う。

ツェイルは改めて猊下を見つめた。

「……サリヴァンさまの、養父上さま」

このひとが、サリヴァンを護り育ててくれたひと。

姿勢を正したツェイルは、深く頭を下げた。

「ツェイルと申します、聖王猊下。名乗り遅れましたこと、お詫びいたします。申し訳ありません」

聖王猊下が神々の長であるという、そのお伽噺のようなことよりも、サリヴァンの養父だということのほうがツェイルには重要だ。

「……気にするな。わたしがフェンリスから落ちたのは、予期せぬ

「ことであつたからな」

優しい言葉と一緒に、頭にぼんと手のひらが乗った。それはサリヴァンに似た仕草で、そのぬくもりに同じものを感じた。

ああ、このひとは本当にサリヴァンさまの養父上さまなのだ。

ゆっくりと姿勢を戻すと、無表情ではあるが穏やかな琥珀色の双眸が、ツェイルに向けられていた。

その視線がふと外され、頭を撫でていた手のひらが去つたのは、露台にルカイアとジークフリートが現われたときだ。それにはサリヴァンも気づき、そちらに目を向けたあとすぐに猊下へ声をかけた。

「猊下、訊きたいことがあるのだが」

「要らぬ」

「え？」

「説明は要らぬ」

言うなり猊下は、足許の影しかないそこから白い綺麗な杖を取り出し、たんつ、と地を杖で叩いた。

「神の領分に手を出すことはならぬ。あれは公国に在りし天恵、《天地狼》が守護せしもの。聖国に在ってはならぬ、魔国に在ってはならぬ」

なにを言っているのか、ツェイルにはわからなかった。けれどもシエリアン公国の元公子であつたキサネのことを言っているのだろうというのは、その言葉の一つ一つから窺い知ることができる。

「偽りの国が滅び、真の国が息を吹き返す。そのための天恵、そのための《天地狼》、両国に留まり続けることは許されぬ」

「……わが帝国と、ヴェルニカ帝国が、利用すると？」

「天地の理を崩壊させたくば、利用するがよい。わたしは止めぬ」

どこか面白そうに言い放った猊下だが、サリヴァンは小難しい顔をし、ルカイアは渋面を浮かべていた。

「……サリヴァンよ」

「はい、猊下」

「己が責務は果たさねばならぬ。自由とは、それらとの均衡で生ずるものと知れ」

猊下のそれを聞いた瞬間、サリヴァンは僅かな間だけ傷ついたような顔をし、しかし次には困ったように笑うと、ツェイルを抱く腕に力を込めてきた。

「……どうして養父上は、そんなにひどく優しい言葉を使うかな」

「言うて欲しくなけば、自覚せよ」

「ええ、おれは国主ですよ」

でも、とサリヴァンは続ける。

「ひとりの、男なんですよ」

そう言うと、ツェイルから視界を奪った。頬に当たるサリヴァンの胸からは、少し早い鼓動が聞こえてくる。いつもはゆっくりで、乱れることすら少ないサリヴァンの鼓動に、ツェイルは少しだけ身じろぎして両腕を持ち上げた。

「サリヴァンさま」

サリヴァンの頬を両手で包む。ひんやりとした手のひらと同じように、体温が低いせいであまり青白く見えるサリヴァンの頬も、今は少しだけ熱かった。

「ツエイ……どうしたらいい」

それは初めて委ねられた、ツェイルへの相談だった。初めて見るサリヴァンの情けない顔だった。

まるで親に叱られた子どもだ。

そう感じるとなんだか面白くて、おかしくて、ツェイルは思わず笑ってしまう。

「おまえまでひどいな、ツエイ」

「だって、サリヴァンさま……可愛い」

「かわ……、あのなあ」

項垂れたサリヴァンと、その額がこつんとぶつかる。くすぐったさに肩を竦めた。

「やりたいように、なさってください」

「……ツエイ」

「わたしはそばにいます」

願わくはこの大地へ。

この人が、たとえ国のために在ろうとも。

たとえ国のために、生かされているのだとしても。

「わたしが、そばにいます」

その傍らにずっと在ることを許されたのは自分であると、思わせて欲しい。

その愛を、一番にもらえるのは自分であると、自惚れさせて欲しい。

だから。

「猊下」

この人と共に在るために。

「わたしはツエイル・レイル・ヴァルハラ。サリエ・ヴァラディン・レイル・ヴァルハラの子、国主に寄り添う者」

ツエイルはサリヴァンからそつと手を離すと、自分ができる最大の礼式を捧げた。

「わが剣、わが身命、滅ぶときまでわが国主のものであることを、お許してください」

この人と共に在るために。

この人と在り続けるために。

わたしの世界はこの人で回り続ける。

願わくは、この大地へ。

いとしき人との幸せを。

「……城に、戻られてくださいますね」

ルカイアの断定的な問いに、サリヴァンは顔を上げる。

「ああ。ツエイと、一緒に」

答えながら、サリヴァンはツェイルを抱きすくめた。

Extra : 願わくはこの大地へ。2 (後書き)

番外編『願わくはこの大地へ。』は、これにて終幕となります。

E p i l o g u e : **仮初めの皇帝、偽りの騎士。** (前書き)

本編 + 番外編のあと、十数年後となります。
ご注意ください。

「オリヴァーン！」

名を呼ばれてふと振り返ると、親友で自分の侍従でもあるノアウルが、慌てて駆けてくるところだった。

「どうした、ノア」

「シエリアン公がお見えなんだ。サリエさまを探したんだが、あの人どこ行ったんだか……だからオリヴァーン、おまえがお出迎えしろ」「なんだそれ……サリエならあそこにいるぞ」

さつきからずっと屋根の上にいる人を指差すと、邸内を探して走り回っていたのだろうノアウルは、うんざりとしながら屋根を見上げた。

「なんであんなとこにいるんだ、あの人」

「おれがここに来たときからいる」

「おまえもおまえだ。剣の稽古してるのかと思えば庭いじりかよ」「……、まあ」

見てのとおりだな、と土に汚れた手のひらを見る。稽古のために持ってきていた剣は、腰に下げたままだ。

「サリエさまぁーあ！ お客さまですよー！」

ノアウルの大きな声を聞きながら、汚れた手を叩いて土を落とす、立ち上がった。

「また兄上か？ 兄上なら追い返していいぞ」

「違いますよ。シエリアン公キサネさまです。城に行ったらサリエさまがいらないから、わざわざこっちに来てくださったんですよ」

「キサネとは珍しいな……ここに呼んでくれていいぞ」

「それは公に失礼かと」

「悪いが離れられん。そう思うならオリヴァンに出迎えさせてくれ」

いきなり矛先が自分に向けられ、ぎょっとして屋根の上の人を見た。

「おれの出番じゃないだろう、サリエ」

「父と呼べ、父と。ヴァルハラの家督はおまえが継ぐんだから、いいだろうが」

「シエリアン公はヴァルハラ公に逢いに来たんじゃないやなくて、国主のサリエに逢いに来たんだろうが」

「それもいずれはおまえが継ぐ。いいから、行ってこい。それと、おれのこととは父と呼べ、息子」

「サリエ！」

役目を放棄した屋根の上の人、己れの父に腹を立てつつも、無視されてはその声も届かない。

「母上がいらないと言うこと聞かないってどついついことだ」

「サリエさまだからなあ」

「ぜえったい父上なんて呼んでやらない」

「おまえもおまえだなあ」

ため息交じりに言うノアウルと一緒に、仕方ないが客人を出迎えるため、庭から邸に戻った。

土で汚れていた手を綺麗に洗い、同じように汚れていた上着を替えてから、応接間に向かう。

隣国シエリアンの公王キサネとは、公王となられる前からの顔見知りであったので、気張らなくていいところが救いだ。この腹立たしさも、キサネなら理解してくれる。

「お待ちせしてすみません、シエリアン公。父ヴァルハラ公爵の名代、オリエ・ヴァラディン・ヴァルハラです」

「オリエさま！ 久しぶりでですねえ。また大きくなられて」

「お元気そうだなによりです、シエリアン公」

「そういう喋り方ですと、立派な次期公爵ですね。ということで、キサネでいいよ、オリヴァン。おれもふつうに喋るから」

一時期は遊び相手をしてくれたキサネは、オリヴァンにとって歳上の友人でもある。ホツと肩の力を抜いて室内に入ると、互いに長椅子に腰かけた。

「悪いな、キサネ。サリエ、いるんだけど……屋根から降りて来ないんだ」

「屋根？ ああ………そういうえば南のほうの台風がひどくて、復興が遅れてるみたいだからなあ。お忙しいところに来てしまったか」

「ん？ サリエと災害に、なんの関係が？」

「あれ、まだ聞かされてない？」

「なにが？」

首を傾げると、キサネは困ったように笑い、肩を竦めた。

「国主つていうのは肩書きじゃないんだよ、オリヴァン」

「肩書きだろ。あんなのでも皇弟殿下だし」

「じゃあ、おれが聞いた昔話を一つ、教えようか」

「昔話？」

「仮初めの皇帝と、偽りの騎士のお話」

なんだそれ、とオリヴァンは目を丸くする。

「きみが生まれる少し前、十六年とちよつと前の話だよ」

キサネは、現宰相ルカイアから直接聞かされたという話を、ゆっくりと話し始めた。その中にはキサネ自身のことも含まれていて、半ば歴史の勉強ではあったが、キサネの視点から聞かされる物語は興味の惹かれるものだった。

陽も沈みかけた夕刻、父サリエは未だ屋根の上にいた。

「ツエイが南にいるって、なんで教えてくれなかった」

「母と呼べ、母と」

いきなり声をかけたのだが、気配は感じていたらしく、父はオリ

ヴァンに背を向けたまま反応を返してきた。

「なんでツエイは、南にいる？」

「母と呼べと言っているのに……行くと言ってきかないから、ラクと行かせた。それだけだ」

「ラクウイルが《天地の騎士》だから、行かせたのか？」

「ああ」

「サリエはなんで一緒に行かなかったんだ」

「行ってもよかったが、ツエイが赴いた場所は国境付近の海沿いだ。海に面しているから、国境の線は危うい。おれは近づけない」

「なんで？」

「前にああたりを旅したら、力に吞まれかけたことがある。それを見たツエイが半狂乱になった。だから近づけない」

父は、母ツエイルを軸にして、生きている。
そう思う。

「力つて、なに」

「国主の天恵」

「なんだそれ」

「おまえの背中にあるだろう」

「あの痣が、なに」

「国主の刻印だ。だからおまえは、兄上の娘と婚約している」

従妹の姿を思い出し、その愛らしさにちょっとだけ胸を暖めながら、オリヴァンは一切こちらを見ない父の隣に腰かけた。

「……すまない、オリヴァン」

「は、なにが？」

「おまえには国主の天恵がある……その刻印のせいで、おれはおま

えから自由を奪った」

「……ライラとの婚約のことか？ おれはべつに……ライラは可愛いし、奥さんにしてもいいかなとは思っよ」

従妹ライラの、自分を見る眼差しは理解している。それを悪くないとオリヴァンは感じている。

その意味での「自由を奪った」ということなら、無用な心配だ。

「なあサリエ、国主の天恵ってなに」

「国の礎たらんこと」

「じゃあ……おれがルーフを咲かせることができるのは、そのためか」

「ああ」

オリヴァンは手のひらを握ると、パツと開いて国花であるルーフを咲かせる。幼い頃から、気づけばできていたこれを天恵だとは知っていたが、まさか国主の天恵だとは思ってもいなかった。

「役に立つのか、この天恵」

「さあ」

くすくすと、父は笑った。

「おれはツエイの笑顔が見られるから、役に立つとは思っている」

「ライラも笑ったよ。可愛かった」

「なら、役に立ってるんじゃないのか」

「……微妙だな」

国主の天恵なんて、大それたもののくせに、やれることは小さいと思うのはオリヴァンだけだろうか。

「これ、サリエと同じ天恵なら、おれもサリエと同じってことか？」
「いや、違う。おまえの刻印は正常に働いているから、おれと同じにはならない」

「……どういうこと？」

「キサネから昔話は聞いただろ」

「おれにキサネを出迎えさせたのはそれか？」

「話す頃合いを計りあぐねていたからな。おまえも来年には成人するし、迷っていたところにキサネが来たから、もしかして話してくれるかな、と」

その期待通りだった、というわけだ。

「だいたいは聞いたよ。サリエが仮初めの皇帝だったこととか」

「そんな時期もあったな」

「そんな話、聞いたことなかったから、驚いた」

「訊いてこなかっただろう」

「おれが生まれたときは、サリエは皇弟殿下で、国主っていう肩書を持っていた。聞くまでもないと思ったんだよ」

でも違った、とオリヴァンは苦笑する。

「いろいろあつたんだな」

「いろいろ？」

「ツエイと出会うまで、出逢ってから、これまで」

「……生きているということだ」

言いながら父は上着の裾をさばいて立ち上がり、暗くなり始めた街を眺め、空を見上げた。

倣うようにその視線を辿り、オリヴァンも立ち上がる。

「ツエイ、帰っておいで」

父は両腕を空に向かって広げる。

「約束の時間だ。帰っておいで、ツエイ」

空にはなにもない。それこそ雲一つ浮かんでいない空は、ただゆつくりと太陽を沈ませ、闇夜の訪れを待っている。けれども。

「サリヴァンさまっ」

その声と共に、いつでも少年のような母ツエイは空から降ってきた。それは幼い頃からよく見かけた光景でもある。

なにもないところから舞い降りる母を、父は息子のオリヴァンにさえ見せたことがないような柔らかい笑みで、その両腕に抱きとめるのだ。この一瞬だけは、昔から邪魔できない。

「部屋でお待ちくださいと、あれほと言いましたのに」

「はは。おれはツエイがそばにいないと、眠れやしないよ」

「国土の回復はサリヴァンさまのお身体を……ああもう、こんなに冷えて」

「気にするな。それより……おかえり、ツエイ」

父は母を軸にして、生きている。息子のオリヴァンなど二の次だ。けれども、それが父なのだと、思う。

「屋根の上でお出迎えとは、またなんと奇抜なんでしょうねえ」

「あ、ラクウイル」

後ろからの声に振り向けば、母と一緒に出ていた父の侍従ラクウイルが、母の登場と同じように空から降りてくるところだった。天恵を使ってそういう移動をしているのは知っているので、いつものことでもあるそれに驚きはしない。

「オリヴァンまでここにいるのは不思議なのですが……ノアウルは
いずこに？ オリヴァンの侍従でしょうに」

「少し前に、ライラと呼ばれて城に」

「ははあ……あるじがふたりもいると大変ですねえ、ノアウルも」

「まあ、ノアはおれの侍従で、ライラの騎士だから」

「腕っ節はまだまだの、ひよっこですがね」

もつと鍛える必要がありますねえ、と言いながら、ラクウイルは猫のように背伸びする。

「なあラクウイル」

「はい。なんです、オリヴァン」

「国主の天恵って、なに」

オリヴァンは、目の前でいちゃついている両親を眺めつつ、ラクウイルに問うた。

「あれが、国主ですよ」

ラクウイルは両親を見て、そう言った。

「おれもその天恵があるのに、サリエは違つって言う」

「違つてしょうねえ」

「どつという意味だ？」

オリヴァンは手のひらを握り、ゆつくりと開きながらルーフを咲かせる。それは父もできることだ。違いなどわからない。

「サリヴァンにもいろいろあったんですよ」

「説明になってない」

「じゃあ一つ、昔話をお聞かせしましょう。仮初めの皇帝と、偽りの騎士……そのお話を」

「キサネから聞いた」

「おや、シエリアン公がいらっしやっただけ？」

「もう帰ったけど」

半ば歴史の勉強であったそれと、ラクウィルが話そうとしてくれたそれには、視点の違いこそあれ、それ以外の違いはないと思う。

「シエリアン公から大まかなところを聞いたのなら……だいたいわかるのでは？」

「サリエとおれに、どんな違いがあるのかわからない」

「ふむ……そうですねえ」

ラクウィルが逡巡し始めたとき、漸くオリヴァンの存在に気づいた母が、父の腕を離れてそばに寄ってきた。

「オリヴァ」

「ん……おかえり、ツエイ」

母は小さい。この背をいつ追い越したのか、それはもう憶えていないが、気づいたら母の視線はいつも下にあった。

「具合は悪くないか？」

「え、いきなりなんの心配？」
「……だいじょうぶなようだな」

よかった、と言いながら母は抱きついてきて、ホッとしていた。
意味がわからないながらも、オリヴァンはその身体をゆったりと抱き、ポンポンと撫でる。

「なにかあった？」
「……南の災害が、ひどかったから」

母のひどく落ち込んだ声に、オリヴァンは父にそれを窺う。肩を
竦めた父は苦笑していた。

「ツエイ、次はオリヴァンに行かせればいい」
「オリヴァを……なぜです？」
「それも国主だ。わかっているだろう」
「でも……」

躊躇う母に、オリヴァンは気づくと名乗りを上げていた。

「行くよ、ツエイ。おれにできることがあるなら」
「オリヴァ……でも、おまえまで」

なにかに怯えるように、母はオリヴァンの腕をぎゅっと強く、握
ってきた。そんな母に、オリヴァンは咲かせていたルーフを飾る。

「剣の腕は信用できない？ ツエイにこの前勝ったじゃないか」
「だが……」

流る母の肩に、父の手のひらが乗る。

「頼むから少しおとなしくしてくれ。胎の子に障る」

父のその言葉に驚いたのは、オリヴァンだけでなく母もだった。

「き……気づいて、おられた……の、です、か」

そう言った母に、オリヴァンはさらに驚く。

「え、ほんとに？ ツエイ、妊娠してたのか？」

問えば母は真っ赤になり、俯いた。父は嬉しそうに、自慢げに、笑っていた。

「きょうだいが増えるぞ、オリヴァン。よかったな」

「きょうだいって……おれ、もう十六だぞ」

「ツエイがやっとなんか許してくれたからなあ」

なんの許しだ、と突っ込みたかったが、そこは夫婦の事情というか、オリヴァンには関知できない事情のようで、父はそれ以上の言葉もなく、オリヴァンの腕から母を取り戻した。

「ということだから、南へはおまえが行け、オリヴァン」

「それはいいけど……ツエイ、身体はだいじょうぶか？ 身重の身体でなにやってんだよ」

いくら心配だったとしても、自分の身体を大事にしてほしいものだ。この歳になってきょうだいが増えるのは微妙な感じもするが、嬉しいことには違いないのだ。

「次は女の子がいいですねえ」

ふとラクウィルが、いきなりそんなことを言った。

「オリヴァンが女の子だったら問題はないんですが……男の子だし」

「つまらなそうに言わないでくれるかな、ラクウィル」

「だって事実ですし？ まあ剣を教えるのは楽しいですけど……」

男の子だし」

「可愛くなくて悪かったな」

しっかりとこちらの会話は聞いていたようで、ラクウィルはじつとオリヴァンを見て、「はああ……」と盛大なため息をついてくれた。

「女の子がいいですう……ねえ姫、女の子にしてくださいね」

「そ、そう言われても」

未だ母を姫と呼ぶラクウィルだが、それを流してしまう母も母だと思っ。

「まあ、とりあえず邸内に戻りますか。そろそろ夕食ですし、リリが痺れを切らせているでしょうからね」

侍女頭のリリの姿を思い出して、あれを怒らせた日には地獄を見るとわかっていただけに、話題が挿げ替えられても文句は言えなかった。

「若さまあ！ 殿下あ！ まだ屋根の上ですかあ！」

ちょうどよく、ライラのところから戻ったらしいノアウルの呼び

声も、畏まっているところからして、すでにリリが痺れを切らしている状態であると知ることができた。

「……戻ろうか」

ふっと笑って、オリヴァンはそれぞれを促した。

露台から部屋に入ってから、ふと暗くなった空が気になって、後ろを振り向く。

仲のいい双月が、美しく輝いていた。

「オリヴァン？」

呼び声は父のものだった。

「なあサリエ、おれとサリエの違いってなに」

「まだ考えていたのか」

「気になって」

中断されていたただだから、まだ答えはもらっていない。もしかしたらはぐらかそうとしていたのかもしれないが、オリヴァンは納得できない。

「……いつかおまえが、真剣に刻印と向き合わなければならぬときがくれば、必ずわかるよ」

「おれは今知りたい」

「まだ早い」

父はニツと、オリヴァンを挑発するように笑った。

「焦るな、オリヴァン。子どもでいられるうちは、子どもでいる」

挑発したかと思えば、今度は優しく父は微笑んだ。

「ツエイが寂しがる。それはおれの本意じゃない」

「そんなつもりはないんだけど」

「わかるならさっさと行くぞ。一日中屋根の上にいたから、腹が減ったんだ」

ほら行くぞ、と父に促されながら、答えを得られなかったことは不服だが、この力と真剣に向き合う日が来るだろうというのは、予感している。それなら父の言葉も納得できるものだ。

「いつまでも子どもでいるつもりはないけどね」

「はは。おれも寂しいから、もう少し子どもでいてくれ。おまえは必ず、おれたちのところから飛び立ってしまうだろうから」

「そうかな」

「おれがそうだった。どこか遠くへと、いつも願ったものだよ」

ぼん、と肩を叩かれて、並んで歩き出す。いつのまにか父と視線が並ぶようになっていて、身体つきも追い越しそうになっていた。

「なんで、遠くへ？」

「さあ……なんでだろうな」

ふふ、と笑った父は、どこか寂しそうで。

けれども、幸せそうでもあった。

「サリヴァンさま、オリヴァ」

「ああ、ツエイ」

廊下の先で待っていてくれる母と、ラクウィルの笑みに、父は答える。

なんだかなあと思いつつも、オリヴァンも笑みを浮かべて答えた。

Epilogue : 仮初めの皇帝、偽りの騎士。 (後書き)

これにて本編と番外編は完結させていただきます。

次話からは外伝と、リクエストしていただきました物語が展開されております。よろしければおつき合ってください。

読んでくださり、ありがとうございました。

Lateral Biography : 侍従長放浪記。 1 (前書き)

ラクウィル視点、ラクウィルの話。

番外編『願わくはこの大地へ。』の一ヶ月後くらいだと思います。

「姫え」

と呼ぶと、ツェイルは必ずひよっこりと窓から顔を出してくれる。だからラクウイルは、庭先でにっこりと笑った。

「ちよつと出かけてきますね。書簡を届けに行くだけなんで、すぐ戻ると思いますが」

「どこまで行く？」

「城の近くまでは行きますよ。なにかご用でも？」

「少し、待って」

リリではなくラクウイルに頼みたいことがあるとは、ツェイルにしては珍しい。そう思いつつも素直に待っていると、窓の向こうに引込んだツェイルは少ししてからまた顔を出した。

「これを」

と、窓からなにか落とされる。ひらひらと落ちてきたそれが手紙であることは一目瞭然だ。

「よっ……と。お手紙ですか」

「テューリ姉さまに」

「テューリ嬢？ あ、そういえば結婚されましたっけね。すると」

……ジーゼル子爵ですね」

「そう。わかる？」

「エーヴィエルハルトのことですから」

……ハルト医師？」

なぜ、という顔をしたツェイルに、そういえば知らないのかな、とラクウィルは笑みを深める。

「エーヴィエルハルト・コール・ジーゼル。結婚して母方のジーゼル姓をもらって、子爵になったんですよ。結婚相手はテューリ嬢です」

「え……」

そんなの知らない、と珍しく顔に出したツェイルに、ラクウィルは苦笑した。

「まだ婚約してたときに、逢わなかったんですね？ テューリ嬢のお相手に」

「……だって」

ぶす、と頬を膨らませたツェイルは、ありありと姉を奪われた腹立だしさをラクウィルに見せる。

このところのツェイルは、サリヴァンだけでなくラクウィルやりりにもさまざまな顔を見せてくれるが、こんなにはつきりとそれを表わすのはめずらしい。本当にきょうだいたちが大好きのようだ。

「逢いに行ったほうがよくないですか？ 手紙じゃなくて」

「……ハルト医師なら、まあ……けれど、姉さまの……」

ぶつぶつと言うところからして、随分と葛藤しているようだ。世

話になったことがあるだけに、どういう態度をとったらいいのか迷っているのだろう。

仕方ないなあと、ラクウィルは笑った。

「じゃあ今日はこれを渡してきます。今度は、逢いに行きましょうね」

「う……う……」

うん、とは言いたくないらしい。

「姫は可愛いですねえ、まったく……じゃあ、おれは行きますね。サリヴァンのこと頼みましたよ」

「気をつけて」

「はい」

ばいばい、と手を振ってから、ラクウィルは天恵を発動させる。

空間移動するラクウィルのこの無属性天恵は、すでに二つの属性天恵による代償に加え、さらに代償を要求してくるものである。

目的地に到着したとたん、その感覚に襲われた。

「うわ……ああ、なんで今きますかねえ」

襲われた眩暈に少しよろめきつつも、失くせない書簡と手紙はしっかりと懐に入れ、足に力を入れて踏み止まる。

便利な天恵だが、あるとき唐突に代償を要求してくるので、面倒なことこのうえない。

けれども。

「サリヴァンが元気な証拠」

サリヴァンの周りが平和な証拠、なんの問題も起きない日という意味でもある。

「ラクウィル？」

「ん？ ああ、ちょうどよかったです」

眩暈をこらえていたら、目的地の目当ての人物がちょうど現われてくれた。ルカイアである。

「はい、これ。サリヴァンからの書状です」

筒状の書簡を出してルカイアに渡すと、中身の内容は把握しているらしいルカイアは鷹揚に頷いた。

「ありがとうございます。これで揃いますね」

「そうですか。じゃあ、おれは行きますね」

「お待ちなさい」

あとはハルトのところに行ってテューリに手紙を渡してしまえば、どこでなりと休めると思ったのに、ルカイアに呼び止められてしまった。

「少し休んだらどうですか」

「はい？」

「真っ白ですよ、顔色が」

「……、ああ」

眩暈で視界は危ういが、歩けないほどではない。笑みも絶やしてない。けれどもルカイアはそれに気づいたようだ。

「気にしなくていいですよ。寄るところがまだあるので、それが終わったらどこか適当な場所で休みますから」

「道端で倒れるつもりですか」

「そんなこと」

「しませんよ、とは言えなかった。言えない心当たりがあり過ぎる。

「あー……どうせ行き先はエーヴィエルハルトのところなんで、だいじょうぶです。倒れるならそこにします」

「サリエ殿下か妃殿下に、なにか？」

「いえ、手紙を預かったもので」

渡しに行くだけですよ、と言って、これ以上足を止められるわけにもいかないので、ラクウィルはさつと距離を作ると満面の笑みを浮かべる。

「待ちなさい、ラクウィル」

「いやですよ」

じゃ、と天恵を発動させる。逃げるが勝ちだ。

しかしながら、無理は禁物、でもある。

「あー……しつぱいしちゃった」

飛べないかな、と思った時点で失敗だ。

「ここは第二の目的地ではない。つまり、思った場所に移動できなかった。」

「うーん……ここで休めってことですかねえ」

と、寝転がりながらうんうん唸ってみるも、眩暈は治まらない。脳みそがぐらぐらと揺れているのが、瞼を閉じるとよくわかる。とりあえずこの眩暈が治まるまでは休んだほうがよさそうだ。

「あなた、なにをしているの？」

「おや、と思う。人の気配はなかったのだが、いきなり現われた。」

「気にしないでください。ちょっと休んでいるだけなので」

「……顔色が悪いわね」

ふっと、その気配がさらに近くなる。口調と声の感じから少女のようだが、この気配はどこかで知っているような気がして、ラクウイルは閉じていた目を開けた。

「近くに姉の家があるの。そこで休むといいわ。歩けるかしら」

ふんわりと風に流れる薄茶色の髪と、同色の柔らかい双眸が、じつとラクウイルを見つめた。

どこかで見たような気がする。知っているような気がする。けれどもそれが思い出せない。

「こんなに可愛い子なら、憶えているものだが。」

「……あたしの言ってること、理解できる？」

「あ、失礼しました。いえいえ、お気遣いなく……」

言ってから、目が回ってしまつて眉間に皺が寄る。せつかく耐えていたのに、やはり限界がきていたらしい。

「あなた、だいじょうぶ？」

少し慌てた少女が、小さな手のひらでラクウイルの頬を撫でる。うっかり、やっぱり女の子は柔らかくてふわふわしているなあ、と思つてしまつ。

「人を呼ぶわ。ここで休むなんて、そんなの身体を痛めるだけだもの」

ああいえ、放置しておいてくれてかまいません。

と言えたらよかつたのだが、残念ながらそこで意識をうっかり手放してしまつたラクウイルだった。

L a t e r a l B i o g r a p h y : 侍従長放浪記。 2 (前書き)

ラクウィル視点です。

眠いという感覚が、ラクウィルには昔から理解できない。それゆえか、気づくのはいつも眠ったあとだった。いつ眠ったのかは知らない。気づけばそこは寝台の上であったり、寝椅子の上であったり、廊下や屋根の上、階段で目覚めることすらある。

もつとも笑えた目覚め場所は、廊下だったと思う。あまり使われない廊下を、近道と思って歩いていただけだったのに、揺さぶられて起きた。起きた、という事態にも驚いたが、そんなところでぱったりと意識を手放したせいで二日ほど行方不明扱いされていたことのように驚き、そして笑った。ラクウィル失踪に焦ったサリヴァンやルカイアは、もう二度とあの廊下を使うなと怒りはしたが、ラクウィルは懲りない。あの廊下はサリヴァンが幽閉されていた塔へ繋がる道の一つで、生きる喜びを知った日々の思い出があるのだ。そして、ラクウィルにその過去を、忘れさせないでくれる道でもある。

そして重要なこと。

どうも人から嫌われる傾向にある、というかサリヴァンとその親しい人たち以外からは忌避されるので、それ以外の友人はおるか知り合いも少ない。さらにその数少ない人たちも、ほとんどは天恵を恐れて近づいてこないのだ。ラクウィルがどこで倒れているように、必ず放置する。

そう、ラクウィルはどこで倒れているようにも、放置される。

理由は簡単だ。

『忌み子を守護する異形』

サリヴァンの過去を知り、その境遇を知る者たちには、ラクウィルは重宝される。しかし、ラクウィル・ダンガードという天恵術師を知る者からは、どこからその噂が流れたのかは不明であるが、国の忌み子を守護する異形の者と、呼ばれていた。

火と土、二つの属性天恵を所持しているというだけなら問題は無い。けれどもラクウィルには、知られてはいないが無属性天恵がある。そのせいか、どの属性天恵の攻撃を受けても、怪我など一切負わない体質だ。物理的なものでしか、ラクウィルは傷つかない。

だから、帝国の術師団のひとりだった頃は、よく動物的にされた。水の攻撃を受けても濡れず、風の攻撃を受けても肌を傷つけず、火と土は加護があるのでもちろん攻撃の意味を為さないゆえのことだ。今考えてみると、あれはたぶん、いやがらせか虐めか、或いは殺すためのものだったのだろうと、ラクウィルは思う。

「生きてますけどねえ……」

天恵の攻撃を受けた程度で、ラクウィルは死なない。では剣で、と人は思ったのだろう。それはラクウィルに大怪我を負わせる力ではあったが、それでもラクウィルが死にかけたのは一度きりである。

「ラクさま？」

ふと可愛らしい声に呼ばれて、ラクウィルはもの思いに耽っていた思考を現在に引き戻す。だいぶ下にある視線に合わせて首を折れば、三ヶ月ほど前に出逢った愛らしい少女が首を傾げていた。

「なんでもないですよ、シュネイ嬢」

誰もがラクウィルを遠ざけ、ラクウィルを嫌い、異形として扱い、そういう眼で見ていたのに、この少女はそれらをまったく気にも留

めずに、ラクウイルのそばに寄ってきた。

シユネイ・ウエル・メルエイラ。

さすがは姫の妹君、と思うラクウイルである。

「ここがイル姉さまの新しいお住まいになるのね」

「ええ、そうですよ。ちよつと古いですけど」

「立派よ。姉さまは内面の美しさを知る人だから、外面はどうでもいいの」

くす、と笑うシユネイは、あまりツェイルに似ているとは思えない。ラクウイルはそうなのだが、周りはそっくりだと言う。

この微笑みのどこが、ツェイルに似ているのだろう。

確かにツェイルも笑えば可愛らしいが、滅多にそんな顔は見せない。見せても夫であるサリヴァンにだけだ。しかし常に表情を殺しているようなものなので、シユネイのように感情豊かにそれを表現することは、ふだんからなかった。

個体として見るなら、ツェイルとシユネイはまったく似ていない。と、ラクウイルは思う。

しかしながら、ラクウイルには不明なことがある。

「シユネイ嬢、おれにつき合う必要はないんですよ？ 邸の最終確認視察なんて、つまらないでしょう」

ラクウイルは今日、サリヴァンが居を移すと決めた場所、長く放置されていたヴァルハラ家の邸を見に来ている。古さゆえに改修が必要だったので、その工事が入り、そろそろ終わろうかというときのことだ。工事のために働く職人たちがちらほらと見える中、ラクウイルは安全確認をするために訪れているのだが、そこになぜかシユネイはくつついて来たのである。

「姉さまに逢うために、というのは口実よ。と言ったら、どうする？」

「どうもませんが……それではなんでおれと一緒にきたのか、と疑問になりますね」

「もう……ラクさまに逢いに来た、ではだめなの？」

「おれに？ なぜですか」

シュネイは姉想いだ。というかむしろ、メルエイラのきょうだいは、非常に仲がいい。長男ツアインを筆頭に、五人のきょうだいはまるで恋人と接するがごとく幸せそうにじゃれ合うのである。

ゆえに、シュネイはラクウィルがサリヴァンの侍従だと知った翌日からは、ラクウィルの体調を心配することを口実に、ツェイルに逢いに行くことが多くなった。

口実にするならむしろ、ラクウィルのことに対して、のはずである。

「言ってもいいかしら……ちゃんと真剣に聞いてくれる？」

「はい？」

「あたし、運命の人に出逢ったの」

「……はあ」

それがどうした、と首を傾げる。運命など信じたくない、というか頭から信じていないラクウィルには、どこをどう真剣に聞けばいいのかわからない。

「ラクさまよ」

「へえ……、え、はい？」

なに、と目がまん丸になり、聞き流せなかった。

「ラクさまが、あたしの運命の人なの」

「……ええと？」

おれは運命なんて信じていませんよ、と言うようにラクウィルは聞き返すが、そこは夢見る乙女のシュネイである。

「あたしを恋人にして」

目下の少女を、思わずまじまじと見つめてしまう。

「あの……おれ、二十四歳で、シュネイ嬢からしたらおいちゃんですが」

「歳の差？ そういえばそうね……でも、いいの。あたしはラクさまがいいから」

歳の差なんて関係ないわ、とあっさり跳ね除けられてしまう。いや、夢見る乙女な少女なら、当然のことだろう。

「おれのどこがいいんですか」

問うと、シュネイは花が綻ぶように笑った。

「ぜんぶ」

ああ可愛いなあ、なんて思うのは、きっとシュネイが本当に愛らしい少女であるからで。

「あたし、ラクさまに恋したの……一目惚れよ」

「それも運命とかいうやつですか」

「そうよ。あたしがそう願ったから、運命になったの」

「うーん……」

子どもだなあ、と思う。

「ラクさま、恋人はいて？」

「一夜限りならたくさん。ほかはおれを嫌って、近づきもしませんからね」

「あら、じゃあ真実の恋人はあたしだけね」

「いや、なぜそんなことに？」

「あたしはラクさまと幸せになるの」

うむ、子どもだ。話を聞いてくれない。というかラクウィルのほうが話についていけない。

歳を取ったものだ。

けれども、まあいいか、と思うことまで、歳のせいにはできないだろう。

「まいりましたねえ……」

子どもに好かれるほうではないのだけれども。

「好きよ、ラクさま。好きなの」

臆面もなく、恥じらいもなく、ただ素直な感情を一方的に与えてくる。

嫌煙されることが常だったせいかな、それはとても心地いい。

「おれなんかでいいんですかあ？」

「あたしにはラクさましかいないの」

子どもだなあと、やはり思う。その遊びにつき合う義理はないが、幸せそうに笑う少女に今それを言っても、意味は為さないだろう。そのうち心変わりするはずだ。この少女は愛らしく、美しい。誰もが放っておかない娘になる。

それはまでは一緒にいてもいいかな、とラクウィルは思う。

「仕方ないですねえ」

子どもの我儘は可愛い。サリヴァンやツェイルにも我儘をたくさん言ってもらいたいラクウィルは、甘やかされたことがないから、甘やかしてやりたい気持ちが強いのだ。

たとえそれが、一時の夢であつたとしても。

「視察はまだ続きます。安全点検が目的ですからね。どうぞ手を、シュネイ嬢」

「ネイ、と呼んで、ラクさま」

腕に絡んできたシュネイに、ラクウィルは微笑む。

「はい、ネイ」

ちょっとお父さんみたいな気持ちになりながら、それでも自分に好意を寄せてきてくれる少女を、恋人のように想う。

可愛いなあ、とただ思ったことが、のちに自分にその真実を気づかせることになるとも知らずに、ラクウィルはシュネイと手を繋いで歩き出した。

L a t e r a l B i o g r a p h y : 侍従長放浪記。 2 (後書き)

ラクウィルのお話、終わります。

読んでくださり、ありがとうございます。

Lateral Biography : いまがあるから。1 (前書き)

* 本編番外「願わくはこの大地へ。」のあとの物語。

サグザイルル公爵の別邸(ルカイアの家)にいらるときの話です。

僅かですが残酷描写あります。ご注意ください。

サリヴァン視点です。

たまに、眠っているときに夢を見る。これは夢だ、と自覚できない夢だ。見ているものすべてが現実にあつたことであるせいか、あれから数年が経過していても、その夢を見ているときだけはそれが現実になる。

夢を現実と区別できなくて、夢を見ないように眠らなくなって、そのうち眠ることに恐怖を感じるようになって、誰かがそばにいるときは眠らなくなった。人の気配がするところでは、瞼も閉じられなくなった。

だから寝不足で頭痛がひどくなってくると、決まってラクウィルが最初に気づいて、そういうときは部屋に誰も近づかせないようにしてくれるようになった。

今、自分のこの不調に気づいてくれるのは、ラクウィルともうひとり。

「サリヴァンさま……」

心配そうに自分を呼ぶ声に、顔を上げる。

誰もが、なんて表情の乏しい子だ、というその無表情は、サリヴァンにはとても苦しそうな顔をしているように見える。これだけ表情が豊かなのに、どうして誰も気づかないのだろうと不思議に思う。

いや、溺愛して憚らないきょうだいたちには、関係ないようではあるけれども。

「どろした、ツエイ？」

にこりと微笑んで、小さく首を傾げる。すると苦しそうな顔が、もつと苦しそうに歪んだ。いやいや、と首を左右に振り、早足にそばに寄ってきたかと思うと、机に置いていた腕を引つ張られた。

「ツエイ？」

妻となった少女ツェイルは、サリヴァンの仕事を自分の都合で邪魔をするような子ではない。けれども稀に、こうして訪れては、サリヴァンの仕事を邪魔する。まるで、それを使命としているかのよう。

「ツエイ、おれはまだ工作中だ。もう少ししたら終わるから」

「そう言っつて、もう三日経ちます」

「……そうだったか？」

さて、そうだっただろうか。

そういえば、いつ眠ったかも憶えていない。

「サリヴァンさま……お願い」

「ん？」

「休んで」

ぐいぐいと、ツェイルに腕を引つ張られる。その力に負けるわけもないが、上手いことにツェイルは筆を持っている左腕を引つ張るから、机に広がっている紙に文字を書き続けることはできない。

「ツエイ……だいじょうぶだ。本当に、あと少しだから」

「もう四回も、その言葉を聞きました」

だいぶ記憶が曖昧になっているらしいと、今さら気づく。さすがに少し休んだほうがいいだろうかと考え直して、苦笑しながらツエイルに引つ張られるまま机を離れた。ふと、ふわりと感じたツエイルのぬくもりに、くらりと眩暈がする。

「……サリヴァンさま？」

眩暈をこらえて立ち止まったサリヴァンを不審に思ったのか、ツエイルがぐるりと振り向く。出逢ってから切らせていない髪が舞い、いつも少年のようなツエイルを少女に見せただけでなく、サリヴァンの欲を刺激した。

思わず吸いつきたい衝動に駆られたサリヴァンだが、眩暈は少女からの誘惑だけが原因ではなかった。

「ツエイ……」

「！ サリヴァンさまっ」

眠い。

そう思ったのは一瞬だ。

気づくと足は崩れ、ぐらぐらと視界が揺れている。吐き気すら感じたとき、慌てた様子のツエイルが見えた。

ツエイルを巻き込んで、寝不足で倒れるのはこれで幾度めだろう。

「すまない…… ツエイ」

おれはおまえに、いつもそんな顔ばかり、させている気がする。ぐらぐらしていた視界が真っ暗になると、身体を包む優しいぬく

もりにほっと息をついた。

『おまえもイデアのような目で、余を見るのか……っ』

投げかけられた言葉に、ハッと目を見開く。

『余には与えられぬ天恵が、それほど価値のあるものだというのが
っ』

『……ヴェナート、陛下』

目の前には、焦燥に駆られて瞳をぎらつかせた先帝がいる。その
手には、血に汚れた剣を持ち、床には赤い水溜まりが作られている。

『余には与えられず、イデアには与えられ、サライに与えられ……っ』

…おまえにも与えられるとはどういうことか！』

『陛下、おれは、べつに……』

『黙れ！ おまえなど、余の子ではない！ 皇族でもないわ！』

振り上げられた剣から、付着していた血が飛ぶ。

ああ、おれはここで死ぬのか。

陛下であり、父であるこの人に、殺されるのか。

そうか。

そうか、それが運命なのか。

このときのために、生きていたのか。
生かされていたのか。

それなら。

それなら今度は。

しっかりと首を狙って斬ってくれ。

腕を斬られたところで、人間、死にはしないのだ。

だから。

だから。

だから。

『天恵を授かりしことこそ己が罪過と知れ!』

振り下ろされる剣よりも、先帝のその顔をしっかりと見つめる。

産まれて初めて見た陛下は、産まれて初めてみた父親。

産まれて初めて向けられた感情は、憎悪。

『……へいか』

一度でいい。

父上と、呼んでみたかっただけなのに。

呼ぶことさえも、許してもらえない。

呼んでみたかったと思った心は、ひたすら向けられている激しい憎悪に、押し潰された。

『サリヴァン！ サリヴァンっ!』

先帝が望むように死ねたのだろうか、そう思ったら、自分にはまだ息があつて。

『逃げて…っ…サリヴァン！』

『邪魔をするな、忌まわしい異形の術師がっ！』

『逃げてっ！』

先帝の剣を、傷だらけで包帯だらけのラクウィルが剣で受け止め、自分は庇われていた。

『ラク……ラク、やめろ。いいんだ。もう、いいから』

『逃げてっ、おれが頼んでるんです！ 逃げなさい！』

必死の形相で捲くし立てるラクウィルに、頭が混乱した。

先帝の剣を押し返せないほどの大怪我をして、今も動けるわけがないはずのラクウィルが、なぜここにいるのかもわからない。

『退かぬか、異形の術師！』

『うるさい。あなたに、あなたなんか、サリヴァンは殺させません』

『退けっ！』

ぎりぎり、ラクウィルの剣は押される。先帝の言つとおりだと、そこと退けと、そう言っているのにラクウィルは聞かなかつた。

『やめろ、ラク……っ』

『いやです』

『ラクっ』

『おれはサリヴァンの騎士です』

叱るように、ラクウィルが怒鳴ったときだ。

ぐにやりと、ラクウィルの姿が歪む。

『……ラク？』

ラクウィルの姿が歪んだのを見たのは、サリヴァンだけではなく、先帝もだった。サリヴァンと同様に驚き、目を見開いている。

『きさま……つ……まさか』

『あなたにサリヴァンは殺せない。殺させない。おれがそばにいる限り』

『……つ、きさまあ！』

先帝が怒り狂って、怒鳴り散らす。それと同時に、ラクウィルは先帝の剣を押し返した。

そうして、天を仰ぐ。

『猊下あー！』

そう叫ぶと、ラクウィルは剣を握り直し、先帝に突っ込んでいく。やめる、と制止する言葉を出せたかわからない。気づくと馴染みのあるぬくもりに包まれていて、目の前を見憶えのある後ろ姿に塞がれていた。

『サリヴァンさま……っ』

ぬくもりは、いつも細々と世話をしてくれる精霊アルトファルだ。

血を苦手とするくせに、無理をして駆けつけたらしい。

アルトファルがここに来たのなら、と目を凝らせば、見憶えのある後ろ姿は、間違いようもない。

『養父上……』

『やはりあれは、おまえの《天地の騎士》であったようだな』

『……ディバイン？』

『ラクウイル・ダンガード……あれは《天地の騎士》だ』

『……ラクが……、ラクはっ？』

養父上と呼び慕っている聖王は、ふらりと振り向いて、塞いでいた視界を明らかにしてくれる。

『……ラク？』

いるはずのラクウイルと、そして先帝の姿が、消えていた。

L a t e r a l B i o g r a p h y : いまがあるから。2 (前書き)

サリヴァン視点です。

そういえばラクウイルの三つめの天恵が発動したのは、あれが初めてだった。ラクウイル自身は火と土以外に天恵の兆候があると気づいていたようだが、使ったのはあれが初めてだったと言っていた。

そんなことを思い出しながら、サリヴァンは目を覚ます。随分と懐かしい、夢を見た。

だが。

「……目覚めてすぐ、おまえの顔とは」

「こんな美形を拝めて最高の気分ですよ」

ラクウイルの顔が真ん前にある。

「……最悪だ」

ツェイルなら最高であるのに、と顔を引き攣らせても、ラクウイルの満面笑顔が崩れることはない。

「なんて可愛い発言でしょうね」

「おまえが可愛かったら気色悪いことこのうえない」

「んーん、サリヴァンは日々可愛くなっていきますねえ」

意味不明なことを言いながらラクウィルは身体を起こし、ふむふむと微笑みながら離れていく。

サリヴァンはふつと息をつきながら、寝台を起きた。

隣に、ツェイルはいない。

そのことに少し、肩が落ちた。

「ツェイは？」

「サリヴァンが起きるとは思わなかったので、厨房で遊んでいますよ」

厨房、と聞いて、眉間に皺が寄る。

「また……飴細工、か？」

「いえ違います」

おや、と思った。

「本気で遊んでいます」

「……どういう意味だ？」

「たぶん本人は真剣なんでしょうけど……おれにしてみたら遊んでいるようにしか見えなくて」

ラクウィルにそう見えるということは、本当に遊んでいるのではないだろうか、サリヴァンは首を傾げた。

「なにをしているんだ？」

「包丁で野菜のみじん切りを」

ああそれなら決まりだ。

「ん、遊んでるな」

「めちやくちや真剣そんな様子なんですけどね？」

こうやって野菜を睨んで、とラクウィルがツエイルの真似をする。ツエイルだったら可愛らしいだろう姿も、ラクウィルでは可愛くない。

「起きる。どれくらい眠っていた？」

「一日も眠っていませんよ。珍しいですね、姫のそばなのに」

「……ゆめを」

「はい？」

「夢を、見ていた」

はあ、と息をついて、寝台を離れる。

ラクウィルに渡された上着を羽織りながら、露台の窓に歩み寄って薄暗い空を見上げた。

「夢って……いつのですか？」

「いつ、ね……非現実的なものだとは、思わないのか」

「あなたが見る夢は深いですから」

困ったように微笑むラクウィルを振り向いて、サリヴァンは肩を竦める。

「おまえに助けられたときの夢だ」

「おれ？」

「おれの夢には、必ずおまえが出てくる。おれを助けるために、いつも必死なおまえが」

「それは光栄なことですが……まあ、おれはサリヴァンの騎士ですからね」

「なあラク」

「なんです？」

サリヴァンは視線を床に落とし、ゆっくりと己れの右手のひらを見つめた。握ったり、開いたり、グツと力を入れては震える、役立たずな腕に唇を歪める。

「もう、おれを護るばかりでなく……自分のことも」

視線を戻せば、ラクウィルの微笑みがあつた。

「自分のことも、護ってくれないか」

「護ってますよ。この身はサリヴァンを護るための、大事な身体ですから」

「そうじゃなくて」

「わかってますよ」

くす、と笑つたラクウィルは肩を竦めた。

「気になる子はいるんです。だから、おれはだいじょうぶですよ」

「……本当に？」

「人の感情は、けっこう自由にならないものですよ。まして自分の感情なんかは、もっとね。サリヴァンも、それはわかっているですよ？ だからだいじょうぶです」

安堵させられる笑みにとりあえずほっとするが、それでも、と思つ心は止められない。

「ラク、おれは……」

「サリヴァン」

笑みを深めたラクウィルに、言葉を遮られた。

「今があるから、いいんですよ」

「……ラク」

「今があるから……おれは笑っていられます。サリヴァンも、笑っていられます。それって、すごくいいことじゃないですか？」

「すぐく、いい……？」

「おれは楽しいですよ。毎日が、とても。今があるからそうなんです。ね、いいことでしょう？」

言い包められている気もしなくはないが、そう言われて悪い気はしない。

「ねえサリヴァン、考えてみてくださいよ。今があるって、なんでだと思えます？ こうして生きてるって、なんでだと思えます？ おれはね、姫のおかげだと思ってるんですよ」

ラクウィルはとても嬉しそうに、乱れた寝台の敷布や掛布を整えながら、口を開く。

「姫がきてくれてからの毎日はサリヴァンがとても楽しそうで、とても生き生きとしていて、そりゃあ大変なときもありましたけど、それすらも楽しめるような雰囲気になって……ああこれって姫がいてくれるからなんだなあって、よく思ってますよ。だから、姫が産まれてきてくれてよかったなあって、サリヴァンと出逢ってくれてよかったなあって、おれの心は今すごく嬉しくてならないんです」

隠しごとはしても嘘は言わないラクウィルの言葉は、サリヴァンの不安を優しく解してくれる。

心地いい優しさに、胸が震えた。

「さあ、サリヴァン。姫を呼んできますから、もう少し眠りましょうか。今度はきつと、暖かい夢が見られますよ」

寝台を綺麗に整えてくれたラクウイルが、眩しいほど綺麗に微笑む。

ラクウイルにつられるように、サリヴァンも微笑んだ。

「そう、だな」

「じゃ、少し待っていてくださいね」

ひらりと身を翻して出て行くラクウイルの背を見送ってから、サリヴァンは整えられた寝台に戻り、腰かけた。

いつでも、どんなときでも、笑っていようと思っていた。けれどもそれは、自分よりもラクウイルのほうがずっと強く心がけている。いつでもどんなときでも、ラクウイルのただただ優しい笑みに力を与えられていた。ラクウイルがいたから、笑っていられた。

今、ラクウイルに笑っていられるようにしているのは、自分だ。

そう思うと嬉しくて、泣きたくなくなるくらい嬉しくて、こんな自分にしてくれたツェイルを、いつそう強くて優しく思った。

「ツェイ……」

ありがとうを、きみに。

「ツェイ……」

天を仰ぎ、天に祈る。

今があるから、忌まわしき過去を受け入れることができる。

「……サリヴァンさま」

いとしい者の声に、サリヴァンは振り向いて笑みをこぼす。

「おいで、ツエイ」

差し伸べた手のひらに重なる、小さくて硬い手のひら。

引き寄せて、抱きしめると柔らかくて、暖かくて、どっしりようもなく安堵する。

「おれのそばにおいで、ツエイ。ずっと、ずっと、おれのそばに」

笑っていられるように。

笑い合っているように。

笑い続けていられるように。

「サ、サリヴァンさま……っ……や」

「いや？」

「だって……っ」

「ずっとおれの深くにおいで、ツエイ。ずっと、もっと、深く」

もうあの夢は、現実にならない。区別がつかなくなる、なんてことは、もう二度とない。

今があるから。

「なんで……っ……サリヴァンさま、待って……っ……あ」

「やわらかい……かわいい、ツエイ」

「サリヴァンさま……っ」

「ツエイ……ツエイ、ツエイ」

きみがいるから、今がある。

今があるから、きみはいる。

今きみがいてくれるから。

L a t e r a l B i o g r a p h y : いまがあるから。2 (後書き)

ちよつとした過去話、これにて終わります。

Plus Extra : 国を継ぐ者。1 (前書き)

ツイイル視点で始まります。

残酷描写、と表現すべき部分が、話の全体に散らばっていると
思います。

ご注意ください。

求められるというのは、とても嬉しくて幸せなことだ。だから涙がこぼれる。嬉しくて、幸せで、夢のようだから。

けれども。

「ツエイ、もう少し」

もう無理だ。息ができない。身体に力が入らない。訴えても、求められるとその感情も揉みくちやにされてしまう。

心とは厄介なものだ。

「サ、リ……ヴァ、さま」

「ん……可愛い、ツエイ」

深い口づけに戸惑っていた頃が懐かしい。今でも慣れないことではあるが、あの頃とは比べようがない。

ああ、幸せだ。

そう思うから。

「こら、おれを見る。おれ以外のことを考えるな。ひどくするぞ」

もうひどくしているくせに、とは言わせてもらえず、その激流に呑み込まれた。

*

*

住まいを変えてから、食器を一度だけ新しくした。古びていた椅子や脚が欠けた卓は修理され、襪褌同然になっていた絨毯も新しくされた。

生活をするにあたって、必要とされた邸の改修が終わったのはもう去年のことである。ヴァルハラ公爵の住まいは、あるじたるサリヴァンの要望により、皇都の外れで長く放置されていたヴァルハラ家の別邸を本邸として生まれ変わらせた。

だが今日は、そのサリヴァンがいない。昨日も、いなかった。たぶん明日もない。

「こうなるから城に戻りたくなかったのか……」

ツェイルはひとり心地に呟く。この数日のサリヴァンの不在にはもう慣れてしまった。寂しいことだけれども、慣れるしかなかったからだ。

「イル姉さまがおとなしいのは、ちょっと怖いわ」

その声に振り向くと、末の妹シュネイが部屋に入ってきてくる所
だった。いつのまに來たのだろう。

「行かないの？」

「……どこに」

「殿下がいらっしやるところに」

「……わたしは、騎士ではないから」

肩を落としてシュネイの言葉に頂垂れれば、愛らしい末妹は小さ
く笑った。

「イル姉さまらしくないわ」

「わたしらしいって？」

「イル姉さまは騎士で、剣士だもの」

このところのシュネイは、幼い少女の名残りを持ちつつも、おと
なの女性になろうとしている。言葉や仕草はもう、ひとりの美しい
女性だ。

隣に來たシュネイと、目が合う。姉妹なのに、似ているのは顔つ
きだけだなと思った。

「……綺麗になったな、ネイ」

「あら、それあたしに言うこと？ イル姉さまだって、また綺麗に
なったわ」

たとえお世辞だとしても嬉しい言葉に、ツェイルはやっと微笑み
を浮かべる。

「ラクと婚約したって、聞いた」

「反対？」

「いいや。ネイは綺麗になった」

まだ幼い少女が恋をした。だから美しい女性になった。恋しい人を、夢中にさせるために。

シュネイが恋をしたのは、サリヴァンの侍従であるラクウィルだ。いつのまに出逢っていたのか、ツェイルは知らない。ただ、居を移してからはよくシュネイが来るようになって、そうしてつい最近、サリヴァンからラクウィルのことを聞き、シュネイが来ていた理由を知った。

「ラクが好き？」

「好きよ。アイン兄さまやウーラ兄さまは反対してるけど……あたしが好きなの。ラクさまは、それをただ受け入れてくださっただけよ」

少しだけ頬を朱に染めて、けれども臆面もなく幸せそうに、シュネイは微笑む。ラクウィルがシュネイのこんな表情を引き出しているのだと思うと、反対する兄と弟の気持ちが少しだけ理解できた。

「奪われた気分だ……少し、寂しいな」

「あたしも、ユーリ姉さまやイル姉さまが結婚なさったとき、そう感じたわ。あたしの姉さまなのに」

「……ああ、そうか。兄さまも、こんな気持ちだったのか」
「皆そうよ。寂しくならないことなんて、ないの」

寂しいことなんてなに一つない、なんて、言えない。シュネイはそう言った。ツェイルよりもよほどしっかりしている妹だ。

「でもね、それでも、あたしはラクさまが好きなの。姉さまが殿下

を愛していらっしやるように、あたしもラクさまを愛してるの。こ
んなの子ども気持ちだって、違うんだって、兄さまたちは言うけ
れど……いいの」

「運命の人だから？」

「だって、もう誰も見えないの。あたしはもう、ラクさまを中心に
ものを考えるようになったしまったもの」

「そこまで自覚しているなんて……ネイはおとなだな」

「子どもよ。あたしのただの我儘だもの」

それでも、と思う。おとなになろうとしているから、きつと、自
分の気持ちが齒痒いのだろう。

「姉さまも、我儘を言ったら？」

「わたしの我儘なんて……」

「殿下のおそばにいたいなら、いていいのよ。だって姉さまは騎士
だもの」

「もう騎士ではないよ」

「いいえ。自分がその人の騎士だと思っなら、それはずっとそくな
のよ。だから姉さまは、殿下の騎士だわ」

「……そうかな」

そうよ、と誇らしげに言うシュネイに、苦笑がこぼれる。

「飛び出しているのよ、姉さま。姉さまは強いんだから」

シュネイの言葉に、不思議と元気づけられる。きつと、自分でも
そうしたい気持ちが強いから、肯定されて嬉しいのだ。

「そばに……行っても、いいのかな。邪魔に、ならないかな」

「騎士だもの、邪魔でいいのよ」

「いいのか……」

「文句は好きなだけ言わせるといいわ。護りたい人のそばにいて、なにが悪いのよ。それに、互いに護りたいと思ってるのよ？ 文句を言うほうが筋違いじゃない」

「……ネイは、強かだね」

「あたしにも護りたいものができたからよ」

ここ数日サリヴァンが不在であるように、サリヴァンについて歩くラクウィルも不在の日々が続いている。だからシュネイも、ツェイルのようにいい人らしい人のそばに行きたいのだろう。

「……行こうか、ネイ」

「あたしも連れて行ってくれるの？」

「きつとラクも、ネイに逢いたいだろうから」

「……そうかしら。逢いたいと思うのは、いつもあたしのほうが強いよ」

子どもだから、とシュネイは少し落ち込んでいたが、この少女を見てラクウィルがどう思うか、考えなくてもわかることだ。

「行こう、ネイ」

ツェイルはシュネイの手を取る。

歩き出そうとしたところでふと、腹部に痛みを感じた。気になるほどの痛みではなかったので、かまわず一步を踏み出した。

しかし。

「イル姉さま？ イル姉さま、どうしたの？」

数歩進んだだけで、腹部の痛みが急激に強まり、耐えきれずツェイルは床に膝をついてしまった。

「な、んでも、な……うう」

「姉さまっ」

痛い。なんだろう、この痛みは。

身体を丸め、痛みをやり過ぎそうとしたけれども、増すばかりだった。

「姉さま、まさか……っ」

なにに気づいたのか、ツェイルの身体を抱きしめたシュネイが、「誰か！」と扉の向こうに向かって叫ぶ。

「ガルデア、ガルデア！ 姉さまを護って！ 負担をかけているだけなら、今だけでいいから出て行って！」

「ね、い……っ」

だいじょうぶだ、ヴィーダガルデアはなにもしていない。

そう言いたかったが、息が続かなかった。

「ああ、姉さま……っ……だめよ、だめなの、我慢しないで。誰か、早く……ラクさまっ」

だいじょうぶ、だいじょうぶだ。ただ痛いだけ。痛くてどうしようもないけれども、おとなしくしていればだいじょうぶだ。

慌てふためくシュネイのほうがか心配で、ツェイルは痛みを我慢し

ながら無理に笑みを作る。そうするとシュネイがもつと動揺してしまつて、大変だつた。

やっぱりまだ子どもだな、と痛みで朦朧とし始めた頭で思ったとき、駆けつけてくれたリリの姿を見た。

「ツェイルさま！」

リリの姿にほっとしたところで、ずん、と襲われたひどい痛みに頭がいつぱいになった。

Plus Extra : 国を継ぐ者。1 (後書き)

リクエストいただきました。ありがとうございます。

楽しんでいただけたら、幸いです。

Plus Extra : 国を継ぐ者。2 (前書き)

サリヴァン視点です。

「ううーっ」

と、ラクウイルが変な呻きをもらしたので、サリヴァンはなんと首を傾げた。

「どうした」

「いやあ……なんか、きゃんきゃん、うるさくて」

両耳を塞ぎながら蹲ったラクウイルに、倣うようにして一緒に蹲ってみる。なにも聞こえない、むしろ静か過ぎて怖いくらいだ。

「そんな、きゃんきゃん、叫ばないでっ」

「……ふむ？」

「ちゃんと、わかるようにっ……ああもう、泣かないで、わかったから」

誰かと話しているように、ラクウイルはひとり言を繰り返す。ラクウイルにこんなことをさせられるのは自分だけだと思っていたのだが、どうやら違っらしい。

「誰が泣いているんだ？」

首を傾げていると、まだ耳が痛いのだろうラクウイルはしかめた

顔をサリヴァンに向けた。

「単語しか聞き取れないんですけど……ああネイ、わかったからっ。サリヴァン、すみませんが飛びますよ」

「は？」

「動揺してなに言ってるんだかさっぱり……すみません、行きます」

ああ、と返事すると同時に、腕を掴まれる。そのままラクウイルの天恵が発動し、グツと身体が重くなった。

「ラクさまぁ！」

そこに到着したとたん、ラクウイルに突撃する少女。その少女がラクウイルの婚約者で、わが妻の妹シュネイであることはすぐにはわかった。

「ネイ、ネイ、だいじょうぶですよ。おれが来たんだから。落ち着いて」

「でも、ラクさま、どうしよう、姉さまがっ」

「姫？」

その単語に、サリヴァンは瞠目する。

「ツエイになにかあったのか！」

ラクウイルの肩を掴んで引き、泣きはらした顔のシュネイを覗き込む。

「姉さま、痛いって……っ……お腹、痛いのだめって、ユーリ姉さまが

つ。でも、あたし、姉さまがそうだって、知らなくてっ」
「……な、なんの、ことだ？」

言っている意味が、よくわからない。ツエイルのことを言っているつもりなのだろうが、シュネイにとっての姉はツエイルだけではない。テューリという上の姉もいる。

そのときだ。

「お退きなさい！」

ばん、と部屋の扉が乱暴に開けられ、テューリが姿を見せた。大荷物を持ったエーヴェイエルハルト、リリまでいる。

とすると、ここは自分の家だな、とサリヴァンは冷静に考え周りを見渡す。

「ユーリ姉さまっ」

「落ち着きなさい、ネイ。わたくしとハルトさまが来たからにはだ
いじょうぶよ」

言いながら、テューリは不機嫌そうな顔でサリヴァンを眇めたが、ふんと顔を背けると続き部屋へと身を走らせた。その後ろをハルトが、説明の時間が惜しいとばかりにサリヴァンに軽く頭を下げただけにして、追いかけて行った。

「なんの騒ぎだ……」

呆然としてしまっていたサリヴァンは、顔をしかめる。

「殿下、申し訳ありません。時間に猶予がないのです。わたしも行きます。殿下はここでお待ちください」

リリまで慌ただしく行ってしまう。状況を説明して欲しいのに、誰もそれを教えてくれないなんて、どうしたらいいのだ。

「……ネイ、とにかく落ち着いて、なにがあったのか教えてくれませんか。エーヴィエルハルトとテューリ嬢がいらしたということは、姫の身体になにかあったんでしょ？」

泣いているシュネイに、悪いがサリヴァンも聞きたい。

「ツエイになにがあった。頼む、教えてくれ」

ここ数日の不在で、ツェイルには寂しい思いをさせているという自覚はある。それだけに、この騒ぎは不安でならない。

「姉さま、お腹痛いって……っ……それ、だめなのに、あたし、知らなくって」

「どづいうことだ」

「姉さまのお腹に、いるって、知らなくて……っ」
「……腹に、いる？」

なにが、と怪訝に思ったとき、ラクウィルが気づいた。

「まさか……赤さまがいるんですか？」

なんだそれ、と思う。しかしシュネイは頷いた。頷きながらまた泣きだしてしまった。

「サリヴァン、赤さまですよ！」

興奮気味に言うラクウィルは、シュネイと違ってなぜか嬉しそうだ。

「なんのことだ？」

「赤さまですよ、赤さま！」

「いや、だから……なんのことだ」

重篤、ではない様子なのだが、さっぱり意味がわからない。

「姫に赤さまが……ああでも、痛いってことは、危ないのかな」

嬉しそうだったラクウィルが、とたんに気を滅入らせた。その気分落差にはついていけない。

「ラク、ちゃんと説明しろ。なんのことだ。ツエイになにがあったっていうんだ」

「子どもですよ」

「……、子ども？」

「姫の子どもです。ああいえ、姫とサリヴァンの、御子ですよ」

「……おれと、ツエイの……」

「子ども？ とサリヴァンは首を傾げ、しばらく考え込んで、ハッとすする。

「おれの娘か！」

「いやまだそうとは決まってるんですけどね。というか娘がいいんですね、サリヴァン。おれも女の子がいいですけどね」

「おれとツエイの……娘が」

「いやですから、そうとは決まっています」

「娘、が……」

「……はいはい」

サリヴァンはふらふらと、ツェイルがいるのだろう部屋に足を向ける。扉に手をかけて、この気持ちをどう表現すればいいのかと戸惑いつつも、開けた。

「ツェイ」

「出てお行きなさい！」

とたんに怒声を浴び、吃驚する。

「ツァイン兄上のところに行きなさいと言っているのよ！」

テューリのその怒声は、どうやらサリヴァンに向けられているわけではなさそうだった。

「あなたがここにいたままでは、ツェイルは苦しいだけなのよ！
今この状態のときだけでいいから、兄上のところに行きなさい！」

テューリは、身体を丸めて苦しんでいる様子のツェイルを抱き込んで離れない、真っ白な青年に怒鳴っていた。ツェイルがほかの男の腕の中にいるということに頭が沸騰しかけたが、泣きそうな顔をしたその青年が見知った精霊に似ていたので、どうにかそれを抑えられた。

「わたしが離れても、ツェイルは苦しいままだ。だめだ、ツェイルは」

「素直に応じなさい！」

「いやだ。ツエイルを護る。わたしのツエイルだ」

「やめなさい！ ツエイルの意思を聞いたでしょう。その子は産みたいと言ったのよ。赤子は殺させないわ！」

なんだと、とサリヴァンは驚愕し、一步を踏みこんだ。

「ツエイになにをする気だ！」

サリヴァンの登場に、そこにいた誰もが驚きの視線を寄こしたが、かまわずサリヴァンは怒鳴った。

「ツエイから、おれから、赤子を取り上げる気か！ おれたちの子どもに、なにをする気だ！」

「もうひとり死んだ。これ以上は無理だ。諦めてくれ、サリ」

その言葉に、カッと血が頭に昇る。同時に、肝が冷えた。

まさか、まさか、まさか。

「どういうことだ……どういうことだ、ガルデア！」

喜びの中にいたはずなのに、悲しみが混じって、感情がぐちゃぐちゃになる。

「死んだ。もうひとりも、死にかけている。ツエイルは護ろうとしているが……このままではツエイルも危ない」

「な……んだ、と」

目の前が真っ白になった。

なぜだ。

ツェイルの胎に子ができたと、それが自分との間にできた子だと、嬉しいことを聞いたばかりなのに、なぜこんなことになっている。なぜ、こんな悲しいことになっている。

「や……めて、くれ」

ツェイルの胎の子が、ひとり死んだと、青年、ヴィーダガルデアは言った。もうひとりも死にかけていると、このままではツェイルも危ないと、言った。

ツェイルの胎に宿った命は、二つあったのだろう。つまり双子だ。嬉しいことが二倍になるはずだったのだ。

けれども、一つは潰えた。

そして生き残ってくれた一つの命が、その灯火が尽きようとしているためか、ツェイルの命まで奪わんとしている。

「やめてくれ…… ツェイ、ツェイを」

ツェイルの命を奪おうというなら、子は要らない。

サリヴァンは本気でそう思った。

「サリ、ヴァン、さま……」

「ツェイ！」

ツェイルの掠れた声に、サリヴァンは形振りかまわず駆け寄る。額に汗を滲ませ、苦しそうに呼吸をするツェイルは、しかし薄く開けた双眸に強い光りを宿らせていた。

「ころさないで……おねがい」

「ツエイ……」

「おねがい……ごども、ころさないで」

言いながら、ツェイルはぼろぼろと涙をこぼし、縋ってくる。サリヴァンは臍を噛んだ。

「おまえの命が危ないんだ」

「いや……いやだ、ころさないで」

「おれは子よりおまえが大事だ。おまえを失いたくないっ」

「いや……っ」

ツェイルは、手を伸ばしたサリヴァンのその手を拒絶し、いつそう身を丸める。全身でサリヴァンを、子を死なせようとしている者たちを拒絶し始めた。

「ツエイ！」

一緒に死ぬ気が、とサリヴァンは唇を噛んだが、その腕を誰かにグツと掴まれた瞬間、引っ張られて頬を叩かれた。

「ツェイルから赤子を奪わないで！」

「ゆ、ユーリ、殿下になんてことを！」

「ハルトさまは黙ってらっしゃい！ この男は、ツェイルの子を殺そうとしているのよ！」

テューリの平手と、その怒声に、サリヴァンは呆気に取られた。しかし、すぐにわれに返って、睨みつけてくるテューリをこちらも睨み返した。

「子よりツェイルのほうが大事だ！」

「ふざけないでくださいまし！」

もう一発、その手のひらが飛んでこようとしたときだった。

「今のはサリヴァンが悪いです。テューリ嬢、ヴィーダヒーデを呼びました。ツアインも来ます。これでいいですね？」

ラクウィルだ。テューリの平手からサリヴァンを護り、なお且つサリヴァンの腕をがっしりと掴んでいた。

「行きますよ、サリヴァン。ここにいちやいけない」

「な…っ…離せ、ラク！」

「離しません。テューリ嬢、エーヴィエルハルト、姫を頼みます。姫の子も、お願いします。なにか必要なものがあれば、ルーフェさんに。置いていきますから」

「離せ、ラク！ ツェイが…っ…ツェイが！」

「どちらも大切なんです。わかりなさい！」

「ツェイだけでいい！ おれからツェイを奪うな！」

なぜわかってくれないのだ。ツェイが死んでしまいかもしれないのに、その命を吸っている子のことなど、考えられるわけがない。

最初は娘が欲しい、その次は息子だ。ツェイルはきょうだいが多いから、自分たちの子どもにも多くきょうだいを作ってやりたい。きつと、楽しい日々が得られる。

そう思っていた心も、崩れる。

「ツェイだけでいいんだ…っ」

ツェイルがいないと、生きていけない。生きる意味すら、目的すら、なくなる。ツェイルがいるから、ツェイルと出逢えたから、この世界で、この国を護ろうと思ったのだ。

「……行きますよ、サリヴァン」

「ラク！」

なぜわかってくれない。ラクウィルならわかってくれるはずなのに、なぜ理解してくれないのだ。

離せと暴れたサリヴァンだったが、しかしラクウィルの強い力は半端なく、ずるずると引っ張られた。そのまま部屋を、追い出されてしまう。

閉ざされた扉は、かちり、と鍵まで締められた。

「ツェイイ！」

Plus Extra : 国を継ぐ者。3 (前書き)

サリヴァン視点です。

「ツエイ……ツエイ、やめてくれ……ツエイ」

どうか、諦めてくれ。子はおまえの命を吸う。生きんがために、母から力を奪う。

たとえわが子のことでも、ツェイルのほうが大事で、サリヴァンは閉ざされた扉に縋りながらツェイルを呼び続けた。

「いやだ……子なんか要らない……ツエイ、ツエイ」

本当に、子など要らない。ツェイルを奪われるくらいなら、欲しいなんて思わない。

「ツエイい……」

要らない。ツェイル以外に、欲しいものなんてない。

ああそうだ、いつその手で、ツェイルを奪おうとしているものを、消してしまえばいい。そうすれば誰にも奪われない。

ゆらりと顔を上げたサリヴァンの、その指先が花びらへと変化しようとしたときのことだった。

「やめておけ」

サリヴァンの視界を、誰かが覆い隠した。その誰かが、自分と同じように体温が低く、しかし人間という存在から離れてしまったひとであることは、すぐにわかった。

「養父上……養父上、ツエイが……おれのツエイがつ」

聖王であり神であり、そしてサリヴァンの養父たる猯下が、サリヴァンの視界を手のひらで覆い隠していた。

「あれは、産み落とされねばならぬ」

「ツエイの命が危ないのに……っ」

「天恵を所持した者だ。おまえの」

「え……？」

「ゆえに片翼から力をもらわねばならなかった。そうせねば生きられぬ。あれの母には、つらいことであるうがな」

頭が混乱する。思考が、停止する。

猯下の言葉を理解できなかったわけではない。

「国主の、天恵が……」

ツェイルに宿った新しい命に、国主の天恵が引き継がれた。そのせいで、双子で在った命は、生き延びるために片割れの命を奪ったという。

心の奥底から、どっと暗いものが、押し寄せてきた。

「なんで……なんでおれなんだ！ 兄上が皇帝おうじゃないか！ なんで……なんでおれに出るんだ！」

国主の天恵は皇族にのみ発現する特殊な力だ。サリヴァンは皇族であるから、その力を受け継いだ。だが、同じように兄サライもその力を受け継いでいる。皇族はサリヴァンだけではない。それなのに、なぜ、サリヴァンのほうにその力が受け継がれなければならぬのだ。

「おまえもまた、皇帝になるべき人間であつたからだ」

「違う！ おれは……おれは、捨てられたんだ。死ぬと言われたんだ。死ぬことがおれの役目だつたんだ！ おれは皇帝ではない！」

「サリヴァン」

ひどく優しく、名を呼ばれる。視界を覆われているせいか、その声は全身を癒すように浸透してくる。

だから、その優しさに、涙が溢れる。

「養父上……っ……ツエイを、ツエイを助けてくれ……っ……おれからツエイを奪わないでくれ」

縋らずには、おれなかつた。神の力が、助けが、欲しかった。

「ああ……わたしは干渉できぬが、そのために来た」

「養父上……っ」

「アルト、行け」

狛下が、言った。聞こえた「御意」という声には聞き覚えがある。

「アルトファル……」

にこりと笑った顔が、ちらりと一瞬だけ見える。金髪に碧い瞳、優しげで慈愛に溢れた光りの最高位精霊、アルトファルだ。

「だいじょうぶ、わたしがいきますから」

ふわりとサリヴァンの頭を撫でたアルトファルは、閉ざされた扉の向こうに、すっと溶け込むようにして姿を消した。

「あれは癒しの力を持つ。足りぬものを補うだろう」

「足りない、もの？」

「あの娘に繁殖の能力はないに等しい。成長しておらぬからな」

思わず、絶句する。

ツェイルは天恵の代償で、肉体の成長を奪われている。もともと子を望める身体では、なかったのだ。

「アルトがそれを成長させる。無理やり、な」

「そんな……」

そんなことをしたら、ツェイルがどうなるか。

「案ずるな。子は産み落とされねばならぬ。娘から少しばかり力を奪うがな」

「ツェイに、負担は」

「ない、とは言い切れぬ。だが、アルトがどうにかするだろう。あれでも最高位精霊だからな」

この世界で、唯一癒しの力を持つ精霊、それがアルトファルだ。けれども、どんなものでも癒せるわけではない。

そこに、ツェイルが助かるという、確たる証はない。

「ツェイ……っ」

頭が、おかしくなりそうだ。
ツエイルのことしか考えられない。なのに、いくら考えても、心が暴れる。一度は治まりかけた暗いものも、溢れだしてくる。どうしたらいいのかわからない。

「ツエイ、ツエイ、ツエイい……っ」

必要なら、この命を持って行け。

ツエイルがこの手に戻ってくるのなら、なんでもする。

ツエイルが助かるなら、なんだって、厭わない。

そう、子を殺すことさえ、厭わない。

「心を病ませるな、サリヴァンよ」

猊下の言葉が、耳に遠い。

なぜだ。

そんな問いが、ただひたすら頭に巡る。

「おれを要らぬと斬り捨てた国が……っ」

死を待つだけにさせたくせに。

その意思さえも奪つかのように、腕を使いものにならなくさせたくせに。

「おれからすべてを奪ったこの天恵が……っ」

認めさえしなければ、この心は救われただろうか。

「ツエイまで……奪うのか！」

要らなかった。

天恵なんて、要らなかった。

国主の刻印なんて、必要としていなかった。

こんなものがあるから、こんなものを遣されたから、国は狂うのだ。

心の底からの叫びを、嘆きを、サリヴァンは猯下にぶつける。目を覆う猯下の手のひらも弾き、そのせいでぶるぶると震え始めた右腕が鬱陶しくて、邪魔で、動く左手でその部分を強く握る。痛みなんて感じない。

「ツエイを返せ……おれには、ツエイしかないんだ……っ」

こんなものがあるから、ツェイルを失いかけている。わが子を失いかけている。

これがあれば国を、ツェイルを護れると思ったのは、幻想だったのだ。

愛する者ひとりも救えない力など要らない。

こんな自分は、無力でしかない。そのことが、ただただ悲しくて悔しくて、情けなかった。

「ツエイ……おれのツエイ……いやだ、ツエイい」

身体を深く折り曲げると、溢れだして止まらない涙が床にこぼれ落ちた。

こんなとき、どうすればいいかなんて、サリヴァンは知らない。

猯下に頼り、ツェイルの無事を祈り、嘆くことしかできない。

なんて情けないんだ。

なんて無様なんだ。
生きているというのは、もうそれだけでつらいだなんて、考えたこともなかったのに。

「殿下」

その声と共に、ふわりと肩を抱かれた。

「ヴィーダヒーデが、ガルデアを抑えつけたよ」

「ツァ……イ、ン」

ツァインの、もっとも狂ってしまいそうな兄の、その冷静で落ち着いた声は、耳に届いた。

「僕はツェイルが子を宿していることに気づいていたよ。宿したその瞬間からね」

「知って……いた、のか」

「僕とツェイルの裡には精霊がいるからね。気づかないわけがない」
「なら、おまえ……っ」

ツェイルが子を望める身体ではないことに気づいていたのではないかと、サリヴァンは顔を上げるとツァインの胸倉を掴んだ。

「なぜ黙っていた！ ツェイの命が危ないんだぞ！」

「……それでも、僕は、黙っているしかないからだよ」

「おまえだって、ツェイを失いたくないだろう！」

なぜそんな真似ができる、とサリヴァンは乱暴にツァインを揺さぶったが、ツァインは表情を変えなかった。

「テューリが怒っただろ」

「は……？」

「あれはね、わかっていたからだ。ツェイルに子どもは望めないって」

「……っ、わかっているがら！」

「ツェイルが欲しいって、泣いた。一度だけ、それを知って。一度だけ泣いたんだ」

まさか、とサリヴァンは瞠目する。

「ツェイも……わかっていた、のか」

「自分の代償くらい理解している」

がんっ、と殴られたような衝撃が、心を襲う。

ツェイルがあんなに必死に、泣きながら「ころさないで」と縋ってきたのは、だからだったのかと漸く理解できた。

「そうじゃなくても、ツェイルは月のものがくるのも遅かった。き
てからも、不定期だった。年に二度か三度、くるかこないか……万
に一つの可能性だったんだよ、子を宿せるのは」

「な、ら……」

「わかってたんだ。子どもは望めないだろうって。だから、泣いた
んだ。肉体の成長が、そこまで奪われているなんて、悲しいだろう
？ 一生をメルエイラで過ごす掟があつたうえに、それだ。悲しく
て、嘆いていて……泣いた翌日から、ツェイルの心は消えたんだ」

ツアインの胸を掴んでいた腕が、ぱたりと落ちる。右腕の震えが
ひどくなつたせいもあるが、それよりも、衝撃のほうが強くて力が
抜けた。

「おれは……なんてことを……」

夢を語った。

ツェイルに、これからのことを、語った。

娘と息子、それからもつと多くの子どもを、という、暖かい家族の夢だ。

みんなで丸くなって食事をしよう、一つの寝台にみんなで寝るんだ、出かけるときにはそれぞれ手を繋いで、みんなではしゃぐんだ。ゆつくりと語った夢を、ツェイルは幸せそうな笑みを浮かべて聞き、頷き、自分もあしたいこうしたいと、言ってきた。だから、たくさん子どもを儲けようと、笑い合いながら語った。壊れそうだと思いながら、たくさん抱いた。こんな身体でごめんなさいと泣きながら謝られ、そのいとしさから抱き潰して、寝込ませてしまったこともある。

おれはなんてことをしたんだ、と思わずにはおれない。

「勘違いしないでね、殿下」

「……おれは、ツェイルに、ひどいことを……っ」

「違うよ、殿下」

「どごが、違う……っ……おれはツェイルに」

ひどく悲しい夢物語を、聞かせてしまっていたのかもしれない。

「違うよ、殿下。僕はありがとっつて、言いたい」

「礼など……っ」

「僕は言ったよね、ツェイルを幸せにしてっつて。殿下は、ツェイルに幸せを与えてくれているよ。望めないと思っていた子どもを、授からせてくれたんだから」

「だが今はツェイルをっ」

ツェイルを、死に向かわせている。サリヴァンが宿らせた命であるから、その力が出現しようとして、ツェイルの命を吸っている。

もしサリヴァンに国主の天恵などなければ、今は一つしかないという命だつて片割れの命を奪うことなく、成長してくれていたかもしれないのに。

「猯下、ツェイルを助けてくださるんでしょう？」

ツアインは猯下に、顔を向けることなくそう問うた。

「わたしは干渉できぬ。だが、アルトは違う」

「精霊だから、神ではないから、光りの精霊ならツェイルを助けられるんですね？」

「確証はない」

「でも、猯下はわざわざ来てくださった。それがたとえ殿下のためであっても、産まれてくる子が国のための子であっても、猯下はその命と、命を支えるツェイルを助けるために、光りの精霊を連れて来てくださった」

「……そういうことになるな」

猯下の素気ない返事は、しかしサリヴァンの耳に、心に、届く。

「養父上……っ」

縋るように猯下を見上げれば、いつものように表情のない美しいひとが、目を細めてサリヴァンを見下ろす。

「わたしにできることは、もうない。あとはアルトに任せよ。おまえは、少し休むがよい」

最初のように、少し冷たい手のひらが、サリヴァンの目許を覆った。その瞬間に襲われた眠気に、サリヴァンは抗う。

「いやだ、ツエイが……っ」

「初めておまえの、国と天恵を恨む心を聞いた。疲れたであろう、サリヴァン。わが子よ」

「やめ……っ」

「眠れ」

どん、と身体から、力のすべてが抜けた。

「ツエ、イ……」

傾いた身体は、ツアインが支えてくれる。

「ありがとう、殿下。ツェイルはきみのおかげで、本当に幸せになれる」

その言葉を最後に、サリヴァンは意識を手放した。

Plus Extra : 国を継ぐ者。4 (前書き)

サリヴァン視点です。

ハツとして身体を起こしたとき、そこにはラクウイルの姿だけがあつた。

「ツエイは……っ?」

意識を奪われていた時間はどれくらいなのか、わからない。外は暗くなっているようであるから、数時間は経過しているだろう。

サリヴァンの焦りは、しかしラクウイルを微笑ませた。

「だいじょうぶ」

「本当か!」

「姫も御子も、無事です。アルトファルだけでは無理だったでしょうけど、ヴィーダヒーデがまずヴィーダガルデアを抑えましたし、テューリ嬢やエーヴィエルハルトもいましたから」

瞬間的にほつとしたものの、長く首をもたげている暗いものは、そんなに簡単に消えるものではない。

「すまない……すまない、ツエイ」

おれが、皇族だから、そのせいでおまえを苦しめる。

おれが抱えたものが、おまえと、おれたちの子を、苦しめる。

「……猊下からお言葉がありました」

そう言ったラクウィルが、サリヴァンの傍らに腰を下ろすと、ぽんと頭を撫でてくる。

「御子の片翼は生きている、と」

なに、とサリヴァンは大きく目を見開く。

「……生きて……いる？」

「天恵を受け継いだ御子は、その力で、片翼を逃がしたのだろう、と。姫の身体への負担も大きいから、すべてを奪い尽くす前に、その御魂を遠くへ逃がしたと、猊下はおっしゃいましたよ」

それはもしかや、片割れの命と母の命を奪わんとした天恵を、生き残った命は理解しているということか。

「さすがは姫の子ですよ、サリヴァン」

にこ、とラクウィルは笑う。

「サリヴァンの気持ちと姫の気持ち、姫の身体にかかる負担を、御子は理解したんです。だから今回みたいな、ちょっとひどいですけど、強硬手段に出たんじゃありませんかね」

「どういう……」

「ツアインが言っていたでしょう。ありがとって」

ハッと、サリヴァンは息を呑む。

「サリヴァンだったから、御子ができたんですよ。天恵の代償で欠

けていたものが、国主の天恵っていう強大な力を有した者を育むために、姫にその力を与えたんです。猊下がアルトファルを連れて来てくれたでしょう?」

「な……なら、ツエイは」

「ちよつと成長してましたよ。前はネイと双子みただったのに、ちゃんとネイのお姉さんに見えるんです。まあ、ネイならすぐに追い越しちゃうんでしょうけど」

「ははは、と笑ったラクウィルに、どうしてだろう、涙が込み上げた。」

「おれに、天恵があつたから……ツエイは、子を宿せたのか」

「ツアインがそう言っていたことを、猊下は否定しませんでした。だから、たぶんそうなんですよ。サリヴァンだから、姫はずつと願つてやまなかつたそれを、叶えることができたんです」

それはつまり、と込み上げた涙に視界がぼやける。

万に一つの可能性であつたことが、サリヴァンが持つ皇族の力で、可能にした。

そう考えていいということか。

「サリヴァンはすごいですねえ。姫が願うことを、ぜんぶ、叶えようとするんですから」

すごいなあと繰り返したラクウィルの肩に、サリヴァンは額を擦りつけて、涙を隠した。

「おれが……おれが、ツエイの、願いを……っ?」

「そうですよー」

ずっと、願っていた。そうであって欲しいと願っていたから、口にしていた。

この世界、ラーレに広がり散らばりし天恵に、忌避すべきものなどない。

自分がそのひとりだったから、悲しくなんてなりたくなかったから、ずっと口にしていた。言い聞かせていた。そう思うようにしていた。そうであらねば自分が悲しいから、それがいやだったから。

「ツエイ……っ」

おれはおまえを、苦しめていないだろうか。

無理やり巻き込んで、この歪んだ人生に引き込ませておきながら、それでもおまえに、ただそばに、いて欲しかった。

語った夢物語は、願いの象徴だ。

実現できると、また思ってもいいだろうか。

「ツエイに逢いたい」

情けなく泣いた顔を拭いもせず、ラクウィルにそう告げる。

「隣にいますよ」

ラクウィルの配慮か、サリヴァンが横になっていたのは寝椅子で、場所を移動していなかった。隣の部屋にいますから、と立ち上がるのを手伝ってもらうと、ふらふらとしながらツェイルがいる寝室に向かう。

扉を開けてもらって中に入ると、穏やかな表情で眠るツェイルがいた。

「ツェイ……ツェイ、ツェイ」

早く触れたい、と早くあまりに躓きながらも、サリヴァンはツェイルの傍らに足を進め、そうして覆いかぶさるように腰を据えると上からじっとツェイルを見つめた。

「ツェイ……？」

涙の跡が残る頬に触れながら呼びかけると、僅かに瞼が震える。自然に起きるまで待ったほうがいいというのはわかっていたが、どうしてもその目で、自分を見て欲しかった。その声を聞きたかった。

「ツェイ、起きて」

目許に口づけを落とし、頬を撫で、覚醒を促す。震えた瞼が徐々に開かれると、薄い紫色の双眸がサリヴァンを捉えた。

「サリヴァンさま……」

その声を聞いたとたん、また涙がこぼれる。落ちた涙は、ツェイルの頬を伝った。

「ないて、いるの……？」

「ツェイ……っ」

「なかないで……ね、わたし、そばにいる」

ふわりと笑ったツェイルに、たまらないとしさと安堵が込み上げ、サリヴァンは額をこすり合わせた。

「ツェイ…っ…ツェイ」

「ふふ…ね、きいて、サリヴァンさま…わたし、ごども、できた…ずっと、むりだと、おもっていたのに……できたの」

幸せそうにくすくすと笑うツェイルは、寝ぼけているのか、それとも安堵からなにかが飛んでしまっているのか。

くすぐったそうにしながらサリヴァンの頬を両手で包み、できたの、とまた繰り返し返した。

「すごく、うれしい……ありがとう、サリヴァンさま」

「礼なんて、おれは……っ」

一時は、その子を殺そうと考えた。国主の天恵を引き継がせてしまったことに後悔を感じた。ツェイル大事さに、わが子を見捨てようとした。

それなのに、ツェイルの微笑みが、サリヴァンのその罪悪まで拭い去る。

「わたし、やっと、サリヴァンさまと、かぞくになれた……」

「……ツェイっ」

「なかないで、サリヴァンさま……わたし、しあわせ」

しあわせなの、と反芻するように言うと、サリヴァンの涙を拭い、またさらに笑って、ことんと眠りに戻った。

するりと頬から落ちたツェイルの両手を掴むと、その両手ごと胸に、ツェイルを抱きしめて嗚咽をこらえる。

「おれも、しあわせだ……っ」

おまえと出逢えて。

おまえと結ばれて。

おまえと生きられる。

諦めばかりのこの生に、ツェイルという少女が、喜びをもたらしてくれる。

「ツェイ……ツェイ」

ああ、この生で、よかった。

この幸せを、噛み締められる。

おれはなんて幸せものなんだろうと、サリヴァンは声を殺して泣いた。

Plus Extra : 国を継ぐ者。4 (後書き)

ずっとサリヴァン視点でスミマセン……orz

Plus Extra : 国を継ぐ者。5 (前書き)

最後にツエイルとサリヴァンの絵を載せてみました。みなさまのイメージとは異なると思いますが、見てもいいよ、というお方は下までおいでくださいませ。

サリヴァン視点です。

Plus Extra『国を継ぐ者。』はこれにて終幕。

『国を継ぐ者。』のエピソード的なものと思って読んでいただけると嬉しいです。

ツエイルの妊娠よりもっと早く、リリが第一子を出産していたので、ツエイルは出産までのほとんどの月日を、リリとその息子ノアウルと共に過ごした。ときおりシュネイが遊びにやって来て、テューリとエーヴィエルハルトが往診に来て、そして一カ月に一度だけトウーラが様子を見に来ていた。

「わ、わたしはなにを贈るべきか」

「要りません」

「なっ」

扉が開けられると同時に言われたので、答えてすぐ蹴って扉を閉めた。

「サリエー！」

椅子に戻ると、懲りずに扉を開けてサリヴァンを呼んだのは、サライである。

うるさいなあ、と思いながら兄を見やった。

「わたしはなにを贈ったらよいのだ！」

「要りません」

「なっ」

「そう思うならさっさと婚姻してください」

「……相手がおらん」
「お可哀想に」

女好きだからすぐに振られるのだ、と思う。

サリヴァンが帝位を返上してのちに復帰したサライには、多くの婚姻話が持ち上げられた。後宮は取り潰してしまっているので、ひとりずつ招いては半日ほど相手をする、ということを繰り返しているが、博愛主義過ぎて今日まで振られ続けている。ゆえに重臣たちが焦り始め、最近では政略結婚の話が持ち上げられつつある。そうでなくても皇族の仲間入りをしたい者はいるのだ。

「どこかによい姫はおらんものかな……おっ、いた！」
「は？」

サリヴァンの前をものすごい速さで駆け抜けたサライは、そのまま露台の窓に張りつき、庭をじっと見つめる。それを追いかけて見やると、今日は寝台から起きられる様子のツェイルが、シュネイに支えられながら庭を散歩していた。

「あの娘はっ？」

勢いをつけて振り向いたサライに答えようとしたところで、再び扉が開き、ラクウィルが姿を見せた。

「おれの奥さんに手え出したら殺しますよ、サライ」
「げっ」

書類の束を抱えつつも、おそろしく不気味な笑みを浮かべたラクウィルに、さすがのサライも顔を引き攣らせる。

「貴様の嫁とはなんと不憫な」

「あ、死にたいんですね？」

書類を投げ捨てたラクウィルは、その笑顔のまま、なぜか帯剣していたその柄を握った。

「じ、ジーク！ どこに行った！」

向けられた殺気が本物であるから、サライはぎよつとして己れの騎士を呼ぶが、あちらもラクウィルには殺されたくないらしく逃げているため、姿を見せない。

「ひとりで逃げおつたな、薄情者めっ！」

「可哀想にねえ、サライ。奥さんだけじゃなくて騎士も捕まえておけないなんて」

「貴様に言われたくないわっ！」

「あああ、ルカイアも可哀想になあ……こんな間抜けが皇帝なんて、不憫過ぎて涙出ちゃいますよ。ダヴィド大老がサリヴァンに残って欲しいって言った気持ち、もんのすごくわかります」

「あーっ！ 貴様は本当にむかつく男だな！」

「だあっておれ、サライ嫌いですもん」

「わたしも貴様は嫌いだ！」

逢えば必ず喧嘩らしきものをするラクウィルとサライに、いくら慣れたとはいえため息がこぼれる。

うるさいったらない。

まあ、これはこれで仲がいいのだろう。

「適当にしておけよ。もの壊したら追い出すから」

「御意っ」

嬉々として返事をしたラクウィルだが、サライは逆に焦っていた。

「さ、サリエ、わたしはおまえの子に祝福をっ」

「兄上の祝福なんて要りませんよ」

「なっ！」

「騒ぐだけなら帰ってください。おれも暇なわけではないんですよ」

騒がしいだけのサライを邪険に思いつつ、サリヴァンはラクウィルが投げ捨ててしまった書類を一枚一枚拾いながら確認し、ついでに仕分けてしまう。

「貴様のせいでわたしのサリエが……国家反逆罪で捕まりたいのか、狂犬！」

「えー、それ言うならサライなんか国家迷惑罪でしょー」

「国家めっ……なんだと！」

「あーうるさい。さっさと帰ったらどうですう？ ルカイアが鬼になつてますよー」

「ぐ……っ……いい、言われんでも今日は帰る！ サリエ、また来るからなっ……！」

勢いはあるのにラクウィルに負け、サライは逃げるように走り去った。廊下で「ジーク、来んか！」と叫ぶ声を聞いたのを最後に、その気配も消える。

なんとというか、本当にただ騒ぎに来ただけだ。

「もう二度と来てくれなくていいんですが……ツイイの身体に障る」

「ですなあ。あ、ごめんなさい。散らばしちゃいましたね」

「いい。半分は兄上に対する宰相からの陳情書だ」

「え？　つまりルカイアからのお小言ですか？」

「ああ」

「げえ……わざわざ公文書にしてまでサリヴァンを城にい？」

「そのようだな」

はあ、とため息をつきそうになって、途中でやめる。こんなことで幸せに逃げられたくない。

「サリヴァンが出仕するだけじゃあ、やっぱりサライはどうにもならないんですね」

「それだけではないだろうがな」

「ん……サリヴァン、もっかい皇サマになったらどうです？」

「いやだ」

「ですよねえ」

あのおばかさんどうにかならないなあ、とぼやきながら、ラクウイルは書類を拾う。

全部拾い終えて整頓したところで、ツェイルがゆっくりと露台のほうから入ってきた。

「サリヴァンさま」

呼ばれる前に手を差し伸べていたサリヴァンは、その華奢な身体を腕に抱いて、一息つく。同じようにラクウイルも、一緒に入ってきたシュネイをぎゅっとして、深々とため息をついていた。

「サライなんかには勿体ないです」

「はい？」

「うん、サライには勿体ない」

「陛下がどうかしまして？」

シュネイの頭に顎を寄せ、きよとんとするシュネイに「なんでもないですよ」と言う。その表情が安堵しているように見え、ラクウイルにもいい人が見つかってよかったなあと、サリヴァンは微笑む。

「サリヴァンさま？」

「ん、ああ……今日は歩いてもだいじょうぶなんだな」

「はい。少しは歩かないとだめだと、リリが言うので……少し休んでもいいですか？ 休んだら、また少し歩きます」

「なら、今度はおれと歩こう」

ツェイルの腰を抱いて前へ促し、長椅子に腰かけるとツェイルが顔を上げてくる。

「いいんですか？ その……まだ、お仕事が」

「半分はルカの小言だ。残りはいつだってできる」

「……そうですか」

ホツとした様子のツェイルは、嬉しそうな笑みを浮かべる。

「ん……んん？」

「どうかしましたか？」

「……長衣一枚だけか？」

「はい？」

首を傾げたツェイルを、じっとサリヴァンは見つめる。

光りの精霊によって無理やり成長を促され、年齢に見合った外見に近づいたツェイルだが、基本的にはどこも変わらない。身長も伸びたわけではないし、しいて言うなら顔つきがおとなびたくらいではないかと、サリヴァンは見ている。

だから、余計に目についた。

「下衣は穿いてないのか？」

ぴら、となにげなく膝もとの服を掴む。

「ひゃ……っ」

「え？」

見えた素足に吃驚した。いつもならこの下に下衣を穿いているはずなのに、穿いていない。

「腹が冷えるだろう、ツエイ。ちゃんと……、ツエイ？」

身体を冷やしたらだめだ、と言おうと思ったのだが、ツェイルは顔を真っ赤にして固まっていた。

「殿下、はしたないですっ」

「は？」

シュネイに怒られて、なんのことだと首を傾げる。

「イル姉さまがお召しになってらっしゃるのはワンピースですよ

「！」

「え」

「お放してください！」

パツと、掴んでいた部分を放す。ひらりと裾が舞った。

「サリヴァンのえっちい」

「ん なっ」

「いくら姫の生足を見たいからってえ……いきなりは駄目でしょー」
「ラクっ」

そんなつもりはない、と慌ててツエイルの顔を覗き、その真っ赤な顔に手を添えた。

「ツエイ、ツエイ、おれはそんなつもりなかったぞ。ただ身体を冷やしてはいけないとっ」

「い、いい、え……あの、ごめんなさいい」

「なぜ謝るっ」

よく見れば長衣ではなく、ちゃんと部屋着のワンピースだ。前開きでもないし、詰め襟もないし、横に細長い切り込みも入っていない。

ああだから余計に目に入ったのか、と改めて思ったところで遅い。

「逃げるなっ」

と、逃げられそうになったところを捕まえ、膝に乗せる。膨らみがある腹部には気をつけつつ、ぎくしゃくとしているツエイルをきちんと横抱きにして、捕まえた。

「まさか、ワンピースを着ているとは……初めて見た」

「ご……ごめんなさいい」

「だからなんで謝るっ」

いつも男装しているようなもので、女性ものの衣装を着たツエイルなど見たことがなかった。どうりで違和感があるはずだ。

サリヴァンの膝の上で、小さな身体をさらに小さくしたツェイルに、サリヴァンは「ふっ」と笑う。

「なんだ、いやがるほどのものでもないじゃないか」

ドレスを着るのをいやがるから、今までその姿は見たことがない。見たいとは思っても、いやがるのはわかっているのに、サリヴァンは強制したこともなければ言ってみたこともない。

しかし、なんてことはない。本人が気にするほど、似合わないわけではないのだ。むしろ、着せないほうがいいかな、と思う。下衣を穿いているときよりも、身体の線がとても魅力的だ。身体を締めつけて着るドレスよりも、こういうふわふわして柔らかいゆったりとした、寝間着のような衣装のほうが似合うし、誘惑される。

「ラク」

「はい？」

「こういうワンピースを何着か、用意できないか」

「寝間着みたいなドレス、ですか？」

「ツェイにすごく似合う」

にま、と笑ってラクウイルに言えば、呆れた眼差しを受けた。シユネイには苦笑をもらった。

「はああ……裁縫師を呼ぶんで、自分でどうぞ」

「悪いな」

「いいええ。おれもネイにそういうの着せてみたいですし」

うつかり自分の本音を吐露し、「ラクさまっ？」とシユネイを真っ赤にさせていた。

「あ、あの、サリヴァンさま
「ん？」

にっこりと笑って振り向くと、やはり真っ赤なツェイルはなぜかびくつと震え、さっとサリヴァンの胸に顔を隠してしまう。その一連の仕草がたまらなく可愛くて、ぎゅつとした。

「もうちょっとこうして休んだら、庭を歩こう」
「……はい」

小さな声で返ってきた答えに満足し、手のひらをツェイルの腹部に滑り込ませる。

あともう少しで産まれると、聞いた。

「よく、育ってくれた」

今は一つになってしまった、新しい命。

ツェイルの身体では育ち難いと、エーヴィエルハルトもテューリも診断した。それでも、光りの精霊が無理やりにも成長を促してくれたおかげで、その負担も軽減されているらしい。その代わりに、その日々のほとんどを寝台で過ごすことになってしまっているが、それは絶対に無理をさせてはならないゆえのことだ。いつながり起こるかわからない状態が、出産のときまで続くという、そのための措置ではあるが、元来活発なツェイルにとっては苦行である。しかし、サリヴァンが見ていないところで動き回って流しかけるという経験をしたので、今はおとなしい。リリに言われなければ部屋からも出ない日々だ。

「つらくないか？」

静かに問うと、サリヴァンの胸に隠れていたツェイルが、ちらりと顔を上げた。

「サリヴァンさまは？」

「ん？　なんでおれが？」

「……この子は、サリヴァンさまの力を、持っています。だから……」

どうやらツェイルは、最初のときのサリヴァンの嘆きを聞いていたようだ。情けない声を聞かせてしまったなあと苦笑しながら、サリヴァンは腹部に置いた手のひらを動かし、ゆっくりと撫でる。

「いいんだ。この力があつたから、家族が作れる。ツェイの、その願いを叶えてやれる」

「わたしばかり……サリヴァンさまの願いは？」

「ツェイに叶えてもらった」

「憶えがありません」

「おれという人間を、愛してくれたことだ」

「……サリヴァンさま」

「おれは、幸せものだよ」

なあ、おまえも幸せだろう。新しい命に向かって心で囁けば、返事をするように、子が動いた。

「お、動いた」

「あ……また、蹴る」

「元気だなあ。ツェイはほとんど寝台から動けないのに」

「蹴られてばかりです……」

「ははっ」

一時は、殺そうとまで思ったわが子。

生き長らえてくれてよかったと、今では心から思う。

「イル姉さま、赤さま動いたの？ 触ってもいい？」

「あ、おれも触りたいですー」

わらわらと寄ってきたシユネイとラクウィルに、ツェイルは微笑みながら頷く。その微笑みが柔らかく、強く、穏やかであることが、サリヴァンの心を救った。

「あはっ、元気ね！」

「うわぁ……足だつてもろにわかる……不気味い」

「ラクさま失礼よっ」

「だつておれ、赤さまを見たのなんて、ルカイアとリリの子が初めてだつたんですもん」

「え、見たことなかったのっ？」

「ずっと城の奥にいましたからねえ……その前だつて、おれが一番小さかつたですから」

「じゃあ……殿下も？」

シユネイに話題を振られて、そういえばそうだな、と頷く。

「あんなに小さいんだな？」

「イル姉さまの子はもっとちっちゃいわ。ユーリ姉さまが言ったもの」

「え……あれより小さいのか？」

それはちよつと怖いな、と思う。けれども、きつと可愛いだろうなとも、思う。

「楽しみね、イル姉さま」

「……うん」

「あたし、お洋服を作ってもいい？ 手袋とか靴下も、作ってみたの。リリさんが教えてくれるって」

「うん。わたしは、作れないから」

「そんなことないわ。あたしが作るのを真似て、姉さまも作ってみて」

ね、とシュネイに可愛く誘われて、ツェイルも可愛らしく「そうだね」と頷く。

こうしているとちゃんとツェイルがお姉さんに見えるから不思議だが、並ばせると双子に見えるのも不思議だと、サリヴァンは常々思う。

「じゃあ、早速買い出しに行ってくるね。お裁縫の道具は母さまのがあるからいいけど、布は買わなくちゃ。ねえラクさま、つき合ってくれる？」

「いいですよー」

「ありがとう。じゃあ、行ってくるわ。殿下、姉さまをお願いします。ラクさまも、ちょっとお借りしますね」

おとなびた印象の強いシュネイだが、ちゃっかりとしているのはやっぱり子どもで、そして未っ子だなあと思う。

「なにかあったらラクに天恵を使わせていい。気をつけてな」

「はい」

にこ、と笑ってラクウィルと共に部屋を出て行くシュネイに、ツェイルも微笑んで手を振る。

ふたりつきりになったところで、シユネイとラクウィルが気を利かせてくれたのかな、と気づいた。

「ツエイの妹は元気がいいな」

「ネイの笑みには、両親も癒されていました。わたしも、よく励まされましたし」

「ドレスを着ろって？」

「……よくご存知で」

「言いそうな性格をしている。それでもツエイは着なかつたんだな」
「どうも、苦手で……これも、ちよつと苦手です」

思うに、ツェイルは豪華なものが苦手、というかあまり好きではないだけで、ドレスは一般的に豪華な造りをしているゆえに、好ましくないだけではないだろうか。

「着たくないなら着なくていい。ただ、これはすごく似合う」

「そう、ですか？」

「ツェイは脚が綺麗だから……誘惑されて大変だ」

言ったとたんツェイルが真っ赤になったので、ちよつと控えて笑う。

「肩掛けも新調したいな……そろそろ寒くなる」

「そんなにたくさんいただいても、なにも返せません」

「おれが贈りたいだけだ。それに、ツェイにはこれをもらった。充分だ」

サリヴァンの片耳には、ツェイルが武具屋で購入した碧い鉱石が、耳飾りに加工されてつけられている。耳飾りに加工したのはツェイ自身で、購入から半年ほど経った日に贈られたものだ。

「このお守りは、役に立っていますか？」
「ああ。いつも助けられている」

鉱石にどんな力があるのかは知らない。なにかしらの作用が本当にあるらしいのだが、サリヴァンにとってはツェイルから贈られたものということだけで、十分な効力が発揮されていた。

「よかった……」

ほっと息をついたツェイルが、ことん、とサリヴァンの胸に頭を預けてくる。顔を覗くと、目がとろんとしていた。

「眠いのか？」

「少し……サリヴァンさまの鼓動は、気持ちよくて」

「ああ、ふだんから遅いらしいな？」

「ゆっくりで、穏やかで……子守唄みたい」

耳をぴったりと胸につけて、ツェイルは目を閉じる。それに微笑んで、頭をなでた。

「いいぞ。おれも少し眠ろう」

「散歩が……」

「起きたら歩けばいいさ」

こんな穏やかな日は、そう多くない。サリヴァンはほぼ毎日のように城へ出仕しているし、必要となれば数日は留まらなければならぬこともある。

それに、サリヴァンが出仕し始めたことで、サリヴァンという皇弟の存在が公になり、それまでサリヴァンを知らなかった者たちが

帝位を篡奪するつもりではないかと疑惑を持ち始め、不穏な空気が城に漂っている。そこにツエイルの懐妊であるから、不穏な空気は形になり始めていた。サライの様子やルカイアの対応を見て今は目立った動きもないが、それも時間の問題だろう。ここも安全ではなくなる可能性がある。

「猊下に相談するか……」

ふっと肩の力を抜いたところで、ツエイルの寝息が聞こえてきた。サラヴァンの心音はどうも心地がいいらしい。耳がぴったりと胸にくっついたままだ。

「ふ……可愛い」

ああ、幸せだなあ。

そう思いながら、サラヴァンも瞼を閉じた。

>
i
1
0
7
8
5
—
1
3
4
9
<

Plus Extra : 国を継ぐ者。5 (後書き)

Plus Extra『国を継ぐ者。』はこれにて終幕です。
書かせてくださりありがとうございました。

次回もリクエストストーリーが展開されます。
おつき合いくださると嬉しいです。

読んでくださりありがとうございました。

Plus Extra : 憩いの精霊。(前書き)

精霊たちの視点でお送りします。

Plus Extra 『国を継ぐ者。4』の直後あたりの話です。
こんなことがありました、的です。

ヴィーダヒーデは目下、メルエイラの人たちを観察するのが趣味である。愛するのは趣味ではなく、当然のことだ。

だから観察する。

好きだから、愛しているから、メルエイラの人たちを見守るのである。

それは半身、ヴィーダガルデアも同じだ。なにせヴィーダヒーデと双子の精霊なのだ。考えることも思うことも、見るものも感じるものも、ほとんど同じだった。

「男は却下」

「雌雄はないわよ。見た目はこうだけれど」

「いやだ、近寄るな」

いつも笑っていて、しかもその笑みは極上のものであるのに、今はそれがものすごくひどいことになっているあるじに、ヴィーダヒーデはため息をつく。

ヴィーダヒーデが今代においてあるじにしたメルエイラの間人、ツアインは、ヴィーダヒーデの半身を全力で嫌う青年である。

「そんなに拒絶しなくても……」

「近寄るなど言っているだろ、ガルデア！」

ものすごい拒絶に、ヴィーダヒーデと同じようにメルエイラが大好きなヴィーダガルデアは、可哀想なくらい落ち込む。落ち込み過ぎで部屋の隅で丸くなり始めた。

「かつこ悪いわ、ガルデア」

言ってみるが、効果はない。

ツアインの言葉はいつだって絶大だ。

「……ツェイルのところに戻りたい」

ころん、と転がる始末である。

「おとなしくしている、ガルデア。おまえは、ツェイルの子を殺そうとしたんだ。許されると思うなよ」

「……ツェイルを護るためだ」

「ほかにも選択はあつたはずだ」

ツアインの目が、厳しくヴィーダガルデアを見つめる。奥底からの憎しみが感じない分、ひどく優しさを感じてしまうのは、おそらくこの男とずっと一緒にいる自分だけだろうと、ヴィーダヒーデは目を伏せた。

「ツアイン」

「なにかな、ヒーデ」

「口先ばかりね」

「なんのこともない」

「……愛しているわ、ツアイン。ありがとう」

許してくれて。

不器用な半身を、憎まずにいてくれて。

「……僕は怒っている」

「ええ、そうね」

それでも、本気で怒っているようには見えない。周りからすれば怒っているようにみえるのだろうが、ヴィーダヒーデはそう感じない。

「これからもツイエルを護らせてくれるかしら」

「……僕の役目だ」

「そうよ。だから、ね」

「僕はしばらく怒っている。勝手なこととはするな。どちらもおとなしくしている」

「わかっているわ」

にこ、と微笑めば、不機嫌そうなツアインから、その表情が消える。くるりと背を向けると、部屋を出て行った。

「よかったわね、ガルデア。ツアインは許してくれるそうよ」

部屋の隅に転がったままのヴィーダガルデアのそばに膝をつくと、ヴィーダヒーデは腕を伸ばしてその身を引き寄せる。膝に抱くと、そこに顔を埋めてしがみついていた。

「怒らせた」

「あなたが悪いからよ」

「ツイエルを護りたかっただけだ」

「手段が強引だったわ。当然のことよ。反省なさい」

「……ヒーデ」

ぎゅっと、その腕の力が増した。肩が震えている。

「……泣くくらいなら、最初からテューリの言葉を聞いていたらよかったですよ」

泣き虫で、弱くて、臆病者の半身は、それらからかけ離れた外見をしているせいか、誤解を受け易い。

ヴィーダガルデアは、本当はなによりも、メルエイラの子どもたちが好きだ。好き過ぎて、ヴィーダヒーデにその感情を伝播させ、巻き込んで永遠を誓わせるくらいには、どうしようもないほどの愛だ。

「……かつこ悪いわね、ガルデア」

ふっと笑って、愛に盲目的な半身を、ただゆっくりと撫で続けた。

* * *

寄り添う双精霊を、マチカはじっと見ていた。

「ねえ、ルーフェ」

「なあに、マチカちゃん」

「マチカにもあれやって？」

「いいわよ。いらっしやい」

マチカはのんびりと微笑むルーフェが好きだ。だから、双精霊と同じように、床に座ったルーフェに抱きつき、膝に抱いてもらう。

「ねえ、ルーフェ」

「なあに」

「ラクウィーは姫の妹が好きなの？」

「そうねえ」

「マチカたちより好きかな」

「さあ、どうかしら」

「ラクウィーは幸せになる？」

「マチカちゃんは幸せじゃないのかしら？ わたしは幸せよ」

まるで子守唄を聞かせるかのように、ルーフェにぽんぽんと肩を撫でられながら、マチカは考える。

この、胸がほかほかするような、戦うときのようになにか楽しくてどきどきするような、なんとも言いようのない高揚感。

あるじであるラクウィルの心を感じる、と思つのは気のせいではない。

「うん……マチカ、幸せ」

「そう、よかつたわねえ」

そうか、ラクウィルは姫の妹が好きなのか。だからこんなに気分が高揚するのか。

「マチカは姫の妹が好きかもしれない」

「あら、わたしは好きよ。ラクウィーが好きだから」

にこにここと笑うルーフェは、いつもこんなふうに穏やかに笑う。嘘は言わないルーフェの笑顔に偽りはない。

「姫の妹……ネイはマチカたちを好いてくれる？」

「そうねえ……きつと、好いてくれるわ」

「きつと？」

「ええ、きつと」

「……そっか」

なら、いいか。

ラクウイルがあの子を愛しても、きつと、自分たちは許せる。自分たちも愛せるから、許せる。

そっか、そっか。

「ねえ、ルーフェ」

「なあに、マチカちゃん」

「マチカはルーフェも好き」

「ふふ……わたしもマチカちゃんが好きよ」

たとえばマチカに、母と呼べるような存在がいたとしたら、それはきつと、ルーフェ。

たとえばマチカに、恋人と呼べるような存在がいたとしたら、それはきつと、ラクウイル。

たとえばマチカに、姉妹と呼べるような存在がいたとしたら、それはきつと、シユネイ。

うん、悪くない。

「マチカは楽しい」

「そう……よかったわね、マチカちゃん」

さらりとルーフェに朱い髪を撫でられる。その暖かな仕草に満足して、マチカは瞼を閉じた。

「眠るの、マチカちゃん？」

うん、と頷いて、マチカは一時の眠りを手にした。

Plus Extra : 憩いの精霊。(後書き)

リクエストありがとうございます。

また書きたいと思いますので、今回のところはここまで。

読んでいただきありがとうございました。

Plus Extra : 聖王の眷属 (前書き)

猊下視点です。

サリヴァンを拾ったとき、塔から出ていくとき、のエピソードです。

「猊下、レイシエント猊下」

「……なんだ」

読みかけの書物から顔を上げると、光りの精霊アルトファルが、その優しい容姿を悲しげに歪ませていた。

「森に、赤子がいます」

その報告に、眉間に皺が寄った。

「赤子？」

それは、人の子か。と首を傾げると、アルトファルは小さく息をつきながら頷いた。

「拾ってもよろしいですか？」

「……、拾うものなのか」

いや、放置しろという意味ではないが、だからとて拾ってもいいものでもないはずだ。

「ずっと泣いているのです……あまりにも可哀想で」

鳴き声など聞こえないのだが、アルトファルのことだから、赤子の心の声でも聞こえているのだろう。

「人間に興味のないおまえが、珍しいな」

「皇族は人間ではありませんでしょう。ああいえ、人間ではあるのですが」

「……、皇族だと？」

赤子など産まれる時期であつただろうかと一瞬考え、そういえば今がいつであるかわからないことに気づく。

「今の皇帝は誰だ？」

「ヴェナートさまです」

「……あの愚かな人間が、皇帝だと？」

「おや、憶えておられますか」

忘れるわけがない。あの愚かな人間が煩いから、この天王廟は閉じられているのだ。

書物を閉じて立ち上がると、アルトファルに赤子のところへ案内させた。

「誰の子だ」

「イデアさまは殺されました。妹の……メライヤさま、でしたか。彼女は侯爵家に降嫁して、まだ御子がありません」

となると、やはりあの愚かな人間の子ども、ということになる。

「サライはどうした」

「まだ赤子ですよ」

「サライではないのか」
「違いますね」

ではふたりめか、と短く息をつく。

「なぜ森にいる」

「どうやらメルエイラの方が連れてきているようではあるのですが……あやし方があまりにも下手で」

赤子が不憫でならなくて通路を開けてしまった、とアルトファルは言う。人間に興味がないアルトファルには珍しいことではあるが、赤子が皇族で、さらにその力があつたから、閉ざしていた天王廟を開放したのだろう。

建物を抜け、外に出ると、一面緑に囲まれたそこに、微かながら力を感じた。

「ふたりめの皇帝国主天恵か……珍しいこともある」

「以前にもあつたのですか？」

「記録者が言うには、な。わたしの代では初めてだ」

「なぜふたりに皇帝国主の天恵が……しかもここにひとり連れてくるなど」

「ヴェナートがアイデアを殺めたがゆえに、国に作用すべき天恵が狂っている。それを補うためであろうが……ここに連れてきた理由はわからぬな」

どこにいる、とアルトファルをさらに促し、森となっているそこを突き進む。しばらく歩くと、唐突に開けた空間に出た。

「殿下……だいじょうぶ、だいじょうぶですよ。わたしがお護り致

します」

腕に赤子を抱いた青年が、開けたその空間をゆっくりと歩いていった。

「しかし困りましたねえ……ここはどこでしょう……、おやあ？」

暢気そうな顔をした青年と、ばっちり目が合った。白金に近い金髪と薄紫の双眸には覚えがある。

「メルエイラの者が」

「ああはい、モルティエ・オル・メルエイラと申します。ええと、あなたさまは？」

「レイシエント・アレイル」

名を言ってもどうせわからないだろうが、と思いつつも明かすと、青年は目をまん丸にし、そうしてなぜか涙を浮かべた。

「聖王猊下……？」

「……そう呼ばれているな」

よくわかったな、と思った。

数え間違いがなければ、十年あまり天王廟を閉ざしたままにしているのです、青年の祖父あたりなら自分の名を知っているだろうが、それでも薄れてきているだろうと思っていた。

「お願いしたきことがございます、聖王猊下っ」

青年、モルティエは慌てて駆け寄ってきた。目の前で膝をつきそうになったとき、アルトファルが歩み出てそれをやめさせる。

「預かります」

と、アルトファルはモルティエの腕から赤子を預かった。

「やはり皇族ですね……淡い金色の髪に、腕に刻印があります」

「……国主の天恵だったか」

なぜここに連れてきた、と膝をついたモルティエに目で問えば、瞳を潤わせたモルティエはぎゅっと拳を握った。

「陛下が、殺めようとなさりました。この国土を支え、礎たらん尊いお方を、陛下は弑そうとしたのです」

「……ふん、ヴェナートならやりかねぬ」

「猯下、お願いいたします。どうか殿下をお助けください。殿下はまだ産まれたばかりの赤子……まだなにも、できぬ身で……っ……こんなひどいことはありません。殿下をお救いくださいっ」

「そのような義理はない……と言いたいところだが」

ちらり、と赤子を見やる。

アルトファルは泣いていると言っていたが、そんな様子はない。

むしろただ静かに、ひっそりと眠っている。いや、赤子にしてはいやにおとなしく、不気味なほど静かだ。

なるほどな、と思った。

「背負うべきものは理解しているようだな……」

自分がどんな存在であるか、理解しているようだ。それゆえにどうすべきかも、おそらくわかっているのだろう。

「猊下、わたしはかまいませんよ」

アルトファルが、腕の中の赤子を揺らしながら言った。

「一度、育ててみたかったのです」

「……基準にはできぬ育ち方をするぞ」

「それでも」

面白そうですし、楽しそうです、とアルトファルは笑う。それを見たモルティエが、パツと表情を輝かせる。

「お助けくださいますかっ」

「いいや」

「え………?」

助けるわけではない、とモルティエに背を向け、天王廟に戻るべく歩を進める。

「要らぬならもらっただけだ」

どうなるかは知ったことではない。しかし、国主の天恵を持つ者を、失うわけにもいかないことは確かである。

「わたしの眷属だからな」

ヴァリアス帝国は、聖国だ。聖国に生まれた天恵者は、すべて聖王の眷属である。

要らないなら、その命はこちらがもらっただけだ。

「げ、猊下……っ」

「去ね。ここに立ち入ることは許さぬ」

言い捨てて緑の中に戻ると、モルティエの声は聞こえなくなった。

「見てください、猊下。可愛いですよ」

赤子をあやしながら後ろをついてきたアルトファルが、嬉しそうな顔で赤子の頬を突く。

「……名はないのか？」

「殿下ですよ」

「それは地位の名称だ」

「ああ、そうでしたね……どうしましょっ？」

赤子に名があるなら、と思ったが、要らないとされた赤子なら、つけられたその名で呼ぶ必要もないかと思ひ直す。

「……サリエ」

「はい？」

「サリエ・ヴァラディン」

「おや、名づけてくださりますか」

それくらいならしてやる。

「……サリヴァンと呼んでやれ」

「サリエ・ヴァラディン……サリヴァン……どちらも古語で《導きの王》ですね」

「それは皇となるべき皇族だ。そのくらいの名でちよっぴよかるっ」「皇帝になる子なのですか？」

さあな、と肩を竦める。

「基準にはできぬ育ち方をすると言ったはずだ」

「ふむ……そうですね。なんだか楽しみです。ねえサリヴァンさまあ」

可愛くてたまらない、という顔をしながら赤子を見つめるアルトファルに、よくわからない生きものだと思いながら、天王廟に戻った。

人間の赤子は育つのが早い。いや、人間は生きている時間が短い。そう思うのはきっと、高慢なことだろう。

「養父上……ルーフは、本当は白いそうですね」

いつから「養父上」と呼ばれるようになったのか、それは憶えていないけれども、とくにいやだとも感じないので放っておいたら、いつのまにかそれが定着して、養父上と呼ばれるようになっていた。

「ヴァリアス・デ・ルーフは、白を好んだらしいからな。贈り主たる天上の王の気紛れだろう」

窓から見えるルーフの花を、ぼんやりとしながら眺めていたサリヴァンだが、言葉を返すと「はは」と笑った。

「養父上みたいに、神さまはみんな気紛れですね」

「……人間ではいらなくなった者だ。気儘に生きねばその意味もない」

「んー……なるほど」

サリヴァンの、ルーフを見つめる瞳は虚ろだ。まるで自分を見ているようだと思しながらも、つられるように窓の向こうを見つめる。本来なら白くしか咲かないルーフは、しかし赤く色づいて咲いている。サリヴァンが天王廟に来てからというもの、ルーフはずっと赤かった。

「いつ……」

「どうした」

「いえ、腕が、痛んで……雨が降るのかな」

右腕を押さえたサリヴァンは、その痛みをこらえるかのようになり、身体を強張らせる。

アルトファルでも癒せない傷をサリヴァンが負ったのは、いつだっただろう。

肉を抉るように斬られ、そこにある刻印を真っ二つにされ、それまで握っていた剣や筆を持ってなくなってから、サリヴァンの瞳は虚ろさを増したように思う。

顔はいつも笑っているのに、心がない。

そういえばアルトファルが嘆いていたな、と思い出した。

「ああ、やっぱり雨だ……養父上、久しぶりの雨ですよ」

「早でも続いていたか」

「ええ。作物が育たないそうで……ここはいつも緑に溢れているのに、農家がある地方は旱魃の被害がひどいらしくて」

「誰から聞いた」

「……ルカイアに」

その名には聞き覚えがなく、誰かもわからない。しかしサリヴァンは言い難そうにその名を明かした。

「ルカイア・ラッセ……さっき、来たんですよ」

「来た？ 扉は閉ざしたままだぞ」

サリヴァンがその腕に傷を負ってからは、こちらからも渡れないように天王廟は閉ざしている。誰からの侵入も受けない代わりに、ここにいるサリヴァンだけはここから出ることすらできない状態にしていた。

「ラクが、帰ってきて……くっついて来たんですよ」

「侵入を許したのか」

「そういうわけでは……あれは不可抗力ですよ。ラクなら通れるとわかっての行動です」

確かに、サリヴァンが拾ってきたラクウィルという少年だけは、サリヴァンの破天荒な《天地の騎士》ゆえに自由な行動を取らせていた。それがサリヴァンの願いであったし、自分の立場を理解して我儘も言わないでおとなしくしているサリヴァンの言葉であったから、自由にさせていたのだ。

いつか仇になるだろうとは思っていたが、予想より早かったと思

う。

「なにか言われたのか」

「……殿下が、流行り病に倒れたそうです。次いで陛下も」

「ああ、皇族の天恵が狂っているからな……地方の旱魃も原因はそれであろう。ほかになにか言われたか」

皇族にしては珍しく愚かなあの皇帝であれば、まあ当然だと思う。

「ルカイアが……おれに、城へと」

「ここも城の一部だ」

「外に出ないかと、言ってきたんです」

「出たいのか」

そういうわけではない、と首を左右に振ったサリヴァンは、その視線をこちらに向けてきた。

「……待つのも飽きてきました」

ふっと、サリヴァンは自嘲気味に笑って俯いた。

「養父上のそばにずっといられるわけでもありませんし……ラクだつて、もっと自由にやりたいのに、してやれないし……いつそ殺されてもいいかなと、思うんですよ」

「……死にたいのか」

「ずっと待つているだけだったので、自分から歩み寄ろうかと」

投げ捨てたように言うサリヴァンに、顔をしかめる。

厭世している自分とは違い、サリヴァンはいつも死にまわりつかれている。だから瞳はずっと虚ろで、光りがない。笑っていても、

どこか冷めている。

捨てられたその命を、眷属だからともらったが、やはり基準にはできない育ち方をしてくれたサリヴァンに、ため息がもれた。

「好きにしる」

「……養父上」

「思うように、動けばよい。どうせわたしはここから動かぬ」

怖いのだろうと思う。サリヴァンは人間で、人間ではいられなくなった自分とは違う。その生き方は、真似できるものではない。離れたくなるのも、わからなくはなかった。

「なら……ちょっと、その話を伝えに行ってきたもいいですか？

お茶くらいしませんかと誘われたんです。ラクがまた術師宿舎に戻るみたいなので、そこで」

「扉は開放する」

「……ありがとう、養父上」

にこ、と控えめな笑みを浮かべたサリヴァンは、ゆっくりとした足取りで部屋を出て行った。

その後ろ姿の残像に、やはりあれは皇となるべき皇族であったか、と思う。

ここには帰ってこないかもしれない。

「赤子の成長は早いものだ……」

また静かになるなと思いながら、雨が降り出した窓の向こうに視線を投げる。

豪雨となりそうな雰囲気だったが、しばらくすると急に弱まり、

しかしまた強まり、そして唐突に雷鳴が轟いた。

「……………死んだか」

あの愚かな皇帝が死んだ。

ああやはり、サリヴァンはもう二度と、ここには帰るまい。

「……………サリヴァン」

わが眷属、わが子よ。

おまえを脅かす存在は潰えた。

おまえの瞳を曇らせる存在は消えた。

おまえから生を奪った存在は死んだ。

「自由に生きよ……………サリヴァン」

それまで赤く咲いていたルーフが、真っ白に咲き誇っていた。

Plus Extra : 聖王の眷属 (後書き)

リクエストありがとうございます。

また方向がずれた気もします……orz

楽しんでいただけたら幸いです。

Plus Extra : 近衛騎士隊追送録。 1 (前書き)

近衛騎士隊の人(名は本文中)の視点です。

ツアインとラクウィルと近衛騎士隊がメインのお話となっています。

「副隊長」

と、呼ばれるようになって、どれくらいだろう。

「副隊長、ディーデイス副隊長っ」

本当はなりたくもなかった近衛騎士副隊長。しかし上官命令では辞退もできず、また自分以外の適任者がいないというのは一目瞭然だったために、就任してしまったのが悪かった。

「声がでかい。うるさい。ナドニクス」

「けっこう！ またメルエイラ隊長がいらないんですけど、どこに行つたんですか！」

「おれが知るか」

「あなた副隊長でしょう！」

その煩さのため息をついて肩を竦めると、陛下の近衛騎士でその隊の副隊長であるナサニエル・ナドニクスは、負けず劣らず深々と肩を落とした。

「あいつはどこまでも自由なんだ。おれの手には負えない」

「あの人がそうだからあなたが副隊長なのはわかります。けれど、今は合同訓練の最中です。いてもらわなければ困ります」

確かに、そうである。それは頷けるが、手に負えないのだから仕方ない。

「あなたの隊には、殿下が陛下の身代わりであられた頃の、その姿を見ていた者たちが集められました。大幅な人事異動に戸惑っている連中は多いんです。そのための合同訓練なんですよ？」

ナサニエルの忠告に、各騎士団の合同訓練と称した派閥確認試合を見るともなく眺める。

真剣な眼差しで試合をするのは、皇弟づきの近衛騎士隊の者たち。それを侮蔑するような眼差しで試合を半ば放棄するのは、真実を知らない他部隊の騎士たち。

「殿下の顔に泥を塗るつもりですか」

「……おれの意味ではどうにもならない」

「どうにかしてください。なんのために、わたしがサライ陛下側の近衛騎士だと思っっているんです」

「おまえの裏切りには陛下も嘆くだろう」

「いいえ。わたしの忠誠は六年前のあのときから……サリエ殿下が皇として迎えられたそのときから、変わることはありません。わたしはサリエ殿下をお護りする騎士です。裏切ったのはサライ陛下のほうですよ」

真剣な眼差しのナサニエルに、不憫を感じてならない。これだけ真面目だから、きつと皇弟づき近衛騎士隊の隊長の行動が、たまたまなく癪に障るのだろう。

ナサニエルは皇弟サリエに傾倒している。その実は、知られていないけれども。

「あれはどうにもならないのだがな……」

「はい？」

「いいや。ああ……ほら、来たぞ」

ふと、見るともなしに眺めていた先に、ナサニエルが探していた人物が現われた。無駄に顔はよく、また愛想もよく、しかし腹ではなにを考えているのかわかったものではない、狂人の近衛騎士隊長ツアインだ。

「ナイレン」

と、いつものように笑みを浮かべて歩み寄ってくるツアインに、それを隊長に持ってしまつたゆえにいつも疲れている副隊長、ナイレン・ディーデイスはため息をつく。

「来ていたなら参加しろ、ツアイン！ 隊長だろ！」

噛みついたのはナサニエルだが、ツアインは飄々としている。無駄にいい顔の笑みを、これもまた無駄に振りまいてみせる。

「僕の代わりにきみたちが奮闘してくれているから」

よくわからない答えではあつたが、合同訓練と称されただけの選定会場にまつたく興味がないというのはよくわかる。

「おまえが隊長になつたのはなにかの間違いだ！」

「ああ、それなら僕も返上したいところだけど……ごめんね、今は無理」

「今は？」

どういう意味だ、と怪訝そうにしたナサニエルに、ツアインは意地の悪い笑みを浮かべて試合を眺める。

「ツェイルの子どもが産まれる」

それは驚愕の報告だった。愛想も悪ければ感情に乏しい表情を持つナイレンだが、これにはさすがに目が丸くなる。またナサニエルも、瞠目していた。

「本当か、ツアインっ」

「ナドニクス」

声が大きいわよ、とナサニエルはツアインに空気で威圧される。ナサニエルは慌てて周りを確認し、こちらの様子を覺られていないとわかると、ほっと胸を撫で下ろした。

「殿下の御子が産まれるのか、アイン」

ナイレンのその確認に、ツアインは表情を変えず、また頷きもしない。けれども薄紫色の双眸は周りを警戒し、細められていた。

「まずいな……この時期に……貴族のばか共に知られたら」

「そのために僕がいる」

「だがおまえだけでは」

「だから、きみも、ナドニクスも、ここにいる」

「……なんだと？」

「ナイレン・ディーデイス副隊長」

ツアインは剣呑な瞳をさらに細め、ナイレンを眇めた。

「ツェイルの幸せを奪う者に、生存の権利などありはしないんだよ」
それは全人類、いや、全世界に向けての宣言だった。そして、皇帝の近衛騎士であるナサニエルへの警告であり、ツアインに代わって皇弟を警護する騎士隊をまとめるナイレンへの忠告だ。

ナイレンはため息をついた。
どうしてこいつは、と思う。

「……狂っている」

吐き出すように言ったナイレンのその言葉に、ツアインはそれまで自分たちには見せたこともない、皮肉げな笑みを浮かべた。

「けっこうなことだよ。僕は、狂人だ」

ナイレンはツアインと幼馴染だ。幼い頃からツアインを見てきている。そのお守りをしている。だからこんな、近衛騎士隊の副隊長という地位にまで、昇りつめることになった。

それでも、ナイレンにはわからない。

ツアインが、なにを考えているか。なにを考えて、行動しているのか。なにを想って、生きているのか。ただ、妹のツェイルだけが、きつと彼にとつての生きる意味なのだろうというのは、わかる。

最愛の妹が皇弟に嫁いだから、ツアインの考えていることは、よりいっそうわからなくなった。

ただ、その狂気は日を追うごとに増している。

「殿下を恨むのか。憎むのか」

「殿下は護るよ。それが僕らメルエイラの最後の仕事だ。それに、

殿下を護ればツェイルが笑う」

「……ツェイルはもう護られている。殿下に。あの頃のツェイルは」
「ナイレン」

あの頃の、貧困に喘いでいた頃のツェイルはもうどこにもいない、
そう言おうとした口が、ツアインの低い声に牽制された。

「僕はいつかツェイルを国の盾にされたんだよ？　僕がきみの言
う感情を向けるとしたら……そうだね、僕自身だ」

「おまえ自身？」

「産まれてこなければよかったと思うよ」

そう言ったツアインは、悲しんでいるわけでも、寂しがっている
わけでもなく、ただひたすら皮肉げな笑みで、目先のことを眺めて
いた。

虚しい男だ、と思わなくもない。

結ばれることのない深い想いと強い願いを、この男は永遠に抱き
続けるのだ。それをよしとしているから、ナイレンは理解できない。

「……さて、そろそろ僕の出番かな」

ツアインが、ふつと息をついて、それまでの会話を払拭するかの
ように、いつもの笑みを浮かべた。

「手加減しろよ」

「するよ？　じゃないと全員殺しちゃうからね」

邪魔だから。その一言で、数多の命を呆気なく潰してしまえる男
が、ナイレンの上官で歳下の幼馴染だ。

だから、この男のそばに長く居過ぎた、と思うこともある。

「殺してもいい。それでおまえが満足するなら」

と、言っただけでやれるから。

「それくらいで満足はしないよ。それに、僕が満たされることは、もう二度とない」

「……いいのか、アイン」

「それが僕だから」

じゃあね、と手のひらをひらひらとさせ、ツアインは試合会場につき進む。ツアインを視認した騎士たちがぎょっとし、部下である者たちは目を輝かせていた。

「……なんだか、ものすごく物騒な話を、聞いてしまった気がします」

黙っていたナサニエルが、蒼褪めながら言った。

「おまえには背負えない。忘れたほうが身のためだ」

「そうします」

ナサニエルは素直に頷き、ツアインの背を目で追う。

部下や他部隊の騎士たちと会話したのち剣を握ったツアインが、多勢に無勢という不利とも言える状況を作って試合を始めようとしたときだった。

「おれもあれに参加していいですかねえ？」

と、ナイレンに声をかけてきたのは、気配もなにもなく、唐突に現われた侍従だ。

「ダンガード……侍従長？」

皇弟の侍従ラクウイルであるが、その恰好はいつもの灰色の侍従服ではなく、白い騎士服だったがゆえに、ナイレンは首を傾げてしまふ。ナサニエルは顔を引き攣らせ、少し後ずさっていた。

「へ、変人、その恰好は……っ」

「ラクウイルですって言ってますでしょー、ナナちゃん」

「ナサニエルだ！」

「細かいことは気にしないでくださいーい」

「細かいくないだろ！」

ラクウイルを苦手とするナサニエルの仕方のない行動に、ナイレンは見慣れているので特に気にはしないが、ナサニエルが指摘したように、その恰好には疑問がある。

「侍従長、その恰好は……」

「サリヴァンの騎士ですからあ」

にこお、とラクウイルは人好きする笑みを浮かべる。

「サリエ殿下がいらっしやるので？」

「もうすぐ来ますよー。サライと一緒に、ね」

陛下を呼び捨てにするラクウイルは、剣の柄に手をかけながら、戦い始めたツアインを笑顔のまま眺める。

「あれはひどいですねえ。死に行くようなものですよ」

「それは……うちの隊長が？」

「まさか」

ツアインの敗北を、ラクウイルはさらりと否定する。それはツアインの実力を知っているからとか、信じているからとか、そういう類いのものではなかった。

「ツアインを相手に勝てると思ってているなんて、可哀想な人たちです
ねえ」

死なれては困る、とラクウイルの笑みには含まれている。それはつまり、ツアインの存命は絶対的なものであり、敗北などは許されないのだ。

確かにツアインは強い。負けを知らない男だ。ただ顔がいいだけの男ではない。この帝国で、彼に敵う剣士がいるとしたら、それは陛下の隣に控える《天地の騎士》だけではないかと、ナイレンは思っている。

いや、思っていた。

「仕方ないからおれが出ましようね」

そう言ったラクウイルの、その恰好は、ナイレンたち騎士団が着用する、白い騎士服だ。どこかに違いを探せば、肩にかけているマントの艶やかさと、その背中に背負ったもの。

「国花ルーフの紋章……」

見るのはこれで二度めだ。侍従でしかないと思っていた男が、その紋章を背負って表を歩くのも、おそらくこれが二度めではないだ

るうか。

「侍従長」

「はい？」

「あなたは《天地の騎士》なのですか」

問いに、返事はない。ラクウィルは笑みを深めるだけだ。

「まあ見ていてください、ディーデイス副隊長」

ラクウィルはそう言うだけにして、試合の中に入って行く。ツアインの横暴を諫めるために入ったのかと一瞬思ったのだが、そうではなかった。ツアインに加勢し、助けに入ろうとしたツアインの部下たちを諫め、剣を向ける騎士たちを挑発すると、銀色の剣を抜いて背中 of 紋章を見せつけた。

場内が、ラクウィルの行動にざわめく。唯一冷静に見守っているのは、騎士団総隊長のルーディだけだ。

「なんて派手な真似をつ……なにをやっているんだ、あの変人は！」

ラクウィルの行動に蒼褪めたナサニエルが、握った拳を震わせていた。

「殿下を危険に曝すなど、忠誠を誓った騎士のすることではない！」

「……ナドニクス、侍従長は《天地の騎士》か？」

問うと、ナサニエルは瞬間的に黙り、そして深く息をついた。

「詳しいことは、おれにもわかりません。ですが、あの変人がただの侍従ではないということは、知っています」

「騎士か」

「あの剣さばきを見れば。あとは……ラクウイル・ダンガードという名が真名であるなら、あの変人は天恵術師です」

確かにその名は、ナイレンにも覚えがある。侍従長だから、という理由からではない。

「忌み子を守護する異形の者、死神ダンガード……か」

ラクウイルがそうだとしても、違和感はない。ある日突然姿を消した帝国最強の天恵術師は、ある日突然それまでの雰囲気を一変させて仮初めの皇帝と共に舞い戻ってきた。そういう筋書きだったとして、それがただの噂でしかなくとも、信憑性の強い話だ。

「お、ナナ」

「ナサニエルです！ って、あ、殿下！」

振り向くと、皇弟サリエ・ヴァラディン殿下が、すぐそばまで来ていた。その隣には、皇帝サライ・ヴァディーダ陛下と、その騎士ジークフリートもいた。

ナイレンは膝をつき、騎士の礼を取って頭を下げる。

「今朝ぶりだな、ナイレン」

「は。まさかこちらにいらっしやるとは思わず、失礼いたしました、サリヴァンさま」

「いや、いい。ラクがいたから、おまえたちには休んでもらいたかったんだ。だがまあ……こんなことになっているとは、な」

苦笑したサリヴァンは、ナイレンの肩をぼんと撫で、立つよう促す。立ち上がったナイレンは、試合を眺めるサリヴァンの横顔を見

た。

「兄上、これはどういうことか」

「ただの合同訓練だが？」

「ルカイアは賛成したんですか」

「……い、いや……その」

しどろもどろに、サライは答える。

そうだろうな、とナイレンは内心で思っていた。この合同訓練は、今朝いきなり知らせられたものなのだ。

「騎士を使っておれの存在を表立たせて、なんになるんですか」

「ルカ以外の宰相は賛成だった！　こうすればおまえの立場も確立されると」

「そんなに死にたいんですか、兄上」

「なっ……そんなつもりはない！」

「おれの存在は兄上の脅威になると、申し上げたでしょう。貴族たちからの反感を買ってからでは遅いんですよ。あなたが思うほど、貴族は綺麗なものではないんですから」

サラivanの静かな怒りは、サライを黙らせる。

「……まあいいでしょう」

深々とため息をついたサラivanは、ずっとナイレンに視線を向けてくる。

「なにもないか？」

「今のところは。隊長と侍従長の登場で、少しざわついています」

「ラクにこの場を治めてもらうか……ジークフリート」

目を細めたサリヴァンは、顔を引き攣らせているジークフリートを眇め、前に出ると促した。

「お、おれが行くのかよお」

「殺されてこい」

「ちょ！ ひどくねえかそれ！」

「兄上、よろしいですね？」

「サラ、おれはいやだぞ！」

全力で拒否したジークフリートは、しかしサライに「死なんだから」と言われて、がっくりと肩を落とした。

「へいへい。殺されてくりやいいんだろ」

と言って、その肩にかけたマントを翻し、背中に背負ったものをなびかせた。

ものすごい試合になりそうだ、とナイレンが気づいたのは、そのときだ。

「サリヴァンさま、よろしいので？」

「すべての責任は兄上にある」

ぎろり、とサライはサリヴァンに睨まれ、ぷいっと顔を逸らした。どうやら責任は取ってくれるらしい。

「どうなっても知りませんよ、兄上」

そう言ったサリヴァンに、ナイレンとナサニエルは促されて試合

の中へと歩を進めた。

Plus Extra : 近衛騎士隊追送録。 1 (後書き)

リクエストありがとうございます。

またも方向が……orz
すみません。

番外編というよりも続編っぽくなって(いえ、番外編には番外編です)あります。なにか事件も起きそうです。長くなりそうですが、おつき合いくださると嬉しいです。

Plus Extra : 近衛騎士隊追送録。 2 (前書き)

ナイレン(近衛副隊長)視点です。

皇帝騎士隊と皇弟騎士隊との試合になった合同訓練は、笑顔のラクウィルとツアイン、引け腰のジークフリートとナサニエルというその戦いで終わった。勝敗はもちろん引き分けである。いつのまにか観客が増えていたこともあり、サライが仲介することで引き分けにしたのだ。

そうして、事後報告の書類作成があるから、とツアインが城に残ることになったので、ナイレンは帰宅するサライヴァンを送り届けることになった。

「悪いな、ナイレン」

「おれは殿下の騎士です。お気になさらず」

「おれにはラクがいるからいいと言ったんだが……まったく、ルカには困ったものだ」

ツアイン率いるナイレンの部隊は、宰相ルカイアの独断で編成された皇弟の近衛騎士隊だ。それをサライヴァンが諾としていないのは、ナイレンもわかっている。それでも、このお方を護りたい、と思う騎士はいて、そういう者たちが集められた部隊であることを、サライヴァンは理解してくれていた。

「まあいいじゃないですか、サライヴァン。近衛騎士隊の連中と交わした賭けの約束は、今でも有効なんですよ」

爽やかな笑顔のラクウィルが、殺し合いのような雰囲気になった合同訓練の名残りなど感じさせず、のほほんと言う。

「おれはいい人たちと巡り会えたなあ」

「そうですねえ」

くすくすと笑ったサリヴァンは、ラクウィルの同意を得て満足そうになると、ナイレンに振り向いた。

「ナイレン、不自由はないか？」

「……不自由、ですか？」

「いろいろと苦勞が多いだらう」

ああ、苦勞ならツアインにいつもかけられている、と思う。思ったから、ため息がこぼれてしまった。

「……、失礼しました」

「いや、いい。ツアインか？」

「……ええ、まあ」

ナイレンのため息の理由を、サリヴァンは察してくれる。肩を竦めて同情もしてくれる。ツアインを見ているときは違った意味で、この人はまた、と思った。

サリヴァンは、仮初めの皇帝ではあったが、確かに皇の資質があるのだ。いや、皇であるべきだと、ナイレンは思う。けれども、このお人好しの加減では、皇として長く生きられないだらうと、そう感じてもある。

あなたは優し過ぎるのだ、と幾度言ったことだらう。その優しさに、自分たちの隊にいる騎士たちがどれほど救われたことが、それは口にしたことがないけれども。

「アインの……隊長のことは、気にしないでください。いつものことです」

「そういえばナイレンは、ツアインと幼馴染だったな？」

「ですから、慣れていきます」

「あれに慣れるくらい、苦労したわけだ」

「まあ……」

否定はできないな、と思って曖昧に返すと、サリヴァンは微笑する。

「ツアインを、頼んでもいいか」

「頼む、とは？」

「ツエイを奪ってしまった」

サリヴァンの顔に、翳が落ちる。申し訳ない、とと思っているのだろう。それでも、その瞳は後悔などしているように見えなかった。

「それでよかったです」

「だが……」

「アインには婚約者います。先延ばしになっていますが、そろそろ頃合いでしょう。話は進められていたはずですが」

「承諾しているのか、ツアインは」

「いいえ。アインは今でも、これからずっと、ツエイルだけでしょう。アインの中で、ツエイルの存在は生命そのものです。否定などできません。それでも、アインはメルエイラ家の当主なんです」

婚姻は避けられない。逃げるように先延ばしにしたところで、必ず終結は見えてくる。

「承諾していなくとも、必要なことであると、アインは理解しています」

「……愛情のない婚姻など」
「貴族では当たり前のことでしょう」

サリヴァンとツェイルのように、決められた相手でも惹かれ合い、愛し合うことはある。けれども、すべてがそうなるわけではない。貴族とは、愛情のない婚姻が当たり前なのだ。

「とはいえ、アインの婚約者は商家の娘ですから、心配の必要はありません。侯爵になって、殿下と繋がりががあると知られてからは、危うい話ではありませんが」

「……面倒なことに」
「ああいえ、殿下のことで商家との縁談が切れそうになったのではなく、部外者からの邪魔が入ったという意味です」

「同じことだ」
「違います。もともとアインは、誰とも婚姻する気がなかったんです。ツェイルがいればそれでいいと、アインは本気で思っていますから。それを擦じ伏せたのが商家の娘なんです」

随分と根性がある娘ですよ、と言うと、サリヴァンは目をまん丸にして驚いていた。

「アインに一目惚れして、メルエイラ家が没落していることを盾にして、婚姻話を持ち込んできたのが始まりです。モルティエさまが否もなく承諾したので、あの邸を手放すことは避けられましたし、援助は今でも続いていたはずですよ」

「援助……？」

「サリヴァンさまの近衛騎士になったことで立て直しされましたが、

そうなるとう度は、助けられる範囲が広がるので」

「助けられるとは……まさかメルエイラの関係者は」

ええ、とナイレンは頷く。

「この世界には、少数ですが、メルエイラの生き残りがいます。山奥に隠れ住む者や、傭兵になっている者、闇に身を落として生きる者が、確かに存命しています。アインは当主としてだけでなく、族長としても、生きなければなりません」

メルエイラの情報網が、ときとして自分たちを助けしてくれるものであると、ナイレンは知っている。だから、彼らがどんな思いでツアインを頼っているかも、知っていた。

「ですから、アインの婚姻を、殿下が気に病むことはありません。アインはそう生きなければならぬだけです」

「……おれがしてやれることは、ないのか」

「あります」

「なんだ」

なにかできないか、と縋るような目をしたサリヴァンに、ナイレンはふつと微笑んだ。

「ツェイルを幸せにしてください」

それがサリヴァンにできることだ。メルエイラのために。

「ツェイルは、貧困に喘いでいた頃、おれとも一緒に戦いました。おれは傭兵上がりの騎士ですから、あの頃のメルエイラの事情は知っています。本当にひどい時代でした。傭兵のおれですら逃げたく

なった戦場を、ツェイルはなんの感情も見せず、戦い続けましたから

絶句したように、サリヴァンが蒼褪める。話には聞いていたのだろう。だからこそ、ナイレンのその言葉に嘘はないのだと知ったに違いない。むしろ、それを確認したようなものかもしれない。

「……おれにツアインを頼むなら、殿下にもツェイルを頼みます。あの子には、おれも笑っていて欲しいので」

サリヴァンの隣にいるツェイルを、もう幾度も見ている。あんなに穏やかな顔をしているツェイルを見たのは、初めてだった。ツアインや家族と一緒にいても見ることはない、優しい顔だった。

「……ナイレン、おまえまさか」

「ああ、べつに惚れているわけではありません。アインと長く一緒にいるので、ツェイルは妹みたいなものです。まあ、ちょっとツェイルを攫ってきてほしいんだが、という頼みを聞いて、夜襲はしかけましたが」

未だ胸の傷が少し痛む、と言うと、サリヴァンは驚いたようだった。

「あのときの刺客は……おまえなのか」

「気づいてなかったんですか」

「わ……悪かった、な」

「殿下の剣は軽いですから、お気になさらず。牢も、居心地がよかったですくらいで」

生きて帰れるとは思っていなかった、あのとき。

ツアインの思いつめたような顔に負けて、妹のように可愛かったツェイルを連れ戻すために、ナイレンは皇城に忍び込み、寝台に眠るサリヴァンに剣を向けた。死ぬ覚悟はあった。皇族に、それもそのときの皇帝に剣を向けたのだ。死罪であることはわかっていたが、ナイレンはツアインとツェイルのためならばと、死すら厭わなかった。護りたいものが、そのときもそれまでも、それからも、ずっとツアインやツェイルなのだ。

護りたいものを護って死ねるなら、幸せだ。

ナイレンはそう思う。それがたとえ詭弁であつとも、綺麗ごとであろうとも、産まれてからずっと傭兵だったナイレンには程遠いものだったゆえに、いいじゃないかそれで、と思ってしまうのだ。

「傷はまだ癒えないか」

「心の傷ですから」

夜襲に失敗したナイレンは、斬られたあととも意識があつた。だから見た。ツェイルが、サリヴァンに駆け寄っていくときの、その心配そうな顔を、確かに見た。

ああ、ツェイルの意思はもう曲げられない。護られることを諾とせず、護りたいもののために力を揮うのだ。彼女は護られたいのではない。護りたい意思のほうが強く、そうやって生きるのだろう。

鮮明に印象づけられたナイレンは、だからこそ、ツェイルが選んだサリヴァンを信じてみたくなった。サリヴァンを信じるツアインに、これからもつき合おうと決めた。

「すまない、ナイレン」

「謝らないでください。大罪を犯したのに、無罪放免でしたから」

「……そうだな。ありがとう、ナイレン」

「礼を言われることのほどでも」

責められてもかまわないが、と思っていたナイレンにとって、サリヴァンの礼は意外だった。けれども、悪くない。こういう人だから、信じてみたいと思うのだ。

「帰りましょう、殿下。ツェイルが待っています」
「……ああ」

ふつと笑みを取り戻してくれたサリヴァンの背を見て、やはりこの人はお人好しだと、改めて思った。そして、なにより愛情に飢えた人でもあるのだなと、思うことがある。

「あ、サリヴァンさま」
「ツェイっ」

到着した邸の、その玄関の前で待っていたツェイルを視界に入れたとたんサリヴァンは駆け出し、抱きつく。抱きつかれたツェイルは、穏やかな顔をしていた。

「おかえりなさい、サリヴァンさま」
「ただいま、ツェイ。出歩いて平気なのか」
「今まで眠っていたもので……もうこんな時間で、驚きました」
「無理はするな。養生してくれ」
「お出迎えできて嬉しいです」
「ツェイ……」

ツェイルの言葉に感激したのか、サリヴァンはより強くツェイルに抱きついた。

「んー……サリヴァンは境遇に恵まれませんでしたが、出逢う人には恵まれていますね」

と、ラクウィルの言葉だ。

「よかったよかった、これで安心です」
「……おれをお疑いでしたか、やはり」
「副隊長が夜襲犯のひとりだというのは、知っていましたからねえ」
「べつに命を狙っていたわけではありません」
「だから疑うんですよ。目的がよくわからないので」
「……アインの幼馴染だから、というのは、目的にはなりませんか」
「そういうことしておきます。おれはサリヴァンと姫に害がなければ、それでいいですから」

にこ、とラクウィルは人好きする笑みを浮かべる。ナイレンも、ふつと唇を歪める。

「アインにつき合うと、どれが正しくて、なにが正義かなんて、わからなくなります。だからおれにとって、ツェイルはそれを修正してくれる存在でした。おれやアインのように、たくさんの人の命を奪ってもなお、ツェイルは真っ直ぐでしたから」

「副隊長、実は姫に惚れてますね？」

「まさか。ツェイルは妹です。それに、おれはもつとふくよかな女が好きですから」

「姫も丸くなりましたよー？ ちょっと色っぽくなったでしょー」

「ああ……殿下が、開花させましたね」

あの頃とは違う、と断言できるほどに変わったツェイルの様子には、多少だが驚かせられた。昔はあんなに穏やかではなかったし、抱きつかれておとなしく受身でいることもなかった。人間としても、女性としても、丸くなったと思う。

「御子が、できたそうで」

「あら、聞こえました？」

「アインから聞きました。外部の警護はわれらにお任せを。ツェイルには……皇弟妃殿下には、指一本触れさせません」

「そうしてくれると助かります。さすがにおれひとりでは、護り切れませんからね。どれくらい隠し続けられるかわかりませんが……まあ、どちらにせよサライに子ができなきゃ、安全とは言えませんがね」

「……侍従長は、やはり《天地の騎士》ですか」

「見てわかりましたでしょ？」

ラクウィルの笑みは変わらない。だからそれが肯定なのだと、理解できた。

「両殿下は護られる……あなたやアインがいれば、なにからも」

「そう上手くいきませんよ。逆を言えば、おれたちしか味方はいないですから」

「われら皇弟近衛騎士隊もいます」

「あは。それは心強いですね」

茶化しているわけではないのだろうが、ラクウィルの笑みは軽い。

「……一つ、よろしいですか」

「はい、なんででしょう？」

「死神ダンガードとは、あなたのことですか」

「ほよ？ むーん……そんなふうに呼ばれていたこともありましたがね」

やはりそうか、と思う。

「では、忌み子を守護する異形の者も、あなたか。忌み子とは、殿下の……」

「サリヴァンは忌み子なんかじゃないですよ」

ラクウィルの低い声に、言葉が遮られた。冷え冷えとしたその空気が、ラクウィルから笑みも消し去らせている。

「二度と口にしないでください。サリヴァンは、違います」

ああ、これが帝国一と言われた最強の天恵術師の顔か、と思う。

「……わかっています。あの話が本当なら……殿下はむしろ、神の子です」

「それも肯定できかねますね。サリヴァンは人の子です。神子なんかに祀り上げられた日には、おれは国を潰しますよ」

この人もツアインと同じような思考回路だ。どうもサリヴァンの周りには狂気が集まっている。その中に自分も含まれるのだろうが、それだけサリヴァンやツェイルを慕っているということでもあると考えると、恐ろしくはない想いだ。

「国を潰すときは、協力します」

「……、おや」

「生きてもつまらない世界なら、消してしまえば楽しいですから」

「ふむ……あなたはツアインみたいですねえ」

「感化されている自覚はありますか」

長く一緒にいたから、感化されないわけもない。感化されているから、邪魔というだけで数多の命を潰すツアインを、受け流せるのだ。

「うん、気に入りました。副隊長、確かナイレン・ディーディスという名前でしたね」

「はい。それが？」

「おれはラクウイル・デイバイン・ダンガードと言います。ラクウイルと呼んでください」

今さら自己紹介か、と思ったが、そういえばきちんとそういうことをしたことがなかった。この六年、互いの顔と役職を認知しているくらいで、呼称も役職名でよかったせいか、とくに困ったことがなかったからだ。

「ちなみにおれは庶民出で、それも流浪の民ですから、敬語は要りません」

「いきなりそう言われましても……おれも傭兵上がりなので、敬語は不要です。慣れていません」

「おれは癖です。まあおいおい、そうするようになってください。自分がこういふ話し方なのはいいんですけど、人からやられると気色悪くて」

背中が痒くなるんです、と自分のことは棚に上げて嫌そうな顔をするラクウイルに、ふっと苦笑が零れる。

「これからよろしく、ラクウイル」

「はい、ナイレン。ツアインのお守りは大変でしょうけど、上手く近衛騎士隊を引っ張ってくださいね」

「努力しよう」

ツアインのお守り続けるのは面倒だが、それが自分の選んだ道で、信じた道だ。

悪運は尽きないな、と思いつながら、ナイレンは未だ玄関先でいちやっついているサリヴァンとツェイルを、ラクウィルと一緒に眺めた。

Plus Extra : 近衛騎士隊追送録。 3 (前書き)

残酷描写が会話文にあります。ご注意ください。

ナイレン視点です。

サリヴァンを送り届けたあとは帰宅してもよかったのだが、城に残っているツアインが気になり、ナイレンはその通路を戻った。とはいえ、ナイレンは騎士宿舎にも居があるので、今日はそちらで休もうと思えば、苦になるほどの距離ではないだけだ。

「アイン」

騎士宿舎の最上階、北端の部屋は、ツアインの部屋だ。執務室にもなる部屋なので、最上階は城と繋がる石橋もあるが、そこへ行くには真逆に進まなければならぬという、便利の悪い位置でもある。おそらくは上層部のいやがらせかなにかでそうされたのだろうが、ツアインはこの北端の部屋を気に入っているようだった。

「なにしに来たのかな、ナイレン」

「殿下を送り届けなかったのはなぜか、と疑問になって」

部屋に入ると、案の定ツアインは卓に向っておらず、その前に置かれた長椅子にだらしなく寝転がり、酒を引っかけていた。

「とくに意味はないよ。今日は酒を飲みたかっただけ」

「いつもならツェイル逢いたさに、まっすぐ帰るくせに」

「あそこは僕が帰る場所じゃないから」

「だが、ツェイルがいる」

「……そうだね」

くつくつと、なにが楽しいのか、ツアインは笑う。酔っ払っているのかと思っただが、長いつき合いから、それはない、と否定する。いくら酒を飲んだところで、ツアインは酔わない。いや、酔えない。だから、酔いたいと思って酒に手を出したのだろっその理由が、気になった。

「やはり殿下を恨むか」

言いながら、ツアインの向かいに腰をおろした。ツアインは笑っていた。

「僕はわりと殿下が好きだね。ツェイルを連れて行ったことには憎たらしく思うこともあるけれど、嫌いにはならないんだ」

「メルエイラの使命があるから？」

「どうだろう？ 僕としては、あの人間離れしていながら人間らしさを捨てきれないあの姿が、気に入っているのだと思うよ」

呑むか、と酒を促されたが、得意ではないので断ると、相変わらずつまらない男だね、と言われた。

「煙草は呑む。いいか？」

「ほどほどに」

許可をもらって、懐から煙管を取り出し、これだけのために覚えた異国の魔術を遣って火をつける。

「天恵者でもないくせに、よく遣えるね」

「かるうじて素質はあるらしい。もっときちんと学べば、術師にな

れると言われた」

「精霊と契約すれば、ってこと？」

「そこまでの力はない。焚火には困らないだろう、というくらいだ」
「放火犯になるなよ」

「おれは傭兵だ」

「今は騎士だけれどね」

傭兵上がりのせい、騎士、という肩書きにはむず痒さを感じる。規則ばかりで息苦しいと、最初は思ったものだ。

紫煙を吐き出したとき、ツアインが酒を煽る音が聞こえた。呑む速さが異常だと感じたが、けっきょくは酔えない男であるから、放つておいても問題はない。

「なにを憂いている」

「憂える？ この僕が？ はん……おかしなことを言うね、ナイレン」

「あの娘……フィジス嬢との婚姻は、もう半月後だろう。そのことか」

「ああ、そういえばそうだったね……忘れていたよ」

まるで、忘れていたかった、とでも言いたそうな喋り方だった。

「ナイレンはどうなの。皇弟づきの近衛騎士副隊長って肩書きは、けっこうな婚姻話が舞い込むだろう。いい歳だしね」

「だから、おれは傭兵だ。親の顔も覚えていないおれには、後ろ盾もなにもない。そんな話がくるわけないだろう」

「ナイレンの後ろには殿下がいるよ」

「関係ない。それに……恋人くらいいる」

「なら、僕にかまってないで、恋人との逢瀬を楽しみなよ」

やはり笑うツアインは、酒をさらに煽り、瓶が空になると新たに手を伸ばしてそのまま呑み始める。

「楽しめたらいいんだがな。おまえが気になって楽しめたものじゃない」

「僕は男なんてごめんだよ」

「溜まっているだけなら、フィジス嬢に慰めてもらえ」

「……それもいいかも」

珍しい返事をしたかと思ったら、ツアインは楽しそうな笑みを消し、なにかを嘲笑していた。

「明日にでも行こうかな……そろそろ情報網も広げておいたほうがいいし」

「……アイン」

「んー？」

「ツェイルを抱きたかったのか、おまえ」

「……今さらなに」

ちよつと驚いたような顔をしたツアインは、しかし次には腹を抱えて笑い出した。

「この僕が、ツェイルに手を出していないと、思っているの？」

「な……おまえっ」

さすがに慌てたが、嘘だよ、と言われた。

「ツェイルを抱くなら、心をすべて僕のものにしてから、と思っていたからね」

「……まさか、殿下が羨ましいとか、思っているのか」

「羨ましいね。そこが憎たらしく思うところだし」

そこは素直なツアインに、肩が落ちる。ツアインのツェイルへの愛は本物だとわかっているが、ここまでくるともう不憫だ。抱いておけばよかつたじゃないか、と言ってやりたくなる。報われない想いを抱き続けて、それでよしとツアインは納得していることではあるが、だからこそ許されてもいいことはあるのではないかと、ナイレンは思ってしまうのだ。

「ツェイルのこととなると、本当に別人だな、アイン」

「僕の世界にはツェイルだけいればいいから」

「おまえな……」

ここまでの執着を見せられると、恐ろしさを通り越す。いや、呆れを通り越すから恐ろしいのだろうが、恐ろしさを通り越して呆れる。

「フィジス嬢はこいつのどこがいいんだ……」

「さあ？ 僕はあなたを愛せませんよ、とは言ったんだけどね」

「言ったのか」

「だって僕は、ツェイルにしかいとしさを感しないもの」

心も、感情も、なにもかも、ツェイルのことでは感じられるものはない、とツアインは昔から言うが、それが本当であるから不思議なものだ。いくら天恵の代償で空っぽだとしても、ツアインは人間だ。人間をやめることなど、死を超えたのちにはかできることはない。

「狂っている」

「けっこう。僕は、狂人だ」

なんでもないかのように言っただけで欲しくない。けれどもツアインにとって、それはなんでもないことでしかない。

「寂しくないのか、アイン」

「なにが寂しいの？」

「この世界にひとりしか、おまえが愛せる者がいない」

「べつに……満足しているよ」

なにを言っているのかわからない、という顔を、ツアインはしている。それがどれだけ寂しいことをか、この男はやはり理解できないらしい。もし最愛の妹ツイイルが死ぬことでもあれば、この男はその原因に報復したのち、あっさりと命を投げ出すだろう。

なんてやつだ、と思わなくもない。

そんなやつは友人でいる自分も、なんてやつだ、と思う。

「おまえがそう言うなら、まあいいさ……おまえは幸せなんだろうし」

「なら訊くなよ。決まり切った答えなんか聞いても面白くないだろ」

「そう、だな……」

「ところで、いつまでいる気？」

「話しておきたいことはまだある」

まだあるのか、とツアインはげんがりしたが、ついでに確認したいこともあるから、ナイレンはここにいるのだ。

「殿下の御子が産まれる。そのことについてだ」

「ああ、それなら明日にでも網を作るから、気にしなくていいよ」

「国内のメルエイラはどれだけいる」

「さあ？ 十人くらいはいるはずだよ」

「国外にも網を張るのか」

「とりあえず国内だけ、かな。近い内に国外にも手を伸ばすよ」

「おれたちへの命令は？」

「訊かなきゃ実行できないの？」

呆れた、という眼差しに、かちんとくる。確認しているだけなのに、厭味を言われた。

「ツェイルと殿下を護ってくればそれでいいよ。護れなかったものには死を、僕が与えてあげる」

「……それがたとえおれでも？」

「もちろん。ツェイルと殿下を護れない奴は邪魔だ。簡単には死なせてあげないから、楽しみにね」

にやり、と笑うその瞳に、ぞっとする。手合わせをしたことがあるだけに、その戦い方を間近で見ているだけに、畏れが全身を駆け抜ける。

「……楽しみだな」

「そう。明日からまた頼むよ、ナイレン・ディーディス副隊長」
「御意」

目を伏せて頭を下げると、またツァインは酒を煽り、満足そうにする。それを見てから煙管の灰を捨て火種を消すと、ナイレンは椅子を離れた。

「ああそうだ。ナイレン」

「……なんだ」

部屋を出ようとしたところで、呼び止められた。

「少し昔の話をするけれど、ツエイルを攫った愚かな人間、爵位剥奪永蟄居だけど、護送中に死んだことにして」

「……ナルゼツタの娘のことか？」

確か、明日の夕方にそれが実行される人間がいる。長く蟄居先が見つからず、貴族が投獄されたときのための牢にいたが、漸く落ち着き始めたシエリアン公国が受け入れを申し出たことで、護送されることになっていた。

「そんな名前だったかなあ……もう忘れちゃった」

「アルミラ・ウエル・ナルゼツタという若い娘だ。なぜ護送中に死んだことにする必要がある。永蟄居なら血は残らないぞ。監視の目が強固だからな」

「殺したから」

「……、なんだと？」

「さつき、殺してきた。片づけておいてくれるかな」

だから酒を飲んでいたのか、とナイレンは眉をひそめる。

ツアインは、酒を飲める年齢になってからは、人を殺めたあと必ず酒を飲むようになっていた。その匂いを酒の力で消すためだ。だが、それは実家にいるときの話で、騎士宿舎にいるときは人を殺めてもそのままであることが多かった。だから、なんとなく酒が飲みたくて、という理由が、理由になることもある。

今日酒を飲んでいたのは、人を殺めたからだだったのだ。

「顔とか、もうぐちゃぐちゃにしてやったら、ちよつとはすつきりしたんだけれどね……気が治まらなくて、腹を裂いてやった。それでも足りなくて、どうしようか困ったよ。だから殺しておいた。う

るさかったし、なんか邪魔だったから」

ナルゼツタの娘は長く放置されていた。その存在すら忘れかけられていたほどに、誰も見向きもしなかった。だからナイレンも、ツアインもそんな感じだと思っていたのだが、それは違ったのだ。

ツアインはずっと、殺す機会を窺っていたのかもしれない。その好機を、護送される明日の直前に見つけたということか。

「ナルゼツタのほうはどうした」

「誰のこと？」

「父親のほうだ」

「……ああ、あの男か。さあ？ 邪魔だから殺そうかと思ったんだけれど、閣下にやめておけて言われたから、どうなったかは知らないね。まだどこかの地下牢にいるんじゃないの。閣下が、必要な贄だ、とかなんとか、言っていたからね」

「……、そうか」

殺されてしまったナルゼツタの娘にも、その父親にも、特に思うことはないナイレンだが、ツアインに対しては思うことがたくさんある。

「死ぬなよ、アイン」

「は？ いきなりなに」

「いや、ふとそう思ったただけだ」

産まれてこなければよかった、と言ったツアインだから、その命の線は、きつと細い。

この男に死なれると困るのは、世界がつまらなくなるからで、楽しくなくなるからだ、と、ナイレンはため息をつきながら命じられた

仕事を片づけるために、早々にツアインの部屋を出た。

PLUS
Extra
:
近衛騎士隊追送録。
3 (後書き)

Plus Extra : 近衛騎士隊追送録。 4 (前書き)

ナイレン視点です。

午前中に行われるはずだった罪人護送任務がなくなったことで、その任にあたる予定であった騎士たちの手が空いたため、今後のことを鑑みてヴァルハラ公爵邸内とその周りの調査を行うことにした。幾度かそういったことは行われているが、『皇弟の妃が懐妊した』ということが判明してからは初めてのことであるので、入念に再調査する必要があるだろうと判断したのだ。もちろん、大袈裟には調査しない。下手に騒いで危険を増やしては意味がないのだ。

「ナイン」

ふと、街に入っても目立たないような服装で溶け込んでいたところに、憶えがある呼称で呼びかけられて、ナイレンは振り向く。

「……ツェイル」

邸の目と鼻の先にある通りにいたせいか、早々に見つかった。

「ナイン、久しぶり。どうしてここに？」

幼い頃、名を訊かれて「ナイレン」と答えたのだが、聞き取れなかったらしく「ナイン」とナイレンのことを憶えたツェイルは、今でもナイレンのことをそう呼ぶ。

相変わらず小さいな、と思いつながら、街に溶け込んでいる部下た

ちに目配せして、ひとりでいるツェイルのためにも注意を促した。

「おれは街の住人だ。おまえこそ、どうしてここに？」

「リリの手伝い。もう帰る。疲れてきた」

「おまえが疲れたとは、珍しい」

昔からそうしていたように、ぼんと頭を撫でてやると、ツェイルは俯いた。

「ナイン……わたし、結婚した」

「ああ、それは聞いている。おれは近衛騎士隊の副隊長だぞ。ぜんぶ知ってる」

「なら……ナインも、サリヴァンさまを護ってくれるのか？」

俯いていた頭が、ゆっくりと上がる。薄紫色の双眸はツアインと同じだ。けれども、ツェイルの瞳はツアインのような虚ろさがない。いつか見たしっかりとした意思が宿っている。

「楽しそうだからな。護るよ」

「この子も？」

「……ああ」

腹部を抱えたツェイルに、ナイレンは目を細めた。少し見ていなかったただけなのに、なんだか丸みを帯びて女らしくなったように思う。

「邸に、視線を感じる」

ふと急に目を細めたツェイルが、周りをゆっくりを見渡しながら急にそんなことを言った。

「……ほう」

「本当は、それが気になって、外に出てきた」

調査のためにうるついでにいる部下たちの気配を、ツェイルは機敏に感じ取っていたらしい。

これは部下たちを鍛え直す必要がありそうだ。

「悪かった。おれの部下だ」

「……違う。近衛の人たちじゃない」

おや、と思つて、ナイレンは首を小さく捻る。

「いつからだ？」

「このところ、ずっと……今日はひどくそれを感じる」

となると、ツェイルが感じているものは、ナイレンの動きまでも調べている可能性がある。

「イル」

昔、一緒に戦っていた頃、そう呼んでいたようにその名を口にすると、ツェイルは「わかつている」と頷いてくれた。だからナイレンはそつとツェイルの背を押し、邸のほうへと促す。

けれども。

「……っ」

急な殺気が、ナイレンの後ろ首を刺激した。

ハツとして振り向くと、全身黒ずくめの傭兵然とした男がふたり、いつのまにかそこに立っていた。

「イル、邸に走れっ」

腰に下げている剣の柄を握り、振り向きざまにツェイルを邸へ走らせようとしたがしかし、ナイレンの意とは逆に背中にツェイルの背がくつついた。

「ちっ」

ナイレンは慌ててツェイルの肩を抱き、引き寄せる。ツェイルが走ろうとした先を睨めれば、そちらにもふたり、黒ずくめの男が立っていた。

「ああ、その顔にはやっぱり憶えがある。おまえは副隊長さんだな」

男のひとりが、目深に被った布の隙間から、そうやってきた。

「てことは、そっちの坊やが、坊やじゃなくてお嬢ちゃんなわけだ。ふうん？」

にやりと、男の唇が歪む。ナイレンはそれらを睨みつけながらも、この事態を目撃している部下たちの気配を探り、その指示を出す機会を窺った。

「なに者だ、おまえら」

「雇われもんだよ。見りゃわかんだろ」

意外にも、男はナイレンの問いに素直に答えた。ただの人攫いで

はなさそうだが、そうなると思っていた事態の可能性がある。
剣の柄を握る手に、力が入った。

「おっと、おれに剣は効かねえと思うぜ？　魔法師がいるんでね」
「まほうし、だと？」

「こつちでは天恵者、だったか。知ってるみたいだな？」
「ディアル・アナクラム国の者が、おれたちになんの用だ」

国境を越えた先の者にまで狙われる想定はしていたが、まさかこんなに早いとは思っていなかった。あのツアインでさえ、国外への危機感に昨日動き始めたばかりなのだ。

「ここじゃゆっくり話もできねえ。とりあえずついて来いよ。おとなしく、な。うちとこの魔法師は容赦ねえから、そのほうが身のためだぜ」

言うことなど聞けるか、と言おうとしたのだが、ナイレンが言う前にツェイルが口を開いた。

「断る」

ツェイルのはっきりとした答えは、しかし男を一笑させた。

「は！　強気な言葉だねえ。言っただろ、うちの魔法師は容赦がねえんだ」

「わたしが天恵者でも、同じことを言うか」
「……ほう、お嬢ちゃん、天恵者かい」

男の唇が、不気味なほど歪む。面白いことを聞いたと言わんばかりのその態度に、ナイレンは不快さが込み上げてきた。

しかし。

「情報どおりだな」

と言った、男のその言葉に、眉間に皺が寄る。

ツェイルが、メルエイラ家が血に天恵を持つ一族であると知っているのは、このヴァリアス帝国内でも、上位十二貴族だけが知ることなのだ。メルエイラ家に関わる者たちは必然的に知ることになってはいるが、それでも異国の人間が易々と得られる情報ではない。

異国の人間を使うことでそう仕組もうとしたわけか、と思うと、わが国のことながら本当に情けない貴族連中だと思う。

「雇い主は、六候のひとりか」

「ん？ なにか言ったか、副隊長さん」

そもそも、だ。男がナイレンを副隊長だとわかっているらしい時点で、男が異国の人間だとしても雇い主は国の人間だと判断している。

この国の人間はどこまでサリヴァンという皇弟を利用し尽くしているのだ、とため息がこぼれた。

「目的はなんだ」

「そこのお嬢ちゃんと逃避行」

「許すと思っているのか」

「そのために魔法師がいる。まあ、お嬢ちゃんは天恵者だし、簡単にはできねえだろうと思うてはいるが……なあお嬢ちゃん、もうひ

とりの身体じゃねえなら、無理はしねえほうがいいと思っぜ?」

とたん、ツェイルがびくと身体を震わせた。瞬間的に男が笑う。

「おいおい、当たりかよ」

かまをかけられたのだ、と気づいたときには遅い。

ナイレンは二度めの舌打ちをすると、もうだめだ、とその判断を下す。

「斬りかかれっ!」

剣を抜くと同時に、部下たちにそう号令する。成り行きをこっそりと見守っていた部下たちの反応は早かった。

「やっぱりそう来るよなっ!」

嬉々とした男は、怯むこともなかった。同様にほかの黒ずくめたちも、予想していたかのような反応を見せる。

ナイレンは彼らを部下たちに任せることにして、ツェイルの肩を強く抱くと邸へと促した。

「イル、走れっ」

しかし。

「逃がすわけねえだろ!」

邸にさえ入ってしまったえば、そこにはあらゆるものから守護する結界が張られている。どういう仕組みになっているのかはわからないが、だからこそ邸にツェイルを促したのに、ツェイルが天恵者だという情報を持っていた男は、やはりそのことも知っていたのだろう。部下たちの攻撃をかわしたその男だけは、ナイレンとツェイルの前にひらりと舞い降りてきた。

「魔法師って、おれのことなんだよ」

ああやはり、と思うと同時に、ナイレンはツェイルのそばを離れて男に剣を走らせた。

軽く避けられてしまったが、その隙を狙わないナイレンではない。剣を走らせた勢いをそのまま利用して二合めに移行する、ツェインから教わった技巧で男に攻撃を与えようとして、金属がぶつかり合う鈍い音が響いた。

「魔法師だが、おれは魔法剣士でね」

受け止められた攻撃は、男を笑わせる。

今日は幾度舌打ちすればいいのだろう、と思いつながら、二合三合と剣を交わし合った。

そのとき。

「ネイ、ラクを呼べっ！」

と、ツェイルが叫んだ。

ツェイルは、邸のほうから姿を見せた少女を視界に捉えていた。

少女の隣には、少年もいる。どちらもナイレンが赤ん坊の頃から知

っている、ツアインやツイールの弟妹だ。少女シユネイは蒼褪めているようだったが、少年トゥーラは不機嫌そうに腰の剣を握ると、こちらに向かつて駆けてきてくれている。

「やや、これは予想外だな」

男が、思わぬ方向からの助っ人の登場に、おどけたように呟く。

「ナイン貴様っ、イルを護るのが貴様の役目だろう！」

というトゥーラの怒鳴り声に耳が痛いと思いながら、ナイレンはぶつかり合っていた男との剣から瞬時に離れると、ツイールの傍らに戻った。

「イルを襲うとはいいい度胸だ、不屈き者！」

「おおっと！」

トゥーラの剣が、男の剣とぶつかり合う。

「死ぬ覚悟はあるんだろうな」

「ねえよ、んなもん」

「では殺される。メルエイラを敵に回して、生き残れると思うな」

「おお怖い。だがなあ、おれは強えからよ」

トゥーラと男の斬り合いになると、その強さを知っているナイレンはツイールを庇いながらじりじりと後退を始める。周りの様子を見れば、苦戦しつつも黒ずくめたちに応戦している部下たちの姿があった。

「ナイン、だいじょうぶだ」

「おまえはネイと邸に戻れ、イル」
「だいじょうぶだ。ラクが来る」

シュネイにラクウイルを呼ぶようと、そういえばさっき叫んでいたが、ナイレンには意味不明だ。ツェイルのその自信も、どこから湧いてくるものなのかわからない。

「いいから邸に」

戻れ、と言おうとしたとき、視界がぶれた。いや、見えている先が、ぶれた。

「うっわ、なにこれ」

きよとん、した顔のラクウイルが、そこにいた。

「いつからここは闘技場になったんでしょうねえ……」

あまりにも場の雰囲気になぐわぬい声で、ラクウイルはそう言う。しかし次には、地が揺れた。

「とりあえず、消し飛べ？」

あは、と笑ったラクウイルが、いつまに抜いたのか、その剣に朱い炎を宿らせてくるりと回したのち、黒ずくめたちのほうへ真っ直ぐと投げ飛ばした。

「避ける！」

ナイレンが咄嗟にできたことは、部下たちにそれを知らせること

ただだ。気づいてくれた部下たちは、それぞれが慌てて四方へ逃げる。

周囲には邸以外の建物はないのだが、なくてよかったと思うほどに大袈裟な轟音が、炎の宿った剣が地に突き刺さると同時に響き渡った。

「気分そおーかぁーい」

満面笑顔のラクウイルがそう言ったとき、炎が黒ずくめたちを覆っていた。部下たちはぎりぎりのところで免れているようだが、それでもその熱は伝わってくるのだろう。よたよたとしながらその場からさらに逃げていた。

数多の悲鳴が聞こえる中、トウーラと剣を交えていたほうの男が、漸く己れの不利を感じ取ったのか、隙を見てさっと身を翻す。

「おれの切り札、切り札じゃなくなっちゃったぜ……こりゃいかん」

「おんやぁ？ まだいましたか」

「こつちの坊やと遊んでいたんでね」

「おやおや……まあ、とにかく消し飛ばさなさいよ、とりあえず」

「とりあえずで殺されてたまるか」

「おれの未来の奥さんが泣いてるんです。その責任は取りなさい」

にこ、と笑ったラクウイルは、その手に剣に宿らせた炎と同じものをまとわせる。それを見た男は、唇を引き攣らせて後退した。

「逃げるが勝ち、だな。あんただけは相手にしたくねえ。あんた、

あの異形だろ」

「どの異形ですかねえ？」

「聖国の死神、異形の天恵術師だ！」

男はそう吐き捨てる、その勢いのまま、黒づくめたちがまみれている炎の中に突っ込んでいく。自殺行為だ、と思っただが、炎の中でなにかが一瞬白く発光したあと、燃えていた黒づくめたちや男の気配が、ぷつつりと消えてなくなった。

「ありや……幻覚ってばれちゃいましたね」

と、ラクウイルが呟いたとき、それまで燃えていたその場所から、炎がぱつと消えた。本物の炎ではなく、幻だったようだ。

「まあいいか。姫、無事ですね？」

やはり場にそぐわないその声と表情に、ナイレンは漸くほつと、肩の力を抜く。

だが、それも一瞬のことだ。

「サァリヴァーン」

ラクウイルがサリヴァンを呼んで、どこからともなく舞い降りてきたサリヴァンのその姿を見たときに、ナイレンは申し訳なさと情けなさで死にたくなかった。

いや、近衛騎士隊の副隊長をまず、辞任しなければならないと考えた。

Plus Extra : 近衛騎士隊追送録。 5 (前書き)

ナイレン視点です。

どつという連絡が回ったのか、婚約者のところへ行つたはずのツアインが、騒ぎが鎮まるとしばらくして姿を見せた。その顔にはいつもの笑みはなく、冷え冷えとしている。

「歯を食いしばる暇なんかあげないよ」

そう言つた次の瞬間には、ナイレンは平手で右頬をぶたれた。手加減はしてくれたようで、怪力であるはずのツアインからそれを受けても、ナイレンは転ぶことさえない。けれども、不意打ちではあつたせいで、口腔内を少し切つた。

「ツアイン！ ナイレンはいい判断をした。処罰など」

「殿下は黙つて。これは、僕の部下だ」

「ツアイン……」

庇つてくれようとしたあるじに目礼して、ナイレンは唇の端から流れ落ちた血を拭くと、体勢を整えた。

「ナイレン、しばらく牢にしようか。メルエイラの家の地下には、ちよつどいい牢があるんだ」

「……御意」

「期限を決めてあげる。七日七晩だ。ただし食事はなし。もちろん水分もあげない。それでも生き延びているようだったら、許してあ

げるよ」

ひどい処罰だ、と思わなくもない。けれども、それを甘んじて受けなければならぬ失態を犯したと、ナイレンは思う。

「やめろ、ツアイン」

「黙ってと言ったでしょう、殿下」

「おまえはおれの配下にある。おまえの部下であるナイレンも、おれの配下にある者だ。処罰はおれが決める」

「殿下……これはただのけじめだよ。死ねと命令しているわけじゃないんだから」

「同じことだ」

再び庇おうとしてくれる心優しきあるじに、ナイレンはいいからと首を振ったのだが、今度はそれを甘んじるあるじではなかった。

「おまえたちの間だけで終わらせられない問題だ」

その言葉には、ナイレンも眉間に皺が寄る。

「……どういう意味か、説明が欲しいね」

「ナイレン、襲撃者は魔法師だそうだな」

そばに控えているラクウィルにでも聞いたのか、サリヴァンはそうナイレンに問う。そうだ、と頷くと、サリヴァンは小さく息をついた。

「シエスタから連絡があった」

「しえすた……ヴェルニカ帝国の、シエスタ・ウィウエル・ヴェルニカ皇帝陛下？」

「ああ」

「殿下、ものすごく彼のこと嫌いだよね」

「……苦手なだけだ」

「よく聞く耳なんて持ったね」

「それしかなかったんだから仕方ないだろう」

「いったいなにをされたのだろう、と思わせられるサリヴァンの反応に、しかし「それよりも」と続けられた言葉で考えが中断させられる。

「シエスタが、ディアル・アナグラム王国の情勢を知っているか、と」

「あそこは常に平和な国だよ。ヴァリアスと違って、天恵者の数が極端に少ないし、島国だから閉鎖的な部分もあるけれど、まず異形がないから大きな戦争もない。王サマも人がいって言うし、賢王が続いているはずだね」

「争いごとが起こっているわけではない。問題が起きているわけでもない」

「どうしてその国の天恵者……いや魔法師が、ツェイルを襲ったのか……僕は疑問なのだけれど、殿下は知っているわけだ」

「なんのことだ、とナイレンは首を傾げたかったが、言いにくそうにしているサリヴァンの様子を見ているうちに、それはなんだか国のことで振り回されているのではなく、私的なことに参っているように見えてきた。

「……王弟が」

「皇弟は殿下でしょ」

「ディアルにも王弟はいる」

「そっちの王弟？ えーと……なんて名前だったかな……ナイレン」

話を振るな、と思っただが、残念なことにナイレンは知っている情報だ。なにせ、煙管の火種を作るためだけにその国の魔術、いや魔法と呼ばれているそれを憶えたのだ。

「リアルト・ルー・テイエナ大公閣下だ」

「ああ、そうそう、そんな名前だったね。それで殿下、その王弟サマがどうかした？」

ナイレンが再度サリヴァンを見上げたとき、もつと言い難そうな顔をしたサリヴァンがいた。

「ゆ……行方不明、らしい」

「……はあ、それで？」

いよいよ言いたくなさそうにしたサリヴァンだが、その場にいる者たちからの視線から逃げるようにそっぽを向いた。

「少し前から、城にいる」

とたん、どこからか痛いほどの冷気がナイレンを襲った。いや、どこからか、ではない。ツアインからだ。

「シエスタから、その行方を聞かれて……いや、聞かれたというか、使者からの言葉ではあったんだが、とにかく行方不明になっているから、ヴァリアスにいるようなら連絡をくれ、と。同じ頃に、ディアルからも使者が来て、一月ほど前から大公が行方不明になっているため、力を貸して欲しいと……、ツアイン？」

説明をしてくれたサリヴァンであるが、ツアインから発せられた

冷気に気づくのが遅かった。気づいたときには、ツアインは慈愛の間違いではないかと思うほどの艶やかさを垂れ流し、且つ今から人を殺しに行くような殺気に笑みを上乘せしていた。つまり、ひどくあべこべな感情を垂れ流している。

ああ、怒っているな。

そう思ったのは、おそらくその場にいる全員だろう。ツアインはいつだって当てにならない感情しか持っていないのだ。

「そおいうことお……僕の可愛いツェイルを狙った愚図どもは、大公の搜索に来たディアルの者たちってことだね」

「あ、ああ、そうだが……、ツアイン？」

「大公の搜索になんでツェイルが巻き込まれるのか……ははあ、殿下を利用したい愚図連中が、上手いことディアルの者たちを使って殿下の弱点を潰そうとしたわけだねえ」

「そうなる、な……」

「なあるほどねえ」

にこお、とツアインは不気味だが笑う。ぴしり、と窓硝子に亀裂が入った音がした。

これはやばいな、と思ったが、だからといって暴走しようとしているツアインを止めたいと思うほど、ナイレンは無謀ではない。

「トウーラあ？ 耳がいいおまえなら、ぜんぶ聞こえていたよねえ？ ちよーっと、お兄ちゃんと遊びに行かなあーい？」

「行ってやるっ」

と、隣室でツェイルとシュネイと休んでいたはずのトウーラが現われた。その顔は無表情であるが、怒気に包まれていることだけは

伝わってくる。

「ユーリも連れて行こう、アイン」

「それはいい。テューリもたまには暴れさせてあげないと、可哀想だからねえ」

ああ、久しぶりに見る光景だ。きょうだいのうちで誰かになにかあると、このきょうだいたちは一致団結する。血の繋がりが、息までぴったりと合わせてしまう。

こうなつてはもう完全に放置だ。関わらないほうが身のためである。

「ちょ……おい、ツアイン？ なんの話をしている。どこに行く気だ」

「もちろん……どつかの能天気な王弟サマを、叩き潰しに」

「はっ？ いや待て、奴の滞在をきちんと把握していなかったのはヴァリアスだ。責任はこちらにある」

「能天気な王弟さまが行方不明になった、即ち無断で国を出てヴァリアスに遊びにきていたわけでしょ？ 周りのことなんか一切ぶつた切つて」

にこお、と笑うツアインに対し、サリヴァンは些か蒼褪めて顔を引き攣らせていた。

「い、いや、まあ、確かに、そうではあるが……、待てツアイン！」

「だあいじょーぶ、殺しはしないから。痛めつけるだけで」

「ディアルは属国だ、同胞だ、敵ではない！」

「メルエイラの敵だ」

ツアインのまとう空気が、さらに冷えた。顔は笑ったままである

のに、全身から怒りの炎が流れ出ている。

「イルを狙った者に生きる権利なんかない。殿下、あんたも本当はそう思っているだろう」

トウーラが、ツェイルによく似たその顔で、サリヴァンを睨む。
いやな空気になってきた、とナイレンはため息をつきたくなった。
だから、提案をする。

「殿下、進言を」

「……許す。なんだ」

「ツェイルを襲った者たちは、メルエイラに差し出してください」
「なんだと？ おまえまでそんなことを言うのか」

「たとえ大公閣下搜索のためとはいえ、彼らが用いた手段は、わが国に剣を向けたことと同義。わが国の状況把握の怠りが原因の一つだというなら、剣を向けた者たちをメルエイラに差し出すことは、ディアル国のけじめとなります」

「それは……だが」

外交問題である。たとえ私的なことであれ、皇族の問題は国の問題だ。

「大きな問題にしたいくないのなら、ここはメルエイラに任せるべきかと」

「おれもそう思いますよ、サリヴァン」

それまで黙っていたラクウィルも、同じように考えていたらしく、賛同してくれる。

「彼らもお国大事で動いたんでしょうが、だからといってどうして

わざわざ姫を襲うんです？　姫を襲ってなんの利益がディアルにあると？　そりゃあ大公を見つけ出すには便利でしょうが、それだけでしよう。もし話を聞くだけのつもりだったとしても、あの状況では彼らに救いなんかありませんよ。上手く大公を見つけても、彼らには大罪が課せられるだけです。そんなこともわからないような彼らではないでしょうが……そこを貴族連中に言い包められたんでしようね」

「……確信犯だと、言いたいのか」

「偶然を装えますかね？」

「おれが城へ出仕することは、その態度を見せることは、貴族連中の不審を煽るだけなのか」

「煽るんじゃないですね。彼らは……ただ排除したいだけです」

ふつと、ラクウィルは俯く。同じようなことを、ナイレンも考えていた。だから同じように、俯いた。

「メルエイラに任せましょう、サリヴァン。国のためじゃありません。あなたを護りたいと思うおれや、ツアインや、ナイレンの、ために」

「だが、それでは……おれはツアインに、メルエイラの者たちに、人殺しをしろと命令しているようなものだ。おれはそんなことをして欲しいのではないっ」

ああどうして、このお方はこんなにも心優しく、美しく、育つことができたのだろう。

どうして自分のためを、考えないのだろう。

その身は尊く、ナイレンのような人間には見ることも触れることもできない高貴な存在であるのに、どうしてもっとも遠くあらねばならない死を、こんなにも近くに漂わせているのだろう。

これが、このお方が皇として長く生きられないだろうと思う理由なら、このお方はこの国に在ってはならない。

「……殿下、僕らに任せてくれるね」

「できるわけないだろうっ」

「殿下、僕は言ったよね。メルエイラは、きみを護ることが、最後の仕事だ。きみがあの塔に幽閉されたままであったなら、僕は城の者を殲滅させてもきみを外に連れ出して、護るつもりだった。つまりきみは、それくらい狂った力を手にしたんだよ。僕は基本的にきみの命令には従うけれど、きみを狙う者たちに対して、そういう優しい命令には従えない。でもそういうのは卑怯だとも思うから、こうやってきみにその意思を表明してから、邪魔なものを処分するよ」

「やめる。おまえたちは、人殺しじゃないんだ」

「……殿下は優し過ぎる。でもね、僕も譲れない」

ツアインは笑みを消し、まっすぐとサリヴァンを見つめていた。その虚ろな瞳の中には、はっきりとした意思と、狂った力が宿っていた。

「ツェイルを悲しませる者に、幸せになる資格なんてないんだから」

あくまでも、最愛の妹のため。ツアインが生きているのは、戦うのは、彼女が笑っていられるようにするため。

全身で軒並みならない愛情を曝け出すツアインに、サリヴァンはただ悲しげに顔を歪ませるだけだった。

「メルエイラを動かす。ナイレン、殿下を頼んだよ」

「ツアイン……」

「ナイレン、返事は？」

「……御意」

「まずは襲撃者どもを処分する。トウーラ、おいで」

やると言ったら、ツアインはやる。

処罰は先延ばしされることになったようだが、それでもこの件が終われば牢に入ることになるだろうと予感しながら、ナイレンは弟を連れて出て行くツアインに頭を下げた。またサリヴァンも、言葉もなく拳を握りながら、ふたりを見送った。

「少しずつ、あなたの身の周りを固めていく必要があります。それは理解してください、サリヴァン」

ラクウィルがそう言って、隣の部屋に消えて行く。長椅子に埋もれるようにして頂垂れたサリヴァンにそれが聞こえているのかはわからなかったが、今はひとりにしたほうがいいだろうとナイレンも思い、部屋を出ようとした。

「ナイレン」

呼ばれて、立ち止まってしまふ。パタンと、ラクウィルが隣室の扉を閉めた直後のことだった。

「ツアインを止めてくれ」

「……無理です」

「おまえは幼馴染だろう。どうにかできるはずだ」

「いいえ。だからこそ、アインを止めることなどできません。おれは長くそばに居過ぎました」

ツアインは、本当にディアル・アナグラム王国の王弟のところへ行ったわけではないだろう。ツェイルを襲撃した者たちを見つけ出して報復してから、そのあとに行く可能性はある。それを考えれば、

まだ時間は残されていると思っていい。

「くそ……頭が疲れてきた。なにを考えればいい」

「……とりあえず」

「とりあえず？」

「少し休まれたら、皇城に戻られるのがよろしいかと」

「城に？」

なぜ、と首を傾げるサリヴァンに、ナイレンは可能性の一つを提示した。

「アインが襲撃者を捕捉する前に、大公に捕捉させれば、どうにかなるかもしれない」

「……、あ」

今気がついた、とサリヴァンは目を丸くした。

「おれの記憶違いでなければ、確か大公はディアル国一の魔法師です。大公の手にかかれれば、メルエイラの網よりも早く襲撃者を捕捉できると思いますが」

「……、そうか。そうすれば今回のことは小さいもので済むな」

「まあ、メルエイラの網は確実なものですから、時間との勝負になります」

「いや、いい。それはだいじょうぶだ。要はツアインよりも早く先手を打てばいいんだから」

それができれば、の話ではあるが、サリヴァンなら然したる問題もないだろう。サリヴァンも、やると言ったらやる人だ。諦めることに慣れているから真っ先にそういう考えに至るだけで、きっかけさえ与えればその考えは逸脱していく。

ナイレンがツアインのためにしてられることは、その意思に同調することだけであるが、サリヴァンにしてられることは、諦めるにはまだ早いことを知らせてやることだ。ナイレン以外に人間がそうしているように、サリヴァンにはなにかしらのきっかけを与えるだけがいい。

顔つきが変わったサリヴァンは、すつくと立ち上がった。

「城に戻る」

「御意」

「車を手配してくれ。さすがに日に二度もラクの天恵を使つては、身体がもたない」

ラクウィルの天恵を使うとサリヴァンが疲れる、という法則は聞いた憶えがあるので、ナイレンは頷くとすぐに踵を返し、部屋を出た。

Plus Extra : 近衛騎士隊追送録。 6 (前書き)

ナイレン視点です。

おまえはツエイルのそばにいてくれ、とサリヴァンに頼まれたので、ナイレンは車の手配をしたあとは数人の部下をサリヴァンとラクウィルに頼む形で護衛につかせ、邸に留まった。

見送りに出てきたツエイルの後ろにシュネイと並んで控え、その姿が見えなくなってから邸内に戻る。

「ナイン」

「……なんだ？」

「なにか悪いことが、起きているのか？」

ツエイルは勘がいい。昔からそうだ。自分やサリヴァンが絡むことであればなおさら、それを隠し通すことはできない。

「ディアル・アナクラム王国を、知っているか？」

「でいある……海を隔てた向こうにある、島国か？」

「ああ。その国の王弟が、一カ月ほど前から行方不明だったらしい。おまえを襲った奴らは、その王弟の搜索隊だ。どうもどこかの貴族連中に言い包められて、利用されたらしいな」

「……わたしがいれば、王弟が見つかるのか？」

「口実だ。おまえは殿下の弱点だからな」

「サリヴァンさまを狙っていたのか」

「うちの貴族連中が、な。異国の者を使うことで、自分の手を汚さずに済まそうとしたんだろう」

「では……ディアル国の人たちは、本当にただ利用されただけか。わたしを使つて、サリヴァンさまを傷つけて……」

そうなる、とため息をついて肩を竦めれば、無表情のツェイルにも僅かに不愉快そうな空気が漂う。

「……ツェイル、おまえは動くなよ」

「どうして」

「ひとりの身体じゃない。それに……」

ナイレンは手のひらを伸ばし、その真っ白な頬にそつと触れた。

「無理はするな。さっきより顔色が悪い」

この小さな身体に、新しい命が宿っている。それはナイレンにとつて未だ信じられないことだ。

「アインとトゥーラが、メルエイラの者たちを動かしている。殿下も、動かれている。おまえはおとなしくしている」

「わたしにもなにか」

「できることがあるとしたら、それは身体を休めることだ。おまえが倒れたら、殿下が悲しむ」

サリヴァンの気持ちを考える、と言うと、ツェイルはやや悔しそうに俯いた。

「サリヴァンさまにはかり……どうして」

「ツェイル……」

「わたしは、護られてばかりだ……サリヴァンさまを護りたいのに」

俯いていたツェイルは、そのままぺたりと、両膝を抱えて地面に蹲る。追いかけて膝をついたとき、その華奢な肩は微かに震えていた。

「サリヴァンさまのおそばにいたい……っ」

肩に置こうとした手が、止まる。

ツェイルが誰かを、人を求める姿を見るのは、初めてだ。一緒に戦っていた頃、この小さな少女は誰よりもおとなびて見えたものだったが、やはりあれは錯覚か、見当違いだったのだ。

「……とにかく、邸に入ろう。少し休め、ツェイル」

立つよう促しても動かなかったので、ナイレンは失礼してツェイルを抱き上げる。その身体はとても軽く、しかし抱かれた想いは強く重たいものだった。

シュネイに手伝ってもらってツェイルと邸に入ると、心配げな顔をしたリリがいたので、部屋に案内してもらう。そのまま寝室まで連れて行き、寝台に横たわらせたあとはリリに任せた。

「今の姉さまは、ちょっとでも目を離すと、ああなっちゃうのよ」

寝室の扉を閉めると、一緒に部屋を出たシュネイが、そんなことを教えてくれた。

「ああなる、とは？」

「自分を責めるの。赤さまができたことはすごく嬉しいのよ？でもね、どうしても浮かれてばかりではいけないの」

「そういう話は……稀に聞くが」

「そうね。その類いのものと同じだと思っわ」

お茶を飲みましょう、と誘われて、つい昔馴染みということもあって頷いてしまっってから、自分の立場を思い出した。

「隣の部屋で、いいか？」

「あ、ナイレンは近衛騎士隊の副隊長さんだったわね。ごめんなさい、うつかりしていたわ」

寢室の隣には居間がある。とはいえサリヴァンとツェイルが常に使う居間であるから、自分たちが入って休んでいい場所ではない。いつもなら廊下に控えるか、或いは庭先にいるのだが、先にあつたことを考えると常にそばにいたほうがいいだろう。そういうときは入室を許可されているので、ナイレンはシュネイと一緒に、居間に控えさせてもらうことにした。

「そういえば……なぜツェイルはシュネイに、ラクウィルを呼べと言っただんだ？」

「ん？ ああ……あたしの声ね、ラクさまは聞こえるみたいなの」

「シュネイの声が？」

「そう」

頷きながら、シュネイは手ずからお茶の用意をしてくれる。もともとそういう時間にしようと思っただけ、道具はすべてそろえられていたので、こういったことが得意なシュネイは手際よくお茶を出してくれた。

「すまない」

「いいえ。ちよっとぬるめになってしまったけど」

「かまわない。それで……ラクウィルはおまえの声が聞こえるから、

あんなに早く到着できたわけか」

「仕組みはわからないのよ？ ラクさまも、よくわからないそうなの。ほら、天恵ってそういうものらしいじゃない。あたしには天恵がないから、はつきりとしたことは言えないのだけれどね」

「おれも魔術は遣えるが、火種くらいしか作れないからな……天恵のことはよくわからない」

シユネイが淹れてくれた少しぬるめのお茶を飲みながら、ふっと息をつく。

「たまにね、思うの。あたしにも天恵があれば、姉さまや兄さまを苦しみから助けられたかしら……って」

「そんなにぼんぼん天恵者に出られたら、おれの食いぶちがない」「ふふ、そうね。だからあたし、可愛くいることにしてるの。あたしは剣も揮えないし、天恵もなくて無力だけど、いつも笑っているように心がけてる。あたしが笑うと、姉さまや兄さまは笑ってくれるから」

シユネイは末子ということもあって、甘えん坊ではあるが、きちんと考えて行動している。闘いにおいて不向きであるシユネイは、その場で邪魔にされたら自決すらしてしまえるだろう。そういう覚悟を持った、メルエイラの少女だ。

「でも、だめなの……あたしが笑っていても、イル姉さまは笑わなくなってしまうたわ……あたしを気遣って無理に笑おうとするの」

あの無表情の中から感情を見つけられるのは、さすがは妹、といふところだろうか。ナイレンはその空気をなんとなく読めるだけで、あの無表情を読み解くことは不可能だ。

「本当はとても弱ってるのよ、姉さま……赤さまが、とても強い力を持っているから、そちらに取られてしまっただって」

「強い力？」

「あたしやユーリ姉さまみたいな身体だったら、問題はないらしいの。イル姉さまは、天恵の代償で身体が小さいから……無理があるのよ」

あの小さく華奢な姿を見れば、確かにそれは、誰もが一見しただけで思うことだろう。ナイレンが未だ信じ切れていないように、新しい命がそこで育まれているとは、到底思えない。

「本当に子ができたのか？」

「嘘だと思っただけ？ 本当のことよ。この前までは、その命も危ぶまれたんだから」

「……聞いてない」

「アイン兄さまは説明を省いたようね」

そのようだ、とため息をついて、シュネイにそのときのことを教えてもらう。さまざま問題があったのだろうなどは予想していたが、それを遥かに超えたものを聞かせられて、正直、相槌も打てずにただ聞くだけになってしまった。

「次代の国主……殿下と同じ力が」

「ええ。イル姉さまの懇願を叶え、そして殿下に悲しみを与えたものよ」

「……大変、だったな」

「そうね。でも、嬉しいの。不幸なんてどこにもないわ」

そうでしょう、と訊かれて、どう答えればいいのか迷った。

ツェイルの願いは叶えられたが、宿した子は大きな力を授かっており、それはサリヴァンが望まぬものだった。そういうことなのだが、ツェイルとサリヴァンは子ができたことをとても喜んでいる。

「難しいな……」

ナイレンはツェイルが戦場に立つ姿を、幾度も見ている。その表情を見ている。女として生きるものか、生きられるものか、という絶望を垣間見ることは幾度もあった。

そんなツェイルが、サリヴァンという伴侶を得て、女として生きている。子を宿せたことがどれだけの幸せであるか、男であるナイレンには到底知り得ないことではあるが、シュネイの言葉を聞けば僅かながらも察することくらいできる。

不幸はいつたいたいなんだろう。

どこにも不幸なんてないというシュネイの言葉は、存外に重いものかもしれない。

「次代の国主……か」

「片翼だ」

「え？」

ぼそりと呟いただけだったのに割り込んできた声が、ナイレンを少し驚かせる。

寝室に運んだばかりのツェイルが、真っ白な顔で、そこへ繋がる扉を開けていた。

「イル姉さま、休んでいなくてはだめよ」

「いやだ」

シュネイが慌ててツェイルに駆け寄ったが、ツェイルはそれを拒絶し、触れようとした手のひらですら払ってしまふ。

さすがのナイレンも、その顔色の悪さは尋常ではないとわかるので、ツェイルを寝台へ戻すべく長椅子を離れた。

「ツェイル、休めと言ったはずだ」

「この子は片翼だ」

「ツェイル……頼む、休んでくれ。殿下を悲しませたいのか」

「わたしにその力がないからっ」

顔を悲しみや寂しさに歪め、ぼろりと涙をこぼして叫んだツェイルに、ナイレンは気圧される。

「イル……」

この少女は、こんなに自分の感情に揺さぶられるほど、豊富な感情を持っていただろうか。いや、持っていたのだ。メルエイラを否定するわけではないが、ツェイルの感情を根こそぎ奪うような生活のせいで、本来は豊富であるさまざまな感情が、サリヴァンと出逢ったことで取り戻すことになったただけだ。

ああ、そうか。

ナイレンはふっと、苦笑した。場違いなナイレンのそれに、シュネイやリリは怪訝そうに、しかしツェイルを心配して蒼褪めていたが、ナイレンは苦笑をさらにただの微笑みに変える。

「連れて行ってやる」

そうして、手を差し伸べる。涙で潤んだ薄紫色の双眸が、色を薄めて、ナイレンを見やる。

「サリヴァンさまのそばにいらして」

縦るように伸びてきた手を、そっと取る。そのままナイレンは膝をつき、騎士の礼を取った。

「御意に」

この少女は、やはり少女だった。そして、愛をよく知るひとりの人間だ。

メルエイラの人たちは見ていて飽きないなあと、まったく関係のないことを思いながら、ナイレンは感情を蘇らせた妹をその夫のもとへと送り届けた。

Plus Extra : 近衛騎士隊追送録。 7 (前書き)

ナイレン視点です。

ナイレンの処罰は、やはり延期されただけだった。しかし場所はメルエイラ家の邸地下ではない。

「こおんな大きな檻、なにに使うのかと思っただら……あなた、確かアインさまの部下の方よねえ？」

まさに美女、という言葉が似合う女性が、大型の獣用に作られた檻に入っているナイレンを見て、心底不思議そうな顔をしている。この檻に入って七日七晩めであるナイレンは、返事をする気力もなく美女を見やり、すぐに興味を失って視線を逸らす。

「アインさまあ？ このお方、とーっても無愛想ねえ？」

ナイレンの無気力を気にすることもなく、美女は仄暗いこの場所にはそぐわない明るい声で、不機嫌なツアインを振り向いた。

「きみには人見知りという言葉がないみたいだね、フィジス」

「あらん。そんなことないわよあ？ わたし、あなたの最愛の妹君にお逢いしたことがありますから、これから逢えるのかと思うと畏縮してしまいますもの」

「……逢うのが楽しみで？」

「ええ、そうですね」

誰もが見惚れる美しい笑みは、人見知りをしているようには思えない。ツアインの婚約者であるフィジスは、誰にでもその愛嬌をふりまき虜にする美女であるが、愛に蕩けた笑みはツアインにしか向けない商家の娘だ。

「フィジス、席を外してくれろ？」

「ええ？ このお方とお楽しみしてしまわれるんですの？」

「殺されたいのかな、フィジス」

「いやんもうかつこいいわあ、アインさま。愛しております」

「明日には帰るから、ちゃんと車を手配しておいてね」

「もちろんですわあ。わたしもご一緒するんですもの」

「来なくてもいいんだけれどね」

「今夜は来てくださりますか？」

「うん死のうね、フィジス」

「ああんかつこいいですわあアインさま。ではわたしはこれで。騎士さま、ご養生くださいませね」

生死のやり取りをしている自覚があるのかなのか、はたまたナイレンのこの状態をどう受け取っているのか不明であるフィジスは、しかし満面の笑みでツアインに口づけするとさっと身を翻し、この仄暗い場所から姿を消した。

「……フィジス嬢とは相変わらずのようだな」

「たまに本気で殺したくなるよ、うん」

「それも相変わらずか……」

「殺さないけれどね。フィジスなら本気で喜ぶから」

「いったいどんな仲なのだ、と言いたくなるが、ふたりは来月にでも婚姻が成立するだろう仲であることは確かだ。」

「それにしても、きみも相変わらずだね、レン。その忍耐力と体力としぶとさには舌を巻くよ」

ナイレンはごろりと転がって、その視線を不服そうな顔をしているツアインに向ける。

「おれは傭兵だぞ。七日程度でくたばると思っっているのか」

ツアインの命令で、牢ではないが檻に入れられて七日七晩めの今日、究極に腹は減っているナイレンだが、至って元気である。これが平気でなければ、そもそもツアインの部下などやっていられないのだ。

「きみは捕縛されるということをよく理解している。そして如何にして脱走するかも、よく心得た騎士だ。仕方ないから明日の朝にはそこから出してあげるし、食事も用意してあげる。帰路にも就かせてあげるよ」

不機嫌そうな顔のままツアインは笑ってもみせたが、この仄暗さではそれも曖昧に見える。さすがに目がいかれてきたかもしれないが、意識はしっかりしているナイレンだ。

「しかしね……きみにはもう一つ、処罰を与えなくてはならないな」
「なんのことだ」

「ツェイルに無理をさせた。おかげでツェイルは今、寝台から離れられない。どう責任を取る？」

十日前のことを瞬間的に思い出し、ナイレンは唇を歪める。

ディアル・アナクラム国の人間が起こした事件は、ナイレンがサ

リヴァンに進言したことがそのまま実現され、ツェイルを襲撃した者はディアル国の王弟が片づけた。どう片づけたのかその詳細をナイレンは聞き及んでいないが、おそらく無事に祖国へ帰ったわけではないだろう。事件を起こした原因ともいえる王弟は今もまだヴアリアスに滞在しているらしいが、王弟がヴアリアスにいることはディアル国やヴェルニカ帝国に報告され、その滞在を公式的なものにして改めて夜会が催されたとのことだ。

とりあえず目先の問題が片づいたので、ナイレンはこうして七日夜七晩の処罰を受けている次第である。

「おれは間違っていないかったと、確信がある。後悔はない。おまえの好きにしろ」

「そうだよねえ、きみならそう言うよねえ」

ツアインは微妙に怒っている。なぜ微妙かといえば、ツアインの報復はある程度達成されているからだ。ツェイルを襲撃した者のひとりには、王弟が片づける前に、ツアインが始末している。ナイレんと会話したあの魔法剣士だという男だ。しかし王弟にはサリヴァンの命令が思いのほか強かったために手を出せなかったので、微妙なのである。八つ当たりする場所を探しているようなものだ。

ついでにいえば、情緒不安定なツェイルを、ナイレんがサリヴァンのところへ連れて行ったことも、気に喰わないらしい。いや、気に喰わなくてどうしようかと苛立っている。

「ねえナイレん、きみにとっての罰は、どんなものかな」

本人にそれを訊くか、と呆れたところだが、あらゆる訓練を幼い頃から受けているナイレんに、肉体的精神的苦痛を与えたところであまり効果が得られないことを、ツアインはわかっている。わか

つていながら七日七晩、食事の一切も与えず暗闇に放置したのは、それが必要な処罰であったから、というだけのことだ。処罰、という名目が、近衛騎士隊に所属していることで必要性が生じただけであり、中身はどんなものでもよかったのだ。

「死ねと命じればいい」

本気でナイレンを罰したいならば、それしか方法はないぞ、とナイレンは肩を竦めた。ツアインはやはり不愉快そうだ。

「死にたいの？」

「べつに」

「生きたいの？」

「世界が面白いなら」

「はああ……きみの価値観はよくわからないな、ナイレン・ディー・デイス」

「おれもおまえの価値観はよくわからないな」

世界が面白いか、面白くないか、その基準で生きているナイレンと、最愛の妹ツェイル以外はすべてがどうでもいいと考えるツアイン。そこにある共通点は、互いに極端だということだろうか。互いに互いの価値観がよくわからないのは、当然かもしれない。

「逆に問うが、おまえは死にたいか？」

「いいや」

「生きたいか？」

「ツェイルが生きているなら」

「おれたちの価値観は違う。そうだろう、ツアイン・メルエイラ」
「……もつともなことだね」

ツアインはふつと、皮肉げな笑みを浮かべ、檻の前にあつた簡素な木椅子にどっかりと座つた。そうしてどこからか大小の酒瓶を取り出すと、小さなほうをナイレンに投げて寄こした。それを空中で受け止めたナイレンは、小さく息をつきながらもありがたく頂戴する。

「中身は果実水だから」

「……ひどいな」

「いくらナイレンでも、吞まず食わずの七日間はきついだらうからね」

罰を与えるのはやめたのか、それともその方法を考えることに飽いたのか。どちらでもいいと思いつながら、果実水だという瓶の中身をゆつくりと仰ぎ、咽喉を潤おす。さすがに七日ぶりの食事は美味しい。

「ナイレンはしぶといよね、昔から」

「おまえのそばにいるからな」

ツアインという狂つた男の部下で在り続けた結果が、ナイレンという人間を構築するのだ。文句があるならツアインに言え、と思うので、責任はツアインにある。

「あのね、ナイレン」

ふと、酒瓶を仰つたツアインが、その顔を小さく灯つた明りに照らしながら、随分と真剣な声を出した。

「僕はフィジスと結婚するけれど、メルエイラ家はトゥーラに譲るつもりでいる」

「……、トゥーラに？」

いきなり飛躍した話題に、一瞬だが呆気に取られる。

「もちろんトゥーラが成人してからの話だよ」

「なんでまたそんなことを考えた」

「僕はツェイルのために在るから」

もつともな答えだ。ツアインの考えていることといったら、ツェイルが産まれたときからツェイルのことだけなのである。

「……フィジス嬢は？」

「わかっているよ。それなのに僕を愛していると口にする女だ」

「報われないな、フィジス嬢は」

可哀想に、こんな男に惚れて。と肩を竦めれば、ツアインも同じように肩を竦めてみせた。

「たまに殺したくなるけれど、嫌いではないよ」

「……それだけが救いだな」

本当にこんな狂った男のどこがいいのだろうと、思う。そんな男の部下である自分も同類だろうが、ツアインの「嫌いではない」という言葉は救いだ。ツェイル以外に感情を動かさない男に、きちんと認識されているのだ。最大級に喜んでいいだろう。

「それにね、トゥーラに譲るのは、それで僕ら一族が滅びるからだ。メルエイラは本当の意味で、故郷を得ることになる」

「つまり？」

「国外に網を張ろうとしたら、メルエイラの生き残りが思いのほか

数を減らしていてね。この瞳の色を持つ者は、死に絶えていた」

それは、と言いかけて、口を嚙む。メルエイラ一族に関わった者として、ナイレンにも感慨深く思うことはあるのだ。

「その色は、もうおまえとツェイルだけか」

「やっと滅びることができる」

「……喜ぶところか？」

「僕らの滅びを望んだのは世界だ。望みを叶えてやるんだから、喜ぶところだろう」

ナイレンは喜べない。ただ人よりも戦闘力に優れていた、いや身体能力が高かった狩人の一族が、偏見を持たれ迫害されて、逃れに逃れて辿り着いた帝国で、けつきよくは死に絶える運命にあるのだ。抗い続けた意味はなんだというのだろう。

彼らの努力を世界は、神は、なぜ否定するのだろう。

なりたくて人殺しの一族になったわけではないというのに、その罪を押しつけるのはおかしくはないかと、ナイレンはたびたび思う。

「メルエイラという一族を助けるために現われた天恵、だと認識していたのだがな。おまえのその天恵は」

「最初はそうだったのかもしれないね。もしかしたら、今こうして僕が殿下に仕えているように、殿下の御許にいるためのものだったのかもしれない」

天恵は天の恵み、神の気紛れによって与えられるものだ。その現われ方は一様でなく、皇族やメルエイラ家がそうであるように血筋に現われる天恵もあるが、一般的に血筋とは関係なく個々に天恵は現われるものだ。

メルエイラが滅ぶのなら、それは神の意向であるかもしれない。

それは否定できないだろう。ツアインやツェイルは、出逢うべくしてサリヴァンに出逢ったのかもしれない。

「殿下にはメルエイラの力が……おまえとツェイルの力が、必要だということか」

「これが宿命宿命だなんて、閣下は気づいていないだろうけれど」

「それは殿下も同じだろう」

「まあ、そうだね。猊下も絡んでいるのだろうなあと思うと、なにも知らない殿下や閣下が不憫に思えてくる。踊らされたメルエイラは滑稽だろうね」

「天に踊らされた？」

「実に滑稽だ。まあ裏を返して言えば、僕らメルエイラはこの国に必要な力だった、というところかな。あまり嬉しくないけれど」

「……国を護る力だろう」

「殿下を護るということはそういうことかもしれないね。でも、嬉しくはないね」

ツアインの口が、不愉快気に歪む。顔は笑っているのに、それは自嘲のようにも思えた。

「ヴァリアスを故郷にすることはできても、真の故郷はもう存在しないんだから」

悲しいのだろうか。寂しいのだろうか。それは哀愁なのだろうか。ツアインの笑みは、その腹を読ませなかった。ただ、嬉しくはない、ということだけが、ツアインの真実ではある。

「宿命を呪うか、アイン」

「メルエイラの運命を知る者なら、呪うかもしれないね。けれど、僕には関係のないことだ。もう滅びるんだから、どうでもいいしね」

「トウーラにそのことは言ったのか」

「いいや。メルエイラは、一族としてなら、僕の代で滅びる。トウーラが知っている必要があるのは、その歴史だけだ。まあ地獄耳なトウーラのことだから、教えなくてもわかるかもしれないね。けれど、それだけだ。メルエイラ一族は世界から消える。これからのメルエイラは、サリエ皇弟殿下に仕えるただの侯爵家だよ」

それは決意であるとか覚悟があるとかではなく、当然というものだった。当たり前というものだった。そうなることが確定されていたから、疑う余地すらないということだ。

寂しくも悲しくもないのか、と問おうかと考えて、やめた。ツァインなら「どうして？」と、心底不思議そうな顔をするだろうから、その意味は通じないのだ。

「まあ、おれはおまえたちを見ていられたら、それでいいからな」
「なにそれ」

「世界が面白ければそれでいい。面白くないなら潰して、面白くするだけだ」

「……はは、きみらしいね」

「おまえも似たようなものだろう」

「まあ、ね。ツェイルがいてくれるから、世界をいとしいと思える」

珍しい言葉を聞いた。ツァインが、ツェイル以外に対して「いとしい」なんてそんな言葉を使うなんて、今までにないことだ。

「この世界がいとしいか」

反芻するようにナイレンが口にすれば、明りに照らされていたその顔に、綻ぶような笑みが浮かぶ。

「いとしいよ」

たったひとりの少女のためにある感情は、少女を緩衝剤にして、ツアインの感情を世界に向けて突き動かしているように思えた。

Plus Extra : 近衛騎士隊追送録。 8 (前書き)

ナイレン視点です。

自分はけして愛されることはないとわかっていながら、それでも恋しい男のそばに在り続ける女がいる。その女は、「嫌われてないからいいのよ」と朗らかに笑ってみせた。寂しくないはずがないのに、彼女はいつだって曇りのない笑みを浮かべていた。

だから、彼女は今も、笑っている。

「ツエーイルう！」

「に、兄さまっ」

「ああ、今日も可愛いね、僕の可愛いツエイル」

愛している男が、最愛の妹に溢れんばかりの愛情を注いでいる姿を、彼女はひたすら笑顔で見守っていた。

そんな彼女、フィジスを、ナイレンはちらりと見やる。

「なんですよ、騎士さま？」

「いや……」

ナイレンの視線にすぐ気づいたフィジスは、しかし笑顔のまま、ツエイルを抱きしめるツアインを眺めていた。

「嫉妬なんてしませんわよ」

「べつに、そういうわけでは……」

「羨ましいですけれど」

「……意味に違いはあるのか？」

「！ あらいやだ……ありませんわね」

うつかり、とフィジスはナイレンを振り向いた。

「わたし、嫉妬しておりましたわ」

その顔で、と思う。どう見てもただ驚いている顔だ。

「わたし、意味のないことはしませんのに……いやねえ、不思議だわあ」

無意識に嫉妬するのは、恋をすれば当たり前のことだと、ナイレンは恋人から聞いたことがある。フィジスのそれも、その類いだろう。

「あなたには悪いが、おれはアインの命令に従う。ツェイルになにかしたら死を覚悟しろ」

とりあえずそう言ってみたが、フィジスに堪えた様子は見られない。むしろ頬を赤く染めてみせた。

「アインさまに殺されるなら……わたし、幸せですわあ」

やっぱり変な女だ、とナイレンは顔を引き攣らせる。

あのツアインに惚れている女はごまんというが、その性格を知っているながらそれを口にできるのは、どこを探してもフィジスだけだろう。

ツアインが「たまに殺したく」なって、けれどもそうしないのは

「フィジスなら本気で喜ぶから」と言っていた理由が、頷けた。

「ですがわたし、まだ死ぬわけにはまいりませんの。それに……」

まだ死ねない、と断言したフィジスの視線が、ツアインに抱きつかれて困っているツェイルに絞られた。

「可愛いわぁ」

なにかするつもりでは、と一瞬でも疑った自分に呆れた。

頬を紅潮させたフィジスは、ツェイルもその射程圏内に入れている。違う意味でツェイルを護らなければならぬようだ。

「わたし、本当はあの子が欲しかったんですの」

「……、はっ？」

なんだと、とナイレンは大袈裟なほど驚く。あの子、というのは、目線がツェイルにあるから、ツェイルに違いない。

「女の子だったなんて……知りませんでしたわぁ」

残念、と肩を竦めたので、ナイレンとしてはホッとする。見てくれば少年なツェイルだ。兄弟が多いせいで、認識を誤ったのだろう。

「溺愛なさっているのは妹君と聞きましたから、あの子ならいいと思いましたが……ああでも、女の子でもいいですわぁ」

「待てっ」

ふらふらとツェイルたちに歩み寄ろうとするので、慌ててツアインはその肩を掴む。

「あんたが好きなのは、アインだろうが」

「ええ。けれど、あの子も好きなのです。アインさまより先に、わたしはあの子に一目ぼれしましたのよ」

ツアインが、フィジスとの婚約をしぶしながらも承諾しているのは、援助云々より、フィジスのこの危険性を考えてのことではないかと、ちらりと思った。

「ツェイルは殿下の奥方だ」

「それが残念ですわあ」

間延びした言葉は、真にその気持ちが込められているようには聞こえない。

「あんた正気か」

いや、ツアインの婚約者という時点で、変人であることは確定しているが、言いたくなるのだから仕方ない。

「そうですわねえ……わたし、ほかの方と感覚が違うらしいというのは、自覚しておりますの。それを正気かどうかと訊かれますと、さあ、としかお答えできませんわねえ」

ああ、やはり変人だ。

もしかすると、ツアイン並みに狂っているかもしれない。

思わずげんなりした。

自分まで感覚が狂い始めているのではと、その迷宮に迷い込みそ
うだ。

「アインさまあ、わたしにもご挨拶させてくださいまし」

と、いつのまにかフィジスに逃げられた。慌てて追いかけるも、その速度に間に合わない。

「フィジスと申しますのお」

と自己紹介しながらツエイルに抱きついたフィジスに、ナイレンはいやな寒さを背に感じた。咄嗟に逃げを打つ身体を押さえつける。

「ああんもう、可愛いですわあ」

「あ、あの、あなた、はっ」

「フィジスですわ、イルさま」

「ふい、ふいじ、す?」

「ええ。アインさまと結婚させていただく罪な女ですわ」

フィジスはその豊満な胸を、ツエイルの顔に押しつけている。ツエイルが窒息しそうだ。

「フィージス?」

「あん、なんですのアインさま」

「死のうねっ」

恐ろしい笑みのツアインが、フィジスの襟首を掴んで、ぽいっと投げ捨てた。しかし、フィジスは強い。

「いやん、やめてくださいまし、アインさま」

なんて上手い受身なのだ、と感嘆したい。ころんと転がって上手

く勢いを往なし、その反動のまま起き上がって再び突進していくのだ。

この変な女ならツアインと生きられる、とナイレンは確信する。

ツアインのあの、怪力にものをいわせて人を投げ飛ばす技は受身が取り難くて、部下たちはしょっちゅう投げ飛ばされては怪我をするのだ。あんなに上手く受身を取り、なおかつ起き上がって再び挑むなんてことは、皇弟近衛騎士隊にはできる者がいない。見習いたいものだ、と思ってしまう。

「なにごとだ」

という声に、ハッとわれに戻る。振り向くと、驚いた様子のサリヴァンが、ラクウィルと帰宅したところだった。

「誰だ、あの娘は」

「フィジス・カルディナ、隊長の婚約者です」

「あれが……上手い受け身だな」

「……同感です」

視線を戻すと、投げられては転がり起き上がる、というフィジスが、未だそれを繰り返している。ツェイルが困ったように、止めようとしている手のひらを宙に漂わせていた。

「おれ、ツアインのあの投げ飛ばし、唐突過ぎて避けられないんですけど」

「おれでも無理です」

「え？　じゃああのお嬢さんだけの技ですか？」

「おそろしく」

「ひゃー……すごいお嬢さんですねえ」

ラクウィルの感嘆もわかる。ツアインに投げ飛ばされたことが数度あるらしいのだ。幸いにも怪我はしたことがないというが、それでも受身は取れないと聞いた。

「あれがツアインの婚約者か……なるほど、あれなら上手くいきそうだな」

眺めながらなにを感じたのか、サリヴァンは顔を引き攣らせつつも頷く。

「ところでナイレン、久しぶりだな？」

「は。長く御許を離れましたこと、お詫び申し上げます」

「いや、いい。だいじょうぶだったか？」

「傭兵上がりですから」

「苦勞をかけてすまない……それと、あるときツエイを連れて来てくれて、ありがとう」

ぼん、と肩を撫でられて、その気遣いに心が癒される。判断を見誤らなくてよかったと、安心した。

「ツエイルはだいじょうぶですか？」

「とりあえず落ち着いてはいる。妊娠による情緒不安定ということだが……おれはツエイに、いろいろな負荷をかけているからな。耐えるとは言えないし、言いたくもない。またこの前みたいになったら、迷わずおれを呼ぶか、連れて来てくれないか」

「しかし……御身に危険が」

「いい。おまえたちの判断を鈍らせたくない」

「……御意」

今回のディアル国王弟のことで、露呈してしまったことがある。

ヴァリアス帝国皇弟の妻が懐妊したという事実だ。隠し続けられるわけがないとは思っていたが、こんな形で露呈されるものではなかったと、ナイレンは悔しく思う。

「妃殿下はわれら騎士隊が、全力でお護りします」

「そう気張るな。ルカも策を講じると言ってくれたし、兄上は行動を慎むと仰せた。だがまあ……ここもそろそろ安全ではなくなるな」

「結界がある限り、邸内に侵入されることはありませんが」

「それでも、確実なものではない。今回のように、邸から一歩でも出れば、危険が溢れている」

「あまり過保護なものも、ツェイルには酷なことかと……」

「そう……なんだよなあ」

はあ、と長く息を吐き出したサリヴァンは、そのままふらふらと前へ歩き出し、ツェイルのもとへ行く。サリヴァンを見つけたツェイルが、その表情はナイレンには読み取れないが、パアッと明るんだのはわかった。駆け寄って抱きつき、抱きしめられる。

和やかな光景だなあと、ナイレンはつくづく思う。

「わりと元気そうでしたですよ、ナイレン」

「ん……ああ、あれくらいでくたばっていたら、アインとはつき合えない」

「でしようね」

くすりと笑ったラクウィルも、相変わらずの笑みを浮かべているが、疲れているような顔つきだった。

「ディアルの王弟はどうなった？」

「まだ滞在中ですよ。そもそもあの王弟サマ、瀕死の状態でヴァリアスに来たので、怪我もまだ癒えてないんですよ」

「怪我？」

それは知らない情報だなど、ナイレンは首を傾げる。

「なにがあつたのかは、サリヴァンしか知りません。ただ、ディア
ルも平和な国というわけではないようですね」

「まあ……あの搜索隊も、おかしかったからな」

「サリヴァンと姫は本当に巻き込まれただけです。平和が続いて
いるからこそ、問題でしょう」

「他国に攻め込まれたら危うい、か」

「同盟がありますし、属国も多いですから、それほど心配はないで
しょうが……サライがシエスタさまに見限られないのは、サリヴァ
ンがいるからだというのにね」

「ヴェルニカ帝国に、その意思があるのか？」

まさか、大国に戦を挑まれるのだろうか。そう案じたナイレンに、
ラクウィルは力なく首を左右に振った。

「サリヴァンがいる限り、ヴェルニカに攻め込まれることはありま
せんよ。それに、ヴェルニカにも猊下と呼ばれるお方がいます。も
しヴェルニカが攻めてくるようなことがあれば、うちの猊下も黙っ
てはいないでしょう」

ふう、と息をついたラクウィルの顔は白い。ナイレンが罰を受け
ていた七日間、皇城では大変な混乱があつたのだろう。大きな揉め
ごとにしないために、それはひどい緊張が続いていたに違いない。

「ああ、サリヴァンが倒れる」

「え？」

視線をサリヴァンに向けると、ツェイルを抱きしめたままだったサリヴァンが、ツェイルごと倒れようとしていた。慌ててナイレンは、ラクウイルとともに駆け寄る。

「サリヴァンを寝室に。姫、姫も一緒に休みましょうね」

床とサリヴァンが仲良くなる前に、ラクウイルがその身体を支えて、軽々と抱き上げる。唐突に意識を手放したサリヴァンに蒼褪めたツェイルも、ナイレンが支えた。

「ツェイル、歩けるか」

「サリヴァン、さまが……っ」

ただでさえ情緒不安定なツェイルに、サリヴァンのそれは追い打ちをかけたようなものだ。

「ナイレン、姫を」

「ああ」

いつかのときのように、ナイレンはツェイルを抱き上げてしまう。サリヴァンを抱えたラクウイルと共に、ふたりを寝室に運んだ。

その場を立ち去る前に、ちらりとツアインの様子を窺えば、複雑そうな顔をしつつも感情を見せないツアインが、なにがどうしたのだと慌てふためくフィジスを押さえつけていた。

Plus Extra : 近衛騎士隊追送録。 9 (前書き)

ナイレン視点です。

ツェイルとサリヴァンを寝室に運び、それまでいた部屋にラクウイルと戻ると、フィジスの姿は消えていた。ツェイルだけが、窓辺に佇んでいる。

「お嬢さんは帰ったんですか？」

「足にただけだからね」

「あしつて……婚約者に対してそれはどうでしょうね」

「フィジスなら喜ぶ」

「……素晴らしいお嬢さんですね」

ラクウイルのため息には、ナイレンも同感する。しかしフィジスが変わった女だという認識はあるので、ツェイルの態度を非難する気はない。

「殿下は？」

ツェイルの問いは、ナイレンではなく、ラクウイルに向けられていた。

「このところ眠っていなかったので、漸くそれがきただけですよ。

明日……いや明後日の朝まで、起きないでしょうね」

「そつ……ツェイルのほうは？」

と、問いがナイレンに向けられる。

「動揺はひどいが、殿下のそばにいればだいじょうぶだろう」

簡潔に答えれば、ツアインはホツとしたように息をつき、視線を窓の向こうに移した。

「思った以上に手強いね」

「簡単だとも思ってたんですか」

「いいや？　ただ、予想以上に動きが早くて、手間取ったからね」

「それはサライのせいですよ。あんな訓練をしたせいで、サリヴァンを多くの貴族に公表することになったんですから」

「そのわりには侍従長、嬉々として参加していたよね」

「サライを信奉する連中を叩きのめしたかったので」

「異形の死神は健在だね」

くす、と笑ったツアインが振り返る。その顔には笑みが張りついていたが、薄紫色の双眸はひどく冷めていた。同じようにラクウイルも、凍えそうなほど冷めた目をしていた。

「悪鬼と謳われた白紫の剣士ほどじゃあないですよ。あの魔法師を、切り刻んだそうですね？」

「弱かったから」

「ディアルでも有数の魔法師だそうですよ」

「へえ……あの程度で」

「ナルゼツタの小娘も……殺したそうですね？」

「誰のこと？」

「姫を攫った貴族の娘ですよ」

「……ああ、あれか。うん、殺した。始末はナイレンに頼んで、報告書には護送中に自殺したことにしたはずだね」

「おれに任せられていたことなんですからけどね？」

「さっさと殺しておけばよかったのに」

「……そう思いますよ」

珍しく、ラクウィルから忌々しげなため息がこぼれる。飄々としている印象が強かったが、サリヴァンやツェイルのことになる、どうやら性格が変わるようだ。本当に、サリヴァンやツェイル以外は「どうでもいい」と考えているのかもしれない。

似ているな、と思った。

ラクウィルとツァインは、似ている。その思考回路が、その凶暴性が、その狂いようが、ひどく似ている。

「まったく……手駒を増やしたいのに、あなたのせいで逃げられま
すよ」

「僕だけの責任かなあ」

「嫌われるのはおれだけで充分です」

「だから殿下は安全のはずだよな？」

「おれの影響力は、術師だけに限られます」

「ああ、だからあの訓練で、その剣さばきを披露したわけか」

「おれは異形の《天地の騎士》ですから」

「はは、確かに。二つの属性天恵に留まらず、三つめの無属性天恵があるとなれば、異形の名にも箔がつく」

なんでもないかのように話すふたりに、ナイレンだけは内心で驚いた。ラクウィルはやはり《天地の騎士》で、天恵術師としては異例の天恵を所有しているのだ。

「ラクウィル」

「はい？」

「あんたの天恵は……おれにはよくわからないが、その……かなり
の代償があるんじゃないのか？」

「ええ、まあ。ただ三つもあると、どこに代償があるのかわからな
いんですけどね」

ラクウィルもツアインと同じように、心に欠陥があるのだろうか。
だからふたりは似ているように感じるのだろうか。

「そもそも天恵が三つなど、例外も例外だから……」

ナイレンには天恵がない。いや、僅かながら火の天恵はあるが、
きちんとした教育も訓練も受けていないので、精霊と契約できるほ
ど力は確立していない。それでも、稀有なほうだと言われる。

一つの天恵を確実に扱えるだけでも重宝されるのに、三つもあれ
ば脅威と認識されるのはわかる気がする。

「今さらなに、ナイレン」

「いや、べつに。気になっただけだ。おれには天恵なんてもの、な
いからな」

「火種は作れるだろ」

「それだけだ」

ナイレンのそれは、煙管を吸うためだけの力だ。それ以外に使い
道はない。

「ナイレンは、火の天恵があるんですか？」

「精霊と契約できるほどではない」

「では、どうやって火種を？」

「ディアルの魔法だ」

こうやって、とナイレンは指先に意識を集中させ、火を点らせる。ラクウィルはそれをまじまじと見ていた。

「ディアルの魔法は便利そうですねえ」

「発動できる者は限られるらしいが」

「ナイレンは発動させていますよね？」

「おれは……」

言っているのだろうか、と迷いつつ、その視線をちらりとツアインに向けて、ツアインは笑って肩を竦めてみせた。

「どうやらおれは、ディアルの生まれらしいんだ」

「え？ ヴェルニカじゃないんですか？」

なぜヴェルニカ帝国、と首を傾げかけて、ああ、と思い出す。

「目が蒼いのは、片親がヴェルニカの生まれだからだ」

ナイレンの瞳は、ヴェルニカ帝国の者に多い蒼色だ。それでよくヴェルニカの生まれなのだろうと思われるが、そうではない。

「ナイレンの出自は面倒だよ、侍従長。ヴェルニカとディアルの両親なのに、育ちはヴァリアスだから」

「三国同盟ですか」

「あはは、そうだね」

ツアインは気にした様子もなく笑うが、これでも昔はこの外見のせいで大変だったのだ。ヴァリアスの特色ではない瞳、かといってヴェルニカの特徴でもない髪、傭兵であったからとくに忌避されは

しなかったが、どこの人間であるかわからないというのは混乱を招く。仕事に支障をきたすことは多かった。どうやらディアルの血が混じっているらしいと知ったのは、その国の魔法が遣えるときだった。

「まあ、両親がそうなんだろうという、憶測でしかないがな」

「憶測？」

「おれは親の顔を知らない。気づいたときには傭兵だった」

「それはまた……まあ、おれも人のことは言えませんが」

そういえば、ラクウィルの出自も謎だ。ナイレンが初めてラクウィルと逢ったのは、ツアインに連れられて騎士隊に入ったときのことである。今からざっと五年ほど前のことだ。

「侍従長って、ヴァリアスの特色っていうより、皇族の特色丸出しだよな」

「らしいですね。サリヴァンに初めて逢ったとき、ちょっと吃驚されました」

「ご落胤だったりして」

「さあ？ 流れ者の両親でしたよ。その両親は世界共通の色でしたね」

貴族ではなかったのか、とナイレンは少し驚く。どうやってサリヴァンと出逢ったのだろう。

「そういうツアインも、瞳はまあ別として、髪は皇族ですよな。姫もですが」

「ご落胤かも」

「姫ならいいですが……ツアインなら最悪ですね」

「なにそれ」

「世界を破滅に導きたいでしょ？」

「……うん、楽しそうだね」

満面笑顔で答えたツアインに、ナイレンはラクウィルと一緒に顔を引き攣らせた。

この男なら笑いながらやりかねない。

きっと、ラクウィルもそう思ったに違いない。

しかし。

「ツェイルがない世界なら、滅んでしまえばいい」

そう言ったツアインに、引き攣っていた顔もその筋肉が緩む。先に苦笑をこぼしたのは、ラクウィルだった。

「そうですね。サリヴァンと姫が笑えない世界なら、滅んでしまえばいいと思いますよ」

ツェイルで世界を回すツアインと、サリヴァンで世界を回すラクウィル、似ているのはここかとナイレンは漸く理解する。ふたりと考えは違うが、面白くない世界なら潰してしまえばいいとナイレンも思っているので、ふっと笑って肩の力を抜いた。

「協力する」

そう言えば、三者三様の笑みがこぼれた。

世界を敵に回すなんて、そんな大それたことなどできるわけがない。ひとりの力で、世界を破滅させることなどできるわけもない。

それでも、そう言いたい気持ちがある。世界に牙を向ける意思が、確かに存在する。

護りたいものを、護るために。

「次は、なにを仕掛けてくるかな」

「火に油を注いでもいいですよ。本当はディアルの王弟サマを強制送還したいところなんです。サリヴァンが許してくれませんし」

「目下の問題はそれなただけけれど……なんで殿下は王弟サマを庇うの？」

「そのうち話すとは言ってましたがねえ」

話題が初期のものに戻り、互いの顔つきが変わる。ナイレンも、余計な話題を振ってしまったことを恥じながら、今後のことに頭を切り替えた。

「瀕死の状態できた、と言っていたが……巡幸が遊学ではないのか？」

「サリヴァンが拾ってきたんですよ」

「……王弟は拾うものなのか？」

「昔から拾い癖があるんですよ。城の私有地の森にいる動物は、サリヴァンが拾ってきたんですから。おれもそのひとりですし」

僕もかな、とツアインがラクウィルの言葉に加わる。おれもだな、とナイレンも思った。

「王弟サマの次はなにを拾うつもりかな」

「……王サマですかね」

「ということは……ディアルとは長いつき合いになりそうだね」

「シエリアンの公子は拾い済みですからね」

「……、それもそうだね」

笑えない。天地関係なく拾ってくるサリヴァンだ。問題すら、巻

き込まれているというよりも、実は拾ってきているのではなからうか。

「まるで、世界からこぼれ落ちたものを、拾っているみたいですよ」

ラクウィルのその呟きに、ツアインもナイレンも、思わず口を噤んだ。

「どんなものでも気にして、駄目ですね……そんなふう育てたつもりはないんですが」

「侍従長があんなふう育てたの？」

「いえ猥下ですが。ん、アルトファルかな……おれはサリヴァンのこと、弟だと思ってますから。ああいや、弟ですね。可愛い弟です」

「お兄ちゃんだねえ、侍従長も」

「あなたほどではないですよ？」

「張り合えるでしょ」

「……まあ、否定はできませんね」

どっちもどっちだ、とナイレンは思う。

「じゃあまあ、火に油を注いでもいいなら、僕はメルエイラの網をもっと広げるよ？」

「その網ってというのは、どんなものなんですか？」

「人間」

「いや、それはわかりますよ」

「メルエイラの生き残りだよ。僕は族長だからね」

「ふむ……どこまで広げられるんですか？」

「ナイレン」

呼ばれて、考える。

「大陸に問題はない、な。海向こうも、属国の近辺ならメルエイラが確立させた傭兵団があるから、問題はないだろう」

「メルエイラの傭兵団……知らない情報ですね」

「ああいや、創始者がメルエイラの者だったというだけで、おれの繋がりがだ。アインに逢うまで、そのことは知らなかった。公にもされていない」

「傭兵繋がりでですか……けっこうな戦力ですね」

「それでもないよ、とツアインが口を挟む。

「知つての通り、メルエイラの直系は僕らだけだ。僕の言葉で動いてくれる者は国内に限られる。レンの言葉で国外の者を動かせるかは、まだわからないよ」

「そのために、網を広げるんですね？」

「情報だけでも必要だろう？」

確かな戦力は、常にサリヴァンのそばに在るツアインやナイレン、そしてラクウイルだけだと考えたほうがいい。それにはラクウイルも納得してくれた。

「国を……民を、敵に回す覚悟がありますか」

「皇城の連中を殲滅するだけじゃ足りないかな？」

「……それだけの戦力があれば充分ですね」

「本当に、戦う力だけ、だけれどね」

剣を、天恵を、本能の赴くまま揮う力だけが、サリヴァンの周りには集結している。あとに必要なのは、人間と人間を結ぶ信用という絆である。

「しばらくツアインには黙っていてもらわないといけないので、網を広げる作業に没頭してください」

「僕は歩く凶器かなにかなの？」

「歩いていなくても凶器でしょう」

「わあ、ひどいなあ……僕はツエイルのことしか頭にないだけなのに」

「たまには婚約者どののことも考えてあげましょうよ」

「考えると殺したくなる」

うんざり、という顔をしたツアインに、ラクウィルが笑う。

「いい婚約者ですねえ」

「あげるよ」

「ネイがいますから」

「あ……よくうちの妹を誑かしてくれたよねえ、侍従長」

「誑かされたのはおれのほうじゃないですかね」

なんだかいやな空気になってきた、と感じるのは気のせいではないだろう。

「侍従長、手合わせしない？」

「ええ、いいですよ」

「庭に出ようか」

「天恵はなしにしましょうね。邸を壊しちゃいますから」

「剣一本で充分だよ」

互いににこにここと微笑みながら露台から庭へ移動するツアインとラクウィルを、ナイレンは半眼で見送る。

「今後のことを考えていたんじゃないのか、あんたら……」

そのぼやきは、誰の耳にも届くことはなかった。

Plus Extra : 近衛騎士隊追送録。10(前書き)

ナイレン視点です。

ヴァルハラ公爵家は、そこに住まう尊きお方を守護すべく、騎士が在住している。邸の外庭を挟んで建立された宿舎が、十名ほどの隊の騎士たちが休む場所だ。

「やっと全員の引越しが終わったところなのに、また移動するの
かよ？」

十名のうち数人が食堂で、ナイレンを囲むようにして昼食を摂っている。とはいえ、ヴァルハラ公爵家には下手に人間は置けないので、美味しい昼食を口にはしているわけではない。隊の中で自炊ができる者が、食事の担当者だ。たまにラクウィルやりりが出張してくられて美味しいものを口にできることもあるが、今日はその日ではなかった。

「まだ決まったわけではない。ただ、ここも安全ではなくなってきた」

「隊長と侍従長の喧嘩はひどかったからなあ」

先日の騒動を思い出し、ただでさえそれほど美味いわけではない食事が、さらに不味くなつた気がした。

「それとは、別問題なんだが……」

「冗談だよ、わかってるって。でもなあ……これ以上のものは、難

しくないか？」

結界も張ってあるんだろ、と別の口が開かれる。

「なあ副隊長、いつそ火に油を注いで肅清しちまったほうが、早くないか？」

「その許可は出ている」

「お、じゃあさっそく動こうじゃないの」

「ただ、殿下はご存知ない」

「あー……だめだな」

「理解が早くて助かる」

この騎士宿舎に集う十名の騎士は、宰相ルカイアの一存で集められた騎士たちであるが、もともとはサリヴァンが皇帝であったときの近衛であったり門番であったり、衛兵であったりした、サリヴァンとの関わりが個人的にあった者たちだ。

サリヴァンが皇弟であったという真実を知った今でも、彼らはこうしてサリヴァンを護るために集っている。

「しかし気に喰わないね」

ふと、ナイレンの横に座る騎士、隊ではもつとも古株のユグド・コール・シュミッドが、誰よりも先に食後のお茶を飲みながら呟いた。

食事をしてきた者、すでに終えた者、ただ休憩している者たちの視線が、一気にユグドに集まる。

「なにが気に喰わないんだ」

ユグドはシュミッド子爵家の末子だが、貴族然とした態度はそう

いう者たちの皮肉や厭味を浴びない限り、見せることはない。もともと寡黙で、非番のときは必ず図書館で読書をしているという、もの静かな男だ。

そんなユグドが「気に喰わない」と言ったのは、己れの現状への不満ではないだろう。この隊で古株だということは、サリヴァンが皇帝として立ったその瞬間から、かの騎士であったということなのだ。ナイレンよりもサリヴァンを知っている男が、現状への不満を今さら述べるわけがない。

そもそも、不満があつたらこうしてこの隊、皇弟近衛騎士隊に所属しているわけもない。

皇弟近衛騎士隊が編成されるとき、宰相ルカイアは全員に同じ質問をしている。

『サリヴァンさまが真上陛下ではなくとも、よろしいですか』

問いに対して、この隊に所属することとなった者たちは一様に、「陛下が陛下であつただけのことです」と答えたらしい。サリヴァンが陛下という場所にいたというだけのことだ、と答えられた者たちが集まつたということになる。

つまるところ、ここにいる皇弟騎士隊の騎士たちは、サリヴァンの気性を気に入るか、或いは好いて、或いは面白半分で、その命を捧げているのである。

いくらユグドが、貴族でなにを考えているかわからなくて、その態度が忠誠を誓った騎士らしくなくとも、サリヴァンの許に集つた者たちとその心は同じなのだ。

「きみたち全員が同じとは限らないが……わたしは殿下をお護りすることに全力をかけるよ。不安すら感じさせないようにね」

ユグドの言葉に、数人が「それはそうだが」と口ごもる。

「なら、必要なことはやるべきだ」

「そうは言うが、殿下は……」

「黙りなさい。殿下は優し過ぎる。わたしたちまでその優しさを持つてしまったら、誰が殿下を護れるというんだい」

ユグドの言葉は重い。ここにいる者たち全員が、サリヴァンを護りたいと心から思っているからこそ、ひたすら重い。

「考えなさい。どうすれば殿下をお護りできるか。わたしたちが殿下にできることは、それだけだよ」

言うだけ言うと、ユグドは席を立った。重い沈黙の中、さっさと食堂を出て行く。

ナイレンは短く息をつくくと、ユグドの背を追って食堂から出た。

「ユグド隊長」

その背にはすぐに追いつけたが、呼びかけにちらりと振り返っただけで、立ち止まることはない。すぐに正面を向き、すたすたと歩いて行く。

「ユグド隊長」

「わたしはもう隊長ではない」

「ああ、失礼。どうもアインよりユグドのほうが隊長っぽいので」

そもそもツアインが隊長となる前まで、ユグドが隊長だったのだ。ツアインの部下でもあるが、ユグドの部下でもあったナイレンとしては、どうも隊長というのはユグドしか考えられない。ほかの騎士

「たちもそう思っているようで、彼らはツアインだけでなくユグドのことも隊長と呼んでいる。呼ばれるたびユグドは「隊長ではない」と返しているが、ツアインもユグドを隊長と呼ぶので、その戒めは隊の連中に効果がなかった。」

「……ツアインはどこに行ったんだ」

「メルエイラの網を張りに、ちよつと遠出を」

「……あれが隊長らしくないから、わたしがそう呼ばれる……少しは腰を落ち着けていられないのか」

「ユグドとアインでは……天地の差が」

無理がある。ツアインはもともと自由奔放だ。隊の規律を守つたためしかない。それでもツアインがユグドからそれなりの信頼を得ているのは、サリヴァンへの絶対的忠誠と、その剣の腕前である。

「ナイレン、われらがなんと呼ばれているか、知っているか」

「皇弟近衛騎士隊が、か？」

「篡奪の狼煙を待つ者、だそうだ」

「それはまた……随分な隊だな」

「否定したところで、それをさらに否定される。殿下の味方は少ない」

ユグドの心配は、顔には出ていないが、声に込められていた。

「まあ、おれもツアインに教えられるまで、殿下がおられたことは知らなかったが……」

「十八年、幽閉されていたと聞いた」

「……閣下から聞いたのか？」

「殿下は口になさらない。わたしが問い詰めた」

「よくわかったな。一見ただけでは、殿下と陛下は双子のようだ」

ぞ
「どこが似ている？」

わざわざ立ち止まって、その疑問を真面目に訊かれた。

「全体的に……よく見れば差異は見つけられるが」

「……似ているとは到底思えない」

不思議だ、という顔のまま歩を再開させたユグドは、そのまま宿舎を出る。

任務の交代時間でもあったので、ナイレンもそれに続いて宿舎を出た。

「似ているから入れ替わりが成立したんだぞ」

「見る目のない連中だね」

ユグドに断言されては身も蓋もない。

緑が多い庭を抜けると、目の前にはもう仕事先の邸があり、ナイレンとユグドは早朝から警護の任務についている騎士のところへ、迷うことなく歩みを進める。広大な土地の中にある邸は、その規模も広大ではあるが、使われている部屋が限られているため、人の気配は常に薄い。しかし人が動く気配はその分、よく把握できた。

警護すべき部屋が見えてくると、扉のまえにひとりだけ待機していた。

「シュバルツ、クラウドは？」

「中だ。てか、おれの名前はシュベルツだ」

「あ、すまん」

ふつうに部下の名前を間違えて、しかし気不味い空気にはならない。シュベルツ・ストライカーという騎士は、自分の名前がよく間違われることを理解している。

「なぜクラウスは中にいる。妃殿下になにかあったのかい」

ユグドが怪訝そうに尋ねると、シュベルツは一瞬だけきよとんとし、「まさか」と笑った。

「遊んでる」

「……遊んでいる？」

「盤上遊戯だよ。落ち込み具合がひでえもんだから、クラウスが遊びませんかって声かけたんだ。気晴らしにどうかまあ程度で提案したんだが、これが真剣な遊びになっちまって。朝からずっと遊んでんだ」

「……真面目に仕事をしろ」

「だって姫さまが落ち込んでるの見たくねえもん」

ユグドの低い声に、しかしシュベルツは気にした様子もなく、けろりとしている。

「それに殿下も、やっと休まれたかと思ったら、また城だろ？ 姫さまひとりぼっちだ。これくらいいいだろ」

さしものユグドも、ツエイルの状況は理解しているので、言葉を控えるように小さく肩を竦めてみせた。

「遊ぶのもいいが、きみたちは交代だ。休憩したら皇城に向かいなれよ」

「それ、代わってくんね？」

「うん？」

「見るよ」

シュベルツは部屋の扉を少しだけ開け、中の様子を見るよう促してきた。促されるままこっそりと中を覗けば、盤上遊戯キューブに真剣なツェイルと、けらけら笑いながら相手をしているクラウス、ツェイルを応援しているリリとその息子の姿があった。

「姫さま、楽しそうだろ」

シュベルツがにっかりと笑ってそう言う。ツェイルのあの無表情が読めるとは、さすが人懐こい騎士だ。

「ほんとは休憩してる奴とか、非番の奴らも呼んでみんなでやりてえんだけど……だめ？」

「警護を怠るな」

「やっぱだめかあ」

ユグドは厳しい。理解は示してくれるが、必要なことはやらなければならぬという頭があるので、融通を利かせてくれないのだ。

だから、ナイレンが口を挟む。

副隊長という権限を使って。

「おれが城に行く。ラクウィルがいるから、おれひとりでもいいだろ」

「え……じゃあ」

シュベルツの顔がパッと明るむ。

「おまえたちの昼食を運ばせるついでに、声はかけてみる」

それでいいだろう、と提案すると、シュベルツは力いっぱい頷いた。ユグドは気難しそうな顔をしたが、やめるとは言わない。

「わたしも城に行こう」

そう言って、さっさと背を向けて来た道を戻ってしまおう。

「ユグド隊長、ありがとうございます！」

「わたしは隊長ではない」

否定しながらも、肩で笑っていた。

「シュベルツ、純粋な遊びにしておけよ。賭けなんてした日には殿下の雷が落ちる」

「それも楽しそうなんだけどなあ」

「やめておけ。けっこう凶暴らしいぞ」

「え、そうなのか？ 見てみたいなあ。ふだんおとなしいから」

怒らせてみたいな、などと言うシュベルツの肩を叩き、とりあえずその場を任せると、ナイレンもユグドと同じように来た道を戻った。

先に外へ出ていたユグドは、門番がいるはずのそこでナイレンを待っていた。

「伝えておいた」

融通は利かないが、理解は示してくれるユグドだ。門番をしてい
たはずの騎士に伝えることで、休憩している者や非番の者をツェイ
ルのところへ集わせる算段を取ったようである。

「ただし、制服着用は義務づけた」

「さすが隊長」

騎士服でなら、帯剣の必要がある。なにか有事の際は、彼らは剣
となり盾となるだろう。

「しかし門番がないのは……危険だな」

「その心配は無用だ」

ユグドが、たんつ、と足の踵で地面を蹴る。

「バルサ、頼んだよ」

によおん、という可愛らしい獣の鳴き声のあと、いつのまにかそ
こに大きな猫が座っていた。一瞬狼かと思間違えたが、きちんと猫
の顔をしている。

「行くぞ、ナイレン」

説明もなく厩のほうへ歩き出してしまったので、慌てて追いかけ
る。

「あの獣は……」

「バルサ。山猫だ」

「山猫……大き過ぎないか？」

「精霊のようだからね」

「精霊つて……ユグドは天恵者なのか」

「いや。バルサは殿下が連れてきた。わたしが世話を頼まれたただだ」

ああ、あの拾い癖、と思わず納得する。

「いつのまに拾ってきたんだ……しかも精霊を」

どうやって見つけてくるのかも不思議だ。

「拾ったというより、バルサが勝手に懐いてついて来たようだ。それに、殿下はバルサが精霊だと気づいておられない」

「気づいてください、殿下。あんなにでかい猫はいません」

「無理だろうな。意外と鈍いお方だ」

確かに意外と鈍いところがある。

あの大きな猫が精霊だと進言すべきか、本気で悩んだ。

そうしているうちに既に到着したので、厩舎番に愛馬を出してもらうと、ナイレンはサリヴァンの許へ行くべくユグドと馬を走らせた。

Plus Extra : 近衛騎士隊追送録。 11 (前書き)

ナイレン視点です。

言ったのに。と思った。

けっこう凶暴らしいから怒らせるなど、言ったのに。

よくもやってくれたなシュベルツ、とナイレンは今までになく呆れた。

見る、サリヴァンが硬直して動かなくなった。もしこれが賭けの戦利品だと知ったら、どうなると思っっているのだ。ユグドだってあまりのことに硬直し、今にも地に裂け目を作りそうだ。ラクウイルだけはサリヴァンの様子に腹を抱えて笑っているが、そのあまり呼吸困難に陥っている。

「つえ……ツエイ……？」

漸く金縛りから解放されたらしいサリヴァンの目に映る、可憐な少女。いや、誰の目にも可憐に映る、愛らしい少女。

「サリヴァンさま……」

「！」

突如としてサリヴァンは動き出す。自らの上着を乱暴に脱ぐと、床の絨毯に座るツェイルに駆け寄り、上着ですべてを覆い隠した。そのままぎゅっと抱きしめて、また動かなくなる。

だろぅなあと、ナイレンは力なく笑った。

期待と喜びに満ちた顔をしていた騎士隊の者たちは、してやったぜ的に全員がにんまりと笑い、互いの苦心を労うかのように肩を寄せ合っている。

楽しいのは今だけだぞ、とナイレンだけは冷静である。

彼らに協力したのであるうりりは避難済みであるから、矛先はきつと彼らだけに向けられるに違いない。

サリヴァンと、ユグド、ふたりの怒りが。

「ツエイで遊んだのは誰だっ！」

と怒鳴ったサリヴァンであるが、それは彼らをますます喜ばせるだけだ。なにせ、頬が赤い。説得力がない。怖さの欠片など微塵もない。

殿下、あなたも遊ばれています。

そう教えたらどうなるだろう。

「姫さま可愛くしただけなのになんで怒鳴るんですかあ」

シユベルツを始めとした騎士たちは大満足のようであるが、サリヴァンは、たとえ頬を紅潮させ嬉しそうでも、嬉しくない事態である。

「おれの妻でなにをしているかつ、おまえらっ！」

「賭けに負けたのは姫さまですもん。着飾らせるくらいいいでしょうが。殿下がこっそり用意してたものですし」

「お、おまつ、おれはべつにっ」

「ゼーんぶ殿下が、こつそり、用意していたものですよー。ドレスも、髪飾りも、首飾りも、指輪も、化粧品も」

「言っなっ!」

「照れ屋さんですねえ、殿下ったら」

真つ赤になつたサリヴァンだが、それは騎士たちの喜びをさらに煽るだけだ。

そろそろサリヴァンも限界だろうか。

そう感じたとき、案の定サリヴァンはゆらりと立ち上がった。一歩、二歩と彼らに歩み寄り、立ち止まり、にっこりと微笑む。

「ぶちのめす」

憶えて欲しくなかつた言葉をサリヴァンが吐いた瞬間、漸く彼らは気づくことができたようだった。

「あ、あれ、殿下?」

「ひとりずつ、ここに並べ?」

「え? だって、え? 殿下、姫さまを着飾らせたくて、用意してたでしょ? おれたちはそれに協力しただけで」

「並べ?」

「だ……、誰だよ殿下がこれなら泣いて喜ぶって言った奴っ!」

気づいたところで遅い。逃げ始めた彼らだが、そこはユグドがサリヴァンに協力して、片っぱしから投げ飛ばしていく。

「ちょ、殿下っ? いったいいつから隊長の技をつ……ぎゃあ!」

「ユグド隊長を味方につけるなんてひきよ……うわああ!」

「ナイレン副隊長なに逃げてんすか！」

巻き込まれないようナイレンは部屋の隅に避難していたが、それを咎められる謂れはない。ナイレンは、やめておけ、ときちんと忠告したのだ。けっこう凶暴らしいから、とも言っておいた。

以前のサリヴァンであれば、誰もがその腕を気軽に考えていただろうが、街に降りてからのサリヴァンは進化を遂げている。いや、進化し続けている。ツアインのあの怪力にものを言わせる技を、その小柄な身体を利用して真似できるのだと、ツェイルに教えられているのだ。

「阿呆め……ツェイルがいるんだぞ、殿下には」

剣の腕でも騎士隊に負けない、メルエイラで育ったツェイルがそばに居るのだ。サリヴァンが進化するのも必然だと考えるべきである。

ナイレンはひよひよいと、投げ飛ばされている彼らを避けながら、取り残されているツェイルを保護した。

「綺麗にしてもらったな、ツェイル。リリどのの力作か？」

「え……あ、うん」

「危ないから、隅にしよう。下手に部屋を出ると、あいつらが逃げるからな」

「でも、サリヴァンさまが……」

「賭けをしたあいつらが悪い」

「それは……でも、サリヴァンさまが」

サリヴァンが心配でならないらしいツェイルだが、ナイレンの目から見ても、ユグドを味方につけたサリヴァンの勝利はもう確定で

ある。

だいたいにして、騎士隊の彼らがサリヴァンに手を上げられるわけがない。逃げ惑って、逃げ切れなくて捕まって、投げ飛ばされる運命にある。

「おれのツエイを勝手に着飾らせるな！」

「殿下が煮え切らないからおれたちがやってあげたんでしょー！」

「ツエイを着飾らせるのはおれの特権だ阿呆共め！」

「そう言いながら贈りものが置きものになるばっかじゃないっすかーっ！」

「おまえらにおれの気持ちがわかるかーっ！」

「お可哀想にいーっ」

「んだとちゃらんぽらん騎士共 っ」

最初は焦って逃げていた彼らだが、そのうち空気の流れが変わり始め、投げ飛ばされつつもけらけら笑い声をあげるようになってきた。サリヴァンはさらに逆上していたが、ユグドの容赦ない投げ飛ばし方によって扉が両開きになり廊下の向こうに見える中庭への窓が割られると、全員をばいばいと中庭へ放り投げ始める。

ふと、部屋の隅で丸くなって震えている物体を、ナイレンは見つける。未だ笑い続けているラクウィルだ。

「おーまーえーもっ」

「ほよっ？」

「いつまで笑っていやがるラクウィル・ダンガードおー！」

「ええええっ、おれ関係ないでしょーっ？」

ラクウィルも中庭に放り投げられた。

「おまえら、全員、飯抜きっ！」

中庭に積み上げられた騎士隊の彼らに向かって、扉のところまで仁王立ちしたサリヴァンが、肩で息をしながら宣言する。とたんに野次が飛んできたが、どれも笑いが含まれた声だ。

「リリの飯が食いたくば反省しろ、阿呆共！」

続けて宣言した瞬間、ばたん、とサリヴァンが前のめりに倒れた。

「サリヴァンさまっ？」

ツエイルが慌てて駆け寄る。ナイレンも一瞬ひやりとしたが、それは騎士隊の彼らもそうだったようだが、ツエイルに支えられて起きたサリヴァンがひたすら呼吸を整えようとしている姿を見て、ホツとした。

どうやらかなり疲れたらしい。

「無茶し過ぎです、殿下」

「お、おまえと、ユート、も、投げ飛ば、してやるっ」

「できますか？」

そんな、呼吸困難になりかけながら、咳までして、とナイレンは苦笑する。

「ふだんから鍛えてればそんなふうにならなかったのにねえ、殿下」

「う、るさいっ、おまえらも、黙れっ」

「体力なさ過ぎっすよー殿下あ」

「うる、さいっ」

「あはははは、いい気分転換じゃないですかあ」

騎士隊の彼らはけらけらと笑う。サリヴァンで遊んでいた彼らは、しかしサリヴァンに遊んでもらいたくて、この遊びを思いついたのだろう。

サリヴァンを怒らせて、極端に疲弊させて、そうして笑い合つために。

そんな彼らを、サリヴァンは呼吸を整えながら、ふと和やかな笑みで見つめた。

「こんなに、疲れたのは、久しぶりだ」

「殿下もまだまだですねえ」

「体力ばか、のおまえら、とは違う」

「おれらそれしか取り得がねえんですもん。だからさあ、殿下、あんまり無理しないでくださいよ」

「え……？」

「姫さまもずっとひとりで、頑張ってるんですよ？」

ハツとした顔つきになったサリヴァンが、綺麗に着飾られたツェイルを、じっと見つめる。

「お忙しいのはわかります。ですが、奥方さまに我慢させるのは、そろそろ控えたほうがよろしいかと思えます」

「ユート……」

口を挟んだのは、なぜかサリヴァンに「ユート」と呼ばれてしまつたユグドだった。

「われら騎士隊がどこまでできるのか、という不安はございますでしょう。しかし、われらとて殿下の騎士。殿下に……サリヴァンさ

まに仕える誉れをいただいた身です。この身命をサリヴァンさまに捧げる自由を、どうかお与えください」

ずっと片膝をついたユグドが、胸に手のひらを置き、頭を下げ、騎士の礼を取る。

「わが剣、わが盾、わが身命をサリヴァンさまに。そしてツェイルさまに」

そう言ったユグドに倣って、ナイレンも騎士の礼を取る。気づけば中庭で山になっていた彼らも、ひとりひとりが騎士の礼を取っていた。

サリヴァンはそれを、言葉もなく、呆然と見渡した。

「なにごと?」

と、素っ頓狂な疑問の声が割って入るまで、騎士隊の彼らはサリヴァンに忠誠を示していた。

「なんつかもの足りないと思ったらツアイン隊長だよー」

「僕がなに? というか、なにこの状況……ユグド隊長まで」

「ツアイン隊長も投げ飛ばされてください」

「僕は投げ飛ばすほうだよ。身を持って知っているだろうに」

きよとん、とした顔で現われたのは、近衛騎士隊の隊長たるツアインだ。帯剣はしているが騎士服は着用しておらず、遠出から帰ったばかりのようだ。

「なにがあつたのか説明し……、あれね、ツェイルう？」

ツァインの目が、サリヴァンではなくツェイルを捉える。とたんにサリヴァンががぼつとツェイル腕の中に入ったが、ツァインの目は光り輝いていた。

「僕のために綺麗になつてくれたのっ？」

「おれのためだ！」

「殿下邪魔」

「んなっ」

「ああ可愛い、可愛いよツェイル。こんなに綺麗になつてくれて、僕は果報者だねっ」

ツェイルの姿はサリヴァンの上着でほとんど隠れてしまっているのだが、さすがはツァインだ。ツェイルのことに關しては目敏い。

「殿下頑張れえ」

「ツァイン隊長にとられちゃわないようにい」

騎士隊の彼らの擲楯が飛び、サリヴァンが応戦して怒鳴り、それらを一切無視してツェイルを褒めちぎるツァイン。

ああ、こついつ毎日であればいいのに。いや、こついつ日がたまにあれば、自分たちは楽に呼吸ができる。

息苦しい毎日なんて、身体に悪いだけだ。

ここはやはり面白いところだと、ナイレンがひとり頷いていたとき、ぽんとユグドに肩を叩かれた。

「きみも食事抜きだから」

「え……」

「わたしもな」

「おれら、関係なくないか？」

「わたしかきみのどちらかが邸に残らなかったから、こんな事態になった」

こうなることは初めから予測していただろうに、と言いかけて、やめた。一食くらい奪われても、それくらいの価値はあったと思う。笑いだけで腹は満ちないが、心は満ちている。

「これで殿下もおれたちを頼ってくればいいが……」

「お優しい方だよ。わたしたちの気持ちなど、とうの昔に理解してくださっている。だが……わたしたちまで優しくなっては、殿下と妃殿下をお護りできない」

「そう……だな」

「産まれてくる御子のためにも、われらは剣となり盾となり、必要ならばこの手を血に染めなければならぬ。それは穢れではなく、誇りだ。非情になれというわけでない、あいつらには言い聞かせる必要があるだろうがね」

「言わなくてもわかると思うが……殿下が、あれだから」

どこから見つけてくるのか、拾いものが多いサリヴァンである。たまには冷酷にあつても罪にはならないだろうにと、そう心配するのはいつも騎士隊の彼らだ。それらに対する理解は大きい。

「なあ、ユグド隊長」

「わたしは隊長ではないが。なんだ」

「なんで殿下に、ユートと呼ばれるんだ？」

「……訊いたことがないな」

変な質問をしてしまったが、ちょうどいいので訊いてみた。しかし、ユグドにもわからないらしい。

「いつのまにかコートと呼ばれるようになっていたからな」

「それはですねえ」

「……っ、侍従長？」

いつのまにか背後に立っていたのはラクウィルで、その顔は楽しそうににんまりとしていた。この男はいつでも楽しそうだ。

ぎゃあぎゃああとサリヴァンや騎士隊の彼ら、ツアインが騒いでいる中、ナイレンとユグドはラクウィルからサリヴァンの小話を聞き、その謎を明らかにして、はははと肩を震わせて笑った。

Plus Extra : 近衛騎士隊追送録。 11 (後書き)

これにて『近衛騎士隊追送録。』は終幕となります。
リクエストありがとうございました。

読んでくださりありがとうございました。

午睡のまどろみにたツエイルは、ふと、高くも低くもない柔らかな音で、目を覚ました。

頬に触れる暖かな風は秋の終わりを感じさせ、柔らかな音がそちらから聞こえてくるものであることを教えてくれる。

寄りかかっていた寝椅子から身体を起こし、風が入り込んでくる露台へ視線を向けた。

「……サリヴァンさま」

夕暮れの太陽を横顔に受けたサリヴァンの口が、柔らかな音を奏でている。

詩だ。

サリヴァンが、口ずさむように小さな声で、詠っている。

あれは初代皇帝の詩ではないだろうか。天と大地、光りと闇、太陽と月を謳った初代皇帝が、国内全土に伝え聞かせた子守唄ではないだろうか。

ぼんやりと、幼い頃のことを思い出した。

父に、母に、兄に、聞かせてもらった子守唄。ツエイルは覚えられなかった。いや、詩は覚えている。けれども、詠えない。詠うと両親は顔を引き攣らせ、兄は絶賛し、姉は耳を塞いでいた気がする。

だから、覚えられなかった。覚えようと思わなかった。

サリヴァンの詠声は優しい。

どこからともなく喜びが込み上げてくる。庭の緑も、その感極まる喜びを表わすかのように、風にたゆたいながらサリヴァンの詠声に合わせて揺れていた。

詠う声が止むと、庭の緑の揺れが消える。

それを見たサリヴァンはくすくすと笑っていた。

「気分がいいから、もう少しだけ贈ろう」

そう言って、天上を祀る詩を、詠い始めた。

再び緑がたゆたう。

ツェイルはじつとサリヴァンを見つめていた。ツェイルが起きたことに気づいていないサリヴァンは、それからしばらく小さな声でいろいろな詩を詠い続け、夕暮れの色が闇を含み始めた頃になって詩を治めた。

「ん……なんだ、起きていたのか、ツェイ」

夜は冷える。窓を閉めながら部屋に戻ってきたサリヴァンと目が合うと、とたんに微笑まれた。

「今日は散々だったな」

ツェイルは午睡のまどろみにいたが、ほんの僅かな時間だ。昼食のあとのことを思い出すと、なんだかとても長い時間をゆったりとした空間にいた気がする。

「楽しかったです」

「そうか？ ただ遊ばれたようなものだと思います？」

「わたしも遊びました」

遊ばれたのだろうなというのはわかっている。けれども、ツェイルも遊んでいたのだ。

それに、遊ばれているとわかっていても、抗えないものがあつた。

「サリヴァンさま」

「ん？」

「ありがとうございます」

「……なにが？」

きよとん、としたサリヴァンに、ツェイルはもう一度「ありがとうございます」と繰り返す。そうして、首にかけられている小さな飾りを手のひらに掬った。

「贈りもの」

「あ……」

そばに寄つて来ていたサリヴァンの足が止まる。目許を少し赤らめつつ、顔を引き攣らせていた。

「いや、それは……なんだ、その……」

なぜ逃げ腰なのかはともかく、ツェイルは首にかけられた小さな飾りをとても気に入っていた。細い金具で留められている飾りは、銀の剣と同じ輝きを放っている。

サリヴァンが、ツェイルのために、自分の目で選んで贈ってくれ

た装飾だ。

なぜか本人からではなく、近衛騎士隊の彼らから受け取ってしまったが、随分と前に用意していたものだと言った。

サリヴァンは身につける装飾を好まない。必要に応じて宝飾を手にすることはあっても、置きものになっている。ときには譲り渡し、国の利益になるなら他国へ売ることもある。騎士隊の彼らからそう聞いたとき、そういえばサリヴァンはいつでも動き易そうな衣装を着ていたなど、唯一着飾っていたと思しき夜会のそれを思い出した。

「そういうのは、あまり好きではないと思うが……似合っと思っただから」

サリヴァンはツェイルの首許を飾る小さなそれを、街を散策していたときに購入していたらしい。ツェイルに贈ろうとしていたのは傍目からでもわかったようなのだが、いつまで経っても贈ろうとせず、そうやってさまざま見つけては購入し増やしていたので、騎士隊の彼らはツェイルに盤上遊戯という遊びを持ちかけ、賭けをさせたとのことだ。

ツェイルは手のひらに掬っていた飾りを首許に戻すと、小さく首を傾げる。

「似合いますか？」

問うと、気まずげにしていたサリヴァンが、はんなりと笑んだ。

「ああ」

とても嬉しそうに笑うから、ツェイルも口許が綻ぶ。ドレスを着せられて化粧をされて、髪を結い上げられて、大変な思いをしたけ

れども、サリヴァンのその表情が得られたことが、なによりも嬉しかった。

「ありがとうございます、サリヴァンさま」

「はは……気に入ってもらえると、嬉しいものだな」

照れくさそうにしたサリヴァンは、着乱れた上着の裾を捌きながらそばに寄ってきて、ふわりとツェイルの前で膝を折った。

「言い遅れたが、あのドレス姿は、とても魅力的だった」

「あ……わ、忘れて、ください」

「そんな勿体ないことができるか。だが……そうだな、できればおれがいるときだけにしてくれ。ほかの奴らに見せたくない」

さらりと、頬から首筋を流すように触れられて、その指先の妖しさにツェイルは身を震わせる。

「ここが開いているものは着て欲しくないな……」

「さ……サリヴァン、さま」

「うん……おれはツェイのことになると心が狭くなるから」

ふつと近づいてきた顔が、ツェイルの首筋に埋もれる。吹きかけられた吐息に、身が竦んだ。

「ツェイ……」

ちゅ、と耳朵を食まれる。身体を引き寄せられて、ぎゅっと抱きしめられた。

「長くひとりにさせて、すまなかった」

「え……?」

「もうひとりにしないから……おれのことも、ひとりにしないでくれ」

くぐもった声は、ツエイルの首を飲みながら、ゆっくりとこぼれ落ちる。グツと身体をさらに引き寄せられたと思ったら、長椅子に押し倒されていた。倒された緩い衝撃に目を瞑っていると、膨らみもない胸にサリヴァンが顔を摺り寄せてくる。

「ツエイ……ツエイ」

ツエイルがサリヴァンにそうするように、サリヴァンもツエイルの心音を聞こうとするかのような仕草だった。

ツエイルはサリヴァンの頭を抱え、微笑んだ。

「だいじょうぶ……だいじょうぶ、サリヴァンさま」

ああ、幸せだなあ。

とツエイルは、サリヴァンの柔らかな髪を梳きながら撫でた。城を出たときよりもさらに白くなったサリヴァンの髪は、今やもう銀色だ。硬質そうなのに柔らかいのは、出逢った頃と変わらない。さらさらとツエイルの指をすり抜けて、きらきら輝く。

「ツエイ……」

胸から顔を上げたサリヴァンは、とろんとした瞳をしていた。頬にかかっている長い前髪を後ろに撫でつけながら梳くと、猫のように目を細める。それにまたツエイルは微笑むと、サリヴァンも小さく微笑んで再びツエイルの胸に顔を埋めた。

その重みは、心地よかった。

「子が、産まれたら……」

「……はい」

「大きな、寝台を買おう。三人で、眠りたい」

「はい」

「子を間に挟んで、三人で……もう一つの魂を、捜そう」

瞬間的に、ツェイルは自分の中で育っている命に、息が詰まった。本来はふたり、けれどもツェイルに力がなくて、ひとりになってしまった小さな命。自分がもっと女らしくあれば、無事に産むことができたかもしれない。その力があれば、片翼と離れ離れにさせずに、護れたかもしれない。

「ツェイ」

サリヴァンの手のひらが、そっと、まだ膨らみのない腹部を撫でた。

「ありがとう」

その声が、とても柔らかくて、とても優しくかったから。

「サリヴァン、さま……」

「幸せだ」

こぼれ落ちた言葉に、心が震えた。護れなかったもう一つの命に募っていた悲しさが、ぬくもりに包まれた。

「ごめ、なさ……っ」

「ツェイ？」

「まもれ、なか……サリヴァンさまの、わたし、の……っ」

込み上げてきた悲しい思いを、両手を使って押さえる。

離れた手のひらを追うように、今度はサリヴァンの手のひらが、ツェイルの頬を撫で、頭を撫でた。

「だいじょうぶだ、ツェイ」

先ほどサリヴァンに贈った言葉が、同じように贈られる。自分も口にした言葉なのに、耳にすると深い安堵に包まれた。

ふと身体を起こしたサリヴァンに、そのまま抱き寄せられながら、腕の中にしまい込まれる。

そつと、静かに、滑らかに、優しく、サリヴァンは詠った。

天と大地、光りと闇、太陽と月の子守唄。

自分でも持て余していた複雑に動く心が、なだらかに、やんわりと、波紋を鎮めていった。

Plus Extra : 近衛騎士隊追送録。追記。(後書き)

* 『近衛騎士隊追送録。』は、『国を継ぐ者。』の4と5の間から
の話になっています。注意書きし忘れていました、すみません。

Plus extra : せいかいはかった。(前書き)

Plus extra 『国を継ぐ者。』からしばらく後の話です。

Plus extra : せかいはかわった。

こんにちは、と声をかけられた。
いいお天気ですね。

雲一つなくて、とても心が温まる日ですね。

「……そうですね」

「こんな日は遠くまで散歩に行きたくなります。ですから、来てしまいました」

にこ、と笑ったそのひとは、人形のようなひとだった。

人形のように綺麗、なのではなく、人形が綺麗に見えるように、そのひとは精練されていた。

「散歩に、来られたのですか」

「はい。ご一緒にいかがですか？」

ふふ、と楽しそうに笑ったそのひとは、ツェイルが驚いているのにそれを無視して、ゆったりと庭先を歩く。

ここはヴァルハラ家の邸内にある外庭だ。ここへ入ってくるにはまず近衛騎士隊の誰かと逢って、その先触れがツェイルに伝えられるから、のほほである。

どこから、どうやって、このひとは邸に入ってきたのだろう。

「……あの」

「今日は暖かいですね」

振り向いたそのひとは、金色の髪をふわりと風になびかせて、微笑む。その碧い瞳には、害になりそうな気配はなんら感じられない。

「さあ、歩きましょうっ?」

手を差しのべられて、その手を取るかどうか迷われた。だが、なぜだろう、意識しないうちにツェイルは手を伸ばし、そのひとと繋いでいた。

少し、ひんやりする。

サリヴァンの手のひらのようだ。

「お腹の子は、順調そうですね」

「え……」

「少しは歩かないと、駄目ですよ。適度な運動は必要ですからね」

「……どうして、知って」

「ふふふ」

なにが楽しいのだろう、と思うほど、そのひとは楽しくてたまらないというような笑顔を浮かべている。

そのときだ。

急に、胸が締めつけられるような感覚がして、ふと立ち止まった。なにかが胸の裡から出てくる。

全身真っ白な、ツェイルの精霊、ヴィーダガルデアだ。

「セス」

「おや……珍しいですね、ヴィーダ・レス」

そのひとは、ヴィーダガルデアを知っているらしい。

ということとは、そのひとは、精霊だ。

「セス……なぜここに」

「そう心配しないでください。可愛い姫さまを拐に来たわけではありませんよ」

「本当か？ 本当にわたしのツェイルを、どこか遠くへ連れて行くうとしていないわけではないのだな？」

「姫さまは、あなたの姫さまでしょうか？ わたしにだって主はいるのですよ」

なにかを心配したヴィーダガルデアは、その精霊の言葉を聞くとほっと胸を撫で下ろし、ツェイルの隣に並んだ。

「わたしも一緒に歩いて、かまわないか？」

それはこのまま表に出てもいいだろうか、そういうことだろうか。表に出てくることも珍しいが、表でこうしてツェイルに話しかけるのも、そばにいたいと言うのも、珍しいことだ。いや、むしろ初めてではないだろうか。

ツェイルは小首を傾げ、しかしこくと頷く。とたんにヴィーダガルデアは嬉しそうに微笑んだ。

「姫さまはこれまでになく、ヴィーダに愛されていますねえ」

「……セス？」

「ああ、はい。セスというのは精霊位のことです。わたし、どうやら光属性精霊の最高位にいるようでして。それでセスと呼ばれますが、きちんと名前があります」

朗らかに笑いながら最高位精霊だと言うそのひとに、もしかしたら、とツェイルは瞠目する。

「サリヴァンさまの……」

「育てたのはわたしのようなものですかね」

やはり、そうだ。

「アルトファル・セスと言います。アルトと呼んでください、姫さま」

「アルト？」

「はい」

にこ、と笑う姿は、どこかサリヴァンの雰囲気似ている。

そういえば、猊下の雰囲気もサリヴァンに似ていた。こうしてアルトファルにも逢うと、彼らふたりにサリヴァンは育てられたのだと、実感できる。

ツエイルはほっと息をつくと、腹部に手を当て、改めてアルトファルを見上げた。

「お腹の子を助けてくれて、ありがとうございます」

「ふふ、わたしはなにもしていませんよ。姫さまが頑張れたから、御子は護られたのです」

「でも、あなたがいなかったら」

「わたしは少しだけ、姫さまの力に語りかけただけです」

にこにことした笑みを絶やさないうアルトファルは、ぼんぼんとツエイルの頭を撫でると、その笑顔のまま視線をヴィーダガルデアに移した。

「姫さまを護りたいなら、姫さまが護ろうとしているものも、護らなければなりませんよ」

「……わかつている」

「それならよいのです。さて姫さま、せっかくのよい御天気です。このアルトと一緒に散歩しましょうか」

手のひらは繋いだままだ。少しひんやりとしていたのは、握っていた間に気にならなくなるほど温かくなっている。

ああ、そうか。

サリヴァンとも、こうして手を繋いで歩く。こうやって、冷えてしまったサリヴァンの心を、温めることができるかもしれない。

ゆっくりと歩き始めて、緑を感じ、風を感じながら、ツェイルは微笑む。

「小さい頃の、サリヴァンさまは、どんな感じでしたか」

「そうですね……おとなしくて、手のかからない子でしたよ。自分のことをわかり過ぎているほどに、ね」

「それは……」

「ですから、たまぁに、やらかすですよ」

「……、やらかす？」

「ラクウィルを連れてきたときには、どうしようかと思いましたね」

あの拾い癖のことだろうか、と首を傾げる。

以前、近衛騎士隊のユグドに、そんな話を聞いたことがある。サリヴァンが拾ってきた、というか懐かれた動物の世話を任された、という話だ。

「……バルサ？」

今もこの邸のどこかで昼寝していると思われる、大きな猫。

「あれは猊下ですよ」

「聖王猊下？」

「猊下がサリヴァンさまに贈られたと言いますか、押しつけたと言いますか……むしろバルサにサリヴァンさまをお護りするよう、命令したと言いますか」

懐かれたのは結果的に、バルサがサリヴァンを気に入ってくれたかららしいが、ことは聖王猊下が発端であつたらしい。

「天恵に敏感なのでしょうねえ」

「敏感、ですか」

「ええ。サリヴァンさまが拾ってくるのは、ほとんどが聖と呼ばれる動物なのですよ。さすがに魔は拾ってきませんが、たまあに精霊は拾ってきます。どこから拾ってくるのでしょうか？」

なるほど、天恵を宿した生きものに、確かに敏感なのかもしれない。

「あれだけ懐かれるのも珍しいですよ。猊下も首を傾げていらつしやいましたから、あれはサリヴァンさまの特性なのでしょうね」

「……サリヴァンさまですから」

「わたしが育ててしまったからでしょうかね」

くす、と笑つたアルトファルは、大木の前で立ち止まると枝を見上げた。つられて見上げたそこには、猫の姿をした精霊、バルサが昼寝をしている。

「お久しぶりですねえ、バルサ」

声をかけられたバルサは、ふだんからそつであるように、ちらりとこちらを見ただけで動きもしない。言葉に応答することもない。

精霊だから人語は解すと聞いているが、ツェイルは未だかつてその声を聞いたことはなかった。

「相も変わらず無口ですこと。そのうち言葉を忘れてしまえますよ」「……忘れることがあるのですか?」「低位精霊ですと、ありますね。まあ、また覚えればよいだけのことです。言葉を持たない精霊もいますからね」

精霊には学習能力がある。低位精霊は学習していくことで高位精霊となれるらしいが、最高位になれるのは最高位に生まれた精霊だけだとアルトファルは教えてくれた。ゆえに、高位に生まれた場合は、その上にいくことはないらしい。

「精霊世界は簡単です。自分をわかっていますから」「そう、ですか」

「グイーダは、生まれたときから高位精霊ですね。双精霊としては最高位でしょう。まず珍しいですし」

双子の精霊は珍しい、という言葉聞いて、グイーダガルデアを見上げる。あまりよく見たことがなかったが、こうしてまじまじと見ると、グイーダガルデアは兄の精霊であるグイーダヒーデと本当にそっくりだ。性格は違うけれども。

「あーっ。なんか変だと思ったら、セスがいる」「あら本当ねえ。セスがいるわぁ」

という声に振り向くと、朱い少女と茶の女性がこちらに向かってきていた。

ラクウィルの精霊、マチカとルーフェだ。

「こんにちは、姫。マチカはマチカっていうの。ラクウィーの精霊。わかる？」

見覚えがあるので頷くと、ツェイルと並ぶ小柄なマチカはにっこりと笑って、さほど勢いもなくツェイルに抱きついてきた。

「あっちは、ルーフェ。ルーフェもラクウィーの精霊で、マチカのお母さんみたいなの」

「……おかあさん？」

「マチカ、ルーフェが大好き。ラクウィーが大好き。だからサリとか、姫とか、姫の妹も好き。あ、バルサ・ラスは嫌い」

話しかけても無視されるから、と猫な精霊は好きではないらしいマチカに、ツェイルはふつと微笑む。誰かが好き、嫌い、とはつきり言うマチカの素直な性格が、なんだか好ましかった。

「ねえセス、姫となにしてるの」

「散歩です。よい御天気ですからね」

「ふーん……じゃあマチカも一緒に散歩する。ルーフェ、いい？」

いいわよ、というルーフェの返事を聞いたマチカが、またにっこりと笑ってツェイルから離れていく。数歩先へと進むと、「姫、行こう」と言われた。

なんだか大所帯な散歩になったと思いつつながら、アルトファルに手を引かれて、散歩を再開する。

マチカは好奇心が旺盛なのか、ぼつりぼつりとはあるものの答えるヴィーダガルデアに質問を集中させ、そこへたまにアルトファルやルーフェの声を混ぜながら、散歩を盛り上げさせた。気づけばバルサやヴィーダヒーデまで散歩に加わっていたので、随分と賑やかな声がツェイルの周りを飛び交っていた。その賑やかさは心地よ

く、そしてどこか懐かしく、ツェイルを安心させる。ヴァルハラ家の広くもない外庭を一周しても、精霊たちの賑やかさは薄れなかった。

「殿下、姫が……」

ふと立ち止まったユグドが言葉を切らせたので、サリヴァンもつられるように立ち止まって、その光景を見た。

「……なんだあれ」

思わず目が丸くなる。

このところは調子が回復してきたらしい妻、ツェイルが、たくさんの精霊たちの中で埋もれるように囲まれて歩いていた。おまけにツェイルの手を取って歩いている筆頭はアルトファルだ。いつのまに外へ出てきたのか。

「殿下の周りには精霊がよく集まりますが、姫の周りであれだけたくさんの精霊を見るのは初めてです」

「……だいぶ揃ったな」

あれだけ揃っているのは、初めて見たかもしれない。どの精霊も見知っているのだが、揃っているところは見る機会がないのだ。

そこにツエイルが混じっている、というのは、なんだか不思議である。

「ツエイまで精霊に見えてくる……」

あの華奢な肩とか、見上げてくる薄紫色の瞳とか、と記憶を辿ると、人間よりも精霊の側にいるような存在に思えてくる。たださえ感情の起伏が少ないツエイルだ。笑ったり泣いたり、このところはよく見られるようになってきたとはいえ、それでも以前より少し増えたというくらいのことである。言葉数はそれほど増えていない。もしかしたら、ツエイルは精霊なのだろうか。そんな考えが脳裏を掠め、サリヴァンは苦笑する。

「だとしても、おれの精霊だな……」

手放すことのできない、いとしくてたまらない、大切な自分だけの精霊。

生きるときも死ぬときも、共に在り続ける存在。

ああなんて、いとしいだろう。

どうしてこんなに、いとしいだろう。

「殿下、姫を呼ばれたほうがよさそうです」

「ん？」

ユグドを振り向くと、邸で護衛任務についていたらしい騎士が報告に来ていた。

「外庭をすでに二周しているとか」

「二周？ そんなに歩いているのか？」

「止めようにも、あのとおり精霊たちが困っているので、声をかけ

られなかったそうです」

再び、視線をツェイルに戻す。慣れていない者たちには、声もかけられない光景かもしれない。

「光りの精霊がいるので心配は無用でしょうが、見ている側は気が気ではないでしょう。姫は数日前まで寝込んでおられましたので」

体調が回復しつつあるとはいえ、ツェイルはまだ床上げできるほど回復したわけではない。少しの散歩なら勧めるが、広くはないとはいえ外庭を二周したのなら、それは歩き過ぎだとサリヴァンも思う。

慌ててツェイルを呼んだ。

「ツェイ！ ツェイ、おいで！」

サリヴァンの声は外庭に響き、ツェイルに気づかせる。振り向いたツェイルは、サリヴァンを見てやんわりと笑んだ。

その笑みに、どきっとする。

消えてしまいそうだとか。

いなくなってしまうそうだとか。

なにかに連れ去られてしまいそうだとか。

そういうことがとても怖く感じてしまうほどのいとさが、胸を締めつける。

だから咄嗟に駆け出して、歩み寄って来ていたツェイルを驚かせた。

「サリヴァンさま……!?」

ぎゅっと胸に抱きしめて、くぐもったツェイルの声を耳にして、

ほっと息をつく。

「大事ないか？」

「……はい、今日は」

「そうか……だが、無茶はしてくれな。すごく、怖い」

怖い、とサリヴァンはツエイルの頭に顔を埋める。

そうだ、サリヴァンは怖い。ツエイルが自分以外の誰かに笑いかけるのも、自分以外の誰かのそばにいるのも、いろいろなものが怖い。それは嫉妬や羨望も混じった恐怖だ。

人を愛するということは、実はこんなにも苦しいものだったなんて、ツエイルと出逢うまで知らなかった。

「まったく……姫さまを拐に来たわけではありませんのに、どうしてそういう反応しかないのでしょうかねえ」

「……アルトファル」

「なにもしませんよ。あなたと姫さまの御子の様子を、見に来ただけですからね」

苦笑をこぼしたアルトファルを目の前に、サリヴァンはどういふ顔をしたものかと少し困る。どういう顔でツエイルを呼び、そうして抱きしめているのかもわからないのだ。ただ、情けない顔をしているのだろうということは、アルトファルの様子からわかる。

「……だいじょうぶですよ、サリヴァンさま」

と、アルトファルは言う。

「もう、なにもできないあなたではないのですから」

怖いのは、あの頃はなにもできなかったから。
ただ生かされているだけだったから。
人をこんなに愛する日がくるとは、思っていなかったから。

「ツエイが、いないと……怖い」

この腕に、確かなぬくもりが感じられるからこそ、恐怖は湧きあがる。

ならばいつそ、手放せばいい。

恐怖は去る。

それでも、そうすることもできない。

「サリヴァンさま」

「……ツエイ、おれは」

「わたしも怖い」

胸元から聞こえるその言葉に、サリヴァンはハッと、視線を下げた。すり寄ってくるツエイの手のひらが、震えながらサリヴァンの胸元を掴んでいた。見上げてくる瞳は、サリヴァンと同じように、怯えていた。

「ツエイ……」

ああ、そうか。

唐突に、サリヴァンは理解する。

ああそうか。

ツエイも、同じなのだ。

同じように、恐怖を感じているのだ。

人を愛することの難しさ、苦しさ、切なさを。

「いなくならないで」

伸びてきた手のひらが、サリヴァンの頬を包む。微かに震えた手のひらはふわりと、サリヴァンの心まで温めるように包みこんだ。

「わたしはここにいます。だから、サリヴァンさまもここにいて……ツエイ」

「いなくならないで。わたしをひとりにしないで」

ずっと、一緒にいると言った。

ずっと、一緒にいると言ってくれた。

だから、心もずっと一緒にいさせて。

手のひらから伝わってくるツェイルの心に、サリヴァンは涙が出そうになった。

人を想うということは、人に想われるということは、こんなにも身体を満たすものなのだ。

「わかっている……一緒にだ。ずっと……ずっと、一緒にだ」

ツェイルの手のひらに擦り寄って微笑めば、嬉しそうに、幸せそうに、ツェイルも微笑んだ。

「はい、サリヴァンさま」

いつまで一緒にいられるかわからない。そんなことを考えていた自分を、サリヴァンは叱咤する。

いつまでも一緒にいるのだ。なにがあっても、どんなことがあつ

ても、サリヴァンはこの手のひらを護り続ける。絶対に、離しはしない。諦めやしない。護り続けるのだ。

もうだいじょうぶだ。そうほっと息をついたとき、頬に添えられていたツエイルの手のひらがずりりと落ちた。次いで、かくん、とツエイルの身体が弛緩する。

「ツエイっ？」

慌てて抱きしめる腕に力を込めて、倒れそうになったツエイルを支える。

「殿下、姫！」

ユグドの驚いた声を後ろに聞きながら、サリヴァンは意識を失ったツエイルの顔を覗き込む。少しだけ顔色が悪い。

「アルトファル！」

サリヴァンと同じようにツエイルを覗き込んだアルトファルに、いったいどうしたのだと問う。

「……疲れたのでしょうかね」

「そ……それだけか？」

「ええ」

だいじょうぶですよ、と癒しを司る精霊の言葉に、サリヴァンは安堵する。それほど広くはない外庭でも、今のツエイルが歩くには少し体力が必要だ。二周も歩いたのなら、疲れて当然だろう。

「少し無茶をさせてしまいましたね。すみません、サリヴァンさま。あなたの御子が見られると思うと、嬉しくて」

「ごめんなさい、とアルトファルは苦笑する。

「猯下も心待ちにしておられるのです。顔には億尾も出しませんかね」

「……楽しみにしていてくれるのか？」

「当たり前ですよ。あのお方は、あなたのお養父上ですからね」

いつも無表情で、なにを考えているのかわからなくて、けれどもどんなときでも味方であってくれた養父は、ツェイルの胎で育つ子が危険な状態になったとき、助けてくれた。人間に干渉することはできないと言いながら、その力を、サリヴァンに与えてくれた。それがただの優しさではないと、アルトファルは言っているようなものだ。

「元気な子を、猯下に見せてあげてください」

「……ああ」

想われないことが当たり前だと思っていた頃、振り返れば猯下とアルトファルがいた。ちゃんと想われていた。それなのに、そのことに気づけたのは、ツェイルと出逢ってからだ。ツェイルと出逢えていなかったら、その想いを踏み躪ることになっていただろう。そうならなくてよかったと、サリヴァンは心底思う。

「子が産まれたら、猯下に、一番に逢いに行こう……な、ツェイル」

ツェイルがいてくれただけで、こんなにも、サリヴァンの世界は変わった。そのことを、猯下に話そう。いろいろな想いを、猯下に

伝えよう。

サリヴァンはふと笑みを浮かべると、
瞼を閉じたツェイルの頬を、
そっと優しく撫でた。

Plus Extra : 世界の始まりを見た。(前書き)

ツアイン視点、昔の話です。

Plus Extra : 世界の始まりを見た。

世界の始まりを見た。

白と黒、二色しかなかった世界が、鮮やかに彩られる瞬間を見た。

『……父上、この子』

『ツェイルだ。おまえの妹だよ』

世界に彩りを与えてくれたのは、小さな命。

空の青。

森の緑。

山の赤。

大地の茶。

川辺の銀。

麦の金。

太陽の橙。

闇の紺。

多くの色に驚いた。

その美しさに魅入られた。

世界はこんなにも美しかったのか。

『父上……』

『うん？』

『世界が……綺麗だ』

美しさのなんたるかなど、語る必要はない。ただ、目の前の鮮やかさに、捕らわれた。

『ツアイン、おまえ……』

『知らなかった……こんなに、綺麗だったなんて』

身体が震えた。

心が震えた。

その美しさに、慄いた。

これが世界なのだと、それを教えてくれた小さな命に、胸が熱くなった。

『……ツエイル』

小さな命に感動を覚えた。

これがきみの世界。

これがきみの生きる世界。

これが、さまざまなものに彩られた、きみの世界。

腕に、小さな命を抱く。

白くて、柔らかかで、暖かい、そのふっくらとした頬に、はたはたと雫が落ちた。

『ツエイル……ツエイル』

胸が苦しい。

目頭が熱い。

身体が悲鳴を上げている。

身に溢れるこの感覚が、叫びたいほど苦しくてたまらないのに、満たされていく感覚に支配された。

かくん、と足の力が抜ける。

『ああ……ツイイル』

天を仰ぐ。

空を漂う雲の白さに、それまで自分が見てきたものすべてを疑った。

『きみの世界は、なんて、綺麗なんだろう……っ』

これがきみの生きる世界なのか。

これが、きみが生きていく世界なのか。

この鮮やかで美しい世界が、きみのいる世界なのか。

『こんな、綺麗な世界……僕は知らない』

これが、きみが見せてくれる世界。

きみが見ている世界。

色鮮やかで、艶やかで、眩しい世界。

だからもっと。

もっと。

『僕は知らない。なにも、知らない、から……っ』

もっと。

『きみの、世界に……僕を……っ』

もっど。

『僕を……っ』

きみの世界に染めて。

きみの世界に、僕は染まりたい。

『ツェイル…… ツェイル…… ツェイル……っ』

きみが僕の、世界の始まり。

世界へのいとしさを、感じた始まり。

Plus Extra : 系譜に名もなき皇族。(前書き)

ユグド(近衛騎士隊のひとり)視点です。

騎士団に入隊した辺りから、追送録の終わり辺りまで、断片的な話になっています。

ユグド・コール・シュミッドが騎士になるために家を出たのは、十三歳のときだ。

子爵家の末子という微妙な貴族階級の者が騎士を目指すのは、これといって珍しいことではない。皇城に点在する騎士は、大抵がユグドと同じような立場の者たちだ。

ただ、ユグドは少し変わっていた。いや、変わっていたわけではないのかもしれない。

ユグドは剣を握ることよりも、書物を読むことのほうが好きで、強制されてもいないのに机に向かって勉強していることのほうが好きだった。騎士になったのは、立場が微妙だったことと、騎士になれば国が管理する城の蔵書が読み放題かもしれないという、下心からだった。

幸いなことにユグドは、べつに剣が握れないわけではなかった。兄弟姉妹の中では一番扱いが上手かったが、それが従騎士になるときに役に立ち、さらに騎士となる時間をも短縮させてくれたのである。

ユグドが騎士と呼ばれるようになったのは十七歳、ヴァリアス帝国で成人する年齢のときだ。その剣技と、もの静かさを買われて、聖騎士とも呼ばれる近衛騎士隊に所属することになり、皇族を身近で守護する騎士になった。

ただ、その頃は皇族に、不幸が続いていた。いや、もう二十年以上、皇族は不幸に見舞われていた。

たくさんの側妃がいたのにも関わらず、後継者が正妃の子ひとり

ただだったこと、皇帝には妹しかおらず、皇妹の子もまたひとりだけ、皇族の血が流れているのは先帝の従兄弟であったダヴィレイド大卿とヴァルハラ公爵のみ、大卿と公爵には子息もない。

つまり、皇族である者、皇族であった者が、極端に少なかった。

先帝の時代には華やかであった皇城が、寂れていたのである。

誰を護ればいいのか。

ユグドがそう思うのも無理はない。聖騎士とは名ばかりだ、という日々のおかげでユグドは念願の皇城図書館に入り浸ることができたが、つまりはそれくらい仕事が少なかったということ、武器を自己生産できる技術がある大国のおかげでわりと平和な国は、大規模な戦争すら起きなかった。少数の反乱や革命らしき動き、豊かな国ゆえの盗賊増加傾向は、ユグドが所属する隊を動かすまでもなかったのだ。

こんな国が、大国として名を馳せ、頂点に君臨していただいじょうぶだろうか、ユグドはよく思った。しかし、思ったくらいにして、とくになにもしなかった。

ユグドの目的は、皇城に眠る蔵書を読み尽くすこと、である。読み尽くすまで死ねない。その時間を邪魔されたくない。その時間さえ与えてくれるなら、それでいい。

誰を護ればいいのか、この国はだいじょうぶだろうか、と思いついたところで、ただの騎士であるユグドにできることは限られている。それなら、できることをやるしかないのだ。

だからユグドは、その日、たったひとりの後継者である皇太子が病に倒れたとき、大きくため息をついた。城の蔵書はまだ半分も読んでいないのに、国が終わると思ったからだ。国政などユグドには関係ない。揉めようが争われようが、それは弊害でしかなかった。

皇太子が病に倒れたことは一部の者にしか知らされなかったが、その一部に自分が入っていても、ユグドは万事気にせず自分の思惟に忠実だった。

そのユグドの姿が、宰相補佐の文官の目にどう映っていたのか。

「ユグド・コール・シュミッド第二近衛小隊副隊長」

図書館からの帰り道、ユグドは聞き覚えのない声に呼び止められた。振り返ると、赤味の強い金髪の貴族が、両手を袖の長い官服の中に隠し、感情を読ませない表情でユグドを見つめていた。

すぐに上位貴族であろうことは把握できたので、非番であったが騎士には変わりないユグドは、廊下の隅に寄って頭を下げた。

「わたしになにかご用でしょうか」

「……こんなに騒いでいるというのに、随分とあなたは落ち着いておられるんですね」

「厭味か、と思ったが、落ち着いているのは確かなので、否定のしようがない。手には図書館から借りた蔵書も持っていた。

「ついて来なさい」

有無を言わせぬ命令だった。明らかに自分より歳下であろう文官は、しかし上位貴族という権力を振りかざしているようには思えなく、ユグドは首を傾げながらとりあえず彼について行った。

「わたしは、ルカイア・ラッセと申します。ルカイアと呼んでください、シュミッド副隊長」

最初は無言で歩いていた彼は、突如として名乗り、しかし本来なら家名で呼ぶ必要があるところを、名で呼べと言ってきた。

「わたしのこともユグドでかまいませんが」

「そうですか。では、そう呼ばせていただきます、ユグド」

なんだか自分と同じような匂いのする上位貴族だ、と思いながら、その背中が再び沈黙し、ひたすら歩く。どこまで行くのかと思うほどに、ただ歩く。

行き先が中央の棟だと気づいたときには、自分が騎士隊の制服を着ていてよかったと思ったほど、場違いな雰囲気顔に顔をしかめた。

「どこに行くのか、と訊かないのですね」

「答える気がないご様子なのに、訊いても意味はないでしょう」

「……素晴らしい態度です」

貶されているのだろうか、と思ったが、ちらりとユグドを眇めたルカイアの瞳は、なにも語らなかつた。

ルカイアは、中央の棟のさらに奥へと進み、これ以上はなにもない行き止まりとなった壁の前で、漸く立ち止まった。

「見聞きしたものを公言しないと、誓えますか」

「命令であれば」

「では、命令します。ここから先、見聞きしたものは公言しないでください」

意味はわからなかつたが、「御意」と答えた。言うなというだけのことなら簡単なのだ。親しい友人も、話し相手もないユグドにとって、人生に必要なのは書物だけである。

ユグドの態度に満足したらしいルカイアは、壁に手をついた。その瞬間、ただの石壁であったそこに木製の扉が出現し、ルカイアの力によって開かれる。仕組みが気になって睽目した。

「魔術ですよ」

と、ユグドの疑問をルカイアは答えてくれた。

「魔法ではなく？」

「魔術です。魔法と魔術は異なるものだと思っています」

なるほど、と頷く。

古来、魔術は魔法と同一化されるが、本来は別ものであると書物に読んだ。魔法は個人が持つ陣が錬成できれば発動するが、魔術は個人が持つ陣を錬成できなくとも、生み出された多様の陣によって発動する。どちらも魔力を必要とすることから同一化されるが、仕組みはまったくの別ものだ。魔術を扱う者が少なくなった今では、魔法と混同されてしまうのも無理はない。

珍しいものを見ることができた、と思いながら、扉を抜けたルカイアの背に続く。そこはまたも石畳の廊下で、しかしすぐ手前に部屋の間があった。ルカイアはそこで立ち止まり、扉を叩く。

「ルカイアです。連れてきました」

それだけ言うと、中から扉が開かれる。促されて中に入って、思わずそこにいた面子に驚いた。

「あ、ユグド副隊長だ」

そう口を開いたのは、自分の部下。つまり第二近衛騎士小隊のひとり、今年騎士になったばかりの青年だ。

「へえ、この人があの変てこな副隊長さんですか」

怪我をしているらしい頬に貼り薬をつけ、片腕を布で吊った天恵術師団の制服を着た青年は、ユグドに覚えはない。いや、皇族特有であるはずの淡い金髪の天恵術師の噂なら知っているが、異形であるらしいのでこの青年であるはずがない。

「まあそんなところに突っ立っていないで、こちらにおいでなさい」

ふたつを向かいにして、長椅子に腰かけている壮年の貴族にも、見覚えはやはりない。

しかし。

「久しぶりだのう、ユグド。相変わらず図書館通いか」

「さすがのわしも半分を読むのがせいっぱいだというのに、読み尽くしそうだな、ユグドは」

図書館仲間の老年と壮年の上位貴族は、このところ逢わなかったふたりだ。

老年の上位貴族は、アルヴィス・レイル・ヴァルハラ、ヴァルハラ公爵であり、壮年の上位貴族はエインズレイ・アイル・ダヴィレイド、ダヴィレイド大卿である。ふたりは数少ない皇族であった方々だ。

なんとというか、どういう関係で集まった人たちなのかと、疑問になる面子である。

「ダヴィレイド大卿とヴァルハラ公はわかりますね。あれはあなたの部下であるツァイン・メルエイラですし」

「ああ、はい」

あれ、という扱いをされた己れの部下、ツアインだが、軽く肩を竦めたくらいにして、露台の窓辺に移動した。

「右手に座られているのは、モルティエ・メルエイラ伯爵。ツアインのお父上です」

見知らぬ壮年の貴族は、なるほど、ツアインと同じ髪色をしていた。顔はあまり似ていないが、そうだと教えられると納得できる雰囲気を持っている。

そういえばメルエイラ伯というと、皇帝の反感を買ってほぼ蟄居の状態ではなかっただろうか。成り上がり貴族としても有名であるが、先帝の時代には『皇の剣』と呼ばれていたはずだ。そもそもメルエイラ伯とは、先帝の時代に貴族となり、その所以は尋常でない戦闘力にあつたようである。ツアインは言うほど強いわけではないのだが、なにか隠しているのだろうか。

「その術師は、ラクウィル・ダンガード。名前だけなら知っているでしょう」

怪我だらけの天恵術師は、やはり異形と噂されている人物だった。噂とは当てにならないものだ。自分より幾ばくか若そうな彼は、にこりとただ普通に笑んでいる。異形だと噂される要素が見当たらない。

その場にいる全員の紹介を終えると、ルカイアは部屋の中央に移動し、手前にあつた椅子に腰かける。ユグドも、空いている椅子に座るよう促されたが、ここにいるほとんどが自分より身分が上の者たちだ。不敬をするわけにはいかないので、ラクウィルという天恵術師の隣に立つて並んだ。

さて、この面子が集まっているのは、なんのためだろう。そこに呼ばれたユグドは、いったいなにをさせられるのか。

「この動乱の中、漸く好機を見つけることができたことに感謝しよう」

口火を開いたのは、ヴァルハラ公だった。

「アイデアが死んで数十年、皇族の天恵が狂って久しい……だが、ヴァリアス帝国は終わらぬ」

ユグドよ、とヴァルハラ公に呼ばれ、顔を向ける。

「おまえの忠誠はどこにある」

「……直答をお許しください」

「許す」

「わが国にあるものと」

「なるほど、無難な答えだ。ではおまえのその忠誠を試させてもらおう」

試すほどのものでもないと思うが、とユグドは首を傾げる。

ヴァルハラ公とは、図書館でよく顔を合わせ、ときには会話も交わすことさえあったのだ。そこでユグドの姿勢を見ていれば、試す必要などない。

「陛下が病に倒れられた。そしてサライ殿下も」

それは聞き及んでいることだ。しかしユグドが動くところではない。いや、動けない。病を剣で斬ることなどできないのだ。

「陛下は長くないだろう。体力的な問題もあれば、あのお方には天恵もない只人だ。天は陛下を救わぬ」

それはつまり、ヴァルハラ公は皇帝を見限った、ということだろうか。ただひとりの皇太子を、その玉座に据えるということだろうか。

「陛下がお隠れ遊ばれたとき、真の国主をお迎えする所存である。

ユグドよ、おまえはそのお方をお護りせよ」

「……わたし、ですか？」

「おまえ以外に誰ができる？」

巧みな言葉だ、と思った。そう言われては、自分を卑下する言葉しか返せない。ヴァルハラ公が求める返事は、そんなものではないだろう。

もうここから試されている、かもしれない。

「……わたしにできることなのであれば、全力を尽くします」

持っていた書物を抱え直し、手のひらを胸に当てて頭を下げる。

ユグドにできるのはこれくらいだ。上からの命令に背けるはずもない。やれと言われたらやるしかないのだと、ユグドは知っている。

「このことは他言無用。そのときがくるまで、おまえは平素と変わらぬ生活を保て、ユグド」

「御意」

「話はそれだけだ。わたしは本日をもって表から去る。あとのことはエインズレイカルカイアに訊くがいい」

緩慢な動作で椅子から離れたヴァルハラ公は、まるでその老体に鞭打つかのようにゆっくりと歩き出し、しかし途中で立ち止まるとメルエイラ伯を呼んだ。

「モルテイエ、そこまで送ってくれぬか」

「ええ、喜んで」

指名を受けたメルエイラ伯はにこりと微笑み、ヴァルハラ公の歩を補助しながらふたりで部屋を出て行った。

僅かな時間、沈黙が続く。

「言いたいことは、アルヴィスがすべて言うてくれたな。わしからはなにもないわ。なんぞ訊いておくことはあるか、シュミッドの小僧」

沈黙を破ったダヴィレイド大卿の言葉に、ユグドはしばし考える。やれと言われたことはやるしかないが、気になることはままあった。

「わたしが護るべきお方は、どなたですか？」

「ほう……アルヴィスの言葉をきちんと理解しておるようだな。サライ殿下だとは思わなかったか」

「公爵は、真の国主、と。御名を明かされてはいません」

「なるほどな……」

ふふん、と愉快気に笑ったダヴィレイド大卿は、なにかを思索するように視線を窓の向こうに移し、一雨きそうな灰色の空を見つめる。

「逢えばわかるうよ」

「……逢えば？」

「己れの眼を信じるがいい」

それはどういう意味だ、と訊きたかったが、ちらりとこちらを睥めたダヴィレイド大卿の目は、面白がっているというよりも試しているようだった。

「どうやら試され続けるらしい。」

「なんだかともんでもないことになっている、と気づいたときには、既に遅かった。」

* * *

「ユート？」

声をかけられて、ユグドはハッとわれに返る。

ユグドという名なのに「ユート」と呼ばれても反応できるようになった自分に、なんだか笑えた。

「どうした？」

「いえ、なんでもありません」

「……やっぱり、我儘だったな。すまない、無理をさせた」

「いいえ。さすがに驚きましたが、ひとりで出かけられるという無謀をなさらなかったことには感謝しています。そう簡単に謝らないでください」

月明かりだけでは足許も覚束ない闇の中で、ユグドは護れと命令された青年とふたり、帰路についていた。

「今頃ラクは慌てているかもしれないな……まさかユートに頼むとは思わなかっただろうし」

「わたしは頭が固いらしいですからね」

「はは、だから融通が利かない。だが、おれはそこを突いた」

天真爛漫に笑ってみせる青年がなに者か、ユグドは知らない。ただ、皇族特有の色を持つこの青年が、自分が護るべきお方だというのは確信している。

ダヴィレイド大卿に「己れの眼を信じるがいい」と言われたが、信じた結果が目の前の青年である。

「どうしても逢いたかったんだ……公には、家名をいただいたから」

ユグドに、この青年を護れと命令してきたヴァルハラ公は、ユグドが青年に出逢ってまもなく病に倒れ、そして今日、危篤だと知らせを受けて駆けつけた青年に看取られて、亡くなった。

ヴァルハラ公は泣いていた。この青年に、自分たちが今までしてきたことを悔いて、泣いていた。青年はただ優しく微笑み、その手を握り、「ありがとう」と呟いていたが、ヴァルハラ公の涙は止まらなかった。それでも、それは救いになったのだろう。安らかな寝顔で、ヴァルハラ公はその生に幕を閉じた。

「こんな夜更けに、本当にすまなかった。ラクに言ったら、たぶん連れて行ってくれなかっただろうから、助かったよ」

「御身のことを考えてくだされば、わたしのしたことは愚行にほかなりません」

この青年は近い内に、その玉座に導かれる。皇帝崩御の報が流された瞬間にユグドの前に現われた、記録にない皇族の青年が、段階をすべて無視して、皇帝となる。

未だ病床から離れられない皇太子の身代わりとして、仮初めの皇帝となることを、青年は嬉しくもなさそうに了承した。

ただ、「死にたかったのに……」と小さく呟いていたことを、ユグドは知っている。

「ユートも厳しいなあ……サライ殿下がいるんだから、おれの身なんか心配しないでいいのに」

「あなたも殿下です。いえ、陛下とられます。御身を大事にしていただかなければ」

「ユート」

振り向いた青年が、困ったように笑っている。

その顔は皇太子と同じだと、誰かが言っていた。影武者と言うにはあまりにも皇太子に似ていると、言っていた。その立ち姿には先帝の、いや、賢帝であった先々帝の面影すらある。それゆえに、その血筋が確かなものであることを、青年は口を開かずに証明していた。皇族であるはずがない、と言うには憚れる要素が、青年には多く存在しているのだ。

「ユート、国を想うなら、おれのことには大事にするな。おまえたちが護るべきは国なんだ。おれじゃない」

「……殿下は国の象徴となられるお方です」

「だから、おれのことには護らなくていい。おまえたちは、おれが間違った方向へ行かないよう監視し、サライ殿下にお返しするそのときまで、おれを導かなくてはならないんだ」

「それはもつともなことではありませんが……」
「ユート、国を護ってくれ」

透明感の強い碧い瞳が、月の光りを吸収し、柔らかな色でユグドを見つめる。

「おまえのやり方で、国を、護ってくれ」

まるで、己れの死を願っているような、言い方だった。いざというときは殺せと、命じられているようだった。

「殿下……」

この青年は本当に、国を想っている。いや、想わなければならないと、押しつけられている。

青年はどうやってこれまで生きてきたのだろう。どういった環境の中にいたのだろう。

系譜に存在しない皇族の青年に、ユグドは強く興味を惹かれた。

* * *

漸く皇城に眠る蔵書の半分近くを読み治めることができたとき、皇族の系譜に新しい名が加えられた。

サリエ・ヴァラディン・ヴァリアス。

ユグドが仕えるあるじ、皇弟の御名である。

突如として現われた皇弟に、臣民はもちろん動揺した。あることないこと噂立てる者もいた。根も葉もない脚色をつけて出生を語る者もいた。

しかし、民にとって皇族とは縁遠い存在であり、混乱はまもなく鎮静化した。代わりに、噂を信じ込んだ貴族らが、水面下でその動きを見せようとしていた。

「そう、そこで足を滑らせて入り込む。膝を曲げて……ほら、すん

「おお……っ」

「力なんか要らないでしょ？」

「これは面白いな、ツアイン！」

「殿下の場合、剣が握れないだけのことでしょうが。それならそれ以外の方法を用いればいいだけのことだよ」

部下だったツアインが上司になり、ユグドが隊の三席という位置に定着したこの頃、先の名残りが未だ「ユグド隊長」と呼ばれ、相変わらず「ユート」と呼ぶ人のそばにいる日々が続いている。

「ユート、漸くおまえを投げ飛ばせそうだよ！」

「遠慮します」

「さあかかってこいつ」

戦う方法を憶えたばかりの皇弟殿下は、先日近衛騎士隊の彼らに遊ばれて以降、城への出仕を控え邸にすることが多くなった。その分、宰相であるルカイアが日中に訪れる回数が増え、邸で仕事をしていることが多くなったわけでもあるが、その傍らには必ず伴侶のツイイルを置き、ふたりでいるときをよく見かける。

仕事の合間にはこうして、ツアインと体術の稽古をしていた。

「殿下、殿下にユグド隊長はまだ早いよ」

「一回投げ飛ばせれば気が済む」

「できる実力を備えてから言おうね」

「う……ラクなら簡単なのに」

「あ……侍従長はねえ」

「なんだ？」

「隙があるんだかないんだか……さすがに僕も平素では投げ飛ばせないからねえ」

「ラクはおまえのそれが読めないらしいが？」

「読まれないときにしかできないからだよ」

「……なるほど」

「さて、じゃあ次行く？ それとも終わりにする？」

休憩を挟んでもう一度、と答えたとき、露台のほうから「お茶にしませんかあ」というラクウィルの声が響いた。

「ん、ちょうどいいな。ツアイン、ユート、お茶にしよう。シユベルツ、もう少しつき合ってもらおうぞ。ナイレンは……どこに行った？」

「もうあっちにいるよ」

「……意外とちゃっかりした奴だな」

「レンは本来自由気儘な猫だから」

「猫……猫といえば、ユート」

お茶に誘われたのでそちらに移動しようとした矢先、くるりと振り返った殿下に呼ばれた。

「あの猫、精霊らしいな？」

どの猫だ、と一瞬だけ考え、そういえば殿下が拾ってきた精霊を世話していたなと思い出した。

「……ナイレンに聞きましたか」

「あんなにでかい猫はいません、と言われた」

「いませんね」

「……、どつりで人語を解すわけだ」

「その時点で気づいて欲しいところです」

「ラクが猫だと言ったんだ」

「まあ……見た感じは猫ですからね」

噂の猫、いや見た感じ猫な精霊は、今日ものんびり邸内の木の上で昼寝をしている。世話を任されているとはいえ、ユグドがすることとはとくにない。せいぜいその巨体に櫛を通して毛並みを揃えてやるくらいだ。

「ふん、精霊……な。養父上の仕業か……いや、まさかな。だが……」

ぶつぶつと言いながら、殿下は露台に向かう。その後ろ姿を、ユグドは見送った。

「本当に気づいていなかったのか……」

「侮るなかれ皇弟殿下、実はとんでもなく鈍感なんだよ、ユグド隊長」

「……そのようだ」

不思議なもので、始まりは命令であったのに、気づくとユグドは

国のために、そして国のために在ろうとする殿下のために、自らその思考を巡らせるようになっていた。あのときはただ命令であったから、やれと言われたからやるしかないと思っていたのに、随分と変わったものだと思う。

ふっと、笑いが込み上げた。

「このところのユグド隊長は、よく笑うね」
「わたしは隊長ではない。が……そうだな。自分で書物を書き記すのも悪くないと思っている。そのせいかね」

皇族の系譜になかった青年は、今もまだ、ユグドの興味を惹く存在である。

「そういえばいつも読んでばかりだね。どうして今まで書こうと思わなかったの？」

「残す必要がない物語ばかりだったからだよ」

「ふうん？　じゃあ今は、あるんだね？」

ユグドは目を細め、太陽の光を反射してきらきらと輝く銀を、眩しく思いながら見つめた。

Plus Extra : 系譜に名もなき皇族。(後書き)

小話の提案(リクエスト?)ありがとうございます。

楽しんでいただけたら幸いです。

Plus Extra : 宰相感懐録。 1 (前書き)

ルカイア視点です。

最終話『泣いて、笑って。』の冒頭辺りの時間軸から始まります。

この娘はわたしをなんだと思っているのだろう、とたまに本気で思うことがある。

結婚していると教えたとき、まるで他人ごとのように吃驚していたが、まさか妊娠していると発覚したときまでそんなふうに吃驚されるとは思わなかった。

「えっ？ わたし、ルカさまとの子を妊娠しているんですかっ？」

なぜそんなに驚く、というほど大声で吃驚してくれたわが妻に、宰相ルカイアはため息をついた。

「そんなに驚くことですか？ やることはやったのですから、当然でしょう。避妊なんてこと、わたしはしませんからね」

「してくださいよ、避妊！」

「なんのために？」

「う……そ、それは、その……」

わが妻リンリイは、そう呼ばれるのをいたくいやがるので、ルカイアを始め誰もが「リリ」と呼ぶ。正式に名乗るときですら「リリ・ラッセです」と答えるため、正式名が「リンリイ」だと知らない者のほうが多いだろう。

そのリリだが、とても家出が好きな娘である。妻に迎えるため攫いに行ったときも、この娘は家出をしてくれていた。おかげで捜す

のに数時間を費やし、やっと見つけたかと思っただら放っておけと逃げられそうになった。どうにか上手く言い包めて連れ帰ることはできたが、それからの日々は大変だった。目を離すと家出しようとするのだ。この行動力には正直、ルカイアも参った。あれこれと興味を示しそうなものを提示することで惹きつけ、成人を迎えるその日まで粘って、婚姻届を提出できた自分を褒めたいくらいである。いや、むしろ褒める。

ルカイアの努力をまったく知らないこの娘に腹を立てたこともあるが、腹を立てた先から家出をしてくれるので、上手くその精神的負担を発散できたように思う。

「また、家出をする気だったのですか……ツェイルさまを置いて？」

「一緒です！」

「サリヴァンさまの怒りを一身に浴びてきなさい」

「う」

そんなにこの家にいるのは不快なのか、と訊いたことがある。リリはきよとんとして、首を左右に振った。「ひとりで生きて行くと決めているのです」と、剣の腕を鍛えたりリリは答えた。その言葉がどれだけルカイアを悲しませるか、きつとりリリはずっと知らないままだろう。ルカイアも、それを口にするつもりはない。

だから思うのだ。

この娘はわたしをなんだと思っっているのだろう、と。

「身籠らせるのはそれほど効果がない、と……」

家出できまい、と計算してやったことではあるが、この調子ではもしかしたら意味がないかもしれない。身籠っているのに家出してくれそうだ。

ルカイアはじつと、自分の愛を欠片も信じてくれないわが妻を見つめる。

次はどうしてくれようか、と本気で考えるあたり、自分も相当疲れているなと思う。

「ツェイルさまにとりあえずお願いするしかありませんね……」

「はい？」

「以前わたしが言ったことを憶えていますか？」

「……もしものときは、ツェイルさまを連れて国外へ逃げるように、ですか？」

「けっこう。あなたにはツェイルさまのそばにいる責任があります。意味はわかりますね」

「わたしがルカさまの……妻だから」

言いたくなさそうなのはこの際無視だ。頬が少し赤いので許そう。

「あなたには引き続き、侍女でいてもらいます。当面はわが邸にお招きすることですし、問題はないでしょう」

「そう、ですね……はい」

「離れて暮らすことになるでしょうが、まあ仕方ありません」

「え……ルカさまはどこに」

「城ですよ。サライ陛下をお迎えすると決まった今、いろいろと準備が必要なのです。お迎えしたあと、しばらくは忙しいでしょうね。ですから、あなたにかまっている暇がありません」

少しは反省しろ、という意味を込めて言い捨てれば、さすがのりも顔色を悪くする。意地悪をするわけではないが、自分がいない間というものを考えて欲しくて、ルカイアは言葉を改めなかった。

「新しい侍女の教育も引き続き、行ってください。いずれあなたひとりでは賄えなくなりますからね」

「はい……」

「侍従も数人、あとからラクウイルに頼みます。そちらはラクウイルに任せていいでしょう。あなたはツェイルさまのそばを離れないように。わかりましたね」

「……はい」

これで少しは懲りてくれるといいが、とため息をついてから、ルカイアは仕事に戻るべく部屋を出た。廊下に控えていた補佐の文官にリリを邸へ帰らせるよう頼むと、頭を仕事に切り変える。

廊下を中央の棟、皇帝の執務室がある場所へ進み、最上階にある執務室への階段を登り終えたところで、サライに出くわした。

「ルカ！」

にぱつと朗らかに笑うその姿は、やはりサリヴァンに似ている。いや、サリヴァンがサライに似ている、と言うべきなのだろうか。

「サリエがな、笑ってくれたんだ。兄上は面白いですねって、笑ったんだ」

サライは、自分以外の兄弟がいないと思いつ込んでいたせいか、五年前に出逢ったサリヴァンを、いたく気に入っている。適当にあしらわれても、冷たくされても、なにをされても楽しくてたまらないようで、乳兄弟として育つたルカイアにそれらを逐一報告してくる。

ただ、兄弟仲がいいことはとても喜ばしいことだが、一方的なようにも思えなくはない。サリヴァンのほうはサライを、兄というよりも殿下、或いは陛下としてしか見るできないようなのだ。

嫌っているわけではないようなので、これからを期待することはできるだろうが、もしかしたら可能性的に平行線を辿るかもしれない。

「それはようございました、陛下」

「わたしの前ではあまり笑ってくれないから……すごく、嬉しいな」

「それは陛下がツェイルさまを強引に城から連れ出したせいかと」

「う……まあ、それは、だな……どうにかして、サリエを城に留めねばならんし」

一方的な好意はときとしてサライを暴走させる。先日、サリヴァンの伴侶を誘拐したことは、その延長線上だった。

「わたしは離れたくななどない……サリエは、そうでもないようだが」

「陛下、無知は罪です。陛下がサリヴァンさまの……サリエ殿下のことを知らずにいたことは、逃れられない罪となりましょう。ですが、これからがあるのです」

「サリエはわたしを許してくれるだろうか」

「もう許してくださいではありませんか」

「わたしは……わたしは本当に、サリエが可愛いんだ。弟なんだ。それを、わかってもらえるのか？」

もちろん、とルカイアは微笑む。たとえサリヴァンの騎士がサライを許さなくとも、サリヴァンはサライを許している。いや、そういう問題ではないと理解している。

サライが怯えるほど、臆病になるほど、サリヴァンは優しい。

「陛下、どうかお心を強くお持ちになつてください。陛下がそのような様子では、サリエ殿下をお護りすることはできませんよ」

「わかっている。わかっているが……おまえの前で自分を繕いたくはない」

「ありがとうございます、陛下」

「なあルカ、わたしはサリエのためになにをしてやれる。この愚かな兄を、どうすれば信じてくれるようになる」

「そうですね……まずは、皇帝としてのお姿を、確立すべきかと存じます。サリエ殿下ができたことを、陛下もできねばおかしい。むしろそれ以上のものを、やらなければならぬでしょう」

クツと眉間に皺を寄せたサライは、唸るように拳を握ると、ルカリアを睨んでくる。

「やらねばならぬことを、わたしが放棄すると思うか」

たまに阿呆っぽいところがあるサライだが、やはり皇族だ。その印を右腕に刻まれた青年だ。透明感の強い碧い瞳には、皇帝としての強い意志が宿っている。ただサリエのことになるかどうかという点も弱くなるだけで、嫌われたくない一心でつい暴走してしまう。

もしサリエという存在がなければ、むしろサライはどうしようもなく冷酷な皇帝となっていたかもしれない。

「その心意気、どうかお忘れになりませんよう、謹んでお願い申し上げます」

官服の長い袖口に両手をしまい、胸の前で組み、ルカリアは頭を下げる。

皇族とは不思議なもので、自然と礼が出るものだ。その魅力は心地よく、未来を期待させられる。先帝にはまったく感じられなかったが、もしかするとこれは刻印の力なのかもしれない。刻印に、その天恵に選ばれたからこそ、皇帝なのかもしれない。

だとすると、やはりサリエも皇帝なのだと、ルカリアはつくづく思う。サライだけでなく、サリエも、やはりこの国には必

要なのだ。

やはりわたしの選択は間違っていなかった。判断を誤っていなかった。

そう安堵して、ルカイアは口に笑みを浮かべた。

Plus Extra : 宰相感懐録。 1 (後書き)

リクエストありがとうございます。

嫉妬、というには方向がずれているかもしれませんが、楽しんでいただければ幸いです。

Plus Extra : 宰相感懐録。2 (前書き)

ルカイア視点です。

失敗した、とルカイアが己れの判断に誤りを見つけたのは、サリヴァンが城を飛び出し、しかしサグザイル公爵の策によって邸に招くことができ、少し経ったときのことである。

サリヴァンが去った城は、すぐさまサライが入ったことで然したる混乱は起きなかったのだが、それでも混乱が起きなかったというわけではないので、ルカイアはリリに言っていたように邸へ帰る暇がなく、忙しさを極めていた。

漸く区切りがついたところで、リリが懐妊したことを報告していなかったことを思い出し、まずはサライに報告して祝いの言葉をもたらしたあと、時間を見てサリヴァンのところへ、わが家へ向かった。

「出かけられているのですか」

「はい。数時間ほど前のことになりますから、そろそろお帰りになると思います」

ルカイアを出迎えた侍従は、サリヴァンがもともラクウィルと一緒にそばに置いていた者で、歳嵩があるため夫婦でサリヴァンに仕えてもらっていた。城では侍従だったが、ここでは家宰として、サリヴァンを支えてくれている。

「待ちましようかね……時間には余裕がありますし」

「ではこちらへ。先日、侍従長が美味しい茶葉を手に入れてくださ

ったので、それをお飲みになりながらゆっくりお待ちください。アイゼン夫妻を呼びましょう」

「ああ、そうですね。報告したいこともあるので、お願いします」

わが家なので遠慮することはないのだが、城からほとんど出たことがないサリヴァンのために一時的な措置として招かせてもらっているので、それまでこの邸を護ってくれていた老夫妻は、ルカイアの実家である本邸に戻っている。実の両親よりも長くそばにいられた老夫妻にはいろいろと面倒をかせせてしまっているのも、もちろんりりとのことでも世話をかけていた。

呼んでくれるなら幸いと、老夫妻のことを頼んで客間に通らせてもらい、見慣れた景色にホッと息をついたところでお茶が運ばれてくる。

「馬を走らせましたので、じきにおいでくださると思います」

「ありがとうございます」

「礼は不要です。宰相閣下には、わたしも妻も面倒をおかけしております。これくらいのことです、そう簡単に頭を下げないでください」「サリヴァンさまについてくれる侍従が、あなたただだったのですよ。こちらこそ感謝しています」

「はは、わたしはサリヴァンさまをわが子のように思っていますから。おそばを離れるなど、考えられないだけですよ」

家宰は人がいい。にこにここと穏やかに微笑み、自分の心に素直な表情が出る。

だからサリヴァンも、ルカイアが彼ら夫妻ここへを連れてきたとき、なにも言わなかった。きつと安堵したのだろう。自分がいなくなることで、それまでとても身近にあった者たちにはひどい衝撃を与えることになるだろうと、サリヴァンは覚悟していた。再会に泣いて感激したこの家宰は、サリヴァンにとってラクウィルの次に身

近な侍従だったこともあり、サリヴァンのその覚悟を少しでも救ったに違いない。

「これからもサリヴァンさまをお願いします」

「はい。喜んで、お受けいたします」

穏やかに笑んで頭を下げた家宰は、お茶を卓に並べると部屋を出て行った。

老夫妻が来るまで家宰とは積もる話をしたかったが、なにぶんこの邸にはもともと人がおらず、さらに言えばサリヴァンも周りに人を置きたがらないゆえに、使用人という枠に入るのはあの家宰夫婦とその娘、信頼している通いの料理人数名、そしてリリとラクウイルだけだ。どうやらサリヴァンの外出にはツェイルとリリも一緒のようなので、終わらせてしまいたいことが多くあるのだろう。あの家宰も忙しそうだと感じると、やはり早々にリリやラクウイルには教育をしてもらわなければならなさそうだ。

「人選を急がねばなりませんね……」

使用人のことも然り、護りが薄いこの邸には騎士隊を置くべきだとルカイアは考えている。大まかな人選は終えているが、確立にはもう少し時間がかかりそうだ。それまではラクウイルひとりに頑張ってもらおうしかない。

いろいろと対策を考えつつお茶を飲んでみると、老夫妻が到着した。

「若さまっ」

扉が開くなり飛び込んできたのは、老夫妻の妻のほうだ。夫のほうはゆつたりのんびりと、「やあ若さま」と入ってくる。

「お久しゅうございます、若さま。お元気そうでなによりですわ」「タキも元気そうですね。本邸で無理をさせられていないか、心配でしたよ」

「旦那さまはよくしてくださっていますよ。なにせ年寄りですから、あいたたた、と言うだけで楽ができますの」

「それはいいですね。その調子です」

「ところで若さま、リリはどこです？ わたしはリリにも逢えるものだと思っておりますが」

「どうやら出かけているようで……そのうち帰ってきますよ」

「若さま、あまりリリを虐めないでやってくださいましね。あの子は思い込みが激しくて、頑固なんですから、機嫌を損ねたら大変なんですよ。また家出されてしまいます」

痛いことを言ってくれるが、こんなことを言ってくれるのは老夫夫タキだけである。

「おそらく家出はもうしないかと……賭けをしているようなものですが」

「賭け？ 賭博がお嫌いなくせに、賭けですか？」

「ええまあ……子を、宿らせましたから」

「まあっ！」

タキが、ぱあつと顔を明らめる。両手をぎゅっと握られて、「おめでとっございます」と興奮気味に揺すられた。

「本当でございますね？ リリは懐妊したのですね？」

「ええ。凡そ半年になります。気づいたのが最近でしたので、報告

が遅れてしまいました」

「いいえ、いいえ若さま。タキは嬉しゅうございます。漸く想いが成就したのでございますねっ」

目に涙を浮かべて喜んでくれるタキに、ルカイアもふつと微笑む。

「成就したわけではありませんが」

「……、は？」

「あの娘は相も変わらずわたしの愛を欠片も信じないのですよ」

ふふふ、と黒く笑うと、タキの泣き顔に憐れみが含まれてくる。

「挫けないでくださいましね、若さま」

「ええ、もちろん」

挫けるならとうの昔に挫けていただろう。今があるのは、リリが少なからず自分を好いていると確証があるからだ。ただ、リリのほうはルカイアに愛されているという自覚がない。いや、自覚しようとしてない。

「あの頑固さには敵いませんが、わたしのほうもかなりの頑固者ですから、手放しはしませんよ」

「若さま、タキは若さまの御子をたくさん見とございます」

「ええ、家出する暇など与えませんが」

「それならよろしゅうございます」

「ただ……」

「ただ？」

「身籠ってなお家出されようものなら、どついたらいいでしょうね？」

ふふふふふ、とさらに黒く笑えば、タキは悲しそうにふうつと息をついた。

「足枷をつけて寝台に縫いつけるしかありませんわね」

「それは名案です」

手段がそれしかなくなったら、そうするしかあるまい。

本気でそう思ったところで、ルカイアとタキの会話をのほほんと見守っていたタキの夫、キリアンが突然大笑いした。

「若さまは相変わらずですなあ」

「笑うところですか、キリアン」

「いやいや、ほれ、サリヴァンさまが呆けておられますから」

と、キリアンは扉を指差す。顔を引き攣らせた家宰と、吃驚、と顔に書いているサリヴァンがいた。

「おや……これは失礼いたしました、サリヴァンさま」

とくに慌てることなく礼をし、頭を下げたところで、サリヴァンがハツとわれに返ってくれる。

「今、物騒な話が……気のせいかな？」

「なんのことです？」

「い、いや、気のせいだ。気のせいにしておく」

ぶんぶんと首を左右に振ったサリヴァンは、家宰を下がらせて部屋に入ってくる。

「アイゼン夫妻、再会を邪魔して申し訳ない。邸を借りているとい

うだけでも申し訳ないのに」

「ああ、気にしないでくださいまし、サリヴァンさま。わたしも夫もルカイアさまに仕える身、ひいてはサリヴァンさまに仕える身にございます。この老体を気遣ってくださるだけで充分ですわ」

「そう言ってもらえるとありがたい。用事を済ませたらすぐにルカを返そう。少しだけいいか？」

「ええ、もちろんですわ」

別室に、と促されたが、べつに今日は仕事を持ってきたわけではないので、ルカイアは「このままでけっこうです」と答えた。

「報告に上がっただけです、お時間を少々いただければ、と思います」

「報告？」

「はい。このたびわが妻リンリイが懐妊しましたので、その報告を」
言ったとたん、サリヴァンの目がまん丸になる。それはもう先ほどの驚きを通り越して、声もなく吃驚している。しばらく沈黙が続いたほどだ。

「それほど驚くことですか？」

思わず問うたとき、なぜかサリヴァンはビクツと震えて一歩後退した。

「お……おまえに子ができるとは思わなかった」

「わたしもひとりの男で、夫なのですが」

仕事一辺倒ではあるが、そうできるのもリリの存在があるからだ
と、きつと説明したところでサリヴァンは信じないだろう。なので、

言わない。

「おめでとう」

「ありがとうございます」

「太ったわけじゃなかったんだな」

「失礼ですね、わが妻に対して」

祝いの言葉を述べた口でそれか、と思ったが、サリヴァンの様子から察するに、どうやらリリはまだサリヴァンに報告していないようだ。となると、おそらくツェイルにも報告されていない。

リリは、子を授かったことを、喜んでいないのか。

計算が裏目に出たかと、ルカイアは舌打ちしたくなった。

「そうか……ルカが父親かあ」

「……ええ、そうですね」

感慨深く呟いたサリヴァンに、一瞬反応が遅れてしまったが、サリヴァンは気にした様子もなく微笑んでいた。

「いいな。おれもツェイとの子が欲しい」

「漸く手を出されましたか」

「あ……」

成人を気にしていた様子だが、どうやらやはり我慢が効かなかったようである。

正直に言うと、ルカイアはサリヴァンの伴侶に、ツェイルに女としてのものを期待していたわけではない。ツェイルという人間を盾に、メルエイラ家を掌握できればよかった。その目論見が、たまた

ま先代メルエイラ候と通じていたというだけのことで、結果的に考えれば同じことだったただけだ。

サリヴァンがツェイルに惚れた、というのは、実のところルカイアにとつて予想外のことである。先代メルエイラ候に至っては、考えてもいなかったことだろう。

こうして目論見が半ば達成された今、サリヴァンの幸せそうな顔を見ると、ツェイルと引き合わせたことに少しだけ罪悪が募る。

わたしはあなたに、国を護るための犠牲を強いたただけだった、とルカイアは、サリヴァンの幸せを考えていたわけではなかったのだ。

サリヴァンを護ることは、国を護ることに繋がる。神と崇められる聖王に育まれし、神の子たるサリヴァンを、国は手放すわけにはいかないのである。

サリヴァンには、自分が神の子であるという自覚がない。言ったとしても、信じないだろう。拾われて育ててもらったただだと、言うに違いない。

しかし、ルカイアにとってサリヴァンは、神の子だ。その出生からこれまでのことを公言してしまえば、誰もがサリヴァンを神の子として崇めるだろう。そうすればサリヴァンの立場は確固たるものとなり、皇族もかつての華やかさを取り戻し、国は安定しさらに繁栄する。

サリヴァンのことを語ることができれば、と幾度思ったことか。行動に移せないでいるのは、サリヴァンのこの、幸せそうな顔を見てしまったからだろうか。

ツェイルと一緒にいるときのサリヴァンは、今まで見せたことのないさまざまな姿を、ルカイアに見せてくれる。ほっと安堵している自分に、ルカイアは「甘くなつたものだ」と思う。

「い、いとしい者がそばにあつて、冷静でいられるものか」

「ツェイルさまはまだ成人されていませんよ」

「可愛いんだから仕方ないだろうっ」

顔を真っ赤にするサリヴァンなど、ルカイアは見たことがない。いつだって冷静沈着で、ときには飄々として、感情を隠していた。今はどうだろう。

実はこんなにも感情豊かな人だったのかと、ルカイアは驚いている。

「城にいたときはまだかと言っていたくせにっ」

「感情を抜いた行為にはいくらでも走られますからね」

「走るか！」

意外と純情だ、と思うのはルカイアだけではないだろう。くつくつと笑って、ルカイアは肩を震わせた。

「御子の誕生を楽しみにしておりますよ」

「う……」

もしかしなくても、皇族が増える。それは喜ばしいことだ。

「サライ陛下にも、縁談を持ち込まねばなりませんね」

「……候補の者たちはいるだろう」

「呼び戻さなくてはなりません……あれでいて女好きですからね」

「兄上のせいで後宮は大変だったんだ。どうにかしてくれ」

「どうにかできるものであれば、苦労はしませんよ」

どちらからともなく、小さなため息がこぼれる。揃ったそれに、互いに苦笑した。

「しかしリリが懐妊したというなら……ツェイの侍女がいなくなる

な

「そのことはリリに任せていただきますよう、お願い申し上げます」

「かまわないが……だいじょうぶか？」

「リリはツェイルさまを妹のように思っているところがありますから」

「そうか。じゃありりに任せよう。ツェイにはおれから言ってもいいが……逢っていくか？」

「そうですね……タキ、キリアン、リリに逢っていかれますか？」

老夫妻は「もちろん」と笑顔で頷くので、ルカイアはサリヴァンと一緒に客間を出て、広間に向かう。

広間への道中は、サライの様子を伝えておいた。だてに五年も表から隠れていたわけではなく、その手腕は目を瞠るものであること、礼儀も振る舞いも皇帝そのものであること、入れ替わりがあったことすら感じさせない立ち姿であることを伝えると、サリヴァンも安堵したような微笑みを見せた。

しかしながら、そもそもサリヴァンは執務の間、サライそのものを演じていた部分が多いので、入れ替わっていると知っている者たちでさえそれが終わったのだと気づかないほど、内部に波紋は起きていなかった。

そんなこんな話をしながら広間を前に立ち止まったとき、扉の向こうからリリの悲鳴が聞こえた。

Plus Extra : 宰相感懐録。3 (前書き)

ルカイア視点です。

「姫の地図になったりリリが悪いんですよ？」

「もうやりません、もう二度とツェイルさまを巻き込んで家出しませんから！」

「え、本気で家出しようとしたんですか？」

「う……っ」

ラクウイルの問いに、切羽詰まるわが妻の声。

家出、という単語に、ルカイアは顔を引き攣らせた。振り返りサリヴァンを確認すると、苦笑しながら肩を竦めている。

なるほど、出かけたついでに家出をしようと思論んだわけですね。それでラクウイルに叱られている最中なのですね。

ルカイアは顔を引き攣らせたまま、広間の扉を開けた。

「い、いえべつに、閣下がいないこのときが好機などとは、思っていますんでしたよ。ええ、もちろん。ツェイルさまを家に送り届けたらお暇をいただこうなどとは一度たりとも」

なるほど。

「思ったわけですね」

「きゃあああ！」

部屋に入るなり思ったことを口にしたら、わが妻リリはそれはも

う驚いて逃げた。一番安全であろう、サリヴァンの伴侶たるツェイルの後ろに、怯えるように隠れてくれた。

その動きに、思わず長々とため息がこぼれる。

「まったく……先にわたしのほうから報告ができて幸いですよ」

「え！ 閣下、喋っちゃったんですか！」

「当たり前ですよ。わたしはあなたの夫ですよ」

「わたしからお話しようと思いましたがのいい」

「そのためにツェイルさまと一緒に行方をくらませた、などと言ったら、足枷をつけて寝台に縫いつけますよ」

「本気に聞こえるのでやめてください！」

「本気ですよ。ここまで来て諦めを知らないなど、呆れるばかりです」

「諦めませんよ」

諦めを知らないのにもほどがある、と思う。

「はああ……やはり、ツェイルさまに頼むしかありませんね」

身籠ってなお家出を考えると、どうしてこうおとなしくしてられないのだろう。身体大事の時期ではないのだろうか。

呆れと情けなさに軽く眩暈を憶えて目頭を揉むと、肩をサリヴァンにポンと叩かれた。慰めてくれてるつもりらしい。しかし、はつきり言ってこればかりは慰められても気分が滅入る。

こうなったらやはりツェイルだ。

「ツェイルさま、お頼みしたいことがあります」

「……その前に、一ついいですか？」

「なんででしょう？」

「あの……リリの旦那さまというのは」

「わたしですが、なにか？」

問題でもあっただろうか、と怪訝に思いつつ答えたら、瞬間的にツェイルは目を丸くし、じっとルカイアを凝視してきた。

「婚姻……されていたのですか」

ああそういえば、一度も自分のことなど話したことがなかった。そう思い出したとき、リリが口を開く。

「この前までわたしも知りませんでした」

「え、リリ？」

リリの言葉に、ツェイルは軽く驚いている。ルカイアは、やはりこのときも他人ごとのようなりりに、少しばかり腹立たしさを覚えた。

「とくにお話するようなことでもありませんでしたから、説明はしませんでしたが……気に障ったのでしたら謝罪致します」

「い、いえ、そんな」

少し八つ当たり気味に言ったら、さすがに気づいたサリヴァンが「ツェイ」とツェイルを呼びながら前に進み出て、ルカイアにちらりと苦笑した目を寄越した。痴話喧嘩はあとにしてくれ、ということらしい。

少し頭を冷やして、小さく息をつく。サリヴァンがツェイルの隣に腰かけた。

「リリをしばらく見張ってくれ」

「……、はい？」

首を傾げたツェイルに、ルカイアは即座に口を開く。

「ツェイルさま、お頼み申し上げます。リリを、見張ってください」

ほとんど無表情が常のツェイルにしては珍しく、ぽかんとした。

「どういう意味ですか」

そう問われて、まあ当然だろうと思いつながら、ツェイルに見上げられて逃げ腰になっているわが妻リリの、その逃げ道を塞いでやっ

た。「ご報告申し上げます。このたびわが妻、リンリイが懐妊致しまし

た。「……かいにん？」

「はい。つきましては、妻の悪癖につき合っていたதாகたく、ツェイルさまにお願い申し上げます」

「……え？」

驚くツェイルに、どうしてこう皆が皆、そこまで驚くのか不思議になってくる。ルカイアもひとりの男で、夫なのだが、なぜか信じ

てくれようとしな。とても不思議だ。

「あの……リリが、かいにん？」

「おおよそ半年ほどかと思われま。太ったように見えていたでしようが、単に身籠ったというだけのことです」

べつに太ったわけではありませんよ、と暗に伝えたら、サリヴァンが気まずそうに視線を逸らした。ツェイルの意識はそんなサリヴ

アンにはなく、リリを向いている。じっと見つめて、その真意を探っているようでもあった。

「……リリ」

「は、はい」

「赤ちゃんが、できたのか？」

「う……はい」

消え入りそうなほど小さな声でリリが答えると、ツェイルはとたんに勢いよく長椅子から立ち上がる。

「みつ、身重の身体で、わたしの侍女などしてっ」

大きな声を上げたツェイルに、それはルカイアも初めて聞く声だったので、素直に驚いた。しかし、もっと驚いたのはリリのほうだった。

「いいえ、わたしが望んだことです！」

「でも！」

「だいじょうぶです、ツェイルさま。わたし、ツェイルさまの侍女を辞めたくありません。ただ……」

どの頃合いで話を切り出せばいいのか、わからなかったとリリは俯く。

「それに、わたしはただの侍女ですし、ルカさまの妻だなんて……」

リリのその、小さく弱々しい声に、ルカイアは「おや」と小首を傾げる。他人ごとのように振る舞っていたわりには、どうも深刻に考えている様子だ。

これはどうしたことか、と様子を窺っていると、ふとツェイルの表情が和らぎ、リリに歩み寄った。

「リリ」

「……はい」

「おめでとう」

「……ツェイルさま」

リリの手を取り、ツェイルはにこりと微笑む。

「おめでとう、リリ」

今までになく、誰よりも静かで、穏やかな祝辞に聞こえた。

リリの目から、ぼろりと涙がこぼれたとき、ルカイアは漸くそれに気づくことができた。

ツェイルの肩に顔を押しつけて静かに涙するわが妻を、ルカイアは思わず呆然として、眺めてしまう。

他人ごとのように驚いていたのは、まさか、身の丈に合わないとか、ルカイアの横に並ぶのが自分ではおかしいとか、そういうことを考えてのことだったのだろうか。ルカイアの愛を欠片も信じようとしなかったのは、そういったことでつらくならないためだったのだろうか。

だとしたら、笑える。自分が情けなくて、笑える。

「ばかな娘ですね……」

考えてもみる、と思う。

欲しいと思わなければ攫うように連れて来なかった。

欲しいと思わなければ成人を待つて婚姻するなど考えなかった。
欲しいと思わなければ、身籠らせることもなかった。

信じればよかったのだ。ルカイアが、どうしてここまでするのか、
過剰に考えてしまえばよかったのだ。

「リリ、来なさい」

ルカイアはくつくつと笑いながら、ツェイルにしがみついて泣く
リリを呼んだ。ビクツと身体を震わせて顔を上げたりリリは、怯える
ような泣き顔でルカイアを見てくる。

「おいで、リリ」

あなたがその涙を流す場所は、そこではない。
ここだ。

手を伸ばして促せば、怯えながらも手を上げるリリを、ルカイア
は少し強引に掴んで引き寄せた。

「アイゼン夫妻に挨拶してきますので、しばらくリリを借りますよ」

にこ、と笑ってサリヴァンにそう告げると、苦笑した顔が「行け
ばいいよ」と言っていた。もともとリリはルカイアのものだ、とも
語っている。

「では、失礼いたします」

軽く頭を下げると、ルカイアはリリを引っ張りつつ、部屋を出た。

手短な空き部屋に入ってすぐ、ルカイアはぐずぐずと泣いている

リリを腕の中にしまう。

「る、ルカ、さま……っ」

「思い知りなさい、リリ」

「え……？」

「そして諦めなさい。認めなさい」

ニツと笑ってリリを見下ろし、呆けている隙を突いて頭を掴むと、己れの唇で震えているリリの唇を塞ぐ。触れるだけではあつたが、呆気を取られているうちにべろりと唇を舐めておく。

リリがハツとして離れようとしたが、ルカイアは許さなかった。

「逃げられると思っっているのですか。この腹に、わたしの子を宿しておきながら」

「る、か……さま」

「ツェイルさまと逃げると言ったのは、サリヴァンさまがお隠れ遊ばされた場合のことを想定しての言葉です。そうでない限り、あなたはわたしから逃れることなどできないのですよ」

グツと腰を引き寄せて、その腹を撫でて、ルカイアはさらに笑う。

「可哀想に、リリ……わたしのような外道に囚われるなんて」

「なに、を……」

「わたしは優しくないと言ったはずですよ、リリ。だからここに、わたしの子を身籠っているのです。あなたの血肉で育つ、わたしの子が」

うつそりと微笑めば、リリは蒼褪めてルカイアの腕の中で身動き、逃げようとする。怖がらせるつもりはないのだが、どうも自分は笑み一つでなにかしら語ってしまうようだ。

そう、たとえばこの独占欲。

この執着。

この醜くも、焦がれるような想い。

「産みたくないなどは言わせませんよ。この子は、わたしとあなたを確実に繋げるものとなるのですからね」

「……どう、して……そんなに」

「どうして？ 決まっているでしょう。あなたは永遠にわたしのものだからですよ」

「わ……わたし、ものじゃないです」

「ええ、わたしのものですよ。ほかの誰でもない、わたしの、ね」

くす、と笑うと、リリはますます怯えて身体を震わせたが、そんなのは無視だ。

ルカイアは今、ばかみたいに笑いたいくらい、自分に呆れている。リリが欲しがっている言葉を、言えずにいる自分が、ばかみたいに笑える。

「わたしはね、リリ……あなたが欲しいだけですよ」

「え……？」

嘘だ、と驚いているリリに、ルカイアはやはり笑って、深く抱きしめ直す。両腕に閉じ込めて、その肩に顔を埋めた。

「あなたがいればいいのです……あなたがいるから、わたしは立っていられます」

「……ルカさま」

「わかりなさい、リリ……わたしには、あなたしかいないのですよ」

いつもひとりで、立っていた。いつもひとりで、見ていた。いつもひとりで、ただ過ぎゆく日常の中にいた。

両親は思ったことだろう、なんて手のかからない子だ、と。親の言うことをよく聞く素直な子だ、と。

当たり前だ。そうしなければ、ルカイアは生きられなかった。親の袂で育つしかなかったのだから、当然だ。義務的な愛情しか与えなかった両親でも、両親だと思っから嬉しく感じていた。ただ、そんなのはまやかしたと、ルカイアは随分と昔に気づいていた。サグザイル公爵の後妻を母に持つルカイアの立場は、いくら爵位が高かろうと、ルカイアの身を護ってくれるものではなかったのである。だからひとりを選んだ。生きるも死ぬも、ひとりを選んだ。

そうして生きようとしたところに、リリが現われた。両親を失い、あちこちたらい回しにされてなお姿勢を正し生きる少女と、出逢った。

そこからは語る必要もない。

あるのは事実のみ。

この娘が、自分のものであるということ。

「わ、わたしは……爵位も、なにもない、ただの娘で……ルカさまに拾ってもらわなければ、今頃どうなっていたかも、わからない人間で」

「それがなんですか？」

「わたしなんか……っ、わたしんかが、ルカさまと一緒に、いるなんてこと……っ」

消え入りそうなほど小さな悲鳴を上げて身を固くするリリに、ルカイアはただそっと、笑った。

「諦めなさい」

この目に、その姿を捉えられた瞬間から、リリに逃げ場などない。

「このわたしに、欲しいと思わせたのですから」

「だってわたしは……っ」

「あなたは侯爵の妻でも、ラッセ家の妻でもない。このわたしの、妻です」

宰相ルカイアを、宰相ルカイアに成らしめているのは、リリだ。早くその現実を認めて、諦めてしまえばいい。

ルカイアという人間は、そういう優しくない生きものだ。

「わたし、なんかで……いいんですか……？」

「あなたはわたしの妻でしょう？」

「……この子を、産んで、いいんですか？」

「当然です。産みなさい。わたしが宿らせたのですから」

産みたくないと思っているわけではない様子に、少しだけホッとする。産みたくないと言われたら、実際どうしたらいいか、どうすべきか、ルカイアはまったく考えていなかったのだ。

「わ、たし……ルカさまを、好きでいて、いいんですか？」

おや、と思う。好かれている自覚はあったが、その言葉をもらったことはなかった。

「あなたがわたしのものでなくなるなら限り、永遠に」

「ずっと？」

「ええ、喜んで」

「ルカさまは、わたしのこと……」

にっつと、唇を歪める。

「あなたは永遠にわたしだけのものです」

逃げられないと諦めたのなら、それでいい。逃がすつもりがないということを、思い知ればそれでいい。

簡単にその言葉は吐かない。どうせ嘘に聞こえる。その言葉を信じようとしない。信じたら裏切られると勘違いされる。

だから、言わない。
言えない。

「ちゃんと、言ってください」

「死ぬ前に一度くらいは言うかもしれないね」

「ルカさま……っ」

言うのが怖い、と自分でも笑えるそのことに、リリも笑うだろう。

「今は、わたしのものであるということに、満足なさい」

口にすることは簡単だ。けれども、簡単ではない言葉もある。その勇気が持てるのは、きつと死ぬときだろう。

ルカイアは口許の笑みを深めると、リリを解放してすぐ、頬を両手で包んで口づけた。

Plus Extra : 宰相感懐録。4 (前書き)

ルカイア視点です。

リリが産気づき、子が生まれそうだと知らせを受けたとき、ルカ
イアは平素と変わらぬ執務の中にあつた。

「行かねえのか？」

訊いてきたのは、幼馴染でありサライの騎士であるジークフリー
ト・レイル・カリストルだった。

「安産だろうというのは、エーヴィエルハルトから聞いています。
とくに心配する必要はないと思いますが？」

「おまえ……それでも旦那かよ」

「行ったら行つたで、逆に驚かせて出産の邪魔になるだけでしょう
し、行かなければそれで、文句を言うでしょうね」

「え？ どうすりゃいいんだ？」

ルカイアの代わりに悩むあたり、ジークフリートに交渉術は向か
ないなと思う。

「産まれる頃に行けばいいだけですよ」

「……それでいいのか？」

「中途半端な頃合いですからね。驚く暇もなければ、文句を言う暇
もありません」

「なるほど」

だいたい、産気づいて生まれそうでも、かなり時間をかけて子どもは産まれるものだ。数時間も前から動く必要はない。安産だとわかっていればなおのこと、たとえ難産であっても、そのときはラクウイルあたりが慌てて飛んでくるだろう。ルカイアが行ってどうにかなるものでもないが、それは産まれるとわかっていて今でも同じだ。

「行ったほうがよいのではないか、ルカ？」

机に向かって筆を走らせていたサライが、心配げな顔でそう言うてきた。

「驚かせて難産にさせよとお命じならば、行きましよう」

「そ！ そう捉えるのか、おまえは……」

ルカイアがそう捉えるのではなく、周りがルカイアの印象からそう結論づけるのだ。慌てるさまでも見たいのだろうが、無理な話である。

「わたしの子であることをお忘れなく」

「いや、それはわかつているが……」

「妻はそれほど弱くありませんよ」

「だが、不安はあるだろう？」

「わたしにはありませんね。わたしと妻の子ですから」

「おまえはそれでよいかもしれんが……」

妻を想うなら行け、ということらしいが、ルカイアからしてみればリリを想うからこそ行かないだけだ。たぶん、本当に、ふつうに驚くだろうから、それで邪魔するほうが危険だと考えている。

だからルカイアは、子が産まれるというぎりぎりの時間まで、仕事に専念した。

サライが出してくれた車が、邸の前で止まる。わざわざ車を出してくれたことに礼を言って邸に入ると、駆けつけていたアイゼン夫妻に真つ先に「遅い！」とやはり怒鳴られたが、すぐにサリヴァンが駆けつけてきて、ルカイアを引っ張っていく。

「そばにいてやれ」

それだけ言うと、ある部屋の前にルカイアを放置すると、自分はその隣の部屋に消えた。

少しして、瞬間的に空気が張り詰めた。

それに気づいたときには、耳を劈く鳴き声を聞いていた。

「……産まれましたね」

知らず、ほつと息をついていた。張り詰めていた空気も和らいぎ、漸く人の声らしきものも聞こえてきたとき、ルカイアはどうやら自分がかかなり緊張していたらしいと知った。

がちや、と部屋の扉が開いたとき、そこから顔を出したのはリリが教育している娘だった。

「宰相閣下……っ」

「無事に産まれたようですね」

「は、はい！ 男の子です！」

「そうですか……どうぞ、サリヴァンさまにも伝えてきてください。」

わたしが中に入ることは許されていますか？」

「ぜひ、どうぞ！」

「ありがとうございます」

娘が開けた扉を抜けると、見覚えのある顔が二つほどあった。医師のイーヴィエルハルト、その妻で薬師のテューリだ。もうひとり医師がいたが、その顔に見覚えはなく、ルカイアは三人に目礼すると寝台に歩み寄った。

「リリ」

声をかけると、汗で全身を湿らせたわが妻は、薄っすらと目を開けた。

「る、か……さま」

「お疲れさまでした」

そつと頬を撫でてやれば、リリはくすぐったそうに笑う。

傍らに腰かけて労ってやりながらゆっくりと撫でていると、「宰相閣下」と呼ばれた。

「閣下、御子息さまです。おめでとうございます」

イーヴィエルハルトが両腕に抱えているのは、とても小さな命。ルカイアは立ち上がり、イーヴィエルハルトから小さな命を預かった。両腕にかかる僅かな重みに、目を細める。

これが、わたしの子か、と思った。

これが、リリの子か、と思った。

胸に渦巻くのは、言いようのない柔らかかなもの。くすぐったいよ
うな、暖かいもの。

「ルカさま……」
「ええ、リリ」

わが子を抱え直し、ルカイアはリリの傍らに戻る。わが子を間に寝かせると、小さな手のひらが宙をさまよった。手を伸ばしてその小さな手のひらに掴ませると、ほんのりとしたぬくもりが伝わってきた。

「ルカさま、この子に……」

「ノアウル」

「え……？」

「ノアウル・ウエル・ラッセ。それがこの子の名です」

「……ノアウル」

嬉しそうにわが子、ノアウルを見つめるリリに、ルカイアも頬を緩める。全身を支配していた緊張も、このとき漸く解けた。

「ところでリリ」

「あ、はい？」

「わたしは娘が欲しかったのですが」

「え……」

「仕方ありません……次は女の子にしてください」

言葉もなく顔を引き攣らせたリリに、ルカイアは笑みを深めて、わが子ノアウルごと両腕に抱き込んだ。

耳許で囁いた言葉にリリが気絶しかけると、ノアウルが空腹から泣き出すのは、同時だった。

たまには休みを取れ、と言われて無理やり休日になされたその日、けつきよく城から使いの者が来て、紙の束を渡された。それを一枚確認していると、背中が急に重くなる。ついで胸のあたりも重くなる。

「どきなさい、ノア。邪魔です。カルアも真似しないでください」

と叱ってみるが、無言のわが子たちは離れようとしなない。ぶらぶらと、ルカイアにぶら下がったまま、自分たちに目もくれない父親で遊んでいる。

最近は家にいると、こうしてわが子たちが張りついてくる。邪魔だといつてもなにをしても離れずぶら下がっているの、疲れるまでは仕方ないので放置することにした。歩くときには邪魔であるが、おかげで慣れてしまった。

今日も今日とてわが子たちをぶら下げながら、ルカイアは家にまで来た仕事を片づける。半分ほど片づけると、それを使いを渡した。使いを帰らせるとすぐ、アイゼン夫妻がサリヴァンの来訪を知らせてくる。

「相変わらず面白いことになっている」

と、笑いながら顔を出したサリヴァンは、その腕に二歳になったばかりの息子を抱えていた。護衛についている騎士はラクウィルではなく、ナイレンとユグドだ。しかもユグドのほうまで息子を連れ

ていたので、一気に子どもの密度が高まる。

「ほら子どもたち、おれが遊んでやるぞ」

「殿下」

「いいから」

おそらくはそれなりに仕事の用事があった訪れたのだろうサリヴァンは、しかしルカイアに張りついていた子どもたちと、わが子、そして年長者ユグドの息子を引き攀れて庭に出ってしまった。本当ならサリヴァンの身分を考えて行動させるべきなのだが、サリヴァン自身が子どもたちをかまいたくて寄って行くので、なにも言えないルカイアだ。

「なぜあなたまで子どもを連れてくるのですか」

ため息をつきながら、目は庭先に向けつつ、ユグドに呆れる。

「たまたまですが」

「狙ったかのように感じますよ」

「最近はラクウィルに剣の指導をさせていますから、あれはその生徒のひとりです」

「……そのうちわたしも世話になりそうですね、ラクウィルに」

目を細めて、サリヴァンに遊んでもらっているわが子ノアウルを見つめる。

このところ、ノアウルにはある兆候が見られていた。

「天恵者ですね、閣下の御子息」

「……ええ、どうやらそのようです」

ノアウルは、サリヴァンの息子を小さいながらも抱えて、にこにこしている。けれどもそこに混じる空気には、子どもらしからぬ警戒心があった。まるでサリヴァンの息子を護っているかのようになり、ルカイアには見える。それは騎士たちにも感じるここのようだった。

「よもやわが愚息が、皇族をお護りする役目を拝命しようとは、思ってもみませんでしたよ」

「では、やはり……」

「明確なことではありませんがね」

そう、これはあくまで可能性だ。だからラクウィルに、世話を頼むことになるだろう。

新しい時代が育ち始めた。

そう思いながら、ルカイアはサリヴァンと遊ぶ子どもたちを、ただゆったりと眺めた。

Plus Extra : 宰相感懐録。4 (後書き)

Plus Extra『宰相感懐録。』はこれにて終幕します。
リクエストありがとうございました。

楽しんでいただけたら幸いです。
読んでくださりありがとうございました。

Plus Extra :メルエイラ末弟事情録 1 (前書き)

トウーラ(ツエイルの弟)視点、トウーラの物語。
本編から4年後になります。

トウーラの好きなものは、なにを差し置いてもまずはツェイル。
それから剣と本、家族があれば生きられる。

なぜツェイルが一番か？

強いから。

そして弱いから。

けれども強くあろうとしているから。

ツェイルの姿は、トウーラにはとても眩しくて、そして衝動的に
欲しくなるものがある。ツェイルが欲しいと思うその衝動はきよ
うだいゆえのことではないと、トウーラは幼くして自覚していた。

だから、ツェイルがツァイン^兄以外の人間のものになったのは、許
せない事態だった。

だから今も、これからも、トウーラは目の前の男が嫌いだ。

「ああ、トウーラか。久しぶりだな」

気安く声をかけてきたのは、ツェイルを妻にしたヴァルハラ公サ
リエ・ヴァラディン。愛称をサリヴァン。そして皇弟。

ツェイルを溺愛するツァインもあまり好きではないトウーラだが、
サリヴァンのほうがそれ以上に嫌いだった。

なぜか？

トウーラの好きなものを、横から掻つ攫っていったからだ。

「……きらいだ」

「ん？」

「あんたは嫌いだ」

ぼそりと呟いたトゥーラに、サリヴァンは一瞬だけ呆け、そして苦笑した。

この態度も気に喰わない。謝っているのか、そうでないのか、或いはトゥーラをばかにしているのか、相手にしていないのか。

どれも当てはまらないサリヴァンの苦笑が、トゥーラを苛立たせる。

「トゥー？」

という、下から聞こえた声に、ふと視線を下げたら、三歳を過ぎた甥オリヴァンがサリヴァンと手を繋ぎ、トゥーラを見上げていた。思わず、目が細まる。

トゥーラにとって甥、つまりツェイルとサリヴァンの子どもは、微妙な存在だ。笑ってやろうと思っても、どうしても顔が引き攣る。どうしようもないから、感情を誤魔化すのは随分前にやめてしまった。代わりに、憎からず可愛くは思っているので、無言で頭は撫でてやる。

甥は満足したように微笑んだ。

サリヴァンに似ているのが気に喰わない、と思ったところで、イラッときたので視線を外した。甥は可愛いのだが、サリヴァンが嫌いなのでどうしようもない。もっとツェイルに似ていれば、素直に可愛がってやれたかもしれない。

これだからサリヴァンは嫌いだ。

甥は可愛いのに、素直に可愛いと思えなくなってしまう。

「ツエイは庭だ。ラクと剣の稽古をしている」

サリヴァンはそう言うと、オリヴァンを抱き上げて、トゥーラの横を通り過ぎて行った。

「出かけるのか」

うっかり声をかけてしまったのは、数少ない休みをツェイルのために使うサリヴァンが、オリヴァンだけを連れて歩いていたからだ。サリヴァンは立ち止まると、振り返る。

「散歩だ」

そう言うサリヴァンに、本当に行く気があるのかわからない。いや、あるのだろう。

しかし、違和感があった。

三年前、甥が産まれる少し前にも感じた違和だ。

「一緒に来るか？」

「なんでおれがあんたなんかと」

「トゥーラは強いから、頼りになる」

ああ、とトゥーラは、違和感の正体に思い当たった。

この男、わかり難い。非常にわかり難い。

「……あんた、なに怒っているんだ？」

眉をひそめて問うと、笑っていたサリヴァンの頬がぴくりと反応する。

しばらく沈黙が続いた。

沈黙が破れたのは、サリヴァンの前方から近衛騎士が歩いてきたときだ。

「行きましようか」

ユグドという名の騎士がそう告げると、サリヴァンは無言で頷き、トウーラを見やって首を傾げる。

「……行つてやつてもいい」

「なら、おいで」

ふいつと、サリヴァンは歩き出す。その背について行こうと思つたのは、わかり難いほど怒っていたサリヴァンの、その矛先が気になつたからだった。

トウーラは来た道を戻り、サリヴァンと一緒に、邸の外に出る。

玄関の前では、ユグドと同じ騎士でツアインの幼馴染であるナイレンもいた。

「トウーラ？ 殿下、なぜトウーラを？」

ナイレンはきょとんとしてサリヴァンに問うたが、サリヴァンはやはり微笑んだまま「強いから」と答えただけで、さっさと歩き出す。

元傭兵のナイレンがサリヴァンの怒気に気づいていないわけもないのだが、だからといってなぜトウーラを連れてきたのか、不思議だったのだろう。ナイレンは「はて？」という顔をしたくらいにして、サリヴァンを追いかけた。

トウーラはサリヴァンの隣に、ユグドはその前に、ナイレンが後

るについて、護衛に固められたサリヴァンの散歩は始まった。

道中、サリヴァンは無言だった。元気な甥も、そのときはとても静かで、おとなしくサリヴァンの腕に抱かれ、しがみつくようにその胸に顔を埋めたままだった。

なにかあったのだろうというのは、一目瞭然だ。ツェイルが同伴していないのも、ラクウイルという最も信頼している侍従長がいなのも、だからなのだろうとトゥーラは雰囲気から感じ取る。

トゥーラは歩調を緩め、ナイレンの隣に移動する。

「なにかあったのか？」

横目に問うと、ナイレンは苦笑して肩を竦めた。その仕草から、ツェイルがラクウイルと喧嘩したわけではないことが窺い知れる。

「皇帝に世継ぎが産まれたのは？」

「知っている。それがどうした」

「公子と同じように、背に刻印があるらしい」

「……、なんだって？」

その話は初めて聞く。皇帝の世継ぎの話は、一昨日駆け巡った話題だ。トゥーラも貴族の端くれとして、騎士のひとりとして、祝いの口上を述べてきたばかりである。

「それで大卿家から、打診があった。公子を、産まれた姫の婚約者に、とな」

「大卿家……ダヴィレイド大卿か？」

「ほかに誰がいる。そんなむちゃくちゃな話を打診する御仁」

トウーラが聞いた話によれば、ダヴィレイド大卿は先帝の従兄弟で、サリヴァンとは血縁関係にある。つまり皇族であった人だ。その血と年齢から威厳は大きく、国政にも大きな発言力がある。皇弟であるサリヴァンでさえダヴィレイド大卿には従うくらいだ。

「殿下は、いやだ、と突っぱねた」

「……珍しいな」

「大卿に逆らうのはな。でも、わからなくはない。殿下には、大卿の命令に従う義理なんてないからな」

「そうなのか？」

「そうだろうが。大卿と呼ばれてはいるが、あの人はもう隠居した身だ。影響力はあっても、今さら国政に意見できる立場でもない。だいたいにして、殿下が国政に携わること自体、本当ならおかしいんだぞ」

まあ確かに、とトウーラは腕を組みながら考える。

メルエイラ家の者として、トウーラもサリヴァンの裏事情は把握している。先帝の実子でありながら疎まれ、幽閉され、今代皇帝が病に倒れたからと身代わりにされた挙句、帝位を返上してもなお皇帝に登城を乞われたがゆえに公爵家の領地を没収され、所有しているものは実質今の邸だけという状態だ。皇弟の扱いがこれであるのか、と責めなくなる状況を、しかしサリヴァンは甘んじている。

改めて考えると、サリヴァンは危ういところにいるなど、トウーラは思う。そんなサリヴァンに嫁いだツェイルも、産まれたオリヴァンも、実はとんでもなく危険な場所にいる。

産まれたばかりの姫と、オリヴァンの婚約は、少なくともサリヴァンやツェイルを護ることに繋がるのではなからうか。

「もろ手を挙げて喜ぶことはできないが……悪くはない話だな」

ぼそりと呟くと、聞こえたらしいナイレンも「悪くはない」と言った。

「だが、いい話でもない」

「……だろうな。おれだって、オリヴァンを国の間に触れさせたくない」

「経験から考えれば、誰でもそう思うよ」

違うか、とナイレンは肩を竦めた。

「……それであるの不機嫌、か」

「よくわかったな」

「笑い方が不気味だ。わかり難いからわかった」

「……なるほどね」

やはりナイレンも、サリヴァンの微妙な機嫌には気づいていたらしい。

ちょうどそのとき、賑わいを見せる街に入り、サリヴァンが腕からオリヴァンを下ろした。

元気がないオリヴァンは、サリヴァンと手を繋いでも自分から歩き出そうとせず、少し引つ張られて漸く足を動かす。それでもサリヴァンにまとわりつくようにして歩くので、速度は一段と遅くなった。

ふと、前を歩いていたユグドが立ち止まって振り返り、トウーラとナイレンに視線を寄越す。どうやら少し持ち場を離れたいらしい。頷くと、すぐにユグドはどこかに駆けて行った。

「どづした？」

「ここで少しお待ちください」

「ん？」

サリヴァンにはなにも言わずにユグドは行ってしまったのだが、待つというほど時間もかけずすぐにユグドは戻ってきた。その手には、露店で売られている甘い焼き菓子を持っている。持ち場を離れたことについてサリヴァンに目礼して謝ったあと、オリヴァンの前で膝をついた。

「公子」

「……ユート？」

「姫も……ツェイルさまも気に入られているものです。いかがですか」

意外だ、とトゥーラは思った。サリヴァンを護衛する騎士たちが変人揃いであることは知っているが、その中でもまともそうなユグドが、サリヴァンを放ってオリヴァンの機嫌を窺うなど、トゥーラには驚きである。

ユグドから焼き菓子の袋を受け取ったオリヴァンは、目をきらきらとさせながらサリヴァンを窺い、微笑まれると嬉しそうに笑った。

「ユート、ありあと」

「いいえ」

「ユートも、たえる」

「ありがとうございます、公子」

子どもの手のひらでは大きな焼き菓子は、おとなの手のひらには指先ほどの大きさだ。ころころと、豆のように入っている焼き菓子

の一つを、オリヴァンは手に取るとユグドにあげ、サリヴァンにもあげ、振り向いてトゥーラとナイレンのところに駆けてくると、嬉しそうに笑いながら一つずつくれた。

「おれにもくれるんですか、公子？」

「ナインモー」

「どうも、公子」

トゥーラはどうしてもサリヴァンに似ているオリヴァンを素直に可愛がってやれないのだが、ユグドを始めとしたナイレンたち近衛騎士は、オリヴァンを猫可愛がりする。それはたぶん、こうやって笑いながらそばに寄って来てくれるからだだろうと、トゥーラは思った。

騎士とは、名ばかりで道具扱いされることが多い。それが当たり前になっていく。トゥーラもそういう扱いには、メルエイラ家の者ゆえに、慣れている。だからこそ、子どものオリヴァンにこうして人として接してもらえることは、とても嬉しいことだ。

ユグドやナイレンに頭を撫でられたオリヴァンは、漸く元気を取り戻したようだった。

「サあり、サあり」

「なぜ父と呼ばんのだ……」

「サあり、ツエーにも。ツエーにも」

「ああ、ツエイにも買って行こう。しかし……なぜ母と呼ばんのだ」

「ユート、ツエーにも。ノアにも」

焼き菓子で元気になったオリヴァンは、サリヴァンからつかず離れずひとりで歩き始め、ときおりユグドに絡んだり、ナイレンに絡んだり、トゥーラに絡んだりしながらその笑みを振りまき、わかり

難い怒気に包まれていたサリヴァンを和ませた。

「疑問だ」

と、サリヴァンが、おそらくはトゥーラに向けて発した言葉なのであろうが、ひとり言としてトゥーラが片づけようとしたため、それを察したナイレンがさかさず「なにがです」と問う。ツアインの幼馴染なだけあって、トゥーラの性格を理解したナイレンの気遣いだ。

「オリヴァンはおれを父と呼ばない」

「べつにいいじゃないですか」

「なぜ呼ばないのか気にならないか？」

「……あなたもツェイルも、互いに名前で呼ぶからだと思いますが」

「おれは、帰ったらオリヴァンに、父さまだぞーっと言うのに？」

「わかってないんじゃないですか」

「父なのにつ？」

「いやいや、それはわかっていると思いますが、そう呼ぶ必要はないと思っているのでは、と」

「むー……」

他愛ない話だ。それはぴりぴりしていたサリヴァンも、漸く気分転換ができたということでもある。

「ユートの息子は、ユートをちゃんと父さまと呼んでいたぞ」

「そして隊長をユートと呼ぶ殿下に首を傾げていましたね」

「ぐ……」

「ナドニクスのことも、ナナと呼んでいるとか」

「ぐう……」

「おれの名前も呼びにくかったでしょう」

「……わかった、おまえのことはこれからナインと呼ぼう。ツイエがそう呼んでいるからな」

「責任転嫁」

「おまえはおれを弄って遊んでいるのか」

「まあまあ楽しいですね」

「……さすがはツアインの幼馴染」

「まあつまりは、それと似たようなものですよ、ということですよ。呼び名なんて、呼んでくれるならなんでもいいじゃないですか。呼ぼうという気持ちがあるんですから」

サリヴァンで口遊びしていたナイレンが最後に締めくくった言葉で、顔を引き攣らせていたサリヴァンに笑みが戻る。

あるじと従者がこんな会話をしているのだろうか、とトゥーラは呆れたが、これが彼らだというのは、これまでの姿を見ていればわかる。不思議な関係だと、そう思わなくもないが、彼らに囲まれたツイエルにはいい環境だと思う。

サリヴァンのそばなら、ツイエルは、幸せになれる。たとえどんなことがあっても、彼らのような者たちが、サリヴァンとツイエルを支え、護ってくれる。

トゥーラには、できないことだ。

それがすごく、腹立だしい。

ツイエルを護れるのは、ツイエルを理解できるメルエイラの人間だけだと、思っていたのに。

「トゥーラ？」

どん、という軽い衝撃と、呼び声に、ハッとわれに返った。オリヴァンが、不思議そうな顔をしてトゥーラの足にしがみつき、見上げている。

「……なんだ、オリヴァン」

「……トウー、いや？」

「え？」

「さんぽ、いや？」

不機嫌が表に出ているらしい。よもや甥にそれを見抜かれるとは、メルエイラの戦士としてあるまじきことだ。

トウーラは首を左右に振って感情を押し隠すと、オリヴァンの頭をそつと撫でた。

Plus Extra :メルエイラ末弟事情録 1 (後書き)

リクエストありがとうございました。
漸くトゥーラの物語が始まります。

Plus Extra : ムルエイラ末弟事情録 2 (前書き)

トゥーラ視点です。

元気を取り戻したオリヴァンは、案の定、あちこち走り回ってその愛敬を振りまくものだから、散歩というよりも追い駆けっこになった。とはいえ、騎士が三人も揃えば、逃げたオリヴァンなど三秒もあれば捕まえられる。逃げられては捕まえ、走り回られては捕まえ、それを繰り返しながら街を散策していた。

しかし。

「あんだ……」

トゥーラは、広場の長椅子に沈んだサリヴァンを見下ろす。この男のことは嫌いなのだが、なぜ嫌いなのか理由が掠れるほど、情けない姿だった。

「オリヴァンより体力ないって、どういうことだよ」

どんよりと沈んだサリヴァンのそばには、トゥーラしかいない。ナイレンとユグドは、オリヴァンの捕獲に走っている。

「おかしい……おかしいぞ。なぜオリヴァンはあんなに元気なんだ。おれがこんなに疲れているのに」

「あんたの体力がなさ過ぎるだけだと思うが」

「おれはふつうだ」

どこがふつうだ、とトゥーラは顔を引き攣らせる。

話には聞いていたが、まさかこんなに体力の続かない男だったとは、驚きである。よくこれで仮初めの皇帝などやっていられたな、と思った。

これではツェイルの庇護欲も掻き立てられて当然だ。

サリヴァンに体力など皆無ではないか。

こんなに軟弱な男は初めて見る。

こんな男に自分は好きなものを掻っ攫われたのかと思うと、自分が恐ろしく情けない。

「……殿下」

「んん？」

「やっぱりイル……ツェイルのこと、返してくれないか」

「いやだ」

「あんたがツェイルの旦那って……あり得ない」

「ツェイはおれのものだ」

「いや、おかしいだろ。なんであんたがイルの旦那なんだ。絶対、おかしい。どう考えてもおかしい」

おれはこんな男に負けたのか、などとは思いたくないトゥーラである。

「ツェイは今も、これからも、おれのものだ」

きっぱりはつきり、それだけは譲らないサリヴァンだ。やはり腹が立つ。どうしようもなく、嫌いだ、と思う。

なぜツェイルはこんな男がいいのだろう。

いくら庇護欲が掻き立てられるからといって、こんな、体力も皆無な男のどこに魅力を感じるのか、トゥーラにはわからない。

確かに外見は王子さまよろしく綺麗な顔をしているし、ふわふわ笑って全身から優しさを垂れ流しているし、仕草や態度は上品というよりもただただ柔らかく暖かい。背はそれほど高くなく、トゥーラよりも目線が低いから、圧迫感も迫力もない。剣も握れず、戦闘においては足手まといになる男だ。
やはりどこがいいのかわからない。

「……トゥーラは、おれが嫌いだな」

ふと唐突に、サリヴァンがトゥーラの考察を邪魔する。

「ああ、嫌いだ」

「はは。まあ、好きになつてくれとは言わないから、オリヴァンのことは、素直に可愛がってくれないか」

「オリヴァンは可愛い。あなたに似ているのが気に喰わないだけだ。なんでツェイルに似なかつたんだ、オリヴァンの奴……」

ツェイルに似ていれば、盛りだくさんな特典があるというのに、なぜこんな軟弱男に似たのか。と、トゥーラは常にその疑問を持っている。

「おれに似ている……のか、オリヴァンは」

「そっくりだ」

「そうか？ おれには、ツェイにそっくりに見えるんだが」

「どこが」

「目の色とか、光りの加減で薄紫になるだろう、オリヴァンは」

よく観察している。さすが親、というべきだろうか。

「髪の色も、おれとツェイの中間だ。おれとツェイが混じった、と

いう感じが、すごくいい。そんな色だ」

惚気られた。

ムカつときた。

イラつときた。

ツェイルは、トゥーラの好きなもので、サリヴァンのものになるはずではなかったのに。

あなたに渡すものか。

どうしてあのか、そう言えなかったのか。そして今も、力づくでも取り返そうと本気で思えないのか。

「ツェイが許してくれるなら、もうひとりくらい、欲しいな……」

サリヴァンの呟きが、ナイレンとユグドに捕獲されて戻ってきたオリヴァンに、向けられる。

オリヴァンが可愛い、というサリヴァンの眼差しがトゥーラの苛立ちを増幅させた。

ツェイルが望むものを与えてやられるこの男が、恨めしい。

トゥーラでは、メルエイラの者では、与えてやれないものを、この男は与えることができる。そう、たとえばオリヴァンだ。

ツェイルが選んだ道、ツェイルが欲するものを、サリヴァンという男は持っている。だからトゥーラは、サリヴァンが嫌いだ。好きなものを、取り返させてもくれない。

苛立ちは募るばかりだ。

「どこに行く、トゥーラ」

「帰る」

ふいっと、トゥーラはサリヴァンに背を向けて歩き出す。

ナイレンとユグドが戻ってきたことだし、オリヴァンははしゃぎ疲れたようでユグドの腕でうとうととしている。邸に帰ることになるのだから、トゥーラがその帰路までつき合う必要はないし、もともとその義理もない。気になったものも説明できた。

苛々した気持ちでツェイルに逢うのは避けたいところなので、トゥーラはひとり、メルエイラのボロ邸へ帰る道を選択した。メルエイラ家とヴァルハラ家は馬でも数時間かかる距離で繋がっているが、もともと登城した帰りに寄っていたので、この街を中継地点に二時間か三時間もあれば帰りつく。馬を置いて行くことになるが、ツェイルにでも頼んであとで引き取ればいい。

気持ちを落ち着かせるためにも、歩いて疲れたかった。

疲れたかった、のだが。

悶々としながらひたすら歩いて、どれくらい経っただろうか。目の前から走ってくる馬二頭に、トゥーラは歩みを止める。

「……どこにいたんだ、アイン」

兄ツアインが、トゥーラの愛馬を引っ張って、走って来ていたのだ。ヴァルハラ邸にも、城にも、メルエイラの邸にもいなかったのに、相変わらず神出鬼没な兄に顔が引き曇る。

「ほら、おまえの」

と、トゥーラの近くまできて馬の歩みを緩め、軽やかに降りたツアインに、愛馬の手綱を渡される。

「なんでわかったんだ」

「おまえのことだからね。殿下と一緒に散歩って、まずあり得ない。なんの気紛れを起こしたのか、僕のほうが訊きたいよ」

「オリヴァンの元気がなかったから、気になってついて行ってみただけだ」

「オリヴァン？ ああ……そういえば、大卿家から面白い話が出ていたね」

「……知っているのか」

「僕を誰だと思っているのかな、わが弟くんよ？」

ムカつく。サリヴァンの次にツアインが嫌いだ。

苛立ちが増幅される前に、トゥーラは早々にツアインを放置しようとして愛馬の側面に回った。

「トゥーラ」

無視しよう、と思ったのだが、その声が兄というよりもメルエィラ家の当主だったので、顔だけ振り向かせた。

「お嫁さん見つけてきたから、逢っておいで」

「……、はあ？」

「これ、当主命令ね」

いや待て、とトゥーラは顔をしかめる。いきなりなんの話だ。

「おれはべつに結婚なんかしなくても」

「一生を騎士団で独り身？ べつにそれでもいいんだけど、せつかくだから結婚しときなさい」

「意味がわからない」

「悪くない話だから」

「いや、そうじゃなく……て、話？」

政略結婚でもさせる気か、とトゥーラは不快に思ったが、相変わ

らずの兄は誰もが魅了される微笑みを携え、口を開く。

「邪魔な貴族がいるんだよ」

その言葉を聞いたとたん、トゥーラは眉間に皺を増やした。

ツアインが、邪魔、と言葉にすると、そのほとんどはツエイルかサリヴァンと繋がりがあある。ツエイルを溺愛する男であるから、己れに妻子があっても最優先事項は常にツエイルかサリヴァンのことなのだ。

さらに言えば、ツアインに「邪魔」と判断されたものは、徹底して排除される方向にある。ある意味では最後通告みたいなものだ。

「敵にもならないんだけど、だからといって放置するのよね……利用し甲斐がありそうだから、取り込もうかと思って」

「邪魔、なのにな？」

「邪魔だからだよ。取り込んでしまえば邪魔でも利用する価値が生まれる」

「……それで、おれにな？」

「娘をもらっておいで」

「簡単に言ってくれな。好きでもない、まして逢ったこともない女を、もらってこいだと？」

「いやなら殺せばいい」

極端な方向に話を向けるツアインに、少々だが気疲れする。ツエイルやサリヴァンのことになると、ふだんは形を潜めている残虐性がゆらりと姿を見せるから、ツアインは面倒だ。

「どつちでもいい。生かすも殺すも、それはトゥーラに任せるよ。

僕は邪魔なものが消えればそれでいいから」

「……なぜ邪魔だと判断した」

「資産を食い潰されたらしい。だったら、僕が食い潰してやるかと思っただろ」

なるほど、と思う。

今回はサリヴァンの、皇弟という立場に難癖をつける貴族らのやつていることが、ツアインの「邪魔」をしているらしい。

「それで、おれの嫁？」

「いやならばついに殺したっていい。そう言っただろう。娘に害はないから、トゥーラにどうかなって思って言うてみただけだよ。悪くない話だ」

「どこが」

「検討して行くことだね。じゃないと、僕は殺しちゃおうよ」

脅されている、と思った。害もない娘をひとり殺すぞ、と脅されている。これでは、命を狙われた見ず知らずの娘を、トゥーラは護らなければならぬではないか。

「なんて遠回りな……」

「勿体ないことはしないほうがいい」

「なにが勿体ないんだ」

「だってこのままだとトゥーラ、結婚してくれそうにないし？ それだと僕は困るからね？」

「困ることなんか一つもないだろ」

「あるんだなあ、これが。そういうことだから、早く行動を起こさないと、僕は殺しに行くよ？」

ふふ、と笑って目を細めたツアインに、嘘があるようには思えない。本気で娘を殺しに行きそうだ。

トゥーラは盛大なため息をすると、低く舌打ちした。

「行けばいいんだろ、行けば」

「そう、それでいい。楽しみにしているよ、タワーラ」

今日はなんて最悪な日だろう。

そう思いながら、タワーラは馬に跨った。

上位十二貴族は、二大卿四公六侯からなる。その下に続く中位貴族は凡そ二十七、そのうち十の中位貴族には議会展席権がある。年ごとに議会展席権は巡り、また下位貴族にもその権利は与えられる。

この年は議会展席権を与えられなかったブラグフラン伯爵家は、財力がありながらも発言力は小さいという、なんとも奇妙で微妙な立場にある貴族だった。

「この調書……作ったのはアインか？」

トウーラはブラグフラン伯爵家について調べられた報告書を読み、調書とは言い難い紙切れだと、呆れたため息をついた。

「どこに要点を置けばいいんだ……なんて読み難い」

はあ、とたびたびため息をついたら、調書を持ってきた騎士が気まずそうに頬を掻いた。

「いや、あのな……それ書いたの、姫だ」

瞬間、トウーラは無表情のまま硬直し、次いで顔を引き攣らせた。

「ここまでばかりだったのか、イルは」

「ブラグフランのことについて最初に気づいたのは、姫のようだな?。」

おや、とトウーラは片眉を上げる。

「なら、これは調書というより、走り書きか」

それなら頷ける調書だ。ツェイルが走り書きしたものであるなら、書いてあるすべてが要点であり、かつ調べ直す必要がある個所である。

トウーラは自分でも調べておいた貴族についての帳面を、机の抽斗から引っ張り出した。

「ブラグフラン……ああ、あった」

走り書きである紙と帳面を参照し、なるほど、と頷く。

「微妙な立場にある貴族だな……あるのは財力だけだ」

「それ、どういう意味だ?」

「善行があるわけでも、悪行があるわけでもない。単に商売が上手くいつているだけだ。機械業に手を出しているなら、誰でもこうなる。伸びの時期だからな。まして手を出したところが有能揃いなら、財力はもつと膨れ上がる。そのうち発言力も大きくなるだろうが……そこに目をつけられたところか」

「……つまり、いい温床の一つだった、と?」

「ここで反皇弟派との系を断ち切らせる必要がある。が……こうなるとブラグフラン以外の貴族も、調べ直したほうがよさそうだな」
「じゃあそれはこっちで引き受けよう」

任せておけ、と言う騎士に、そうだなと頷いておく。とりあえず

トウーラが先に手を出すべきは、ブラグフラン伯爵家だ。

「ただ、イルの……ツェイルの勘は当てにしたほうがいい。あながち外れてはいない」

「姫の……まあ、ブラグフランのことに気づいたのは、姫だしな。わかった、そうしよう。おまえはどうするんだ？」

「ブラグフランをさつさと片づけるだけだ」

「そうか。気をつけるよ」

「誰に向かって言っている」

「おまえが誰であれ、おれたちは激励して送り出すよ」

騎士の、当然のような笑みに、トウーラは青筋を立てたくなるのを我慢して背を向けた。

トウーラはべつに、彼ら皇弟騎士隊と仲よくする気はないし、したいとも思わない。仲間意識ある友人のように接されるなど論外なのだ。

「さつさと行け。おれも出る」

「おう。じゃ、隊長よろしく」

「いない奴にかける言葉など持ち合わせていない」

「うわ、きつ。さすが隊長の弟……」

「さつさと行け」

「ああはいはい。じゃあな」

部屋を出て行く騎士を見送ることなく、トウーラは支度を整える。ツェイルが以前使っていた剣がトウーラの二本目の剣になっているので、それも忘れず帯に装着した。

走り書きの紙を再度読み直してから机の引き出しに帳面と一緒にしまつと、上着を羽織って部屋から出た。

「ウーラ兄さま」

廊下に出てすぐ、妹シユネイとはち合わせたか、トウーラは足を止めずに横を通り過ぎようとした。

「出かける。帰りはいつになるかわからない」

通り過ぎさまにそう言うと、腕を掴まれた。

「……なんだ、ネイ。離せ」

「なんの意味もなく剣を揮うのは、メルエイラの剣士がすることではなくてよ、ウーラ兄さま」

聡い妹の言葉に、ちっ、と舌打ちがこぼれる。

「メルエイラは皇弟擁護派だ。皇弟に叛旗を翻す者、即ちメルエイラの敵。意味ならあるだろ」

「いいえ。ウーラ兄さまの剣には、なんの意味もないわ」

「……ネイ、なにが言いたい」

「今のウーラ兄さまは、なにも護っていない。それはメルエイラの剣士ではないわ」

「護っているだろ。皇弟を。その妻となったツェイルを」
「本当に？」

なぜだろう。強く確認されると、苛立つ。それがシユネイだからというわけではなく、腹が立つ。

「おれは護るべきものを護っている」

「……それは、メルエイラの剣士として、ではないわ」

ああどつして、こんなに腹が立つのだろう。

「ネイ、いい加減に」

「今から人を殺しに行くような顔をしておいて、言うことではないわ」

ぎくりと、身体が強張った。それはシュネイに確実に伝わり、咎めるような視線を受けることになった。

「罪もない人を殺すのが、メルエイラの剣士だとは思いたくないわ」
「……うるさい」

「いつからそんなふうに投げやりになってしまわれたの、ウーラ兄さま」

「おまえには関係ないだろ」

「……そうね。けれど、今のウーラ兄さまは、メルエイラの剣士ではないのだもの」

「黙れ！」

乱暴に掴まれていた腕を離すと、トゥーラは逃げるようにシュネイを無視してその場を離れた。

シュネイの言葉を認めてしまったようなものである自分の態度には、吐き気がする。それでも否定できなかったことが、悔しい。いや、悔しいというよりも、情けない。

妹に、自分の弱さを見られた気がして。

自分の身の奥に隠したものを、暴かれた気がして。

「おれはっ……おれは、トゥーラ・ウエル・メルエイラだ。メルエイラの剣士だ。メルエイラ族の……っ」

好きなものを奪われた日から、トゥーラの中でなにかが狂い始め

た。その元凶であるサリヴァンを嫌っても、恨んでも、狂い始めたそれは正されることなく、ぎしぎしと今も狂いを生じさせている。いつそサリヴァンを殺せば、楽になるのだろうか。それもいいかもしれない。この心が楽になるなら、裏切ってしまった方がいい。いつそ清々する。

「はっ……いいな、それ」

トゥーラの日常を壊した原因を、断つ。その繋がりを絶つ。いいかもしれない。

ははっ、と笑って、トゥーラは上着の裾を捌き、剣の柄を握る。

「若さま？」

「出かける。帰りは気にするな」

「は、御意に」

メルエイラの邸を出て、厩舎から愛馬を連れ出すと跨り、トゥーラは邪魔なものを排除するため皇都ヴァンリを目指した。

Plus Extra : ムルエイラ末弟事情録 4 (前書き)

トゥーラ視点です。

皇都の職人街エンバルは、末番街エンバルとも呼ばれており、北の各領地、或いは北の属国へ続く道がある最後の街だ。

トウーラは愛馬を末番街の宿屋に預けると、ブラグフ란の詳しい情報を求めて、そこで小型の機械を作る職人たちの間を歩いた。

曰く、

「お優しい、立派な方だな」

曰く、

「真面目過ぎて、こっちが不安になるよ」

曰く、

「政略結婚だったらしくて、家を顧みねえで、仕事に没頭し過ぎてんな」

曰く、

「息子はいい子だけだな。ありや諦めちまったというか……うん、賢いんだろうな」

あまり広く聞き歩いては不審がられるので、ほとんどはメルエイラ家が世話になっている店の職人から聞いた話だ。ブラグフ란のことは、末の職人にまで話が行き渡るほど、有名ならしい。

「坊ちゃん……じゃなくて、若さまや。ブラグフラン伯爵がどうかしたんで？」

「いや。事業が上手くいっていると聞いたから、どんな男かと思っただけだ。機械業で失敗した奴は聞かないが、だからとて噂されるほどの奴がいるわけでもない。そんな中で、たまたまおれの耳に入ったのが、ブラグフラン家だっただけだ」

「ふむ、確かにそうですね。ほかに、チエインズ伯爵ですとか、セーゼリア子爵ですとか……まあカルディナ家に敵うところはありますが、皆さん上手くやっておりますしな」

「おまえたちも頑張ってくれ。メルエイラの剣は、おまえたちのところであれば使いものにならない」

「嬉しいことを言ってくださいませなあ」

鍛冶師の老翁は、無表情でも劣いの言葉をかけるトゥーラに気分をよくしたようで、目立ってきた皺を増やしながら笑う。

「して、本日の用向きはなんでしょう？」

そう問われたときは、情報収集に来たとは言えず、少し考えた。

「……老は、短剣も作れたか？」

「剣であればなんでも」

「片刃でも？」

「もちろんですよ。メルエイラ式の短剣を所望で？」

「一本頼む。急がないから、丁寧に作ってくれ」

「承知いたしました」

ふふふ、と老翁が意味ありげに笑ったので、なんだと首を傾げたら、小さめの片刃の剣を数年前にも作ったことがあると、老翁は言

った。

「なんでもお身体が小さい方がお使いになると。できれば片刃で銀の、硬くて頑丈なものを、装飾は紫宝石一つで、と所望された方がおりましてな。この辺りじゃあ片刃なんて珍しい剣、あたしくらいしか作っちゃいませんから、その話が回ってきたんですわ」

サリヴァンだな、とすぐに気づいた。老爺が説明した通りの剣を、ツェイルが持っているからだ。

「そっぴゃあ、その話を持ってきたのはブラグフラン伯爵でしたな」
「……ブラグフランが？」

「作れる職人はいないかと、捜しておったんですよ。あたしゃメルエイラ式の剣を作つて久しい身でしたから、できるかと訊かれたんですわ。最初は伯爵がどなたかに贈るつもりかと思つたんですが、偉いお人に頼まれたそうで。誠心誠意、丹精込めて作らせていただきましたよ」

老爺の楽しげな声に、はて、とトウーラは小首を傾げる。

まさか、ブラグフランは己れが誰の力になつたのか、わからないわけではあるまい。

ツアインが、利用されている、とは言っていたが、まさか本当の意味で利用されているとは考えていなかった。最初に気づいたのがツェイルであるようなので、ブラグフラン本人になにか問題があると思つていたので。

「騙されているわけか……」

「はい？」

「いや、こつちの話だ。しかし、ブラグフランは、息子ひとりだけなのか？」

「はて……娘もおつた気がしますが、話はめつきり聞きませんな。噂はいろいろ耳にしますが」

「どんな噂だ」

「まあ見られない顔だとか、障害があるだとか、そんな類いの適当な噂ですよ。確か末番街の……北に抜ける最後の家にいるとか、いないとか」

「本当に適当だな」

当てにならない話だ、と肩を竦めたら、仕方ないことだと老爺も肩を竦めた。

「北の外れに行くのは商隊くらいで、あたしら職人は街の中心に集まっておりますからな。噂の真を確かめようなんぞするくらいなら開発に力を入れますよ」

「それもそうか」

「家の話は、ブラグフラン伯爵が数十年前に購入したって、風の噂が流れたからですよ」

「ふうん……どちらにせよ、ブラグフランは関わっているわけだ」
「噂ですがね」

心許なくとも、それは確認する必要があるだろう。いい情報を得た。

ツアインがどうやってこの情報を手に入れたのかは知らないが、老爺の口ぶりからツアインがここを訪れた痕跡は見られない。相変わらずどうやって動いているのか不明な男だ。

軽くため息をついたところで、老爺に短剣のことを頼むと、トゥーラは宿屋に戻って愛馬を引き取り、そうして北の外れへと愛馬を走らせた。

北のほうへは、進むにつれて街の喧騒が遠のき、家屋が小さくなり、さらには減り、人気も感じられなくなる。今日は通る商隊もないようで、出歩いている人間はいないようだ。

このまま進むと街を出て街道を走ることになるなと思いつつ馬を駆って、さすがにこれ以上は、と思ったところで、視界の端にちらりと家屋が目に入った。

「……あれか？」

愛馬の足を緩めて、周囲を確認する。

あれが最後の家だとして、街を抜ける道の終わりには、その距離約数分というところだ。あの家より先にはもうないだろう。

なるほど、確かに最後の家かもしれない。

しかし見え難いところにあるものだ。

「隠している、わけではないな……」

最後の家は、後ろにある森にほぼ入っているような状態で建てられている。隠してあるといえば隠してあるが、こうしてトゥーラの視界に入ったということは、とくに隠してあるわけではないのだろう。

あそこにブラグフランの娘が、いや娘かどうかはわからないし、ブラグフランの関係者でもないかもしれないが、いるのだろうか。

考えながらゆっくりと愛馬をそちらに歩かせていたときだった。

「わが家になにかご用ですか」

と。

気配なくいきなり後ろから声をかけられて、トゥーラは驚いた。

ハツと後ろを振り向き、背後を取った人物を見て、さらに驚く。

「あら……見ない顔。てつきりお父さまのお使いの方かと思ったのだけれど……違うのかしら」

若い娘だ。トウーラと同じくらいか、それより少し歳上であろう少女が、暗殺術も身につけているトウーラの背後を呆気なく取ったのだ。

不覚だ、と思うよりも、その得体の知れない感覚にトウーラは少々戸惑ってしまう。今まで、ツェイルやツアイン以外で簡単に背後を取られたことがなかっただけに、これまでにない失態だった。

「もしかして、道に迷われました？ でしたら、この道をずっと行きますと、末番街の中心に出ます。森を突っ切ろうと思われたのであれば、今日はお止めになられたほうがいいですよ。もっと迷われてしまうでしょうから」

少女は、淡々と道の説明をすると、その手に持った籠を持ち直してトウーラの横を通り過ぎる。愛馬の前で立ち止まると、振り返った。

「それとも……やはりわが家にご用がおありですか？ 父の使いでしようか？」

どうしようか、と迷ったのは一瞬だ。

「ブラグフラン伯爵の娘は、あなたか？」

「あら。やはり父の使いの方？ 今度からいらっしゃるのはあなたなのかしら」

やはりこの少女は、ブラグフランの娘らしい。噂されている言葉は、噂の域を出ないものだ。見たところ、ふつ々の少女である。さらにはいえば貴族の令嬢らしくない衣装を身にまとい、持っている籠には僅かな野菜が入っていて、街娘そのものである。

「伯爵には、姉夫婦が世話になった。その礼を言おうと捜して歩いているうちに、ここまで来てしまったただけだ。風の噂で、この辺りは伯爵の所有地と伺ったから」

「あら、あら。それはごめんなさい。父がここにくることは滅多にないんです。お捜しでしたら、やはりエンバルの中心に行かれたほうがいいですよ。おもにこちらで活動されているはずですから」

「今日はおられないようだ。ここまで来たくらいだからな」

「あら……それは重ね重ねごめんなさい。わたしも父の予定を把握しているわけではありませんから……よろしかったら捜させてしまつたお詫びに、わが家でお茶などができます？」

ふふ、と笑つた少女が、持っていた籠を少し揺らした。

「野菜で焼き菓子も作りましたの。父を訪ねてきてくださった記念に、いかがですか？」

それはとても無邪気な笑顔だった。他人ならばさりと切つて捨てるトウモロコシに、断りを入れさせない強さすら感じさせられる。それゆえか、迷っている暇すらなかった。

「どうぞこちらに。ここからですと遠く見えるわが家ですけど、近道があるんです」

少女は、見えている家までの道を見無視して、草むらを進んでいく。迷つことすらできない今の状態に、仕方がないので愛馬を降りてつ

いて行ったら、この少女がどうやってトウーラの背後を取ったのか、
解明できる道になっていた。

Plus Extra : ムルエイラ末弟事情録 5 (前書き)

トゥーラ視点です。

少女は名を、イルアリア・オル・ブラグフランと言った。

伯爵家の人間であると名乗ることを許されているらしいと思うよりも先に、トゥーラがツェイルを呼ぶときの「イル」という愛称と名前が被るなと思った。

「どうぞ、イルアとお呼びください」

「いやだ」

「えっ？」

ツェイルと被るからいやだ、と思わず素直にそれを口にしてしまつてから、失敗したと後悔しても遅い。

「出逢つてまもないのに、いきなりそう呼ばせていただくのは……」

イルアリアと呼ばせてもらう。いいだろうか、イルアリア嬢」

「え、ええ、かまいません」

「おれの話は、ただトゥーラと呼んでくれれば。帝国騎士団の近衛隊に所属している」

「まあ、騎士団近衛隊の方？」

誤魔化しは上手くいったようで、しかし嘘は言っていない。トゥーラが騎士団に所属しているのも、その中で近衛隊に配属となっているのも、間違いではないのだ。

「騎士の方が父を訪ねてくるのは珍しいことではないのですが……近衛隊の方がいらつしやるのは初めてじゃないかしら」

「そういえば先ほど、伯爵の使いがどうこうと言っていたが……」

「ああ、ごめんなさい。身内の恥を曝してしまっているようなものですね」

少女、イルアリアは恥ずかしそうに頬を朱に染めながら、トゥーラを家へと案内する。

遠くから見えていたその家は、近くで見るとそれなりに大きい家で、邸と呼べるほどのものではないが、立派な家だ。相当な年数を経ているのか、よく見ると綻びはあるけれども、それでもメルエィラの邸よりは立派な造りをしている。

「いい家ですね」

「暮らしているのはわたしと、あとふたりしかいないもので、手が行き届いていない部分が多いのですが……わたしには勿体ない家だと、常々思います」

「あなたは伯爵令嬢だろう」

「あ……いえ、そうですが」

突っ込めばいろいろと情報をこぼしてくれそうなイルアリアの雰囲気、近づいてよかったのかわからなくなる。

ブラグフラン伯爵には、できることならトゥーラがイルアリアと接触したことを知られたくない。こうなってはもう無理なことではあるが、それなら会話には充分、気をつけなければならぬだろう。

「こちらにどうぞ。すぐお茶をお持ちしますから、ゆっくりなさってください。こんな外れにまで足を運ばせてしまって、申し訳ありませんでした」

愛馬を適当な木に繋いでから家に入ると、やはり中は質素で、目ぼしい調度品などはない。通された部屋も、なんだかがらんとして、常から客人を迎えられるように整えられているとは思えなかった。

すぐに、と言ったイルアリアは、トゥーラが通された部屋の長椅子に腰かけてまもなく、部屋を見渡し終わった頃に茶器を運んで戻ってきた。

伯爵令嬢であろうにこんなことをしているのかと思うと、わが家とそう変わらない暮らしをさせられているらしいと知ることができ

る。

「この家には、あなたとあとふたりだけということらしいが……使用人もいないのか？」

暗に、資財には不自由していないだろう、と問えば、イルアリアは控えめに微笑んだ。

「近衛隊の騎士さまなら、噂をご存知でしょう？ 否定することはできませんので、見たとおりに解釈なさってください」

意外と強かな小娘だ、と思った。

「生憎と、城で聞く噂など、おれの耳には入ってこない」

「あら……珍しいですね」

「脚色された話に真実を見出すのは、面倒だ。だったら直接、自分の目で確かめたほうが、効率がいい」

「先に身体が動いてしまふんですね」

ふふ、とイルアリアは笑い、用意したお茶を卓に並べ、野菜で作った焼き菓子というのも卓に置かれた。

「身内の恥を自ら曝すわけにはいきませんので、見たままを感じてくださいいな」

流されてくれそうな雰囲気が一変、意外と強かな小娘は侮れない小娘に変貌した。

なるほど、こちらにも探りを入れてきたというわけか。

そう思いながら、トゥーラも強かに、差し出されたお茶を手に持つ。

これに毒など入れようものなら、トゥーラには無意味であるけれども。

「毒など入っていませんよ」

トゥーラが一瞬でも思ったことを汲んだかのように、イルアリアはそう言った。

くすりと笑い、トゥーラは暖かいお茶を口に含む。ツェイルが好きな甘いお茶、セイ茶のようだ。

「おれの姉が好きな茶だ」

「では、慣れたお茶ですね。焼き菓子もどうぞ。少し失敗して、焦がしてしまいましたけれど」

イルアリアは自分の分のお茶も注ぐと、トゥーラの向かいに腰かけた。

「こうしてお客さまをお迎えするのは随分と久しぶりで……見たままを、と言いながら、とても恥ずかしいところばかりです」

「わが家とそう変わらない」

「あら、騎士さまなら、貴族の方でしょう？」

「そう言うあなたも貴族だ。比較されたくはないだろうが」
「まあ」

ふわりと、イルアリアは笑う。身内の恥がどうこうと言っていたが、貴族然としたところがないからか、自分の生き方を恥とは思ってなさそうな態度だ。

「トウーラさまに申したとおり、わが家にはわたしとあとふたりだけです。ふたりはわたしを育ててくださった老夫妻で、この別宅の管理を任せられている人です」

「ここは伯爵の別宅？」

「はい。わたしは居候のようなもので……母と、折り合いが悪かったもので、夫妻に預けられたんです」

なるほど、と内心で頷く。城では確かに、そういう話を聞いたことがある。ブラグフラン伯爵以外にも、そういう事情を抱えた家はあるものだ。

「よくあることだな」

「え……？」

一般的だ、と頷けば、なぜかイルアリアは驚いたような顔をする。

「なにを驚く？」

「あ……いえ、今の話を、素直にお聞き入れくださったのかと」

「嘘なのか？」

「いえ、本当です」

嘘だということくらい、百も承知である。その裏を探って、見つければ泥沼のような事情も浮上するだろうが、真実その事情しか持

たない家もあるのだ。

人の噂など、そんなものだ。

本人の事情も、本当のところも、事実さえも失くした噂は、信じるに値しない。そこに真実を見出すこともできなくはないのだろうが、けつきよくは一方的な話だけであることが多い。双方の話があつてこそ、噂は辻褄が合う。

だからそんな話は信じるに値しない。

一方の話にしか耳を傾けないことで、どれだけの罪を背負つことになると思つているのか。

偽善者ぶるつもりはないが、トゥーラはその手の噂というものが大嫌いだ。

「噂を耳にして来られたわけでは、ないのでね」

「なぜそうなる。そもそも、なんの噂だ」

「わたしが、その……庶子であることですか、見られた容姿ではないことですか……本当は父の子どもですらなく、娼婦であった母が勝手にそうだと決めて、伯爵家に……」

言っているうちに声が小さくなり、最終的には言っていることに悲しくなったのか萎れたイルアリアは、俯いて両手の拳を震わせていた。

「……では、訊く。イルアリア嬢は、庶子か？」

「……はい」

「父親は伯爵？」

「……おそらくは」

「母親は娼婦と？」

「そう、聞いています」

「それを伯爵に訊いたことは？」

「ありません」

「今、母親はどこに？」

「わたしが三つのときに、亡くなりました」

「伯爵夫人と折り合いが悪いのは、なぜ？」

「わたしが、庶子だから……庶子で、こんな顔だから……」

ふむ、とトゥーラは息をつく。

この少女は、己れのことですら、噂に流されたままにしている。つまり、はっきりとした話、真実も事実も知らないのだ。

なんてことだ、と思う。

「愚かだな」

「……え？」

「見たままを、と客人に言うておきながら、自分は本当のところを知らない。噂を否定できないのではなく、否定できるだけの情報を自分が持っていないだけだ」

「そっ……それは」

否定的な言葉を投げつけられて、イルアリアはカツとしたようだったが、それもすぐに鎮火する。言い返せるだけのものがないからだろう。

だが、トゥーラも鬼畜ではないので、責めるような言葉を使うのはそれくらいにしておく。

「自分に否定的になることはない。卑屈な考えは持つな。折り合いが悪いという家から、せつかく出たんだ。家名を背負っているならなおさら、自分がそれに恥じない行いをする必要があると思え」

「……でも、わたし」

「庶子だから？ だからなんだ？ それは伯爵の恥であって、あなたの恥ではないだろうが」

ハッと瞠目したイルアリアの瞳は、かろつじて流されることのない涙で、潤んでいた。

トウーラはなにも、いいことを言っただけでもない。難しいことも言っていないし、イルアリアを泣かせるようなことも言っていない。思ったことを口にしただけだ。

こんな簡単なことすら、誰もイルアリアに言ってやらなかったのか。

そう思うと、イルアリアという少女の強かさが、ただの虚勢であるらしいことが窺える。

まるで、昔のツェイルを見ているようだ。

ツェイルのそれよりもイルアリアのものは深くないけれども、それはツェイルが規格外な強さを持っていただけのこと、ふつうの少女ならイルアリアのようになるのだ。

事情や濃度、深度は違えど、ツェイルとイルアリアは、同じ闇を持っている。

孤独、という寒い闇を。

オル・ブラグフランという家名は、この少女には背負えない孤独の闇にしか思えない。

「……今日はこれで失礼する」

イルアリアから視線を外すと、口にしたお茶だけ空にして、トウーラは長椅子を離れた。

「あ……ま、待って、待ってください！」

部屋を出た玄関の前で、イルアリアは追いかけてきてトウーラを呼び止めた。

「あ、あの、その…っ…そう、お菓子！ 口にされていませんよね。こ、今度は焼き立てを、失敗しないものを、ご馳走しますからっ」

早口なそれに、なにが言いたいのだとトゥーラは首を傾げる。

「いや、悪いことをしたとは思っが……」

「来てください！ あ、いえ、いらっしやっってくださいませんかっ？」

ああ、誘いたかったのか。

と、思って、考える。

ここへは幾度も来ることになると思ってはいたが、ほぼ強引に、なにかしら理由をつけて来なくてはならないことを考えると憂鬱だったので、イルアリアが誘っってくれるならその必要もなくなっただ。

「わ、わたしがお伺いできれば、いいのですが……馬が、ないので遠くには行けませんし」

「いや、おれから来る」

「！ 本当に？」

ぱっと思せられた笑顔は、ここに来るときにも見た無邪気なものだ。

なんとなく、懐かれたかもしれない、と思っ。

「末番街にある武具屋に、剣を頼んである。丁寧に作るよう頼んであるから、たびたび様子を見に行く必要があるんだ。そのついでよければ、ここに立ち寄ろっ」

「かまいません。わたし、待っってます」

気張られても困る勢いのイルアリアに、トゥーラは小さく苦笑をこぼした。

懐かれたらしい、ではなく、どうやら懐かれた。

「なら、次に逢ったときは、その敬語は止めにして欲しい。たぶんおれは、あなたより歳下だから」

「えっ……トゥーラさま、おいくつ?」

「成人にはまだ半年ある」

「……わたし、そろそろ十八になります」

萎れたイルアリアに微笑んで、トゥーラは玄関扉を開けながら、婚姻の適齢期だと思う。その邪魔にならないよう行動を慎まなければ、と思う半面で、ツアインの目論見が上手くいけばその必要もないだろうなど、肩を竦めた。

「アインもなにを考えているのか……」

「はい?」

「いや、なんでもない」

ツアインの目論見を見逃すつもりも、流されるつもりもないトゥーラだが、だからこそこの少女とはきちんと向き合う必要があるだろうと思う。

「また来る」

「お待ちしています」

微笑む少女に、さてどうしたものかと思いつつも、トゥーラはそこをあとにした。

幾度かイルアリアと逢い、他愛のない会話を楽しめるくらいになったときのことだ。

「逢瀬は順調のようだね」

今日は邸にいらしいツアインが、寝乱れただけではない乱れをその均衡が取れた肉体にまわりつかせながら、帰りの遅くなつたトウーラを出迎えた。

「そんな恰好のまま弟の前に出てくるな」

「そんな恰好って？ …… ああ、さっきまでフィジスを抱いていたからね」

「あのな……」

トウーラからしたら節操のないツアインは、溺愛するツェイルへのその愛をすべて注がないせいか、フィジスという妻を得る前まではあちこちでその欲を晴らしてくるということが多かった。今でこそフィジスひとりに絞られてはいるようだが、それでも節操はないとトウーラは思っている。

一度、ツェイルにそれを見せつけるかのような行動を取ったこともあるが、なんの反応も示さないツェイルを見てからは、ツェイルが眠ったあとに欲を晴らして帰ってくるようになった。ツェイルの就寝時刻が早いので、もう少し長く起きているトウーラとはよく顔

を合わせたものだ。

だが、だからといって、トゥーラはそれを許しているわけではない。仕方ないと、同情こそすれ、ツアインの行動はトゥーラには理解し難いことなのだ。

「なんでいやそうな顔するかな。フィジスは僕のものだよ？ どうしようが僕の勝手でしょう」

「肉欲を晴らすためだけに、妻にしたのか」
「そうだよ」

にべもなく答えたツアインに、やはりこいつの考え方は気に喰わない、と思う。

「なに？ 僕が、フィジスを愛するあまりに抱き潰したとか、そう答えると思うの？」

「いいや」
「ならいいじゃない。本当はツイエルを抱き潰したいんだから。トゥーラも、そうだろう？」

意味ありげなにやりとした眼差しに、腹が立ってぎろりと睨みつけた。

「あんと一緒にするな」

「本当はツイエルを抱きたくて仕方なくせに」

「おれはあんとは違う」

「僕みたいに我慢しないで、その欲はどこかで吐いたほうがいい。あ、僕はトゥーラでもいいよ。だってトゥーラは、ツイエルとそっくりだもんね。フィジスより具合がよさそうだ」

「気色悪い！」

まんざらでもなさそうな様子 of ツアインに、本気で怖気が走って
一歩後退した。

「あはは。冗談だよ」

腹を抱えて笑い始めたツアインに、しかし本気で言った可能性を
否定できなくて、そこからさらに距離を稼いで剣の柄を握った。

「冗談だって言ったのに……」

一頻り笑ったあとに、ゆらりと身体を起こしたツアインは、壁に
身体を預けつつトゥーラを見やってくる。

その瞳に浮かぶ狂気に、言い逃れできない恐怖を感じた。

「ツェイルの代わりなんて、どこにもいないよ」

これほどたちの悪い人間はいない。笑っていたかと思えば、その
笑いを催した狂気を隠しもせず、実の弟にぶつけるのだ。

それほどまでにツェイルを溺愛し、執着しているのなら、なぜ手
放したのだと、トゥーラは震えそうになる身体を抑えて強く睨んだ。

「だったらなんで、イルをあの人に……っ」

「殿下？ 殿下なら仕方ないよ。だって、約束したから。殿下はそ
の約束を果たしてくれただけ」

「たかだか口約束ごとき、あんたなら跳ね除けられただろうが！」

「そう、口約束。でもね、殿下はそれを果たしてくれたんだよ」

ふふ、とツアインは笑む。

「僕のツェイルへの愛を、殿下は認めてくれた」

それはとても嬉しそうで、幸せそうな笑みだ。
見たこともないようなものを見せられた気分になって、トゥーラは困惑する。

こんな顔ができる男だっただろうか、この兄は。

「だから僕は殿下がわりと好き。人間離れたあの感じも、ツェイルを愛しているその姿もね」

「……恋敵、だろうが」

「そうだね。でもわりと好き。嫌いにはならない。トゥーラは……
そうでもなさそうだね」

ツェイルを奪っていった男を、わりと好き、なんて言うツァインが信じられない。いや、もともと嫌いなものすらもなく、なにごとにも無関心なツァインが、ツェイル以外で好き嫌いをはっきりさせるのも、珍しいことだ。信じられない。

「おれは、嫌いだ……あんな男……イルを奪った男なんか！」

「……ふうん？」

「イルはおれか、あんたのものになるはずだったんだ。イルを護れるのは、おれたちだけのはずだったんだ。なのに……なのに、なんで……なんでイルを！」

握った拳で、がんつ、と強く壁を叩く。

ツァインは無言でその様子を眺めていたかと思ったら、はあ、とため息をついた。

「なんで今、それを言うかな」

「なんだと」

「ツェイルはもう、四年も前に、殿下のものになった。今さらだよ、

トウーラ

「そんなのはわかっている」

わかっている。もう遅い。今さらだ。それでも、どうしても、その想いは昇華できない。

「無理だつてわかっているのに……まったく、さすがは僕の弟だよ」

「一緒にするなっ」

「トウーラ」

笑いともつかない顔で、ツアインがじっと見つめてきた。

「僕みたいになったらいけないって、わかっているだろう？　なら、そうすべきだ。わかるよね」

「……諦めると、言いたいのか」

「いいや。認めろつて、言いたいの」

「なにを認めると？」

「僕らは、ツエイルを幸せにできない」

ぐさりと、胸を剣で貫かれたような痛みが、心に響く。

「僕やトウーラでは、ツエイルが望むものを、与えることすらできない。わかる？　ツエイルの孤独は、僕らが埋められるものではないんだよ」

ぐつと、歯噛みする。

わからないものだったらよかつたのに、わかることだから、余計に言葉を紡げない。

認めたくないのだ、本当は。

ツェイルを幸せにできない、自分を。
サリヴァンだから、ツェイルは幸せになれるのだと。
ツェイルの幸せは、メルエイラの名を背負ってでは得られない
と。

認めたくない。
信じたくない。

「おれは……っ」

ツェイルが好きだ。

きょうだいとしてではなく、ひとりの人間として、男として、ツ
ェイルが好きだ。

サリヴァンの妻となり、子を育んでいる今のその姿を見ても、ツ
ェイルが好きだ。
諦められない。

それくらい恋慕している自分を、トゥーラは自覚していた。

「認めろ、トゥーラ。じゃないと、前に進めない」

「認められるわけないだろ！」

こんなに、好きなのに。

こんなに、恋しくてならないのに。

こんなに、いとしくてならないのに。

別の少女にツェイルの面影を追ってしまうほど、どうしようもない
く焦がれてしまっているのに。

「……今、ブラグフランの娘のことでも、考えた？」

「なっ……！」

くすりとツアインが笑った声を聞いたあと、ちらりと脳裏を過ぎ
ったイルアリアの姿に、トウーラ自身、愕然とした。

「ふふ……そう、なら、前に進めるだろうね」

「なんの……ことだ」

「今はいいよ。ゆっくりでも。とにかく前に進んでくれたら、いい
から」

ふふふ、と意味深な笑みをこぼしたツアインは、身体を預けてい
た壁を離れ、トウーラに背を向けた。

「僕はフィジスをもう一抱きしてくるよ。ツェイルのことを考え出
したら、止まらないからね」

「アインっ!」

「トウーラは初心だねえ」

ははは、と笑って手のひらを振るツアインに、衝動的になにかも
のを投げつけたくなったトウーラだが、生憎とそういう衝動を潜ま
せているきょうだいたちがいるために、簡単に持って投げられるも
のをメルエイラの邸は置いていない。

剣を投げつけてやるうかと思っただときには、もうそこにツアイン
の姿はなかった。

「くそ……アインの奴!」

がんっ、と拳で壁を殴るも、今度は痛いだけだった。

意味深な笑みだけを残して立ち去ったツアインが、その理由らし
きものをトウーラに寄越したのは、それから数日後のことである。

トウーラは愕然としたのではなく、今すぐにも逃げ出したいという情けない衝動に駆られ、それを見てしばらくはメルエイラの邸に帰らず、騎士団の宿舎に引き籠もる生活をした。

Plus Extra : ムルエイラ末弟事情録 7 (前書き)

ツエイル視点です。

その日ツェイルは。

たまたま、街をひとりで歩いていた。

ひとり、といっても、ひとりにさせてくれない騎士たちが多くいるので、代表でユグドが一緒にいたけれども。

気分は、ひとりである。

しかし。

「……………トウーラ？」

ふらふらと歩いている弟の姿を見つけて、あれ、と首を傾げる。

「姫？」

もうそう呼ばれていい歳ではないのだけでも、と思いながら、気分はひとりだがユグドに視線を上げる。

そう、ユグドがいると、思い切り首を上を折らなければならないから、視線を上げることになる。

「あれ……………トウーラ？」

「……………そのようですね」

ユグドに確認して、やはりあのふらふらとした姿はわが弟である

と確信したツェイルは、気分をひとりからふたりにして、ユグドの隊服の袖を掴むと引っ張り、トゥーラを追いかけた。

「トゥーラ」

その背に呼びかけ、だが振り向いてもらえない。

「トゥーラ、トゥーラ」

二度、呼んだ。それでも振り向いてもらえない。

「トゥーラ！」

「！は？ イル？」

叫んだら、気づいてくれた。やはり弟トゥーラだった。

トゥーラと逢うのは久しぶりだ。このところ顔を見せてくれなくなっていたので、どうしているのかと気になっていた。

しかしながら、どこか生気を感じさせないトゥーラに、ツェイルは首を傾げる。あの生意気な態度がないのもおかしい。不機嫌そうないつもの表情もない。

「……変な顔」

「おい……おれはおまえとほとんど同じ顔だぞ」

あ、と気づく。

「……間違えた」

「おいこら」

「変な感じがする」

「はあ？」

あながち外れてはいないと思うが、トゥーラの顔がおかしいのは、その表情がいつもの不機嫌そうなものではないからだ。変な感じがする、というほうが当たっているだろう。それ以外になんと表現すればいいのか。

「……疲れてる？」

ああそつだ、力が感じられない。疲れきって、どうしようもなさそつだ。

「……べつに」

ふい、と顔を逸らしたトゥーラは、いつもの不機嫌そうな表情になつていた。

こころ表情を変えるのも、珍しい。

「トゥーラ」

「なんだ」

「なんでここにいる？」

ここはヴァンニという街で、メルエイラの邸がある街ではない。そもそもヴァンニは、邸よりも民家や商家が多く、貴族らしい貴族はヴァルハラ公爵の別邸、つまりツェイルが暮らしている邸だけだ。メルエイラの邸がある街も貴族街ではないが、それにしてもトゥーラがふだん歩いているような街ではない。用事があるとしたら、この街を通過点にしなければならぬ街へ行くということ、それでも馬か車が必要になるだろう。

だが、トゥーラはツェイルが捕まえられたように、ひとりだ。愛馬は連れていない。それなのに帝国騎士団の隊服を着ている。

あべこべな、とツエイルが思っても、おかしくはないだろう。先の表情や後ろ姿のこともある。

「おまえに……」

「わたし？」

「逢おうかと思って……やめたところだった」

素直ではない弟の性格は、よく知っている。この性格だから、どうやらサリヴァンと上手く折り合いをつけられていないことも、ツエイルはわかっている。

サリヴァンに逢うかもしれないと思って、ツエイルに逢うのをやめた、わけではないだろう。ほかに理由があるはずだ。

「仕事は？」

「城に詰めていたから、休暇を押しつけられた」

「なら、三日は休めるな」

「ああ。なんだ？」

様子がおかしい弟を、たまには姉として、話くらい聞こうと思う。

「ユート」

サリヴァンがユグドを「ユート」と呼ぶから、ツエイルもユグドをそう呼ぶ。見上げて呼んだ彼は、承知したと言わんばかりに頷いた。このところのユグドは、ツエイルがひとりになりたいときに必ずついてきていたので、ツエイルの行動範囲を理解している。

「あちらに」

促されたのは、広場の片隅だ。

ユグドの隊服を引っ張るのを止めると、代わりにトゥーラの隊服を掴み、引っ張る。

「あ、おい、イル。急になんだ」

「お菓子」

「は？」

「お菓子、食べたいから」

ツェイルはひとりになりたいとき、とはいっても必ずユグドあたりがそばにいるのだが、決まって露店で売られている焼き菓子を買って食べている。食べ終わったら少し休んで、帰っている。

いつもは自分で買う焼き菓子を、今日はユグドに買ってもらってトゥーラを引っ張りながら広場の片隅に移動した。

「あげる」

「は……相変わらず意味不明だな、イル」

よくトゥーラに言われる言葉は、久しぶりに聞いた気がする。ツェイルとしては、なにが意味不明なのが、意味不明なのだが。

「ユートにもあげる」

「隊長にもって……ますます意味不明だ」

首を傾げているトゥーラは無視して、気分がひとりのときでもあげている焼き菓子を、ユグドの手のひらに乗せる。一口大のそれはころころと転がって、トゥーラとユグドの手のひらをいっばいにした。

「素直に受け取るなよ、隊長」

「わたしは隊長ではないよ」

「皇弟騎士隊の連中は変わり者揃いだ」

「……それもそうだね」

トウーラはユグドに敬語を使わないし、ユグドもトウーラには敬語を使わない。

その関係がちょっと羨ましいと思わないでもないツェイルは、とりあえず焼き菓子を口の中に放り込み、そのサクツとした触感ととろりとした甘みに満足しておく。

「なにかあつたのか」

紙袋に入っている焼き菓子の半分を食べ、しぶしぶ食べているよくなトウーラの姿を見てから、ツェイルは首を傾げて問うた。

「なにかつて……なに」

「……この前、ブラグフラン伯爵のこと、ナインに話した。ナインがどうにかするって言ったから、トウーラのところの話がいったと思うけど」

もしそのせいなら、申し訳ないことをさせてしまったと、ツェイルも反省している。ツェイルが動けばそれでよかったのだが、動くなと皇弟騎士隊の彼らに止められてしまったのだ。ツェイルを止めた騎士、副隊長であるナイレンにその後を訊いたら、ツェイルやトウーラが動いていると聞いた。

「兄さまはあのとおりだから、だいじょうぶだと思うけど……トウ

ーラには、無理をさせたかもしれない」

「アインはよくておれは駄目なのかよ」

「兄さまほど、トウーラは強くない」

腕っ節ではなく、とトウーラの双眸を真っ直ぐと見つめる。

髪はツェイルと同じ淡い金色のトウーラだが、瞳は薄茶色で、少し青っぽい。昔は似たような髪型をしていたからよく間違われたものだが、今ではその違いや身長差があつて、顔が似ているという程度だ。弟というには、もうこんなに大きくなってしまったのだと思うと、少し寂しい。

「……べつに、困ったことにはなっているが、負けているわけではない」

ツェイルが伝えたかったことは、無事にトウーラへと伝わったらしい。むすつとした顔はそのままだが、ツェイルの言葉に怒っているわけではなさそうだ。

「なにを、困っている？」

「聞いてないのか？」

誰になにを聞くのだ、と首を傾げたら、ユグドが口を開いた。

「成人したらすぐに結婚するという話を、ツァインから聞いたが……そのことか？」

え、とツェイルは驚いた。

「婚約者がいたのか？」

と訊いたら、深々とため息をつかれた。

「いない」

「でも……結婚って」

「アインが勝手に決めてきた」
「……それが、困っていることか？」

顔を引き攣らせているところを見ると、どうやらそれが困ったことらしい。否定もしない。

「そうか……トウーラも、結婚するのか」

「おれ、も？」

「ネイが、ラクと結婚するって」

「なっ……ネイがああ術師とっ？」

どうやらそれは知らなかったらしいトウーラに、サリヴァンの侍従であるラクウィルと末妹シユネイの話をしたら、心底いやそうな顔をされた。サリヴァンとも上手くいっていないトウーラなので、もちろんラクウィルとも上手くいっていないトウーラである。しかしながら、ツアインと同じ反応をしている。

「ネイはまだ成人もしてないんだぞ。なにを考えているんだ、あの術師」

「ラクは騎士だ」

「あれは術師だ。剣より、天恵のほうが強いだろ」

「……そうなのか？」

「史上最年少で天恵術師になった拳句、どんな天恵を受けても影響されない異形の術師として、名が残っている。術師団長ですら、あの術師のことは未だ警戒したままだ」

知らなかった、と今さらだが凹む。いや、凹んだところでラクウィルの存在が変わるわけでも、見る目が変わるわけでもないが、知っておくべきことだろうと思うと、サリヴァンの妻として情けない。

「落ち込むなっ」

「だって……知らなかった」

「知っていたらなにか変わったのか？ ネイとの結婚はなくなるのか？」

「変わらない」

「だったらいいだろうが」

そのとおりだ。

「……トウーラはなんでも知っている」

「おまえな……おれをなんだと思っているんだ」

「弟」

「それで済ませるな。おれはもう半年後には成人するんだぞ」

「大きくなつたなあ」

ツェイルがサリヴァンに輿入れするとき、まだ視線は下にあったのに、今では見上げなければならぬ。大きくなったものだ。それは身体だけではなく、心もだと感じると、やはり少し寂しくなる。弟は、ずっと弟だけれども、いつまでもそのままではいられないのだ。

「なんだ、その顔」

「……寂しい」

「はあ？」

「ネイが結婚して、トウーラも結婚する」

「……おれは、その結婚が困ったことだと、肯定したはずだが？」

ああそうだった。

シユネイのことよりもまず、トウーラのその話だ。

「なにが困るんだ？」

「おれは結婚なんてする気はない」

「……なんで？」

「なんでって……」

とたんに気まずそうな顔をしたトゥーラは、そっぽを向いてその表情を隠してしまう。追いかけてもよかったが、言葉を濁したその態度が気になった。

「……トゥーラ」

「姫」

なんで、と問おうとしたら、ユグドにそれを遮られた。

「そろそろ、公子がお目覚めになります。帰られませんか」

「あ……」

息子オリヴァンが昼寝をしているから、こつして街に出てきたのだった。それを思い出して、しかしトゥーラも気になって、迷ってしまう。

「帰れ。おれも帰る」

顔を背けたままのトゥーラはぶっきら棒だ。

「……家に、帰るのか？」

「宿舎だ。今家に帰る気はない」

仕事は休暇を押しつけられたと言っていたから、宿舎に戻る必要はないはずだ。

「……トウーラ」

ツェイルは食べ残した焼き菓子の袋をユグドに任せると、トウーラの隊服の袖を再度、掴んだ。

「イル？ うわっ」

引っ張って、立ち上がる。

「帰ろう」

「おい！ おれは宿舎に……イル！」

ぐいぐいとトウーラを引っ張って、強制的にはあるが、ヴァルハラ家に招くことにした。

その選択が、果たして正解であったかは、別として。

Plus Extra :メルエイラ末弟事情録 7 (後書き)

*100話めです。わお) (/ 。

Plus Extra : ムルエイラ末弟事情録 8 (前書き)

トゥーラ視点です。

見られなくなった。

この、情けない姿を。

今までになく、荒んでいる心を。

だから、騎士団の宿舎を追い出されて実家に帰れと上官に怒鳴られても、言い返す気力もなく、ましてツェイルに逢おうなどとも思わなかった。

それなのに、身体は勝手に、心は勝手に、ツェイルに逢いたがった。ヴァルハラ家を目の前にしたとき、これまでになく動揺した。愛馬もそばになく、歩いてここまで来た自分の行動に愕然とした。なんで、と思って逃げ出して、けれども街に出ていたらしいツェイルに捕まったときは、幻覚か夢でも見ているかのような気分だった。だがその気分も、ツェイルが申し訳なさそうにブラグフラン伯爵の話を持ち出したときに、現実に引き戻された。拳句、情けなくなっている理由と、心が荒んでいる原因まで知られ、その現実に引き戻された精神は軽く混乱した。

イルアリアとの結婚。

出逢ってまだ一月か二月だというのに、婚約期間も短く、成人を待つて結婚することが、ツェイルによって決められていた。

横暴だと、ツェイルに喰ってかかったのは、その誓約書を見せられた瞬間だ。しかし、決めたことは覆すつもりのないツェイルによって、押し伏せられた。今度は、殺す、と脅されただけではない。

トゥーラ自身、ツアインのその化け物じみた力に、本当の意味で振り伏せられたのだ。

『いつまでも甘えていられると思わないことだよ、トゥーラ』

ツアインはそう言った。鞘におさめられたままの剣で、トゥーラの腹を殴りつけて。

『メルエイラの名を背負う者なら、なおさらだ』

トゥーラを、文字通り力で振り伏せたツアインは、トゥーラが大勢にしていたツェイルの剣を、目の前で真つ二つに折った。それだけでなく、どうやったらそうまでできるのかというほどに、天恵を使つて粉々にした。

『甘ったれたその考えは捨てる』

いつになく否定的であったツアインは、自分がそれまで使つていた剣を、トゥーラの腹を殴つたその剣を、粉々にした剣の代わりにするかのようになり、トゥーラの前に投げ置いた。

『使え。メルエイラの剣だ』

それは、父も、祖父も使つていた片刃の剣だ。幾度か打ち直されて新調しているが、どうやらまた新しく打ち直されているようで、装飾が少しだけ変えられていた。

受け取るのがいやで顔を背けたら、胸倉を無造作に掴まれて、庭に投げ飛ばされる。窓など開け放たれていたわけではないので、派手な音を立てて窓や木枠を壊し、トゥーラは欠片で頬や手のひらを切つて血を流したが、ツアインの無表情が反応することはなかった。

痛みに顔をしかめつつ身体を起こして、また片刃の剣を目の前に放り投げられた。

受け取らなければ、殺されるかもしれない。

そう、本気で思ったのは、力加減もなく投げ飛ばされたからで、呼んでもいないのに姿を見せたツアインの精霊ヴィーダヒーデが、ツアインを諷めようとしていたからだった。

『邪魔するな、ヴィーダヒーデ』

と、ツアインは軽くあしらい、無理やりその姿を消してしまったけれども。

充分に、ツアインの本気は伝わってきた。

ツアインの恐ろしさはわかっていたし、知っていたつもりだったけれども、こいつにだけは敵わないと、本能が感じていた。

それが悔しくてならない。

負けたくないのに。

その肩に並びたいのに。

見上げてばかり、いたくないのに。

なんて情けないのだろう。

勝ちたいものには勝てず、欲しいものは奪われたまま取り返すこともできず、なにも成せない己れは、なんて無様なのだろう。

「トウーラ……トウーラ？」

顔を上げると、泣きたくなくなるほど眩しい、ツェイルがいて。

「イル……っ」

縋りつくようにその身体を抱き込めば、確かなぬくもりを感じた。

「……やっぱり、なにかあったんだな」

ほんほんと、まるで子どもを宥めるように背中を撫でられると、
たまらなくツェイルへのいとしさが込み上げてくる。

「イル……イル、なんで？」

「え？」

「なんで、出て行つた？　なんでメルエイラに残らなかった？　な
んであの男を選んだんだ？」

「……トウーラ」

「おれもアインも、おまえを護るって言ったじゃないか。おまえを
幸せにしてやるって、言ったじゃないか。なんで……なんであの男
を選んだんだよ」

ツェイルがメルエイラを選んでくれていたら、ツアインのあの恐
ろしさも、少しは変わっていただろうか。

これほどまでに情けなくなることは、なかっただろうか。

「……わたしは、サリヴァンさまが好きだ」

「なんで、イルっ」

するりと、確かなぬくもりが腕の中から抜けていく。追いかけて
腕を伸ばし、かろうじて捕まえたけれども、ツェイルを再び抱きし
めることはできなかった。

「なんであの男なんだっ」

どうしてメルエイラを選んでくれなかったのだと、責めるように
叫んだら、ツェイルは泣きそうな顔をして首を左右に振った。

「サリヴァンさまがいい……だって、わたし……護りたい」

「あの男はおまえの強さにつけ入っているだけだ！ あんな……自分の身すら護れないような、非力で軟弱な男……っ」

グツと、身を引こうとしたツイエルを、強い力で引き留める。もう少し力を加えれば、押し倒すことだってできるだろう。

だが、押し倒したところで、なんの意味があるのだ。

そう思うと、押し倒そうかと思った心が、ぎりぎりのところで理性を総動員させてくれる。

ツイエルが欲しい。

けれども、欲しいのはその身体ではない。だから。

「イル……なんでだよ……なんで、おれを選んでくれないんだよ」

もう意味を成さない言葉ばかりが、口を突く。言ってもどうしようもないのに、なにかが変わるわけでもないのに、止められない。

「おれはイルが好きなのに……アインだって、イルが好きなのに……」

「……こんなに、こんなに……愛しているのに」

「トウーラ……」

「誰にもやりたくない。誰にも……誰にも」

答えはもうわかっている。それでも、諦められない。ツイエルから直接、突きつけられるような言葉を聞いた今でさえも、そのいとしさは変わらない。

なんて、情けないのだろう。

自分の心一つ、隠していられない。

「……サリヴァンさまは、わたしに涙を、思い出させてくれた」
「え……」

「それが、始まり。わたしの天恵を受け入れて、笑って、優しく抱きしめてくれたのも……そのときが初めてだった」

ぼつり、ぼつりと話し始めたツェイルに、トウーラは魅入る。
なんて穏やかな顔をしているのだろうと、愕然とした。

「目の前で、人を壊してしまったときも……サリヴァンさまは……
微笑んで、お、おいでって、言ってくれた」

ぼろりと、ツェイルの目から、大粒の涙がこぼれ落ちる。

「わ、わたし、人、壊して……ころ、殺して、しまったのに……わたしの、手は、もう、人の血で、汚れきっているのに……おいでって、言ってくれた。抱きしめて、くれた」

ぼろぼろと涙を流すツェイルは、泣いているのに、悲しそうではなかった。なにかずっと強い安堵に包まれて、護られていた。

「ずっと、欲しかったものを……サリ、サリヴァンさま、持ってた
……っ」

ああ、やはり。

やはりツェイルは、メルエイラでは得られないものを、サリヴァンに見つけたのだ。

それなら、どうしたって、どう足掻いたって、トウーラは敵わない。敵うわけもない。

「わた、わたし……っ……サリヴァンさまに、要らないって言われたら、

も、生きられない」

たとえば、メルエイラという絶対の安全が得られる場所でも、ツェイルはもう二度と、戻らないのだろう。いや、戻れないのだ。サリヴァンという、いとしい人を見つけたがゆえに。

「サリヴァンさまが、いいの……っ……わたし、サリヴァンさまがいい……っ」

くしゃつと顔を歪めたツェイルが、と盛大な声を上げて泣き始めた。

それはトゥーラが、メルエイラの者たちが、それまで見ることさえなかったツェイルの涙で、声で、心からの願いだった。

「イル……おまえ」

「サリヴァンさまあ……っ……サリヴァンさまああ」

ツェイルの盛大な泣き声は、聞きつけて駆けつけた侍女のリリヤ、ユグドを始めとした在中の皇弟近衛騎士隊の彼らに宥められても止まず、さらには息子のオリヴァンに任せても駄目だった。

「あーらら、でっかい泣き声ですねえ」

侍従のラクウィルが漸く姿を見せた頃には、ツェイルを泣かせた張本人であるトゥーラにはもうどうしようもなくなっていたときだ。

「姫、ひいめ、姫、ラクですよー」

手のつけられない状態になっているツェイルを、ラクウィルはひよいと抱き上げて、ぽんぽんと背中を撫ぜる。もちろん泣き止むは

ずもないので、ツェイルを抱え直したラクウイルは途方に暮れていたトウーラたちを振り返ると、にこりと笑った。

「オリヴァンを頼みますよ」

そう言って、ツェイルごと、ふっと姿を消した。おそらくはその天恵を使って、サリヴァンがいるところに、ツェイルを連れて行ったのだろう。

ひどく泣かせてしまったことに罪悪を感じたトウーラだったが、あれだけ大きく泣く声を聞いて、ほっとしていた。

ツェイルが泣いている姿を見るのは、これで二度めのことだ。しかも一度めのときは、あんなふうに盛大に泣くのではなく、ただただ静かに涙を流し続けるだけだった。おそらくはメルエイラの家で泣いたのも、あれが最初で最後だっただろう。泣きたいときに泣ける、なんて器用なことも、できるツェイルではなかった。

だから、安堵した。

昇華させられずにいた想いは、もしかしたら、これだったのかと思っほどこ。

「トウー？」

「……オリヴァン」

ふっと息をついたら、母に振られてしまったオリヴァンが、トウーラを見上げていた。

「トウーも、なく？」

「おれが？ まさか」

「ないで、いいんだよ？」

そんな顔でもしているのだろうか。

まさか、と否定しながら、ぼんぼんとオリヴァンの頭を撫でたとき、ぼたりとその手の甲に、雫が落ちた。

「トウー？」

「……なんでもない」

一粒だけ零れた涙を否定して拭くと、トウーラは苦笑した。
なにかがすんと、音を立てて、落ちていった音が聞こえた。

Plus Extra : ムルエイラ末弟事情録 9 (前書き)

トゥーラ視点です。

頼んでいた短剣が完成したという連絡を、鍛冶屋の老爺から受けたその日、夕暮れどきになってトウーラは末番街エンバルへと赴き、見惚れるほどの出来栄えとなった短剣を受け取った。

「立派だ」

「それはようございました。いただいた料金が少し多ございましたので、少し軽いですがこちらも」

無駄を嫌う老爺は、負荷なく過負荷なく、剣を拵える。渡しておいた料金に見合った分以上とも思えたが、装飾もなにもない、本当にただの短剣であったので、作ってくれた礼を述べて受け取った。

イルアリアと逢ったのは、その帰り道だ。

「トウーラさま？」

瞬間的にぎくんとしたのは、おそらくは結婚話をブラグフランから聞かされているだろうと、思ったからだだった。

「ああ、やっぱりトウーラさま。このところ来てくれないから、どうしたのかと思っていたの」

振り返って見たイルアリアは、いつものように無邪気な笑みで、

トウーラを見上げている。

「……………買いものの帰りか」
「ええ。出かける前にちょっといろいろあって、遅くなってしまったの」

もう日没を迎えるというのに、イルアリアはひとりだ。さすがに夜になるという時刻に女性の一人歩きは見過ごせないので、送ろうと申し出る。

「気にしないで。通い慣れた道だもの」
「いや、夜はなにかと物騒だ。おれは騎士だし、馬もあるから、こちらのほうこそ気にせず、送られてくれ」
「でも……………」

渋る様子から察するに、やはりあの話聞いたのだらうと、トウーラは息をついた。

「イルアリア嬢」
「は、はい」
「おれの名は、トウーラ・ウエル・メルエイラだ」
「え……………メルエイラ、って」
「ああ。あなたの、結婚相手だ」

トウーラを見上げたまま硬直したイルアリアは、しかし次の瞬間、その目を涙で潤ませた。

「……………なにを泣く」
「だ、だって……………」

ツェイルの泣き声を聞いてもそれほど動揺しなかったトゥーラなので、イルアリアに泣かれてもとくに驚きはしない。なぜ泣かれるのか、不思議なだけだ。

「おれが相手では、やはりいやか」

「そ、そんなこと！」

「なら、なぜ泣く」

「トゥーラさまがメルエイラの……結婚する人だったなんて、知らなかったから！」

「……おれも、こうなるとは思っていなかったが」

想定内のことではあったが、誓約書を見せられたときよりも落ち着いている自分に、トゥーラは唇を歪める。

ツェイルのあの盛大な泣き声を聞いたとき、トゥーラの中でなにかが消えた。いや、漸く昇華された。

だからだろう。

今イルアリアを前にして、この少女と結婚するのだとわかっていても、これから始まることだってあると、思うことができる。

「本当に、本当にトゥーラさまが、わたしの旦那さまになるの？」

「ああ。歳下で悪いがな」

歳下だといっても、一年と半年かそこらではあるが。

「だから安心して、おれに送られる。それから、おれの成人にはあと三月あるが、準備しておいたほうがいいだろう。なんなら今日からでも、メルエイラの邸に来てもいいが？」

トゥーラの誘いに、イルアリアは顔を真っ赤にした。それでもやはり無邪気に笑って、トゥーラにその好意を偽りなく伝えてくる。

「準備します」

強かな少女となったイルアリアは、持っていた籠を持ち直すと、くるりとトゥーラに背を向けた。そのまま歩いて行くイルアリアの背中に少しだけ笑って、トゥーラは追いかける。

「アリア」

「え？」

「アリア。そう、呼ぼうと思う」

「……わたし、を？」

「いやと言わせない」

完全にツェイルを諦めきれたわけではないらしい、と自分に呆れる。この呼び名だけは変えたくないのだ。

「イルは、おれの宝ものだから……」

眩しいほどの光りであるツェイルを、忘れる、なんてことは、できるわけがない。トゥーラがツェイルの弟で、ツェイルがトゥーラの姉であることは、一生変わらないことなのだ。

「アリア」

「は……はい」

「帰ろう」

立ち止まってしまっていた足を促して、トゥーラは前へと進む。今ならサリヴァンと顔を合わせても、苛立つことがないかもしれないと、思った。

思った、のだが。

「気のせいだったか……」

と、イルアリアを隣に並ばせておいて、トゥーラは目の前の男にため息をつく。

「人の顔を見た瞬間にため息とは……それは少し失礼だと思うぞ」

「あんたが嫌いなんだ。仕方ないだろ」

嫌いだ、と思うから、イラツとする。

そもそも、その全身から垂れ流されている優しさのようなものが、トゥーラの性格を苛立たせるのだ。少しくらい、その無駄なものを抑えていられないのだろうか。

「なんでここにいるんだ」

「たまたま」

「ここは職人街だぞ。遊びにくるようなところ……、まさか」

「おかしい妄想をするな。知人の家がここにあるだけだ」

「知人？」

ほとんど城から出たことも、出ることもない生活をしていたくせに、と怪訝に思いながら、目の前のサリヴァンにトゥーラは首を傾げる。

今日はナイレンやユグドといった近衛騎士隊ではなく、ラクウィルひとりを連れているらしいサリヴァンとは、イルアリアと肩を並べて歩き始めたその瞬間に顔を合わせた。その顔を見たとたんにイラツとして、ため息が出たわけである。

「家と言っても、ほとんど使われていないがな。来ているというから、逢いに来たんだ」

幾分か不機嫌そうなサリヴァンは、むすっとした顔をしている。そのくせ全身から垂れ流しているのは優しそうな雰囲気、相変わらず器用なことをしていた。

「皇弟殿下がわざわざ足を？」

「事情があつて城には上がれない。おれの邸の場所も、知らせていなかった。だからおれのほうから出向いただけだ」

「……ふうん？」

珍しいこともあるものだ、と思っていると、むすっとしているサリヴァンに睨むような視線をもらう。

「なんだよ」

「おまえ……ツエイを泣かせたな」

あ、とトゥーラは顔を引き攣らせる。サリヴァンの不機嫌がツエイルに関係していると、さっさと気づくべきだった。

「なにをしたかは聞かない。だが、覚えておけ。ツエイは滅多に泣かない。それを泣かせたことを、よくよく考えて後悔しろ」

ただでさえ罪悪は感じているのに、後悔しろとまで言われた。いや、確かに泣かせたことに関しては後悔しているので、言われるまでもないことだ。

「悪かったと……思つてはいる」

「なら、謝れ」

「謝れって……」

そんな無茶な、と思ったのは、あれからずっと顔を合わせておらず、逢いに行く勇氣もなかったからだ。

しかし。

「ラク、運べるか」

「座標はちょーつとずれますが、たぶん」

「なら頼む」

「はいはい」

え、と思ったときには、ラクウイルの満面笑顔が目の前にあった。まさか、と感じたときには、すでに遅い。

「ちょ……おい、待て！ おれは彼女を」

イルアリアがいるのに、と声を上げたら、ラクウイルの笑みが深まった。

「ご安心を。お連れさんでしょ？ 申し訳ないですが、ご一緒してもらいますよ」

と言って、とたんに身体へ軽い重みが圧しかかる。グツと堪えて次に目を開いたときには、見慣れた邸が目の前にあった。

なんとというか、ラクウイルのこの空間を移動してしまえる天恵は、ときとして厄介である。

「はああ……やっぱり、人数が増えるだけ目的地はずれますねえ。」

姫の真ん前に到着予定だったんですけど、邸の前が精いっぱいですよ」

「ここまで来られれば充分だ。すまない、ラク」

「いいえー」

チツと舌打ちする暇もなく、もちろん踵を返す余裕すらもなく、近づいてきたサリヴァンにがっしりと手首を掴まれた。

「ツェイに謝れ」

非力で軟弱だと思っていた男は、不機嫌なものが含まれるだけで持った力が増すらしい。ぐいぐいと引つ張られ、イルアリアがいるのに振り向いて声をかける時間すら与えられず、邸の中に連れて行かれた。

「おい、おれは彼女を」

「ブラグフラン伯爵の娘は、おまえの婚約者だろう。ラクに任せておけ」

「し……知っているのか」

「ツァインはおれの狂犬だぞ」

情報は筒抜けだ、と言わんばかりのサリヴァンに、低く舌打ちした。

そうして、戸惑いや迷いなど抱いている暇もなく、ある部屋の前で立ち止まったサリヴァンは、扉を叩くことなくいきなり開けると、トウーラを放り込んだ。

「おれはツェイのことになると、心が狭くなるんだ」

サリヴァンも中に入ってきて、扉は閉められる。なんて横暴なこ

とをしてくれるのだと、体勢を整えて文句を言ってやるつもりとした、矢先だ。

「トウーラ……」

ぎっくん、と身体が強張る。

「サリヴァンさまも……どうしたのですか」

その声に、振り向くこともできず、トウーラは俯く。グッと強く、拳を握った。

「トウーラを捕まえた。おまえを泣かせたから」

「サリヴァンさま……」

「城でも邸でも捕まえられなかったが、エンバルで見つけた。だから捕まえて連れてきた」

振り向けずに会話を聞いていたら、サリヴァンの手が肩にかかり、予想外なほど強引に身体の向きを変えられる。

ばちつと、目があった。

「……イル」

未だ目が赤いままのツェイルが、こちらを見ていた。すぐにその視線は外したが、不機嫌なサリヴァンによって背中を押され、よるめきながらツェイルの前へと歩み出る羽目になった。

「……トウーラ」

その、落ち着いた静かな声に、ぎゅっと瞼を閉じる。

今、言わなければ、自分はずっとツェイルと顔を合わせることもできず、一生を後悔したまま生きることになるかもしれない。

そう思えば、言葉は生まれてくる。

「じゅん」

「え……」

「泣かせるつもりは、なかった。いや、泣かせたかったのかもしれないけど……でも、諦められなかったから」

拳を握って、勇気を出して顔を上げ、ツェイルの視線を真っ向から受ける。

薄紫色の双眸は、綺麗に凧いでいた。

見たとたんに、ほっとする。

「わたしは、謝らない。後悔していないから」

「……ああ」

「わたしに必要な人だから」

「うん」

「欲しかったから」

「わかってる」

答えなんて、初めから知っていた。

どうしようもないことも、なにもできないことも、わかっただけで足掻いていた。

この心を、どうすることもできなくて、ただそれだけで、我儘を言っていただけだ。

トウーラは、子どもだったのだ。

「思えば、おれたちは一度も、イルの我儘を聞いたことがなかった。

なんでも言ってくれたらよかったのに、イルは言わなかった。だから……本当は、イルの我儘を聞きたかったんだ」

「……うん。これは、わたしの我儘」

「ごめん」

「うん」

ずっと手のひらを伸ばしてきたツェイルに、頬を優しく撫でられる。感じたぬくもりにやっぱりいとしさが込み上げてきて、触れていて欲しくて手のひらを重ねた。

「イル」

「うん」

「イル」

「うん」

「ずっと……好きだった」

誰よりも、なによりも、好きだった。

弟としてではなく、人間として、男として、好きだった。

「誰にも渡したくなかった……ずっと、そばにいて欲しかった」

「……うん」

「愛して、欲しかった」

「愛してるよ、ずっと、メルエイラの皆を」

「……そう、だな」

上手く笑えているだろうか。

これが失恋というものなら、なんて痛いのだろうとは思っけれども、笑っていたい痛みだから、トゥーラは微笑む。

「好きだよ、イル」

「うん、わたしも」

いとしさと、悲しさと、切なさと。

込み上げてきたものすべてに、なぜだろう、涙が浮かぶ。その顔を見られたくなくてツイイルを引き寄せて抱きしめると、いつかの時のように、ぽんぽんと優しく背中を撫でられた。

「好きだよ……好きなんだよ、イル」

できることなら、その心を手に入れたかったけれども。

「ありがとう、トゥーラ」

背中を撫せてくれる小さな手のひらは、ただただ優しく、柔らかかに、トゥーラを包むだけだった。

Plus Extra : メルエイラ末弟事情録 9 (後書き)

これにてPlus Extra『メルエイラ末弟事情録』は終幕
となります。

トゥーラはここからイルアリアと恋するかと思われず。

リクエストありがとうございました。

読んでくださりありがとうございました。

Plus Extra : ムルエイラ末弟事情録 追記 (前書き)

サリヴァン視点です。

ばさりと乱暴に、束となっている紙が机に置かれる。乱暴に扱われたそれは整頓されていたのに乱れ、それまで綺麗に整えられていたほかの書類にも影響を与えた。

「丁寧に扱え」

「それほどのものじゃないから」

ふん、と楽しげに鼻を鳴らしたツアインは、睨むように見上げたサリヴァンに肩を竦めると、机の向かいにある長椅子に腰かけた。

「……なんだ、これは」

「僕とトウーラが調べたものだよ」

「調べた？」

なにを、と首を傾げれば、聞いたことのある家名を乱暴に扱われていた紙束に見つけた。

「オル・ブラグフラン……?」

「善行なるブラグフラン伯爵の、裏事情つてところ。まあ、暇なきにでも読んで。きみが読み終わる頃には終わっているだろうから」「事後報告にするな。説明しろ」

「いやだよ、面倒な」

「ツアイン……」

面倒だ、邪魔だ、それだけですぐ動いてしまえるその行動力には目を瞠るが、それだけで動かれてしまうのもなにかと厄介だ。事後報告しかされないのも問題なので、ツアインが持つてきたそれを先に読もうと、サリヴァンは手を休めて紙束を持った。

「機械業に手を出しているのは珍しくもない、が……ふうん、反皇弟派、ね。いつのまにそんな言葉が生まれたのか……それで、カルディナ家の力を借りたのか、ツアイン」

「そのためのフィジスだからね」

「……申し訳ないことをさせているな、おまえたちには」

苦笑すると、なにが、と言わんばかりに首を傾げたツアインが、視界に入る。

相も変わらず、ツアインは自分を道具のように思っている。自分以外にも、道具と成り得るものすべて、利用しまくっている。なんて男だ。

「これから、どうするつもりだ？」

「あとは勝手に崩れると思うよ。今、機械業でカルディナ家に敵うところは、いないからね。いや、そもそもこの皇都で、カルディナ家に敵う商家なんてないね。吸収されたらお終いだよ。残るは……」

「残るは？」

「トウーラのお嫁さんを、最終的にいただくだけかな」

ツアインの弟の名を聞いて、その顔が脳裏に浮かぶ。

基本的にツエイルと顔が似ているトウーラは、しかしツエイルにはない気の強さがあって、いつも睨まれてばかりだ。なぜ睨まれてばかりなのか、その理由はわかっているが、嫌われ続けているのは少し居心地が悪い。

「嫁、ねえ……」

先日、ツェイルを返せと言われたとき、サリヴァンは確信したことがある。だから嫌われているのかと、睨まれてばかりの理由も確認できた。

「ああ、やっと気づいた？」

「気づくもなにも……あれほどわかり難い奴はいない」

「そうかな？ けっこう素直な反応だと思うけど」

目の前のツァインが、わかり易いというよりも隠す気がない行動を取るから、トゥーラのそれは影に隠れてしまうのだ。

ツェイルと結婚して四年、漸くサリヴァンはトゥーラのそれに気づくことができた。

「トゥーラはねえ、ずーっと、ツェイルが好きなんだよね。ツェイル以外は見えていないから、すっごく視野が狭いんだよ」

「そのようだ」

「わが弟ながら、情けない。まあ、今回のことでだいぶ揉まれたと思うから、少しは視野も広がっただろうけど」

「……なにかしたのか？」

「ん、殴った」

「なぐ……、は？」

どこに繋がりがあるのかわからないツァインの発言に、サリヴァンの目は丸くなる。

「傷だらけの血だらけにしてやった。懲りたと思うよ」

「懲りたって……そういう問題か？」

そこまでやる必要があったのか。そもそも、なぜそこまでやったのか。

「あれは甘ったれなんだよ。視野が狭いから、なおさらね。僕やツエイルみたいな戦いも経験してないし、言わば温床の中で育ったから」

「あ、いや、それはそうかもしれないが」

「稽古以外で自分の血も見たことのない奴が、ツエイルを護る、なんて……バカが言うことだよ」

「……きついことをよく平気で言えるな」

「それくらい考えが甘いんだよ。だから殿下も、遠慮なんか要らないんだからね」

遠慮というか、それすらできないくらい、嫌われているのだが。その隙すらないのだが。

「あれにツエイルを護る資格なんてない。そう思っつかまわないから」

「思うもなにも……もうこれ以上、メルエイラの者たちを関わらせろるわけには」

「侍従長にシュネイを奪われたのだけれど」

「あ……」

それはいつのまにか、勝手に、そうなっていただけだ。気づいたときにはそういう雰囲気になっていて、いいのだろうかと考えているうちに婚約していて、そうして唐突に「そろそろ結婚する」とさりりと報告されたのだ。それに、ラクウィルの楽しそうで幸せな顔を見たら、やめるなんて言えるわけもない。

「ま、いいけどね。シュネイも甘ったれだけれど、あれはあれで、テューリと同じように、分を弁えている子だから」

「……すまない」

「べつに殿下に関わらせたくないってことじゃないよ。侍従長が気に入らないだけだから」

「ラクならシュネイ嬢を幸せにする」

そう言ったとたん、ツアインの顔が歪んだ。

「はん……可愛い妹たちを搔つ攫っていく男どもの言葉なんぞ、信じられないね」

それは兄の顔で、妹たちを可愛がるあまりの、不機嫌な姿だった。

「エーヴィエルハルトはまだいいほうだけど、あの笑顔は胡散臭いし」

おまえの笑みも充分胡散臭いが、と思いつつも口にはしない。

「殿下は言うまでもなく、ひ弱だし」

むかつときたが、抑えておく。

「侍従長は博愛的過ぎで、信じられたものじゃないし」

まあそれはわかる気もするが、とそこは賛同しておく。だがラクウィルがいてこそサリヴァンはこうして生きているので、ツアインにはそれをわかって欲しかった。

「ラクがいなかったら、おれは確実に今ここにはいないぞ」

「そう、そこが困るところ。僕らメルエイラは殿下を護るために在る。それなのに、護り切れなかった。侍従長がいなかったら、僕らは今頃どうなっていたか」

少しはラクウイルをわかってきているらしい。

もしかしたら、だから気に入らないと思っっているのかもしれない。

「あれ……そういえば、侍従長は？」

「ん？ さっきまでそこにいたが……」

ラクウイルはあくまで侍従であるから、サリヴァンの補佐をするといっても散らばった書類を整頓したり、部屋を掃除したり、休憩の用意をしたり、身の周りの細かな世話をするだけなので、動き回る文官たちとは違う。なので、先ほどまでお茶の用意をしていたはずだった。

「僕が来たときにはいたけど……茶器はそのままだね」

ツアインと話し始めてから姿を消した、ということは、天恵でどこかに飛んだのだろう。予告もなく姿を消すなんて、珍しいことだ。

「シユネイ嬢の声でも聞こえたのか……？」

「それぞれ。どういうことなの？」

「いや、ラク自身もよくわかってない。ただ、聞こえるらしい。シユネイ嬢の声が」

「天恵？」

「猊下に訊いたが、確かにそんな天恵は存在するらしい。それでも、ラクにその天恵があるわけではないようだぞ」

「愛の力とか言ったらぶっ飛ばすよ？」

危づく言つところだった。

う、と言葉に詰まって、どう誤魔化すか考えようとした、その矢先のことである。

「……、ツエイ？」

ツエイルの声が、聞こえた気がした。

「ちょっと、僕の真似しないでよ」

すぐに反応を返してきたツアインが、座っていた長椅子を離れる。

「どうやら侍従長は、ツエイルのところに行っていたみたいだね」

と、ツアインが言った瞬間、視認するよりも早くその声が、耳に届いた。

「サリヴァンさまああ」

という、ツエイルの泣き声だ。そのすぐ、大泣きするツエイルを抱えたラクウイルが、ふわりと目の前に降り立った。

思わず、目がまん丸になる。
なにごとだ。

「どうした」

「いやねえ、なんか聞こえるなあと思って、行ってみたらこれで……どうしたんでしょうね？」

困ったように笑ったラクウイルは、机を回ってサリヴァンのところに来ると、盛大に泣くツエイルをサリヴァンの膝に下ろした。

とたんに、ツェイルがしがみついてくる。

「サリヴァンさまぁ……っ」

ぎゅうぎゅうとしがみついてくるツェイルの顔は悲惨なほど涙に濡れていたが、必死にしがみついてくるその力と、自分をひたすら呼ぶ声に、サリヴァンの頬は緩む。

「どうした、ツェイ」

わんわん泣くツェイルは、サリヴァンの問いには答えられないほどであったが、それでもかまわなかった。

可愛い。

たまらずぎゅっと抱きしめて、ぽんぽんと頭を撫で、背中を撫でた。

「おれが行ったときにはもうそんな状態で……すごく面白いことになってましたよ」

「面白い言っな」

「だって面白いでしょ？ 顔、悲惨ですし」

「ラク」

茶化すラクウィルを諫めて、とにかくツェイルを宥めるため、膝に抱いたまま背中を撫でる。

漸く落ち着きを見せても嗚咽は止まらず、サリヴァンにしがみつく腕の力も弱まらなかった。

「うーん……犯人はトウーラかな」

と、苦笑したツェイルが顔を覗かせて言った。

「トウーラが？」

「ツェイルの精霊がそう言ってるって、僕の精霊が言っただから、
そうだろうね」

「……なにがあっただ」

「まあ、予想はできるけどね」

「なんだ」

「爆発したんでしょ」

「ばくはつ？」

うーん、と顔を引き攣らせたツアインは、なぜか少しずつ後退し
ていき、部屋の扉に背中をくっつける。

「ほら、僕が殴ったから」

「懲りさせたから、なんだ？」

「つまりそういうことだよ」

と、ツェイルに視線を向ける。

「は？」

意味がわからない。

「ツェイルのこと、押し倒したかも」

「……、んなつ？」

「ごめんね」

「ツアイン！」

「僕からもあとで制裁を加えておくから、じゃ！」

くる、がちや、ばたん、とあつというまにツアインは逃げた。

つまり、ツアインがトゥーラにしたその結果が、ツェイルに影響した。ということだ。

ツェイルが泣いていようものなら怒り狂ってもおかしくないツアインであるから、この場を逃げたのは、それくらいトゥーラにしたことはきついものだとは自覚があるからだろう。

なんて男だ。

「どれだけひどい仕打ちをしたんだ、ツアインは」

「トゥーラに、ですか？」

「ああ」

「んー……どうでしょう？ それもあつたんでしようけど、あの場の雰囲気はちよっと、違いましたよ？」

「違った？」

「なんとというか、こつ……姫を責めていたような」

まだしゃくり上げているツェイルを、ラクウィルはサリヴァンと同じようにぼんぼんと、頭を撫でる。

「切羽詰まらせたのはツアインでしょうが、それでも、爆発したというならそれが本音かもしれないわけで」

「ツェイを、責めた？ なにを？」

「そりゃあ……トゥーラは、あれでしょ」

「あれって？」

「姫が好きでしょ」

「気づいていたのか、ラク」

「ええまあ。サリヴァンに好戦的だったので」

サリヴァンにはわかり難かったトゥーラのそれは、やはりツアインが言うように実はそれほどまでに素直な反応だったのかもしれない。

「しかし難儀なことですねえ、ツアインも、トゥーラも」

きょうだいに恋するなんて、とラクウィルは苦笑する。

「だが、責める相手が違う」

「いや、間違っているわけではないと思いますよ。トゥーラにしてみたら、姫は絶対なんですもん」

「絶対でもなんでも、言いたいことがあるならおれに言えばいいんだ」

「そんな難しいこと、できるわけないでしょう。サリヴァン、あなたはトゥーラからしたら、絶対である姫を横から搔つ攫った悪人なんですから」

「悪人って……」

だってそうでしょ、と言われたら、返す言葉もない。

「そういう事情があって姫を責めて、まあ泣かせたと……そんなところですかね」

「……おれに言えばいいのに」

横から搔つ攫った、なんて、思っではいない。出逢うべくして、出逢ったのだ。

サリヴァンには、ツェイルという存在が必要だった。剣になると言った、小さな少女の生きる姿に、その美しさに惹かれた。

サリヴァンに、生きたいと思わせたのは、ツェイルだ。

やはりトゥーラは責める相手を間違えたのだ、とサリヴァンは思う。

「ツェイ、ツェイ……もう泣かなくていい。おれがいる」

深く抱き直して、閉じ込めるように、腕に力を込める。

サリヴァンにすべてを預けてくるツェイルは、いくらか落ち着いたとはいえ、それでもまだ涙は流していて、このままでは枯れてしまいそうだった。

「ツェイ、だいじょうぶだ。おれがいるんだから」

囁けば、頷きが返ってくる。声は届いているらしいとわかると、ほっとした。

「サ、サリ、サリヴァ、さま……っ」

「ああ。おれだ。おまえの、サリヴァンだ」

「サリ、ヴァ、さま……っ」

ここまで泣き続けるツェイルも珍しい。こんなふうになるまで、どれだけ責めたというのか。

そう思うと、むかむかとしてくる。

「ぶん殴ってやる」

一発でもいい。殴れるものなら、殴ってやる。

そう心に決めた。

「どこでそんな言葉憶えてくるんですかねえ」

というラクウィルのため息は、決意したサリヴァンには聞こえていなかった。

Plus Extra : 悠久のなかで、与えられた。(前書き)

聖王猊下視点です。

Plus Extra : 悠久のなかで、与えられた。

書物を読み始めると止まらない。捜しものがあつて書庫に入つてしまつと、捜しているうちに余計な書物にも目がいつて読み始めるので、書庫に籠もりつ放しというのは当たり前だ。

「猯下、そろそろ出てきてくださいませんか」

というアルトファルの声が聞こえたが、返事もせず読み耽る。

世界中から集めた書物は、それほど魅力的なわけではないのだが、ただ生きている自分の暇つぶしにはちょうどいい。

「猯下！」

ぱつと目の前が明るくなったとき、自分の目が夜に馴染んでいたことに気づいた。

「……なんだ、アルト」

「まったく……聖王というのは便利ですね。吞まず食わずで一月、よくこんな暗闇に籠もっていられますこと」

聖王に食事など意味がない。そんなことは百も承知だろうに、変わり者の最高位精霊は食事をさせたがる。自身だつて食事は要らないのに、趣味だと言つて人間が食すものを調理したがるのは、やはりあれのせいかと思う。

「さあ、書庫から出てください。上の塔にだって読んでいない書物はありますでしょう？ そちらに移動してください、聖王猊下」

追い立てられるように、仕方なく書庫を出る。居座り続けてもよかったのだが、そうするとアルトファルが口煩く言葉を連ねるので、そうされるよりかはいい。

地下の書庫を出て階段を上り、途中で面倒になったので、自分の影から白い杖を取り出すと石畳を叩く。アルトファルの力と己れの魔術を応用させた力で、塔の最上部へと移動した。

掃除の行き届いた空間は、壁一面が書物の棚になっているが、どこを見ても埃一つない。

白い杖を影に戻し、開け放たれている窓の近くに腰かけると、適当な書物を自分に引き寄せ、書庫にいたときのようにまた読み始めた。

「なんじゃ。相変わらず籠もっておるのか、聖王よ」

と、声をかけられたとき、また邪魔が入ったことに顔をしかめた。

「空は晴れ渡り、雲は流れ、空気は澄み、緑は活気づいておる。これほどの世界は久しぶりじゃというのに、おぬしはなにをしておるのじゃろうのう」

窓辺に腰かけた青年は、ふわふわと灰色の髪をなびかせ、真っ黒な瞳を楽しそうに歪めている。

「……なに用だ、記録者」

記録者、と呼べば、青年は肩を竦めて薄い唇も歪ませる。

「われが来てはならぬ理由などなかるう。われはそう、記録者じゃ。大いなる意思に惑わされぬ、自由な記録者。おぬしのこともわれの頁に記録されておる。おぬしがわれを拒むことなどできはせん
のじゃよ」

にやり、と笑む記録者に、腹を立てても詮無い。記録者は、世界を記録する孤独な存在、聖王である己れもまた孤独な存在であり、互いに持っている心がある。

はあ、とため息をついた。

「聖国に今、記録できるものなどなかるう」

「そうじゃのう……うむ、これはわれの気紛れじゃ。記録でなく、面白そうじゃったから、来たのじゃよ」

「大した気紛れだ」

「われはおぬしと違って忙しいので」

「ならば立ち去れ。わたしを巻き込むな」

「そもゆかぬのじゃがのう……」

「立ち去れ」

記録者を追い出そうとしたときだった。

ふと部屋の扉が、なんの予告もなく開かれ、そこからひよっこりと小さなものが顔を見せた。見覚えのある幼子だ。

「……サリヴァン？」

おや、と思う。

まだこんなに小さかっただろうか。

書物を閉じ、卓に置いて立ち上がると、こちらとじつと見ている幼子に歩み寄る。

「ひとりでここまで来るとは……アルトはどうした」

腕を伸ばし、抱き上げると、幼子は首を傾げてきよんとんとする。まだ言葉もわからぬ幼子だっただろうか。

「聖王よ、それはおぬしが知る人の子ではなかるつよ」

と、記録者が楽しげに言った。

「なんのことだ」

と振り向けば、記録者の姿はもうそこにはなかった。いったいなにを面白がってここまで来たのか、と思いながら、腕の幼子を抱き直して最上階の部屋を出た。

「アルト、サリヴァンがひとりで上まで来たぞ。なにをしている」

塔のどこかにいるだろう精霊に呼びかけるも、姿を見せる気配がない。なにをしているのだと思ったとき、ふと幼子に銀色の髪を一房、握って引つ張られた。

「……じいちゃ？」

「？ なにを言っている？」

幼子の発する言葉は難解だ。アルトファルなら理解できるだろうが、自分には無理なことである。

階段を降り切って、アルトファルがいそうな場所を歩いた。アル

トファルなら外の菜園か、厨房か、そのあたりにいるのだろうと当たりをつけたのだが、そこまで行く前に、広間でその姿を見つけた。

「アルト、サリヴァンが……」

と言いかけて、言葉が詰まる。

「養父上！」
ちちじいさん

呼ばれ慣れたその名称が、聞き慣れた声で聞こえて、不思議に思った。思わず腕の中の幼子を見つめる。

「サリヴァン？」

この幼子は、サリヴァンだと思うのだが。

「養父上、おれはこっちですよ」

聞き慣れた声に説明されて、顔を上げる。見慣れた顔があった。

「サリヴァン？」

大きいサリヴァンだ。

おかしいと思ってまた視線を下げると、小さなサリヴァンがいる。

頭が混乱してきた。

これだから聖王というのは不便だ。時間の感覚がおかしいせいで、ときに現実がよくわからなくなる。

「養父上、ですからおれはこっちです。その子はオリヴァンですよ」

「……オリヴァン？」

「おれの息子です。忘れましたか？ 養父上が助けてくれたわが子ですよ」

目の前の大きなサリヴァンに言われて、記憶を探る。

そういえば、なにか、そういつたこともあつた気がする。あれは確か、初めてサリヴァンの、国に対する想いを聞いたときのことだ。

「……あの片翼か」

「思い出していただけましたか？」

苦笑した大きいサリヴァン、いや、大きく成長したわが子同然のサリヴァンに、ああ、と頷く。

ついでに、もうサリヴァンは塔を出て、街に降り、その生活を得たことも思い出した。そして、腕に抱いている幼子のこと、産まれたときに一度逢っていると思ひ出し、それから数日はサリヴァンのところにいたときの記憶も甦る。

「そんなにおれと似ていますか、オリヴァンは」

「……そうだな」

ふつと息をつき、幼子を見やる。

「おまえがまだ小さいのだと、勘違いしていた」

「はは、そのようですね」

幼子に、オリエ・ヴァラディンと、オリヴァンという名を与えたのは、自分だ。だが、サリヴァンの幼い頃によく似た面差しをしているので、てっきりサリヴァンがまだ小さいものと勘違いしてし

まっていた。よく見れば、オリヴァンの瞳はサリヴァンよりも濃く、そして薄紫っぽい感じがある。目許はサリヴァンよりきつく、強そうな意思がそこに宿っている。総合的にサリヴァンに似ているが、一つ一つに違いがあった。

「……ひとりか？」

オリヴァンに、サリヴァンと違う部分を形成させた少女がいないことを不思議に思っ、どうしたのかと問えば、サリヴァンは少しだけ悲しげな顔をした。

「連れてきたくなかったので、おれひとりです。ああ、ラクやユートはいますよ。外で待っています」

「……なにかあったか」

なにもなく、サリヴァンが自分のところに来るとは思い難かった。理由を訊ねれば、サリヴァンは俯く。

「さぁり？」

オリヴァンが、父の様子がおかしいことに気づき、不安そうに名を呼ぶ。だが、サリヴァンは顔を上げない。

「サリヴァン」

どうした、話してみる、と昔そうしていたように頭を撫でてやると、それを真似てオリヴァンもサリヴァンの頭を撫でる。ゆっくりと顔を上げたサリヴァンは、笑ったらいいか泣いたらいいのかわからないとでもいうような、そんな顔をしていた。

「公式発表が、されてしまって……」

「発表？」

「反対、したのですが……突っ撥ねられて」

なんのことだと、忘れ易いが憶えてはいる己れの記憶を探る。

しかしどうしても思い当たらなくて、仕方なく控えているアルトファルに目配せすると、サリヴァンと同じような顔をしたアルトファルは口を開いた。

「半年ほど前、皇女殿下がお生まれになりました。名を、ライレイ殿下と。オリヴァンさまは、ライレイ殿下との婚約が決まったのです」

「……産まれたばかりの赤子と、婚約？」

早過ぎやしないか、と思ったが、自分と比べて生の短い人間なら、早いほどいいのかもしれない。

「……いやなのか、サリヴァン」

「当たり前です。兄上がなにを考えているのか、おれにはわからない……オリヴァンを城になんて、なぜ……いくら国主の天恵があるからとはいえ、横暴としか言いようがありませんよ。オリヴァンはまだ三つで、ライレイは産まれたばかり……まだどちらも親の手が必要で、おれとツェイにだって手放したくない可愛いわが子なのに……」

自分のような人生が、わが子にも降りかかるかもしれない。オリヴァンはそう慄いたのかもしれない。奪われるかもしれないと、恐怖しているのかもしれない。

「このままでは、オリヴァンが……っ」

確かに、皇女の婚約者ともなれば、それが幼い内に決まったならなおさら、すぐにも城に召し上げられることになるだろう。幼い内からオリヴァンは城で生活させられることになり、また両親から引き離されるだろう。

そんなことを、サリヴァンが享受できるわけがない。

「……久しぶりに、表に出るか」

「え……養父上？」

「わたしが出れば、おまえが考えた末路にはなるまい」

可愛いわが子だ。サリヴァンがオリヴァンを愛するように、自分にだってサリヴァンを想う気持ちがある。

オリヴァンを抱き直して一歩踏み出すと、慌てたサリヴァンに引き留められた。

「養父上になにかしてもらおうと思って来たわけではありません！」

「……聖王の言葉は絶大らしい。効果はあろう」

「違います！ おれは、ただ……どうしたらいいか、わからなくて……気づいたら、ここにいて……」

無意識に、頼ってくれていたらしい。迷惑をかけるつもりでここに来たわけではないとサリヴァンは言うが、頼りにされるのは思いのほか嬉しいものだ。これくらいは頼れと、むしろ言いたい。

「サリヴァン、わが子よ。わたしを父と呼ぶなら、たまには頼るがいい。おまえと同じ刻を歩むことはできぬが、それくらいはできよう」

「違います、養父上！ おれは……っ」

「サリヴァン」

この悠久の時間を生きることが、どれほどの孤独と苦痛にあるか。そんな中で、捨てられたわが眷属を拾い、育てたことが、どれほど満ちた時間であったか。もうここには帰るまいと感じたあの瞬間の、空虚なものといったら。

だからこそ、こうしてときどき逢いに来てくれることが、とても嬉しい。

「わたしは、今も昔も、これからも、おまえの父でありたいのだ」

想う心があることの、どれほど幸せなことが。
今ならよくわかる。

「養父上……」

そう呼ばれることが、この空虚な日々を満たしてくれる。

それは聖王という理が自分を縛っていても、唯一感じられる喜びだ。

「わたしは人間のやることに干渉はできぬ。だが、わが眷属に干渉することは可能だ。わたしは聖王として、おまえの父となろう」

聖王の理は覆すことなどできない。だが、盲点を突くことはできる。そのおかげでわが子を護れるのだから、聖王という存在そのものも利用しよう。サリヴァンは、悠久の中で、自分に与えられた眷属、わが子なのだ。

「ですが……養父上」

まだなにか言い募ろうとするサリヴァンの頭をくしゃっと撫でて

黙らせると、今度こそ表に出るために、オリヴァンをしっかりと抱いて歩く。自分の影から白い杖を取り出し、石畳を叩いて、移動した。

「……じいちゃ」

この塔、天王廟とも呼ばれている淡の塔から移動する瞬間、オリヴァンがまたそう言った。

「……それはもしや、わたしのことか？」

「じいちゃ」

「わたしはレイシエントだ」

「じいちゃま」

もしや、じいさま、と呼びたいのだろうか。

じいちゃ、じいちゃま、とにこにこしながら自分を呼ぶオリヴァンに、ふっと、久しぶりの笑みがこぼれた。

「ああ……わたしは、おまえのじいさまだ」

頬を擦りながら答えると、オリヴァンはよりいっそう、嬉しげな笑みを浮かべた。

記録者は、ふむふむと、笑った。面白い記録が残ったことに、満足した。人間に干渉できない神々の長が、人間のように微笑んでいる

る事態が、とても愉快だった。

「さて 大いなる意思 よ、おぬしはどういたすかのう。稀代の力を持ちながら捻くれ、しかし従順であった聖王は、おぬしの袂を離れた。おぬしの 声 に、聖王は反発するじやろう。面白くないか、不愉快か、不服か、大いなる意思 よ」

くくく、と笑ったあと、晴れ渡った空を見上げる。

「これが世界じゃ、大いなる意思 よ」

青い空は記録者の声を吸い上げ、風に乗せる。

「われも行くとしよう。いとしき者の袂へ」

記録者の声は、空気に馴染む。

その姿が、風と消えるのと同じく。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 1 (前書き)

本編から十数年後の物語となっています。

また、視点もツエイルやサリヴァンではありません (登場はします)

。ご注意ください。

今でも思い出せる光景がある。

父が、これからずっと共に在る人だと言って連れてきた少年との、その出逢い。

瞬間的に涙が溢れたあのことを、今でも鮮明に思い出すことができる。そのとき胸を突いた感情も、忘れることなどできないけれども、そのときはよくわからなかった感情だ。今でも、わからないと思うことがある。

「殿下、ライレイ・ラディーダ殿下」

老齢の女官マルサムの声に、ぼんやりとしていた思考が帰ってくる。ゆっくりと振り向けば、マルサムは深々と頭を下げ、その後ろに思考を奪われていたその人を連れていた。

目にしたとたんに、口許が綻ぶ。

座っていた椅子を離れ、駆け寄ろうとしたら、顔を上げたマルサムに「はしたない」と視線で諷められる。慌てて立ち止まり、ふわりと舞った衣装の裾を落ち着かせた。

「いいよ。おいで、ライラ」

その人が最初に呼び始めた特別な名を聞くと、もう我慢など効か

ない。またすぐ駆け出して、その腕の中に飛び込んだ。

「オリヴァン」

植物や動物をこよなく愛するその人からは、いつも太陽と緑の香りがする。今日も抱きつけば、草花の優しい空気が香った。

「また土遊びをしてきたのね、オリヴァン」

「向日葵の種を植えてきた。咲いたらライラにあげるよ」

「見せてくれるだけでいいわ。摘んでは可哀想なもの」

「それなら、うちに招待しなくてはならないね」

くす、とその人は笑う。その笑みは暖かくて、優しくて、それだけのことなのに涙が出そうになる。

ああ、生きてくれている。生きて、こうしてわたしの前に、存在してくれている。

なぜそう思うのかはわからなかったが、その人の優しい笑みを見るといつもそう心が感じる。

「甘やかさないでくださいまし、公子。今日もライレイ殿下は勉強から逃げてしまわれたのですから」

「それはだめだな。よし、ライラ、エンバルの市歴史第八章三節一項は？」

急に始まった勉強に、ライラは慌てて記憶の抽斗を探る。しかしすぐには答えを言えなくてもってしまつと、その人は肩を竦めて苦笑した。

「暗唱できたら招待してあげる」

ひどい意地悪だ、と思った。ライラは歴史の勉強が好きではあるが、覚えが悪い。だからたくさん時間をかけて記憶する分、そこから引き出すのにも苦労するのだ。

「憶えているのよ。でも、すぐに言えないの」

「無理に覚えなくてもいいけど、憶えて損はない。勉強がいやになった理由はなにかな」

「……考えごとがあったの」

「どんなこと？」

「いろいろよ」

「抽象的な答えが返ってきたなあ」

あなたのことよ、とは、言いたくても言えなかったから、誤魔化した。その人が誤魔化されてくれるとは思えないが、よほどのことがない限り追及してくることはない。

「ああ、マルサム、お茶はいいよ。今日はもう帰るから」

お茶の用意をしようとしていたマルサムを止めたその人に、まだ来たばかりなのにとライラはハッと顔を上げた。

「今日は公子が好きなセイ茶を用意しておりましたのに」

「わざわざありがとう、マルサム」

「ごめんね、とマルサムに謝ったその人は、抱きついていたらライラとの距離も開けてしまった。

「もう帰るの？」

「これから行くところがあるから、挨拶に來ただけなんだ」

「どこに行くの？」

「北領の街。本格的な雪が降る前に、砦の整備をしなくてはなら
ないから」

「北領の砦……随分と遠いわ」

「そうだね」

「そんなのいや。離れたくない」

今だって、数日に一度、逢えるか逢えないかという日々を送って
いるのに、北領の砦にまで行かれたら、もっと逢えなくなってしま
う。

「我儘だね、ライラ」

「だって離れたくないもの」

開かれてしまった距離を縮め、再び抱きつくと、その人は肩で笑
った。けれども、その手のひらで、優しく背を撫でてくれた。

「すぐに帰ってくるよ。ノアウルを置いてくから、なにかあったら
ノアウルをおれのところに飛ばせばいい」

「だめよ、ノアは連れて行って。ノアはオリヴァンのそばにいるべ
きなだよ」

「ノアウルはライラの騎士だ。ライラのそばに在るべきなんだよ」

「違うわ」

「ライラ」

もう幾度も呼ばれている名を、諫められるように呼ばれると、言
葉が紡げなくなってしまう。

「いい子だね、ライラ」

ふわりと、頭を撫でられた。

窺うようにその人の、不思議な色をした双眸を覗き込む。ライラと同じように透明感の強い碧い瞳だが、たまに縁だけ仄かに碧くなつて、薄紫がかった硝子玉のような瞳になるのだ。

今日もその綺麗な色だ、と魅入ってしまう。

「お土産、楽しみにしておいで」

「……ねだってもいいの？」

「なにがいい？」

「優しいオリヴァン」

「……、ははっ」

一瞬だけ呆気にとられたような顔をしたその人は、しかし次にはライラの目にも可愛らしく笑つて、抱きしめてくれた。

「可愛いライラ、できるだけ早く帰ってくるよ」

そう言ってくれたその人は、最後に一際強くライラを抱きしめて、そつして足早に部屋を出て行った。

椅子に促しもしなかったことに気づいたときには、もうその姿はない。残っているのは、緑の清々しい香りだけだ。

知らずため息をつくとき、聞いていたマルサムに苦笑された。

「風のようにでしたね、公子は」

「相変わらずなにを考えているのか、わからないお人でもあるわ」

「殿下が可愛くてたまらない、とわたしには見えませんでしたよ」

「……どうかしら」

本当に、そう思っているのか、ライラにはわからない。自分を想つてくれているその心を疑うつもりはないが、無理をしているので

はないかと、たまに思う。

この胸にある想いは、幼い頃から抱えているこの感情は、いつだってその人を求めてやまない。だから、ライラのほうが想いは強いだろう。

それゆえに、不安でならない。

離れたら離れた分だけ、寂しいくせに。

「お茶をちょうだい、マルサム」

「畏まりました」

それまで座っていた椅子に戻ると、ライラはマルサムに、その人に出すつもりで用意していたお茶を頼む。茶葉だけの味で仄かに甘いセイ茶は、寂しい気持ちで埋め尽くされそうになっていたライラの心を、僅かにでも温めてくれた。

「この感情は厄介ね……」

誰に言うでもなく呟くと、マルサムの心配げな雰囲気伝わってくる。笑みを浮かべて誤魔化そうと思ったが、無理だった。

「……ごめんなさい、マルサム」

「いいえ、ライレイ殿下」

そう、ライラは殿下と呼ばれている。姫、と呼ぶ人もいるが、基本的に殿下と呼ばれる。

自分のその地位が、その人との溝であり、絆でもあることが、ライラは悲しい。

ライレイ・ラディーダ・ヴァリアス。

大層な真名を賜ったものだ。皇位継承第一位であり、このヴァリアス帝国の皇女である自分が忌々しい。

ただの『ライラ』でいられたらいいのに、と思うことは、高慢だ
ろうか。

ふう、とため息をついたとき、扉がこんこんと叩かれた。マルサムがすぐに対応して、小さく開かれていた扉が大きく開かれたとき、ライラは思わず肩を落としてしまった。

「どうして来てしまったのよ、ノア」
「オリヴァンに頼まれたので」

白い騎士服、肩にかけた艶やかなマントの背中には、その紋章を背負っているのだろう。にこりと微笑んだ彼は、連れて行ってとそ
の人に言ったはずの、騎士だった。

「オリヴァンと一緒にいて」
「それは無理ですよ。どう見てもライラのほうが、腕っ節は弱い
すから」

「わたしは城にいるのよ？ どこに危険があるの」
「さまざまなところに」

食えない笑みに、反論の余地を失う。

「どうしてオリヴァンを護ってくれないの、ノア」
「あんなに強いのに護る必要がありますか？」
「どこに危険が潜んでいるか、わからないと言ったのはあなたよ」
「オリヴァンならひとりでもだいじょうぶですよ。信じられない
ですか？ ライラの片翼でしょうに」

片翼、という言葉に、ふと息が詰まる。

騎士から視線を外した。

「それを言うなら、わたしもオリヴァンの片翼よ」

「だから、おれはおふたりを信じます。だいじょうぶ、オリヴァンは北領の砦に行っただけですから」

「心配ではないの？」

「メルエイラの者が同行するので、そういった心配はありませんね」

ああだめだ、やっぱりこの騎士に口では敵わない。それを思い知ると、苦笑がこぼれた。

「あなたの口にかかれば、オリヴァンは世界最強になるわね」

「だってオリヴァンですもん」

騎士の馴れ馴れしい言葉遣いを、マルサムは注意しない。その人に対してもそうであったように、マルサムは見守っている。それはその人と、この騎士と、そしてライラが幼馴染であるからだ。人の目があれば注意しただろうが、ないならこんなときまでライラが皇女であり続ける必要がないようにとの、配慮である。

だから、ライラは気を楽にして、騎士であるノアウル・ラッセとの会話を楽しむ。

「座って、ノア。お茶を楽しみたいの」

「お招きありがとうございます」

「オリヴァンの話をしてくれる？ 今日向日葵の種を植えたそうね」

「ライラは本当にオリヴァンが好きですねえ」

ノアウルを向かいの椅子に促しながら、ライラは笑顔で「ええ」と答える。

「婚約者だもの」

父が、一生を共に在る人だと言って連れてきた少年、それがその人だ。

オリエ・ヴァラディン・レイル・ヴァルハラ。

ライラの父皇サライの弟の息子で、ヴァルハラ公爵家の嫡子、そして産まれたときからの婚約者。

さらには、ライラの片翼。

「べつに婚約者じゃなくても、ライラはオリヴァンが好きでしょう？」

「……ええ、そうね」

片翼だから好き、というわけではない。この心は、オリヴァンを心配し護りたいと思っっているけれども、好きという感情はべつものだ。出逢った瞬間に恋をしたのだと、ライラは自覚している。

オリヴァンはライラの愛する人だ。

片翼だから、愛しているのではない。

オリヴァンだから、愛しているのだ。

この気持ちの真実を誰が理解してくれるだろう。

「上辺だけ、とっているのでしょうか……」

「え？」

なんでもない、と首を左右に振り、ライラは眩きを胸の奥にしま
い込んだ。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 1 (後書き)

オリヴァンとライラの物語を、ということが始まりました。
リクエストありがとうございます。

読んでくださりありがとうございます。

これからも拙作をよろしくお願いいたします。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 2 (前書き)

ライラ視点です。

ヴァリアス帝国には、天恵という神から授かりし力がある。それは属性を持ち、その属性が及ぼす力を操ることができるものだ。さらには、属性に分かれた精霊と契約することで、操れる力の幅も広がる。

しかし、天恵には法則があつた。ひとりの天恵者に対し、操れる属性天恵は一つなのである。ゆえに、天恵術師と呼ばれる天恵者は、火を操れる者ならば火術師、水を操れるものならば水術師と呼ばれた。

だが、それらの法則から外れた者が、いないわけではない。稀に二つの天恵属性を持った術師がいる。本来なら持ち得ない二つの力であるから、そういう者たちは代償を求められていた。

ライラはふたりほど、代償を求められて支払い続けている天恵者を知っている。

「え……北領の、皆が？」

「はい」

「そんな……っ」

マルサムが慌てて持ち込んだその情報は、ライラをひどく動揺させた。手のひらが震えていると、自分でもわかる辺りは冷静ではあ

るものの、だからとて落ち着いてなどいられない。

「ノア……ノア、どこにいるの。お願い、ここに来て」

ライラは座っていた椅子を離れ、どこにいるともわからない騎士を呼ぶ。無属性の天恵者である騎士は、皇族であるライラの声ならどこにいても聞こえるので、呼んでまもなく、どこからともなく姿を見せた。

「ライラ」

なにもない空間から舞い降りたノアウルは、その顔に険しさを刻んでいた。

ノアウルの天恵が空間を自由に移動できる力だと知っているライラは、いきなり現われたノアウルのその態度から、ライラがマルサムから聞いたばかりのことを既に承知したうえでここに来たのだと知ることができた。

「ノア、どういうことが教えてちょうだい」

「……おれも、詳しくは」

「どうして今まで教えてくれなかったのよ」

ノアウルはライラの騎士だ。けれども、ふだんからライラのそばにいるわけではない。いつもはオリヴァンのそばに控える侍従であるので、先日のようにオリヴァンから頼まれなければライラのそばに始終いることはない。オリヴァンに頼まれなければ、その騎士服すら着用しない。

ノアウルはライラの言葉よりも、オリヴァンの言葉を尊重させる騎士である。

「オリヴァンね。オリヴァンが、わたしに言う必要はないと言ったのね」

「それは……その」

「北領の砦はシェリアン公国との境目、オリヴァンが公主と対等に話せる友人であるから、砦の補修にオリヴァンが召喚されたのも頷けるわ。けれど……賊に襲われたとはなに！」

怒鳴ったライラに、ノアウルはびくりと身を震わせた。けれども、怯えることはない。その透明感の強い碧い瞳を、まっすぐとライラに向けてくる。

ああ、ここでも彼はオリヴァンの言葉を忠実に護り続けている。こうなることを、予測していた態度だ。

そう感じられてならなくて、ライラは久しぶりの苛立ちに拳を握った。

「今すぐオリヴァンのところへ行きなさい」

「……行けません」

「お行きなさい！」

「行けません。おれはあなたをお護りするよう、命じられています」

ああどうして、こんなにこの騎士は強情なのだろう。どうしてこんなに、寂しそうな瞳で自分を見るのだろう。

湧きあがる苛立ちに、手短なところにあつた扇をノアウルに投げつけた。

「行きなさいったらー！」

ライラは城にいる。

多くの騎士に、護られている。

それはライラが皇女で、国の象徴となるための刻印を背負っているからだ。

けれども、オリヴァンにはノアウルしかない。メルエイラという侯爵位を持つ貴族がそばで護ってくれているが、オリヴァンのその地位は国政に携わる者たちからは危惧されているがゆえに、積極的な護りを見せる貴族などいない。

オリヴァンはライラの片翼であるのに、護ってくれる人があまりにも少ない。

「癩癩を起すだろうから、と言っていたが、本当に起こしたか」

ハッと、その声に瞠目する。

「十五になろう淑女が、癩癩はやめておけ。嫌われるぞ」

いるはずのない人がそこにいて、思わず息が詰まってしまつ。しかも、ライラがノアウルに投げつけた扇は、その人が手に持っていた。

サリエ・ヴァラディン・レイル・ヴァルハラ。

ヴァルハラ公爵であり、皇弟であり、そしてオリヴァンの父たる人。

ライラは慌てて姿勢を正し、頭を下げた。

「申し訳ございません、サリエ皇弟殿下。無礼を働いてしまいました」

「こらこら、皇女殿下がそう簡単に頭を下げるな。やめなさい」

「いいえ、無礼は無礼にございます。お許してください、サリエ殿下」

「継承権はとうの昔に放棄したんだがなあ……どうして殿下と呼び

たがるのやら……顔を上げなさい、ライレイ」

そばに寄って来て、ライラの顎をそつと持ち上げたその人は、苦笑していた。

「どうせだからサリヴァンと呼んでくれ。父でもかまわないぞ」

「しかし……」

「オリヴァンの父としてここに来た。娘の暴走を止めるために、なにこり、と優しく微笑むその顔は、まるでオリヴァンだ。もちろん父親であるから似ていて当然だが、仕草まで似ていられると錯覚を起こしそうになる。」

「叔父上さま……」

「ん……おじうえ、ね。まあいいか。誰かおれを父上と呼んでくれないかねえ」

少し寂しそうにライラから手を離れた叔父、愛称でサリヴァンと呼ばれているその人は、息子であるオリヴァンが「父」と呼んでくれないと常から嘆く人だ。

「ライレイ、オリヴァンのことなら案ずるな。ラクヤトウーラの子どもたちが一緒だからな」

「ラクウィルと、メルエイラ候……?」

「最強だろ?」

ニツと子どものように笑ったサリヴァンは、齢四十をいくつか越えているそうだが、自分の父の弟とは思えないほど、若々しい。未だ二十代でも通るだろう容姿をしているせいで、オリヴァンとの酷似度は半端ない。

一瞬でも間違えてしまいそうだが、サリヴァンがまとう空気とオリヴァンがまとう雰囲気は天地の差がある。だからライラは見間違えることなどないが、父がオリヴァンに逢うとサリヴァンだと勘違いして抱きつこうとするほどなので、城ではこの親子を見間違える者が多かった。

「それにな、ライレイ。ラクの息子に天恵が発現する兆候が見られた。どんな天恵であるかはまだわからないが……場合によっては、ノアウルはおまえの許にいることになる」

「え……？」

サリヴァンの唐突な言葉に、頭が一気に真っ白になる。

「ノアウルはおまえの騎士だ。おまえの、《天地の騎士》だ」

ノアウルには、空間を自由に移動できる天恵がある。国境も問わない空間移動は、無属性の天恵だと教えられた。その天恵を発動できる者は《天地の騎士》と呼ばれ、皇帝のそばに必ず存在する古からの騎士だ。

「ノアは……わたしの騎士ですが……」

ふだんからそばにいるわけではないけれども、ノアウルはライラの騎士だ。侍従としてオリヴァンのそばにすることが多いノアウルはむしろ、ライラの騎士というよりも、オリヴァンの騎士であると言ったほうがいいかもしれない。

ノアウルは、ライラだけの騎士であっては、ならない。

「ノアはオリヴァンの騎士です、叔父上さま」

蒼褪めながら、ライラはそれを訴える。

「わたしだけの騎士ではありません」

「おまえの騎士だ」

「違いますっ」

ノアウルはオリヴァンの騎士なのだ。オリヴァンの《天地の騎士》なのだ。

そうでなければ、ならない。

「わたしだけの騎士ではないのです！ ノアはオリヴァンのそばにいるべき騎士で、オリヴァンの《天地の騎士》です！」

声を大きくしたライラに、サリヴァンが一瞬だけ呆気に取られたような顔をして、そのまま背後の、棒立ちして戸惑っているノアウルを振り返った。

「嫌われたものだな、ノアウル」

「いやなこと言わないでくださいよ、サリヴァンさま」

「拒絶されてるぞ？」

「悲しい現実を突きつけないでください……うう、ほんとに悲しいし」

「可哀想に」

「泣きたくなるんで言わないでくださいっ」

「ライレイ、ノアウルが泣くから、あんまり虐めてやるな」

「サリヴァンさまのせいでしょ！ ライラに責任転嫁しないでくださいよ！」

「報われないなあ、ノアウル」

「だから言わないでくださいっ！」

ああもう、とノアウルが叫んだので、ライラはふたりのその会話に思わずきょとんとしてしまう。

もしかして考え過ぎたのかしら、と思ったところで、ノアウルが蹲って泣きそうになっていた。

「あの……わたし、なにか間違えた、かしら？」

「……ノアウルはおまえの騎士だ」

「いいえ、オリヴァンの騎士です」

「それが間違いだ。いや、勘違いだな」

「……、え？」

なにも間違えていないし、考え過ぎたわけでもない。なにが勘違いだと、ライラは小首を傾げる。

「ライレイ、《天地の騎士》がいなければその存在が危うい、などとは考えぬことだ」

ハッと、ライラは息を呑む。

ライラが考えていたのは、まさにそのことだ。《天地の騎士》たるノアウルが、オリヴァンの騎士であらねばならない理由である。

「だ、だって……誰もが、信じてくれないのだもの……っ」

「……なにを？」

「わたしはオリヴァンの婚約者よ。でもそれは、オリヴァンが片翼だからじゃないわ。それなのに、オリヴァンがわたしの片翼でなければ、誰もオリヴァンを認めてくれないのよ」

言っているうちに、胸が詰まってくる。

「オリヴァンはわたしの片翼よ。わたしと同じ……その背に、刻印を持つ者よ」

言ってから、ぎゅっと手のひらを胸の前で握る。

ライラには、刻印がある。

国花ルーフを模した紋様の刻印が、背に刻まれている。

その刻印は、ノアウルのマントにも描かれている紋章だ。

その刻印を、皇帝の天恵、と誰もが呼ぶ。或いは国王の天恵とも、呼ばれている。

だからライラは皇位継承第一位であり、将来的には父の跡を継ぐことになっている。

そして、ライラと同じ刻印を、オリヴァンもその背に刻まれている。

ゆえに片翼。

ライラの右背の刻印、オリヴァンの左背の刻印、まるで翼のように印されているから、そう呼ばれている。

いや、呼ばれなければならなかった。

「皇帝国王の天恵は、本来は一つであるべきだと、皆が言うわ。分かれるのはおかしいと、どちらかが偽物だと言うわ。そのどちらかを、皆はオリヴァンにしたがるの」

「……そうだな、ライレイ」

「違うわ！ わたしの背にあるものは、刻印だけよ。力なんてないわ。あるのはオリヴァンよ。オリヴァンは偽物なんかじゃないわ！」

「ああ、そうだな。あれも、国王だ」

「そう言ってくれるのは父上と叔父上さまだけよ！」

誰もわかってくれない。オリヴァンに、皇族にあるべき天恵があるのだと、誰も信じようとしない。現皇帝の娘であるライラが正なる後継者だと、誰もが口をそろえて言う。

わたしは片翼なのに。

オリヴァンがいなければ、自由に飛ぶことなどできないのに。

「皆……皆、オリヴァンを殺そうとするの……っ」

飄々として、そんな身の危険など感じさせないオリヴァンが、どれだけ命を狙われているか、知らないライラではない。一時期はその威力が強くて、属国たるシェリアン公国に避難したくらいなのだ。

「やめて……っ……わたしからオリヴァンを奪わないでっ」

ライラはオリヴァンが好きだ。昔から、オリヴァンだけが、ライラの心を満たす。それは片翼だから、ということだけには収まらない。オリヴァンだから、ライラは恋い焦がれているのだ。片翼だから、というのは、ライラにとって後づけにもならない。

けれども、オリヴァンが片翼でなければ、誰もオリヴァンを認めたくない。信じてくれない。

皆が、オリヴァンを排除しようとする。

ライラから、奪おうとする。

「わたしのオリヴァンなの……っ……お願い、やめて」

悲しくて、泣きたくなつて、ライラは両手で顔を覆つと蹲った。

部屋の隅ではらはらと見守っていたマルサムの「姫さまっ」という声が聞こえたけれども、反応できなかった。

ただ、サリヴァンの深い、深いため息は、耳に届いた。

「ノアウル、オリヴァンのところへ飛べ」

「で、ですが」

「おまえが行かぬならクを飛ばす。ああいや、初めからクを飛ばしたほうがいいな。ツアインを連れて北領の騒動を鎮静化させたほうが早い」

「おれが行きますっ」

「おれに、おまえが未熟だと判断させた結果だ。従え」

「……っ、サリヴァンさま」

「今のおまえには、オリヴァンもライレイも護れない。あまりおれを失望させてくれるな、ノアウル」

サリヴァンの冷やかな、そしてきつい言葉が、ノアウルを責める。なぜノアウルが責められるのかと混乱しかけたライラだったが、乱れた心ではノアウルを庇うことすらできない。

「ライレイ」

呼ばれて、びっくりと肩が震える。

ノアウルを責める声はひどく冷たかったのに、ライラにかける声は、とても優しくかった。

「森の離宮において」

そう言ったサリヴァンは、ぼん、とライラの肩を撫でると、部屋を出て行った。とたんにマルサムが駆け寄って来て、その肩を抱く。

「姫さま……」

ライラはゆっくりと、両手で覆っていた顔を上げる。マルサムの心配げな顔と、そして悔しそうに頂垂れたノアウルの姿が見えた。

「……ノア」

呼ぶと、ノアウルはハッと顔を上げ、泣きそうになっているのに笑った。

「サリヴァンさまに叱られちゃいました。情けないですね」

「ノア……」

なぜそんな顔をしているのだ、と言いたかった。言う前に、ノアウルがし背を正す。

「森の離宮へご案内します」

そこは、サリヴァンと、サリヴァンが許した者しか、踏み入ることができない場所だった。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 3 (前書き)

ライラ視点です。

手入れはされているはずなのに、足許の草たちはライラの足を覆い隠し、歩みを阻む。踵の低い靴を履いてよかったと思いがら、草を踏み分けて歩いた。

「だいじょうぶですか？」

「平気。でも……ここに来るのは初めて」

「あ……おれもここは初めてです」

「……そうだったの？」

「ここは陛下の許可も必要な場所ですから」

そういえば、それもそうだ。

森の離宮は以前、後宮として機能していた。ライラが産まれる前に後宮は廃され、森の離宮となり、サリヴァンがたまに過ごしている場所になったのだ。そのせいか、サリヴァンに身近な人たちだけが立ち入ることのできる、特別な空間になっている。ライラの父である皇帝がそうしたのもあるが、いつの頃からか迷い込むことすらできない、なんだか不思議な場所になっていた。

「ここ数年はサリヴァンさまが城に滞在することもなくなって、使われなくなっていましたね」

「そうね……入口の廊下でなら、オリヴァンや叔父上さまと遊んだ記憶があるもの。あれから来ることもなくなっていたわ」

振り返ると、ライラが歩いてきた廊下は、途中から草たちの天下となつている。石畳の隙間にすら草が生えていて、手入れが行き届いていないように見えた。

「何年ぶりかしら」

「もう十年は経つんじゃないですか？」

「……そんなに、経つのね」

あの頃はよかった。オリヴァンとずっと一緒にいられる夢を、見続けていられた。オリヴァンと一緒にいることが、当たり前だった。ずっとこのままなのだ、信じて疑わなかった。

とても幸せで、至福の時間。

けれども、いつ頃からだろう。徐々に、徐々に、ライラの耳にも届くようになった。たさまざまな話があった。

サリヴァンを排そうする勢力。

父がサリヴァンを手放せずにいる所以。

サリヴァンが持っている天恵と、父が持っている天恵。

そしてオリヴァンが、左背に背負っているもの。

ライラが右背に背負っているもの。

たくさんの話が、ライラにも聞こえるようになった。

「ねえ、ノア」

「はい」

「ノアは、叔父上さまが好き？」

「いきなりなんですか？ もちろん好きですよ」

「叱られて、失望されても？」

「そう見なされて当然のことをしました。サリヴァンさまの信頼を裏切るような真似をしたのは、おれです」

素直に言ってしまうノアウルに、ライラは微笑する。

だがライラも、サリヴァンが好きだ。

自分たちはこんなにサリヴァンを好いているのに、それを信じず、あらぬ疑惑を押しつけ、排せうとする者たちがいる。それをサリヴァンの子たるオリヴァンにまで、押しつける。

どうしてこんなにも、この世界は歪んでいるのだろうか。

はあ、とため息をつきながら草花を踏み分けて、ライラはゆっくりと森の離宮へ進んだ。

奥に進むにつれ、緑は濃くなっていく。城のどこにこんな緑があるのだと思うほど、自然に溢れていた。ときおり聞こえてくる小動物の鳴き声も、風の流れる音も、ライラには新鮮だった。

「こんなに綺麗な場所もあるのに……どうしても、歪みたいのね」

「はい？」

「世界は、広いようで狭いわ」

「世界を見て回らないと、広さなんてわかりませんよ。だから人は視野が狭いんです」

まるでサリヴァンと同じのようなことを言うノアウルは、やはりサリヴァンのそばで育っただけのことはあって、当たり前のようにライラには言えないことを口にする。

少しだけ、羨ましいと思った。

ライラもノアウルのように、オリヴァンのように、サリヴァンのそばで育つことができれば、この狭い視野を少しでも広げることができただろうか。

「ライレイ、ノアウル」

その声に、顔を上げる。顔を上げて、視線は低かった。

「叔母上さま」

いつのまにか濃い緑の群れから抜け、広い場所に出ていた。小さな邸を背にしたその広い場所で、オリヴァンの母たる叔母ツェイル・レイル・ヴァルハラが、昔と変わらず少年のような出で立ちでライラを出迎える。

以前逢ったときより、さらに小さくなったのではないだろうか。そう思いながら、ライラは礼を取った。

「お久しぶりでございます、叔母上さま」

「ツェイでいい。久しぶり、ライレイ」

「はい、ツェイさま」

ライラのほうに歩み寄ってきたツェイルは、その目の高さがライラの肩くらいだ。こんな小さな人がサリヴァンの妻で、そしてオリヴァンを産み育てた。昔は随分と大きな人だと思ったのに、あつというまにライラのほうが大きくなって、なんだか複雑だ。

「お痩せになられたのでは？」

「まさか。ライレイは綺麗になつたね」

ふつと、ツェイルは淡く微笑む。サリヴァンの話では、出逢った当初はそれほど表情もなく、感情が動いている様子もなかったというツェイルだが、ライラの記憶ではツェイルのこの淡い微笑みが多い。笑わない人だったなんて思えないほど、ツェイルはとても安堵させられる笑みを見せてくれていた。

「叔父上さまは？」

「中におられる。わたしはついてきただけだから」

そういえばツェイルは、なにがあっても登城することがない。するとしたら必ずサリヴァンと一緒に、むしろ城で逢うことのほうが珍しいくらいだ。

なにかあったのだろうか。

少しだけ不安になったライラの手を取り握ったツェイルは、後ろに控えたノアウルに声をかけた。

「ノアウル、サリヴァンさまが待っておられるから、行っておいで
「えっ？」

「ライレイのそばにはわたしがいる」

追い出すかのようにノアウルを小さな邸へ走らせたツェイルは、ライラと繋いだ手を引っ張る。促されてゆっくりと歩いた。

「ツェイさま、オリヴァンは……」

「だいじょうぶ」

「でも、賊が皆に」

「だいじょうぶ」

繰り返される言葉に、どうしてだろう、安堵させられる。それまで信じられなかったのに、信じられるようになる。

誰も「だいじょうぶ」だなんて、言ってくれなかったからだろうか。

「ライレイは、オリヴァが好きだな」

言われた言葉に、瞬時に赤くなる。否定できない事実には、ライラは俯いた。

「はい……」

「産まれてきてくれてありがとうございます」

「え……?」

それはどういう意味だろう、と顔を上げたら、立ち止まったツェイルが振り向いて、眩しいものでも見ているような目でライラを見つめてきた。

「産まれてきてくれて、ありがとうございます」

再び繰り返された礼に、ライラは首を傾げた。

「……ツェイさま?」

「礼を言いたかった。それだけ。わからなくていい」

ライラに理解を求めなかったツェイルは、ライラの頬をそろりと優しく撫でると、また歩き始めた。庭なのだろう広い場所を、ただゆっくりと、緑を堪能するように歩く。

どれくらい無言で、ただ歩いていたのか。

「疲れたか?」

少し足を休めたいと思ったところで、ツェイルが立ち止まる。額くと、唐突にツェイルはその場に座った。

「緑の絨毯は温かい」

下になにも敷かず座るのは躊躇われたが、ツェイルにそう言われると心地よさそうで、子どもの頃そうしていたように、ライラも

ぼんと緑の絨毯に座ってみた。日光浴をした柔らかい草は、確かに温かい。足を延ばしてみたくなくてそうしたら、ツェイルにドレスの裾を直された。いつでも少年のようなツェイルは下衣なので、ライよりも足許は自由なのだ。

ふと、オリヴァンがいつも緑の匂いをまとわせていると、思い出した。

なにもない日は、ヴァルハラ家の邸にある庭を、こうしてただ歩いてきたのかもしれない。

「オリヴァはだいじょうぶだ。ライレイがいるから」

「え……？」

「ライレイも、オリヴァがいるからだいじょうぶだ」

ふふふ、となんだか嬉しそうに笑ったツェイルが、空を見上げながらそう言った。空を見上げているうちに、そのままごろりと上体を後ろに倒してしまう。そうしてまた、ふふふ、とツェイルは笑った。

昔からなにを考えているかよくわからない人ではあるが、ことオリヴァンのことやライラのことではこうしてよく笑っている人だ。なにか嬉しいのだというのはわかる。

だから、愛されているなあと、ライラは感じられる。

ツェイルに、ライラは愛されている。

もちろんオリヴァンも、愛されている。

「ライレイ」

「はい」

「ありがとう」

また礼を言われた。ライラの理解を求めている礼に、どうしたらいいのかわからなくなる。

「ツエイさま、わたしお礼を言われることなんて」「
いてくれるだけで、嬉しいから」

それだけでいいんだよ、と言われると、胸が詰まる。なんだか泣きたくなる。

誰か、と思った。

誰か、ツエイルのように、オリヴァンにもそう言っていてくれるだけで、ライラはこんなにも幸せで、こんなにも嬉しいのだ。

お願いだから、オリヴァンを認めて。

ライラの片翼だと。

ライラの愛する人だと。

オリヴァンだけが、ライラに自由な空を見せる。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 4 (前書き)

オリヴァン視点です。

北領の砦を襲撃した賊は、賊というには少し思慮の足りない強盗の類이었다。

「彼らのことは、おれが預かるう」

公主、或いは公王と呼ばれることが板について、早十年になろうという友人キサネの言葉に、オリヴァンは頷いて賊の処遇を任せた。

「被害はどれくらい？」

「軽傷者が数人と……せつかく直した砦の壁が全壊、かな」

オリヴァンは背後を振り向き、直したばかりであった石壁の悲惨な状態にため息をつく。僅かな綻びであった場所が、賊のせいであるから作り直さなければならぬ状態になっているのだ。出張って来てくれた職人たちに申し訳ないと思う。

「石材もこつちで用意するよ……」

「ああ、半分でいいよ。用意していた半分は手つかずで綺麗なままだから」

「すまないね、オリヴァン。うちの国がもう少し安定していれば、こんなことにもならなかったのに」

「キサネの努力は知ってる。だからそんなに落ち込まないで」

「ありがとう」

キサネの国、シェリアン公国は、公族だったキサネが国を飛び出し帝国に救いを求めることで、平和と安寧を掴み取った。だからキサネは公主で、公王なのだ。

北領の砦が賊に襲撃されたということだけで、キサネを煩わせたくないと思うのが、オリヴァンの素直な気持ちである。

「キサネが頑張ったから、今のシェリアンがあるんだ。これくらいのことはおれに任せてくれていい」

「ほんと、ごめんね」

「いいよ」

にこつと微笑み、オリヴァンは忙しいキサネを見送ると、壊された砦の修繕を再開している職人たちの中に混じり、掃除や片づけといったこまごまとした作業を手伝う。壊されてもまだ使えそうな塊は切り崩して再利用することに決まったので、一か所に集めて切り崩しができる職人の到着を待っていた。

「おい坊主、あんまり無茶すんなよ。ただでさえひよろいんだから」

「ひよろい、は余計だ。誰があんたらの手を護ったと思ってる」

「まさかおまえが剣を握るたあなあ。ちよつと見直した」

「これでも一流の剣士を師に持つてるんだけどね」

職人たちは、繊細な手を持っている。けれども反面、大雑把な性格をしている。この数日、彼らが手の回らない作業を手伝って、オリヴァンはそれを知った。彼らはオリヴァンをどこかの小間使いだと思っっているのだ、たかだか数日でそれを知ることができたのだが。

「ちびっこ共はだいじょうぶか？」

「あれくらいならね。稽古のときよりマシな怪我だよ」

「は？」

「容赦ないからね、あの子たちの師匠は」

砦の襲撃を護り切ったのは、筆頭はオリヴァンが身につけた剣であつたが、一緒に来ていた従弟たちも奮戦した。怪我をしたのは鍛錬が足りないせいというよりも、従弟たちの幼さだろう。むしろあれくらいの怪我で済んでよかつたと、安堵するところだ。

「おめえも休んだらどうだ？」

「おれは怪我なんかしてないよ」

「動きつぱなしだろ。おれたちや、おめえが剣握つて奮闘してる間、休んでたからな」

職人たちは、オリヴァンがこの砦の修繕を指揮する責任者であることを、知らない。いや、気づいていない。それでも繊細な手を持つ彼らは、オリヴァンの疲労を感じ取れるらしい。無茶すんな、疲れたら休め、倒れたら意味ねえぞ、という声が至るところからオリヴァンにかけられる。

大雑把な性格をしているくせに、とオリヴァンは苦笑した。

「その元気で、早く砦の修繕を終わらせて欲しいね」

優しい人たちだ。本当なら一月もあれば修繕も補強も終わるのに、今回の襲撃でその予定も遅れ、二月近く砦に逗留することになって家族とも離れて暮らさなければならぬのに、彼らは互いを気遣って元気な顔を見せてくれる。

「早く終わらせて帰ろうよ」

「言つねえ、おめえも。帰りを待つ女でもいるな？」

「いるよ」

臆面もなく言うと、けしかけた職人たちのほうが顔を赤くした。

「は、はずかしい奴だな」

「どこが？ おれの可愛い子のことが知りたいんだろ？」

「おい！」

揶揄したかったらしい職人たちを、逆に揶揄して、オリヴァンは笑う。どうせだからと、いとしい婚約者がどれほど可愛いかということ、話して聞かせた。

「お土産に、優しいオリヴァン、なんて言う可愛い子だよ」

「おめえ……実はとんでもなく腹あ黒いな」

「失礼だなあ」

「純粋な子を誑かすたあ、たいした男だよ」

「誑かさないと手に入らないだろ」

「うわ……」

聞くんじゃなかった、という職人たちの顔を見てから、オリヴァンは彼らの止まっている手を動かした。一頻り話をした彼らは、それからは真面目な顔で作業に没頭し始めたので、オリヴァンもいとしいライラのことを考えつつ作業に徹する。

太陽が傾きかけた頃、漸く修繕と補強の作業に戻る状態になった。

「なあんだ、終わってるじゃないですかあ」

という、慣れた声が聞こえたとき、オリヴァンは思わず目を丸くした。

「ラクウィル？」

なぜここに、父サリヴァンの侍従長がいるのだ。しかもその腕には、負傷して休んでいたはずの従弟が、抱えられている。

「うわあ、オリヴァンったら砂だらけ。この子も働かせないと駄目でしょうが」

「いや……怪我、してるから」

「こんなの怪我のうちに入りませんよ」

鬼畜な彼の師匠は、唸っている彼を無造作に腕から離れた。

「いた……いきなりひどいですよ、父さんっ」

従弟はこの侍従ラクウィルの息子、イオルシイズだ。鬼畜な師匠になっている父に喰ってかかるも、にっこりと微笑まれるとたじろぎ、そろそろとオリヴァンの足許に後退してくる。

「情けないですねえ」

「あ……シズに怪我をさせたのはおれだ」

「いえいえ、オリヴァンに怪我をさせなかったのは褒めますよ」

「だが」

「オおりいヴァン？」

にいつこりと微笑まれると、責任は自分にあると言いたいのに、言えなくなる。

この笑顔の強さはなんだろう。

首を傾げたくなりながら、相変わらず弟子には容赦ない侍従長に、オリヴァンはため息をついた。

「ご理解どうも、オリヴァン」

「……なんの用だ」

「その口！　ますますサリヴァンに似てきますねえ」

「……そんな話をしに来たのか？」

「砦が襲撃されたから手伝ってこい、とサリヴァンに言われて来たんですよ」

「サリエに？　……昨日のことだぞ？」

もう連絡が父のところはまだ届いたのか、とオリヴァンは驚いたが、ラクウィルはただただ笑むばかりだ。

なんとなく、なんとなくだが、どこかに監視の目がある気がした。

「まさか……」

「え？　なんです？」

「……アインがどこかにいる気がする」

伯父に、監視されている可能性がある。

「よくわかりましたね」

と、ラクウィルは否定しなかった。
思わず脱力する。

「砦を修復するだけなのに……」

なんて過保護な、と思う。

「襲われたじゃないですか」

「撃退したし、キサネに対処も頼んだ。それくらいおれでもできる」
信用されていない、というよりも認められていない。もう成人したというのに、どうしてこの人たちは、とオリヴァンは深々と息をついた。

「べつに、オリヴァンのそれを疑ってここに来たわけじゃないですよ。ただちよっと、今回はサリヴァンが切れましてね」

「？ サリエ？」

「そろそろ来るかなあとは思ってますが……」

「来るって……サリエが？」

国境にほど近い場所へ、父は来られないはずだ。それに、来るとしてもラクウィルと一緒になければ、車で一週間はかかるこの場所にすぐ来られるわけがない。

首を傾げて、ラクウィルが眺めている方向に視線を向けた。

そこに。

ふわりと。

「……、ノア？」

舞い降りたのは、幼馴染で騎士の、ノアウルだった。しかもその姿は、《天地の騎士》という称号を表わす紋章を背負った白い騎士服だ。

なんて目立つ恰好で来たのだ。

ライラはどうしたのだ。

そう口にしようとしたときには、周りがラクウィルの出現に気づいて、ノアウルにまで気づいてしまったあとだった。そのせいで、一気にオリヴァンの周りは騒がしくなる。

「なんだありや……皇帝の騎士じゃねえか？」

「なんでこんなところに皇帝の騎士が……つか、若過ぎねえか？」

「あれだ、皇女の騎士だろ、ありや。国花ルーフの紋章は今三人く
れえ背負ってるらしいぜ？」

「おれ、初めて見たわ」

「おれもおれも」

早く宿舎に戻っていればよかったものを、面倒なことになりそう
だ。

そう思いながらも、オリヴァンは諦め混じりのため息をついた。

「オリエ公子」

「……違う。おれはオリヴァンだ」

「お迎えに上がりました、オリエ公子」

いったい誰に、なにを言われたのか。

いつもなら騎士の真似ごとなどして見せない幼馴染が、硬い表情
をしてオリヴァンの前で膝を折り、頭を下げる。

「やめろ、ノア」

そう言っても、ノアウルは顔を上げない。

「サリエ殿下がお待ちです。どうかお帰りください、オリエ公子」

頑ななノアウルに、出るため息の数も知れない。

これは父の仕業なのだなど、オリヴァンは顔を引き攣らせた。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 5 (前書き)

オリヴァン視点です。

なんてことをしてくれたんだ。せつかく職人たちと打ち解けて、仲良くなれそうだったのに、ノアウルの出現ですべて綺麗さっぱり計画が潰された。

この腹立ちをどうしてくれようか。

憤慨しながら、オリヴァンは廊下を歩く。後ろには表情を強張らせたままのノアウルと、怪我のせいで顔色の悪いイオルシイズがついて歩いてきていた。

「サリエ！」

いるだろうと思われる居間の扉を、なんの予告もせず勢いに任せて開け放つ。

「ああ……帰ってきたのか」

やはり父サリエヴァンは、そこにいた。気だるげな様子で、今にも眠ってしまいそうなのに、まるでオリヴァンが帰ってくるのをわかって待っていたかのように、長椅子に座っていた。

「思ったより早かったな」

「ラクウィルだけでなくノアまで寄越しておいて、帰れないほうがおかしいだろ」

「仕事を優先してもよかつたんだぞ」

そう言われると、言葉に詰まってしまふ。父の言うとおり、帰還を要請されても皆に残るといふ選択肢はあつた。だが、その選択を選べなかつた。

「ライラに……なにかあつたんだろ」

「なにか？」

「ノアがライラから離れた。サリエの命令でも、それを無視するよ
うに言つておいたのに、ノアはライラのそばから離れた。ライラに
なにかあつた」

ただごとではない。

ノアウルから詳しい話は聞いていないが、というよりノアウル
は説明を求めても口を閉ざして話してくれないので、ライラになに
かあつたとかオリヴァンは思えなかつたのだ。

ライラになにかあつては生きていられない。

オリヴァンは、その本能にも似た想いに、容易く負けた。

ライラが父に保護されていると、それだけはノアウルが教えてく
れたから帰還要請に従い、こうしてここに来た。

「おまえ、自分がどういふ立場にあるか、考えたことがあるか？」

「立場？ なんの話だよ。今はライラのことを……」

「おまえの立場はライレイの心を護れない」

「……、え？」

父は、ライラのことを愛称では呼ばない。母もそうだ。ライラと
いふのはオリヴァンが勝手につけた愛称であるから、だから呼ばな
いのだと思つていたのに、なぜかそのとき、父がライラと呼ばない
理由があるのだという気がした。

「おまえの尻拭いなんて、まああるわけないと思っただが……そもそもおれが出張ることで、逆におまえの立場を悪くするだけだからな。だが、おまえが自分をわかっていないなら、仕方ない」
「なに言ってる……」

ざわりと、いやな予感が胸をざわめかせる。オリヴァンは顔をしかめ、食い入るように父を見つめた。気だるげな様子の父も、じつとオリヴァンを見つめてくる。いや、見据えている。

「おれはな、オリヴァン。前にも言ったと思うが、おまえとライレイの婚約には反対だ。今までは陛下の……兄上の頼みで特になにも言わないでいたが、今回ばかりは言わせてもらうことにした」

「……言ってる、なにを？」
「おまえの天恵が、ライレイに負担をかけている。引き離すべきだ、と」

その瞬間、オリヴァンは頭が真っ白になった。

「お、れから……ライラを、取り上げる気？」

かろうじて口をついた言葉は、掠れて震えていた。それでも、そんなことを考えている余裕はない。

父が今なんと言ったか、それを理解しなければならぬ。

「ライラはおれの婚約者で、おれはライラの婚約者だ。引き離す？
なんで？ おれの天恵がライラに負担して……意味がわからないよ。ライラは……ライラはおれの片翼なのに」

「片翼、ね……どこが？」

ため息をつかれて、瞬間的にカッとなる。まるで、どうでもい

ような言い方だ。オリヴァンとライラの繋がりを、否定するような言い方だ。

「ライラはおれの片翼だ！」

「だから、どこが？」

「背に同じ刻印を持っている。充分だろ」

「……そういう答えが、欲しかったわけではないのだがな」

さらなるため息をつかれて、オリヴァンは苛立ちから拳を強く握る。なんでも見透かしたように言われるのは、気持ちのよいものではない。いくら父でも、そう思う。

しかし。

「オリヴァン」

父の視線が鋭く、厳しいものへと変わったとき、オリヴァンが密かに根底から覆そつとしているものが、揺らいだような気がした。

「片翼だという言葉に驕るな」

「驕るって……」

「おまえもライレイも、驕り過ぎだ。なにが片翼だ、どこが片翼だ。その言葉だけに振り回されて、大事なものを見失って……っ」

ふらりと、父は長椅子から立ち上がる。視線はオリヴァンから離れることなく、それまでであった距離までも縮めてしまう。

「今日ほどおまえを愚かだと思ったことはない！」

吃驚した。なによりも、驚いた。目の前に立った父に、怒鳴られ

るとは思わなかった。

「サ、リエ……」

怒っているのは自分のほうなのに、怒られている。いつのまに逆転したのだ。

そういえば、と昔を思い出した。

父は、いつでもどんなときでも、滅多に怒らない。だが、だからといって不機嫌にならないわけでもない。叱るときはきつちりと叱る父は、なにかと器用なのだ。全身から優しさを駄々漏れさせている印象のほうが強いが、その奥底で、実はむちゃくちゃに怒り狂っているときがある。顔は笑っていて、所作も柔らかいままなのに、そんなことができる。幾度か、オリヴァンはそんな父を見たことがあった。古い記憶だと、母が初めてオリヴァンの前で大泣きし、いくら宥めてもどうにもできなかった頃だ。父は、母を泣かせたそれに対し、器用に怒り狂っていた。父のそれがわかったのはおそらく、オリヴァンが息子だったからだろう。

もしかしたら今、父はまた、器用に怒り狂っているのではなからうか。だからノアウルが、あんなに強張って、硬くなっているのではなからうか。

「な………なんで、サリエが、怒って」

「おまえが愚かだからだ！」

また怒鳴られて、肩が竦む。滅多に怒ることがない分、怖いというよりも吃驚させられる。

「片翼という言葉に踊らされているだけでなく、驕って……よくそ

れでライレイの片翼だなどと言えたものだ」

「おれはべつに驕ってなんか」

「ではなぜライレイは苦しんでいる」

「苦し……え？」

ライラが、苦しんでいる。そんなわけがないと、瞬時に否定したが、父はそうさせてくれない。

「おまえの天恵は、ライレイには負担だ」

その特殊な天恵が負担になっているから、ライラは苦しんでいる。

「そんな……っ」

そんなわけがない。

そんなわけがない。

ライラは皇帝の天恵を、オリヴァンは国主の天恵を、それぞれ背負っている。本来なら一つであるべき天恵が分けられているということは、その負担も半減しているはずだ。

「器であることを自覚しろ、オリヴァン」

「……うつわ？」

「できなければ、おまえはずっとそのままだ」

ふいと、父の視線は逸らされる。オリヴァンに背を向けた父は、ゆっくりとした足取りで、しかし振り返る素ぶりなど見せず、隣接した部屋の扉へ向かい、開ける。ちらりと、母ツェイルの姿が見えた。

「仕事に戻れ」

母がなにか言いたそうにしていたが、その前に父は隣室に入り、扉を閉めてしまった。

呆然としたオリヴァンは、しかし強く拳を握り、その手のひらが裂けて血が流れても、なぜか全身を包む悔しさを拭い去れなかった。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 6 (前書き)

ライラ視点です。

隣の部屋から、怒鳴り声が聞こえた。そのとき、オリヴァンの声も聞こえたような気がして、ライラは座っていた椅子を立った。

「ライレイ」

ツエイルが、座るよう促してくる。少し躊躇われたが、もう一度座り直した。

怒鳴り声がサリヴァンのものであったから、聞き間違えたのかもしない。

「叔父上さまの声が、聞こえたので……」

「サリヴァンさま」

「え……?」

「サリヴァンさま、と。或いは、父さま」

そう呼べ、というにとらしい。

「……サリヴァンさまが、怒っていらっしやるようですねけど」「ここにくると、いつも不機嫌になるから」

気にしなくていいらしい。しかし、サリヴァンの様子から、怒鳴るほど不機嫌になったのはノアウルを叱りつけたときからだ。それまでは穏やかだったような気がする。

「いつも、不機嫌に？」

幼い頃、ライラはよくここでサリヴァンやツェイルに遊んでもらった。オリヴァンやノアウルも一緒に、広い森の中を走り回った。あのとときのサリヴァンの様子を思い出しても、不機嫌になったことなど一度だってない。

「わたしのせい」

「……ツェイルさまの？」

なぜ、と首を傾げたら、ふふ、と微笑まれた。相変わらずなにを考えているかわからない人だ。ここは笑うところではないはずである。

「母さま……」

「え？」

「と、呼んで」

ますますわからなくなる。

「母上さま？」

「違う。母さま」

もしかして、オリヴァンがそう呼んでくれないから、婚約者たるライラにはそう呼んでもらいたいのだろうか。

「母さま？」

「そう」

ふふふ、と嬉しそうに笑って、ツェイルは両手で持ったお茶に口をつける。本当に嬉しそうで、思わずライラも微笑んだ。

と、そのとき。

がちやりと、隣室への扉が開く。さつとお茶を卓に戻したツェイルが、立ち上がってそちらをじっと見つめた。

「仕事に戻れ」

入室したのはサリヴァンだ。誰と話をしていたのだろうとライラが振り向く前に、扉は閉められる。

「サリヴァンさま……」

サリヴァンを案じたツェイルの声が、どれだけサリヴァンを想っているかをライラにも伝えてくる。心配になって、ライラも椅子を立った。

「叔父上さま」

声をかけると、サリヴァンはどこか疲れたような顔をしながらも、ライラに微笑んでくれた。先ほどまで怒鳴っていたとも、今このときも不機嫌らしいということも感じさせない、優しい笑みだ。

「ライラ、お願いがある」

「なんでしょう、叔父上さま」

「今少しの間、ここに留まってくれないか？ あの女官……マルサムといったか。彼女を呼んでおいた。ここにいる女官だけではなにかと不自由だろうからな。だから、留まってくれないか」

不思議なお願いだと思いつつも、留まることはまったくかまわないので、頷いた。それに、サリヴァンのそばにいたほうが、オリヴァンのことをすぐに知ることができる。いざとなれば、サリヴァンの侍従であるラクウィルに頼んで、オリヴァンのところへ行くこともできるだろう。

そういえば、ノアウルはどこに行ったのか。

「叔父上さま、ノアは……」

「オリヴァンのところにいる。新米騎士を、育ててもらわねばならないからな」

それを聞いて、ホッとする。ノアウルがオリヴァンのそばにいてくれるなら、オリヴァンは護られるだろう。

「新米騎士というのは、ラクウィルの？」

「ああ、イオルシイズだ」

新たな、《天地の騎士》。

それはライラの心を複雑にさせたが、オリヴァンを護ってくれ人が増えたと思えば、心強い。

「それから……ツエイ」

サリヴァンが、ゆったりとした足取りで、ライラやツェイルがいる椅子まで歩いてくる。その足取りに不安を憶えたのは、ツェイルの顔つきが悪くなったからだだった。

「だいじょうぶですか、叔父上さま」

思わずそう声をかけてしまったが、サリヴァンは微笑むだけだ。

「ツエイ、頼みがある。聞いてくれるか」

「……なんなりと」

「すまない」

ツェイルに謝ったその瞬間、いきなりサリヴァンはツェイルに倒れかかった。

「叔父上さま！」

驚いたライラが手を差し伸べる前に、サリヴァンはツェイルを潰してしまう勢いで床に倒れた。

「叔父上さま、叔母上さま！」

「ライレイ、だいじょうぶ」

「ですが、叔母上さまっ」

「だいじょうぶ」

ライラは慌てて人を呼ぼうとしたが、サリヴァンを両腕で包んで支えたツェイルに、だいじょうぶだから、とたびたび言われる。

「よく、見て。眠っているだけ」

と、倒れたサリヴァンを見るよう促してくる。覗き込めば、確かにサリヴァンは眠っているだけで、寝息が聞こえた。

ホッとして、身体から力が抜ける。

「あまり眠らない人だから、こうしてときどき、倒れる」

だから謝っていたのか、頼んでいたのか、とさらに安堵する。な

んて心臓に悪い人だろう。

だが、ツェイルの顔つきは悪いままだ。

「本当に、だいじょうぶなのですか？」

「……うん」

「嘘ではありませんよね？」

「嘘は言わない。あとで、大変なことになるから」

ツェイルは眠ったサリヴァンを抱え直し、膝に頭を乗せて座る。ゆっくりといとおしげに撫でながら、ほっと息をついていた。

「おやおやあ？　もしかしてちょーっと遅かったですかあ？」

急に降って湧いた声に、ライラは吃驚して肩を竦めた。いつでもどこでも、いきなり現われることができるそれが天恵によるものだとわかつてはいるのだが、声が違うので驚くのだ。

「ラク、ライレイを驚かさないで」

「ありゃ？　それはすみませんでした。もう慣れたと思っていたもので」

慣れてはいるが、声がノアウルではなくラクウイルだったから、驚いたのだ。ラクウイルの緊張感のない声は、いつだって場の雰囲気壊す。イオルシイズがラクウイルの息子だと思えないほどだ。

「しかし無茶してくれますねえ、サリヴァンも。オリヴァンのあれはやっぱりサリヴァン譲りですかねえ」

「オリヴァが、なに？」

「頑固者」

「……確かに」

オリヴァンの名にライラも反応したが、頑固者、という言葉には首を傾げた。ツェイルは肯定しているが、ライラは頷けない。

「オリヴァンは、頑固ですか？」

頑固というなら、ノアウルのほうが似合う言葉だ。

「サリヴァンよりいくらか柔和ですけどね。それでも充分、オリヴァンは頑固者ですよ」

「……ノアのほうが、頭は固いと思うのですけれど」

「ああ、ノアウルですか……あれは頑固というよりも、一途過ぎるだけですかねえ」

「一途？」

「ある種の頑固者ではありますが、一点にのみ頑固になるだけです。ルカイアの子どもですしね」

宰相の息子だから、なんだというのか。ラクウィルの説明は大雑把でわかり難い。

「ルカイアといえどもつひとり……あちらは殿下に任せましょうかね」

「あちら？」

「さて、サリヴァンを運びましょう。姫、殿下、手伝ってくださいね」

よいしょ、と言いながらも、ラクウィルはツェイルの膝で眠っているサリヴァンを軽々と抱き上げる。部屋はあっちです、という言葉の案内で、ライラは戸惑いながらもサリヴァンを寝室に運ぶ手伝いをした。

寢室にサリヴァンを移動させて、あとをツェイルに任せて部屋から出たときには、マルサムがすでに到着し控えて待っていた。

「ダンガード侍従長にお招きをいただきました」

「ダンガード……ああ、ラクウイルね。来てくれてありがとう、マルサム」

「いいえ。サリエさまのお言葉だそうで……サリエさまは」
「眠っているだけだそうよ」

「そうですか……お身体が強くないお方ですが、よく無茶をなさいますから……」

サリヴァンは、いろいろな人に慕われている。密やかに、ゆつたりと、そして深く。

だからこそ、それらを快く思わない人もいる。

オリヴァンの父で、皇帝の弟で、そして国主の天恵を宿した人だから。

ライラはため息にも似た息をつくど、閉ざされた扉を見上げる。

「ねえ、オリヴァン……わたし、もうなにも知らないライラじゃないのよ」

ライラは知っている。

法則から外れた天恵者を。

ひとりはラクウイル、サリヴァンの侍従。

ひとりはツアイン、サリヴァンの忠実なる狂騎士。

ひとりはツェイル、オリヴァンの母。

ひとりはサリヴァン、オリヴァンの父にして今代国主の天恵者。

「ねえ、オリヴァン。叔父上さまの天恵を引き継いだ、あなたは…」

法則から外れた天恵者と、なってしまうのだろうか。

ライラに、その片翼を奪われて。

ライラに、愛されて。

その自由を奪われて。

「姫さま？」

「……、なんでもないわ」

オリヴァンはライラの片翼、そして愛する人。

オリヴァンだけが、ライラを自由な空へと羽ばたかせる。

「わたしは、ただ……」

一緒にいたいと願うことは、オリヴァンの負担にしかならないのかもしれない。

それでも、この恋しさを捨てられない。

いとしさを投げ捨てられない。

だから。

オリヴァンの自由を奪ってでも、そばにいたいと願う。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 7 (前書き)

オリヴァン視点です。

考え込みながら歩いていった。いや、考えているわけではないのかもしれない。ライラのことを想うと、もうそれだけで、胸が切なくなるから。

父はライラとの婚約をよく思っていない。昔からそうだ。口にしないだけで、ずっと反対していた。けれどもライラのこととはよく可愛がっていた。だから、父のそれがライラ自身のなにかではなく、国の事情を抱えているがゆえのものなのだと、オリヴァンは早くから知ることができていた。

今日、父がわざわざ婚約の反対を口にした理由は、なにか。オリヴァンが自分をわかっておらず、愚かであるからだ、父は言っていた。ライラの心を護れず、苦しめっていると、言われた。なにがいけなかったのだろう。

オリヴァンはぼんやりと考える。父だつて知っているはずなのだ。オリヴァンはライラなくしては生きられないと、本能的に理解している。背負った刻印が、オリヴァンにそれを訴えてくるから。

だが、だからといってオリヴァンはライラをどうも思っていないわけではなかった。

むしろ、どうしようもなく、いとしいと思う。ただそれは、周りからするとどうも、信じられないようではあるけれども。

「こんなに、好きなのになあ……」

そう、ぼやいたときだった。

「公子の場合、とにかく可愛くてならない、という空気しか伝わってこないのです」

突然降って湧いた声に、吃驚した。思わず剣を握ったほど、吃驚した。

「か……かるあ？」

いつのまに、と思った。

いつのまにか、目の前に文官がひとり、立っていた。その文官の名をカルア・ウエル・ラッセ、ノアウルの妹にして宰相ルカイアの娘である。

「兄上、お久しゅうございます。なぜ姫さまの御許におられないのか、それは不思議ですけど、咎めはいたしません。オリエ公子が絡んでおいでのようでございますし、先ほどラクウイルを見かけましたからね。イオルシイズまで来ていますし、まあなにかあったのでしょうか」

「カルア、おれに挨拶するよりも、先にオリヴァンに」

「兄上、言葉にはお気をつけください。オリエ公子です」

「カルア……だから、おれの前にオリヴァン……公子に」

「兄上の態度を先に注意すべきでした」

「いや、カルア……」

捲くし立てる妹に、ノアウルは漸く緊張がほぐれたのか、肩を竦めてため息をついていた。

「……お久しゅうございます、オリエ公子」

矛先が自分に向けられたとき、オリヴァンは「さてどういう顔をしたらいいものか」と瞬間的に考え、笑みを浮かべる選択肢を取った。

「久しぶり、カルア」

「薄ら寒い微笑みは要りません」

「……、相変わらずでなによりだ」

ライラが柔らかい丸なら、カルアは強固な四角。これで本当にノアウルの妹なのだろうか、オリヴァンは常から思うが、顔は兄妹を物語っているから、疑いようがない。

昔はライラみたいに可愛く笑う子だったのに、いつからこんなふうになってしまったのだろうか。

煌びやかな女性の衣装を着ることもなく、文官の質素な官服に身を包むことを選んだカルアは、それでも元来の美しさから縁談の話が多く舞い込んでいる。そうでなくても宰相閣下の娘だ。その手の話は他国からも寄せられている。それを断り続けて今もひとりであるのは、文官の道を選らんだからだろうか。

「北領の砦に行かれたと聞いておりましたが、なぜ城へ？ 姫さまでしたら、登城なさっているヴァルハラ公が離宮にお招きしておりますが」

「あ……うん、父には逢った。ライラには、逢えなかったけれど」

そういえば、いつのまにか森の離宮、父が城に滞在するときに使っている離宮から宮廷内に戻って来ている。歩きながら考えていたので、どこをどう歩いてここまで来たのか、オリヴァンは憶えていなかった。

「そうですね。こんなに早く北領の砦の補修を終えたとも思えませんが、賊の襲撃を受けたとも聞きましたが、そのご様子ならだいじょうぶなのでしょう」

「砦は修復したところを壊されたから、少し予定が遅れる。石材の半分はキサネ……シエリアン公が手配してくださることもなった。そのことは伝書で陛下にお伝えしたが……」

「聞き及んでおります。陛下はオリエ公子を心配されておいででした。お時間が許されるなら、どうぞ陛下の御許へ。今はそれほど忙しくもありませんし、すぐに謁見が叶いましょう」

事務的に話すカルアに、苦笑がこぼれる。

真四角な性格をしているから扱いづらいところもあるだろうが、生真面目なところは昔から変わっていないので、きつと優秀な文官だ。こうして話していると、煌びやかで華やかな衣装よりも、官服のほうがカルアには似合っているように思えてくる。

「ねえ、カルア」

「……なんでしょう」

「最近、ライラには逢った？」

「ええ。公子が北領へ立たれる前に、一度お逢いしております。それがなにか？」

カルアはライラの友人だ。この皇城内で、唯一親しくしている文官の友、かもしれない。そんな彼女なら、ライラがなぜ父に保護されることになったのか、わかるかもしれない。

「ライラは、なにか悩んでいたりとか……苦しんでいたりとか、していないかったかな」

「……それをわたしにお訊きになって、どうなさるおつもりですか」

「どづつて……悩んでいるなら相談に乗りたいし、苦しんでいるなら助けたいし……おれは、婚約者だから」

やっぱり話してくれるわけがないか、と思いつつも、カルアがなにか教えてくれないかと期待している自分がいる。

情けないと思っても、なぜライラにオリヴァンの天恵が負担になっているのか、わからない。父に、片翼という言葉に驕っていると、そう言われたことの意味もわからない。しまいには、器であることを自覚しろ、とまで言われている。

わからないことだらけで、つい誰かに応えを求めてしまう。

「姫さまのことよりも、まずご自分のことを考えてはいかがでしょう」

「え……？」

「北領の皆は修繕が終わっていません。賊の襲撃で、予定も遅れています。これからの季節、北領の皆がいかに重要であるかをお考えください。冬には陛下の生誕祭が行われ、各国の王が参られるのです。北領の皆だけでなく、四方の皆は重要な役目を果たすことになるでしょう。それだけでなく、各所領地の状況も把握し、必要ならば経費以上のことを施すことにもなるでしょう。その過程で問題が見つかる可能性もあります。姫さまの婚約者であるご自覚があるならば、率先してそれらを解決に導かねばならないと思えますが？」

くどくどと説明され、半ばうんざりしつつも、その通りなので否定もできない。

「まあ……それは少し、難しいとも言えることではありますが」

ちらりと、カルアは周りを見る。ちらちらとこちらを見ては、声を潜めて会話をする文官や武官、登城している貴族、従僕や侍女、

多くの視線がオリヴァンに集中し、そして避けている。まるで、自分に火の粉が振りかからないようにしているかのようだ。いや、腫れものを扱うかのような視線だ。

「……どうしてサリエは、こんなに嫌われるのかな」

「嫌っているわけではありませんよ。どう接すればよいのか、皆わからないだけです」

「もう、おれっという息子がいるおじさんだよ？」

「ヴァルハラ公……サリヴァンさまの存在が明らかになって、まだ十数年。そうお考えください」

もう、と考えてはならないらしい。国にとっては、まだ、なことのようだ。

「サリエが仮初めの皇帝だった、って……どれくらいの人を知っているのかな」

「凡そ知る人などおりませんでしょう。そもそも、そのことを公子がご存知であることも、わたしは知りませんでしたか？」

「成人を迎える少し前に、聞いたよ。本人からじゃなくて、キサネからだっただけ。カルアはどうして？」

「官職を拝命したおり、父から聞かされました。陛下がサリヴァンさまを手放されない理由も」

「陛下が……？」

その話は知らないな、と喰いつくと、カルアは少しだけ目を細めた。

「ご存知ないのですか？」

さも、知っているとはかり思っていた、という顔をされて、オリ

ヴァンは首を傾げる。

伯父でもある皇帝サライのことは、過度な愛情を弟サリヴァンに注ぐ人、というくらいの認識しか、オリヴァンにはない。この顔がサリヴァンに似ているせいで、しょっちゅう間違われて抱きつかれるからだ。可愛がってもらっているのはわかるのだが、愛情表現が過度で少々疲れるときもあった。

そんな伯父ではあるが、賢帝であろうことは疑いよのない治世の中にいる。

サライが父を手放せない理由があるとしたら、その過度な愛情だろうか。だとしたら、カルアがこんな怪訝そうな顔をするわけがないと、オリヴァンは思う。そもそも父は、国主の天恵者なのだ。その天恵はオリヴァンに引き継がれている。

「……サリエが天恵を持っているから？」

「……、ご存知ないようですね」

そうかと思っただのだが、カルアの反応から違うらしいとわかる。

「違うのか」

「確かにサリヴァンさまは皇族の天恵をお持ちです。ですがそれは、国がサリヴァンさまを引き留めておくためのものにし過ぎません」

「え……」

話が飛躍した。しかし、そう感じるのは、どうやらオリヴァンだけのようだ。

「カルア、その話はこんな道端でするものじゃない」

ノアウルがそう言って、妹の発言を諫める。ノアウルだけでなく、おとなしくしているイオルシイズも、顔をしかめて無言でカルアを

牽制していた。

「……申し訳ありません、口が過ぎたようでございます」

責められるような言葉と視線から、さすがのカルアも気まずげにし、頭を伏せてオリヴァンに謝罪してくる。

いや待て、とオリヴァンは口を開こうとした。

「オリヴァン、ここを離れたほうがいいです」

そつと、イオルシイズに耳打ちされて、開きかけた口が閉じる。

さつと周りを見渡すと、先ほどより視線が増えていることに気づいた。いやな感じではないが、だからといって心地よいものでもない。

「カルアさま、今日はこの辺で」

「承知しております。では公子、またお逢いしましょう」

イオルシイズの言葉に、カルアは素直に応じて文官の礼を取ると、すぐさま踵を返してオリヴァンの前から立ち去った。

「ノア、シズ」

「御意」

中途半端にされて納得できない感じが残るも、オリヴァンもノアウルとイオルシイズを促して、毅然と歩を再開させた。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 8 (前書き)

オリヴァン視点です。

伯父でもある皇帝サライに謁見することなく北領の砦に戻って、すぐに怪我で休んでいるもうひとりの従弟を訪ねた。イオルシイズほどの怪我ではないにしても、ここに滞在している者の中でもっとも若く、戦闘経験も浅いため、怪我の回復具合はあまりよくなかった。一度皇都へ帰らせようと思ったのである。

「ん？ あれ……ソフィ？」

「帰したよ」

「……、アイン？」

どこからともなく聞こえた声に振り向けば、母の兄である伯父ツアインが、壁に寄りかかってこちらを見ていた。部屋に入ったときにはいなかったのに、相変わらず神出鬼没だ。

「ソルフィードなら家に帰したよ。邪魔だからね」

「帰したって……皇都の実家に？」

「侍従長がね」

「いつ」

「きみが帰ってすぐ」

「……そう」

ラクウィルも相変わらずぼんぼんと飛び回っている。ノアウルも同じ天恵を持っているが、ラクウィルのような回数は飛べないと聞

いていた。

「ここにも自分とオリヴァンのような違いがあるな、と思いつつ、オリヴァンは踵を返すと自分が使っている部屋に戻るべく足を進めた。」

「なんで僕がいるのか、訊かないのかい」

「サリエの命令だろ」

「自主的だよ」

「同じことだ」

「……、可愛くないなあ。なに不機嫌なの」

部屋の手前で立ち止まると、ついて来るツアインを振り向き、見つめる。

「なあ、アイン」

「なあに？」

「ここ、と美貌に任せたツアインの微笑みは、昔もそうだったらしいが今も、随分と余計なところからも人気を引っ張ってくる極上のものだ。だがオリヴァンは、どうしてもその笑みが作られたものしか見えない。だからきつと、ツアインは誰の前でも、こうして嘘の感情を見せているのだろう。母の兄は、母にしか愛情を向けないのだ。」

「おれとサリエ、どこが違う？」

「ぜんぶ」

「……、訊くんじゃなかった」

「そうだよな、と思う。誰の前でも嘘の感情しか見せないのだから、それにはオリヴァンも含まれる。いくらオリヴァンが甥でも、ツア

インはそういうものにすら縛られない人間だ。質問の仕方間違えた。

「僕になにを期待したのか知らないけれど……そもそも、どういふつもりで僕にそれを訊いたのかな」

「……おれとサリエは、同じ天恵を持っている」

「そうだね」

「前に、違っつて、サリエが言ったんだ」

「まあ違っつだろっね」

簡単に「違っつ」と言っつツアインに、オリヴァンは首を傾げた。

「なんで？ 同じ力だろ」

「殿下の天恵は壊れているからねえ」

「壊れ……え？」

天恵が壊れることなど、あるというのだろうか。いや、ありえない。天恵とは、天の恵みだ。天から与えられたものを、人間が壊せるはずがない。

「法則から外れてる、とかなんじゃ……」

「天恵の法則っつていふものは、人間が勝手に定めたものだよ。謂わば一般例と異例を区別するもの。世界に点在する数多の天恵を、人間っつときに掌握できると思っつわけ？」

「……いや」

ツアインの言っつとおりだ。

それなら、やはり天恵とは、壊れるものなのだろうか。

「僕は神学者じゃないから、確かなことを言えるわけでもないけれ

ど……一般論にしたがる気持ちはわからないから、法則なんてものも信じてないね。そういう考え方からいっても、きみと殿下は違うかな」

「たとえば、どこが？」

「殿下から聞いたことない？ 国を出られない、とか」

聞いたことがある。国境付近を旅していたとき力に吞まれかけて母が半狂乱になったとか。それからの父は国境にも近づかないようにしている、聞いたことがあった。

「殿下は国を出られない。けれどもきみは、出られる。ほら、違うでしょ？」

「どうして……」

「国主の天恵だから」

「おれもそうだ」

「器が違う」

器、という言葉が、ツアインからも発せられて、オリヴァンは顔をしかめる。

「おれとサリエの違いは、器？」

「僕にヴィーダヒーデ、ツェイルにヴィーダガルデア、それと同じようなものだね」

ツアインは天恵者で、ヴィーダヒーデという精霊がそばにいる。同じように母も天恵者で、ヴィーダガルデアという精霊がそばにいる。そういう器の違いだ、とツアインは言いたいらしい。

しかしながら、わかり難い。

「そうになると、天恵そのものの種類が違うんだって、聞こえる」

「僕とツエイルは同じ天恵だよ。少し違うのは、僕は破壊にしか力を遣えなくて、ツエイルはそうでないということ」

「その違いの意味は？」

「僕を見ていればわかるんじゃないの？」

ツアインは誰に対しても、嘘の感情しか見せない。作られた笑顔しか、見せない。

だが母は違う。

「質の違い？」

「んー……本質、と言ったほうがいいかな。僕は、ツエイルがいればそれでいいし、ツエイルがいらないなら世界なんて滅んでしまえばいいと、思っているからね」

にこ、と笑ってそれを言うツアインに、少しだけ、寒気がした。それだけは嘘に聞こえない、恐怖心からだ。こんな兄を持ってしまった母を、憐れに思う。これではなにかと大変だったのではなからうか。

「僕の言葉は参考になったかな？」

「……べつに参考なんて」

「なにやら殿下との違いに拘っているみたいだからね。ついでにもう一つ、参考になるようなことを教えてあげようか？」

素直にその参考になるようなことを聞くのは、なんだか癢に障る気もしたが、聞かないと損をしそうな気もする。だから、黙って肯定した。

「聖王殿下に逢ったことは、あるよね？」

「聖王？ お伽噺の？」

童話でも聞かせる気か、とオリヴァンは怪訝に思ったが、オリヴァンのその様子にツアインはふつうに驚いていた。

「あれ、知らないの？」

「なにが」

「オリエ、きみ誰のことを『おじいさま』と認識しているの」

「レイシエントのことだけど」

「おかしいと思わないわけ？」

「だから、なにが」

幼い頃から、オリヴァンにとって「祖父」とは、そのひとのことだ。なぜなら父も母も、そのひとを「養父上」と呼ぶからである。それ以上のことは、特に気にしたことも考えたこともない。

「雰囲気は似ているけれど、殿下と顔は似てないでしょ」

「血は繋がってないんだらうっていうのは、見ればわかるよ」

さすがにそれくらいのことには、気づける。最近のことではあるが。

「殿下ったら、教えてなかったのかな……いや、教えたつもりなのかな。ときどき恐ろしいくらい抜けているし……鈍感だからな」

「アイン？」

ぶつくさとひとり言を呟くツアインに、だからなんだ、とオリヴァンは眉を寄せながら首を傾げる。

「僕が言っているのかわからないけど、言っちゃったから教えるね」

「……なにを？」

参考になりそうもない気がした。

「きみが『おじいさま』だと認識しているお方が、聖王猊下だよ」
「……、え」

驚愕に、オリヴァンは目を見開いた。

「だから国は、殿下を手放せない。殿下は猊下に育てられた、神の子だから」

それが「参考になるようなこと」だというのか。

「殿下は猊下に育てられた、その意味がわかるかい？」

「……いや、ちょっと待てよ。おじいさまが、猊下だった？」

「まあ信じられないだろうね。けれど、それは真実。帰ったら殿下に聞くといいよ。ただ、神の子である、ということは否定するだろ
うけれど」

いやいやいや、とオリヴァンは首を左右に振る。

「意味が、わからない」

「殿下は幽閉されていたんだよ」

「……幽閉？」

「十八年もね」

ますます、頭が混乱した。

「産まれてからの十八年を、殿下は猊下に育てられた。なぜ幽閉されていたか？ 殿下に国主の天恵があったからだ。先帝は勝手にひ

とりで激怒して殿下を幽閉し、さらには右腕にある刻印を真つ二つに斬った。刻印を斬られた殿下は刻印の力に圧され続けることになって、自分では制御できなくなっていたけれど、自分が天恵者であることを否定し続けることでどうにか力に吞まれずにいた。ツエイルと出逢い、恋に落ちるまでは「

「……………なん、だよ……………その話」

「これが仮初めの皇帝を生み出した、国の真実」

「真実？」

これが、真実。

首を傾げたら、ツアインは愉快気ににんまりと笑った。

「叩けばもつといういろいろ出てくるよ。殿下の周りは、殿下の存在それだけで、さまざまな事象を起こすからね」

「事象……………」

「探してみなよ。自分が産まれる前と、産まれた後の、世界の違いを。きつと、面白いよ」

くす、と笑ったツアインは、言うだけ言うとオリヴァンに背を向け、ばいばい、と手のひらを振って離れて行った。

オリヴァンは、茫然と、立ち尽くした。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 9 (前書き)

オリヴァン視点です。

いつ部屋に入ったのか憶えていない。気づいたら長椅子に座っていて、イオルシイズが淹れてくれたお茶を手に持ち、すでに一杯を空けていた。

「……シズ」

「だいじょうぶですか？」

「……ああ」

「もう一杯、飲みますか？」

「頼む」

熱いお茶をもう一杯頼み、液体が器を満たしていくのを眺めながら、オリヴァンはふっと息をついた。

「シズ、アインの話……知ってたか？」

「いいえ」

「……冷静だな」

「おれが苦手なのは父さんだけなので」

冷静というわけではないが、自我を放棄するほど驚きもしないと、イオルシイズは苦笑する。

この従弟は昔から少しずれているせいか、感情の起伏が少ない。絶えず微笑んではいるが、それは父であり鬼畜師匠たるラクウィルから受け継いだ落ち着きようだ。

だから、思う。

イオルシイズが落ち着いてくれていてよかった、と。

イオルシイズが冷静沈着でいてくれるから、オリヴァンも頭を冷やすことができる。感情を、制御することができる。

「おじいさまが、聖王猊下だって……」

「そのようですね」

「まあ、昔から変な感じはすると思っていたが……まさか聖王だなんて」

聖王は、たびたび天上猊下と呼ばれる。神であり、神々の長であると祭神殿では教え、天恵を与えたもうた存在であるとも、語られている。

「あのお方が聖王猊下でいらっしやると言われても、納得はできませんよ」

「そうか？ 神さまだってことだぞ？」

「あのお方を前にすると、得体の知れないものを感じます。オリヴァンもそうでしょう？ 刻印がざわめくとか、前に言っていますませんでしたか？」

「……おじいさまも天恵者だからそうなんだと、思っていた」

「神という役割を果たす天恵、であつたら、納得できませんか？」

とんでもない発想をしてくれたイオルシイズに、思わず目を見開く。言った当人は真剣で、本気でそう考えているようだ。

「神が、天恵？」

「神は人間ではない、なんて、誰が言ったことですか？ 人間が神という天恵を与えられても、おかしくはないと思います。オリヴァンは国主の天恵を授けられて、ノアウルは古の騎士の天恵を授けら

れて……ライレイさまも、サリヴァンさまも、同じように天恵を与えられているんです。それなら、あのお方だって、そういう天恵者であると言えませんか？」

イオルシイズの言いたいことはわかる。

神学者がいて、天恵を調べる者たちが存在して、数百年も天恵について調べられているのに、未だ解明されていない天恵だ。この世界には、それくらい数多の天恵が存在している。

「そうか……そういう考え方もあるな」

人間が、人間ではなくなる天恵があっても、おかしくはない。

魔が、聖が、天恵を授けられた獣であることが、なによりの証拠となるだろう。獣は天恵を授けられることで、ただの獣ではなくなってしまうのだ。同じ作用が人間にあってもおかしくはない。

イオルシイズの言葉に、オリヴァンはほっと息をつき、驚いてしまっていたことをばかばかしく感じた。

「おじいさまは、おじいさまだ」

「そういうことです。ですから、納得できますでしょう？」
「ああ」

なんてことはない。

聖王がお伽噺で語られていても、オリヴァンが「おじいさま」だと認識しているひとは、なにがどう転がっても「おじいさま」以外のなに者でもないのだ。

一つ落ち着きを取り戻すと、オリヴァンは湯気を立てているお茶を半分ほど飲み、卓にお茶を置くと椅子を離れた。

「オリヴァン？」

「おじいさまのことには驚かせられたが、それほどのことではないとわかった。だが、おれにはいくつか疑問がある」

「疑問、ですか」

オリヴァンは窓辺に歩み寄ると、午後の陽ざしの中で働く職人たちの姿を見つめる。あの中に混じることはもうできないだろうか、とちらりと思った。それは少し残念なことだ、とも。

「国の、真実……仮初めの、皇帝」

「……サリヴァンさまのことですか？」

訊ねてくるイオルシイズに、オリヴァンは振り向く。

「シズはどこまで知ってる？」

「どこまで、と言われても……オリヴァンが知っている以上のことは、知りませんよ」

「幽閉されていた、ということも？」

「初めて聞きましたね」

自分を真つ直ぐと見つめてくるイオルシイズの瞳に、嘘は見えない。本当に知らないのだろうか。

「アインは、サリエがおじいさま……猯下に育てられたと言っていた。実際にサリエは猯下を『養父上』と呼ぶから、確かなことだと思う。おれも『おじいさま』と呼ぶからな」

「そうですね」

「サリエは……産まれてからの十八年、幽閉されていた。その十八年を、猯下が育てたということになるよな？」

「おそらく、そういうことだと思いますが」

「サリエを幽閉したのは先帝……理由は、国主の天恵がサリエにあつたから……サリエが仮初めの皇帝であつた期間は五年半、おれの歳から逆算すると……」

「合いますね」

計算が、と言うイオルシイズに、オリヴァンも遅れて頷く。

父は、十八歳のときに幽閉を解かれ、直後に仮初めの皇帝となり、五年半後に帝位を退いた。その一年半後に、オリヴァンは産まれたことになる。

「……シズ」

「はい」

「なぜ……サリエは幽閉を解かれたんだと思う？」

問うと、イオルシイズは幾分か眉をひそめ、そして俯いた。

「その年は、先帝が崩御なさいました」

「……なるほど」

そういうことか。

父を邪険にし、疫病神のように扱った先帝が死んだことで、父は幽閉を解かれた。ならば、先帝以外の者たちは、父を先帝のように思っていなかったということになる。

ただ、自由は与えなかった。

「シズ、ほかにもありそうだな？」

「……陛下が病に倒れた年かと」

「……それで、サリエを引っ張り出さなければならなくなった、ということか」

「そう、なるかと……」

仮初めの皇帝、ではなく、身代わりではないか。影武者ではないか。

「サリエの存在は秘されていた。それが、幽閉によるもの……先帝の独断による、身勝手に傲慢な……やっと出られたと思えば、国の重鎮はサリエを縛りつけた。あれほど似ていれば、変えが効くとも思っただのか」

恨めしい、と思った。自分が父に似ているということもいやだと思うのに、それを利用されるのはもつといやだ。だが、父はそれを受け入れたのだろう。そしておそらく、今も。

「皆がサリエに対して慎重になるのは、サリエが国主の天恵者であるのに、誰にも知られることなく幽閉されていたからか……」

父が、ちらりと天恵についてのことを話してくれたとき、オリヴァンに見せた悲しそうな顔。

オリヴァンとは違う天恵だと言った、その意味。

ライラとの婚約に反対する、その理由。

「だからこそ、国は神の子となられたサリヴァンさまを、手放せない」

イオルシイズではない声に、ハッと目を向けた。どこかに行っていたらしいノアウルが、いつのまにか扉の前に立っている。

「国はサリヴァンさまを必要としている。だが陛下は、サリヴァンさまの兄で在り続けたいだけだ」

ふと息をつきながらノアウルは歩を進め、どさりと長椅子に座った。イオルシイズにお茶を頼んでもらったあと、一口飲んでからオリヴァンのほうを見やってくる。

「陛下の人となりは、おまえもよく知ってるだろ」

「……あれだけ抱きつかれる機会があれば、な」

オリヴァンもふつと息を吐き出し、窓に背を預けて寄りかかると、腕を組んでノアウルを見据えた。

皇帝サライが、父をどう見ているかなど明らかだ。あの溺愛ぶりを見ていれば、父の幽閉には僅かな関わりすらないことくらい、はつきりとわかる。

父の幽閉を、きつとサライは、知らなかった。だからあれだけの愛を注ぐ。溢れたものを、オリヴァンに押しつけてしまっくらいに。

「サリエが幽閉されていたと聞いて、複雑なだけだよ。あれでもおれの父親だからな」

「サリヴァンさまはお優しい」

「知っている」

だから、複雑なのだ。

天恵のことを語る表情と、ライラとの婚約に反対するその意思が、まるでサリヴァンのさまざまな過去がオリヴァンに悪い影響を及ぼすことを心配しての、過保護さに思える。

「……なにを心配しているのだから」

オリヴァンは成人した。父の過去も知らずに、国の過去なども知

らずに、大事に護られ包まれて、ときには厳しく、甘やかされて育った。

だが、だからといって、なにもできない子どもそのままではいられない。

「気づいていたか、オリヴァン」

「……その言葉だけでなにを察しろと？」

「おまえはずっと、反皇弟派の勢力に狙われている」

ふっと、オリヴァンは皮肉げな笑みを浮かべた。

「気づいていないとでも思っていたのか」

命を狙われていることには、早くから気づいていた。あれだけ大事に護られていれば、その異常さにも気づくというものだ。

そもそも、父の懐刀である騎士隊が近くにいない日々など、成人前であつたらありえなかつた。自由に往来を歩けるようになったのも、成人してからのことになる。それまでは、邸を一步でも出ようものなら騎士隊の誰かが必ずそばについたし、誰にも見つからないよう邸を抜け出しても、ノアウルがラクウイルに必ず見つかった。

いつでもどんなときでも人に囲まれて育ったせいか、そういうことをあまり気にしなかつたオリヴァンも、成人を迎えてからの日々を思い返すと、あれは異常なほどだつたと気づくことができる。

成人から一月もしないで、どれだけのことに気づかされたことか。

「みんな、過保護だ」

ひとりでも、できることがある。

北領の砦に来たのは、それを証明したかつたのもあつた。実際に職人たちとは上手い関係を築けていたし、賊も剣で退けることがで

きたのだ。頑張れば、もつとなにか、できることが増えるはずだ。

「過保護、か……仕方ないだろ。みんな、おまえを護りたいんだ」

「天恵を、の間違いだろ。おれの命を狙っている連中は、つまりはライラに天恵を返せと、そういうことだろうからな」

「その天恵はおまえのもので、おまえがおまえだから護りたいんだ」

真剣な顔のノアウルに、くす、とオリヴァンは声に出して笑う。

ノアウルはいい友人だ。

「ノアには、ライラを護り続けて欲しい。おれはいい。メルエイラ家が力を貸してくれるし、騎士隊のみんなもいる。剣の腕だって、ツエイとラクウィルに鍛えられているんだ。ノアの天恵は、ライラのためにある」

「おれの天恵はオリヴァンのためにもあるんだ」

「ノア」

頼むよ、と微笑めば、幼い頃からの友人は困ったように、悔しそ
うに、目を細めた。

「それなら、同じことをシズにも言え。おればかりでは不公平だ」

「……シズ？」

なぜそこでイオルシイズの名が出るのだ、とオリヴァンは視線を
イオルシイズに向ける。本人も首を傾げていた。

「おれはただの従者ですよ？ ヴアルハラ公爵家に仕える者のひとり
ですから、ライレイ殿下にお逢いする機会などありませんし」

「シズ、いい加減自覚しろ」

「はあ……自覚と言われましても」

なにを自覚すればいいのか、と困っているイオルシイズに、ノアウルはため息をついて呆れていた。

「ノア、なんのことだ？」

「口で説明するより、見たほうが早いか……オリヴァン」

「？ なんだ？」

長椅子を離れたノアウルが、オリヴァンのそばに歩み寄ってくる。ぼん、と肩を叩かれると、とたんにどつと肩に重力がかかった。その重みが、ノアウルが天恵を発動させたがゆえに起こるオリヴァンの負荷であると気づいたときには、景色が変わっていた。

「おまつ……日に二度も三度も飛ばされるおれの身にも」

なってくれ、と言えずに膝が床につく。

ノアウル为天恵は、オリヴァンには非常に疲れる代物で、一緒に飛ぶとなると一日に数度が限界だ。

今日はすでに二度ほど飛んでいるため、三度めともなると立っていることすらつらい。

「見ている、オリヴァン」

「なにを、だよ」

自室から、どうやら別の部屋に飛んだだけのようで、床の感触はそれほど冷たくもない。疲れた身体をそのまま座って休ませることにして顔を上げると、ふと、目の前が歪んだ。

そう、景色が歪んだ。

それは、ノアウルがまだ己れ为天恵を上手く使いこなせなかった頃、よく起こしていた事象だ。

「え……?」

もう見ることもなくなった事象に、オリヴァンは瞠目する。
そして。

「置いて行かないくださいよう」

と、イオルサイズが事象の中から現われた。

「……サイズ?」

「はい? なんで吃驚しているんですか?」

「おまえ……飛んだ?」

まるでノアウルのような、とオリヴァンは思う。

ノアウルは、その天恵を授かった兆しが見え始めるとどこからともなく現われるようになって、天恵だと理解すると使いこなすために練習を始め、オリヴァンの目の前に現われるようになったものだった。上達してくると、ラクウィルのようにふわりと空から、舞い降りるように、現われるようになった。

「サイズは飛べる。自覚がないだけで」

ノアウルの言葉に、ハツとする。

「天恵……なのか」

「それ以外のながある?」

「……なら、飛べる天恵なんて」

「ああ、一つしかない」

ノアウルと同じだ。
ラクウィルと同じだ。

「シズは《デイベイン天地の騎士》だ」

国にひとり、多くてふたり、世界中では数人の存在。
空間を歪め、瞬時に移動できる天恵。
皇帝国主の天恵者のそばに、必ず現われる天恵者。

「おれが古の騎士なわけないでしょう。それは父ですよ」

「じゃあ、ここはどこだ？」

「どこって……あれ？」

「おまえは飛んだよ、シズ。これまでに、幾度かあつたはずだ」

「……いつのまにか景色が変わっていることはありましたけれど……」

「あれ？」

どうやら当人に自覚はないらしい。だが、オリヴァンが今見たものは、確かなものだ。

「シズが……《天地の騎士》」

「それは父ですって。オリヴァンまで、なに言うんですか」

呆然としたオリヴァンと、違うと否定し続けるイオルシイズ、両者をノアウルは見比べて、そうしてため息をついていた。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 10 (前書き)

ライラ視点です。

唐突に訪れた幼馴染で親友の文官に、あの婚約者のどこがいいのだとくどくど文句を言われること小一時間、ライラはずっと苦笑していた。いきなりやって来て、いきなりその話をされるとも思っていなかったライラにとって、表情筋が非常に疲れる時間だった。

「あの薄ら笑い、思い出しただけで寒気がします」

「いつもの笑顔だと思うのだけれど」

「では姫さまは、あの笑みにその美しい柔肌を赤く染められてしまうのですか？ やめてください。姫さまが穢れます」

「そ……そんなに嫌い？」

「嫌いなわけではありません。薄気味悪いのです」

邪気のある言葉ではないから、諫めることもできない。むしろ親友であるこの文官は、ライラの身を心配してのことと、単に性格的相性の悪さから、ライラの婚約者たるオリヴァンを苦手視している。

「あんまり言われると、悲しくなるわ……」

「あら……それは申し訳ありません。言い過ぎました」

ライラが肩を落として凹めば、さすがに生真面目な文官カルアも文句を引っ込めてくれる。

ほっとして、気持ちを落ち着かせるためにお茶を飲んだ。

「ところでカルア、なにか用事があってわたしのところへ来たのではないの？」

「陛下が捜しておられます」

思わず顔が引き攣る。

オリヴァンの文句を言う前に、一番に切り出すべきことではなからうか。

「わたしが叔父上さまのところにいるのは、伝えられているのではなくて？」

「いいえ」

どこでその伝達が止められてしまったのか。

おそらくは目の前の文官か、或いはその父たる宰相の仕業であるうが、なぜそんなことをしているのかは不明だ。

「父上さまにお伝えして。わたしはもう少し、叔父上さまの宮にいるわ」

「サリヴァンさまがここにされると、そうお伝えいたしますと政務が滞ります」

「……それは」

確かに、サリヴァンがここにいると伝えたら、父はきつと、いや必ず、政務を放り投げて、嬉々としてこの離宮を訪れるだろう。このところ訪れる回数が減っていることもあって、父のサリヴァンへの愛情は過激だ。それに、今サリヴァンは日ごろの寝不足から倒れてしまっている。そのことが父に知れたら、どうなるかわかったものではない。

「……父上さまは、なぜわたしを捜しているの？」

「お茶をしたいと」

そんな理由だと思った。

さしずめカルアは、その用をライラに伝え、説得したが無理だった、という証拠を作るために、オリヴァンの文句を小一時間も並べ連ねたのだろう。

「叔父上さまがここにおられることは隠して」

「承知しております。そのサリヴァンさまにご挨拶したいのですが

……」

「休んでおられるの。あまり眠られないとかで、倒れてしまったの

よ」

「……離宮への廊下を閉鎖させていただきました」

「そ、そうね」

父のサリヴァンへの愛情は奇行に等しい。それは重々、カルアも理解している。ゆえに、警戒は厳重だ。

「お身体のほうは、だいじょうぶなのですか？」

「叔母上さまは気にしなくていいと。本当に眠っているだけのよう

よ」

「ツェイルさまも一緒なのですか？」

「ええ」

「……珍しいですね」

「え？」

「ツェイルさまが登城なさったのは、数年ぶりのことです」

そんなに経つだろうか、と考えて、そういえば昔ほど城で逢わなくなっていたことに気づく。成長するにつれライラも勉強というものをしなればなくなっていたし、周りのこともあったし、オリヴ

アンだけが来ることが当たり前になっていったので、城で逢う機会が減っていったのだ。城の外、ヴァルハラ家の邸では逢っていたので、あまり気にしたことがなかった。

「なにかあるのでしょうか……」

「不穏なことを言わないでちょうだい。ついて来ただけ、と叔母上さまは答えてくださっているわ」

「なら、よいのですが」

「カルア」

勘繰るカルアに、そうは思いもつかなかったライラも不安になってしまう。サリヴァンやツェイルになにかあると、オリヴァンにもなにかあると思ってしまうのだ。

「……公子ならびんぴんしておりましたよ」

「えっ？」

不安が顔に出ていたのか、カルアにそう言われて吃驚してしまう。もしかして、いきなりやって来て、いきなりオリヴァンの文句を並べたのは、ここに来る前にオリヴァンに逢っていたからだろうか。

「怪我をしていたのはイオルシイズのほうです。ソルフィードも怪我をしたと報告がありました。イオルシイズが動き回れるくらいですし、心配など無用でしょう」

「本当に？ オリヴァンは無事なのね？ 怪我はないのね？」

「あの剣に勝てる剣士がいれば、無事では済まなかったでしょうね」

遠回しに無事だと言ってくれたカルアに、ライラは漸く安心の息をつく。オリヴァンが無事であることは少し前に知らされていたが、直接オリヴァンに逢った人からの報告ではなかったため、気が

気ではなかったのだ。

「ただし、帰還の予定は送れるでしょう。補修用の石材を公国から取り寄せなければなりませんし、直した部分を壊されたようですからね。最初からやり直しです」

「そう……被害はどれくらいだったの？」

「怪我人はイオルシイズとソルフィードただけだそうです。賊は公子が捕え、処分は公国に任せられたと」

「オリヴァンが……賊を捕えたの？」

さすがはオリヴァンだ、と目を輝かせると、とたんにカルアはいやそうな顔をした。嫌いではないと言うくせに、やはり性格的相性が悪いせいか、どうしてもいい顔はできないらしい。

「バケモノ並みに強いですからね、公子は」

どうやら剣の腕がもっとも気に喰わないようだ。幼い頃、交えた剣で負けたことがあるらしいので、おそらくはそれが今でも悔しいのだろう。

「オリヴァンの剣はすごい。舞っているようにしか、わたしには見えないわ」

剣を揮うオリヴァンは綺麗だ。それが人の命を奪うものの形であっても、人を惹き寄せる美しさがある。オリヴァン本人は稽古もしたがないし、帯剣も好まず、庭で草花を愛でるのが好きな気性なので、褒めたところで喜びもせず、事実を受け止めるだけだが、ライラは仕方なく剣を握って稽古をしている、ただ決められた型に従って剣を揮うオリヴァンの姿を見るのは好きだ。ただただ美しく、見惚れてしまう。

「どうしてあんなに、綺麗なのかしら……」

男の人に、綺麗、はないのかもしれない。だが、ライラにはそれ以外の言葉が見つからない。

「あのやる気のない姿のどこが綺麗なのか……わたしには理解できませんね」

「オリヴァンは綺麗よ？」

「姫さまのほうが百倍お綺麗でいらっしやいます」

お世辞を言っただけでオリヴァンの剣を貶したいらしいカルアに、ライラは苦笑した。

「やっぱり嫌いなものね」

「嫌いなわけではありません。あの胡散臭さがたまらなく不快なだけです」

素直に「嫌いだ」と認めてしまえばいいのに、幼馴染で親友の文官は、ライラを想ってそれだけは口にしない。いや、心の底から嫌っているわけでもないから、カルアのそれはライラの心を護ろうとしてのことだ。たぶんカルアは、誰かがオリヴァンの悪口を言っていたら、猛烈に怒る。ライラのためだけに。

「……ありがとう、カルア」

「？ いきなりなんですか？」

「オリヴァンのこと、教えてくれて」

きっとカルアは、いきなりやって来てオリヴァンの文句を並べたのも、ライラが誰にもオリヴァンのことを話せないとわかって、ラ

イラに喋らせるために行動に出てくれたのだ。オリヴァンを貶すのも、ライラがオリヴァンのいいところを話すための、きっかけを作るためのものだ。

カルアの想いを感じると、オリヴァンのことを想う自分に、優し
くなれる気がする。

「公子の様子を伝えに来たつもりはありませんが……そろそろ陛下も時間でしょうから、わたしはこれで失礼します。サリヴァンさまにご挨拶をしたいのですが……ツェイルさまでもよろしいでしょうか」

「待つて。訊いてみるわ」

さすがにお茶の時間ではなくなっているので、父もライラとお茶は諦めるだろう。退室を申し出たカルアに少し待つてもらって、扉の前で控えているマルサムに、カルアが挨拶をしたいと願っていることをツェイルに伝えてくれるよう頼んだ。

伝言を預かったマルサムは、部屋を出て行くとまもなく戻ってくる。ただ、ひとりではなく、ライラにも見覚えがある若い騎士を連れて戻ってきた。

「サリエさまと休まれておられるそうですね、伝言を承ると」

マルサムはそう言って、連れてきた若い騎士に前を譲る。

「クレイド・シュミッド？　いつのまに登城したのですか」

若い騎士は、もちろんカルアも見知っていて、クレイド・シュミッドといった。サリヴァンの騎士隊に所属し、サリヴァンにはなぜか「クート」と呼ばれている藍色の瞳を持った青年である。

「先ほど、ダンガード侍従長より召喚を受けました。お話はわたしが承ります」

「……他愛もないことです。お逢いできるのは久しぶりだと思いましたが、休まれておいでなら必要ありません。ですが、ご滞在の予定はお訊きしたい」

「長居はされなと思います。一週間ほどかと」

「そうですね……ではその期間、離宮への廊下は閉鎖させていただきます」

「閉鎖……？」

「陛下に知れたら政務が滞るからです」

僅かに首を傾げたクレイドだったが、理由を聞くと納得したように頷き、嚴重な警備をカルアに願ひ出て、頭を下げた。

父の奇行にも等しいサリヴァンへの過激な愛は、騎士隊では浸透している事項なのだと言感させられる。

「では姫さま、わたしはこれで失礼いたします」

「また来てくれる？」

「いつなりと、お呼びくだされば」

「ありがとう、カルア。今日みたいに突然来てくれて嬉しいわ」

「では、たまにそうさせていただけます」

にこ、と柔らかい笑みを浮かべたカルアに、ライラも微笑む。クレイドと一緒に、カルアは部屋を出て行った。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 11 (前書き)

オリヴァン視点です。

これが天恵だったのですねえ、と暢気にそれを分析したイオルシイズは、幾度か繰り返し返し飛んで、ついでにオリヴァンも一緒に飛ばして寝台送りになると、思い出したように「夕食にしますね」と言っ
て部屋を出て行った。

なんというか、随分と深刻な話をしていたと思うのだが、イオルシイズのせいで雰囲気は壊れた。

「ほんとにあいつ、ラクウィルの前でだけ拳動がおかしくなるんだな……」

つくづく思った。

「今さらなにを言うか。昔からだろうが」

「や、それはそうだけどね。おれのこと寝台送りにするなんて、まず初めてのことだから」

「……負けたとか思ってるのか？」

負けたというか、あの暢気ぶりには敵わないというか、そんなところである。

「あ、だめだ、眩暈する」

「寝ろ」

「……なんか優しくないな、ノア。なんで機嫌が悪いんだ？」

言ったことは凶星だったのか、むすつとした幼馴染は「べつに」と視線を逸らした。

「……拗ねているのか」

「そんな歳じゃない」

「どうした？」

「べつに」

不機嫌だし拗ねているなあ、と思いながら、オリヴァンは寝台に身体を横にすると、ノアウルの横顔をじっと見る。

ノアウルはオリヴァンの一つ歳上で、産まれたときからずっと一緒にの乳兄弟だ。ノアウルの母リリが、オリヴァンの母ツェイルの侍女だったから、兄弟のように育ったのだ。なにをするにも一緒だったが、生来の気性も性格も違っていたから、よく喧嘩はする。ノアウルが一方的にオリヴァンに腹を立てて、ではあるが、仲違いするほどの喧嘩は今までしたことがない。

だから今も、ノアウルが一方的に怒っているのだろうなあと、オリヴァンは苦笑した。

「サリエにおれのことでもなにか言われたか、ノア」

「違う」

「ふうん……まあ、サリエの言うことなんて、半分以上は気にすることないと思うけどね」

「……おまえ、サリヴァンさまが幽閉されてたって聞いて、驚いてたじゃないか」

漸く視線をオリヴァンに戻したノアウルが、怪訝そうな顔をした。

「ひどいとか、思ったんじゃないのか？」

「さつきも言ったけど、複雑なだけだよ。享受しているのだろうな、と思うとね」

「……サリヴァンさまはお優しい」

「優し過ぎるのも、ときには残酷なことだよ。わかっているだろうに」

「そうだが……」

眉間に皺を寄せたノアウルに、オリヴァンは肩を竦めて唇を歪める。

「サリエの過去なんて、おれには関係ない。そう言ったら、ノアは怒るんだろうな？」

「だろうなって……なんでそう思うのかわからないのに、怒れるかよ」

「おれとサリエは、同じ天恵者でも、その器が違う。それなら、サリエの過去なんて、関係がないに等しいと思わないか？」

「……おまえ、その器の意味、わかってるのか？」

「さあ？ 誰も教えてくれないし、自分じゃあわからないからな」

洗面を浮かべたノアウルは、じっとオリヴァンを見つめたあと、なにか諦めたように深々と息をつく。それはオリヴァンに、ノアウルはなにか知っているのだと、教えてくれた。

「……ノア、サリエの天恵が壊れているというのは、どういう意味だ？」

びく、と身体を震わせたノアウルが、表情はそのまま、薄茶色の瞳に困惑を混ぜる。

ああ、やはり知っているのだ。

「アインが話してくれたよ。おれとサリエの違いは本質で、器だね。どうやらサリエの天恵が壊れているせいのようにだけど……」
「……壊れてるんじゃない。壊されたんだ」

ぐつと、なにかを耐えるように低い声を出したノアウルを、オリヴァンは静かに見つめた。

「あのお優しい方を痛めつけて、詰って、脅して……ただ国主の天恵者であったというだけで幽閉して、壊して……っ」

「……なんでノアが怒るんだ」

「同じ理不尽が、おまえに振りかかるかもしれないだろ！」

どうして、と思う。

どうしてこんなに、忠誠心篤く、必死になれるのだろうかあと、暢気に思う。いや、立場が逆であつたら、オリヴァンも負けじと言葉にするだろうけれども。

「おれはそんな理不尽に負けないよ？」

だから言った。

勝つ自信があると。

「なにがあるかわからない。陛下が擁護してくださつても、議会有る」

「……おじいさまが『猯下』なら、それだけでもおれは十分な権力を持っていることになると思うけどな」

「猯下は、万能な神ではないと、ご自分でおっしゃっていた。猯下の目でも届かない場所はあるんだ」

猯下のことまで知っているとなると、ノアウルはやはり相当深い

ところまで事情を把握していることになる。さすがは宰相の息子、
といったところだろうか。

「過保護だなあ」

「なにが悪い」

「いや、いいけど。でも、少しは信じてくれてもいいだろ。おれだ
つて、ばかじゃない。考える力はあるんだよ」

「……心配なんだから仕方ないだろ」

根っからのお兄ちゃんだなあと、なんだか笑えてきた。機嫌が悪
かったのは、もしかしたらイオルシイズに《天地の騎士》の天恵が
現われたせいだろうか。

「サリエも怒って、ノアも怒って……ああ、カルアも不機嫌だった
な。なんか、今日はみんなに怒られる」

「べつに怒ってない」

「そのどころか？ おれだって考える力はあるのに、なんで頭ごな
しに怒るかなあ」

はあ、とため息をつけば、ノアウルの眉間の皺が深くなる。怒っ
ているわけでも、不機嫌なわけでも、拗ねているわけでもないと言
いたいのだろう。

オリヴァンは小さく笑い、ごろりと横に転がってノアウルに背を
向けた。

「おれは護られながら、おれの護りたいものを護る。それが利己的
だと言われようと、なんと言われようと、おれはそうする」

「……オリヴァン？」

「護られたくないわけじゃない。おれを護ろうとしてくれている人
たちがいる限り、おれは護られ続けなければならないから。それが

おれ自身だったり、天恵だったりしても、けっきょくは同じことだ。それくらいはわかっている。けど、な……」

ふっと息をつき、オリヴァンは身体を丸める。

わかってくれ、と思う。

理解してくれなくていいから、わかってくれ、と。

「おれは、ライラを護りたいんだ」

なにをしても、ライラのことを頭から離れない。それをわかって欲しい。理解する必要なんてない。ただ、そうなのか、と思ってくれればいい。

「ライラのそばにいるためだったら、なんだってするよ……だから、過保護になって欲しくないんだ。おれにも護りたいものがある」

逢いたいなあと、思う。

逢って、抱きしめて、笑いかけて欲しいと思う。

「ライラ……」

今この瞬間、このとき、この腕にきみを抱きしめられたら、どんなにか安堵することだろう。

「おまえ、本当にライラのこと……」

「……なに？」

「いや……どうするんだ？」

「ライラのこと？ それなら、さっさと砦の補修を終わらせて帰ってからサリエに強襲かけて、助け出すけど」

「サリヴァンさまに迷惑をかけるな」

「ライラを攫ったサリエが悪い」

「攫ったわけではないだろうが……」

「おれの前から隠したんだから、同じことだろ」

今この瞬間にもきみを抱きしめたいと思うから。

「明日から職人たちに混じって、最初からだ」

早く、きみのところに帰ろう。

きみの片翼は、ここにいるこのおれだけなのだ。

ほかの誰でもない、このおれだけが、きみの片翼なのだ。

そしてきみは、おれだけの片翼であると。

そう、きみに囁こう。

驕っているのではないことを、証明してみせよう。

「……おれが行ったとき砂だらけだったのは手伝っていたからか」

ノアウルのぼやきを聞き流し、オリヴァンはグッと強く拳を握った。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 12 (前書き)

ライラ視点です。

サリヴァンが目を覚ましたのは、四日後の昼だった。

部屋に呼ばれたライラは、いきなり倒れて驚かせてしまったことと、その後に眠り続けてしまったことを謝られた。ツェイルの言うとおり本当にただ眠っていただけのようで、サリヴァンの顔色は倒れる前と比べてよくなっている。

「ところで、ツェイを知らないか？」

「叔母上さまですか？ いえ……：そういう場合は見ていません」

起きたサリヴァンは寝台から離れ、居間にいたのだが、起きたときもライラを呼ぶときも、ツェイルの姿を見なかったのだという。ついでに、侍従長ラクウィルの姿もないらしい。

「どこに行っただ？ 起きるまで気配はあっただが」

「離宮のどこかにおられるのでは？」

「捜させた。が、いないんだ。それでライレイのところにもいるのかと調べていたんだが……見てないか」

「はい。昨夜の夕食は一緒にしましたが、それ以後は……」

ライラはこの離宮で、ひたすらオリヴァンの無事な帰りを祈って公務や勉強をしていたが、今朝から消えているツェイルはずっとサリヴァンのそばにいた。というよりも、寝室に籠もり切りだった。ゆえにこの四日ほど、ライラは食事以外の時間で、ツェイルとまと

もに顔を合わせていない。

「ラクと一緒にどこかへ行ったか……ナイレン、なにか聞いてないか？」

サリヴァンは近くに控えていた騎士に、ふと振り向いて訊ねた。

「先ほども言いましたが、おれはなにも。ただ、気になることが「なんだ？」

きよとん、と首を傾げたサリヴァンが、なんだか可愛らしい。オリヴァンに仕草が似ている。いや、サリヴァンの仕草はオリヴァンの原型だ。似ているのは当然である。

そんなことにちょっととしたドキドキ感を持ちつつ、ライラも一緒に首を傾げる。

「皇宮から離宮への廊下は少し前から閉鎖されていたのですが、先ほど開放されたようで」

とたん、ぎつくん、とサリヴァンがびくついた。ライラも、「あ」と思う。

「あれは足止めでしょうかね？」

なんの足止めか、などと、訊かずともわかる。

「兄上が来る……」

「父上さまが来ますね……」

皇帝サライが押しかけてくる可能性、それゆえに対応しなければ

ならないだろうサリヴァンは、離宮での身動きが制限される。

「ツエイの仕業か……」

ツエイルが、なにかを目的にしてサリヴァンの足止めをしようとした可能性は高く、またライラもそれをなんとなく否定できない。この見計らったような頃合い、畏ともいえるのではなからうか。

「どおりでナイレンがいるわけだ……来たときはおまえがいなかったからな」

「おれのほかに、ユグド隊長とシュベルツとクラウスと、クレイドも来ていますよ」

「コートも？」

「今や立派な騎士ですからね。本当は公子にお付けしようと思っただけで連れてきたんですが、一足遅かったようです」

「あー……兄上が来たらジークフリートに送らせる」

「そうしてくださいと助かります。ラクウィルに頼もうにもいませんし、ノアウルはもちろんいませんし」

「うー……最悪だ。兄上がくる。失敗した」

サライが来ることには諦めがついたらしいが、それでも嫌そうな顔をしたサリヴァンは、深々と息をつくとき長椅子に埋もれる。不貞腐れているようなその姿に、オリヴァンもこんなふうにならぬに不貞腐れるのだろうか、ライラは関係のないことを考えて小さく笑った。

「父上さまのことは、申し訳ありません。わたしには止められなくて……」

「いや、ライレイのせいではない。兄上は……まあ、ずっとあんなんだ。おれが隠されていた間のことをまったく知らなかったと、そういう罪悪感があるせいで、護ろうと必死であられる。そんな歳で

もないのに、な」

ふと、疑問が湧く。

「隠されていた、とは……」

「ん？ ああ、ライレイは知らないか」

居住まいを直したサリヴァンは、苦笑しながら「昔の話だ」と言った。

「おれは兄上とは別々に育っている。おれは兄上の存在は知っていたが、兄上はおれの存在を知らなかった。それだけのことだ。そういう罪悪感だよ」

「なぜ、別々に……？」

「んー……その経緯は、よくわからないな」

誤魔化しているというよりも、話したくなさそうなサリヴァンの様子に、ライラは押し黙る。いつでも微笑んでいる叔父が、なんだか悲しそうだったのだ。それに、ちらりと見やった騎士の顔色も悪くなっている。その辺りの事情、或いは過去を、ライラは今ここで聞くべきではないらしい。

思えばライラは、サリヴァンのことを、実はよく知らない。オリヴァンのことなら幼い頃から一緒なだけにわかるけれども、サリヴァンのことは、父サライですら話そうとしないゆえに、過去にながかったのかなど聞いたことがない。聞こえてくるのは、いつだって外周の噂話ばかりだ。

それでいいのだろうか、と脳裏に疑問が過ぎる。

「……叔父上さま」

「ん？」

「わたし、このままではいけないような気がするのです」
「……このまま、というത്？」

ぎゅっと拳を握って、サリヴァンを見つめる。

もつと若い頃は父サライと区別がつかないほど似ていると言われていたサリヴァンは、しかし髪の色が違う。瞳の色も、サリヴァンのほうが透明感は強く、また雰囲気も柔らかい。全体的に見れば間違えそうなほど父サライと似ている叔父だが、双子のようだと言われていたことが本当にあるのだろうか、ライラは思う。

「わたしは、流されるままに、オリヴァンと婚約しているのではありません」

「……ああ」

「片翼だからとか、天恵があるからとか、そういうことも関係ありません」

「ああ」

「わたしは……オリヴァンに恋をしています」

父サライの弟、叔父、オリヴァンの父に、はっきりとそう言うのは気恥しいところもある。だが、ライラは知って欲しいと思った。サリヴァンには、わかってもらいたかった。いや、サリヴァンはわかっているだろう。ただライラが、どうしても不安になるだけだ。どうして信じてもらえないのだろうか、どうして理解してもらえないのだろうか、そう周りに対して悲しくなるがゆえに。

「ライレイの気持ちは、わかっているつもりだ」

「叔父上さま……」

「だが、周りは納得しない。とくに、おれを快く思っていない者たちには、無理にでも納得することができないものだ」

それが悲しいと、ライラは思う。この心優しい叔父を、どうして悪く思えるのか、言えるのか、ライラにはわからない。

「おれのせいで、ライレイには悪いことをしているな」

「そんなことはありませんっ」

「はは。ありがとう、ライレイ」

ふわふわと微笑む叔父は、オリヴァンそのものだ。オリヴァンも、こういつぶうに笑う。この笑みを理解できない人たちが、ライラにはわからない。

「さつさと、ライレイや兄上の前から消えてしまえたらいいんだが……悪いがそれだけにはできない。おれには、ツエイがいるから」

「二言めには「ツエイ」と名を呼ぶサリヴァンの愛情は深い。ライラがいつだってオリヴァンのことを考えているように、サリヴァンはいつだってツエイのことを考えている。こんな夫婦になりたいと、ライラは幼い頃からよく思ったものだ。

「叔母上さまを悲しませるようなことだけは、口にしないでください」

「そうだな……そのためにも、先に目的を果たすべきだった」

「……、目的？」

なんだろう、とライラは首を傾げる。

「皇都を離れようと思っている」

瞬間、ライラは瞠目した。

「都を、離れる……のですか？」

どこに、と先に思ったのは、公爵であるサリヴァンに所領地がないためだ。正確には、帝国預かりとなつてゐる領地はある。けれども、サリヴァンには統治する権限がなく、言つてしまえば剥奪されてゐる状態だ。皇都を離れても、行くところはないのである。

「ど、どうして急に、そんな」

「急なことではないが……以前から、オリヴァンが成人したら皇都を離れようとは考えていた。この時期になつたのは、まあ……ツエイが身重だからな」

「え……？」

「産まれる前に移動を済ませて、落ち着かせたい。だから今度こそ、兄上を脅してでも領地を取り戻すつもりだ。無理なら別宅を購入するが、まあ兄上のことだから承諾してくださるだろう。そもそもこんなに長く皇都に留まる予定ではなかつたんだ」

「叔父上さま、お待ちください。叔母上さまが、なんと？」

ちよつと待つて、とサリヴァンの言葉を止め、ライラは少しどきどきしながら聞き間違えてはいないだろうそれを訊ねた。

「ツエイが……ああ、言わなかつたか。身重だ」

「み、おも……と、言いますと」

「妊娠している。そんなふうには見えないだろうが」

見えなかつた、とライラは硬直した。

だが、とても喜ばしいことだ。

「お……おめでとつございます」

祝いの言葉を述べれば、サリヴァンはそれはもう幸せそうに、嬉しそうに、満面の笑みを浮かべた。

「ああ。今度は娘だ」

「性別がおわかりに？」

「おれが娘だと言っただから、娘だ」

息子だったらどうするんですか、と騎士が顔を引き攣らせて言ったのをサリヴァンは無視したが、同じことをライラも思った。

それにしても、ツェイルはまったく身重に見えなかった。衣装が神官のような男装なせいもあるだろうが、そうでなくてもサリヴァン曰く「成長速度が遅い」のだそうだ。妊娠が発覚して少し経ち、そろそろ腹が膨らんできてもおかしくないのに、まったくその傾向がないらしい。

「医師に訊いたら、特に問題はないと言われてな。養父上に……：猊下に訊こうと思ってツェイルを連れて来たんだ」

「そうだったのですか……」

数日前に訪れた友カルアが「なにかあるのでは」と訝しんでいたのも、あながち外れてはいなかったわけだ。

「まさか逃げられるとは思わなかったが……：うっかり眠りこけたのが失敗だ。こんなふうにして兄上とお逢いするつもりでもなかったのに、予定が狂ったな」

「父上さまは……」

サリヴァンとツェイルにふたりめの子が産まれることは喜ぶだろうが、それを理由に皇都を離れられたら、父サライはどう反応する

のか。さすがに娘であるライラにも予想できない。

「隠居とまではいかないが、そうすることに兄上も反対はしないだろう。オリヴァンは成人した。ノアウルやイオルシイズ、ソルフィード、クート……互いに支え支えられる者たちがいる。だからあとは、オリヴァン次第だ」

「オリヴァンを置いて行かれるのですか？」

「そうしないと、ライレイに恨まれる」

「そっ……そんなことはありません」

内心、オリヴァンを皇都に残してくれることに、ライラはほっとしている。帝国預かりとなつていくヴァルハラ公爵の領地は、皇都から随分と離れているのだ。今までのように逢う機会は、それほど多く期待できない。いくらノアウルのような天恵者がいても、一緒に飛ぶ回数には限りがあつて、使用には気をつけなければならないのだ。

だから、オリヴァンが残ってくれるのは嬉しい。サリヴァンやツエイルと逢えなくなつてしまうのは、寂しいことだけれども。

「ライレイ」

「は、はい」

「おれは皇都を離れる。もうオリヴァンのそばにはいてやれない。いや、オリヴァンにはもう庇護者はいらない。だから、ライレイに頼もつと思つ」

「……叔父上さま」

サリヴァンのふとした言葉に、やはりわかつてくれていたのだと、ライラは安堵する。

「臆するな、ライレイ」

それは、力強い言葉だった。

「天恵、片翼、その言葉に惑わされてはならない。ライレイも、オリヴァンも、この世界に生きるひとりの人だ。だから屈するな」

ハツとする。

ああ、そうだ。

ライラには願いがあつた。届いて欲しい祈りがある。

それらを叶えるために必要なのは、周りの思惑に屈しないこと、臆さないことなのだ。

周囲に振り回されてはいけぬ。

周囲の噂ばかりに、耳を傾けてはならない。

見るならすべてを、聞くならすべてを、見て聞いて判断しなければならぬ。

偏つたものは、真実とは言い難いのだから。

危うく、そのことに気づかないままではいゝところだった。

「叔父上さま、わたし……」

真つ直ぐと、サリヴァンを見つめる。

透明感の強い碧い瞳は、ライラの姿を映し、そうして微笑んだ。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 12 (後書き)

いつになったらライラとオリヴァンのふたりきりのシーンになるのか…… 申し訳ありませんorz

読んでくださりありがとうございます。

本年も拙作をよろしくお願いいたします。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 13 (前書き)

オリヴァン視点です。

北領の砦の修繕は、賊に襲撃されたにも関わらず、予定よりも僅かに遅れた程度で完了した。それはシエリアン公国の助力と、オリヴァンの的確な指示による迅速な対応によってもたらされたことだ。

「おまえ、公子だったんだな。それも皇女サマの婚約者ときた。驚いたぜ」

職人たちは、オリヴァンの素性を知ってしばらく動揺し、そうしてぎくしゃくとした態度を取っていたが、オリヴァンが相も変わらず小間使いのような作業をしていたので、それを見ているうちに以前のような態度で接してくれるようになっていた。大雑把な性格をしている職人たちに、オリヴァンの素性は大雑把に振り分けられたようではあるが、ただの貴族ではないらしいと思われたのだろう。関係が回復したことも、北領の砦の修繕には大いに貢献された。

皇都への帰還は、それから一週間後のことである。

登城して報告する前にと実家に帰ってきたオリヴァンは、しかし予想していた母ツイェイルと父サリヴァンの出迎えを受けなかった。

「あれ……ツイェイは？」

出迎えてくれた家宰に訊ねると、首を左右に振られる。

「登城されておいでのはずです」

「城？ 離宮にいるの？」

「そのはずです」

「はず？」

「城に行く、とサリヴァンさまと出られてから、お帰りになりませ
んのぞ」

「珍しいな……」

乞われても登城などしたことなどなく、サリヴァンと一緒にでもあ
まり登城したがないツェイルが、登城したまま帰ってこないとい
うのは、登城したときよりももっと珍しい。

「着替えたからおれも城に行く。表に馬を出しておいてもらえるかな
」承知いたしました」

とりあえず身綺麗にして城へ行こう、と決めると、オリヴァンは
一緒に帰ってきたノアウルやイオルシイズ、途中から一緒にいたク
レイドにもそう声をかけ、自室に向かった。

汚れた身体をさっぱりと洗い落とすと、出仕するときに着る衣装
に袖を通す。昔サリヴァンが着用していた白い衣装はオリヴァン用
に仕立て直され、飾り気もなく質素だ。もともと装飾品は好まない
性格なので、とくに拘りもなく身を整えて自室を出た。

準備を終えて外に出たときには、ノアウルとイオルシイズ、クレ
イドも同じように準備を終えて待機していた。

「休んでてもいいぞ、シズ。怪我、まだ治ってないだろ」

「だいじょうぶですよ。報告に行くだけでしょう？」

「そうだが……本当に平気か？」

だいじょうぶですよ、と繰り返して言ったイオルシイズの顔色は、怪我を負った当初よりも格段によくなっている。放っておくと自分では治療もせず、包帯も放置するか勝手に取ってしまうような奴なので、ノアウルと躍起になってかまった成果だ。まあ連れて行っても問題はないだろう。

「ふむ……クートも、行くのか？」

「わたしは護衛です」

「ノアモシズもいるんだけど」

「多いことに越したことはありません」

もつともだ。クレイドは頭が固いので、融通が効かない。ここで効かせる必要のある融通もないので、まあいいか、とオリヴァンは最後にノアウルを見やった。

「城に行ったら、陛下に報告するから。あとライラにも」

「……ああ」

なにを、とは訊かず、どこか不服そうにノアウルは頷く。北領の砦の修繕終了報告と一緒に、イオルシイズの天恵発現も報告することになっているので、少し面白くないらしい。今までひとりでふたり分の騎士をやっていたのだから、それが軽減されていると余裕もできるだろうに、とオリヴァンは思うのだが、ノアウルはそう考えられないようなのだ。

「じゃあ、行くか」

合図をすると、それぞれが一斉に馬に跨る。先に走り出したのはクレイドで、続いてオリヴァン、ノアウルと続き、最後にイオルシ

イズが、ヴァルハラ公爵家の邸を出て皇城へと向かった。

皇城へは、馬で一刻と少しかかる。オリヴァンが赴くことは先に伝令が行っていたので、到着したときにはとくに驚かれもせず、厩舎の顔見知りには「無事に帰ったか」と労いの言葉も受けた。

城に入ってすぐ、待ち受けていたのはカルアだった。

「久しぶり、ただいま、カルア」

「薄気味悪い笑みはご遠慮願います。お帰りなさいませ、オリ工公子」

相も変わらず強烈なカルアは、今日も官服を完璧に着こなし、一糸の乱れもない。

「申し訳ありませんが、今少しお待ちいただけますか」

「それはかまわないけど……なにかあったの？」

「なにも。陛下がおられないだけです」

「え……ええ？」

いないとはどういうことだ、とオリヴァンは目を丸くした。カルアの落ち着いた様子から悪い事態が起きているわけではなさそうだが、伝令はサライのところまで行っていないのかもしれない。

「正確には、皇城のどこかにいらっしやるのでしょうか、お姿が見えませんか。先ほどから捜してはいるのですが」

「……ええと、逃げられているのかな？」

サライならやりそうだなあと笑ったら、カルアに思い切り睨まれた。ので、すぐに目を逸らして誤魔化す。ため息をつかれた。

「サリヴァンさまもいらっしやりませんか、」一緒なのでしょうね」

「ああ……サリエと追いかけてこかな」

やりそうだ。ものすごくふつうにやっついていそうだ。いや、過去にやっていたことがあるので、今もやっているだろう。

「それなら、先にライラに逢いに行こうかな。まだ離宮にいる？」

「いえ、数日前から自室に戻られています。ご案内します」

「あ、いいよ。部屋ならわかるから」

「ご案内します」

「……よろしく」

なんだか今日はものすごく警戒されている。そう思いながら、歩き出したカルアの後ろに続いた。

「ご無事でなによりです。迅速な対応と、的確な指示、陛下が褒めていらっしやいました」

「ありがとうございます。みんなのおかげだ」

「でしようね」

カルアの言葉一つ一つが、なぜだろう、痛い。気のせいだろうか。

「ライラは元気？」

「そう訊かれて、いいえと答えられますか？」

気のせいではなく、痛い言葉だ。

ノアウルとカルア、兄妹揃って機嫌が悪そうだというのは、これがかかなか厄介というか、面倒というか、疲れるというか、大変だ。

早くライラに逢って、癒されたい。
ライラを抱きしめて、安心したい。
ライラと笑い合って、和みたい。

カルアに話しかけるのは得策ではないらしいと理解して、オリヴァンは口を閉ざすと黙って歩く。

聞こえるのは靴音と、風を受けた外套の音、腰に提げた剣の金属音だけとなった。

広い廊下を黙々と歩き、外の光りが入る外縁の廊下に出れば、木々のざわめきや動物の鳴き声も聞こえてくる。今日は出仕している者たちが少ないのだろう。人の声はそれほど聞こえてこない。

そこにふと、やけに歩幅が短い靴音が聞こえた。

「ん？」

「どうした、オリヴァン」

「いや……靴音が一つ、いや二つ……三つ？ 多くないか、ノア」
「靴音？」

立ち止まって、どこから聞こえてくるのだろうか、視線を巡らせたときだ。

どん、と。

「えっ？」

唐突に、胸を襲った衝撃があった。

「オリヴァン！」

「公子！」

それはオリヴァンにも唐突だったが、ノアウルやイオルシイズ、クレイド、カルアにも唐突で、いきなりのことだったらしい。複数の警戒した声が重なった。

オリヴァンは、胸に飛び込んできた衝撃を、じっと見つめる。

「……ツエイ？」

母だ。

いったいどこから現われたのか、母ツェイルがオリヴァンの胸に顔を埋めてしがみついていた。

そうして。

「ツエイ、どこに逃げたっ！ ツエイ！」

という大声が、廊下に響いた。

「サリエ？」

あれは父サリエヴァンの声だなあと、暢気に思ったところで、しがみついていたツェイルが顔を上げた。

「おかえり、オリヴァ」

「……ただいま？」

「おかえり」

ふわっと微笑んだツェイルは、ぎゅっと強くしがみついていたあと、ふっと離れていく。

「ツエイ？」

久しぶりなのに、とオリヴァンは手を伸ばすが、ツェイルは笑ったまま距離を作る。そのままくるっと、オリヴァンに背を向けて走り出した。

「ラク！」

「はい。あ、オリヴァンおかえりなさい」

と、ラクウイルを呼んで、ツェイルは消えた。ラクウイルの天恵で、どこかに飛んでしまった。

「え…… ちょ、ツエイ？ 久しぶりの息子だよ？」

それはないだろう、と戸惑っていたら、もう一つ聞こえていた靴音が近くまで来ていた。これはサリヴァンだ。

「オリヴァン、ツエイはどこに行った！」

「ちよつとサリエ？ 久しぶりの息子に夫婦してなに？」

振り向きざまに言ったら、完全に息の上がった父がいた。

「父と呼べ！」

「やだよ」

「おかえり！」

「ただいま」

「っ…… 疲れた」

だろうな、と思いながら、へばって床に崩れそうになったサリヴ

アンの腕を取って支えてやった。

「相変わらず体力皆無だね、サリエ」

「言っな……っ」

「情けない」

「ツェイに、ラクを、とられた……失敗した」

なにをどう間違え失敗して、自分の騎士をツェイルに奪われたのか。

まあそれはどうでもいい。

相変わらず体力のないわが父に、オリヴァンは呆れるだけである。

「サリヴァンさま、どこにいらっしやったのですか」

「ん？ ああ、カルアか。みんな、揃っているな」

一番にわれに返ったカルアの言葉で、サリヴァンは漸く周りを見渡し、揃っている面子に微笑む。この状況でオリヴァンだけを認識していたとは、さすが父、だろうか。

「近くの部屋で休みましょう。もう少し歩けますか、サリヴァンさま」

「悪い。部屋はいいから、その椅子に座らせてくれ」

そこ、とサリヴァンが促したのは、外縁の向こう、ちょっとした庭になっているところにある石椅子だ。ノアウルに手伝ってもらって、オリヴァンはそこまでサリヴァンを連れて行く。

クレイドが「水をもらってきます」と申し出てくれたので、ノアウルと一緒に行ってもらった。

「陛下はご一緒ではないのですね。てっきり、ご一緒なのかと思っ

「ておりました」

「ん、逃げてきた。まあすぐに見つかるだろうな。疲れて動けん」

どうにか息は整えたサリヴァンだが、もう一步も動きたくない、と後ろの壁を背もたれにして少し姿勢を崩す。子どものようなその態度に、息子として、オリヴァンは「なんだかなあ」とため息をこぼした。

「なんだ？」

「いや、この前は怒っていたから、まだ機嫌悪いのかと思っていたんだけど」

「おれの不機嫌は長引かないぞ」

「ツエイのこと以外で、ね。はいはい」

「母と呼べ、母と」

「ツエイはツエイだよ。おれもてつきり陛下から逃げているものだと思っただけで、ツエイと追いかけて……なに珍しいことしてるかな」

サリヴァンの横に腰かけて、オリヴァンは深々と息を吐き出す。邸でならまだしも、城でなにをしているのだから、と両親に呆れるばかりだ。

「ツエイが走り回るからだ。動くなと言ったのに」

「ツエイがひとりで動き回るのは昔からだろ」

「身重だぞ」

「……、あ」

そうだった、忘れていた。母は身重だったのだ、そういえば。

「身体が軽いと言って、ラクの天恵の負荷も感じないらしい。身重

だという自覚がまずない」

「うん。おれも忘れてた」

「忘れるな。年明けには妹が産まれるんだぞ」

「おれも妹が欲しいけど。でもなんで、ツエイがラクウィルと？」

なぜサリヴァンから逃げているのか、と問えば、父はわざとらしく視線を彷徨させた。

「ああ、怒らせたわけ」

「ち、ちがう」

「なにを誤魔化して怒らせたのだから」

まったくこの夫婦は、とわが両親にやはり呆れる。

「べつに誤魔化したわけでは……」

誤魔化したのではなく隠しごとだろうか。わが父は隠しごとがとても上手いのだ。だが、わが母にそれは通じないところがある。

「なにやったんだよ」

と問えば、サリヴァンは唸った。

どうやら隠しているつもりでもないらしい。となると、言い忘れたことで、ツエイルを怒らせたことになる。いや、むしろ逆だろうか。サリヴァンを怒らせて、ツエイルは逃げたのかもしれない。

痴話喧嘩か、とオリヴァンは肩を落とした。
珍しいことは、続くものだ。

と、そのときである。

「サぁリエーっ！」

という、大音量の嬉々とした声が、外縁の廊下に響き渡った。

「あ、あにつえ……」

嫌そうな顔をしたサリヴァンが、満面の笑みで走ってくる人物を見やって、頬を引き攣らせた。

「陛下も相変わらずだなあ……」

久しぶりを見る皇帝サライに、オリヴァンも頬を引き攣らせた。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 14 (前書き)

ライラ視点です。

数日前から皇宮の自室に戻ったライラはその日、朝から父の来訪を受けた。どうやら母の機嫌を損ねたようで、妙に落ち込んでいる。

「テイエンが口を聞いてくれんだ」

「それは……叔父上さまを追いかけてばかりだからでは？」

「サリエ？ 関係なかるう。サリエは大切なわが弟だ」

その過激な愛情が母の機嫌を損ねるのだと、いつになったら気づくだろう。いや、母も随分と捻くれた愛情表現をするので、父がこのままなら一生気づくことはないかもしれない。

「母上さまも諦めればよいのですが……」

「ん？」

「いいえ。ところで、わたしになにか用事がありなのですか？」

「おお、そうだった。確か今日……そうだな、今日だ。帰ってくるぞ」

「はい？」

なにが帰ってくるのだ、と首を傾げたら、落ち込み気味だった父の表情がぱっと明るくなる。

「オリエが帰ってくるぞ」

とたん、ライラは瞠目し、座っていた椅子から勢いよく立ち上がる。

「オリヴァンが、帰って……?」

「さすがはサリエの息子だ。仕事が早い。予定を大幅に覆してくれたぞ」

父は自慢げに、自分のことのように嬉しそうに笑った。オリヴァンが最愛の弟の息子であるからこそ、自分のことのように嬉しいのだろう。

「当初の予定と合わせても、予測範囲内だ。賊の襲撃があったというのに、さすがとしか言いようがない」

「オリヴァンは、無事に?」

「ああ。もともと賊の襲撃など、オリエには脅威にもならんからな」

ライラはほっと息をつき、とさりと椅子に座りこむ。オリヴァンが無事に帰還することと、やっと逢えるという安堵感に力が抜けた。

「それでな、ライレイ」

「……はい?」

「今回のことで、議会の半数以上がオリエを認めた。剣才はもちろん、血筋に関係のないその存在も。これはよい傾向だ」

「はい」

父は真面目な顔を見ると、ライラの向かいに腰かけた。

「おまえには言っていないかったが、おまえとオリエの婚約は、わたしの一存で決められていた」

「え……父上さまの、一存?」

「ああそうだ。わたしは弟を失いたくなかったのな。その息子を盾に取っていたのだ」

「……父上さま、それは」

「わかっている。卑怯な手だ。それでも、わたしは弟をこの国に、わたしのそばに、留めて置きたかったのだ」

許せ、と父は、ライラではなく、誰かに、許しを請うた。その誰かは、母でも、当事者のサリヴァンでもない。きつと、オリヴァンだ。だが父には、後悔があるように見えない。

「なぜそのようなことを、とお訊ねしても？」

「……すべてはわたしの無知が招いたことだ」

「無知？」

それは、どういう意味だろうか。

「なにも知らなかった。それが弟を……サリエを苦しめ、悲しませた。わたしはそれを償わねばならん。だからわたしは、なにをしても、サリエを護るのだ」

なにを知らずにいたのか、父は語らない。だが、護るためにならなにも厭わないという姿勢は、強固だった。

「叔父上さまを護るために、オリヴァンとわたしを婚約させたのですか？」

「ああ」

父は、わが子ですら利用したことを、否定しなかった。少しだけ、心が痛い。

けれども、ライラはどこか、ほっとしている。

けつきよくのところは父の思惑どおりなのだろうが、ライラはオリヴァンと出逢えたことがなによりも嬉しく、そして幸せだ。出逢わせてくれた父に、感謝したいくらいである。たとえそれが利用するためのことだったとしても、結果的にライラは、オリヴァンという人に惹かれたのだ。

「父上さまの一存であったとしても、わたしの気持ちは、変わりません」

「……ライレイ」

「父上さまもご存知でしょう。わたしは、オリヴァンに恋をしています。それは父上さまに強要されたからではありません。利用されたからではありません。わたしは、確かに、オリヴァンという人を好きになったのです。父上さまがどう思おうが、どう感じようが、それは変わらないことです」

「議会が、認めていなかったとしても？」

「そもそもなぜ議会の賛成を必要とするのですか？ 血筋の関係でしたら、オリヴァンは四公ヴァルハラ家の嫡子、問題はありません。想いも……通じ合っています」

オリヴァンがライラをどう思っているのか、ライラにはまだよくわからないけれども、少なくとも好かれてはいる。直接的な言葉は聞いたことなどないが、ライラを抱きしめ、微笑んでくれる。ライラも嫌われないように努力してきた。政略的なものに近い婚約だとしても、いい関係は築いているはずだ。

だいたいにして、ライラはすでに、オリヴァンがどう思っているが、そばを離れられないほどに恋慕している。今さらだ。

「議会は、サリエを警戒している」

「叔父上さまが、帝位を篡奪するとでも？」

「サリエがそんなことするか！ むしろ逃げるのだぞ。サリエを逃

がさぬためにわたしがやっていることを、議会は逆に取るのだ」

「父上さまには脅威である、と？」

「議会の考えることはわたしにはわからん。どうすればそう考えられるのか、わたしはさっぱりだ」

それが人間というものだろうが、とライラは思った。父も、それはわかっていようだろう。だが、理解して欲しいあまりに、盲目的になっている。それも仕方のないことだ。

父は深くサリヴァンを愛している。己れの命以上に大切に、まるで、見捨てられるかもしれないと恐怖する幼子のように。

「その議会在、オリエを認めたこの好機を、わたしは逃さん」

ぐつと拳を握り、父は不敵に笑む。仕返しを思いついた、やはり幼子のような表情だった。

「二月後、誕生祭の折りに、おまえたちの婚前披露をする」

「……婚前、披露？」

婚約発表ならしているのに、と言いかけて、そういえば公の夜会でお披露目はしていないことに気づいた。

「今さら、という気もしますが」

「必要なことだ。議会の言質を取る」

もう誰にも、なにも言わせない。父は、そう決めたようだった。

「……喜ばんのか？」

「え……いえ、それでなにかが変わるなら、とても嬉しいことです。オリヴァンの安全も確保されるなら、もっと嬉しいのですが」

「心配は要らん」

父ははっきりと、断言する。

もしかすると、最愛の弟を引き留めるためにわが子すらも利用したことが、父にとって護るための最大手段、そして防御方法だったのかもしれない。

「では、サリエにも伝えるとしよう」

すつくと立ち上がった父は、口許を綻ばせている。

これからまたあの騒ぎが始まるのか、と思うと、ライラの顔は引き攣った。ライラが皇宮の自室に戻る原因となった騒ぎは、今では突発的な行事になっている。

「あの、父上さま、叔父上さまのお仕事を邪魔されては……」

「邪魔などしておらん。逢いに行っているだけだ」

サリヴァンを追いかけて、それで逃げられる。そうして皇宮内を走り回り、政務が放り出されている。

この数日でいったいどれだけの政務が滞っているか、父はわかっているのだろうか。

「あ、お待ちください、父上さま……っ」

サリヴァンのところへ行くために動き出した父を、ライラは追いかけた。どうにか父を引き留め、政務に集中してもらわなければならない。追いかけられているサリヴァンは疲労を蓄積させ、サリヴァンのほうの政務も滞っているのだ。

しかし、父は無邪気に笑う。

「ライレイも来るか。そうだな、そのほうがいい。オリエを婿にもらうのだからな」

などと言い、ずんずんと歩いて行く。これが速くて、ライラは小走りで追いかける羽目になった。

「父上さま……っ」

待つて欲しいのに、父は待たない。ひとりで歩いて行ってしまっ

「ジーク！ ジーク、いないのか」

と、己れの騎士まで呼ぶと、父の《天地の騎士》であるジークフリート・レイル・カリストルは、父の歩調に合わせて姿を見せた。

「おいおいサラあ。またサリエかよ？」

「どこにいる」

「どこって……このまま行きゃあいるけどよお。ルカとかラクウイルもいるぜ？ おれ、行きたくねえんだけど」

「表にいるのか？ 差し迫った政務はなかったと思うが……」

「サラにはなくてもあつちにはあるだろ。つか、これ以上サリエの邪魔すつと、おれがラクウイルに殺されんだけど」

「ならば殺されておけ」

「ひどっ！」

「わたしはサリエに話があるのだ」

「話い？ ……ああそっぴやサリエの奴、田舎に引っ込むとかなんとか」

「なにっ！」

「ん？ 聞いてねえの？」

「聞いとらん！」

「……ま、仕方ねえな。サリエに逃げられてはつかで、ろくに話してねえもんなあ」

「ジーク、説明しろ！ サリエはどこに行くつもりなのだ！」

歩きながら、それも速度のある歩行で、よくもまあぼんぼんと会話ができるものだと思いつながら、ライラは必死に追いかける。ライラの後ろからは、近衛騎士やライラの侍女、女官も続いているので、けっこうな人数だ。

「ち、父上さま、お待ち、ください……っ」

そう声をかけるが、サリヴァンの隠居話を聞いていなかったらしい父はそれで頭がいっぱいになってしまっているようで、ライラを振り向いてくれない。

どれくらいそうやって歩き続けたのか、気づくと皇宮の中央棟、父の執務室がある部屋の近くまで来ていた。その廊下には、サリヴァンとラクウイル、そして宰相ルカイアがいた。

「サリエー！」

「……、陛下？」

「兄と呼べ！」

「……はいはい、兄上」

疲れたように振り向いたサリヴァンは、やはり疲労が蓄積しているようで、今日は逃げようとしなかった。諦めの境地に入ったのだろうかと思うほど、突進していった父の過激な抱擁も受け入れた。ただ、抱きつかれたことには、とても嫌そうな顔をしている。

父を止められなかったことにライラは申し訳なく思ったが、ライ

ラを見つけたサリヴァンは苦笑して、気持ちを汲んでくれた。

「田舎に越すとはどういうことだ、サリエ」

「え？ ああ、そういえば……お伝えしませんでしたか。ルカには伝えたのですが」

「なぜだ、サリエ。国を離れぬと言ってくれたであろうに」

「国は離れませんよ。ヴァルハラ家の領地に戻るだけです」

「なかるう！ あれはわたしが」

「ええ、兄上が没収してくれましたね。ですが、返してもらおうことにしましたよ」

「ならん！」

「次世代が育っているのに？」

「ぐ……っ」

父の猛攻に、サリヴァンは沈着し、そして冷やかに言葉を返す。ライラではできないことだ。頭に血が昇った状態の父に、たった一言で冷水を浴びせられるのは、今も昔もサリヴァンだけだろう。

「兄上、時代は移り変わるものです。もちろん兄上のよき治世が長く続くことを祈っていますが、それでも次世代を育むことは必要なことです。おれは、その機を逃したくありません。おれにできることも少なくなってきましたからね」

「だ、だが……それとおまえとは、関係が」

「関係ならありますよ。おれはヴァルハラ公です。息子に託したいものは、たくさんあるんですよ」

サリヴァンの静かな言葉は、父を沈黙させた。わが子ですら利用した父だが、子を想う気持ちはある。それゆえに返せる言葉が思いつかなかったのだろう。

「そういうことですから、書類に目を通して、判をください。では、おれはこれで失礼します」

サリヴァンは父のそばを離れると一礼し、背を向けた。サリヴァンに続くのはラクウィルで、ライラにっこりと微笑むとこちらも背を向けた。

立ち去るふたりを、父は追いかけられずに見つめるだけだ。

だが、どれくらいそうやっていたのか、父の反応を見守っていたそれぞれが声をかけようとしたとき、唐突に父は動いた。

「許さん！」

そう怒鳴るなり、走り出した。

「ジーク、わたしをサリエのところへ飛ばせ！」

「ええ？ だってサラ、飛ばすと酔っじゃねえか」

「いいから飛ばせ！」

と、ジークフリートを連れて、あっというまにいなくなってしまう。
った。

あまりの速さに、うっかりライラは取り残されてしまう。ライラだけでなく、近衛騎士たちもうっかり取り残され、われに返った者から慌てて追いかけた。

そこに、はあ、とため息をついたのは、宰相ルカイアである。ライラは申し訳なくなった。

「ごめんなさい、ラッセ候。父が……」

「殿下が謝られることではありませんよ。陛下のあれとは、もう十年以上つき合っていますからね。仕方のないことでもありますし」

どれだけ皆に迷惑をかけるつもりなのか、しかしルカイアは諦めの境地すら通り越し、放置することになっているようだ。

「それより、そろそろオリエ公子が登城されます。カルアに外縁のほうへ案内させますから、そちらの部屋でお待ちになられてはいかがですか」

皇弟擁護派の筆頭、と囁かれているルカイアは、ライラとオリヴァンの婚約に賛成してくれているので、オリヴァンの帰還に伴う今日の登城はライラとの逢瀬ではないのに、場所と機会を与えてくれるらしい。

ライラは微笑んで礼を言うと、早速そちらに向かった。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 15 (前書き)

オリヴァン視点です。

見つきりたくなかったのに、という顔をした父に「おまえは行け」と言われて、オリヴァンは父を残してカルアの案内でそこを離れた。姿を視認される前に離れたので、こっそり物陰に隠れて後ろを確認すると、父は皇帝サライの盛大な抱擁を嫌そうな顔で受けていた。

「報告があるから、べつにいてもよかつたんだけど……あれはいやだな」

「陛下が落ち着かれてからお逢いしたほうがよろしいでしょう」

「そうだね……でも、なにかあった？ ツエイの様子がおかしかつたけど」

「詳しいことはわかりませんが、サラヴァンさまは陛下に追いかけられながら、ツエイルさまをお捜しになっていたようでございます。サラヴァンさまとツエイルさまになにかあったかは、存じ上げません」

母は身重なのであまり走り回って欲しくないのだが、それだけ元気があるのだと思えば、放っておいてもあの夫婦のことだからそのうち仲直りするだろう。

「まあ、いいか。ところで、どこに向かっているのかな？」

「ついて来てくださればわかります」

招集されている議会のほうへ先にいくのだろうかと思いつながら、

オリヴァンはカルアに続く。別れてしまったノアウルとクレイドのことは気になるが、父のところに戻れば事情を知るだろうし、ノアウルの天恵があるので追いついて来るだろう。

「シズ」

「ん、はい？」

「天恵は使い慣れたか？」

「今少し不安定ですが、目的地への移動は簡単になってきました。ただ、父のように特定の人物からの声に反応することはできません。今のところはオリヴァンだけです」

「ラクウィルは規格外だ。ツエイやネイ叔母上の声まで聞こえるなんておかしいって、ノアもジークフリートも言っていただろ。真似しなくていい」

「そうですね？ 練習したら、できるような気がするんですが」

「まあ……シズはラクウィルの息子だからな。そう言われたらできそうな気がしてくるけど」

「練習しますね」

にこ、と笑ったイオルシイズの頭をぽんぽんと撫でる。天恵の発現を見せてもらったからは、怪我の具合の様子見ながら飛ぶ練習をノアウルがさせていたので、今では意識的に使えるようになってる。イオルシイズにしては目覚ましい進歩だ。

「やはり、イオルシイズは天恵者でしたか」

というカルアの言葉に、うん、と頷く。

「公子の騎士となれるのですか？」

「そうだろうね。シズはヴァルハラ家の従者だから」

「では、兄は姫さまの騎士に？」

「かな。今までひとりで頑張っていた分、シズがおれにつけば負担も減るからね」

「……それで機嫌が悪そうなのですね、兄は」

はあ、とカルアがため息をつく。どうやらノアウルの微妙な不機嫌は、妹のカルアには簡単に見抜けたようだ。

「負担が減って楽だろうに、なにが気に喰わないんだろうな」

「……、わからないのですか？」

「いやいや、それはわかるよ。けど、どっちの騎士になってもけっきよくは同じだろ？ おれはライラと結婚するんだから」

胡乱げな顔で振り向いたカルアは、またため息をついた。

「それを兄に言いましたか？」

「考えなくてもわかることだろ」

「……、言わなければわからないこともあるのですよ」

「え……そこまでノアもばかじゃないだろ」

「兄と公子では性格がまったく違います。考え方も違つのですよ」

改めて言われると、確かに、と思う。性格が違つから考え方だつて異なるのは当然だ。オリヴァンが軽く受け入れていても、ノアウルはそうもいかない。オリヴァンに言われて初めて、受け入れられることもある。

「クート並みに頭硬いなあもつ」

「わたしがなにか」

「うわ！」

唐突な声に驚いて振り向いたら、天恵で飛んできたらしいノアウ

ルとクレイドがいた。

もう追いついたらしい。

「び、びっくりさせるなよ」

「失礼しました」

深々と頭を下げるクレイドに、「これだからなあ」と思いつつ、ノアウルを見やる。

自分も頑固なところはあるとオリヴァンは自覚しているが、ノアウルやクレイドほどではない。ある程度の諦めを持っている。身分的な問題からクレイドとは喧嘩にならなくても、ノアウルとは喧嘩するのは、それぞれと諦める場所が違うからだ。妥協という言葉もあるのだが、一番にそれを理解しているのはクレイドだけだろう。

つまり、最もおとななのはクレイドということで、オリヴァンとノアウルはまだまだ子どもということだ。

「諦めるよ、ノア」

「は？ なんのことだ」

「いつそラクウィルとジークフリートみたいに険悪になってしまえとは言わないから、現実を受け入れたらどうだ。ライラが勘違いして泣くぞ」

これからライラの騎士として立つというのに、その態度ではライラに失礼だ。そう言えば、ノアウルも渋面を浮かべる。

「わかってる」

漸く諦めを持てたのか、それともライラのことを考えて自分に嫌悪を感じたのか、そんな返事をしてノアウルはそっぽを向いた。

「公子、着きましたよ」
「ん、ああ」

そうこうしているうちに目的地に到着したようで、ある部屋の前でカルアが立ち止まった。

こんこん、と扉を叩いて、返事がくると中へ入る。

「オリヴァン！」
「ん？」

真っ先に自分が呼ばれたことと、その声に、オリヴァンは目を丸くする。

開けられた扉の向こうから柔らかなものが突進してきたとき、その正体に気づいて微笑んだ。

「ライラ」

飛びついてきたライラを抱き止めて、ぎゅっとする。久しぶりの感触だ。

「おかえりなさい、オリヴァン」
「ただいま、ライラ」

ああ、逢いたかった。
その声を聞きたかった。
触れたかった。

胸中で騒ぐ想いのままライラをぎゅっぎゅっ抱きしめたあと、
少しだけ互いに距離を置いて、改めて互いの顔をじっと見つめて微笑んだ。

「無事でよかった。大変だったでしょう?」

「ん、おれは強いから、だいじょうぶ。ライラのほうは? サリエのところによつといたみたいだけど、変なことされなかった?」

「叔父上さまにはよくしていただいたわ。叔母上さまにも。久しぶりにお逢いできて嬉しかったくらい。あ、叔母上さまはご懐妊だそうね? ごめんなさい、わたし気づけなくて」

「ああ、あれはね……おれも忘れていたくらいだし。ツエイ本人に自覚があるのかないのか……そもそも本当に身重なのかな」

「お医師さまの証言つきよ?」

「おれのときがすぐく大変だったらしいから、元気な姿を見ると医師の言葉があつても信憑性がね……まあ、本当であつて欲しいよ。妹だからね」

「ふふ。叔父上さまも、娘だつて言っていたわ」

親子ね、とライラに言われて、それがいやで少しげんなりしたところで、カルアにわざとらしい咳払いをされた。

「なにも入口でそのようにお話されずとも、中へ入られたらいいかがですか? マルサムどのお茶の用意をしてくださつておられますし、わたしはここで失礼させていただきますから」

カルアはここまで案内することのみを目的にしていたようで、オリヴァンにそう促すと「失礼します」と言つて早々に立ち去つた。

この久しぶりな逢瀬を邪魔するつもりはないらしい。

「わたしも廊下にいます」

クレイドもそう言つて、部屋には入らなかつた。じゃあおれも、とイオルシイズも言つたが、ライラに話しておきたいことがあつたので引き留めた。

「ライラ、先に言っておく。シズが《天地の騎士》の天恵を発現させたよ」

「……叔父上さまから聞いています」

「そうなの？ あれ……サリエも知っているのか」

「ちょっと肩透かしを食らった気がしながら、それなら特に話すこともないと思う。立場はこれまでと変わらないのだ。」

「まあ、そういうことだから、これからよろしくね」

「ええ。今後は……ずっとオリヴァンのそばにいてくれるのね、《天地の騎士》が」

安堵したような顔をしたライラに、なにか引っかかりを感じる。

部屋の中央にある椅子に移動しながらオリヴァンはそれを観察し、ふとある可能性に気づいた。

父サリヴァンが、ライラを苦しませていると言った、己れの天恵。片翼という言葉に驕るなど、そう怒った理由。

もしかしたらそれらは、オリヴァンが微妙な立場にあることを、ライラがひどく気負っているということなのかもしれない。

「……ライラ？」

「なあに？」

「おれは強いから、心配しなくていいんだよ？」

「え……」

「おれは護られることをわかっているつもりだ。だから護りたいという想いがある。そのために強くなった。おれを護ろうとしてくれる人たちのためにも、おれは命を無駄にはいけないから」

ライラの碧い瞳が、大きく見開かれる。

そうか、これが原因だったのかと、オリヴァンは父が怒った理由をようやくと理解して、ライラが安心できるように笑みを深めた。

どうやら自分は、最もいい人に、まったく言葉が足りなかつたらしい。情けないことだ。言わなくてもわかるはずだと、高を括ってしまっていたのだ。言わなければわからないこともあると、カルアが言ったのも頷ける。

「好きだよ、ライラ」

きみが、とても好きだ。

口にする言葉が陳腐に思えてしまうほど、きみに捕らわれている。だからきみは片翼。

自由な空へ飛び立てるのは、きみがおれの片翼だから。

「お……オリヴァン」

「うん。おれはライラが好きだよ」

顔を真っ赤に染めたライラが可愛い。こんなに可愛い生きものはほかにない。ふっくらした赤い唇はとくに、オリヴァンには挑発的だ。

「ほ、んとう、に……?」

「ん?」

「本当に、わたしが好き?」

「ライラがいないと、おれは生きられないよ」

ああ、言葉が陳腐だ。こんな言葉で表現できるほど、自分の想いは軽くない。

けれども、思うような言葉が見つからない。

「なんて、言ったらいいのかな……たぶんおれは、ライラが思っているような、優しい人間じゃないんだ。けっこう凶暴な生きものだよ。ライラがいない世界なんて、滅んでしまえばいいとか、思うから」

それはもう、たとえ父と母が生きていようとも、大切な人が、いようとも。

ライラがいないなら、こんな世界は要らないと思う。

それでも、どんなにそんな言葉を並べても、陳腐なものにしかない。ライラが皇女で、自分が公子という立場にある以上、どんな言葉にも力はないのだ。

だから、言わなかっただけで。

「おれは本当に、ライラが好きなんだよ」

情けないと、思わなかったわけではないのだ。想いを口にすることもできない自分の身分が、悔しいと思わなかったわけではないのだ。

だから剣だけは必死になった。

武勲を立てられるように、国の役に立てるように、そうすればライラへの想いも本物であると理解してもらえるのだと、考えた。

けっきょくは周りをそうやって気にし過ぎて、ライラを苦しませるといつ、最悪なことをしてしまったけれども。

父が怒るのも当然だなどと、オリヴァンは苦笑した。そして思いのほか、自分は父に似ているのだと、気づかされた。

母を溺愛する父は、たとえ息子のオリヴァンでも、母をその愛称で呼ぶことがいやなのだ。わかっているから、ライラのことには「レイ」と呼ぶのだ。それだけのことだったのだ。

「わたし……オリヴァンが好き。いやだって言われても、好き。そばにいらさせてくれないなら、皇女っていう権力を使っても、そばにいらさせてもらうわ。わたしも、それくらい凶暴なのよ」

そう言ったライラの真つ直ぐさに、「やっぱりね」と思ったのは、互いの想いが通じているからだ。

「それなら、もう心配は要らないね。邪魔する者は、おれが叩き斬るよ。それでいい？」

「わたしも手伝うわ」

「じゃあふたりで」

ふふ、と互いに笑い合って、抱きしめ合う。

ああ好きだなあと、いとしいなあと、オリヴァンはライラをぎゅぎゅと抱きしめて、ほっと息をついた。

答えはこんな身近にあったのに、意地と頑固さゆえに見えてなかった。自分にそんなことがあるなんて、と格好悪く思う。

まだまだ思慮が足りない。

悔しいが、もっと周りを見て、もっとたくさんのかんじを感じて、知って、生きよう。

ライラとふたりで。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 15 (後書き)

「メルエイラ末弟事情禄。」の話と「きみの背中に花束を。」の話の間に、聖王猊下の話を挿入しました。
よろしければそちらも読んでくださると嬉しいです。

このたびも読んでくださりありがとうございますとございます。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 16 (前書き)

ライラ視点です。

剣の稽古を、と庭に出たはずのオリヴァンが、ノアウルに怒鳴られながら、庭師と一緒にあって草花の手入れをしている。本当に植物が好きな人だ。

「うるさい、ノア。あっちに行け」

「稽古をすと言ったのはおまえだ！」

「気が変わった。それでいいだろ」

「よくない！ いくらおまえがバケモノ並みに強いとはいえ、鈍ることはあるんだぞ！」

「ないない。って、バケモノなんてひどいな」

「オリヴァン！」

きつとヴァルハラ公爵邸でも、こんなやりとりをしているのだろう。

「あれはいつまで続くのですか」

とカルアがため息をつきながら問う。

「そうですねえ……オリヴァンがその気になるまで終わりませんから、すぐであったり終わらなかつたりしますが……今日はそろそろ終わりますよ」

イオルシイズがそう答えたとき、オリヴァンの目の色が変わった。屈んだ状態で両手を地面につき、低姿勢のまま後ろに足を回すと、そこにいたノアウルに足かけをして転倒させたのである。さすがオリヴァンだ。

オリヴァンとノアウルは、そこから剣術ではなく体術の稽古らしきものを始める。オリヴァンが一方的にノアウルをのしているが、べつにノアウルが手加減してオリヴァンを優位に立たせているわけではない。オリヴァンの実力が規格外なだけだ。

「オリヴァンは強いわねえ……」

うつとりしながら見ていたライラは、顔を引き攣らせたカルアの呆れ眼を感じながらも、オリヴァンから視線を逸らさない。

「専属の騎士があれば、なんのために公子のそばにいるのかわかりませんね」

「ノアもかなり強いらしいわよ？」

「公子に一方的に叩きのめされていては、その証明にはなりませんよ」

兄を貶すカルアに、ライラは苦笑する。

確かに、ノアウルがオリヴァンに勝った姿を、今まで一度として見たことがない。オリヴァンもノアウルを勝たせてやるうという気がまったくないようなので、いつもノアウルは叩きのめされていた。

「あれで本当に《天地の騎士》なのでしょいかねえ」

「おいカルア、聞こえているぞ！ 言っておくがな、おれは天恵者であつて剣士じゃないんだよ。このバケモノと一緒にするな」

負けて悔しいのか、カルアの声が聞こえていたらしいノアウルが、

オリヴァンの攻撃から逃れて転がりながら叫んだ。

「バケモノってひどいなあ。おれはツエイに剣を習って、アインに
体術を習って、総合的にラクウイルから指南を受けたただけだよ？
ノアと同じ稽古しか受けてないのだけど」

転がって逃げるノアウルを追いかけて無残にも踏み潰したオリヴ
アンが、心外だなあとばかりにため息をついて、最後のおまけにノ
アウルの背に全体重をかけて乗り上げた。ノアウルの「ぐえ」とい
う悲鳴が聞こえる。

「さて……シズ、おれにもお茶くれないか」

「はい。甘くしますか？」

「そうだな。セイ茶に蜂蜜を少し」

「わかりました。こちらでおまちください」

ノアウルを気絶させてしまうと、オリヴァンは手のひらや服の汚
れを払い、ライラの隣に戻ってきた。すぐに手拭いを差し出すと、
ライラにとって極上の笑みと一緒に「ありがとう」と礼をもらう。

今日もライラのオリヴァンはかっこよくて、綺麗だった。

「なあに？ そんなにおれがかっこいい？」

思っていることをオリヴァンに指摘されて、思わず頬を赤らめ、
そうつして素直に頷く。するとオリヴァンのほうが気まずそうな顔を
して、そつぽを向いた。

「自分で訊いておいて自滅ですか、公子」

「いや、うん、なんとというか……思ったよりね、こつ、きたという

か

「そこまではかだとは思いませんでしたよ、公子」

「カルア、ちょっと口閉じようね？」

「はあ……かっこわるい」

「うん、カルア、少し黙ろうね？」

ノアウルだけでなくオリヴァンとまで口喧嘩を始めたカルアに少し笑って、けれども剣呑ではない穏やかな雰囲気ライラはほっと息をつく。

「ねえ、オリヴァン」

「ん。なに、ライラ？」

「叔父上さまが、皇都を離れてしまわれるそうなの。聞いている？」

「ああ、あれか……」

訊いたとたんに変な顔をしたオリヴァンは、がっくりと卓に顔をうつ伏せた。どうやら一騒動が起きた、いや起きているようだ。

「……大変そうね」

「まあ、問題は陛下だけなんだけどね。サリエはツイイにほだされない限り、言い出したらきかないから」

今も実家には使者が詰めていて、いつもは静かな家も騒がしいらしい。オリヴァンはそこから抜け出し、ライラのところへ来ていたのだ。

「そのツイイも、ちょっと前からサリエを無視して、おれですら声も聞いてないんだ。そのことにサリエは落ち込んで八つ当たりしまくるし、もう煩くてかなわないよ」

「叔母上さまが、どうかなさったの？」

「サリエに怒ってる、のかな……それもわからない状態だよ、今はね。ラクウィルが板挟みになってたな」

あのツェイルが不機嫌、というのは、どうも想像できない。むしろなにか考えがあつて、それを装っているのではないだろうか。

「ともあれ、しばらくあそこは煩い。森の離宮に避難するよ」

「え……城にいてくれるの？」

「いるよ。陛下に許可はもらつてあるからね。サリエとツェイが皇都を離れても、おれは残るつもりだし」

もしかしたら、オリヴァンも皇都を離れていつてしまつかもしれない。そう思っていたライラに、それは朗報だった。

「ただ、条件は出されたけど」

「条件？」

「宰相からね。だからあまり時間は取れないけど……ライラ」

真摯な瞳を向けてきたオリヴァンに、ライラはすっかりときめく。

「いつでも逢いにおいで。おれも、行くから」

「オリヴァン……」

「おれはずっと、ライラのそばにいるよ」

伸ばされた手のひらが、ライラの頬を撫でる。その優しい仕草に、ライラはすり寄った。

Plus Extra : きみの背中に花束を。 16 (後書き)

これにて『きみの背中に花束を。』は終幕とさせていただきます。
リクエストありがとうございます。

おつき合いくださり、ありがとうございます。
気になるエピソードがありましたらご連絡ください。喜んで描かせていただきます。

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

Plus Extra : 侍従長衷情録。1 (前書き)

ラクウィル視点です。

「ラク」

ふと呼ばれたラクウィルは、お茶の用意をしていた手を休めて、唯一無二のあるじサリヴァンを見やった。

「なんですか？」

サリヴァンはなにやら小難しい顔をしながら、手紙を読んでいる。手紙の送り主は国の中央に座す聖王猊下で、サリヴァンにとっては養父だ。

しかしながら、聖王猊下からの手紙で難しい顔をするサリヴァンなど、初めてである。

「漸く、おまえの天恵がわかった」

「おれの天恵ですか？ そんなの、マチカちゃんとルーフェさんがいるんですから、最初からわかつているじゃないですか」

「そっちの天恵じゃない」
「んん？」

ラクウィルは天恵者である。それも、対極の属性を二つ、無属性を一つ、合わせて三つの天恵を授かった稀少な天恵術師だ。さらに重ねて、天恵を授かり過ぎていて、代償とされているものがないかもわからない天恵者だった。

「おれの天恵は火と土と、あと天地の騎士ですよ？ ほかにはなかつたかと」

「あるだろ」

「はて……ありましたかね？」

一つの属性天恵を授かっているというだけでも稀少であるのに対し、ラクウィルは三つも授かっている。珍しいことこのうえないというのに、これ以上の珍しさは要らないというのがラクウィルの心情である。

よって、サリヴァンが言うことに憶えがない。

「おまえ、夫人の声が聞こえるだろう」

「どこのご夫人ですか」

「自分の」

「おれの？ シュネイのことですか？」

「ああ。聞こえるだろう」

わが妻シュネイの声なら。

「……まあ、たまに」

否定はしない。以前、聞こえると言ってしまったている。本当はたまにはなく、よく聞こえるのだが、そこは言わないでおく。いやな予感がしたのだ。

「それ、天恵だ」

「……げえ」

「なんだそのいやそうな顔」

三つあるだけでも充分なのに、むしろ有り余っているのに、四つめなど要らないと思うのがラクウイルの心情だ。

「真贋の音 という天恵だ。西の国にある王族の天恵らしいぞ」

ちよつと吃驚する。

「え、おれ王族ですか？」

「おれに訊くな。自分のことだろ」

「いやだつて、サリヴァンも知ってますでしょう？ おれは流れ者です。自分の出自なんて知りませんよ。歳だつてわかんなくて、ルカイアが勝手に決めたんですから」

「王族だつたんじゃないのか。西のその国は、随分と昔に滅んだようだからな」

「おれが王族なんてあり得ないと思いますが」

「その髪と瞳で？」

「これは両親から譲られたものですよ」

ラクウイルはサリヴァンと同じ、淡い金の髪と薄い碧の瞳を両親から譲られている。だが、このヴァリアス帝国の皇族特有だと言われるその色を、なぜ自分が持っているのか、ラクウイルは知らない。両親も自分も、国と国を渡り歩く流浪の民だったのだ。産まれた月日も、年齢も、数えることなく育ち、そして両親の死後、サリヴァンに拾われたのである。

「まあ、おまえが複数の天恵所持者だというのは変わらないな」

「むうー……おれ、代償も支払ってる天恵者なんですけどー」

「王族の天恵に代償はない。負担はないと思うぞ」

「持つてて損はない的な言い方しないでくださいよ。その 真贋の音 とやら、ものすごく耳が痛いんですから」

「痛い？　なんで」

ああわからないだろうなあと、ラクウィルは遠くを見やる。

便利なときもある　真贋の音　とかいう天恵は、しかしとんでもなく煩いのだ。聞こえるのが限定されているのかそうでないのか、今のところわが妻シュネイの声を筆頭に、息子イオルシイズの声やサリヴァンの妻ツェイルの声が聞こえる。イオルシイズの声とツェイルの声は滅多に聞こえないが、聞こえたときは静かなものでそう煩くもない。しかし、わが妻シュネイは別だ。ふだんは穏やかなのに、突発的な声をまれに発するから、その隔たりがひどいのである。

その説明をしようとしたときだった。

「あのです……、ぎゃっ！」

キーン、と脳天を突く耳鳴りに、ラクウィルは両耳を塞いで蹲った。

「ラク？」

「痛い痛いつ！　ネイ、わかりましたから、もうちょっと静かに……ネイ！」

シュネイの声だ。きゃわきゃわと脳を揺さぶる高音に、眩暈がする。

ああだめだ。

この声が聞こえたらそばに行かなくてはならない。

「サ、サリヴァン、ごめんなさい、ネイのところに行きます」

「ああ。そのまま休んでいいぞ」

「ごめんなさい」

痛む耳を抑えつつ、ラクウィルは無属性の天恵、天地の騎士と呼ばれる空間移動の天恵を発動させると、シュネイの声を辿った。空間移動の天恵は、すぐに思い浮かべられる場所なら、一瞬で飛ぶことができる。

よろり、とふらつきながら、ラクウィルは辿り着いた部屋の扉に寄りかかり、その姿を見つける。

「ネイ」

呼ぶと、部屋の中央で蹲っていた幼い妻シュネイが、泣き顔のまま振り向いた。

「ラクさまあ」

子どもっぽさを残した泣き顔は、えらいめに遭わされても、可愛いとラクウィルは思ってしまう。だから、微笑んだ。

「どうしたんですか、ネイ」

「茶器が……」

「茶器？」

「ラクさまに買っていただいた、茶器が……」

よく見ると、シュネイの足許には、白い茶器が割れた状態で広がっていた。ラクウィルに耳鳴りを起こさせた声は、どうやらお気に入りの茶器を壊してしまった衝撃によるものだったらしい。

力のない笑みをうつかりこぼしてしまう。

だが、それくらいのこと、ほっと安堵した。

「おいで」

手を差し伸べれば、すつくと立ち上がったシュネイは即座に駆け寄ってきて、勢いのままラクウイルの胸に飛び込んでくる。震えている肩にいとしさを感じて抱きしめれば、しがみついてくる腕の力がぎゅっと増した。

「新しいのを買ってあげますよ」

「でも、あれ、ラクさまに、初めて買ってもらったのに……っ」

「ものはいつか壊れるものです。観賞用ならともかく、あれはふたりで使いましょうって、買ったものなんですから」

「でも……っ」

ふと視線を、壊れてしまっている茶器に移す。シュネイがとても気に入って毎日使っている茶器だ。壊さないように慎重に扱いながら、使うたび微笑むシュネイを毎日見てきた。

「怪我はありませんでしたか」

血の匂いはしなかったが、とりあえず確認しておく。胸の中で、シュネイは首を左右に振った。

「そうですか……よかった」

茶器が壊れてしまったことは悲しいが、その茶器がシュネイに怪我をさせていたら、ラクウイルは茶器をさらに粉碎していただろう。茶器よりも、シュネイのほうが大事である。

「シイズはどうしたんですか？」

姿の見えない息子のことを訊ねれば、シュネイは小さな声で「外」と答えた。

「サイズにも怪我はないんですね」

ああよかった、と深々と息をつく。

「ネイ、思いきり泣いたら、買いものに行きましようか。サリヴァンが休んでいいと言っていますし、少し身体がだるいので、たぶんしばらくサリヴァンは安全です。今のうちに買いものに行きましよう」

「かい、もの……?」

提案は、シュネイの悲しみを僅かばかり、癒したようだ。

「あ……でも、身体がだるいなら、休養期で」

「休養期だから、ですよ。ネイと一緒にいたいんです。さあ、少しは落ち着きましたか?」

ん、と首を傾げてシュネイを覗き込むと、少しだけ恥ずかしそうにした幼い妻は、涙を止めてはんなりと微笑んだ。

シュネイと手を繋いで買いものから帰ったラクウイルは、居室の前ではつたりと、息子イオルシイズと出くわした。そのとたんに固まってくれるわが子に、にんまりと笑いかける。

「久しぶりですねえ、シイズ」

言葉をかけたがしかし、イオルシイズは硬直したまま動かない。これが面白くて、ラクウイルは笑わずにはいられない。

「シズ、ラクさまにご挨拶はどうしたの？ 久しぶりのお父さんよ？」

シュネイの優しい笑みを受けても、イオルシイズの硬直は解けない。

親子三人、しばらくの沈黙に包まれる。

イオルシイズの顔が引き攣ったのは、ラクウイルが笑みを深めた瞬間のことだ。とたんに踵を返すわが子を、ラクウイルは襟首を掴んで捕まえた。いつもはのんびり過ぎるほど動きが鈍いくせに、ラクウイルと対峙したこのときだけはすばしっこくなる。潜在的な素質だ。

なんて面白いわが子だろう。

「どこに逃げようっていうんでしょうねえ、シイズう？」

「う、わ、あ……」

猫のようにぶらんと持ち上げ、両手足をばたばたさせるイオルシイズを眺める。持ち手を自分のほうに向けてわが子の顔を覗きこんだら、この世の終わりでも見てきたかのような顔をしたわが子がいた。

「お父さんに、お久しぶりです、の言葉はないんですかねえ？」

齡四つのわが子イオルシイズは、咽喉を引き攣らせている。その顔が面白くて、ラクウィルはますます笑った。

「子どもで遊ぶな」

「あいた」

べしん、と後頭部を叩かれた。振り向くとサリヴァンがいる。

「なにするんですか、サリヴァン」

「おまえこそシズでなにをしている」

「なにつて……固まるから面白くて」

「遊ぶな」

べしん、とまた叩かれた。

後ろにいたサリヴァンは前に回ってくると、ラクウィルに襟首を捕まえられて宙ずりになっているイオルシイズを、その腕に抱いてラクウィルから奪い取っていく。よほどラクウィルから逃れたかったのだからイオルシイズは、全身でサリヴァンにひたりとしがみついた。

「よしよし。あつちでオリヴァンと遊ぼうな」

「あ、ちよつとサリヴァン」

「なんだ」

「おれのおもちゃ……じゃなかった、おれの子ども取らないでくださいよ」

「……おもちゃって言ったな」

「いいええ。可愛いわが子ですよ」

「子どもをおもちゃにするな」

ばかもの、と言って、サリヴァンはすたすた行ってしまう。

「シズは殿下がとっても好きなのねえ」

と、シュネイは見当違いなことを言う。

「どちらかというとなりヴァンのほうなんですけどね、子どもが好きなのは。誰の子でもかまいたがりますし」

ラクウィルはあまり子どもという小さな存在が好きではない。というよりも、小さいのでどうかまえばいいのかわからない。わが子に硬直されてしまうくらいなので、近づいてくるのはサリヴァンの息子オリヴァンくらいだ。

サリヴァンのほうは、休みで邸にいと、気づけば子どもたちに囲まれて一緒に遊んでいる。いや、あれは遊ばれているのだろうか。どちらにせよ、子どもたちに囲まれている。それが騎士隊の子であるのが、侍従の子であるのが関係ない。

「ふうむ……やっぱりわかるんですかねえ」

「はい？」

「子どもたちですよ。おれは嫌われてばかりです」

はあ、と肩を竦めて苦笑すると、なぜか、シュネイはとたんに表情をそぎ落とした。

「……どうしたんですか、ネイ？」

「わたしはラクさまが好きよ」

「ええ、知っていますよ。運命だったのでしょ？」

「そう。ラクさまは、わたしの運命の人よ」

「おれは運命なんて信じちゃいませんが、ネイのそれは信じられま
すよ。出逢うべきして出逢ったという運命なら、なおさらね」

「ラクさま」

「はい」

「わたしは、ラクさまが誰に嫌われようとも、永遠を誓うわ」

なにを言っているのだろう、とラクウィルは首を傾げる。シユネ
イの言いたいことがよくわからない。

「ラクさまが好き……好きなの、ラクさま」

「ネイ……？」

「わたしだけではいや？ 足りない？ 満足できない？」

ぎゅっとしがみついていたきたシユネイの、温かで柔らかなぬくもり
に、とろりと切なさにも似た感情が首をもたげた。

「ネイ……」

「わたしはラクさまがいればいいの。ラクさまだけでいいの。それ
では駄目？ それだけでは足りない？ わたし、どうしたらいい？」

くらりと、眩暈がした。

「ネイ、それ以上は……」

「ラクさまが好きなのっ」

「ネイ……っ」

だめだ、と。

これ以上はだめだ、と思う。

いろいろなものが、感情が、溢れ出てくる。

本当は、求めていたのはラクウィルのほうだ。その存在を、その

声を、求め続けて耳を澄ませていた。

失いたくないから。

手放したくないから。

全力で突っ込んでくるシュネイを、自分のものにし続けたいから。

だからあれは、天恵ではない。

ラクウイルの、人を求める寂しさだ。

「あまり、おれを刺激しないでください、ネイ」

「だって、わたしラクさまが」

「駄目です、ネイ……おれは異形なんですから」

「わたしはラクさまが好きっ」

ああもう、なんて直球だろう。

なんて強さだろう。

理性が振り切られる。

「おれを煽るとはいい度胸ですよ、ネイ」

「えっ？」

「ふたりめは女の子がいいですね。ああ、双子でもいいですよ。可愛さが倍増されます」

「えっ？ えっ？」

ラクウイルはシュネイをさっと抱き上げると、立ち止まっていたそこを離れる。行くべき場所は決まっていた。

「ネイに似た可愛い子がいいです。ネイと並べて、双子みたいだなあって思いたいです」

「な、なんの、話を……？」

「おれと永遠に離れられなくなる話を」

ちゅ、ちゅ、とこめかみや額、鼻先、目許に口づけして、戸惑う
シュネイを無視して、寝室へと直行した。

シュネイの声が聞こえるのは、天恵ではない。
求めるがゆえの、切なさだ。

Plus Extra : 侍従長衷情録。 1 (後書き)

リクエストありがとうございます。

楽しんでいただけたら幸いです。

読んでくださり、ありがとうございます。

Plus Extra : 侍従長衷情録。2 (前書き)

シュネイ視点です。

布団がもそりと動く。

もごもごとしばらく動いて、静かになる。

少しするとまた動き出して、ごろりと大きく転がった。

「寝相がひどいわ……」

シユネイは、観察の結果を述べて息をつく。

ひとりで眠っているときだけ、シユネイのいとしい旦那さまは寝相が悪い。だから、いとしい旦那さまが珍しく眠っているとき、シユネイはそばで見守ることにしていた。

ごろごろと転がって寝台を落ちるのは当たり前、毛布もかけずに眠っているのも当たり前、目を離すと部屋から消えていることもある。無意識に天恵で外へ出ているのだ。起きているのかと思いきや、眠っている。

寝相のひどい旦那さまである。

「むあつ」

「……おはよう、ラクさま」

「ふへ？ ふあ……るえい？」

寝ぼけ眼の旦那さまに、シユネイはにっこりと微笑む。いとしい旦那さま、ラクウィルもまた、シユネイを視界にはつきりと捉えると微笑んだ。

「おはよう」

「すごいわ、ラクさま。今回はずっと寝台の上で眠っていたのよ」
「ひゃあ、それはめずらしいですねえ」

もそもそと起き出したラクウィルは、目を擦りながら寝台の端に腰かけ、シュネイが用意していた水桶で顔をさっぱりさせる。その動きは緩慢で眠っているような状態だったが、灰色の侍従服に袖を通して食事を済ませ、食後のお茶を飲み終わると漸くぱっちりと目を開けた。

今日からまた数日、シュネイのいとしい旦那さまは眠らない日々を過ごすことになる。それがラクウィルの持つ稀少な天恵の代償だと、わかっていてもシュネイは複雑だった。

「さあて仕事ですねえ」

「わたしも行くわ」

「じゃあ一緒に行きましょう」

にこ、と微笑むラクウィルが好きだ。

笑って、手を差し伸べてくれるラクウィルが好きだ。

すぎる手を、握ってくれるラクウィルが好きだ。

ラクウィルが好きで、好きで、どうしたらいいのかわからない。

「わああ、今は昼だったんですねえ。やけに明るいなあとは思っていましたが」

「ラクさまが眠っていたのは、ほんの数時間よ」

「ん、充分です。サリヴァンは起きていますかねえ」

ラクウィルは侍従だ。サリヴァンの身の周りの世話をするのは、昔から彼の仕事だ。寝台を整えたり、衣装を整えたり、掃除をした

り、お茶の用意をする。だから、料理はシュネイより上手で、お菓子なども作れてしまう。女性子どもが好む甘いものから、サリヴァンのための甘くないお菓子、離れにある隊舎で休む騎士隊のためにその食事もたまに手がけている。

ラクウィルは、なんでもできてしまう。そして誰よりも、周りを気遣って行動している。いつでも笑って、傷なんかついていない顔をして、そのすべてを裡に隠して、ラクウィルは生きている。

そんな旦那さまが、シュネイはいとしい。

「あ、姫。ひいめえー」

ふと、ラクウィルは姿を見せたシュネイの姉、ツェイルを見つけ腕を振った。

残念だが、ラクウィルと一緒にいられるのもここまでだ。シュネイの仕事は、姉ツェイルの侍女であることなのだ。

「イル姉さま」

「……もういいのか、ネイ」

ラクウィルを無視して、ツェイルは訊いてきた。シュネイは苦笑して、肩を竦める。

「だって、起きてしまったもの」

いつものことだ。シュネイがラクウィルのそばにいられるのは、サリヴァンの身の安全が確保され、それが安定している状態のときに限られる。たとえ長くその状態が続いていても、サリヴァンを弟のように可愛がるラクウィルは、サリヴァンのそばを離れたがらない。どこへ行くにも、サリヴァンについて行く。

だから、仕方ないのだ。

少し寂しいことだけれども、シュネイは我慢する。
悲しいことなんてなに一つない。ただ、寂しいだけ。

「ラク」

「漸くおれを視認してくれましたね。なんです、姫」

「サリヴァンさまが待つておられる」

「おおう、それなら急がないと。では姫、ネイをお願いしますね。
ネイ、姫を頼みましたよ」

ラクウィルはそう言うと、天恵を使わず走って行った。その背に、ほんの僅かな寂しさを感じてしまうのは、これはもうどうしようもない衝動だ。

ふとついたため息は、姉に頭を撫でられて慰められる。

「幸せが逃げるから、ため息はつくな。それに、ネイにそんな顔は、似合わない」

「イル姉さまには、わかってしまうのね」

「言いたいことがあるなら、はつきりと、言ってしまうがいい。ラクは、ネイのことが本当に、好きだよ」

「……そうね」

想いは、伝わってくる。疑ってもいない。けれど、寂しい。ただ、それはツエイルも同じだろう。シュネイのそばにラクウィルがいない時間、同じだけツエイルはサリヴァンのそばにはいられないのだ。姉の寂しそうな顔は見たくない。人形のような頃の顔も見たくない。今の感情を大切にしたい。

だから、シュネイは寂しさを押しやって、微笑んだ。

「イル姉さま」

「ん」

「街に行きましよう?」

「街?」

「ほら、オリヴァンに子ども用の武具を揃えたいって、前に言っていたじゃない。ラクさまと茶器を買いに行ったときに、ついでに何件か見て回ったのね。やっぱりエンバルに行ったほうがいいかしらと思ったのだけど、よさそうな武器屋さんが一つあったのよ。どうかしら?」

実家がとても貧しかった頃、それでも一族メルエイラを護るために、上の兄ツアインは力を尽くした。だが、ツアインだけの力では一族を護り切ることはできなくて、ついにメルエイラの一族は危うくなり、明日食べるものも尽きようとしたそのとき、ツェイルが天恵を発現させた。それは救いとなり、しかし同時に救いようのない虚しさになった。

ツェイルが天恵を発現させた当初のことを、シュネイは知らない。産まれたばかりだった。だから、シュネイはツェイルの子どもらしい姿を、一度も見たことがない。剣を片手に凜と立ち、おとなびた横顔を、いつも見ていた。

人形のようにだった。

壊れた機械仕掛けの人形のようにだった。

泣くことも、笑うことも、怒ることも、悲しむこともない、無感情の機械人形だった。

それが。

サリヴァンという人に出逢って。

なにもかも、がらりと、ツェイルは変わった。

だからシュネイは思う。考える。そして決めた。姉を人間に戻してくれた人に、感謝しよう。

だからこそ、ラクウィルとの出逢いは、運命。

「行きましよう、イル姉さま」

「……ん」

ツエイルが微笑む、その未来をくれた人のそばに、シュネイは運命を感じずにはおれない。

動き易い、とはいえ、ツエイルはいつだって男装しているようなものなので特に着替える必要もなく、シュネイだけ簡素な衣装に着替えた。ひらひらとしない、けれども既婚者であることを周知させる衣装だ。動き易く造られてはいるが、足許まで長いので走るときは裾が邪魔である。

「わたし、裾は短くていいのだけど」

「歳頃の娘だろうが」

「それを言うならイル姉さまもよ。ねえ、お揃いで着てみない？」

「いやだ」

「んもう……意地悪」

なにがあってもツエイルは女性ものの衣装を着てくれない。

昔、上の姉テューリと手を組んで着せてみたが、数分もしないで脱がれた。うえに、切り刻まれた。

最近では、息子のオリヴァンをお腹に宿したその臨月のときに薄手の女性ものを着ていたが、それもオリヴァンが産まれてしまうと着なくなってしまうって、シュネイとしては面白くない。

サリヴァンがたくさんその手の衣装を用意しているはずなのだが、いったいいつ着せてくれるのだろうか。

「いいわ。ユーリ姉さまが遊びに来てくれたとき、着てもらったもの」
「ん？」

「なんでもないわ。行きましょう」

ツェイルに女性ものの衣装が似合わないわけがない。本人がいやがるほど、身体の曲線は悪くないのだ。

上の姉が来たら絶対に着せよう、と心に決めて、シュネイはツェイルと手を繋いだ。

「ツェイルさま、シュネイさま、どちらに？」

「いつもみたいにネイでいいわよ、ナイン。ついでに敬語も要らないわ。非番ならつき合ってちょうだい。街に行きたいの」

「……街に行つてどうするんだ」

シュネイとツェイルの足を止めたのは、近衛騎士隊のナイレン・デーデイスだ。幼馴染でもあるので、敬語は要らない、と言ったとたんに口調が崩れる。

「オリヴァン用の武具を見てくるの。つき合ってくれる？」

「ああ、そろそろ必要そうだったな……おれがつき合うのはもちろんだが、エンバルまで行くのか？ そうなるとおれだけじゃなくてユグドにも声をかけたいところだが」

「エンバルまでは行かないけど……ユグドさん、つき合ってくれるかしら？」

「声をかけてくる。玄関で待っていてくれ」

子ども用でも武具を一式買い揃えるなら、その情報に経験からも豊富な人は多いほうがいい。とくにオリヴァンは、疎いシュネイの目から見ても呑み込みの早い武に長けた少年で、覚えさせればなん

でも吸収してしまえる。教える側としては面白いのだろうと、シュネイはラクウイルの表情を見て思ったものだ。なので、オリヴァン用に見立てるには、知識が豊富な人に同行してもらいたい。

「ネイ、ユグドもつき合ってくれろぞ」

言われたとおり玄関で待っていたら、ナイレンは近衛騎士隊のユグド・コール・シュミッドも連れてきてくれた。

「どこへ行かれるのですか」

というユグドの問いに、シュネイは「すぐその街よ」と笑顔で答える。ついでに「子ども用の武具を揃えたいの」と言うと、ユグドは思い当たったように「ああ……」と納得した。

「そろそろ公子も重さに慣れていただきたいところですからね」

そう言ってから、ユグドの視線は黙しているツェイルに移る。

「片刃でなくてよろしいのですか？」

「……両刃に慣れてから。それに、ヴァリアスは両刃が主流で、片刃はメルエイラ独特のものだから」

「そうですか……」

少し残念そうにしたユグドは、ツェイルが扱う片刃の剣に興味を隠せないように、たまにツェイルからその型を教えてもらっていた。帝国式の剣しか知らないから、という理由かららしい。

シュネイはまったく剣を揮えないが、護身術くらいは身につけている。ただ、特に帝国式であるとかメルエイラ式であるとか考えたことがないので、自分の護身術がメルエイラ独特のものであるとは

知らずにいた。ユグドが興味深そうにツェイルの稽古を見ていなければ、一生気づかなかっただろう。

ちなみにナイレンは元傭兵なので、帝国式とメルエイラ式が混ざっている。長くそれで戦場にいたナイレンの剣は、もはや我流だ。誰も真似できないのではないだろうか。

「そういえばイル姉さま、オリヴァンにあまり、メルエイラの型式を教えないわね。やっぱり、ヴァリアスの主流を重んじているの？」

ツェイルと手を繋ぎ直して邸を出て、少し歩いてからシュネイは姉を覗き込む。その顔に表情らしいものはないが、だからといって無感情というわけではない。昔の名残りで、上手く表情筋を使いこなせないのだ。

「そういうわけではないが……わたしの型式は、メルエイラ式というよりも、我流のようなものだから」

「え、そうなの？」

「その……身体が小さいから」

言いたくなさそうにしながら、ツェイルはそっぽを向く。

いつのまにかシュネイはツェイルの身長を追い越していたのだが、どうやらそれを気にしているらしい。思えば昔からなにかと気にしていたことでもある。今もまだ、気になって仕方ないようだ。

「イル姉さまは気にし過ぎなのよね……」

「え？」

「ん、なんでもないわ」

ツェイルにはツェイルの美しさがある。シュネイはそれを知っている。人形のような頃も、ツェイルのその美しさは変わらなか

った。いくら外見を気にしようと、その美しさがあれば充分だと、シュネイは思う。ツェイルのそれに惹かれたサリヴァンが、それらを証明しているだろう。

「少し急ぎましょう、イル姉さま。夕食はみんな揃っていただけるかもしれないわ。間に合わせないと」

「あ、ああ……」

さておき買いものだ、とシュネイは姉の手を引き、ついでなので街の市も見ようと、歩く速度を上げる。

いつだって賑わっている街は、黙々と歩けば半刻もかからない。馬が車で来られたらよかつたのだが、シュネイは馬に乗れないし、車では人でこった返す街にとって邪魔でしかない。

目的の武具屋へは、市を一巡りして食糧を少し買ってから、辿り着いた。

「訊いたらね、身体に合わせて削ってもいいそうなの。エンバルのお店と同じでしょう？」

「……それは珍しいね」

「だからイル姉さまを連れてきたの」

剣のことは、ツェイルほど明るい知識がない。だからシュネイはユグドにツェイルのつき添いを頼み、ナイレンと店先で待つことにする。待ち人用なのか長椅子があったので、土埃を払って腰かけた。

「……イオルサイズには用意しないのか？」

シュネイと同じように長椅子に腰かけたナイレンにそう問われ、

シュネイは「そうねえ」と唸る。

「ラクさまが言い出さないなら、必要ないと思うの」

「言わないのか、ラクウイルが」

「まだ小さいということもあるのだろうけど、オリヴァンほどの技量もないし、ちょっと能気な子だもの」

「能気……まあ、ラクウイルの息子にしては、ちょっとおとなしいというか……動きが鈍いというか」
「でしょう？」

わが子イオルシイズは、周りにいる子どもたちと比べると、少どころかかなりのんびりな子で、それこそオリヴァンにかまわれなければ虐められていそうな子だ。たまにラクウイルが剣を教えているが、まずラクウイルと対峙するとなぜか固まって動きが悪くなり、かと思えば俊敏な動きを見せて逃げるので、たぶん運動神経に問題はない。あれは性格なのだろう。

しかし、ラクウイルから全力で逃げるあれだけは、シュネイには理解できない。

「どうしてあの子、ラクさまから逃げるのかしら？」

お父さんなのに、とシュネイは首を傾げる。ちなみに母たるシュネイには、そんなことはしない。かといって極端に甘えてくることもなく、オリヴァンと遊んでいることのほうが多い。かまわれる頻度としては、オリヴァンやサリヴァンのほうが多いくらいだ。

「ラクウイルから逃げる、のは……あー……わからなくもないが」
「わかるの？」

「いや、はつきりとした理由じゃないぞ？ ……たぶん、ラクウイルの力が怖いんだと思う」

「ラクさまの、力……?」

ラクウィルは天恵者だ。それも、稀に見ない、複数の属性天恵を持つ天恵術師だ。少年の時分には帝国の天恵術師団に属し、異形という悪評までつけられたほどの天恵者だった。

しかしながら、シュネイはラクウィルのそんな過去などはどうでもよく、また天恵も授かっていないので、力と言われてもよくわからない。

「わかる奴には、わかるらしいからな。天恵者の強さが」
「確かにラクさまは強いわね」

それがどうした、と目を丸くすると、ナイレンがなんとも言いよらない顔をした。

「……平和だな、ネイ」

「なによ、それ」

「いやまあ、そういうことだよ」

「どういうことよ」

「ラクウィルの強さを怖いって思う奴らは、たくさんいるんだ。おまに術師団の連中だが」

「怖いのか、強いから?」

「ああ。感じ方はそれぞれ違うだろうが、その感情の総称は恐怖だ。おれだって、ラクウィルがたまに怖い」

「あんなに優しいの?」

「んー……優しいには優しいんだろうが、腹になに隠し持っているかわからないからなあ」

ナイレンの説明は、シュネイにはよくわからない。ラクウィルを怖いと思う気持ち、それが理解できないからだろう。

シュネイは一度だって、ラクウィルを怖いだなんて思ったことがない。

「……それで、どうしてシズが？ あの子はまだ子どもよ？」

「子どもは素直だろう」

「そうね」

「ツェイルみたいに上手く力を隠せばいいのに、ラクウィルはそれをしようともしない。だから子どもには怖いんだ」

「力を隠していないから？」

「いや、逆だ」

「逆？」

「力を持っていないように振る舞う。言い換えれば、まるで気配がないんだ」

それはなにも感じられないということ、恐怖を感じることもないと思うのだが、とシュネイは首をひねる。そもそも自分には感じられないそれを理解しようというのは、難しいことだ。

「その気配がないなら、怖くはないでしょう？」

「どうかね」

ナイレンは唇を歪めた。

「わかる奴にはわかるって、さっき言ったな？」

「ええ」

「気配を完全に断つ、なんてこと、できると思うか？」

瞬間的に、シュネイは黙す。答えられなかったからだ。

「強い力を持っている奴ほど、隠すのは上手い。だから、ふつうは

上手い具合に隠すものなんだ。隠して、僅かな気配を残しておく。警戒のために。完全にその気配を断つ、なんてこと、隠密の連中ではない限りやらないものだ」

「……持っている力を、完全に隠してしまうから、子どもたちは……シズはラクさまが怖いのか？」

「本来なら感じられるはずのそれを、まったく感じない。それはものすごい違和だ。すべてに敏感で素直な子どもにとって、ラクウィルは違和の塊だと思うぞ」

むしろわかる者には不審を煽る、とナイレンは言う。

なるほど、とシユネイは漸くわが子の挙動に納得する。そういう理由でラクウィルと対峙したときは硬直し、かと思えば瞬間的に逃げ出すわけだ。思えばラクウィルのそばに寄ってくる子どもは、邸に子どもたちが集まっても、オリヴァンただひとりだけだった。

オリヴァンはどうして、わが子にすら逃げられるラクウィルのそばに、歩み寄るのだろうか。

そしてラクウィルは、どうしてそんなことを、しているのだろうか。

「なにか理由があるのかしら……」

「理由？」

「ラクさまが、そんなことをする理由よ。わたしにはラクさまの力なんてわからないし、どうでもいいのだけれど」

「はは……ラクウィルのあれをどうでもいいなんて、そんなこと言えるのは殿下とおまえだけだな」

シユネイは真剣に考えているのに、ナイレンは引き攣った笑いを浮かべている。

「あんなでもアインだって、ラクウィルのことは気にかけているんだが」

「アイン兄さまが？」

「本当に強いからな、ラクウィルは。アインと剣一本で喧嘩したとき、おまえいなかったか？」

「……憶えないわ」

上の兄ツアインとラクウィルの喧嘩など、初めて聞く話だ。

「あれはひどかったぞー……もう、ほんと、隊舎が壊されるところだったし、庭は凄惨を極めたし、そのあと修理に費やされた請求書の、立派な山」

「そ、そんなことがあったのね……」

思った以上の話だった。

「さすがの殿下も泣いてたな。アインにものを壊されるたび、殿下の懐が軽くなっていったから」

謝ったほうがいいだろうか。血の繋がった兄と、いとしい旦那さまが仕出かしたことに對して。

「まあそれで、どうやらアインはラクウィルが力を完全に隠しているらしいと、わかったようだな。おれも骨身に染みた」

「わかった経緯がそれというのは……」

どうかと思う。

「手合わせする機会がそれまでなかったんだ。アインは騎士隊長、ラクウィルは侍従長だからな」

「どうしてラクさまは侍従なのかしら……殿下をお世話するのは楽しいようだけど」

「それは訊いたことがないな……：そういや、あれだけ強いのに、なんでラクウイルは侍従なんだ？」

その経緯は、ナイレンも知らないらしい。サリヴァンの世話をする姿がはまっているのでシュネイも気にしたことはなかったのだが、話を聞いていくと不思議になってくる。

「術師団にいたことは聞いてるか？」

「殿下の計らいで五年ほど属していたとは、聞いたわ。天恵の使い方を教わったとか。あまり楽しくはなかったようね」

「てことは、やっぱりあれは真名だな」

「真名？」

「ラクウイル・ダンガードという名は、術師団では有名だ。言い方は悪いが、なにしろ異形だからな。それが忽然と姿を消して、姿を見せたと思ったら皇帝のそばにいて、そして皇弟のそばにいる。ラクウイルを疑う奴は多い」

「ラクさまが、ラクさまではないということ？」

「おれの視点から言わせてもらえば、殿下のそばにいる今のラクウイルが噂の天恵術師で、おまえの旦那だ。疑うつもりはないが、どうも釈然としない」

気になるのだ、とナイレンは唸る。サリヴァンの身に起きたことを知っている人間だから、その実を把握したくなるのだそうだ。

「ラクさまに直接訊けばいいじゃない」

「自己紹介された」

「なら、それが真実よ」

ラクウイルは、ラクウイル・デイバイン・ダンガードだ。シュネイのいとしい、旦那さまである。それ以外の、なに者でもない。

「ネイ」

「あら、イル姉さま。もう決まったの？」

区切りのいいところでツェイルが、武器屋の店主と話し込んでいたのか店の奥から出てきた。

「もう少し、時間が欲しい。いいか？」

「わたしはかまわないわ。ナインと久しぶりにお話ができるもの。それより、よさそう？」

「うん。ネイの言うとおりだ。見つけてくれてありがとう」

ふわっと、ツェイルが微笑む。その笑みを見られただけでも、街に出てきた甲斐があったというものだ。

「焦らないで、じっくり吟味してね。わたしのことはいいから」

「……ありがとう、ネイ」

シュネイは笑顔でツェイルを見送り、ほっと息をつく。ラクウィルのそばにいられない日々の慰めは、ツェイルの穏やかな笑みだ。滅多に見られないものだから、なおさらそれは貴重で、心が温かくなる。

「相変わらずツェイルが好きだな」

ナイレンにそう言われて。

「大好きよ」

と、シュネイは笑った。

Plus Extra : 侍従長衷情録。3 (前書き)

ラクウィル視点です。

午後も中頃、せつかくの休日を押しかけた使者によって潰されたサリヴァンが、広げた紙の束に飽きたらしく「お茶にしよう」と言い出した。

「ツエイは？」

「出かけられたみたいですよ」

「出かけた？ どこに」

「街へ。ネイが武具屋を見て回っていましたから、連れて行っただでしょう。ナイレンとユグドが一緒です」

「……ニンめ、ユートめ……」

街に行くなら自分も行きかけた、と言わんばかりに、サリヴァンは駄々子のように机に突っ伏す。

「今から追い駆けます？ 武具屋の見当はついてますから、飛べますよ」

「ううー……行きたいが、おれは武具に疎いんだ。邪魔にしかならない」

よくわかっている。ツェイルが武具屋に行く理由を知っているのだ。

「それなら、オリヴァンと遊びます？」

「む。どこにいる？」

わが子の名に、サリヴァンがパツと顔を上げる。なんてわかり易い親ばかりだろう。

「さつき庭にいましたから、まだいると思いますよ。一緒におやつしますか」

「そうしよう」

ぴしつと姿勢よく机を離れたサリヴァンが、小走りに部屋を出て行く。ラクウィルも、わかり易いあるじの背を追って、部屋を出た。サリヴァンの息子オリヴァンは、先ほどラクウィルが通りかかったときに見えた庭から少し移動していて、居間の露台から見える花壇の前にいた。隣にはわが子イオルシイズがいて、オリヴァンを挟んでユグドの息子クレイドもいる。

「ノアウルがいないな？」

「リリが邸に帰ってますからね。それに、ノアウルは《天地の騎士》ですから、登城する都合もありますし」

「ふむ……まあいいか」

足りない、と思ったのだろう。子どもが好きなサリヴァンであるから、子どもはいるだけたくさんかまい倒したいのだ。

「オリヴァン、シズ、クート」

呼びながら、まるでサリヴァンのほうが子どものように、とたとたと子どもたち走り寄って行く。

ラクウィルは露台から出ず、その場に立ち止まって見送った。この距離が必要なのだ。こうしておかないと、わが子イオルシイズは

逃げる。

サリヴァンは振り向いた子どもたちを丸ごと抱きしめた。

「サリエ、仕事は？」

「飽きた。おれと遊ぼう。というか父と呼べ、オリヴァン」

「やだ。遊ぶならライラと遊びたい」

「……たまには父をかまってくれないか、オリヴァンよ」

息子の冷たい反応に、サリヴァンは落ち込む。

親というのはああいうものなのだろうか、ラクウィルは首を傾げたくなる。ラクウィルは、イオルシイズにオリヴァンのような反応をされたことがないのだ。いつも逃げられる。それを捕まえるのは面白いのだが。

ふと、サリヴァンの肩越しから、イオルシイズがラクウィルを見つけた。とたんに瞠目して固まったわが子は、サリヴァンに丸ごと抱きつかれているのいいことに、またしてもひたりとサリヴァンにくっつく。

なんとなく、なんとなくだが、いい気がしない。

ので、思いつきり微笑みかけた。

ら、蒼褪められた。

面白い。

「なんでそんな反応しかないんでしょうねえ？」

子どもは小さくて扱いがよくわからない。しかし、だからといって子どもが嫌いなわけではなく、わが子に至ってはふつうに可愛いと思っっている。あちらが勝手に逃げていくのだ。

子どもとは、面白い生きものである。

いや、不思議な生きもの、だろうか。

「まあどちらにせよ、嫌われることには慣れていきますよ」

子どもに限らず、誰にでも、嫌われる。それはもう慣れ親しんだ感覚だ。今さらどうこうしようとは思わないし、しようもない。

「クラウドさん、この場はお願いします。おれはお茶の用意をしますから」

子どもたちを見守る騎士にサリヴァンのことも頼むと、ラクウィルは露台を離れた。お茶の用意をして、その給仕を家宰の娘に頼み、自身はほかの仕事をするために居間へは戻らなかった。

僅かな異変を感じたのは、書類でこつた返している書斎の掃除を終えたときだ。

「……これは」

ぴりぴりとした空気、そこに混じる異質なものの、昔は身近に感じた気配、慣れた感覚。

「おれを相手に、なんでそう殺気を混ぜたがりますかね？」

「妹たちを誑かした奴だから」

問いに返ってきた声は、後ろから聞こえた。振り向けば、わが妻の上の兄がにっこりと、美貌に任せた適当な笑みを浮かべて立っていた。

「誑かされたのはおれのほうなんですけどね。サリヴァンならここにいませんよ。姫もね。見たとおり、おれしかいません。来る場所を間違えていますよ、ツアイン」

「今日はツェイルに求愛しにきたわけじゃないからいいんだよ」

「人妻に求愛しないでくださいよ……」
「近衛騎士隊長としてここに居るから」
「はあ……珍しいこともありますね」

人の話を聞いているのか聞いていないのか、近衛騎士隊長でもあるツアイン・ウエル・メルエイラは、胡散臭い笑みを深めて部屋に入ってくると、どつかりと中央の長椅子に腰かけた。

「侍従長、シズに嫌われているね」

「いきなりなんですか」

「力をそうやって完全に断つから、駄目なんだよ」

「はい？」

「シズは聡い子だよ。きみが思っている以上にね」

なんの話かと思えば、イオルシイズのことを言いたくてツアインはラクウイルのところに来たらしい。

「……おれにどうして欲しいんですか」

「べつになにも期待してないけど。ただ、シズは僕の甥でもあるわけだから、せつかくだしメルエイラの型式でも教えようかなって」

「シズにできますかねえ」

「できるさ。メルエイラの血が混じっているんだから。それに僕は、きみの剣才を疑ってない。オリヴァンも強くなるだろうけど、シズも教え方では強くなると思うんだよね」

高評価されているようだが、あののんびりとしたイオルシイズがメルエイラの型式を覚えられるだろうか。

それにラクウイルは、天恵術師であって剣士ではない。《天地の騎士》ではあっても、それは天恵の名称であって実際は剣の腕など関係なかったりする。初めて《天地の騎士》を発動させた者が騎士

であったから、そういう名称がつけられたとされていた。

「シイズに教えるのはかまいませんが、おれには剣才なんてありませんから、その辺りはあまり期待しないほうがいいですよ」

「謙遜もひどいね、侍従長」

「事実ですよ。おれのは付け焼刃です。マチカちゃんとルーフェさんがいなくなったら、おれにはなんの力もありません」

「それなら侍従長、僕と一戦交えようか。僕のヴィーダヒーデと、侍従長の精霊、僕らの全力で」

「サリヴァンに怒られるからいやです」

ツアインとは、剣一本で戦って邸の一部を壊したという前科がある。それなのに天恵まで交えて戦ったら、今度は邸を半壊させかねない。そうなったらサリヴァンが怒るのは必須である。

だいたいにして、ラクウィルは持った天恵の特徴からか、天恵の攻撃が身体を通さない。つまり天恵で攻撃されても怪我をしない体質だ。

ツアインとの一戦は、無意味でしかない。

「これはとくに誰というわけでもなく、言っていないんだけど……僕のヴィーダヒーデはね、風の属性にあるようなんだよ」

「……だから、なんですか」

「邸を壊さないように、力を働かせることができる。だからさ、ちよつと戦ってみようよ。ねえ……ラクウィル・ディバイン・ダンガード」

にんまりと、ツアインが笑う。

その笑い方に不快感が込み上げたそのとき、左頬を鋭い風が通り抜けた。背後にあった窓が、勢いよく開け放たれる。

「……なにをそんなに苛々してんですかね」

はあ、とラクウイルはため息をつく。ツアインは笑ったままだ。

「いやね、僕としたことが、うっかりフィジスを妊娠させちゃって」

「それはおめでとございます」

「おめでたくないよ」

右頬を、びゅうつと強い風がすり抜ける。

喜ばしいことを聞いたはずであるのに、人間として規格外なツアインを相手にしていると、喜ばしいことが悲しいことのように思えてくる。ツアインの妻は憐れだ。

「あんだ本当に人間ですか」

「獣かもね」

眼前から、ツアインの姿が消える。目を細めた次の瞬間には、目の前に片刃の剣が突きつけられていた。咄嗟にそれをかわし、ラクウイルも腰に提げていた剣の柄を握ると鞘から抜き、追ってきた剣を受け止める。

「でも、それは侍従長にも言えることだよね」

「……そうかもしれませんがね」

剣に圧される。踏ん張ろうにも体勢が悪く、立て直すには一歩でも後退したいところだ。しかしそうすれば、確実にツアインは剣を突きつけてくる。

どうしたものかと考えているうちに、均衡の崩れた身体は、ツアインの剣に圧された。

「さあヴィーダヒーデ、出ておいで」

「……本当に、戦うのね」

「もちろんだよ。ねえ、侍従長？」

この状態で逃げられるものなら、逃げたいところだ。だがツアインはそうさせてくれないだろう。

ラクウィルは諦めたため息をつく、ふっと足の力を抜き、ツアインの剣に圧されるまま窓から外へと、転がるように吹き飛ばされた。

Plus Extra : 侍従長衷情録。4 (前書き)

シュネイ視点です。

ツェイルと二人の騎士と、無事に買いものを済ませて帰宅すると、大変なことになっていた。

「やめないか、ラク！」

「ツアインに言ってくださいよー」

「ツアイン！ いい加減にしろ！」

子どもたちを背に庇ったサリヴァンが、剣を手にしたラクウイルと、上の兄ツアインとの戦闘に激怒していた。不思議なのは邸が壊れていないことだが、それは宙を漂っているツアインの精霊、ヴェーダヒーデの加護によるものだろう。

しかしながら、なぜこんなことになっているのか、シュネイには疑問だった。

「なにがどうしたの？」

なぜ夫と兄が戦っているのだろう。いや、なぜ夫は兄に襲われているのだろう。

「またあの激闘の再来か……やめろっての」

と、ナイレンが半眼しながら呆れたように言う。

「すごいな」

と、姉ツエイルは暢気にも冷静に眺めている。

「姫、殿下のおそばへ。公子が驚かれています」

われ関せず、といったふうなユグドに促され、とりあえずシユネイもツエイルと一緒にサリヴァンのほうへと移動する。

親の姿を確認した子どもたちは、それぞれの親に腕を伸ばした。もちろんイオルシイズも、母たるシユネイにしがみついていた。

「びつくりしたのね、シズ。だいじょうぶよ」

イオルシイズは言葉が少ない。シユネイを感じると少しは落ち着いてようで、その視線をいつもは合わせようとしないラクウィルに向けた。

「父さまが怖い？」

問うと、イオルシイズは首を左右に振った。食い入るように、わが父の戦う姿を見つめている。

シユネイも、戦う夫の姿を見つめた。

兄はいつでも心の底から楽しそうに戦うが、ラクウィルは違う。笑っているが、その瞳はいつでも悲しそうだった。本心では戦うことが嫌いなのだろうと思う。けれども、彼には護りたいものがあった。護らなければならぬものがあった。そのためには、強くあらねばならなかった。

シユネイは思う。

ラクウィル・ディバイン・ダンガードという人が、自分の夫にな

つてくれたのは、奇跡ともいえることなのだ。シュネイは、一生にあるかないかの奇跡を、手にしたのだ。

「あーもー面倒くさいー」

「ちゃんと戦いなよ、侍従長。ほら、観客も増えたことだしさあ」

「えー？ ああ、姫おかえりなさい。ネイもおかえりー」

「余所見していいってことじゃないけどねえ？」

兄が剣を振り下ろす。シュネイたちのほうを見て暢気に手を振ったラクウィルは、それを上手くかわしてにつこりと微笑む。戦っているというよりも、遊んでいるようだ。

「そろそろやめましょうよ、ツアイン。どちらかが倒れるまでっていうのは、けっこう難しいですよ？」

「楽しいからいいじゃないの」

「おれは楽しくないです。というかサリヴァンがものすごく不機嫌になっているので、やめてもらわないと困ります。それにほら、姫も帰ってきましたしね」

「ツエーイル！ 僕の雄姿を見ていてねえ！」

「あーもーやだやだ。姫はサリヴァンのものなのにい」

「ツエイルは僕のお嫁さんだよ」

「違います。まだそんなこと言ってますか」

呆れたようにラクウィルがため息をついたとき、ツアインがこれまでになく不気味に笑んだ。

「僕にとってきみや殿下は、永遠の敵でもあるんだよ」

「……妬まないでくださいよ」

「ああもう腹立だしいな！」

瞬間的に、どんつ、と衝撃波のようなものが、全身に響いてきた。シユネイたちには余波の風だけが流れてきたが、それはとてもいやな音だった。

舞い上がった土煙りが、兄と夫の姿を消している。

「ラクさま……?」

いったいなにが起きたのだろう。

じつと土煙りが落ち着くのを待って目を凝らし、漸く見えたそれに、シユネイは悲鳴を上げかけた。

「ラクさま……!」

衝撃波のようなものは、兄が放った天恵だった。それを真つ向から受けたらしいラクウィルが、背中を庭先の木に打ちつけられている。

思わず駆け寄ろうとして、しかし、それをツェイルに止められた。

「これは喧嘩だ。巻き込まれる」

これが喧嘩というほど優しいものなわけがない。そう気を揉んだが、そうこうしているうちに、ふらりとラクウィルが動いた。

「痛いじゃないですか」

と、珍しく不機嫌そうな顔をして、兄を睨んだ。

「そうこなくちゃ……もつと楽しもうよ、侍従長」

「だから、おれはサリヴァンに怒られたくないって、言ってるじゃないですか。見てくださいよ、木、折っちゃったじゃないですか」

「僕は、邸は壊さないって、その約束は守ってるよ？」
「そのようですねえ」

ラクウィルが、目を据わらせた。それはいつも人好きする笑みを浮かべている夫ではなかった。

「ラクさま？」

「あー……切れたな」

首を傾げたシュネイに、サリヴァンが顔を引き攣らせた。

「殿下、それはどういう意味でしょう？」

「おれのことを気にし過ぎて、切れた。うん、たまにあるんだ。年に一回は、ああして切れる」

「切れる？」

「つまり、怒っているんだ」

それは珍しい、とシュネイは思った。ラクウィルは挑発されてそう簡単に怒るような人ではない。もしサリヴァンを侮辱されるようなことがあるば、その人好きする笑みを深め、その雰囲気だけで相手を叩き潰すような人だ。表情を、笑みを消してまで怒ることは、まず滅多にない。

「厄介だな……ラクが切れると手がつけられない。ナイン、止めてみるか？」

「ご冗談を。おれはアインが切れたら放っておくことにしています。同等に戦うラクウィルに対しても同じですよ」

「じゃあ、ユート？」

話を振られたユグドは、「無理です」と即答したが、少し考えて

いた。

「隊の全員でかかれればどうにかなると思いますか……」

周りを見渡すと、観戦しているものの顔を引き攣らせた近衛隊の面々が、関わりたくなさそうにしていた。以前にもラクウイルとツアインは一戦を交えているそうなので、そのときの光景を思い出しているのだろう。

「仕方ない…… ツエイ、頼めるか？」

サリヴァンが、淡々と観戦しているツェイルに問う。皆が関わりたくなさそうにしている中、ツェイルだけは表情を変えずにいた。さすがはわが姉、とシュネイは思う。姉はむしろ、この戦いにとっても興味があるのかもしれない。

ふつうなら妻を送りだす夫もどうかと思うだろうが、戦い合っているラクウイルとツアインは、どちらもツェイルに剣を向けられない。傷をつけることなど以ての外と考えている。ふたりの戦いを収められるとしたら、ツェイルが出向くことがもつとも効果的だった。

「怪我はしてくれるなよ、ツエイ。おまえが怪我をしたら、おれはあのふたりを一生許せなくなる」

「承知しております。では、子どもたちを……」

頼まれたツェイルが、腰に提げていた剣の柄を握った、その瞬間だった。

「あつ……シズ！」

それまでシュネイにしがみついていたおとなしくしていたイオルシイ

ズが、いきなりその手を離し、駆け出した。

「シズ、駄目よ、戻って！」

イオルシイズは立ち止まらない。いつもおとなしく、言葉も少なく、オリヴァンがいなければ虐められていそうな子が、おとなの戦いの最中へと突っ込んでいく。信じられない光景だった。

「イオルシイズ！」

そのとき、兄の剣が、ラクウイルに振り下ろされる瞬間でもあった。イオルシイズの身が、その間へと入っていく。いや、正確にはイオルシイズは、ラクウイルを庇うかのようにその間に入って、両腕を伸ばしていた。

「シイズ……っ」

ラクウイルがイオルシイズに気づいたとき、兄の剣は勢いを殺せないほど間近に迫っていた。

「シズ、ラクさま！」

その一瞬を、シュネイは悲鳴も上げられず、目を閉じて恐怖から逃げた。

Plus Extra : 侍従長衷情録。 5 (前書き)

ラクウィル視点です。

痛いのは嫌いだ。

昔から、痛いのは嫌いだ。

だから、痛みを感じないようにしてきた。痛みというものを、知らないフリをしていた。

重い衝撃波は、風の属性にあるらしいという言葉のとおり、身体を思い切り吹き飛ばしてくれた。おかげで木にぶつけた背が痛い。

「痛いじゃないですか」

痛いのは嫌いだ。

いろいろなことを思い出すから、嫌いだ。

「そうこなくちゃ……もつと楽しもうよ、侍従長」

楽しそうに戦う奴も、嫌いだ。

人を傷つけることしかできない力を持って、なにが嬉しいのかわからない。

力は、力でしかないのに。

「だから、おれはサリヴァンに怒られたくないって、言ってるじゃないですか。見てくださいよ、木、折っちゃったじゃないですか」

「僕は、邸は壊さないって、その約束は守ってるよ？」

「そのようですねえ」

力は人を傷つける。使い方を誤れば、人を殺める凶器でしかなくなる。

そんなことは、ツアインだって、わかっているだろうに。

「痛いのは嫌いなんですよ……」

痛い。

身体が、胸が、心が、痛い。

いやだ。

痛いのは、嫌いだ。

それは悲しいことだから。

護れなかったことを意味するから。

「その目……やっと本気になってくれたみたいだね」

最初は両親だった。死にゆく両親を、ただ見ていることしかできなかった。護りたかったのに、護れなかった。

そして。

「サリヴァンの幸せを邪魔しないでください」

右腕を斬られて使えなくなった唯一無二のあるじは、その傷のせいで天恵の制御までできなくなつて。

「おれと戦いたいなら、サリヴァンを巻き込まない場所で襲ってください」

護ると決めたあるじを、護れなかったこの悔しさ。それでも微笑みかけてもらえる、その喜び。

掴んだ幸せを、今度こそ護り通したい。

あるじの幸せは、誰にも邪魔されてはならない。

「おれを殺したいと思わなければ、あなたは負けるでしょうけどね」「ふはっ、それはだいじょうぶ。僕はいつだって、きみや殿下を、殺したいほど憎んでいる。でもね……僕はそんなきみだが、大好きだよ」

振り下ろされた剣を、容赦なく弾き返した。刃がこぼれ、欠片がきらきらと宙を舞う。剣の性能はツアインの片刃のほうが上回っているのだから当然だ。

「ああ、いいね。きみの剣は躊躇いがない。物質に頼らないところが面白いね。異形らしくて」

「こんなものは盾になれば充分ですよ」

「だろうね。けれど、僕が相手ならその物質も武器にしないと」

「わかってますよ」

刃がこぼれようとも、役に立たなくなろうとも、剣は課せられたその役目を果たせばそれでいい。

ラクウィルは剣士ではない。

天恵術師だ。

「マチカちゃん、ルーフェさん、用意してください」

火と土、二つの属性を同時に操る天恵術師、それがラクウィルだ。

けれども。

急に、なにかが聞こえた。

「っー」

耳鳴りにも近い、高音の悲鳴。

気を取られ、ハッとしたときには、ツアインの剣は目前にあった。

だというのに、そこには、もっと驚くべき光景があつて。

「シイズ……っ」

わが子が、泣きそうな顔で、懐に飛び込んできていた。

ラクウイルは考える間もなく剣を離し、飛び込んできたわが子を抱きしめる。咄嗟に身体を反転させ、ツアインの剣からわが子を遠ざけて身を屈めた。

瞬間的に、肩に重みと、熱を感じる。

「シズ、ラクさま！」

シュネイの叫び声が聞こえたとき、ラクウイルは、珍しくも逸っている心臓を持って余しながら、腕の中のわが子イオルシイズのぬくもりを確かめた。

「シイズ……シイズ」

なぜイオルシイズがここにいるのか、わからなかった。

サリヴァンのところにいたはずなのに、安全な場所にいたはずなのに、どうして今ここに、腕の中にいるのかわからない。

「シイズ……？」

確かめると、腕の中には、いつもなら近寄りもしないわが子がいて。

抱きしめさせてもくれないわが子が、必死にしがみついている。

「とー……っ」

泣きながら、その顔をラクウイルの胸に押しつけて、呼んでいる。俄かには信じ難い光景に、ラクウイルは呆然とする。

「シイズ……」

嫌われることには慣れていた。痛みを知らないフリをするのだから、蓋をすることで忘れることができた。

けれども今、泣きじゃくるわが子に、どう反応すればいいのかわからない。

「あー……やり過ぎちゃったかな？」

と、ツアインが言った。

「こうでもしないと、シズが近づけないと思ったことなだけけど……うん、やり過ぎたかも。ごめんね、侍従長」

「……、はい？」

「僕、最初に言ったよね。シズは聡い子だよって。完全に気配を断つからきみが悪いんだよって」

「なんのことですか？」

「本気になった侍従長の気配を感じて、漸くわかったんだろっけれ

ど、ちょっとやり過ぎちゃったみたいだね。まあ、わからなくてもいいよ。僕はこれでも甥っ子が可愛いからね」

意味のわからないことを言い連ねたツアインは、「あ、でも戦いは楽しかったよ」と言い足すと、剣を鞘に戻した。くると踵を返し、なにごともしなかつたかのように、サリヴァンたちのほうへ歩いて行く。

「……なんのことですか？」

さっぱり意味がわからなくて、ラクウィルは首を傾げる。その間もイオルシイズは泣きつ放しで、しがみついたままだった。

「ラクさまー！」

「ネイ……」

「シズは……ああ、シズ、もう吃驚させないで。怖かったじゃないの」

駆け寄ってきたシュネイは、ラクウィルの腕の中にいるイオルシイズにほっとすると、次にラクウィルの状態を確認して怪我の有無を調べた。肩に触れられたときに痛みを感じて顔を顰めたら、打撲していると言われた。

「……本気じゃなかったみたいですね、ツアインは」

「わたしのラクさまになんてことを……早く手当てしないと」

「いえ、もう少し待ってください、ネイ」

「でも……」

「もう少し。シイズが、泣いてますから」

袂のわが子は、シュネイが来てもまだ泣いていて、ラクウィルに

しがみついている。それはラクウィルにとって、心地よい重みだった。

「こんなに暖かいなんて……知りませんでした」

「え……？」

「子どもって、暖かいんですね」

ラクウィルは痛む肩を庇いながら、わが子を抱き直して立ち上がる。ぽんぽんと背中を撫でてやると、嗚咽に震えていた小さな身体が少しずつ緊張を解いていって、ぐずりながらすり寄ってきた。

「ああ……可愛いですねえ」

「ラクさま……」

「てつきり、嫌われているものと思っていたんですけど……諦めていたんですけど……やっぱり、可愛いものですねえ」

小さな手が、ぎゅっとしがみついてくる。小さな身体が、必死に求めてくる。小さなわが子が、必要としてくれている。

この子は、確かに自分の子だった。

可愛い、わが子だった。

「ねえ、ネイ」

にこ、とラクウィルは微笑み、シュネイに手を伸ばして握る。

「可愛いですね」

今なら、サリヴァンの気持ちができるような気がする。子どもは可愛い。

その素直さがときには残酷であっても、この素直さがとても、い

とおしい。このぬくもりを、護っていきたい。

「さあ、シイズ。もうだいじょうぶですよ。おれもネイも、そばにいますからね」

「とー……っ」

「はは。はいはい、ここにいますよ」

* * *

邸内の気配をいくつか探り、上手く隠れているなあと思いつつ、ラクウイルは廊下を歩く。目星をつけて一つ一つ確認して、最終的にここだろうかと部屋の扉を開けた。

「オズくん、お兄ちゃん知りませんか？」

「そこにいるよ」

「あ、やっぱりね」

案の定、弟の部屋に逃げていた。

「おまえはなんでおれの居場所を父さんに教えますかね、イデオズ！」

「おれが父さんに密告するのわかっててなんで逃げてくんのかな、兄さん」

「おまえのところが一番安全だからですよ！」

「高確率で危険でもあると思っただけどなあ」

兄弟喧嘩をするふたりを微笑ましく思いながらも、ラクウィルは目的のために、長男の襟首を掴む。捕獲に成功した。

「ぎゃーっ!」

「ああはいはい、今日もいい悲鳴ですねえ」

「助けてくださいオズう!」

「弟に助けを求めるなんて情けないお兄ちゃんですねえ。さて、今日はオズくんもいらっしやい。総隊長が来ているので、せっかくだから剣を教えてもらうといいでしょう」

おいで、と次男も呼び、長男より聞きわけのいい次男は読みかけの本を閉じると訓練用の剣を持った。

「父さん、前にも言ったけど、おれは騎士になるつもりはないよ?」

「べつにいいですよ。ただ、剣は覚えてください。己れの身を護れる程度には覚えてもらわないと、おれが心配できみを手放せそうにありませんから」

「……まあいいけど」

長男は引き摺り、次男は素直に自分で、部屋を出ると廊下を歩く。少し距離があるので、時間を短縮するために途中から庭に出て横切り、近衛隊の宿舎へと向かった。

「ん。見つけたか、ラク」

「このとおり」

先に来ていたサリヴァンの前に、長男をぽいつと投げ捨てる。情けなくも転がった長男は、痛い、と文句を言ってきたが、にっこり笑ってやったら顔を引き攣らせて逃げた。

しかし。

「こら、逃げるな、シズ」

逃げ切れるわけもなく、サリヴァンの息子オリヴァンに捕まる。

「オリヴァン、今回からはオズも混ぜてください。頼めますか？」

「イディオズも？ いいけど……騎士になるつもりはないって聞いたぞ」

「身を護れる程度でいいですよ」

「それでいいならかまわないけど……オズ、こっちだ。おいで」

オリヴァンにふたりの息子を頼むと、ラクウィルはふっと息をつく。昼食は子どもたちが好きなものを用意してやろうと思った。

「ラク、オズまでいいのか？」

子どもたちが近衛隊の訓練場へ行く姿を見送ると、残ったサリヴァンが心配げに言ってきた。

「ええ、もちろん。身を護れる程度には覚えてもらわないと、心配なんですよ。あの子は来年から寄宿制の学院に入りますしね」

「学院……うちで教師を雇ってもいいぞ？」

「それはあの子が望むことではないですよ」

だからいいんです、と言うと、サリヴァンは「そうか」と静かに視線を訓練場のほうへ向けた。

「大きくなったな、子どもたちは」

「そうですねえ」

「なあ、ラク……一つ、考えていることがあるんだ」

「ん、なんですか？」

「この邸を引き払って、ヴァルハラ家の領地に行こうかと思っ
ている。いつになるかはわからないが、遅くとも来年にはその話を陛下
に通したい」

「ふむ。いいんじゃないですか？ そろそろサライには弟離れして
もらいたいですし」

「おまえはどうする？」

「どつって？」

「ここに残るか？」

それはなんとというか、意外な問いだった。

「残ってもいいぞ。おまえにも家族ができたんだ。もう、好きに生
きていいんだから」

ふと、ラクウィルは込み上げてきたものに、肩を震わせる。

「今さらなに言ってるんですか。おれはサリヴァンの侍従ですよ」

護りたいものは変わらない。増えたくらいで、減りはしない。ラ
クウィルには、サリヴァンのそばを離れるという選択肢はないのだ。

「それにね、家族の声は聞こえるんです。なにかあれば声を聞いて、
天恵で飛べます。だいじょうぶですよ」

「……本当に？」

「ええ。おれには、おれのそばには、ずっとネイがいてくれますか
らね」

ひとりではない。シュネイヤ、子どもたちがいる。そのぬくもり

を知っている。

だからこそ、サリヴァンについて行ける。

「サリヴァンこそ、その言い方からすると、オリヴァンを置いて行くつもりでしょう？ いいんですか？」

「あれは国主だ。どう足掻いても、それは変えられない。いつまでもおれたちのそばにはいられないんだ」

「……子どもが大きくなるっていうのは、寂しいものですね」

「ああ……寂しいな」

くしゃっと、サリヴァンはその顔に苦笑を浮かべる。サリヴァンの気持ちがわかるだけに、ラクウィルも苦笑した。

「ラクさまあ」

ふと、背後からかけられた声に、ラクウィルは振り向く。シユネイが、ツェイルと一緒に邸の庭から手を振っていた。

「行きましようか、サリヴァン。子どもたちは総隊長に鍛えてもらっています。おれたちは食事の準備です」

「おれはなにも作れないぞ」

「味見くらいはできますでしょ」

行きましよう、と促して、ラクウィルは手を振るいという妻のところへ行く。

子どもたちが大きくなって寂しい、という話をしていたからか、サリヴァンはツェイルを近くに感じるとすぐ両腕を伸ばし、その小さな身体を抱き締めていた。

「ラクさま、わたしにもあれをやってくださいまし」

「はい、いいですよ」

「きゅあ」

同じようにして欲しいというので、ラクウィルもシュネイを胸に抱きしめて、ぎゅっとする。シュネイは嬉しそうに笑った。

「ラクさま、もっとぎゅっと。もっとネイをぎゅっとして」

きゅあきゅあらと笑う妻がいとしい。

こんなふうに、いつまでも笑っていられたらいいのにと、思った。

Plus Extra : 侍従長衷情録。5 (後書き)

*後半部分は「きみの背中に花束を。」の物語が始まる少し前のものとなっております。

これにて「侍従長衷情録。」を終幕させていただきました。
楽しく書かせていただきました。
リクエストありがとうございます。

Plus Extra : 皇弟殿下純愛録。 1 (前書き)

*番外編「国を継ぐ者。」が始まる数カ月前の話です。

ので、ツエイルもサリヴァンも先話から若返りますのでご注意ください。

なんだからいつもより静かだ。

とても、とても静かで、なにも聞こえない。

どうしてだろうと思つて、天幕の隙間からこぼれ落ちてくる仄かな光りへと近づいてみる。

足許がひんやりとした。

天幕に手を伸ばして、冷たさに身を震わせながら、開いてみる。

「……ゆき」

うつすらと積もる、白い雪。

ああ、もうこんな季節になつていたのか。

どつりで寒いはずだ。吐く息も白く、動いていないと身体が痛いくらい。

はあ、と手のひらに息を吐きかけて、暖を取るように擦り合わせる。思い切つて天幕を開き切ると、一気に冷たさが身に沁みだ。

夜が明けたばかりの空は、未だどんよりと暗い。

「……行かないと」

寒さに負けてなんていられない。雪に感動している時間も惜しい。天幕の開かれた窓辺から離れると、急いで身支度をした。持っている荷は少ないので、それほど時間はかからない。外の様子を考慮して、少し厚着をしておいた。

僅かな時間で身を整えると、僅かな荷を背負って、寝台の枕許に置いていた銀の剣を掴む。専用の帯留めで腰に提げると、一息ついて、部屋を飛び出した。

外は寒かった。降り続けている雪のせいだろう。それでも、走っていればその寒さも徐々に気にならなくなっていく。足許は雪のせいで不安定だが、これも気をつけていれば転ばずにいられる。

早く、と思った。

早く、行かなければ。

急いで、進まなくては。

逸る気持ちのまま走り続ける。外気にあてられている手が寒さのあまり痛みだしても、立ち止まってなんていられない。ただでさえ夜は休んで、時間を削っているのだ。夜は進めない分、昼間はできるだけ長く遠くへ、進み続けなければならぬ。

はあはあ、と息が切れる。このところ運動不足だったせいで、僅かな荷も腰の剣も、重く感じてしまう。

「はやく……はやく、いかない」と

走り続けた街道を抜けると、真っ白に染まった広野が視界を埋めた。その頃には雪も止んで、曇っていた空が本来の色を取り戻し始めていた。

太陽の光りが、雪原に反射する。

眩しさに目を細め、立ち止まって呼吸を整えた。

「あおい……ゆき」

ところどころ、影になった部分が、青く見えた。空が色を取り戻したからだろう。

青い雪があった。

さくり、さくり、とゆっくり歩きながら足許をみれば、自分の影

も青い雪を作り出していた。

けれどもものんびりと眺めている時間はない。その猶予は残り少ない。もう少し見ていたい気分を抑え込んで、再び駆け出した。けれども。

「つえー！」

雪原に響いた大きな声に、走る速度が落ちる。ハッと振り返ると、恐れていた事態が起きようとしていた。

「コカ……」

「みつ、え、た」

きちんと発音されない掠れた声が、走り歩みに変えさせ、そして立ち止まらせる。

顔の半分を覆う傷跡から覗いた藍色の瞳に、鋭く睨みつけられた。雨雲のような色の髪をさらさらと風にながしながら、ざくざくと雪を踏み分けて、近づいて来る。

怒っているのだと、すぐにわかった。

逃げよう。

ここで捕まったら、この先へ進めなくなってしまう。

慌てて駆け出して、しかし気づかれて手首を掴まれてしまった。

「コカ！」

放せ、ともがいたが、がちりと手首を掴む手のひらの力は強く、振り払えない。それならと、とにかく暴れてやろうとしたが、型にはまらない武術を身につけている者に対し、それは無意味でしかなかった。

「コカ、お願い…っ…行かせて」

あと少しだというのに。

あと少しで、辿り着けるというのに。

「コカっ！」

放してくれといくら頼んでも、懇願しても、拘束は解かれない。

グツと引つ張られると、来た道を戻らされた。踏ん張っても、力は相手のほうが強く、ずるずると引き摺られる。

「コカ…っ…コカあ！」

行きたいのはそっちじゃない。

戻ったら、もう二度と、進めない。

それなのに、顔と咽喉に大きな傷を持った藍色の瞳の彼女コカは、聞く耳を持ってくれない。ずんずんと、無言で来た道を戻る。

そうして。

せっかく抜けた街道にまで、戻ってきてしまった。

やっと、街道を抜けたと思ったのに。

あと少しだったのに。

後悔してももう遅い。

「ツエイ！」

びくん、と身体が竦む。

顔を上げると、街道が始まる場所に、その人は立っていた。たくさんさんの騎士に囲まれて、太陽の光りに髪を銀に煌めかせながら、こちらをじっと見ている。

その人はそれ以上こちらへは進めない。だからそこで立ち止まり、

戻ってくるのを待っているのだ。

コカに引つ張られて、その人の許へ、着実に近づいていく。

「おいで、ツエイ」

低い声が、先へ進めなかった悔しさを煽る。

行きたかったのに。

行かなければならなかったのに。

ここまで誰にも見つからずに来られたのに。

悔しさと悲しさに、涙が溢れそうになった。

「いや……いやだ、サリヴァンさま」

最後の抵抗を試みて足を踏ん張ると、コカはすんなりと歩みを止めてくれた。けれども、拘束が解かれることはない。

「おいで、ツエイ」

「いや……っ」

「おいで」

そんな優しい声に騙されるものか。そんな優しい眼差しに惑わされるものか。

必死に、抗う。

それでも。

「コカ、ツエイを」

命令されたコカは、必死な抵抗を逆手に取って、一瞬の隙を突くとグンと足を踏み出し、その人へと近づいた。重心を相手に取られては抵抗も僅かなものとなり、もはや意味を成さない。

「いや！ いやぁ！」

その人がいやなのではない。
道に戻ることが、いやなのだ。
連れ戻されることが、いやなのだ。
けれども。

「逃がさないぞ、ツエイ」

「ひう……っ」

容易く、その人の腕の中に囚われた。

「いや……っ……サリヴァンさま、いや……っ」

「駄目だ」

ひどい人だ。

「はなして、はなして……っ……サリヴァンさま」
「放さない。なにがあっても、おまえだけは、絶対に」

ぎゅっと、抱きしめられる。強く、温かく、優しく、包まれる。
ひどい人だ。

「……許せ、ツエイ」

ひどい、人。

そしてとても、優しい人。

「ヒーデ、ツエイの中に」

サリヴァンのその言葉を聞いたとき、絶望にも似た衝撃に襲われた。

「サリヴァンさま……っ」

「許せと言っただろ、ツェイ」

サリヴァンの声も、表情も、冗談など言っているものではなく、真剣そのものだった。それはあまりにも衝撃的で、身動きを封じられる手段に抵抗する瞬間までの隙を突かれてしまう。

気づくと、どっと身体に重力のようなものを感じた。

「うあう……っ」

自分の足では立っていられないほどの重み、それはサリヴァンの両腕に抱かれることで、地面に倒れることを免れた。

「ひび、い……っ」

「ひどいのはおまえのほうだ。おれを置いて、ひとりで、勝手に」

「だって……っ」

「逃がさない。おまえはおれのものだ」

言葉はひどいのに、仕草は優しい。弛緩した身体を、サリヴァンは軽々と抱き直し、ぎゅっと強く締めつけてくる。

「覚悟しろ。あとがひどいぞ」

そう言ったサリヴァンに、首筋を噛まれる。痛みにも身を震わせれば、傷がついたのだろうそこを舐められ、さらにはぺろりと上唇を舐めたサリヴァンの視線に、身体が竦んだ。

思わず、垣間見えてしまったサリヴァンの獰猛さに、涙が滲む。怖い、と思ったのは、いつも溢れんばかりの優しさばかりを、感じていたから。

サリヴァンが怒るようなことをしたのは自分なのに、怒らせたことに恐怖を感じてしまう。そんな矛盾を抱えながら、サリヴァンの腕の中で震えた。

「サ、サリヴァ…っ…さま」

「眠れると思うなよ、ツエイ」

全身の血の気が引く。本気で恐怖を感じた。それほどにサリヴァンは怒っているのだと思うと、もっとひどく、怖かった。

ひとりで勝手にここまで来たことを、今さら後悔しても、遅い。

Plus Extra : 皇弟殿下純愛録。 1 (後書き)

リクエストされたものではありませんが、楽しんでいただけたら幸いです。

Plus Extra : 皇弟殿下純愛録。2 (前書き)

近衛騎士隊のユグド視点です。

泣き喚くツエイルの声が途絶えたのは、明け方も近い時間だった。ほどなくして、ふたりが籠もっていた寢室に侍従長ラクウイルが入っていく。続いて待機していた侍女リリも、慌てた様子で中へと入って行った。

だが、どうしたのか、肩を落としたラクウイルとリリが、すぐに寢室から出てきた。

「食事を持ってくる以外は中に入るなと……まったく、えらくご機嫌斜めなうえに凶暴ですよ、今のサリヴァンは。手がつけられません」

ため息をついたラクウイルに、リリは涙目になりながら「ツエイルさまがお可哀想です」と言う。

寢室の状態がどうなっているかは不明だが、考えるまでもないことだというのは、その場に集まっていた全員が心得ているだろう。

「姫はだいじょうぶなのか？」

と誰かが問えば、

「悲惨ですよ。でもサリヴァンに体力はありませんからね。せいぜい三日か四日が限度でしょう。それまでは様子を窺って、サリヴァンから姫を救出するしかありません」

らしくなく、ラクウィルは困ったように幾度めと知れないため息をつく。

その場にいた者たちも、一様にどうしたものかと途方に暮れたため息をこぼした。

「殿下がご乱心遊ばされた……」

「仕方ないですよ。姫も悪いんですもん」

全員が、「だよなあ」と、ツェイルを擁護できないことに肩を落とす。

サリヴァンが凶暴になるほど怒ったのは、ツェイルのせいでもあるのだ。

さすがのユグドも、なにも言えない。

「うー、と」

どうしたの、という眼差しで、袖をクンと引っ張られる。

「……コカ」

騎士隊の中でもっとも足の速いコカにツェイルを追わせたのは、正解だった。コカの働きで、ツェイルが国境を超える前に、連れ戻すことができたのだ。

「おまえはよくやった、コカ」

ぼんぼん、と頭を撫でると、鼻まで隠れる襟巻をしたコカは、少し嬉しげに息をつき、襟巻にさらに顔を埋める。もっと褒めて、と

でも言うように額を腕に擦りつけてきたので、頭を抱いて撫でてやった。

しかし、コカの功績は認めるが、笑って褒めてやれない。

サリヴァンの乱心は、コカが捕まえたツェイルに、一心に注がれ続けているのだ。

「とにかく今はサリヴァンの好きにさせるしかありませんね。怒り狂っていますし、おれの声も届きません。様子を見ながら、宥めていきましょう」

ラクウィルの提案に、一同が仕方なく頷く。

方法がそれしかないのだから、どうしようもないのだ。

「まずはこの宿を貸し切りになりますか。シュベルツさん、クラウスさん、手配を頼みます。リリは食事の用意とか、そっち方面をお願いしますね。邸から応援を呼んでかまいません。それからユグドとナイレンは、宿の警備案を考えてください。おれはツアインを呼んでくるので」

「ツアインを呼んでだいじょうぶか？」

「今ここで呼ばなかったら殺されますよ、おれがね」

苦笑したラクウィルの号令でそれぞれが散ると、ユグドはコカにこの宿の周囲を探るよう指示を出して走らせた。

そのあと、ナイレンを促して借りている別室に移動する。

「殿下があんなふうに凶暴になるとは思わなかった」

扉を閉めるや否や、ナイレンが頭を抱えながらそうこぼした。

「滅多に怒らない方だからね……感情的になるのも珍しい」

「ツェイルのことだけは、本当に特別なんだと、つくづく思ったよ」
「殿下をそうさせる姫もすごいと、わたしは思うが」
「怒ると怖いって、言っておいたはずなんだけどなあ」

なにもしていないが疲れたと、ナイレンはどさりと長椅子に腰かける。ユグドも、懐から周辺地図を取り出すと卓に広げ、椅子に座った。

「なあ、ユグド隊長」

「隊長ではない。なんだ」

「殿下、本当に籠もるつもりでいると思うか？」

「怒りが鎮まるまで、そのつもりだろうね」

「……ツェイルが不憫だ」

「仕方ない」

「優しくないな、ユグド隊長」

「隊長ではない。優しくないもなにも、姫も悪いだろう。ひとりで勝手に動いて、こんな国境近くの町まで……しかもラクウイルが来たことのない土地を移動したのでは、殿下の怒りも当然だ」

「あー……ラクウイルは一度来たことのある土地なら、飛べるんだっただか」

「意図していたとしか思えない」

「まあ、確かに」

擁護できない、とナイレンは唇を歪めた。

「コルテチカがいたからどうにかなったが、いなかったら国境を越えられていただろうからなあ」

サリヴァンが怒る気持ちも、ツェイルがどうしようもなく不安になった気持ちも、どちらもわからなくはないから困ったものだ。

「そもそも、なんでツェイルはひとりで勝手にここまで来たんだ？」

その疑問は、ユグドにもある。

「知っていたら苦労しない」

ツェイルがひとりで、こんな国境近くの町まで来たうえに、国境を越えようとしていた理由など、おそらく本人以外は知る由もないだろう。サリヴァンですら知らないかもしれない。だが、その行動を取るようになった原因は、サリヴァンにあるだろう。

「行きたいところがあつた、では済まされないだろうな」

済まないだろう。サリヴァンの激怒は、相当なものだ。

「まいったな……おれたちじゃあどうしようもできない」

「今はとにかく、殿下に怒りを鎮めてもらうほかない」

「……そのためにも、おれたちは警備に力を入れますか」

「ああ」

今ユグドたち騎士隊ができることは、乱心しているサリヴァンが落ち着くまで、この宿の安全を確保することだけである。どんなにツェイルを心配しても、サリヴァンが落ち着かない限り、皇都の邸へ移動することもできないのだ。

「さて……この辺りは治安があまりよくなさそうだな。どうする？」

「コカが戻り次第、わたしたちも周囲の状況を見に行く」

「了解」

卓に広げた地図をナイレンと睨むように見ながら、起こりうる事態をいくつも想定し、ああでもないこうでもないと話しあっているうちに、夜が明ける。夜目が効くコカが戻ってきたときには、宿を借りる手配を済ませたシュベルツとクラウスも合流していたので、それぞれ休む者と警護にあたる者と別れた。

サリヴァンが寢室から出てきたのは、それから四日後のことになる。

ただし、ユグドたちが待っていた状態のサリヴァンでは、なかった。

Plus Extra : 皇弟殿下純愛録。 3 (前書き)

前半サリヴァン視点、後半ツェイル視点です。

ぐったりと弛緩し、一糸まとわぬ姿で寝台に横たわるツイールを上から眺める。

ひどいことをしたとは、思わない。

乱暴にってしまった気はするが、後悔もしていない。

掛布をツイールにかけてやると、サリヴァンは適当な衣装を身につけ、着崩した状態のまま寝台に腰かけた。するとすぐ、扉近くに控えていたらしいラクウイルが、静かになった部屋に入ってくる。

「落ち着きましたか？」

その問いに、サリヴァンは沈黙し、睨みつける。

「まだ……ですか。姫は」

「来るな」

不機嫌に言えば、肩を竦めて苦笑したラクウイルは、開け放したままにしていた扉を閉めた。

「敷布くらい交換したいんですけど？」

「来るなど言った」

「食事は？ 姫に食べさせてあげてます？ 水分は？ 沐浴は？」

このままだと、姫が壊れちゃいます。みんな心配していますよ」

「うるさい。黙れ」

「黙っちゃいられませんよ。いい加減、落ち着いたらどうですか」
「おれは落ち着いている」

「サリヴァン……お怒りはごもっともですけど、これじゃあ姫があんまりです」

ほとほと困ったようにラクウィルは言つが、サリヴァンは睨みつけたままそばに近寄せなかった。

「サリヴァン……お願いですから、姫を」

「近づくな」

「サリヴァン」

「来るな！」

近くにあつた枕を掴み、勢いに任せてラクウィルに投げつける。
ラクウィルは避けなかった。

「近寄るな、出て行け！」

「……サリヴァン」

「出て行け！」

ラクウィルは悲しそうな顔をしたが、それでもサリヴァンは、ラクウィルを威嚇し続けた。気を抜けば、ラクウィルにしてやられる。

「……わかりました。これ以上は近づきません。だから、落ち着いてください」

「おれは落ち着いている」

「では冷静になつてください」

「おれは冷静だ」

「サリヴァン、気持ちはわかります。けど、お願いですから、もう姫を虐めないでください。あんまりです」

「おまえには関係ない。口を挟むな。出て行け。部屋に入って来るな」

捲くし立てるように言うが、ラクウィルは動じない。
苛々した。

それでも、サリヴァンにはこの侍従長を部屋から追い出す手段がない。剣の腕も、体術も、ラクウィルには敵わない。口で負かすしか、方法はないのだ。

「言うこと聞いてくださいよ。じゃないと、いい加減おれも怒りますよ?」

「怒ったおまえなど怖くもなるともない」

言っただけで、とたんにラクウィルを包む空気が変わった。

「……そうですか。じゃあ、遠慮なく怒りますよ?」

瞬間、ラクウィルの姿が目の前から消える。

天恵を遣わせる隙を与えてしまったのだ。

「ツェイに触るなっ!」

サリヴァンは慌てて背後に隠していたツェイルを振り向くが、すでに遅かった。そこにツェイルはいない。

「姫を保護させてもらいますよ、サリヴァン」

声は、閉められた扉のほうから聞こえる。身体を正面に戻せば、ツェイルを布に包んで横抱きしたラクウィルがいた。

「ツエイを返せ、ラク！」

「あなたが冷静になってくれたら、いずれはお返ししますよ」

そう言って、ラクウィルはまた、姿を消した。

サリヴァンは寝台を跳ねるように離れると、急いで扉を開けて飛び出した。

「ラクウィル！ ツエイを返せ！」

怒号は、狭い廊下に響き渡る。

ラクウィルの姿はどこにもなく、代わりに騎士隊の面子が揃っていた。だがサリヴァンはそれを無視してツエイを呼び、捜すために走り出した。

「ツエイ！ ツエイを返せ、ラクウィル！」

「殿下！ 落ち着いてください、殿下！」

「うるさい、黙れ！ ツエイはどこだ、ラクウィルはどこだ、おれのツエイをどこに連れて行った！」

「殿下、殿下、ご理解ください、殿下！」

ツエイルをどこに連れて行ったのか。

騎士隊はサリヴァンの足止めをするかのようにまとわりつき、その歩みを邪魔する。なぎ倒そうにも彼らのほうが腕力があり、また身のこなしもサリヴァンを上回るため、思うように前へ進めずサリヴァンの苛立ちは頂点に達する。

「ツエイを返せと言っているっ！ 離れろっ！」

「それはきみが冷静になってからだよ、殿下」

耳許で、そう囁かれたと思った瞬間、腹部に鈍い痛みを感じた。

「ぐう……っ」

殴られたのだと気づいたのは、意識が遠のき始めてからだった。

「珍しくわれを忘れて怒るから、なにかと思ったら……らしくないね、殿下」

「う……ツアイ、ン」

「久しぶり、殿下。さて……よくも僕の最愛の妹にひどい仕打ちをしてくれたね。このお礼はきっちりと、つけさせてもらうよ」

にんまりと笑んだツアインは、さらにもう一発、サリヴァンの腹に拳を入れた。

* * *

咽喉の渇きで目が覚めた。唇がかさかさになっていて、口を動かすどぴりぴりする。

「ああ、水ですか？ ちょっと待ってくださいね」

聞き覚えのある声に、薄目を開けた。差し込んできた光りはさほど強くなく、むしろ弱いくらいで、刺激は少ない。そこに見えた金色の髪は、ラクウィルのものだった。

「ら、く……？」

「はい。さあ、水ですよ」

ひんやりとした水が、ゆっくりと口の中に入ってくる。飲み込むのにも力は必要で、とても疲れた。

どうしてこんなに疲れているのだろうとぼんやり考えて、そういえばずっとサリヴァンに抱かれていたことを思い出した。

「さり、ヴぁ、さま……は」

「サリヴァンのことより、今は姫です。もうちょっと移動しますね。ここだとサリヴァンに見つかっちゃいますから」

目を閉じていてください、と柔らかなものに身を包まれる。

どうやらラクウィルの腕に抱き上げられているらしいとわかったものの、四肢に力がまったく入らず、それどころか動かすこともできないほどの疲労に、身体が軋んでいた。

呼吸も苦しいし、頭痛もする。

身体のうちこちが痛い。

「らく……くるし、い」

「少し熱が出ていますね。もうちょっとの辛抱です。ごめんなさい、姫」

ぼんぼん、と背を撫でられる。

ラクウィルは走っているようで、その振動が伝わってきた。ぼんやりとした頭ではそれ以上のことを考えていられなくて、揺れに任せて瞼を閉じていると、緩やかで心地いい眠気がやってくる。

やっと解放された、と思った。

いつまで続くのかわからない快樂は、もうツェイルには苦しくて仕方のないものになっていて、どれだけ「助けて」と叫んだかわからない。とにかく苦しくて、つらくて、悲しくて、いくら泣いても

許してもらえなくて、頭がおかしくなりそうだった。
それらから、漸く解放されたのだ。

「姫、姫、ラクですよ、わかりますか」

「……………」

「少し苦しいでしょうけど、だいじょうぶ、安心してください。ちよつとの辛抱です。ね、わかるでしょう?」

まるで小さな子どもにでも言い聞かせるような口ぶりに、ふっと笑いが込み上げる。もう子どもじゃない、と言いたかったが、今は、このひどく疲れた身体と心が、誰かに甘えたがっていた。

「りり、は……………」

「いますよ。りり、姫に声を」

ラクウイルが動く気配がしたあと、ふわりと香った柔らかなものを、ツェイルは感じた。

「ツェイルさま、りりです……………」

ああ、りりだ。よかった、そばにいてくれた。

そうほっと安堵して、薄目を開ける。泣きそつな顔をしたりりがいた。

「りり……………」

泣かせたいわけではないのに、りりは泣きそつだ。それがいやで手を伸ばそうとしたが、やはり腕は上がらない。

「うで、が……………」
「うで、か、ない」

「お疲れなのです、無理をしないでください。大丈夫です、このリリがそばにいます。ご安心ください、ツェイルさま」

伸ばせない腕の代わりに、リリが手のひらを包んでくれて、ツェイルは安堵の息をつきながらリリに微笑む。泣きそうな顔がさらに泣きそうになって困ったが、笑おうとしてくれているのが手のひらから伝わってきた。

「ごめ、なさ……勝手、して」

「いいえ。いいえ、ツェイルさま」

「ごめん、なさい……」

謝っているうちに、涙がこぼれた。その涙は、ラクウィルの指先が拭ってくれる。

「姫、訊いていいですか？ どうしてひとりで、出て行っただんです？」

ラクウィルの静かな問いに、ツェイルは瞼を閉じた。

「喧嘩でもしましたか？」

「違う、と緩く首を振る。

「では、サリヴァンがなにか姫に言いましたか？」

「それも違う、とツェイルは否定する。

「……なにがあったんですか、姫」

ラクウィルの声は優しく、劣りがある。たとえツエイルが嘘を言ったとしても、今のラクウィルは怒らないだろう。いや、真実を言ったからといって、ラクウィルが怒ることはない。彼は、そういう侍従だ。

「姫、教えてください。それともサリヴァンの侍従であるおれには、教えられませんか？」

「向こうの、国……」
「国？」

「今は、そこに、いると……」

「……誰のことですか」

「行か、ないと……早く、しないと……逢えなく、なる」

ツエイル目をこじ開け、朧な視界に移る金色に眩しさを感ずると、唇を噛んだ。

「姫、誰のことですか。どこの国のことですか」

「……わたし、は……行かな、ければ」

「どこへ行くというんです、姫」

「癒して、くれるひと……が」

「……癒し？」

行かなければ、という強い衝動に駆られる。それは力の入らない身体に苛立ちを募らせ、ツエイルを焦らせた。

「行かせて……っ」

どうすれば、この身体に力が戻るだろう。
どうすれば、そこへ行けるだろう。

「ラク、行かせて……っ」

「……姫」

「行かないと……早くしないとっ」

罵倒したくなる身体に苛々しながら、ツェイルはラクウイルを強く睨み、その目に涙を浮かべる。

ラクウイルは、困っているような苦笑を浮かべていた。

「どうしても、行かなければなりませんか？」

「今、向こうの国に、いるうちに……っ」

逢いに行かなければならないのだ、とツェイルは訴える。

「ダンガード侍従長、向こうの国とは、まさか……」

「ええ。いったい誰からそれを聞いたのだから……おれだってつい先日聞いたばかりなのに」

「では本当に……？」

「嘘ではないですよ。そうですね……姫、どこでそれをお知りになられたのです？」

ラクウイルは苦笑していたが、その目は笑っていなかった。

「……記録者、が」

「え、あの灰色のケモノに？ うわ……油断ならぬですねえ」

唸ったラクウイルが、その眉間に少しだけ皺を寄せる。

「余計なことをしてくれたのだからいいことをしてくれたのだから……結果的に言うところ現時点ではサリヴァンを怒らせただけで余計なこと……うーん、出方に困りますねえ」

「行かせて、ラク……わたしは、逢わないと」

またサリヴァンを怒らせることになったとしても、ツェイルは、どうしても行きたい場所がある。だから行かせて欲しい。行って、確かめなければならぬ。

「……では姫、条件があります」

ふと、ラクウィルの真摯な瞳が、ツェイルを捉える。

条件がある、と言ったラクウィルは、その条件とやらとツェイルに突きつけると、顔かないならこのままサリヴァンのところへ連れて行くと、ツェイルを脅した。

Plus Extra : 皇弟殿下純愛録。3 (後書き)

気づいたら、本編と外伝&番外編の話数が同じに……。

このたびも読んでくださりありがとうございます。ごさいます。

サリヴァンの暴走にちょっとつき合ってくださいだと嬉しいですよ。

Plus Extra : 皇弟殿下純愛録。4 (前書き)

サリヴァン視点です。

ハッと気づいて起き上がってすぐ、剣先が目の前にあった。

「……なんのつもりだ、ツアイン」

剣を突きつけているツアインを睨むと、そちらはにっこりと笑顔を返してくる。

「少しは冷静になった？」

「ツエイを返せ」

「あらら……まだ駄目なの？ まったく……珍しいねえ」

剣は鞘に収めたツアインだったが、今度は剣の代わりにぴりぴりとした殺気のようなものを笑みに含ませ、サリヴァンを見下ろしてくる。下手なことをすればまた殴られて気絶させられそうだ。むしろ、そうしたほうが早いと考えて、すでにツアインはその気になっているかもしれない。

あるじがあるじとも思わぬような振る舞いをする狂犬に、ため息がこぼれた。

「ツエイを返せと言っているだけだ。どこに連れて行った」

「悪いけど、僕は知らないよ。知っていても今の殿下に協力なんてする気もないね」

「ならいい。出て行け」

サリヴァンは寝かせられていた寝台から離れようと、足を床につける。ツェイルの居場所を知らないと、そう白を切り続けるのなら、こちらはこちらで勝手に動くだけだ。誰の手も借りない。自分でツェイルを見つける。

立ち上がろうとして、つと、ツアインに殴られた腹部が痛んだ。遠慮なく殴ってくれたらしい。忌々しいのは、きちんと手当までされているところだ。腹部には包帯の感触がある。

「お節介だった？ でも、必要でしょう。おかげで僕はユグドに殴られたけどね」

「あるじに手を上げて、無事でいられるだけまだいいだろう」

「べつに僕を殺してもいいよ？ ツェイルが悲しむだけだからね」

できるものならやってみろ、と言われて、腹が立つ。

できるわけがない。

ツアインを殺すことなど、サリヴァンには、できない。技術的な問題ではなく、いとしい妻の大切な家族を無闇に傷つけられるほどの精神力が、サリヴァンにはない。

「出て行け。今おまえの顔など見たくもない」

「僕もきみの顔なんか見たくもないよ。よくもツェイルに乱暴してくれたよね。ほんと、殿下じゃなかったら、迷いなく殺しているよ？」

「おまえにおれが殺せるものか。出て行け」

「ああほんつとむかつく……どうやって殺してやるうか」

空気に剣香さが混じる。殺気が鋭くなる。それでも絶対的な確信はあった。

サリヴァンもツアインも、互いに互いを殺せない。

「やめないか、ツアイン」

ふと、声が割って入った。

部屋に入ってきたのはユグドと、ナイレンだ。

「殿下、申し訳ありません」

片膝をついて頭を下げたユグドが、謝罪してくる。サリヴァンは眉をひそめた。

「強硬手段に出たことが」

「は。処罰は喜んでこの身に。しかし、今しばらくはお待ちください」

「おまえたちのしたことはどうでもいい。ツエイを返せ。おれの要求はそれだけだ」

「殿下」

「ツエイを返せ」

繰り返し言うと、ユグドが険しい顔をした。

「まだ、お怒りなのですか」

「当然だ」

「しかしあれ以上は姫が」

「黙れ」

「殿下」

「ツエイを返せと言っているだろう」

この気持ちが、わかるだろうか。

愛する者が、忽然と姿を消す、その悲しみがわかるだろうか。

ずっと一緒にいると、そばにいと、言ってくれたその言葉がどれほどの重みがあったか、わかるだろうか。

その姿を追って、捜して、やっと見つけたのに。

「ラクはツエイをどこに連れて行った。ツエイはどこだ」

「気をお鎮めください、殿下。冷静にお考えください」

「おれは冷静だ」

ツエイがそばにいない。そのことが、どれほど寂しく、どれほど悲しいことか。

ともすれば、心が、その寂しさと悲しさから、崩折れそうになる。

「ツエイを、返せ……っ……返してくれ」

寂しいのだ。

悲しいのだ。

心が、身体が、寒くて痛むのだ。

「漸く、きみらしく落ち着いてきたのかな……」

ぼそりとツアインが言った。

「ねえ殿下、どうしてツエイルに乱暴したの。ツエイルがなにをしたらっていつの」

そんなの、と思う。

「……ひとりで、勝手に、出て行った」

「その理由は？」

そんなの、と思う。

「……知らない」

わからないことだらけだ。

わからないから、わからなくなった。

寂しさと悲しさに、容易く負けた。

「知らないのに乱暴したの？ ひどいね……ツェイルの言い訳も聞かなかったのか」

はあ、とツアインは大袈裟なほどため息をつき、サリヴァンとは反対側の寝台に腰かけて、背を向けた。

「シエリアン公国に、ヴェルニカ帝国の皇帝が来ている」

「……なに？」

「きみは知らなかっただろう。当然だね。宰相閣下が、知らせるなと言ってきたんだから」

ツアインの言っていることは本当かと、サリヴァンはユグドを見る。顔色を変えず、ユグドは頷いた。

「……シエスタが公国に、なぜ」

「それはもちろん、公主が天恵者だからだよ。ヴェルニカ帝国の天恵に近いとか何とか、猊下は言っていたんでしょ？ 聖国にも魔国にもあってはならない、そんな天恵なら、ヴェルニカ帝国の皇帝も一度は視察にくるよ」

「……だが、そんな知らせは」

知らせがこないわけがない、と言いかけて、口ごもる。ツアイン

は、宰相閣下が知らせるなど言ってきた、と白状しているのだ。

「ルカが、おれに知らせるなど命令したのか」

「殿下、ヴェルニカの皇帝が嫌いでしょ」

嫌いなわけではない。苦手なだけだ。
しかし。

「それと、ツエイと、なんの関係がある」

「地図を見なよ。ここは、遠回りになるけど、公国に行く道がある。それとツエイルの荷物にあった地図には、公国へ向かう経路がいくつか記されていた」

「そんな……いや、だが」

公国へ行こうとしていたのは、わかっていた。だが、その理由がヴェルニカの皇帝が来ているからだというのは、ツアインはそうだと知っているが、サリヴァンには納得できない。

「地上猊下もいるらしい、と言ったら、どうする？」

「！ なんだと？」

そんなまさか、とツアインを振り向けば、遠くを眺めるツアインの横顔があった。

「どうやらツエイルの目的は、そのおふたりに逢うことのようなんだよね」

「なぜそんなことを」

「知らないよ」

知っていれば一緒に行ったのに、とツアインは言う。一緒に行っ

て、ツェイルを護るのに、と。

「殿下、よろしいでしょうか」

「……なんだ、ユート」

「ラクウィルから、記録者が関係している、と報告がありました」

予想外な存在の名称に、サリヴァンは瞠目する。

「記録者……まだここにいたのか」

「まだ？」

「ここで公国の記録をしていた。もう別の場所へ移動したとばかり思っていたが……まだいたのか」

「殿下は記録者をご存知なのですか？」

「存在は知っている」

記録者、という者が存在していることは、知っている。世界を記録し、傍観する者のことだ。ほぼ伝説と化している存在ではあるが、彼は確かに、この世界のどこかに在る。

「記録者が、ツェイに接触したのか……なにを記録しようというんだ」

「え？ なに、そいつがツェイルを拐したの？」

「記録者が言ったことがツェイルを動かした可能性は高い。だが……彼は傍観者でもある。自らこちらの領分に関わるような真似はしないはずだが……」

記録者は、名称のとおりのことをする傍観者だ。人間とも、神々とも関わらない孤高の存在であり、また人間でもなければ神でもない。

そんな記録者が、なぜツェイルと接触したのか、わからない。

「記録者って、そもそもなに？」

「世界を記録し、傍観する者。灰色のケモノだ」

「……そんな変てこがこの世界に在るの？」

「在る」

この世界はいつでも不思議なものに包まれている。たまたま神の領分を知ることになったサリヴァンだから、そう思う。きっと人は、不思議なものに包まれて生きていると、気づいていないだろう。

「……ラクは、ツエイをそこへ連れて行ったか」

「おそらくは」

答えたのはユグドだった。

「今さら、おまえたちまで知らぬと言うか」

「わたしたちが把握するより早く、姿を消されました。行き先は聞いていません」

「……ばか者」

「申し訳ございません」

ラクウィルに姿を消されたのは誤算だったと、ユグドは頭を下げて詫げる。

つまりは、彼らもラクウィルに出し抜かれたということだ。

「ラクを追え」

「は、すぐに。しかし、公国への入国許可が必要となります」

「陛下に……兄上に協力を仰ぐ。今すぐラクを追え」

「御意。隊を編成し、終わり次第向かいます」

ユグドはさつと立ち上がると一礼し、素早く部屋を出て行った。彼らの隊長たるツアインは、未だ動かない。

「おまえも行け、ツアイン」

「僕は残るよ。侍従長がツェイルを連れて行ったなら、まあ安全だし……僕がここに残らないと、きみが危ないからね」

妹を溺愛するツアインとは思えない言葉だった。

「珍しい。おまえがツェイを追いかけないとは」

「僕はツェイルが望まないことをしない主義だ」

「望まないこと……？」

「あの子の望みは知っている」

そう言ってツアインは寝台を離れた。

「さあ殿下、陛下のところへ行こうか」

ツアインの言葉はサリヴァンにいくつかの疑問を残したが、それよりも今はツェイルのことだ。

「ああ」

頷くと、痛む腹を庇いながら寝台を立ち、部屋から出た。

荒れた土地を綺麗に覆い隠した雪原の中央に、ぽつんと、一つの影がある。

黒い影だ。

空を見上げているその姿は、黒い外套を羽織った人であると証明している。

ツェイルはラクウイルの支えと、リリの手から離れ、ゆっくりと黒い影に近づいた。

「地上猊下」

黒い影を、そう呼ぶ。

ゆっくりとこちらを振り向いたその人は、漆黒に覆われた髪の中に、琥珀色の瞳を宿していた。

「……誰だ？」

「ツェイル・レイル・ヴァルハラと申します」

「ヴァルハラ……ああ、レイが気にかけているところか」

その人はふつと和らいだ笑みを浮かべると、「どうした？」と首を傾げる。

「どうか、お力を……わたしに、その智を、お与えください」

「？ レイに頼めばいいだろ。ヴァルハラはレイが気にかけている」
「聖王猊下でもお救いすることができないのです」
「……レイでも、できない？」

なんだそれは、と眉間に皺を寄せたその人は、その身体の向きをツェイルに合わせた。

「どうか、国主の楔を……っ……サリヴァンさまの天恵を、治してください」

そのために、ここへ来た。

この人に逢いにきた。

それを頼むために、その方法を見つげるために、どうしても逢わなければならなかった。

けれども。

「無理なことを……レイにできなければ、おれにできるわけもない」
「！ ……そんな」

無慈悲にも、その人はツェイルの希望を打ち砕く。

「おれは冥王とも呼ばれる魔王だ。聖にある者を救うとしたら、それは安楽な死に導く」

「で、ですが、記録者は……っ」

「可能性でも示唆されたか？」

だが無理なものは無理だ、とその人は言う。

「おれに願うなら、死だけが、救いになる」

それは、サリヴァンが背負ったものが、死ぬまで続くということだった。

得られたその答えに、ツェイルは愕然とする。

「サリヴァン……ヴァルハラ、レイのいと子……その者の死を、おまえは望むか？」

「いやです！」

「ならば、おれにできることはない。おまえに与えられるものも、なに一つない」

残酷な言葉に、涙が溢れた。

ここまで来て、サリヴァンを怒らせてまでやって来たのに、得られた答えはひどく悲しいものだった。

どうして世界はこんなにも、サリヴァンに優しくないのだろう。

悲しくて、悲しくて、寂しくて、ツェイルは蹲って嗚咽をこらえた。

「サリヴァンさま……っ……サリヴァンさま」

あなたを国主の楔から、解放させたかった。

壊れたその天恵を治して、世界という自由をあげたかった。

それだけだった。

ツェイルが、黙ってひとりで勝手に、シェリアン公国を目指したのは。

それだけが、理由だった。

記録者が、ともすれば奴なら知っているかもしれないと、そう教えてくれたから。今なら公国にいるようだから、逢えるだろうと教えてくれた。

けれどもツェイルが得た答えは、残酷な言葉だった。

誰もサリヴァンを癒してくれない。

誰もサリヴァンを救わない。

ツェイルのいという人を、国に縛りつけて離さない。

「サリヴァンの顔色が悪いとき、それは国のどこかが荒れているということだ。」

サリヴァンは国の器として、その身を削る。

ツェイルのいという人を、この国は奪う。

たまらなくいやだった。

サリヴァンを国に奪われなくなかった。

「ツェイル、といったか……酷なことを言っすまない。だがおれ
の力は、生きる者にとって、残酷なものなのだ」

ツェイルの前に膝をついたその人は、ぼん、とツェイルの頭を撫でた。サリヴァンのように、聖王猊下のように、大らかで優しい手のひらだった。

Plus Extra : 皇弟殿下純愛録。6 (前書き)

ユグド視点です。

翌日のことだった。

サリヴァンの命令でシェリアン公国へ入国しようというとき、伝令が来た。

「姫が、戻られた……?」

「随分と憔悴してたが、無事にお戻りになった。憔悴ぶりに殿下も戸惑って、どうやら頭が冷えたらしい」

ユグドのところに来た伝令はそう言い、ユグドたちに戻るよう伝えた。

ユグドは隣のナイレンを見やる。

「なにがどうなっている」

「おれに訊くな。とにかく、ツェイルが戻ったならラクウィルも戻ったということだ。すぐに邸へ帰るべきだな」

「ああ」

ユグドたち近衛騎士隊は進路を変え皇都へ、ツェイルが戻ったという邸へと馬を走らせた。

馬を休ませることなく走らせ続け、到着した頃には、辺りはすっかり暗くなっている。それでも、本当にツェイルが帰って来ているのかと、ユグドたちは隊舎ではなく邸内へと慌ただしく入った。

「殿下！」

もしかしたらすでに休んでいるかもしれないが、と思ったが、サリヴァンは居間の長椅子に腰かけ、起きていた。そばにはツアインと、そしてラクウイルがいる。

「どういうことだ、ラクウイル・ダンガード侍従長」

「こういうことは副隊長たるナイレンに任せるべきことなのだろうが、長くサリヴァンに仕えているのはユグドだ。ナイレンの立場を忘れて口を出してしまう。」

「お騒がせしました。ですが、もう心配は要りませんよ。ただ、別の心配はありますけどね」

ツェイルが再び勝手な行動を取ることはないと、そうラクウイルは言う。

「別の心配とは？」

「部屋に籠もって出てこない」

答えたのはサリヴァンだった。

「……姫はいかがなされたのです」

「わかれば苦労しない」

はあ、とサリヴァンはため息をつき、肘掛に身体を預けると手のひらで顔を覆う。

昨日とは打って変わった姿だ。

ツェイルの存在一つで、こつも皇弟殿下は様子を変える。

「ガルデアがヒーデを拒絶しているから、僕も中に入れない……」

隣接している寢室の扉を覗みながら、ツアインは忌々しげに言った。

「なにやったの、侍従長」

「おれはなにもしてませんよ。姫を、望んだ場所へお連れしただけです」

「それはどこ」

「姫が口を閉ざしているのに、おれからそれを申し上げるわけにはいきません」

珍しくもラクウィルは笑っておらず、張りつけたような無表情だった。

「ラク、言え」

「言えません」

「幾度も言わせるな。どこに行っていた」

問答は、ユグドたちが到着する前から繰り返されているのだろう。ラクウィルの口の堅さからすると、なんとなく、いやな感じがする。

「とにかく、姫は帰られました。サリヴァン、おれを罰するなら、どうぞ罰してください」

「行き先を言ったらな」

「それは無理です。拷問を受けても、おれは言いませんよ」

「ラク、いい加減にしろ」

「お好きに、罰してください」

それまでサリヴァンを冷静にさせようとしていたのに、いつのまにか挑発するような立場に回っているラクウィルは、まるでツェイルと同じ立場に回っているかのようだった。

いや、実際にラクウィルは、ツェイルからなにかしら聞き出し、それに賛同したのだろう。

だからツェイルを、望んだ場所へと連れて行ったのだ。

そしてツェイルが部屋に籠もってしまうような事態を、ラクウィルは目の当たりにした。

「なにがあつたのか、話してもらいたい」

ユグドも申し出たが、ラクウィルは表情を変えない。

「なにを言われようと、おれは、言いません」

「ラクウィル」

「いやです」

あまりの頑なな態度に、ため息が出る。

そうしてふと、ユグドは気づいた。

ラクウィルがこういう態度を取るといふことは、サリヴァンになにか、関係しているのではないか。そう、たとえばよくないこと、悪いことだ。ラクウィルの世界は、サリヴァンとツェイル、ふたりで回っている。最優先事項のふたりのことになる、ラクウィルは様相を変えるのだ。

どうすれば、それを聞き出せるだろう。

沈黙が部屋を包んだときだ。

かたり、と露台の窓が静かに開く。

ユグドはその唐突さに咄嗟に剣の柄を握り、またナイレンやツァイン、ラクウィルに至っても同様に剣に腕が伸びた。

しかし。

「警備が甘いなあ、サリヴァン？」

そう言いながら露台から入って来た珍客は、とんでもない御仁だった。

「シエ、スタ……っ」

これまでに見せたことのない瞬発力で、サリヴァンが長椅子から飛び退いて部屋の隅まで逃げた。その顔は蒼褪め、背中を取られるものかとはかりに壁に押しつけられ、恐怖に全身を引き攣らせている。

サリヴァンをそうさせる人物は、この世界にはひとりしかいない。ユグドを始めとしてナイレンやツァイン、ラクウィルは慌てて膝をつき、頭を垂れた。

「わお。こんなところから入ったのに、きちんと出迎えてくれるのかい？ いかぬなあ諸君、わたしは侵入者だ。捕縛してくれてけっこうだよ」

そんなこと、できるわけがない。

そもそも、なぜここにいるのか。なぜここがわかったのか。

「なぜここにいる……っ……シエスタ」

「もちろん、サラに場所を訊いたからだよ」

にこお、と笑んだその人物は、サリヴァンに恐ろしく嫌われ、いや苦手にされている対の国主、ヴェルニカ帝国皇帝シエスタ・ウイウエル・ヴェルニカ陛下だ。黄金の髪、海のように深い蒼の双眸、痩身瘦躯の美男子はヴェルニカ帝国の特色を穢れなく身に宿し、秀丽に笑む。

ふわりと上質な上着を捌いて入室を果たしたシエスタは、その目をサリヴァンから逸らすことなく、ゆつくりと中央まで歩んできた。従者もつけず、ひとりでここまで来たようだ。

まあヴェルニカの皇帝ならばそうだろう、とユグドはそつと息をつく。

「そんなに逃げなくともよかるうに、サリヴァン？」

「近寄るな…っ…近寄るな、去れ！」

「ひどいなあ？ わたしは帝位を返上したというきみに、わざわざ逢いに来てあげたのだよ？ 熱い抱擁で出迎えてくれてもよかるう？」

両腕を広げたシエスタは満面の笑みでサリヴァンに近づく。もちろんサリヴァンは壁伝いにずりずりと逃げ、部屋から出ようと画策している。

可哀想に、とユグドは思いながらも、対の国主を止められない。止めてやれたら、サリヴァンを逃がしてやれたらいいのだが、それには相手が悪過ぎる。

「ラク！ ツアイン、ユート、ナイレン！ シエスタを葬れ！」

無茶な命令に、どうしたものかと悩むところだ。

「こらこらサリヴァン？ わたしを殺してなにか意味があるのか？
きみが喜び勇むだけのために、誰が協力なぞしよう」

「ラク！ 天恵を遣え、おれをツエイのところへ飛ばせ！」

「ん？ ツエイ？」

「早くしろ、ラク！」

めいっばいにサリヴァンが叫んだとき、ラクウィルが素早く動き、
空気が揺れる。

空間移動の天恵を遣ったラクウィルは、ふっとサリヴァンの前に
現われ、そうして抱えるとまた天恵を遣い、ふたり揃って部屋から
姿を消した。

「なあユートや？」

サリヴァンが逃げ去ったのに、それを気にした様子もなくくるり
と踵を返したシエスタは、ユグドに振り向いて首を傾げていた。

「ツエイというのは、ツェイル・レイル・ヴァルハラという少女か
？」

「は、そうですございます」

「というと……やはりあれは真にサリヴァンの嫁か」

「お逢いしたのですか」

シエスタの言い方は、まるでツェイルと逢って話したかのような
言い方だ。

まさか、と頭にそれが過ぎる。

ツァインが予想したように、ツェイルは、ヴェルニカ皇帝シエス
タと、そして地上猊下に逢うために公国へと向かっていた可能性が、

確証を得ることになる。

「……その顔、もしかしてわたしがサリヴァンの嫁と逢うことを、想定していたか」

「姫がひとりで旅立たれた際、その地図には公国への経路が記載されておりました。また、記録者との接触があったと確認が取れております」

「ほう……なるほど。記録者からわたしの所在地を聞いた、と。道理で呆気なくわたしの前に現われたわけだよ」

「……と、言いますと?」

「わたしはね、正確にはサリヴァンの嫁と逢ってはいない。ラクとは挨拶したがね」

滞在していた公国の城に、いきなりラクウイルが現われたのだとシエスタは教えてくれた。久しぶりの再会であったが、いると聞いて近くだから寄っただけだと言ったラクウイルは、すぐに立ち去ったのだという。

「あまりにも急いでいる様子が気になって、わたしの《天地の騎士》に尾行させてみたのだよ。それでちらりと、サリヴァンの嫁を見てね」

シエスタは、まるでわが家のように長椅子に腰かけて寛ぎながら、そのときのことを話してくれた。

サリヴァンはシエスタをどこまでも苦手とするが、基よりシエスタというヴェルニカ帝国の皇帝は、皇帝らしくないことで一部では有名だ。ただ煮ても焼いても食えない曲者ではあるので、その点ではまさに皇帝だと言える。

それでも、こうして他国の騎士の名を、その愛称で呼ぶくらいに

は人懐こく、また誰の話でもきちんと耳を傾け、一緒に考えてくれる、そういう人でもある。

だから皇帝らしくないと言われるわけだが、接してみれば、この人だから皇帝なのだと、国主なのだと痛感させられる。

「そうか……あれは国を出られなくなっていたなあ。それで嫁が動いたか……目的はわたしと、わたしが知っているだろうカナン猊下の居場所……すでに帰還しているなら、目的は果たされたのだろうなあ」

ふふ、と笑んだシエスタの蒼い双眸が、ツェイルの目的というものを把握しているように思うのは、おそらく気のせいではない。

現状を誰よりも早く把握することに長けているシエスタの、その頭の回転は恐ろしく速い。

「陛下は、なにかご存知なのですか」

「わたしはたつた今、答えを述べたぞ」

「答えを……？」

「あれの嫁の目的は、わたしと、カナン猊下だ。そして、あれは国を出られない……答えは一つしかあるまい？」

考える、とシエスタは要求してくる。しかし、ユグドには皆目見当がつかない。

それに気づいたのは、ツアインだった。

「殿下の天恵を治そうとした……？」

その呟きに等しい言葉に、ツアインを振り向いたシエスタは指を

鳴らした。

「わたしはヴェルニカ皇帝国主、カナン猊下は魔王。一方、ヴァリアス皇帝はサラ、国主はサリヴァン、聖王はレイ猊下だ。われらは対となる国同士、互いのことを熟知していながら、それでいて知らぬことも実は多い」

「では……」

「われら冥府に近しき者の智を、嫁は求めたのであろうなあ」

サリヴァンの、壊れた天恵を治すために。

聖王猊下でもできなかったことを、魔王猊下ならばできるかもしれないと、ツェイルは思ったのかもしれない。

「それでは、そのようなことができるのですか？ 殿下の天恵を、正常に戻すことが」

できるのかと、思わず驚きながらユグドはシエスタに問う。

しかし。

「できぬから帰還したのだろうか」

さらりと、シエスタは否定した。

「サリヴァンはただの器となり果てた。本来ならば御せる力も、あれにはできぬ。それを治すなど不可能だ。器から溢れた水を戻せぬように、流れる川をせき止められぬように、つまりはそういうことだよ」

思わず、舌打ちしたくなる。やはりそうかと、そう易々と治せる

ものではないのだと、それほどまでに強大な力なのだ、悔しく思う。

「姫が、籠もられたのは、それを聞いたがゆえのこと……なんといふことが」

「おや……わたしはきみたちを悲しませているかな」

「いえ、陛下はなにも。ですが……姫は」

ツェイルにはつらく、そして悲しいことだろう。

ひとりで勝手な行動を取り、サリヴァンの怒気に中てられながらも貫いたその行為の結果が、聞きたくもなかっただろう残酷な言葉を与えられただけだったのだ。

今ここでシエスタが言っていることは憶測でしかなくとも、シエスタの思考が導き出したものだ。間違っではない。

だからこそ、ツェイルはサリヴァンの天恵を治したくて飛び出したのだと、知ることができた。

ラクウィルが口を閉ざした理由はこれだったのだ。

「一つ訊きたい」

「……は、なんなりと」

怪訝そうな顔をしたシエスタが、次に述べた言葉に、ユグドもツアインも、ナイレンも目を見開いた。

「サリヴァンはなにか救いを求めているのか？」

Plus Extra : 皇弟殿下純愛録。 7 (前書き)

サリヴァン視点です。

厄災から逃れて。

その心労からふらつきながらも。

疲れ切った身体を休め、そして護るかのように、寝台で丸くなって眠るツェイルの隣に腰かける。その頬をゆっくりと撫でながら、サリヴァンは齒噛みした。

「なにを、隠している……ツェイ」

その心が読めない。

その心が見えない。

その想いが、感じられない。

なにをつらく、悲しく、寂しく思っているのか、サリヴァンに分けてくれてもいいのに、ツェイルは分けようとしてくれない。

「教える……教えてくれ、ツェイ」

おまえの心をおれに明け渡せ。

呟きながら、サリヴァンはその額に己れの額を添える。それでも感じられるのは、体調不良からなる熱の高さだけで、ツェイルの想いは伝わってこない。

こうして手許に戻ってきたのに、帰ってきたのに、その感覚が薄くしか感じられないのはなぜだろう。

「話せ、ラク。なにがあつた。いったいなにが、ツエイを閉じ込めている」

背後の従者に問うも、返ってくるのは沈黙だけだ。

「ラクっ」

なぜ教えてくれないのだと、振り返って抗議する。それでも、ラクウィルは口を閉ざしたままだ。その能面には、ツエイと同じものしか感じられない。

「話せ、ラクっ」

「…… 姫が心を閉ざしているのに、おれが心を開け渡せるわけがないでしょう」

「それはどういう意味だ！」

「あなたを護りたい気持ちは、姫と一緒になんです。ですがおれは、姫も護りたいんです」

「…… ツエイを、護るためだと？」

「姫はサリヴァン、あなたの唯一なんです」

わかつてください、と静かに言ったラクウィルは、その感情を見せず、俯いた。

ラクウィルにここまでさせるほどの、なにがあつたというのか。

どうして話してくれないのだと、サリヴァンは苛立ちを募らせる。自分には話せないなにか、そのなにかがわからない己れにも腹が立つた。

ラクウィルは、ツエイがサリヴァンの唯一であるから、護りたいという。つまりはサリヴァンをなにかから護るために、ラクウィ

ルはツェイルのためにも口を閉ざしている。

それはわかるのに、肝心な「なにか」がわからない。
ラクウィルを黙らせ、ツェイルを悲しませている「なにか」が。

「おれが……なんだというんだ……っ」

一度は落ち着いて冷えたかと思ったその怒りは、ふつつつと再発する。けれども同時に、「なにか」がわからない己れが心底情けなくて、悔しかった。

サリヴァンは勢いに任せて上着を脱ぎ去ると、それを乱暴に放り投げた。床に落ちる前に、それはラクウィルが拾う。

「サリヴァン……?」

眠るツェイルの横にするりと身体を滑り込ませると、ラクウィルがなにをする気かとそれを危惧してきたが、サリヴァンにその気はまるでない。丸くなっているツェイルを抱き込むように、その腕の中に閉じ込めてぎゅっとする。

息を詰めるようにして呼吸しながら眠るツェイルに、胸が痛んだ。

「ツェイ……」

いとしさが、ときに苦くつらい想いになるなんて、ツェイルに出逢うまで知らなかった。

いとしさが、これほどまでに己れを振り回すものだなんて、ツェイルを想うようになるまで知らなかった。

けれども、だからといって、なにも知らなかった頃にはもう戻れない。戻りたくもない。

生きたいと思うから。

ツェイルと一緒にいたいと思うから。
死を待っただけだったあの頃には戻れない。
だから。

ツェイルには悲しみや苦しみを、分けて欲しい。
自分がその虚無から掬い上げられたように。

「ツェイ……おいで」

戻っただけで、とサリヴァンは呟く。

ひとりですべてを抱え込むな。

その想いはもうおまえひとりのものではない。

おれたちは、共に生きることを誓った。

共に幸せになることを、誓った。

共に幸せになることを、願った。

「おいで……おいで、ツェイ」

ひとりになるな、と。

悲しみの中にひとりでいるな、と。

苦しみの中にひとりでいるな、と。

寂しさの渦に呑み込まれるな、と。

サリヴァンはツェイルを抱きしめながら、その想いを込めて「おいで」と繰り返す。

そうして。

呼応してぴくりと震えた瞼から、涙がこぼれ落ちた。

ゆっくりと開いた瞳は、涙で潤んで透明感を増していた。

「サリヴァンさま……っ」

己れを呼ぶ小さな声に、乱暴にしてすまなかったという謝罪と、想いを分かち合いたいという心を込めて、サリヴァンは微笑む。

「おいで、ツエイ。おれのなかに、入っておいで」

瞬きするたびにはらはらとこぼれる涙を拭ってやりながら、サリヴァンはツエイの心を導く。縋りつくように手のひらが伸びてきて、小さな身体はサリヴァンの袂に潜り込んできた。

「サリヴァンさま…っ…サリヴァンさま」

くぐもった声が胸元から聞こえてくる。

どんなことがあっても、なにがあっても、こうしてツエイが自分を求めてくれる限り、サリヴァンは地に足をつけていられる。

この世界をいとしく思うことができる。

生きることが、受け入れることができる。

「ごめ、なさ…っ…ごめん、なさい」

「ああ…っ…もう、いい」

その声を、その姿を、その存在を、失わずに済むのなら。

「おまえがここにいるなら、もういい」

離しはしない。

奪わせもしない。

それだけは、確かなことだから。

「……愛している、ツエイ」

それは呪縛の言葉かもしれないけれども。

「おれのなかに、おいで」

それはおまえが教えてくれたこと。

PLUS Extra : 皇弟殿下純愛録。 8 (前書き)

ユグド視点です。

その瞬間、ユグドは二度めとなる素晴らしい反射神経を拝めた。ふだんは体力を問題視されるお方に、その傷さえなければ天恵に屈することもなかったのだらうと、そう感想を抱かせる条件反射の速度だ。

「まだいたのか……っ」

「いるとも。なにせ宿泊地がなかったものでね」

「おれは許可してないっ」

「なぜきみの許可が必要なのかね。わたしは皇帝だよ？ 偉いのだよ？ もはや皇帝ではないきみの言葉など、このわたしには無意味でしかないのだよ」

権力を振りかざしたその姿は天晴だ。

「ここはおれの家だ！ ヴアルハラ公爵家だ！ 皇帝なら城に行け！」

「どこに行こうが泊まるうがわたしの勝手だよ」

「職権乱用も大概にしろ！」

横暴な皇帝を前に朝から怒鳴ったサリヴァンは、やはり背中を取られないようにと背後に注意しながら壁際に逃げ、ずるずると不格好に移動しながら部屋を出ようと画策する。

しかし。

「こらこら、わたしをひとりにならないでくれな、サリヴァンや？」

昨夜は見逃しても、今朝はその気もないらしい皇帝は、サリヴァンが部屋を出ようと身を翻したその一瞬のうちに、あっさりとサリヴァンの背後を取って捕まえた。

「ひ……っ！」

「ふふふ。愛いなあ、サリヴァンや？」

「はな、はなせ……っ……放せ！」

「ああ面白い。さてはて、なぜきみはそんなにわたしを嫌うかねえ？」

「知るかつ？」

襟首を捕まえられるという、なんとというか恰好悪いあるじの姿は、ユグドを始めとした近衛騎士隊を苦笑させる。

「せっかく逢いに来たのだから、少しくらい相手になりなさい」

「兄上で遊べ！」

「サラは面白くない」

「あの人の頭は奇妙奇天烈な発想の宝庫だ！」

「きみほど可愛くはないのだよ、サラは。残念なことだなあ」

サリヴァンで遊ぶ皇帝シエスタは、わが国皇帝サライを貶してでも逃げたいサリヴァンのその反応を、いたく気に入っている。悪意がなく、純然たる「遊び」であるから、ユグドたちは苦笑しかできないのだ。

遊ばれている当人は厄災以外のなにものでもないだろうが。

「そろそろ可哀想になってきたな……面白いが」

ふだん怒鳴ったり、声を荒げたり、そういうことがない人だから傍目からは見ていて面白いが、それも過ぎると可哀想に思えてくる。ナイレンが呟いたので、ユグドは部屋をそつと出るとサリヴァンを鎮めてくれる人を呼びに動いた。

「姫、よろしいですか」

寢室の扉を叩くと、中からリリが返事を寄越す。少し待って、扉が開かれると用件を述べた。

「あまり動いて欲しくはないのですが……」

リリは寝台に伏せているツェイルに動いて欲しくない様子だったが、ユグドが来るよりも先に動いていたらしいラクウィルが、ツェイルを支えながら出てきた。

「やっぱりサリヴァン、可哀想なことになってます?」

「捕まっておられる」

「あちゃ……珍しく背後を取られましたか。シエスタさまに対しては機敏に反応するんですけどねえ」

シエスタの来訪について、ツェイルは事前にラクウィルから訊かされていたらしく、今少し顔色は悪いが苦笑を見せた。

「姫、おつらいところを申し訳ありません」

昨夜、その事情をシエスタより聞くことになって、ツェイルの精神状態を危惧していたユグドだが、謝罪したユグドにツェイルは緩

く首を振り、笑おうとしてくれた。

「……無理はしないでください」

そう言うと、ツェイルは声なく頷いた。そうしてラクウイルの腕を叩くと、渋るラクウイルに目で訴えて、その腕の支えから離れる。

「ユート」

「はい、姫」

「ごめんなさい」

その謝罪は、振り回された近衛騎士隊へのものだろう。目下の者としては受け入れるわけにはいかない謝罪も、そのときの感情を抜きにして考えればツェイルの取った行動はよいものではなかったのだ、ユグドは受け入れもしないがだからといって拒否もせず、無言で頷くと微笑んだ。

「殿下の御許へ、お願いします」

「……ありがとう、ユート」

ふらつくツェイルに腕を差し出し、支えとしてくれたことを確認すると、ユグドはツェイルをサリヴァンの許へと案内した。

「不思議なものだなあ」

と、シエスタが言った。

「直答を許す。わたしの相手をしておくれ、ユート」

「御意」

「なあユート、不思議に思わないか？」

シエスタの問いに、ユグドは首を傾げる。

「なにを不思議と、おっしゃられるのでしょうか？」

「サリヴァンだ。ついこの間まで死んだように生きていたサリヴァンが、今や生き生きとしている。わたしはそれが不思議なのだよ」

「それは…… ツェイルさまとの出逢いが、殿下を変えられたものかと」

「ツェイル、ツェイルなあ……あれも不思議な娘だ」

「そう、でしょうか？」

「あれは直視できぬ」

「直視？」

そう、と頷いたシエスタは、考え込むように腕を組んで唸る。

「こつ、な……言葉にできぬものに、溢れている。表現し難いな」

「姫は…… ツェイルさまは天恵者です」

「ほう、天恵者か」

シエスタの顔つきが変わる。なるほど、と閃いたように、眉間に寄っていた皺が薄れた。

「そのせいかな……ならば少し、手を出さねばな」

「手を、ですか？」

まさかツエイルにちよっかいを出すつもりか、とユグドは一瞬でも疑ってしまったが、どうやらシエスタが言う「手を出す」というのは、そういうことではないようだ。

座っていた椅子を唐突に立ち上がったシエスタは、これまた唐突に「城へ行く」と言い、ユグドに城までの馬を用意させた。

「ではな、ユート。また逢おう」

「護衛を」

「要らぬ。気にするな」

あつというまだった。

サリヴァンをかまいに来たのだろうことは明白だが、それにしてもなにに来たのかよくわからない。台風のようにやって来て立ち去ったシエスタに、ユグドは首を傾げた。

「か、帰ったか」

「殿下」

「帰ったんだな、シエスタは」

気配でも察したのか、逃げていたサリヴァンが姿を見せた。

「城へ行くと、先ほど」

「なにしに来たんだ、いったい」

「様子を見に来られたのでは」

「それだけで来るか？ 一国のあるじが」

「……まあ」

サリヴァンのことであれば、シエスタは用がなくても来るかもし

れない。サリヴァンはシエスタを苦手視するが、シエスタのほうは違うのだ。遊び相手にするくらいなので、弟のように可愛く思っている、はずである。

「無駄に疲れた……まったく心臓に悪い」

「……そうですね」

確かにサリヴァンの心臓には悪い唐突な来訪だっただろう。だがしかし、とユグドは振り返る。

「殿下」

「ん、なんだ？」

「殿下は……救いを求めますか」

ユグドの問いは、サリヴァンの碧い目をまん丸にさせた。

「なんのことだ」

「……いえ、シエスタ陛下の言葉に、少し」

「なんだ？」

「殿下は救いを求めているのか、と」

直接問うのはどうかと思うが、そのことが今回ツイエルを突き動かしたものだ。とユグドは考えている。結果的にツイエルは疲弊した。ユグドたちは振り回された。サリヴァンは、今までになく激怒した。

「救い、か……そうだな」

ふっと、サリヴァンは口許に笑みを浮かべ、壁に寄りかかるとその視線をユグドから外した。

「おれはもう救われた……と、思っている」

「それは姫に？」

「ああ。ツエイとの出逢いが、おれには救いだった。これ以上の救いはない」

幸せなことだよ、とサリヴァンは口にする。

「ツエイと出逢い、愛し、愛され……想い合える今が、とても幸せで……至上の救いだな」

「では、もう救いは必要ないと？」

「今が幸せなんだ、ユート。この幸せが夢ではないかと、いつかかき消えるのではないかと、そう恐怖するくらいに」

「……ですが殿下、姫は」

「ツエイも、怖かったんだろう」

ユグドが言う前に、サリヴァンが自らその気持ちを言葉にする。

「おれの天恵が、いつ、どうなるか……おれ自身にもわからないからな」

「……わかって、おられたのですか」

「いいや？ やっぱりそういうことなのか？」

「……、殿下」

ふっかけられたか、と思ったときには、サリヴァンはちらりとユグドを見ながら苦笑していた。

「怖い、か……うん、怖いよな、仕方ない」

「殿下？」

「おれだって怖いんだ。ツエイを、失うことが」

わからないわけがないだろう、と問いかけられるように言われて、ユグドは言葉を嚙む。

「おれを失うことが、ツエイには耐えられないんだ。おれがツエイを失えないように。それと、同じだ」

「われわれがお護りします。殿下も、姫も」

「おまえたちにも、おまえたちの幸せがある。それを犠牲にすることはできない」

「われわれの幸せを決めつけなさい、殿下」

あなた方を失うことなど、考えられない。

サリヴァンとツェイルが互いにそうであるように、ユグドを始めとした近衛騎士隊も、サリヴァンとツェイルを失えない。それが忠誠心だというのなら、そうなのだろう。ユグドは、サリヴァンに未来を見たのだ。同じように近衛騎士隊の彼らも、未来を見た。

「殿下、どうかわれわれを信じてください。頼ってください。それがわれわれ近衛騎士隊の幸せです」

「……そこまで、言ってくれるか」

「われらの救いは、あなたの存在なのです」

知っているだろうか。その時代、とても世界は荒れたのだと。原因がわが帝国の天恵にあり、しかし確証もないまま時間は流れ、世界はひどく荒んだ。希望はなかった。絶望しかなかった。けれども、光りがあった。それがサリヴァン、そして、サライだ。

光りが闇を覆い尽くす瞬間を見たユグドは、忘れない。

「どうか、われわれに護られてください」

「ユート……」

「あなたがいるから、わたしたちは生きていけるのです」

世界がなければ、人間は生きられない。人間が生きているから、世界は世界と呼ばれ存在する。それを知ったユグドは、世界に生きるひとりの人間として、世界に祈る。

どうか彼女から彼女を奪わないでくれ。

どうか彼女から彼を奪わないでくれ。

ただ書物を読めればよかったあの頃には、もう戻れないのだから。

Plus Extra : 皇弟殿下純愛録。9 (前書き)

ツエイル視点です。

ぼんやりと露台で空を眺めていたら、ツエイ、と身体に馴染んだ声が出るからかけられた。

振り向いて、その姿を見て、ツェイルは目を細める。

「……サリヴァン、さま」

「陽に浴び過ぎだ。戻っておいで」

ほら、と両腕を広げて待っているサリヴァンに、ツェイルは唇を噛む。

とても優しく、そして残酷な人。

ずっとそばにいたくて、来世でもそばにいたい人。

助けたくても、自分では救えない人。

涙が出そうになる。

あれだけたくさん泣いたのに、涙は枯れない。いや、枯れているのかもしれない。ただもう悲しくて、それだけで呼吸ができなくなるのだから。

「ツエイ？」

優しい呼び声は、ツェイルの心臓を突く。

誘惑には勝てない。

ふらりと露台を離れ、サリヴァンに手を伸ばした。

「サリヴァンさま……」
「ああ、ツエイ」

しがみつくと、サリヴァンはそれ以上の力で抱きしめてくれる。
ああどうして、わたしはこの人を、救えないのだろう。

「……ツエイ？」

頭上から、様子を窺う声で、サリヴァンがツエイルの様子を気にしてくる。

邸を勝手に抜け出したあとの仕置きはひどいものだったけれども、そうさせたのはツエイルで、サリヴァンを傷つけた。ひとりにして、その寂しさを押しつけた。今さらだが、悪いことをしたと思う。その反省はある。

けれども。

もっと悲しいのは。

もっと苦しいのは。

サリヴァンの壊れてしまった天恵を、治すことができないという
事実。

どうして世界はサリヴァンに優しくないのだろう。

サリヴァンは、なにも悪いことなどしていないのに。

ただ、国主の天恵を持って、産まれたというだけのことなのに。

ともすれば憎しみにも似た感情が湧きあがる。

サリヴァンを傷つけ、悲しませ、苦しめた存在が。

憎い、と。

「……おいで、ツエイ。少し話をしよう」

ぎゅっと力が入った手のひらになにを感じたのか、サリヴァンが
長椅子に座ろうと促してきた。

先に座ったサリヴァンの膝の上に、横向きでツェイルは座らせられる。頭をサリヴァンの肩に預けると、自然と身体から力が抜けた。ゆっくりとした穏やかなサリヴァンの鼓動が、ツェイルを安心させる。

「シエスタは、変な奴だっただろう」

そうだったろうか、とツェイルは先ほどまで邸にいたヴェルニカ帝国の皇帝を思い出す。あまりにも皇帝らしくない態度、というより貴族でもなく旅人のような恰好をしていたシエスタは、サリヴァンで遊ぶことに夢中でツェイルをあまり見ていなかった。ただ、ちらりと寄越した視線は、思慮深いなにかを匂わせた。

「おれが奴を苦手に思うのは……まあ、なんとというか……おれにもよくわからない生理的なものなんだが……あの先見がいやだと、たまに思うんだ」

「先見……？」

「その天恵があるわけでもないのに、奴が言うことはよく当たる。いや、むしろ当たらないなんてことがない。シエスタの先見には曖昧なものがないんだ。すごく、はつきりしている」

だからたまにいやだと思う、とサリヴァンは苦笑した。

「そうだ、と決めつけられることだからな。決めつけられることがすごく、不愉快だった。可能性を見たかった。否定されたくなかった。誰もそう思うことなんだろうが、なぜだろうな、シエスタには言われなくなかったんだ。奴が皇帝国主だからかな」

立場が同じだったこともあるせいか、生理的なものとは別に、シエスタに対して苦手な空気を感じるらしい。今はそれほど感じない

ものだが、最初がそれだと尾を引く。延長線上にいるのだとサリヴァンは言った。

「なにかを、決めつけられたのですか？」

問えば少しだけ、サリヴァンは黙した。

「おれが……国主であること」

ハツとする。

その天恵は、壊れてしまったもの。けれども、絶対的なもの。

国主の天恵は、たとえ壊れてしまっても、サリヴァンにあるべきものだ。ヴェルニカの皇帝は言ったのだらう。

いやだと思っても捨てられない、永遠にその身に宿り続ける天恵に、いったいどれだけサリヴァンは苦しめられるだらう。

「……ツエイ？　なぜ泣く？」

こぼれ落ちた涙が、サリヴァンの肩を濡らす。

「サリヴァン、さま……サリヴァンさま」

あなたを救いたかった。

あなたを奪われなくなかった。

天恵と向き合い、接していく覚悟を決めたあなたを、この手で護りたかった。

重ねた罪で汚れたこの手のひらでは、ただあなたのそばにいたいと思うことも、許されないのだらうか。

「泣くな……泣くな、ツエイ。おまえが悲しいと、おれも悲しい」
包まれる優しいぬくもりは、より強く、涙を促す。

どうして世界はこんなにも優しい人に残酷なのだろう。優しくして残酷な人だから、世界も同じようにそう接するのだろうか。

それなら。

それなら、せめて。

わたしから、この人を奪わないで。

誰にも奪われたくない。

国にも、世界にも。

なににも、奪われたくないのだ。

たとえこの身が、この手のひらが、罪にまみれていても。

「わた、しの……っ」

「ん？」

「わたしの……っ……サリヴァンさま」

いとしい世界よ、どうかわたしから、いとしい人を奪わないで。
ツエイの願いは、ただ、それだけ。

「……はは。そうだな、おれのツエイ」

きらきらと眩しいこの人は、わたしの太陽。

きらきらと美しいこの人は、わたしの月。

「サリヴァンさま……っ」

いとしい世界よ。

どうか。

わたしの願いを。

Plus Extra : 皇弟殿下純愛録。 9 (後書き)

これにて『皇弟殿下純愛録。』は終幕となります。

長い間おつき合いくださり、ありがとうございました。

お気に入り登録してくださっている方々、本当にありがとうございます。

Extra Attraction : 明日にたくさん笑って。 1 (前書き)

* 時間軸が未来へと移動。

『きみの背中に花束を。』の数カ月後の話になります。

晴れた空に誘われて、露台でライラとのんびりお茶を飲んでいたら、両腕で赤子を抱いた母がひとりで庭に出てきた。声をかけようかと思ったが、母の腕に抱かれた赤子はぐずっているようだったから、邪魔をしないほうがいいかと思ってやめた。

「……残念？」

と、ライラに訊かれて。

「なにが？」

と、返したら、ライラは苦笑した。

「女の子が……妹がよかつたって、言わないから」
「そんなこと言わないよ」

母の腕に抱かれた赤子は、オリヴァンにとって妹ではなく弟。早産なうえに難産だった弟は、小さい母の腕に抱かれていても小さい赤子だ。オリヴァンもライラも腕に抱いてみたが、ほかに比べられるものがないほど本当に小さい。

「産まれてきてくれただけで……おれは嬉しいよ」
「大変だったものね」

「うん。ツエイが、あの子と一緒に、いつちゃうかと思った」

今だから言えることだが、弟が産まれるとき、オリヴァンは心の底から恐怖した。それはライラの存在が喪失したらと考えたときと同じくらいの恐怖だった。無事に弟の産声を聞き、産まれたばかりの姿を見て、漸く安堵したものだ。

「フレンが産まれてきてくれて、よかった」

今も、その姿を見ると、ホツとする。一日に必ず三度は様子を見ておかないと、心配でならない。

「お兄さまね、オリヴァン」

「うん」

微笑むライラに、オリヴァンもにっこり笑みを浮かべる。

弟がぐずっている声が止む気配がないので、どうしても気になってしまつて、席を離れることをライラに断つて庭へ出た。

「ツエイ」

「……オリヴァ」

「おれに抱かせて？」

呼びかけて振り向いた母は、ぐずる二番めの息子に困っている様子ではなかったが、その目許には疲れが溜まっているように見えた。乳母を頼まず、母がすべての面倒を看ているせいだろう。

弟は、母を休ませたくて、ぐずってオリヴァンを呼んだのかもしれない。

「おいで、フレン」

小さな弟を母から預かると、しっかりと両腕に抱えてあやす。ぐずぐずしていた弟は、すぐに静かになった。

「……わたしはあやし方が下手なのか」

母はそう落ち込んだが、弟の反応は違う。今はオリヴァンと一緒にいるからと、まるで母に語りかけているようだ。

「ツエイ、少し休んできなよ。フレンはおれが看てるから」

「ん、でも……」

「だいじょうぶ。ライラもいるし。ね？」

ライラを振り向けば、気づいたライラが微笑みながら軽く手を振った。

「……わかった。少し休んでくる。フレンを頼む」

疲れているという自覚はあるらしく、母は困ったように笑むと頷き、二番めの息子の頭をさらりと撫で、オリヴァンに背を向けた。

遠ざかっていく母の背中を見つめながら、オリヴァンは弟を揺らす。

「だめだろう、フレン。ツエイを困らせたらだめだ」

小さく叱ってみるが、弟は知ったことかと言わんばかりに静かだ。きよとん、とオリヴァンを見上げてくる薄紫色の双眸が、だってオ

リヴァンがいるでしょ、と今にも言い出しそうだ。

「まったく……可愛い弟だね」

はは、と笑って、オリヴァンはライラのところへと戻る。
席に座り直したときには、弟はもう寝息を立てていた。

「賢い子ね」

ライラがそう言っつて、そつと弟の頭を撫でる。

一度眠ってしまったばなかなか起きない弟は、なぜかそれがオリヴァンの腕からほかの誰かの腕に移動すると目を覚ますから不思議だ。だからライラは撫でるだけで、オリヴァンの腕から攫うことはない。

「ツエイを休ませる方法があれつて……ちょっと将来が心配になるんだけど」

「だいじょうぶよ。だってオリヴァンの弟だもの」

「それつておれも腹黒いつてこと？」

「そつは言つてないわ。素直でいい子つてこと」

「うーん、微妙だなあ」

褒められている気はしない。この歳で「いい子」なんて、恥ずかしいだけのよつな気もする。

「ねえ、オリヴァン」

「ん？」

「国の風習にそつてフレンを呼ぶなら、愛称はヴォールかヴォルフあたりよね？ どうしてフレンなの？」

弟の愛称に首を傾げるライラに、そういえば話したことがなかったかな、と思う。

「メルエイラ家がそうなんだ。名前を省略するとき、あとのほうを呼ぶ。だからフレン。ツアインがアインって呼ばれたり、シユネイがネイって呼ばれるのと同じなんだよ」

「なら……オリヴァンは？」

「おれは、オリエ・ヴァラディンだからね。サリエの名前を半分もらったから、略し方も同じになる。おれの愛称は帝国式ってことだね。ラクウイルがラクって呼ばれるのと同じ」

「フレンはメルエイラ式？」

「そういうこと。おれの名前をメルエイラ式にするなら、そうだなあ……サリエと同じになっちゃうんじゃないかな。たとえばエディンとか」

父と名前がほとんど同じだからなあ、と唇を歪めて肩を竦めれば、帝国式のほうがいいわねと、ライラも肩を竦めた。

そのとき、くしゅん、と小さなくしゃみが下から聞こえ、オリヴァンは少し慌てて弟を深く抱き込んだ。陽光は充分なぬくもりを与えてくれているが、もしかしたらまだ赤子の弟には寒いのもかもしれない。

「中に戻るうか、ライラ」

「そうね。片づけはわたしがするから、部屋に戻っていて」

「ごめん、ありがとう」

「いいのよ」

この邸には給仕が少ないので、なにをするにも基本的に自分でやらなければならない。

露台に広げていたものの片づけをライラひとりに任せるのは忍びなかったので、オリヴァンは邸の中に戻ると女官を呼び、ライラを手伝ってくれるよう頼んだ。

自室で弟をあやししながらライラを待とうと動きかけたとき、ふと風が頬を撫でていく。窓でも開いているのかと周りを見渡せば、風の正体がそこにいた。

「やっと帰って来られたあ！」

「やりました、やってやりましたよ、おれは！」

「でかした、ラク！ ばっちりだ！」

「当たり前ですよ！」

見なかったことにしよう、とオリヴァンは踵を返した。

「見つけたぞわが息子お！」

「ちっ」

「今舌打ちしたかつ？」

「帰ってきやがった……」

「おいおい帰ってきちゃ悪いのかよっ？」

「うるさい。フレンが起きる。静かにしろ」

「おまつ！ おれはお父さんだぞ！」

弟の眉間に皺が寄って、今にも泣き出しそうな顔になった。

「サリエのばか！ フレンが起きちゃったじゃないか！」

「は？ フレン？ ……って、フレン！ なぜオリヴァンの腕にっ？ ツエイはっ？」

「煩いうるさい。ああフレン、ごめんねフレン」

うつ、と泣き声をこらえている弟を慌ててあやし、ぎゅっと抱きしめてやる。オリヴァンのその様子に口を噤んだのは、大声を出して弟を驚かせた父サリヴァンだ。

「す、すまない」

「今さら遅い」

「うつ……悪かった」

「あっちいけ」

「そ、そんな！」

「うるさかったねえ、ごめんねえ、フレン。よしよし」

「オリヴァン！」

ひどいぞ、と言う父に、オリヴァンは睨みをきかせた。

「うるさい」

「ぐ……っ」

「サリエはツエイのところに行ったらいいよ。フレンはおれが看てるから。じゃあね」

「ま……待て、おれはフレンに」

「逢いたくて帰ってきたなら、まず、ツエイのところに行け」

あっちにいるから、とわざわざ指差しをして方向を教えるから、オリヴァンは父に背を向けた。

それで素直に母のところへ行く父だったらよいのだが。

「お、おまえ、おれに仕事押しつけて、自分ばかりフレンのこと」

「おれはお兄ちゃんだから」

「おれはお父さんだ！」

「うるさい」

「ぐ……」

後ろをついてくる父と、オリヴァンと父の会話に笑いながらついてくる父の侍従長ラクウィルと、揃ってぞろぞろと廊下を歩く。

眉間に皺が寄り、今にも泣き出しそうだった弟は、オリヴァンの努力の甲斐あってすやすやと寝息を立て始めた。

「おれにもフレンを抱っこ」

「やだね」

「んぐ……っ」

「さっさとツエイのところに行け」

「抱っこさせてくれてもいいじゃないか！ やっと兄上を片づけて

……じゃなかった、仕事を片づけてきたんだぞ！」

「だからだよ」

わかってないなあ、とオリヴァンはため息をつき、立ち止まって父を振り返る。

「フレンが今必要としているのは、おれなの。ツエイじゃなくてね」

「……、は？」

「フレンがおれを呼んだの。ツエイが疲れてるから。それでサリエが帰ってきたなら、行くところは一つしかないだろ？」

「う……」

「早く行きなよ」

少しだけ唇を尖らせて俯いた父は、それでもちよっとは弟にかまいたいと、立ち止まったオリヴァンの腕に抱かれた弟に手を伸ばした。

「父さまだぞ、フレン。ただいま。また逢いにくるからな」

さらりと弟を撫でた父は、踵を返すと廊下を走って行った。

「ラクウィルも行ったら？」

「ん、おれですか？ おれは……まあ、そうですね」

人好きする笑みを浮かべた侍従長は、弟を覗き込んで笑みを深めると、頬を突いて悪戯してから、踵を返して父を追って行った。

「まったく……騒がしい人たちだね、フレン」

うるさくしてごめんね、と弟の頬を撫でる。ラクウィルに頬を突かれたときもそうだったが、弟は擦ったそうに笑った。

「ふふ、可愛いね、フレン」

行くつか、とオリヴァンは歩き出す。弟を揺らしなら、ことさらゆつくりと歩いて、自室へ向かった。眠っている弟に、それでも声をかけることを忘れない。

「今日は天気がいい……ねえフレン、そう思うだろう」

うるさくならない程度に、声を押さえて話しかける。返事はないが、なぜだろう、まだ喋れない弟の声が聞こえる気がする。

「あ、風……」

用意してもらった自室に入ると、窓が開いていた。閉めようかと思っただが、緩やかな風は頬に優しい。長椅子に放り投げていた肩かけ用の薄手の毛布を手繰り寄せて、それで弟を包んだ。

「これで寒くないよね。いい？」

ほんぽん、と弟を撫で、オリヴァンは窓際の椅子に腰かけた。ゆったりした風を、瞼を閉じて弟一緒に楽しむ。油断すると、弟のぬくもりで転寝してしまいそうだ。

「……………ライラ、遅いなあ」

兄弟水入らずにしてくれているのか、ライラはまだ来ない。

ふと、弟が喋れるようになったら、ライラのことをなんて呼ばせようかな、と思った。

「姉上、じゃあ肩苦しいし……………姉さまがいいかな。おれのこととは……………そうだなあ、兄さまか。悪くないけど、兄ちゃんって呼ばれたいかも」

やんちゃに育ったら面白いなあ、などと考えつつ、閉じていた瞼を開ける。

くすり、と笑った。

Extra Attraction : 明日にたくさん笑って。 1 (後書き)

弟にしまいました……すみません。

「どうして出てきた？」

それは弟へ向けたものではなく。

「ツエイがいないところでおれの前に出てくるの、初めてじゃない？」

問うと、そこに姿を見せていた双子の白い精霊が微笑んだ。

「ねえオリヴァ、わたしたちにその子、くれる？」

「やだよ」

「でも、欲しいの」

「どうして？」

「わたしたちの愛するメルエイラの子だから」

微笑む精霊に、オリヴァンは唇を歪めた。

「おれの弟だよ」

「そうよ。そしてメルエイラの子」

「違う。フレンはヴァルハラの子だ」

「いいえ。その子は……わたしたちの子よ」

寄越して、と微笑み続ける精霊に、オリヴァンは笑うに笑えなか

った。

弟は、弟だ。母と父の間に産まれた、ヴァルハラ公爵家の次男。将来、ヴァルハラを継ぐ公爵になる子だ。けれども。

天恵者である母と、同じく天恵者である母の兄に宿る双子の精霊が、こうして姿を見せた。それもオリヴァンの腕に、いるときに。

「なにしに、来たのかな」

「わかっているでしょう？」

「……わかりたくない、かな」

「あら、どうして？」

「ツエイが悲しんで、苦しんだことを知っているから」

「……そうね。わたしたちはツェイルを悲しませて、苦しめたわね。

それでも……愛しているのよ」

「どうして？」

オリヴァンは問い返す。なぜ、このときなのだ。

「わかっているでしょう？」

「わかりたくないと言ったよ」

「頑固ね、オリヴァ」

くすくす、と笑った精霊は、片割れを振り返って頷くと、オリヴァンのほうへと歩み寄ってくる。

「わたしとガルデアに、その子をちょうだい」

「いやだ」

「その子はメルエイラの子、わたしたちの子なの」

「いやだ。フレンはおれの弟だ」

「認めて、オリヴァ。その子はメルエイラの子よ」

なんとなく、なんとなくだが、わかった気がする。

ぐずった弟が、庭で母から離れてオリヴァンの腕を選んだ理由。母を休ませるため。

そして。

「フレンは、メルエイラの天恵者よ」

天恵者として力が発現しようとしている兆しを、オリヴァンに知らせるため。

「ヴォルフレイン・レイル・ヴァルハラ。それがフレンの名だ。どこにもメルエイラの名は入らない」

「けれどその血は、メルエイラよ。考えて、オリヴァ。サリもツエイルも、天恵者なのよ。そしてあなたも天恵者。フレンが天恵者でもおかしくないわ」

「フレンが天恵を授かったのは、喜ばしいことだと思うよ。稀少な能力だからね。けど、だからって、どうしてきみたちにフレンを渡す必要がある？ ツエイが悲しんで苦しんだきみたちの存在を、どうしてフレンに託せる？ おれはいやだよ。フレンに、ツエイと同じ思いはさせたくない」

天恵者は、精霊と契約することでその属性の力を増幅させ、使うことができる。けれども、だからといって必ずしも精霊と契約しなければならぬわけではない。契約はしなくてもいいものだ。

今オリヴァンの目の前にいる双精霊、ヴィーダヒーデーヴィーダガルデアは、メルエイラ一族と血の契約をしている。

それは、メルエイラの血を継いでいる者なら誰でも双精霊と契約していることになって、誰にでも双精霊を従えることができる可能性が秘められているということだ。

つまり、弟がたとえメルエイラ一族の天恵者として目覚めたのだとしても、双精霊を従える必要はないということ、また双精霊も弟を選ばなければならぬ必要性があるわけではない。
それなのに。

双精霊は弟を、ヴォルフレイン・レイル・ヴァルハラを、選んだという。

「……どうして、フレンなんだ」

メルエイラは滅んでいない。母の弟が、家督を継いでメルエイラ侯爵として立っている。

双精霊が、わざわざフレンを選ぶなど、あつてはならない。

「フレンがメルエイラの天恵者だから、だけれど……そうね、どうしてかしら」

少し困ったように、精霊は笑った。

「わたしたちを使える子が現われるまで、血の眠りに入ってもいいのだけれど……願ってしまったのね」

「……なにを願ったの？」

「ツイイルが幸せな姿を、ずっと見ていたい……わたしたちが苦しめてしまった子の幸せを。だからフレンに天恵が授けられたのかもしれないわ。フレンは、わたしたちを使える子だもの」

どこか悲しそうで、けれども嬉しそうに、精霊は言う。

「眠りたくないの。明日に、たくさん笑いたくなったの。昔、わたしたちがメルエイラの子と契約したときのように」

精霊には、極端な感情しかないと聞いていたけれど。たとえば、嫌いだから滅ぼしてしまえ、と考える精霊。たとえば、好きだからその中に溶けてしまえ、と考える精霊。精霊には、嫌いか好きか、そのどちらかしかないと聞いたけれど。ここにいる双精霊は、明日を望み明日を生きたいと考えている。

「どうしても、フレンがいいの？」

「このまま眠らずにいられる方法は、フレンにわたしたちを使ってもらうことなのよ」

オリヴァンの双眸が父なら、フレンの双眸は母。

オリヴァンの天恵が父から受け継いだものなら、フレンの天恵は母から受け継いだもの。

これは、必然なのかもしれない。

「……代償はなに？」

双精霊を身に宿した母、そして伯父には、代償があった。法則から外れた天恵者であり、また双子という珍しい精霊と契約した一族だからか、重過ぎる力に代償が求められる。

たとえフレンがメルエイラの天恵者だというのが必然なのだとし、ても、求められる代償があるのは、いやだと思う。同じ天恵者でも、オリヴァンには精霊がなく、また代償もないのだ。

「それはわからないのよ。けれど……そうね、よくないものではないはずよ」

「どうしても言える？」

「フレンもわたしたちを呼んだからよ」

「フレンが？」

どうやって、どうして、と考えて、オリヴァンはハツとする。

「フレン、おまえ……」

すやすやと心地よさそうに眠る弟は、なにを考えているかわからない。赤子の思考回路なんて、あちこちに飛んでいて掴みどころがない。

そんな中で、弟は見つけたのかもしれない。

「わかる、のか……名の意味が」

ヴォルフレインと、名づけたのは、この国の中央に座す聖王。

その意味は、古語で《慈雨》。

オリヴァンの名も聖王からもらったもので、古語の意味がある。
《慈しみの王》。

「ああ、そうか……わかるんだね、フレン」

なんて、賢い子だろう。

なんて、強い子だろう。

その必然を、運命を、背負っていく覚悟を決めているなんて。

母が抱えた悲しみや苦しみを、乗り越えようとしているなんて。

まだこんなに、小さいのに、なんて強さだろう。

「選んだんだね、フレン」

それは命を得たときに。

この世に生まれ落ちた瞬間に。

明日にたくさん、笑えるように。

弟はその道を歩むことを選んだ。

「ね？ フレンはメルエイラの子でしょう？」
「……うん、そうだね」

そうかもしれない。
けれど。

「それでも、フレンはおれの弟だよ」

歩む道は違っても。

背負うものは違っても。

決めた覚悟は同じもの。

「フレンは、ずっと、おれの弟だ」

一緒にいられる時間は少なくとも。

歩む速度が違っていても。

進む方向は同じ。

「わたしたちにくれないの？」

「あげないよ。おれの弟だからね」

「意地悪」

「そうだよ。けど、フレンは選んだ」

明日にたくさん笑えるように。

「メルエイラの天恵者に……なるんだね」

それがどんな道かはわからないけれども、兄として、国主の天恵者として、フレンを見守ろう。

それが、オリヴァンにできること。

「寂しい……けどね」

小さな小さな手のひらは、少しずつ成長していくだろう。

この手のひらは、いったいどれだけのことを、成し遂げるだろう。

「願わくは、明日にたくさん、微笑みを」

やんちゃで、遅しい、心優しき人に、なれますように。

オリヴァンはフレンの頬をそっと撫で、淡く微笑んだ。

Extra Attraction : 明日にたくさん笑って。2 (後書き)

これにて【仮初めの皇帝、偽りの騎士。】は完結でございます。

次話は、完結後から、再びいただくことができました
トリーを展開させていただきました。
よろしければおつき合いくださいます。

津森太吉。

Plus Extra : 見上げれば太陽、月。そしてあなた。 1 (前書き)

お久しぶりでございます。

サリヴァン視点から、物語は始まります。

海を見たことがない、とツェイルが言った。サリヴァンも、海を見たことがなかった。

「内陸にありますからねえ、首都は」

ラクウィルは海を見たことがあるらしい。いつ、と訊いたら、天恵術師として術師団にいた頃、任務で沿岸地方へと赴いたことがあるという。

「そうですねえ……副隊長の瞳の色に雲の白を足すと、ちょうどいい海の色になると思います」

「つまりは空の色か」

「海は本来、色がありません。無色透明と言っただけでしょうかね。それが鏡状になって、空を映して青く見えるわけです。と、おれは聞かされました。実際に海水を手のひらに掬ってみたら、無色透明でしたよ」

「海水……水じゃないのか？」

「しよっぱいんですよ。塩ですね、あれは。海水を煮ると、塩ができるって聞いたことはありません？」

「ああ、そういえば」

「海水は塩味なんですよ」

実際に見たわけではないのでなんとも言えないが、水が塩味なの

はなんとなく予想できる。水が青いというのは想像できないが、ラクウィルの言うとおりなら空色なのだろう。

「……ここから近い港は？」

「ん？ 姫、見てみたいですか？」

サリヴァンが興味を示すより早くツェイルが興味を持ち始め、座っていた椅子から少し身を乗り出すと卓に広げていた地図を覗き込む。

「この青い部分が、海？」

「そうです。おれたちがいる街が、ここ、ヴァンニです」

「……少し遠い？」

「うーん……馬で三日、でしょうかね。車でも同じくらいかかりますね。徒歩ですと、ざっと一週間というところですか」

「遠い……」

「行商の方々なら近道を知っているでしょうが……それでも多く見積もって一週間かけて歩いているでしょうね。いくつか街もありますし」

その距離に幾分かしょんぼりしたツェイルに、サリヴァンは「そんなに見たいのか」と問う。少し考えたツェイルは「一度でいいから見てみたいかもしれない」と答えた。

「ラク、おまえ一度行ったことのある地なら、天恵で飛べるだろ」

「まあそうですね……さすがにあの距離を飛んだことは、ないですよ？」

「どの距離だ」

「おれが任務で行ったことのある港町は、ここから近いラバンの港町ではなく、この、国境にほど近いラインセルの港町です。馬でも

最低一月はかかりますよ」

「それは……遠いな」

「ですから、行くとしたらラバンの港町ですよ。方法としては、おれが一度ラヴァンの港町へ行って、サリヴァンと姫を呼ぶのがいいでしょうね。一週間ほど時間をもらえれば、可能ですよ」

「それなら一緒に行っても同じことだ」

行ってみようか、という気持ちになってくると、それを察したツエイルの雰囲気、少しだけうきうきとしたものを含ませてサリヴァンを見やってくる。

「……ツエイ、行くか？」

「サリヴァンさまが、よいのなら、ぜひ」

ふむ、とサリヴァンは地図と睨めっこしながら考える。
行くことはいい。距離も、歩くには遠いが、それほど苦にはならない。なにか問題があるとしたら、面子だろうか。

「行く方向で考え始めましたね、サリヴァン」

「ああ」

それ自体は問題がない、とラクウィルの言葉に頷くと、明らかにツエイルが嬉しそうな顔をした。

「ただ、面子がな……ラクは当然だとして、あとはどうしたものか」「お忍びで行くなら、大所帯での移動は避けなければなりませんよ」「と、なると……あとはリリだけか？」

「うーん……リリは身重ですし、ユグド隊長あたりを連れていきたいところですが、あそこも奥さんが臨月ですからねえ。行けるとしたらナイレン副隊長でしょうか」

「ツアインは勝手についてくるか」

「でしようね」

「ラク、ナイレン、ツアイン……そんなところか」

「副隊長には先行してもらって、宿とか、手配してもらいましようか。そうすればもうふたりくらい連れて行けますし」

「大所帯は避けるんだろ？」

「だから先行してもらうんですよ。ツアインにはあとから来てもらうようにすればいいですから」

それなら面子にも問題はないか、とサリヴァンは頷き、さっそく近衛騎士隊の副隊長ナイレンを呼ぶ。事情を説明すると、ナイレンは特に驚きもせず、さっさと手配に動いた。手際よさに呆気にとられていれば、ラクウイルに「こんなものですよ」と言われてしまふ。もつと準備期間を長く取るものだと思っていたのだが、そうでもないらしい。

「ほら、サリヴァンと姫ってば、新婚旅行にも行ってないでしょう。だから、ちよつとした旅行でも、いつでも行けるように用意はしていたんですよ」

「……そうだったのか」

「正直、行かないって言われたらどうしようかと思っていたところですよ」

それなりに準備はしていたらしい。すぐに行ける状態にあるのも、ラクウイルたち仕えてくれている者たちが、サリヴァンとツェイルを気遣ってくれていたおかげのようだ。

「あとはサリヴァンと姫の都合だけです」

「ふむ……すぐに出立できるのか？」

「そうですね、明後日頃には。明日、先行する副隊長が出立できれ

ば、ですが」

「そうか。なら明後日には出立したいところだな……そうだな、どれくらい滞在しようか、ツエイ？」

座っていた椅子から立ち上がりながら、サリヴァンはつきつきとしているツエイルを見やる。滞在の日数までは考えていなかったようできよんとしていたが、すぐに考え込むような仕草をし、「サリヴァンさまがよいと思う日まで」と答えた。

「なら、一月くらい確保しておくか」

「そのほうがいいですね。帰りはおれの天恵を遣うとしても、多めに見積もっていたほうが確実ですから」

「よし、行くか」

決まってしまうえば早いものだ。これなら準備期間がそれほどなくとも、近場ならもっと早くに行動を起こせるのかもしれない。

想定外の旅行となったが、行くと決まればなんだか楽しみになってくる。思えば、視察以外で首都を離れるのは、初めてではないだろうか。私情でどこかに行くというのも、初めてだ。あれほど国中を歩いて回りたいと思っていたのに、実際にはそんな余裕もなくて先延ばしにしていたが、漸く第一歩を踏み出せたような気がする。

これからもっと、ツエイルと旅行しよう。

そんな気持ちだが、むくむくと育った。

Plus Extra : 見上げれば太陽、月。そしてあなた。 1 (後書き)

リクエストありがとうございます。

久しぶりの【仮初め】。【で】ございます。視点がサリヴァン始まりなのはお許しくださいませ。おまけにしばらくサリヴァン視点です。

楽しんでいただけたら、幸いです。

ヴァンニの街から馬で三日というラバンの港町へ、海を見に行くという名目で旅行することが決まった二日後の午後、サリヴァンはツェイルを連れて、ラクウイルの案内のもと、出立した。

「馬車とは、懐かしいな」

「大抵の移動は駆動車でしたからね。でも、これがふつつなんですよ、サリヴァン」

「ふつつ、か……そうか」

車は皇族に近い貴族だけが乗るものと、御者台で馬を操るラクウイルは言う。大抵はこういう、木製の馬車で長距離は移動するものらしい。あと数年もすれば四駆の車も貴族の主流となるだろうが、国土に浸透するにはもっと時間がかかるだろう。そもそも整備されていない道が多いので、まずはそちらの事業を進めていかなければならない。

「いったいどれだけの時間をかけて、文明は発達していくのか。気の遠くなるような長い話だと思った。」

「先にこれからの予定を話しておきますね」

「ん、ああ」

「今日のところはなだから安全な道に行くので、休憩は最低限にします。中継点の街三つのうち、一つはフィブリールの街、もう一つはハガンの村、この二つが休憩地です。最後の街で一泊、という

「ことになります。いいですか？」

「そこで、ナイレンがクラウスと合流するんだな？」

「はい。二日目の道は整備が甘くてちよっと危ないので、護衛をひとり増やします」

「行けるところまで移動してもかまわないが……」

「たぶんサリヴァンの体力が続きません」

「う……」

「という行程なので、よろしくお願いします」

「おれの体力重視の移動か……」

体力皆無と言われるから、それなりに身体を鍛えているつもりなのだが、いくら鍛えてもラクウイルや近衛騎士たちには敵わない。いったいどういう身体の造りをしているのだと、逆に問いたいくらいだ。

「あ、そうそう。姫がいることですし、やっぱり女手は必要だと思いまして、急ぎよ侍女をひとり、同伴させることにしました」

「侍女？」

必要だとは思っていたが、手配が間に合わないために仕方ないと諦めていた女手は、ラクウイルが確保してきたらしい。しかし馬車には同乗しておらず、できれば見知らぬ人間をそばに置きたくないサリヴァンとしては、いくらラクウイルが人選したとはいえあまりいい顔ができない。

「そんな顔しないでくださいよ、サリヴァン。だいじょうぶですよ」
「だが……」

「この先で落ち合います。だいじょうぶ、おれが見込んだ女官ですよ」

ラクウィルのことを疑っているわけではない。見知らぬ人間が、サリヴァンはいやなだけだ。

「おまえがそう言うなら……」

ちらりと、隣のツェイルの様子を窺う。サリヴァンが心配しているのは、自分の体力云々もあるが、ツェイルのことだ。人づき合いが苦手なツェイルが、見知らぬ侍女と一緒にでかいじょうぶだろうかりりにはすぐに懐いた様子だったが、それはリリがツェイルに嘘偽りない姿を見せていたからだ。ツェイルは人の気配を読むのに長けている。だからリリのそれに気を許し、懐いたのだ。

しかし、サリヴァンとラクウィルの話は聞こえていただろうが、ツェイルは今それどころではなさそうだ。目がきらきらとしている。

「すごく嬉しそうだ……」

海を見られることが、よほど嬉しいらしい。全身が輝いているように見えるのはサリヴァンの錯覚だろうが、それでも目に眩しいくらい喜んでいる。

見知らぬ者が一緒でも問題はないかもしれない。

ツェイルの様子に、サリヴァンは苦笑した。

「楽しい旅行に、なるといいな」

そう言うと、ツェイルが振り向いた。

「サリヴァンさまと、一緒なのです。楽しいです」

楽しくないことなんかない。ツェイルは、確信しているように微

笑んだ。この笑顔が見られただけでも、海へ行こうと思ったことを後悔しまい。こんなに嬉しげなツェイルは、そうそう見られないのだ。

それから少し馬車を走らせると、街を抜ける手前でラクウィルは馬車を停めた。侍女との待ち合わせ場所なのだろう。少しだけ待つと、馬車の扉が開いた。

「イル姉さま！」

と、その声に驚く。ツェイルも目を丸くしていた。

「ネイ？」

「はい、姉さま。シュネイよ」

まさか、もしかして、と首を傾げると、ラクウィルが顔を覗かせた。その顔は満面の笑みだ。

「だからだいじょうぶだつて言ったでしょ？」

「彼女が？」

「ええ。今日から正式に、シュネイ嬢は姫の侍女です。そういうことですから、よろしくお願いします」

現われたのは、幾度か逢っている、ツェイルの妹シュネイだった。見知らぬどころか、妻の姉妹である。

なるほど、これならツェイルも心配ない。シュネイなら、ツェイルのことはよくわかっている。サリヴァンも安心だ。

「殿下、改めまして、シュネイ・メルエイラにございます。本日より姉、ツェイルの侍女として仕えさせていただきますこと、心より

御礼申し上げます」

礼儀正しい淑女の礼に、サリヴァンは笑みを浮かべて迎え入れる。

「よろしく頼む。きみなら、ツエイも安心だ」

「ありがとうございます。殿下。では、移動中はあたし……いえ、わたしはラクさまの隣に座らせていただきます。なにかあったらなんでもわたしに言ってね、イル姉さま」

まだ幼い少女は、その子どもっぽさを上手く利用して、吃驚しているツェイルに微笑むとラクウィルと一緒に顔を引っ込めた。

「……サリヴァンさま」

「ん？」

「ネイでした」

「ああ、そうだな」

「ネイ？」

信じられないのか、ツェイルは御者台に座ったシュネイを呼び、その微笑みを受ける。

「ネイだ……」

「なにをそんなに疑っている」

くつくつと笑って、妹の出現に驚いているツェイルにそれを問う。
ツェイルは首を傾げていた。

「ネイが侍女なんて、できるわけが……」

「ラクが見込んだようだが？」

「まだ子どもです」

「……おまえも、まだ子どもの部類に入る」

「成人まであと一年と少しです」

「はははは……」

「サリヴァンさま？」

自分は子どもになにをしたらろう、とふと思ってしまった。いとしさのあまり抱いたのは、もはや数知れない。

「……早く成人してくれ」

「？ はい、もちろんです」

それよりもシュネイが、と妹を気にするツェイルに、サリヴァンは非常に気まずい思いを感じつつ、話を聞く。ツェイルの話によれば、末のシュネイは随分と甘やかされて育つたらしい。未だ乳母に面倒を看られているのに、ツェイルの侍女などできるわけがない、とのことだ。

「おまえも随分な甘やかしぶりだと思うが？」

「そうですが……そもそも、わたしに侍女は必要ありません」

「そう言うな。知つてのとおり、おれはずっと、兄上やルカに登城を要請されていた。もう決まったことだが……近日中に、おれは城に戻る。またあの場所に、いくことになる。おまえを、邸にひとりにしてしまふんだ」

帝位を返上し、城を出てからずっと、兄である皇帝サライや宰相のルカイア、上位貴族の大卿ダヴィレイドから、登城の要請をされていた。生活が落ち着くまではと、強気には出てこなかった彼らだが、先日サリヴァンは養父たる聖王に自由とはなんたるものかを語られ、結果、登城する決意を固めることになった。今、皇弟としてそこへ立つ準備が外堀から進められている。ヴァルハラ公爵がつい

に表に顔を出す、と噂もされているところだ。

「……思うように、してください」

「ツエイ？」

「今は、それしか、言えません」

俯いたツエイルが、膝の上で拳を握っていた。

サリヴァンは眉をひそめ、ツエイルの手のひらを解くように握る。

「おれはツエイと生きる」

「……サリヴァンさま」

「もう、無理だ。おまえがない世界など」

悲しむなどは、言えない。サリヴァンが登城すれば、それは確実に国政に縛られることを意味し、ツエイルのそばにいられる時間は確実に削られる。国主の天恵があるために、いやでも、国に振り回される。ツエイルはそれをわかっている。だから言えない。悲しむな、と、確実に悲しむだろうことに対して、我慢などさせられない。

「おれのために、泣いてくれるのは、ツエイ、おまえだけだ」

「……サリヴァンさまが、泣かないから」

「おれはおまえの涙を知っている」

涙を失った少女に、涙を思い出させた。それはサリヴァンが、唯一誇れることだ。ツエイルの涙を知っている、だから、サリヴァンは自分のためには泣かない。ツエイルの涙を見られることに、喜びを感じている。泣かせたくはないけれども、その顔もいとしいのだから仕方ない。

「海を見よう、ツエイ。きっと、いい思い出になる」

「……はい、サリヴァンさま」

擦り寄ってきたツェイルを、サリヴァンはいとしさに任せて、抱きしめた。

Plus Extra : 見上げれば太陽、月。そしてあなた。 3 (前書き)

ツイイル視点です。

その兆候は少しずつあったと思う。初日は旅行に浮かれて気づくこともなかったが、二日目を迎えてからどこということなく違和感を覚え、そして三日めにはゆるりとした異常を伝えてきた。

行程が遅れた四日め、その異常は明らかとなった。

「サリヴァンさま、だいじょうぶですか？」

「ん？ なんのことだ？」

サリヴァンには体力がない。それは鍛えていないからというとりも、鍛えてもその分を国土の繁栄に費やしているからのように、ツェイルには感じられていた。だから、たまに天候が荒れて国土が疲弊していると、サリヴァンの顔色が悪くなっていることはよくあった。そういう日は具合が悪そうにしていることも、ツェイルは知っている。ただ、そのことにサリヴァンは気づかない。自分で、自分の不調に気づけないのだ。だからツェイルやラクウイルは、さり気なくサリヴァンを休ませ、ときには強制的に眠ってもらったりしていた。

旅行が決まって出立してから四日、天候は荒れていない。国土が疲弊している様子はない。むしろツェイルたちの旅行を祝福するかのよう、空はとても晴れやかだ。

それなのに、サリヴァンの顔色が、徐々に悪くなっていく。あと数刻で目的地に着くだろうという頃には、その異常ははっきりと目に見えた。

「吐き気や、眩暈を感じませんか？」

「んん？ おれはそこまで弱くないぞ？」

馬車での長旅は不慣れだが、そこまでひどくはならないと、サリヴァンは笑う。どうしようかとツェイルは迷ったが、ちょうど村が見えたので、休憩してもらうついでにそこでラクウイルと相談することにした。

「姫、話しとは？」

サリヴァンが馬車を降りて深呼吸している姿を見ながら、ツェイルはそっと、近くにラクウイルを呼んだ。

「サリヴァンさまが」

「ああ……姫もさすがに気づきますか」

やはりラクウイルも、それには気づいていたらしい。会話が聞こえたのか、護衛に混じった騎士隊のクラウスもそばに寄ってきて、サリヴァンのあれはなんだと言ってくる。

「ひどい顔色ですよ。今朝はそうでもなかったのに」

「わからない……どこかで、国土が疲弊しているのかもしれないけれど」

「直結……ですか、殿下の天恵は」

サリヴァンの天恵は、国主の天恵。ヴァリアス帝国の礎であるものだ。本来ならその天恵はそれほど重いものではなく、むしろ証となっている刻印があれば国内の異常を感知して癒す働きが出るのだが、サリヴァンの場合は所持した刻印に傷がある。そのせいで、国

主の天恵の制御はサリヴァンの手を離れ、ただその力の器となっている。

それゆえに、国土の異常は、サリヴァンの不調と直結するところがある。

「それはないかと……おれ、下調べはばっちりしたんですよ。占術でこの一月の天候も調べました。荒れることはないそうです」

「相変わらず手際がいいですね、侍従長。ということは……」

「ええ、国内が荒れていることもない。つまり、この先はともかく、今は国土が疲弊していません。サリヴァンに異常が出るのは、おかしいです」

ラクウィルにとっても、ツェイルと同じように、サリヴァンの顔色が悪い今の状態は怪訝なことだった。

「いったいサリヴァンさまに、なにが……」

「とりあえず今は休ませましょう。予定をさらに遅らせることになりませんが、ラヴァンの港町に入るのは明日にして、今日はこの宿を手配しましょうか。明日の行程も、遅れることを前提にして、ゆつくり行きましょう」

「でも、それが手遅れに……」

「姫、悪いことを考えちゃいけません。おれもちょっと考えてしまいましたけど」

「なら、戻ろう。帰って、サリヴァンさまを休ませないと」

「そうするにしても、今は休ませなければなりません。そうでしょう、姫？」

これから帰るにしても、サリヴァンの今の顔色はひどく、本人はまったく気づいていないが足取りも危うい。確かに今は休ませることを重点にしなければならぬだろう。

「……わかった」

「では、おれはサリヴァンに説明してきます。納得しないようなら気絶させますから、いいですね？」

「うん」

「クラウドさんは宿の手配を頼みます。先行している副隊長への連絡も忘れずに」

了解、とクラウドはすぐに頷き、村の中へと走っていく。ツェイルは不安を感じながらも、サリヴァンに説明しに動いたラクウィルを見送った。

「イル姉さま」

「……ネイ」

「殿下、どうかされたの？」

「わからない。ただ、すごく顔色が悪くて……もしかしたら、帰ることになるかもしれない」

「やっぱりお具合が……わたしも訊いたのだけれど、だいじょうぶの一点張りだったの。もしかして自覚がないのかしら？」

「いつも、そうだ。サリヴァンさまは、自身の不調に気づけない」

「……心配ね」

「うん」

シユネイと並んで、ツェイルはサリヴァンを見つめる。ラクウィルがなんと説明しているのか、ここからは聞こえないが、だいじょうぶだとそれらしきことを言っているようであるから、やはりサリヴァンは自身の不調に気づいていない。しばらくラクウィルと問答し、やり取りしていたが、肩を落としたラクウィルが諦めた様子で、サリヴァンを気絶させる方法を取った。

「ラクさま、それは乱暴だわ」

「仕方ないですよ。言うこと聞かないんですもん」

手刀でサリヴァンを気絶させ、担いだラクウィルは、そのままサリヴァンを馬車に乗せてしまふ。ツェイルも慌てて馬車に乗り込み、意識を手放したサリヴァンを膝に抱いた。

「サリヴァンさま……」

悪いとは思っていたが、もう顔に色がない。意識を手放していると、それはひどく際立った。呼吸も、いつもより浅い。

「ああ、クラウスさんが戻ってきましたね。姫、移動しますよ」

「うん、お願い」

ことさらサリヴァンを深く抱きしめて、馬車の揺れでサリヴァンが起きないよう支えながら、クラウスが急きょ手配してくれた宿へと移動する。急なことだったが、事情を説明したら大部屋を安く借りることができたらしく、おまけに医師も紹介してもらえた。その医師は、サリヴァンがひどく疲れているという診断をし、とにかく休ませるようにと、滋養の薬を処方して寄越した。

「疲れている……本当に、それだけ？」

医師の診断に疑問は残るものの、原因と思しき事柄は、今ツェイルたちに思い浮かべられない。

とにかく今はサリヴァンを休ませ、目を覚ましたときにする言い訳を考えておくほかないだろう。その言い訳も考え終わると、クラウスは村の偵察に出かけ、ラクウィルとシュネイは食事の手配に動いた。

ツェイルは、寝台で眠るサリヴァンの隣に寝転がると、その身を寄せてサリヴァンのゆっくりと動く鼓動に耳を傾けた。

「ん……」

「サリヴァンさま？」

目覚めるにはまだ早いはずだが、と思いながら身を起こせば、サリヴァンが目を擦りながら動こうとしていた。

「ツェイ？　ここは……」

「村にある、宿です。サリヴァンさま、お具合はいかがですか？」

身体を起こそうとしていたので、ツェイルはそれを支えながら少々ぼんやり気味のサリヴァンの顔を覗く。

擦って少しだけ赤くなった目が、据わっていた。

「……ラクの仕業か」

「え……」

「おれを気絶させただろう」

倒れたことにしようと話をしていたのに、あっさり見破られている。いつもなら誤魔化されてくれるのに、いったいこれはどうしたことか、ツェイルは俄かに慌てた。

「あ、あの……っ」

「そんなにおれは顔色が悪いのか？」

寝台にふたり並んで腰かけると、サリヴァンは困ったように顔を歪めた。

「おまえたちに強硬手段を取らせるほど、おれは体調が悪そうに見えるのか？」

サリヴァンは自分で自身の不調に気づけない。だから周りが、それとなく誘導して休ませるようにしていた。

だが今回は、自分でもなにか感じるところがあるのか、思うところがあるのか、それともこちらの不安に気づいたのか。

わかっているのなら、黙っていても意味はない。今さら誤魔化しても、それは無意味だ。

「……………ずっと、お顔の色が、優れないのです。足取りも、危うくて……………だから」

「ふむ」

「休んでいただきただけです」

「ツエイ」

「はい」

「実を言えば、妙な違和感を覚えている」

「……………違和感？」

「自分でも足許が危うい感じはしていた」

つと、サリヴァンは視線を下げ、足をつけている床を見やった。

つられるようにしてツエイもサリヴァンの足許を見て、首を傾げる。

「気づいておられたのですか？」

「ああ。足許が軟くてな」

「軟い？」

「それが気持ち悪くて酔った」

そういえば、とツエイは邸を出てからの行程を思い出す。サリ

ヴァンは、顔色が悪くなり始めた頃から、たまに足許を見ては眉をひそめ、首を傾げていた。あれは、地が軟らかい感覚がしたから、気になっての行動だったのだろう。

「どうして、教えてくださらなかったのですか」

「もともと軟らかいのかと思っていた」

さすがはサリヴァンだ、と思った。違和感が気になっただろうに、それ以上はとくに思うことがなかったのだろう。

「さつき、ラクに気絶させられたとき、漸く違うことに気づいた」

「……今も、足許が不安定ですか？」

「この床は軟らかいのか？」

その問いに、どうやらまだその違和感は続いているらしいと、ツエイルは唇を噛む。

サリヴァンにいったいなにが起こっているのだろう。

「ほかになにか、気づいたことはありませんか？」

「いや、今のところおれには、それしか感じられない……なんだろうな、これ」

とんとん、と足先や踵で床を蹴ったサリヴァンが、暢気に首を傾げる。

「足許がそうなら……眩暈を感じることはあるのでは？」

「酔ったからな、最初に」

「眩暈を感じていたからです」

もしかすると、医師の診断は間違っていないのかもしれない。足

許が不安定で、それですつと眩暈を感じていたなら、相当な疲れがサリヴァンの身体に溜まっていたことだろう。その疲労は、きつと今も巢食っている。

「ここで少し休んで、よくなったら帰りましょう」

「それはいやだ」

「サリヴァンさま」

「どうせすぐそこだ。ラバンの港町は、ここからあと数刻だろう？
休むなら港町についてからでもいい」

「行くまでの時間が、またサリヴァンさまを」

「なら、ラクに先行させて、天恵で飛ぶ」

「それはサリヴァンさまにも、負担がかかります」

「休めばいい」

行こう、とサリヴァンは言う。気持ち元氣過ぎて、落ち着いて休めないのだと言う。休ませたいなら、さっさと目的地に行ってみようかと微笑む。

「おれの体力重視での移動で、予定が遅れている。せつかくの旅行を、これで終わりにはしたくないんだ」

「でも……」

「頼む、ツエイ。これはおれの我儘だ」

「……我儘なんて」

「おまえと初めての旅行だ」

こくりと首を傾げさせながら、サリヴァンの優しげな双眸がツエイルを見つめ、そつと手のひらを握ってくる。

「楽しくて、嬉しくて、仕方ないんだ」

「サリヴァンさま……」

「おれの我儘を、許してくれないか」

今を大切にしたいという、サリヴァンのその気持ちはわかる。ツエイルだって、サリヴァンとの初めての旅行は、とても楽しくて嬉しい。なににも邪魔されたくない、そういう我儘もある。

「……本当に、休んで、くださいますか？」

「まるで療養だな。だが、その間はずっと、ツエイがおれのそばにいる。これほど幸せなことはない」

顔色が悪くとも、サリヴァンの気分は本当に高揚しているのだろう。ツエイルがそうであるように、心が躍っているのだろう。この旅行が終われば多忙な日々が来るとわかっていただけに、その気持ちにはなおさら強い。

ツエイルは諦めたように小さく息をつくと、ふっと笑みを浮かべた。

「わたしも幸せです」

微笑んだツエイルに、「それはよかった」とサリヴァンもにこりと笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6057/>

仮初めの皇帝、偽りの騎士。

2011年10月26日03時09分発行